

福 井 大 学
教育・人文社会系部門紀要

Memoirs of the Faculty of Education,
Humanities and Social Sciences
University of Fukui

第 7 号

Vol. 7

2022年

目 次

Contents

人 文 科 学

Humanities

- グリフィスによる官話訳《新約全書》の版本間における
異同箇所について永井崇弘
On Differences in the Text between Griffith's Versions of the New Testament in
Mandarin Chinese NAGAI, Takahiro..... 1
- The Matrix Reeve-Loaded II: A Comparative Analysis of Three European Folktales and Their
Relationship to *The Mylner of Abyngton* and Chaucer's *Reeve's Tale*
..... D. JONES..... 15
- 排除と包摂
—レベッカ・ウォーカーの自伝における
ユダヤ・アイデンティティとカラー・ラインの問題— 本田安都子
Exclusion and Inclusion: Jewish Identities and the Problem of Color Line in Rebecca Walker's
Autobiography HONDA, Atsuko..... 39
- 「黒い太陽」と「青い薔薇」
—コクトーの磔刑図に関する一考察— 松田和之
Le Soleil noir et la Rose bleue
— Une étude sur la Crucifixion de Jean Cocteau — MATSUDA, Kazuyuki..... 51
- 日英多義語の認知意味論的分析
—「ニガイ（苦い）」と“bitter”— 皆島 博
Cognitive Semantic Analysis of Japanese and English Polysemous Words:
“nigai” and “bitter” MINASHIMA, Hiroshi..... 77

社 会 科 学

Social Science

幼児期及び児童期における向社会的行動の理由づけの発達

—仮想場面を用いた友人への分与行動の分析—…………… 大西将史 毎田（久保）遥香

Development of reasonings of prosocial behavior in early to later childhood: An examination of sharing behavior toward their friend using hypothetical situation

……………OHNISHI, Masafumi MAIDA (KUBO), Haruka…… 91

サステナブル化粧品に関連する認証と生物多様性の関わり ……高井愛子 長井美有紀

Relationship between certification and biodiversity related to sustainable cosmetics

……………TAKAI, Aiko NAGAI, Miyuki…… 113

2021年連邦議会選挙とCDU/CSUの首相候補問題 ……………横井正信

Die Bundestagswahl 2021 und die Kanzlerkandidaten der CDU/CSU

……………YOKOI, Masanobu…… 133

教 育 科 学 Educational Science

算数・数学学習における具体例同定課題の読みを阻害する要因

..... 口分田 政史 堀田祐里 中嶋勇貴 松浦妃南

Factors that Impede Reading in Specific Example Identification Tasks in Mathematics Learning

..... KUMODE, Masafumi HORITA, Yuri NAKAJIMA, Yuki MATSUURA, Hina..... 179

中学校段階の証明の生成過程における学習困難性

..... 松浦妃南 藤川洋平 口分田 政史

Learning Difficulties in Proof Constructing Process for Junior High School Students

..... MATSUURA Hina FUJIKAWA, Youhei KUMODE, Masafumi..... 201

応 用 科 学 Applied Science

教育のICT化と学校のDX化に関する実践と考察..... 塚本 充

Practice and Consideration of ICT in Education and DX of School

..... TSUKAMOTO, Mitsuru..... 219

大学生を対象にした

「旬の食材を取り入れた献立作成」の授業実践の評価..... 村上亜由美 岸本三香子

The Evaluation of the Class Practice of “Menu Planning that Incorporates Seasonal Food” on

University Students

..... MURAKAMI, Ayumi KISHIMOTO, Mikako..... 233

芸 術 ・ スポーツ
Arts and Physical Education

小学校、中学校音楽科における箏の指導の問題点とその打開を目指して
～洋楽と邦楽の融合による新しい日本歌曲の表現の視点と共に～

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 梅村憲子 麻植美弥子 星谷丈生

The problems of playing the Koto in elementary and middle school music programs and the attempts to solve them

－ Looking at the issue through modern Japanese songs, fusing classical music and Japanese traditional music －

・・・・・・・・・・・・・・・・ UMEMURA, Noriko OE, Miyako HOSHIYA, Takeo・・・・ 241

アルペンスキー競技技術系種目における女子選手の滑走特性

－急斜面を対象としたレース分析－・・・・・・・・・・・・・・・・・・近藤雄一郎

Skiing Characteristics of Female Racers in Technical Events of Alpine Skiing Competition

－ Race analysis for steep slopes －

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ KONDO Yuichiro・・・・ 273

運動部活動の地域移行についての議論に関する一考察

・・・・・・・・・・・・・・・・・・近藤雄一郎 佐藤亮平 山次俊介 山田孝禎 沼倉 学

A Study on the Discussion on the Community Transition of Sports Club Activities

・・ KONDO, Yuichiro SATO, Ryohei YAMAJI, Shunsuke YAMADA, Takayoshi NUMAKURA, Manabu・・・・ 285

グリフィスによる官話訳《新約全書》の版本間における 異同箇所について

永 井 崇 弘^{*1}

はじめに

プロテスタントのキリスト教の世界では、1857年にメドハーストとストロナックによる南京官話訳《新約全書》が官話訳新約聖書として初めて出版された。その後、この官話訳聖書は1869年に修訂が行われ、1874年、1878年、1879年、1880年、1882年、1884年と版が重ねられた¹⁾。1867年に英国人外交官のトマス・ウェード (Thomas Francis Wade, 1818-1895) により《語言自邇集》が出版され、官話の中心が南京官話から北京官話に移行していくのと同じように、1872年になって北京委員会により北京官話訳が出版されると、南京官話訳本は徐々に官話訳の代表的地位を北京官話訳本に譲ることとなった。この北京委員会による北京官話訳本は版を重ね、1919年の官話合訳が出版されるまで、官話訳聖書の代表の地位を守り続けた。このような官話の移行期における南京官話と北京官話の言語的特徴を西洋人資料から解明するにあたり、グリフィスの南方官話訳と称される官話訳聖書の漢訳文の位置づけを行うことは重要である。漢訳聖書を中国語資料として取り扱う際に留意する必要があるのは、その系譜と版本間の異同である。本稿では、グリフィスによる初版系の1892年版(引照なし)と最終訳系の1906年版(引照付)の官話訳新約聖書における異同箇所を抽出し、その特徴や影響関係の考察を行うことにより、南京官話と北京官話の境界線を探る重要な手掛かりとなるグリフィスによる官話訳の漢訳文の解明につなげたい。

1. 漢訳者グリフィス

グリフィス (Griffith John, 1831-1912) は、英国ウェールズのスウォンジー (Swansea) 出身のロンドン伝道会 (London Missionary Society) 宣教師である。中国名は楊格非。グリフィスは1850年9月から1854年1月までは、ブレコン・カレッジ (Brecon College) で学びながら、1853年3月からはロンドン伝道会でも奉仕を行うようになった。彼は当初、マダガスカルへの宣教を希望していたがかなわず、中国に向かうこととなる。1854年4月6日のイースターにエベニーザ教会 (Ebenezer Chapel) で接手礼を受け、4月13日にはマーガレット・グリフィス (Margaret Jane Griffiths) と結婚する。翌年の1855年5月21日にグリフィス夫妻はロンドンから船で英国を

^{*1} 福井大学教育・人文社会系部門総合グローバル領域

発ち、9月24日に上海に到着した。中国では1860年まで上海を拠点としつつ、その周辺地域でも活動していたが、第二次アヘン戦争によって1858年に締結された天津条約に基づき1861年3月に漢口が実質的に開港されると、そのおおよそ3か月後には漢口に活動の拠点を移した。その後グリフィスは50年にわたり漢口を中心に活動した。1912年1月になってグリフィスは英国に帰国するが、同年7月25日にロンドンで80歳の生涯を閉じることとなる。彼は宣教師として直接伝道で豊かに用いられ、1905年には教会員数が8000人にもなった。また、グリフィスは間接伝道者としても豊かに用いられ、漢訳聖書の翻訳者としてもその名を馳せた²⁾。

2. グリフィスの漢訳聖書について

Spillett 1975によると、グリフィスによる文言系の漢訳聖書は、浅文理（Easy Wenli）訳と官話（Mandarin）訳のみで、文理（Wenli）訳は見られない。グリフィスは直接伝道に際して、トラクトの配布が最も有効な方法だと考えていた。彼はトラクトに聖句を引用するにあたり、文理訳はあまりにも難解であり、また官話訳は通用地域が限定されていて、どちらも使い難いと感じていた。そこで、グリフィスは聖書を平易な文理で漢訳することとし、1883年に浅文理訳の翻訳に着手し、同年にマルコの福音書とヨハネの福音書の漢訳を完成させると、1885年には最初の浅文理訳《新約全書》を出版した。さらに1889年にはその改訂版が出版され、1899年に至るまで版を重ねられた。

グリフィスは文言系の浅文理訳のほかに、官話訳聖書の翻訳も行っている。官話訳については、当時すでに1872年に完成した北京委員会北京官話訳本が優れた訳本として流通していたが、北方の色彩が強いものとして認識されていた。そこで、英国外国聖書協会（British and Foreign Bible Society）とスコットランド聖書協会（National Bible Society of Scotland）は、グリフィスに新たな口語訳聖書の翻訳を依頼し、それが官話を使用する地域における公認漢訳文となることを期待した。このグリフィスによる官話訳は、彼の浅文理訳から重訳したもので、初版の《新約全書》が1889年にスコットランド聖書協会より出版された。Spillett 1975によると、この初版系の新約聖書は1891年にも同じ丁数で同協会から出版され、1893年には引照付の版本が同協会より出版されている。さらに、引照の有無は不明であるが、1896年と1899年、1901年、1903年の出版の記載が見られる。本論では初版系の引証なしの版本として1892年版を使用し、最終訳系の引照付の版本として1906年版を使用して、2種の版本における漢訳本文の異同について考察を行うが、Spillett 1975にはこの両者の記載は見られない。

3. グリフィスによる官話訳《新約全書》における節の合併と異同箇所について

1892年版と1906年版の官話訳新約聖書の漢訳本文を比較すると、節の合併箇所と読点、語彙、さらに文法としては虚詞に異同箇所が見られる。

3.1. グリフィス訳《新約全書》における節の合併

グリフィスの漢訳新約聖書には節区分に特徴があり、多くの節の合併が見られる。合併の状況は表1のとおりであるが、参考として1857年版のメドハースト・ストロナックによる南京官話訳《新約全書》と1872年版の北京委員会による北京官話訳《新約全書》、1870年版の英語欽定訳(KJV)についても併せて示す。なお、「官話」はグリフィスの官話訳、「浅」はグリフィスの浅文理訳、「麦」は1857年版のメドハースト・ストロナックの南京官話訳、「北」は1872年版の北京委員会の北京官話訳をそれぞれ示す。

表1

合併箇所	1889 官話	1892 官話	1906 官話	1885 浅	1886 浅	1889 浅	1890 浅	1898 浅	1857 麦	1872 北	1870 KJV
ルカ 17:26-27	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
ヨハ 10:14-15	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
ロマ 15:18-19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
Ⅱコリ 3:7-8	×	○	○	×	○	×	○	○	×	×	×
Ⅱコリ 10:15-16	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×
エペ 5:8-10	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
エペ 6:2-3	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
コロ 1:3-4	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
コロ 2:20-21	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
コロ 3:9-10	×	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
Ⅰテサ 5:16-18	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
Ⅰテサ 5:21-22	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
Ⅱテサ 2:9-10	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
Ⅱテサ 2:16-17	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×
テト 3:4-5	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
ヘブ 6:4-5	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×
ヘブ 10:19-20	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	×
ユダ 24-25	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	×

表1から、1892年版と1906年版の官話訳における節の合併箇所は同じで、ルカ 17:26-27、ヨハ 10:14-15、ロマ 15:18-19、Ⅱコリ 3:7-8、Ⅱコリ 10:15-16、エペ 5:8-10、エペ 6:2-3、コロ 1:3-4、コロ 2:20-21、コロ 3:9-10、Ⅰテサ 5:16-18、Ⅰテサ 5:21-22、Ⅱテサ 2:9-10、Ⅱテサ 2:16-17、テト 3:4-5、ヘブ 6:4-5、ヘブ 10:19-20、ユダ 24-25の18箇所にのぼることが分かる。これは1857年版のメドハースト・ストロナックによる南京官話訳《新約全書》の1箇所（ロマ 15:18-19）、1872年版の北京委員会による北京官話訳《新約全書》の6箇所（ロマ 15:18-19、コロ 1:3-4、コロ 2:20-21、テト 3:4-5、ヘブ 10:19-20、ユダ 24-25）と比べてもかなり多い。これら18箇所の合併箇所を官話和合訳の標点

符号と比較すると、官話和合訳では「。」(凡一氣或數氣而意思已全的)が使用され、意味上で区切ることが可能なのは、ルカ 17:26-27、ヨハ 10:14-15、Ⅰテサ 5:21-22 の3箇所しかない。残りのロマ 15:18-19、Ⅱコリ 3:7-8、エペ 5:8-10 (2箇所)、コロ 1:3-4、Ⅰテサ 5:16-18 (2箇所) の7箇所では「。」(凡一氣而意思不全的)が使用され、Ⅱコリ 10:15-16、コロ 3:9-10、Ⅱテサ 2:9-10、Ⅱテサ 2:16-17、テト 3:4-5、ヘブ 6:4-5、ヘブ 10:19-20、ユダ 24-25 の8箇所では「、」(凡一氣而意思不全的)が用いられ、さらにエペ 6:2-3 とコロ 2:20-21 の2箇所では官話和合訳でも節を合併して訳出している。つまり、グリフィスによる 1892 年版と 1906 年版の官話訳の合併箇所 18 箇所のうち、意味上で区切ることが可能で節の合併が必ずしも必要でないのは3箇所のみで、残りの15箇所は意味上で区切ることができない箇所であり、グリフィスがこれらの節を合併させたことには、おおそ合理性があると言える³⁾。また表1から、グリフィス訳における節の合併箇所は、1889 年までの 1889 年版官話訳、1885 年版と 1886 年版、1889 年版の浅文理訳では一致せず安定していないが、1890 年以降の 1892 年版と 1906 年版の官話訳、1890 年版と 1898 年版の浅文理訳のすべてで、1886 年版の浅文理訳の節区分での一致がみられ、節の合併箇所が安定していることが分かる。

3.2. 官話訳の1892年版と1906年版の訳文の異同

官話訳の 1892 年版と 1906 年版の漢訳本文の異同箇所は、読点の位置と漢字の字体の異同がほとんどを占める。読点の異同は印刷のかすれもあり完全に把握することは困難であるが、67 箇所の異同を確認している。このうち黙示 13:16 のように、1892 年版の古い版本の読点の位置が新しい 1906 年版より正確である場合も見られる。

1892：他又使衆人、或大或小、或貧或富、或自主的、或爲奴的、都在右手、或在額上受印記、
(黙示 13:16)

1906：他又使衆人或大或小、或貧或富、或自主的、或爲奴的、都在右手、或在額上受印記、

さらに、1892 年版と 1906 年版の間には漢字の字体の異同も見られる。漢字の字体は、「叫」(1892 年版)と「叫」(1906 年版)、「溫」(1892 年版)と「溫」(1906 年版)、「回」と「回」に異同が確認できる。「回」と「回」については、どちらの版本とも統一して一方のみを使用しているのではなく、それぞれの版本のなかで混在して使用されているが、「回」(1892 年版)から「回」(1906 年版)への異同は11箇所、「回」(1892 年版)から「回」への異同は141箇所とかなりの偏りが見られる。訳語や訳文に関する異同は、ルカ 24:53、ヨハ 5:32、使徒 9:17 (2箇所)、使徒 16:12、使徒 18:7、使徒 18:8 (2箇所)、使徒 19:29、黙示 4:3 の8節10箇所しかない。

3.2.1. 本文・注釈の異同

この異同はルカ 24:53 の1節1箇所を確認できる。以下の文のうち、「1892」、「1906」、「1889」は

グリフィスの官話訳、「浅」はグリフィスの浅文理訳、「麦」は1857年のメドハースト・ストロナックの南京官話訳、「北」は1872年の北京委員会による北京官話訳、「KJV」は英語欽定訳（King James Version）、「TR」はギリシア語公認本文（Textus Receptus）をそれぞれ示す。

1892：常在殿裏、讚美稱頌上帝、亞門（ルカ 24:53）

1906：常在殿裏、讚美稱頌上帝、亞門

1889：常在殿裏、讚美稱頌上帝、亞門

浅1886：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

浅1885：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

浅1889：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

浅1890：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

浅1898：常在殿、讚美稱頌上帝、亞門、

麦1857：常在殿裡稱讚上帝

北1872：常在殿裏讚美稱頌神。

KJV: And were continually in the temple, praising and blessing God. Amen.

TR: καὶ ἦσαν δια παντὸς ἐν τῷ ἱερῷ, αἰνοῦντες καὶ εὐλογοῦντες τὸν Θεόν. Ἀμήν.

ここでは、1892年版では本文に入っていた「亞門」が、1906年版では小字の注釈に変更されている。浅文理訳では、1885年版、1886年版、1889年版、1890年版、1898年版的すべてが1892版と同様に、「亞門」を本文に入れている。ギリシア語公認本文とそれを底本とした英語欽定訳でも、アーメン（「Ἀμήν」、「Amen」）がそれぞれ本文に見られる。しかし、1857年版のメドハースト・ストロナックの南京官話訳と1872年版の北京委員会による北京官話訳では、この「亞門」は訳出されていない⁴⁾。また、ウェストコット・ホートのギリシア語本文でも「Ἀμήν」は削除されており、ほぼ同時期に出版された1908年の官話和合訳でも訳出されていないことから、グリフィスは1906年版で小字の注釈に変更したのと考えられる。

3.2.2. 固有名詞の異同

この異同箇所は使徒16:12、使徒18:8、使徒19:29の3節4箇所を確認できる。

(1) 1892：從那裏到腓立比、腓立比是馬其頓東路的第一城也是羅馬的駐防城、在這城裏住了數日、
（使徒16:12）

1906：從那裏到腓力比、腓力比是馬其頓東路的第一城、也是羅馬的駐防城、在這城裏住了數日、

1889：從那裏到腓立比、腓立比是馬其頓東路的第一城也是羅馬的駐防城、在這城裏住了數日、

浅 1885：由彼至腓立比、腓立比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬之駐防城也、在此城居數日、
 浅 1886：由彼至腓立比、腓立比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬之駐防城也、在此城居數日、
 浅 1889：由彼至腓立比、腓立比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬駐防城也、在此城居數日、
 浅 1890：由彼至腓立比、腓立比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬駐防城也、在此城居數日、
 浅 1898：由彼至腓力比、腓力比乃馬其頓東路第一城、亦羅馬駐防城也、在此城居數日、
 麦 1857：又到腓立比、就是馬其頓一角的大城、又是新造的城、在那裡住了幾天、
 北 1872：從那裏來到腓立比、腓立比是馬其頓東路的第一城、也是羅馬的駐防城、在這城裏住了幾日。

- (2) 1892：管會堂的人革哩士布、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、
 （使徒 18:8）

1906：那管會堂的人基士部、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、
 1889：管會堂的人革哩士布、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、
 浅 1885：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、又多哥林多人聞道、信而受洗焉、
 浅 1886：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、又多哥林多人聞道、信而受洗焉、
 浅 1889：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、
 浅 1890：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、
 浅 1898：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、
 麦 1857：管會堂的人革哩士布闔家信主、哥林多人聽道理、信耶穌受洗禮的狠多、
 北 1872：管會堂的人革里士布和他的全家、都信了主、還有許多哥林多人聽了道理、信從受洗。

- (3) 1892：全城的人都攪亂起來、捉住保羅同行的馬其頓人該由、和亞哩達古、齊心擁進戲園、（使徒 19:29）

1906：全城的人都攪亂起來、捉住保羅同行的馬其頓人迦猶、和亞哩達古、齊心擁進戲園、
 1889：全城的人都攪亂起來、捉住保羅同行的馬其頓人該由、和亞哩達古、齊心擁進戲園、
 浅 1885：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、
 浅 1886：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、
 浅 1889：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、
 浅 1890：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、
 浅 1898：全城攪亂、執保羅之同行者、馬其頓人該由、並亞哩達古、齊心擁入戲園、
 麦 1857：闔城的人擾亂起來、把保羅同走的馬其頓人迦猶和亞哩達古捉住、一心擁擠上來、走進看戲的地方。
 北 1872：合城的人都擾亂起來、拉著與保羅同行的馬其頓人該猶、和亞哩達古、齊心擁到戲園裏去。

(1) は地名の異同で、ピリピの漢訳が「腓立比」から「腓力比」に改訳されている。官話訳1892年版は1889年版の官話訳と浅文理訳の1885年版、1886年版、1889年版、1890年版と同じく「腓立比」と訳出しているが、官話訳1906年版では浅文理訳の1898年版と同じく「腓力比」と訳出している。このことから、1892年版の官話訳は1889年版の官話訳または出版年が近い1890年版の浅文理訳に基づき、1906年版の官話訳は1898年版の浅文理訳に基づいていると考えられる。ここのピリピは新約聖書の11番目の文書であるピリピ書の「ピリピ」のことであるから、1885年版、1886年版、1889年版、1890年版の浅文理訳および1889年版と1892年版の官話訳のこの箇所の訳語は、本来「腓立比」ではなく、「腓力比」と訳出しなければならないものである⁵⁾。この使徒16:12の「ピリピ」は1898年の浅文理訳では修正が施され、1906年版の官話訳でもピリピ書の表記と一致した「腓力比」に修正されている。

(2) と (3) は人名表記の異同である。(2) は1892年版ではクリスポの訳語に「革哩士布」を充て、1906年版は「基士都」を充てている。「革哩士布」はすべての浅文理訳およびメドハースト・ストロナックの南京官話訳と一致し、北京委員会の北京官話訳では「革里士布」と類似の表記となっている。また(3)は「ガイオ」の訳語であるが、浅文理訳ではすべて「該由」と訳出され、1892年版の官話訳と一致している。これらのことから、1892年版の官話訳が1889年版の官話訳を継承しているか、出版年が近い1890年版の浅文理訳に基づいていると言える。1906年版の官話訳の「迦猶」はどのグリフィス訳とも一致せず、1857年のメドハースト・ストロナックの南京官話訳との一致が見られるが、その理由は不明である。

3.2.3. 指示詞の異同

指示詞の異同は使徒18:7と使徒18:8の2節2箇所に見られる。

- (1) 1892：保羅就離開會堂、有一個拜上帝的人、名叫猶士都、保羅進了他的屋、那屋靠近會堂、
(使徒18:7)

1906：保羅就離開會堂、有一個拜上帝的人、名叫猶士都、保羅進了他的屋、這屋靠近會堂、

1889：保羅就離開會堂、有一個拜上帝的人、名叫猶士都、保羅進了他的屋、那屋靠近會堂、

浅1885：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

浅1886：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

浅1889：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

浅1890：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

浅1898：遂離之、有拜上帝者、名猶士都、保羅入其室、室近會堂、

麦1857：就離了他們、有個拜上帝的人、名叫猶士都、保羅進他的屋子、那屋子相近會堂、

北1872：保羅就離開會堂、到了一個人的家裏、那人名叫猶士都、是敬畏神的、他的家靠近會堂、

- (2) 1892：管會堂的人革哩士布、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、
(使徒18:8)

1906：那管會堂的人基士部、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、
1889：管會堂的人革哩士布、和他全家的人、都信了主、哥林多人聽了道理、信主受洗的甚多、
浅1885：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、又多哥林多人聞道、信而受洗焉、
浅1886：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、又多哥林多人聞道、信而受洗焉、
浅1889：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、
浅1890：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、
浅1898：宰會堂者革哩士布、及其全家信主、哥林多人聞道、信而受洗者亦多、
麦1857：管會堂的人革哩士布闔家信主、哥林多的人聽道理、信耶穌受洗禮的狠多、
北1872：管會堂的人革里士布和他的全家、都信了主、還有許多哥林多人聽了道理、信從受洗。

(1) の1892年版の指示詞「那」は1889年版の官話訳と一致していることから、1889年版の官話訳が1892年版に継承されていると言える。また、官話訳では指示詞が使用されているが、すべての浅文理訳では「室近會堂」と訳出され、指示詞は使用されていない。メドハースト・ストロナックの南京官話訳では「那屋子相近會堂」と訳出され、1889年版および1892年版と同じく指示詞「那」が使用されていることから、この「那」はメドハースト・ストロナック訳に由来するものとする。北京委員会の北京官話訳では「他的家靠近會堂」と漢訳され、英語欽定訳の「whose house joined hard to the synagogue」に近いものとなっている。(2) では1889年版と1892年版の官話訳になかった指示詞「那」が1906年版の官話訳では追加されている。浅文理訳ではすべて「宰會堂者革哩士布」と訳出され、指示詞は見られない。また、メドハースト・ストロナックの南京官話訳と北京委員会の北京官話訳でもそれぞれ「管會堂的人革哩士布」、「管會堂的人革里士布」と指示詞なしで訳出していることから、この箇所はグリフィス独自の訳出であると思われる。

3.2.4. 名詞の異同

名詞の異同はヨハ5:32、黙示4:3の2節2箇所に見られる。

- (1) 1892：有別人爲我作見證、我曉得他爲我作的見證是真的、(ヨハ5:32)

1906：有一爲我作見證的、我曉得他爲我作的見證是真的、
1889：有別人爲我作見證、我曉得他爲我作的見證是真的、
浅1885：有他人爲我作證、我知其爲我作證乃真、
浅1886：有他人爲我作證、我知其爲我作證乃真、
浅1889：有他人爲我作證、我知其爲我作之證乃真、
浅1890：有他人爲我作證、我知其爲我作之證乃真、

浅 1898：有他人爲我作證、我知其爲我所作之證乃眞、

麦 1872：有個替我做見證的人、我曉得他的見證是真的。

北 1872：有別人爲我作見證、我知道他爲我作的見證是真的。

(2) 1892：坐在寶座上的、容貌如同金剛石、紅寶石、圍着寶座有虹、顏色如同綠寶石、(默示 4:3)

1906：坐在寶座上的、容貌如同金剛石、黃寶石、圍着寶座有虹、顏色如同綠寶石、

1889：坐在寶座上的、容貌如同金剛石、紅寶石、圍着寶座有虹、顏色如同綠寶石、

浅 1885：坐之者、貌如金剛石、黃寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

浅 1886：坐之者、貌如金剛石、黃寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

浅 1889：坐之者、貌如金剛石、紅寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

浅 1890：坐之者、貌如金剛石、紅寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

浅 1898：坐之者、貌如金剛石、紅寶石、寶座有虹繞之、色如綠寶石、

麦 1857：那坐着的面貌、好像女碧玉和瑪瑙的顏色、有一條虹、像葱玉似的、圍着那座位、

北 1872：坐在寶座上的、容貌如同金鋼石、黃寶石、圍著寶座有虹、顏色如同綠寶石。

KJV: And he that sat was to look upon like a jasper and a sardine stone: and there was a rainbow round about the throne, in sight like unto an emerald.

TR: καὶ ὁ καθήμενος ἦν ὅμοιος ὁράσει λίθῳ ἰάσπιδι καὶ σαρδίνῳ· καὶ ἶρις κυκλόθεν τοῦ θρόνου ὅμοιος ὁράσει σμαραγδίνῳ.

(1) の異同箇所について、すべての浅文理訳では「有他人爲我作證」と訳され、メドハースト・ストロナックの南京官話訳では「有個替我做見證的人」、北京委員會の北京官話訳では「有別人爲我作見證」と訳出されている。これは北京官話訳の影響というよりも、浅文理訳の「他人」を官話に訳出する際に必然的に「別人」となったと考えた方がよい。つまり、1892年版の官話訳は1889年版の官話訳を継承したもので、1889年版の官話訳は1889年版の浅文理訳に基づいて訳出されたものとする。 (2) の異同箇所は、ギリシア語公認本文では「σαρδίνῳ」(σάρδονの単数・与格)、英語欽定訳では「sardine stone」と色彩名が見られない語であるが、1885年版と1886年版の浅文理訳では1906年版の官話訳と同じく「黃寶石」と訳出され、1889年版と1890年版、1898年版の浅文理訳では1892年版と1889年版の官話訳と同じく「紅寶石」と色彩名が付された訳語となっている。「sardine stone」にあたる漢訳語は、1823年のモリソン訳と1822年のマーシュマン・ラサール訳では「瑪瑙之玉石」、1852年の文理代表訳と1869年のブリッジマン・カルバートソン訳では「瑪瑙」といずれも色彩名は付されていないが、1872年の北京委員會北京官話訳では「黃寶石」、1908年と1919年の官話和合訳では「紅寶石」と色彩名が付された訳語となっている。英華字典における「sardine」の訳語は1822年のモリソン英華字典、1844年のウィリアムスの英華字典、1848年のメドハーストの英華字典には見出し語として見られないが、1869年のロブシャ

イトには「Sardel, Sardine, Sardius」の訳語として「寶石」が見えるが色彩名は付されていない。さらにロプシャイト系統のキングセルの英華字典(1899年)と《華英音韻字典集成》(1903年)でも「Sardel, Sardine, Sardius」の訳語として「寶石」が充てられている。色彩名が付されるのは1910年の《商務書館英華新字典》、1914年の《増廣商務印書館英華新字典》で、「Sard, Sardine, Sardius」の訳語として、それぞれ「深血紅寶石」と「血色紅寶石」が充てられている。また1908年版の序文が付された1921年の顔惠慶らによる《英華大辭典(小字本)》では「Sard, Sardine, Sardius」の訳語として、やはり「紅寶石、櫻紅瑪瑙、血色紅寶石」と色彩名を含んだ訳語となっている。このほか、1916年のヘメリングの英華字典でも「Sardachate」の訳語として「紅瑪瑙」が充てられている。

これらの訳語から「sardine stone」の訳語には赤色が付されているが、グリフィス訳や北京委員会北京官話訳にある「黃寶石」の「黃」はどこに由来するのであろうか。1923年の《英漢雙解韋氏大學字典》の「sardius」には、1つ目に「A sard, 帶褐色之紅玉髓」、2つ目に「(Bib.) A gem in the Hebrew high priest's breastplate, perhaps a ruby, 希伯來高級祭司胸甲中之寶石, 或係紅玉」の記載が見られる。「黃寶石」は恐らく前者に由来するものであるが、この箇所の解釈としては後者が相応しく、「黃寶石」よりも「紅寶石」のほうが訳語として適切であり、1906年版の官話訳で「黃寶石」となった理由は不明である。しかし、少なくともこの異同箇所から、1892年版の官話訳の「紅寶石」が1889年版の官話訳か、直近の1890年版の浅文理訳に依っていると見えうである。

3.2.5. 虚詞の異同

虚詞の異同は使徒9:17の1節2箇所とヨハ5:32の1箇所、計3箇所に見られる。

- (1) 1892: 亞拿尼亞就去、進了那家、用手按掃羅說、兄弟掃羅阿、你來的時候、在路上向你顯現的主耶穌、差遣我來、使你能看見、又被聖神充滿、(使徒9:17)
- 1906: 亞拿尼亞就去、進了那家、用手按掃羅說、兄弟掃羅阿、你來的時候、在路上向你顯現的主耶穌、差遣我來、使你得看見、又得聖神充滿、
- 1889: 亞拿尼亞就去、進了那家、用手按掃羅說、兄弟掃羅阿、你來的時候、在路上向你顯現的主耶穌、差遣我來、使你能看見、又被聖神充滿、
- 浅1885: 亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾者、即主耶穌、遣我來使爾得見、且充滿於聖神、
- 浅1886: 亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾者、即主耶穌、遣我來使爾得見、且充滿於聖神、
- 浅1889: 亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾之主耶穌、遣我使爾得見、又充滿於聖神、

浅 1890：亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾之主耶穌、遣我使爾得見、又充滿於聖神、

浅 1898：亞拿尼亞遂往、入室、手按掃羅曰、兄弟掃羅乎、爾來時、途中顯於爾之主耶穌、遣我使爾得見、又充滿於聖神、

麦 1857：亞拿尼亞就去、進他的房子、用手摸着他、道、兄弟掃羅呵、你來的時候、在路上所看見的主耶穌、打發我來、使你能能看見、被聖神感動。

北 1872：亞拿尼亞就去了、進了那家、手按掃羅說、兄弟掃羅阿、你來的時候、在路上向你顯現的主耶穌、差遣我來、叫你能看見、又足足的蒙聖靈感動。

(2) 1892：有別人爲我作見證、我曉得他爲我作的見證是真的、(ヨハ5:32)

1906：有一爲我作見證的、我曉得他爲我作的見證是真的、

1889：有別人爲我作見證、我曉得他爲我作的見證是真的、

浅 1885：有他人爲我作證、我知其爲我作證乃真、

浅 1886：有他人爲我作證、我知其爲我作證乃真、

浅 1889：有他人爲我作證、我知其爲我作之證乃真、

浅 1890：有他人爲我作證、我知其爲我作之證乃真、

浅 1898：有他人爲我作證、我知其爲我所作之證乃真、

麦 1872：有個替我做見證的人、我曉得他的見證是真的。

北 1872：有別人爲我作見證、我知道他爲我作的見證是真的。

(1) の異同箇所は、1885 年版と 1886 年版的浅文理訳では「遣我來使爾得見、且充滿於聖神」、1889 年版と 1890 年版、1898 年版的浅文理訳でも「且」が「又」に代わっているが、「遣我使爾得見、又充滿於聖神」とほぼ同じ構造の訳出法が採られている。メドハースト・ストロナックの南京官話訳では「使你能能看見、被聖神感動」と漢訳され、北京委員会の北京官話訳では「叫你能看見、又足足的蒙聖靈感動」と訳出されている。ここから、1892 年版的官話訳は 1889 年版的官話訳を継承していると言えるが、1889 年版的浅文理訳以降から「且」が「又」に代わっていることから、1889 年版的官話訳のこの箇所が 1889 年版的浅文理訳に依拠している可能性を指摘できる。(2) では 1889 年版と 1892 年版的初版系官話訳になかった説明の語気を示す助詞「的」が 1906 年版で加えられ、より踏み込んだ漢訳文を実現している。この訳出方法はメドハースト訳や北京官話訳とも異なっており、グリフィス独自の漢訳手法と言える。

おわりに

これまでの考察から、グリフィスによる官話訳《新約全書》の 1892 年版と 1906 年版における異同箇所について、次の 3 点が明らかとなった。1 つ目は、グリフィスによる漢訳新約聖書の節区

分には節の合併箇所が多く見られ、グリフィスの漢訳聖書の特徴が現れていることである。節の合併については、1889年までは安定が見られないが、1890年以降はどの訳本でも一致が見られ、安定していることが明らかとなった。2つ目は、1892年版の官話訳の漢訳文は、1889年版の官話訳と1892年版と出版年が近い1889年版と1890年版の浅文理の影響を受けているということである。3つ目としては、節の合併箇所と訳文の異同箇所の考察から、1892年版と1906年版の官話訳は1種類の版本のみに依拠して完成したものでなく、複数の異なる文体による訳本を参照した複雑なものであることが明らかとなった。これはグリフィスの官話訳が浅文理訳から重訳されたことと、グリフィスの浅文理訳自体も修訂が施されてきたことによるものと考えられる。つまり、1892年版の官話訳は初版の1889年版の官話訳の訳文を継承しつつも、初版から修訂が加わっている1889年版と1890年版の浅文理訳も参照しつつ成立したものであり、1906年版の官話訳は節区分を1898年版の浅文理訳に依拠しつつ、初版系の1892年版の引照なしの官話訳の訳文をもとに、メドハースト・ストロナックの南京官話訳や北京委員会の北京官話訳の採用とグリフィスによる新たな独自の修訂が加わって完成したものである。グリフィスの官話訳の訳文は全体として初版系と最終訳系との間に大きな異同は見られないが、本論で考察した異同箇所もあることを念頭に置きながら、今後はグリフィスの官話訳における文体を構成する官話の特徴を明らかにしていきたい。

最後に、本稿は2022年度からの日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「メドハーストによる南京官話訳新約聖書における語彙と文法に関する総合的研究」(課題番号22K00551)の成果の一部であることと、論者が関西大学アジア・オープン・リサーチセンター研究員および愛知大学国際問題研究所客員研究員であることも付言しておく。

注

- 1) Spillett 1975の119-121頁を参照。
- 2) グリフィスについての詳細は永井2016の2-3頁を参照。
- 3) 1889年の初版の官話訳では、Ⅱコリ3:7-8、コロ3:9-10の2箇所は合併されていないが、意味上から合併しても良い箇所である。
- 4) メドハースト・ストロナックの南京官話訳と北京委員会による北京官話訳で、この箇所のアーメンが訳出されていない理由は未詳。1852年の文理代表訳でもアーメンの訳出は見られない。
- 5) メドハースト・ストロナックの南京官話訳と北京委員会の北京官話訳のギリシヤ語の表記は「腓立比」で、この箇所と統一して訳出されている。

参考文献

[聖書]

Robert Morrison 1823. 《神天聖書》。(モリソン訳)

Joshua Marshman, Joannes Lassar 1822. 《聖經》。(マーシュマン・ラサール訳)

1852. 《新約全書》。上海：墨海書館。(文理代表訳)

1857. 《新約全書》。上海：墨海書館。(メドハースト・ストロナック南京官話訳)
1869. 《新約全書》。上海：美華書館。(ブリッジマン・カルバートソン訳)
1870. *The Holy Bible, containing the Old and New Testaments*. The British and Foreign Bible Society. London. (英語欽定訳)
1872. 《新約全書》。上海：美華書館。(北京委員会北京官話訳)
- 楊格非 1885. 《新約全書》。(浅文理訳)
- 楊格非 1886. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(浅文理訳)
- 楊格非 1889. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(浅文理訳)
- 楊格非 1889. 《新約全書》。(National Bible Society's Press, Hankow)。(官話訳：引照なし、ロマ7:7-9:8とロマ12:15-16:20は未見)
- 楊格非 1890. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(浅文理訳)
- 楊格非 1892. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(官話訳：引照なし)
- 楊格非 1898. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(浅文理訳)
- Westcott & Hort 1901. *The New Testament in the Original Greek*. Macmillan and Co., Limited. London. (ウェストコット・ホートギリシア語本文)
- 楊格非 1906. 《新約全書》。漢鎮：英漢書館。(官話訳：引照あり)
1908. 《新約全書》。上海：聖書公會。(官話和合訳)
1919. 《舊新約全書》。上海：大英聖書公會。(官話和合訳)
- H KAINH ΔΙΑΘΗΚΗ* (The New Testament, The Greek Text Underlying The English Authorized Version of 1611). The Trinitarian Bible Society. (ギリシア語公認本文)

[その他]

- Robert Morrison 1822. *A dictionary of the Chinese Language, in three parts. Part the first, containing Chinese and English arranged according to the keys; Part the second, Chinese and English arranged alphabetically, and Part the third, consisting of English and Chinese. Part III.* The Honorable East India Company's Press. Macao.
- S. Wells Williams 1844. *An English and Chinese Vocabulary, in the court dialect*. The Office of the Chinese Repository. Macao.
- W. H. Medhurst 1848. *English and Chinese Dictionary. In two volumes. Vol II.* The Mission Press. Shanghai.
- Lobscheid 1869. 《英華字典》, *English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation. Part IV.* "Daily Press" Office. HongKong.
- F. Kingsell 1899. *A Dictionary of the English and Chinese Language with the Marchant and Mandarin Pronunciation*. Kingsell&Co.. Yokohama.
1903. 《商務書館英華音韻字典集成》。上海：商務書館。
- R. Wardlaw Thompson 1908. *Griffith John The Story of fifty years in China*. The Religious Tract Society. London.
1910. 《商務書館英華新字典》。上海：商務書館。
1914. 《增廣商務印書館英華新字典》。上海：商務印書館。
- K. Hemeling 1916. *English-Chinese Dictionary of the standard Chinese spoken language* (官話) and *handbook for translators*. Statistical Department of the Inspectorate General of Customs. Shanghai.
- 顏惠慶他 1921. 《英華大辭典 (小字本)》。上海：商務印書館。
- 郭秉文・張世鑣 1923. 《英漢雙解韋氏大學字典》。上海：商務印書館。
- 密立根・賈立言・馮雪冰 1934. 《新約聖經流傳史 附漢文聖經譯本小史》。上海：広學會。

Hubert W. Spillett 1975. *A Catalogue of Scriptures in the Languages of China and Republic of China*. British and Foreign Bible Society. London.

永井崇弘 2016. 『グリフィス訳浅文理新約聖書の版本とその訳文について－『馬可福音』からの考察－』, 『福井大学教育地域科学部紀要』第6号：1-13頁。

The Matrix Reeve-Loaded II: A Comparative Analysis of Three European Folktales and Their Relationship to *The Mylner of Abyngton* and Chaucer's *Reeve's Tale*

D. Jones^{*1}

Received 30 September 2022

Abstract: This article is intended to be read as the continuation of a previous paper: “The Matrix Reeve-Loaded I: Dismantling Biases and Evaluating Diagrams of Relationships between Chaucer’s *Reeve’s Tale*, *The Mylner of Abyngton*, and Other Cradle-Trick Stories” (2016). Part I aimed to show how a combination of entrenched biases in literary criticism had combined to exclude *The Mylner of Abyngton* from consideration as an analogue of *The Reeve’s Tale*, but recent critical trends have challenged such biases and opened up new possibilities and perspectives. One such trend is to take a broader view of the relationships of texts to their sources and analogues: an intertextual approach. Accordingly, Part I critiqued four diagrammatic representations of the relationships between cradle-trick stories (ATU 1363) that essentially divide them into two separate strands: the “love plots” and the “miller plots.” Such rigid representations cannot convey the intersectionality and intertextuality between narratives, including those on supposedly-separate strands. Instead, the relationships should be reconceptualised as an intertextual matrix. Thus, this follow-up paper takes a deep dive into this matrix, focusing on a trio of “miller-plot” European folktales (Breton, Danish, and Irish), similar to *The Mylner of Abyngton*, to elucidate, through comparative analysis, the relationships of the three folktales to each other, to *The Mylner*, to Chaucer’s *Reeve’s Tale*, and to other cradle-trick stories. The study identifies the distinguishing features of this subgenre of tales and highlights numerous connections between them and the more lauded narratives: the first study of these three folktales in English. The identified distinguishing features of this subgenre could help piece together what an older, similar version of the tale-type might have looked like and with which Chaucer might have been familiar as he was composing *The Reeve’s Tale*. Moreover, the connections identified between the three folktales (plus *The Mylner*) and other sources and analogues, especially those on the

^{*1}Division of Teacher Education, Faculty of Education, Humanities and Social Sciences, University of Fukui

supposedly-separate “love-plot” strand, indicate far deeper intersectionality and intertextuality than the diagrams represent. They are not poles apart. The suggestion is that such folktales may have cross-pollinated the established literary versions and therefore warrant greater consideration as mediating intertexts.

Keywords: Chaucer, *Reeve's Tale*, sources and analogues, *Mylner of Abyngton*, intertextuality

This article is intended to be read as a development of a previous paper: “The Matrix Reeve-Loaded I: Dismantling Biases and Evaluating Diagrams of Relationships between Chaucer’s *Reeve's Tale*, *The Mylner of Abyngton*, and Other Cradle-Trick Stories” (2016). Part I argued that, as no single, definitive source of Chaucer’s *Reeve's Tale* (in *The Canterbury Tales*) has been identified, scholars should analyse Chaucer’s process of composition more holistically, by assessing a wider range of narratives. Moreover, these narratives should be conceived of as an intertextual matrix, which Chaucer plunged into and plundered eclectically as well as augmented with his own formidable creativity and originality.

This broader conception of an intertextual matrix jibes with both recent trends in literary criticism (Beidler *Sources* 24) and the established *modus operandi* of folkloric study (Heist 255). Part I of this paper noted the convergence of diverse, current critical approaches that interrogate, problematize, and destabilise entrenched literary prejudices, including the privileging of certain narratives because they are “literary” and the exclusion of others because they are “folk”/oral and/or the author remains anonymous. As Amodio observes, there has been a biased belief that the literate obliterates the folk/oral; however, folk orality did survive and interact fluidly with literate cultures, so it is important to recognise the “intertextual nature of composition” (14) as a “matrix” (15).

In the case of Chaucer’s *Reeve's Tale*, the study of its sources and analogues has been extensive but perhaps not yet exhaustive: these challenging new approaches can dismantle biases and yield fresh perspectives. Part I evaluated four diagrammatic representations of European “cradle-trick” stories (tale type ATU 1363, wherein male visitors stay the night in a family’s house, and a baby’s cradle is moved away from its mother’s bed in the middle of the night, causing characters up in the night to become disoriented and get into the wrong beds with the wrong people).

The diagrams (Varnhagen 1885:266, Stehmann 1909:112, Raith 1936:129, and Hertog 1991:86) divide these stories (considered *The Reeve's Tale*’s closest sources and analogues) into two discretely-evolving strands: the “love plots” vs the “miller plots” (with *RvT* posited on the latter). Both plot types feature the cradle trick, but the “love plots” are characterised by burgeoning affection between the visitors and the host’s daughter and/or wife, whereas that affection is generally lacking in

the “miller plots” (and the hosts in the “love-plot” tales are not millers).

In the diagrams, the “love plot” strand is headed by the French fabliau *De Gombert et les .ii. clers* (by Jean de Boves, 1190), later helping spawn Boccaccio's *Decameron* 9.6 (1349-52), two German analogues (including Rüdiger von Munre's *Irregang und Girregar*, c.1300), and the Flemish *Een bispel van .ij. clerken* (C14th, which is close in content to *Gombert*).

Conversely, at or near the fount of the “miller-plot” strand is another French fabliau *Le meunier et les .ii. clers* (early C13th),¹ which helped spawn both Chaucer's *Reeve's Tale* (1392-95, *Riverside* xxix) and *The Mylner of Abyngton* (anon., c.1532-34), with Stehmann speculating about the relationships between various extant and lost intertexts which may antedate and connect them.

Stehmann's “Motif II” is the focus of the current study because this subgenre has received scant critical attention. This motif is “the daughter's lover” (i.e. unlike in other analogues, the daughter already has a boyfriend). This subgenre comprises four extant texts: “E²” (*The Mylner of Abyngton*), “frz.⁷” (a Breton analogue), “Dan²” (a Danish analogue), and Raith later added an Irish analogue (“Patrick Mac Bride and his Son”). Stehmann posits these tales as having been preceded by a series of three, (lost) evolving French tales; it is important to recognise that these extant versions (which all postdate *RvT*) were probably preceded by tales (similar in content) that antedate Chaucer. Raith describes *The Mylner* as the “literary” version of this type, whereas the Breton, Danish, and Irish ones are more “folk-like developments” transcribed from oral tradition (132). Numerous scholars (Stehmann 107, Wright 105, Spurgeon Appendix A 8, Heist 252, Cooper 110, Hines 206, Grace 46, Gray 405) have observed that the distinctive elements that characterise *The Mylner* could be indicative of an older oral/folk story with which Chaucer may have been familiar in the process of composing the *Reeve's Tale* (and that may have interacted with, and cross-pollinated, the other literary versions schematised in the diagrams, on both strands).

As Part I explained, although there was a long critical bias for *Le meunier* as *The Reeve Tale*'s closest source, to the exclusion of the love-plot tales, recent scholars have challenged this by highlighting many similarities between *The Reeve's Tale* and *Gombert-bispel* (Beidler 1992) and *Decameron* 9.6 (Beidler 1994). Thus, Hertog's diagram is the best as it allows for such “blurred boundaries” (87) and “overlapping and crisscrossing” (86), showing the intersecting and interconnectedness of the tales, presenting the image as more of a “matrix” (58, 82). However, Hertog only mentioned *The Mylner* (i.e. not the three folktales), and set it at an even-more-distant remove than *The Reeve's Tale* from the love plots. This long-overlooked subgroup of tales only appears (if at all) in the diagrams at the furthest extremity of the “miller-plot” strand, out on a limb and very much marginalised, though still in the same orbit as the *Reeve's Tale*, and the folk versions have received even scantier critical attention than *The Mylner*, perhaps because all were originally related and

recorded in languages other than English.²

Accordingly, the method of the current study is to undertake a comparative analysis of the Breton, Danish, and Irish analogues, mainly in relation to each other and their “literary” companion piece (*The Mylner*), Chaucer’s further-removed ne plus ultra of tale-type ATU 1363 (*The Reeve’s Tale*), and some of the other “cradle-trick” stories represented in the diagrams, including on the supposedly-separate, polar-opposite strand of “love plots.”

The aims are to identify the distinctive features of this subgenre of tales that could hint at the content of an older folktale version that Chaucer might have known (among others) when he was composing *The Reeve’s Tale* and to show how much crossover and cross-pollination exists and thus try to make the matrix image more convincing. It is necessary to transcend the diagrams’ brutal bifurcation into rigid, limiting lineality and instead recognise liminality, intersectionality, and intertextuality in the form of a matrix. As such, this paper contends that this distinct subgenre of tales (*The Mylner* and its European folktale kin) warrants reconceptualization and recognition as being of greater importance as mediating intertexts in the matrix of tales. It is believed that this study is the first critical treatment of these folktales in English.

Until now, *The Mylner of Abyngton* has largely been treated dismissively (as just a rip-off *Reeve’s Tale*), if at all. However, as explained in Part I, scholars are now challenging the various, combined biases that have long excluded *The Mylner* (and the folktales) from critical consideration. As stated above, *The Mylner* contains diverse elements that differ qualitatively from the *Reeve’s Tale* and are rather of a piece with the European “folk” versions represented on the diagrams of Stehmann and Raith (i.e. Stehmann’s “MOTIV II^a”: “the lover of the daughter” 112). As Cooper confirms, the *Mylner* “plot diverges sufficiently [from Chaucer’s] to indicate its author also knew some version resembling analogues now known in Breton or Danish, in which the clerks seal the sack so that the miller has to beat it to get the flour out and the daughter is provided with a lover of her own” (426).

The Breton folktale is posited as the oldest of the three on Stehmann and Raith’s diagrams. Stehmann suggests that *The Mylner* and this Breton story are derived from a lost, common-ancestor tale. It was translated into French and entitled *Le clerc et son frère laboureur* (“The clerk and his brother ploughman”—similar to Chaucer’s Parson and Plowman?). As in *The Mylner* (but unlike the other ‘literary’ analogues), the two young protagonists are actual brothers, and their mother is a widow. The text can be accessed in print and online (see Luzel). This book is dated 1890, but, as indicated above, the actual date of these folktales (or earlier versions) could conceivably be centuries earlier.

As in *The Reeve’s Tale* and *The Mylner*, the Breton miller’s reputation for thieving precedes him, so the men take identical precautions to prevent his prolific pilferage: one watches the wheat

grinding from above the hopper, and one from below. Of course, it is also possible that these folktale versions of the tale could have been influenced by the literary versions, including Chaucer's (i.e. the interaction between folktale and literary versions could have been in either direction or even both directions). Skeat cites this scene as evidence that *The Mylner* was "plainly copied" from *The Reeve's Tale* (V.122. This scene does not feature in *Le meunier* or any other analogue). However, whereas miller Symkyn displays supreme confidence in his ability to cheat the clerks in *RvT* (I.4046-4056), the Breton miller voices doubts he can do it, so has to be spurred on by his decidedly-dastardly daughter (who peremptorily instructs him to "Shut up"!).

She is game for any of the dirty work done by other characters in other analogues. She is the one who then releases the young men's horses, sending them scurrying away in pursuit, thus making it a cinch to pinch their flour, as happens in *RvT* (when Symkyn releases Bayard, with his wife complicit by obscuring his guilt, just as the *meunier*'s wife helps bamboozle the clerks so her husband can steal their wheat and horse). The mylner instructs his son to steal the clerks' horse, but, even when they realise they have to go and seek their absent steeds, both *The Mylner* and Breton young men are still loath to abandon their wheat to the miller. They thus take the precaution of sealing their flour in a sack before they leave; however, when they do depart, the undeterred millers hang up the sealed sacks, then beat them, causing a bounty of flour to escape through minute holes in the sack fabric and fall onto a white sheet placed below, with the seal remaining intact. This is the ingenious idea of the mylner (who enlists the help of his daughter to bring the sheet, then carry away the pillage of the spillage and make a cake of it), but, in the Breton folktale, it is another of the daughter's devious wheezes: she is the one calling the shots. This feature differs greatly from the "extreme naïveté of the girl" in *Le meunier* (Brown 227). She uses the stolen flour to make crêpes (a Breton speciality).

From outside, the Breton brethren hear the old bag being pounded and wrongly "believe that the miller is beating his wife." Interestingly, this folktale specifies she is not the miller's first wife: his "first wife" was the one who bore him the devious daughter. This plot variation perhaps enhances the tale's plausibility by helping explain the big age gap between the nubile daughter and the child in the cradle (and maybe intimating that the new wife could be younger and more attractive). The wide age gap between Symkyn's daughter Malyne (20) and her baby brother (6 months) in *RvT* has been queried (e.g. Wetherbee 61 and Machan 128, who conjecture that the baby may really be Malyne's).

It is also striking that the Breton folktale refers to the daughter as "the heiress" (probably ironically?), especially recalling Symkyn's aristocratic/dynastic aspirations for Malyne's marriage: because Malyne is the granddaughter and "heir" (I.3978) of the town parson, they have plans "to bistowe hire hye/ Into som worthy blood of auncetrye" [I.3981-82], only for Symkyn to be left aghast that clerk Aleyn came "to disparage/ My doghter, that is come of such lynage" [I.4271-72]).³

As in *RvT* (but not the *Mylner* or *Le meunier*), the Breton boys come back to the mill and bemoan getting soaked while out horse hunting. While the “nasty” (Beidler 1992:287) *meunier* is not pleased to see the clerks back (A140), Symkyn and the *mylner* are more amenable to letting them stay the night, perhaps because the clerks agree to pay handsomely. The Breton miller, meanwhile, seems an altogether more gracious host in exclaiming “Perfect!” at the suggestion and not demanding any payment for their lodging or crêpe supper. In this respect, perhaps he is closer to the more genial and “attractive” (Beidler 1994:243) host of *Decameron* 9.6 and the “solicitous” (Beidler 1992:287) hosts of *Gom-bis*, i.e. those in the “love-plot” line of tales. Thus, some crossover of elements can be discerned between the two supposedly separate strands of the “love-plot” and “miller-plot” stories.

After eating, everyone goes to bed. Whereas all *RvT* characters sleep in the same narrow room, and the *meunier* locks his “beautiful and agreeable” (B147) daughter up in a trunk every night (B149, A163, “lest she be too agreeable,” A164), *The Mylner* and Breton daughters have their own, separate rooms. These sleeping arrangements enable the daughters to have assignations with their lovers (as noted above, the existence of these boyfriends is the defining motif of *The Mylner* and the folktales, identified as “Motif II^a”, a twist on the miller-plot tale type, in Stehmann’s diagram 112).

A possible difference, though, could be that Jankyn, the *mylner*’s daughter’s beau (and the tale’s only named character), seems to have the *mylner*’s approval for these trysts. He calls Jankyn “his man” (195) and knows that he will come after he finishes work. The name “Jankyn” (“little John” or “son of John”) was often given to the stock characters of lusty lads or clerics—or chaps who were both—so he could be a figure of fun and/or an object of derision.⁴

This paternal awareness and approval are less clear in the Breton folktale: the miller seems ignorant of any amoureux. It is only after he is safely asleep that his cunning daughter starts preparing the batter for *crêpes à deux*. The Breton cleric shows cunning in pretending to be asleep with some fake snoring (cf. the real snoring of Symkyn and his wife in *RvT*, the *meunier* B177, and Gobert and his wife in *bis*, 62-63). Observing the girl’s sneaky preparations and intuiting what was occurring, the cleric decides to approach in the dark, pretending to be her “usual visitor.” *The Mylner* clerk, having overheard the *mylner*’s report of Jankyn’s expected arrival, does likewise (an apparent difference, though, is that the *Mylner* clerk seems more genuinely attracted: “I think so on the damosell” 222).

Sure enough, the daughters duly (mis)take them for their customary cavaliers and welcome them into bed, although, *en route*, *The Mylner* clerk bangs his shin (maybe poetic justice for his unwanted earlier ‘footsy’?), causing the girl to chide him for his faux pas in not knowing the way “[s]o oft as you come (hyther)” (244, causing the clerk to laugh as he recognised what a well-trodden and well-prodded furrow he was ploughing). He benefits from being ‘Johnny-on-the-spot.’ As the Wife of Bath confirms of her own “Janekyn” (III.383), “Whoso that first to mille comth, first grynt” (III.389).

After she had 'done Jankers' (or so she thought), *The Mylner* daughter proceeds to tell the clerk about the thieving she had helped her father perpetrate earlier. Surprisingly, the clerk speaks to congratulate her: "That was well done, my derling deere" (287). This brief speech could be a plot flaw in *The Mylner* because of the risk of his voice making her realise he was not Jankyn. This likely danger of voice recognition is referred to in *De generibus ebriosorum et ebrietate vitanda* ("On Drunks and Avoiding Drunkenness," a C16th Latin analogue, on the "love-plot" side in the diagrams and reprinted in Benson and Andersson 194-197). The drunken wife is diverted into the student's bed by the cradle trick, and then asks her partner (her supposed husband) "why are you so merry tonight?" But he answered nothing lest he be betrayed by the evidence of his voice and began anew several times."⁵

The Breton clerk is similarly circumspect in keeping his silence when the daughter talks to him, post-coitally, although there is less time for chitchat because, unlike in *The Mylner* (where the real Jankyn never actually appears), the Breton beau then arrives on the scene. The daughter assumes that this new arrival is one of the young men staying the night in the other room, come to try it on, and so she quickly devises another of her characteristically-cunning plans to send him packing. In a disgusting twist, sans warning « *Garde à l'eau!* », she peremptorily flings the contents of her almost-full chamber pot flush into his face!⁶ Earlier, presumably, the daughter had been using the pot as a stopgap measure, *pis-aller*; however, when her honey arrived, he had been expecting to receive crêpes not craps. This was not at all the kind of exchange of bodily fluids that he was eagerly anticipating; it really was *tant pis*. Like third-wheel Absolon in *The Miller's Tale*, he feels humiliated and irate to have received the bum's rush and scurries away to wash himself (because, as a curious and humorous line explains, the "odour of a Christian's urine tends to be more acrid"!).

Attention then turns to the Breton clerk's brother, who enacts the cradle trick to lure the miller's wife to his bed (as in *Myl*, the baby-in-cradle is only introduced at this precise point where it is required). Strangely, the timing of his cradle moving is the same as in *RvT*. The characters move the cradle from beside the miller and his wife's bed to beside their own bed *before* anyone gets up in the night to use the toilet (maybe they did not have any more chamber pots?). The logic of this timing in *RvT* has been queried (e.g. Stehmann 107, Raith 134, Craik 41, Hertog 80): how could clerk John have known the wife would get up before her husband during the night, if either even rose at all? Fortunately for John, he got lucky, as did the Breton ploughman, because it was indeed the millers' wives who got up first and were thus misled by the cradle's new position into climbing into bed with the clerks.

Meanwhile, *The Mylner* brother seems to execute the cradle trick with superior logic, moving it immediately *after* the wife goes out to relieve herself (she actually does so twice during the night—

the clerk entraps her the second time). Both the wives' acts of urination and subsequent copulation in *The Mylner* and the Breton folktale are described in politer, more euphemistic ways than in *RvT* (although the lyrics of the chanson leave little doubt that it is a Breton lay).

The young men who had been with the daughters then come back to find their comrades but, also deceived by the moved cradle, end up inadvertently climbing into bed with the miller. Thinking he is their confrère, they tell him about their escapades with the daughters, thus enraging him. Even so, once again, the clerks' descriptions of those escapades in *The Mylner* and the Breton folktale are more restrained and respectful compared to the crude phraseology of *meun* and *RvT*.

In addition, these versions detail the material rewards that the young men are set to acquire from the daughters (who continued to think them their usual beaux, not just hobos), besides carnal gratification. Not only does the mylner's daughter give him the cake made of the filched flour (354) and the rustled horse (284) but also 30 shillings (353, to buy her a dress). Similarly, the Breton daughter gives the clerk those extra crêpes, plus a clean shirt of fine cloth (so he has literally had the shirt off the boyfriend's back). They go from destitution to restitution (and then some) in short order.

A climactic physical altercation ensues in almost all of these analogues. Because of the nature of his hard, manual labour, the millers would probably be favourites in these fights. Patterson points to the "physical strength of millers and their reputation for violence" (256/257), like Chaucer's wrestling millers Robyn and Symkyn in *The Canterbury Tales*. However, in *Le meunier*, "incredibly, the deacon wins with ease (A. 287-91)," Brown 227), and then they retrieve their wheat and mare and make their getaway. In *RvT*, Symkyn and Aleyn seem evenly matched (as are the *Een bispel* combatants), but the "milner was the more keene/ And gate the clarke downe" (391-392, just as Gombert initially had the upper hand until the second clerk joined the affray, 158-161, 173). In the miller plots, though, the second clerk does not join in; instead, in *RvT* and *Myl*, the decisive intervention comes from the millers' own wives, who end the fights by accidentally thwacking their husbands down with a stick (thinking they are hitting a clerk). The *RvT* clerks tarry to give Symkyn a gratuitous beating, then retrieve the cake baked of their flour (Malyne had told Aleyn where to find it during their loving *aube* parody, I.4234-38), and the *Le meunier* clerks also team up to dish out an extra beating to the meunier before they leave. Although the mylner escapes such a gratuitous beating as the brother-clerks immediately flee back to their poor mother with their horse, cake, and 30 shillings, he is doomed never to recover: "he ended his life full wretchedly/In paine, care, and misery" (485/486, similar to how the *Een bispel* husband "remained behind in great distress" 221).

In contrast, the Breton folktale features no final fisticuffs. Instead, as things get heated when the clerk tells the miller about having spent the night with his daughter, their raised voices awaken the wife, who tells them to pipe down (thinking it is the brothers squabbling). When the miller looks

across and sees her in bed with the ploughman, he is furious to realise that his wife has cuckolded him. This development is quite novel; in almost all analogues, the wife escapes discovery. Benson and Andersson claim that, “‘Le Meunier’ is the only version in which the host learns that not only his daughter but also his wife has been seduced” (85), but the Breton folktale should be added.

The miller does not then have much chance to assault the Breton brothers because they flee, buck naked (it says they were clutching some clothes in their arms, but it is unclear if they got away with the fine shirt in the end, and the conclusion never mentions their widowed mother again, or their horses). Instead, the Breton miller turns his fury on his wife and daughter by beating them. Later, though, he is forced to protect his good reputation by buying the brothers’ silence, about their cuckolding of him, with a bottle of wine.

Thus, the Breton folktale features several notable variations from *The Mylner* and *RvT*. *The Mylner* daughter seems more malign than Malyne (whose only ‘crime’ was to help her father steal the flour, 4246, which she presumably did under duress), but the Breton daughter appears to be the most cunning and conniving of all, especially in how she orchestrates the original theft of the flour and then disgorges her full-to-the-brim chamber pot over an unwanted nocturnal gentleman caller (so she thinks). Another twist is that she is the miller’s daughter by his first wife.

The wives in *Myl* and the Breton folktale are faceless and nondescript, essentially mere plot functionaries, compared to both the conniving wives in *meun* and *RvT* (who help their husbands execute the thefts) and the beautiful (and often intelligent) wives in the love-plot versions. The *RvT* and *Myl* wives unwittingly hit their husbands with a stick, and this action pre-emptively prevents their husbands from discovering where they have spent the night.

Conversely, the Breton miller does discover his wife’s infidelity, and then administers a fearsome beating to her and his daughter. In almost all versions, the young men escape with not only their stolen wheat (in the form of cakes in *RvT* and *Myl*, the original bag in *meun*, and all the crêpes the Bretons ate), but with something extra, too (30 shillings in *Myl*, the fine shirt [possibly] and bottle of wine in the Breton folktale, and the gratuitous beating of Symkyn in *RvT*, plus the knowledge that they may well have dashed his dreams of a lofty marriage for his daughter).

The question of whether Malyne was “seduced” (e.g. Craik 41, Brown 233, Cooper 117, Beidler 1994:243) or “raped” (Barnett 145, Weisl 120, Cannon 84) has been contested in recent years. For over 600 years, the scene was apparently unequivocally interpreted as a seduction—another example of how ingrained a biased reading can become. Burbridge (1971:34) seems to have been the first critic to identify it as “rape,” and that view has been in the ascendancy, even to the point of becoming the new orthodoxy. The lack of prior consent is disturbing, as Aleyn swoops so suddenly on the sleeping Malyne (I.4193-97), “thries” (4265) through the night. In the morning, though, in

the mock *aube*, they exchange tender words, indicating all is well. However, critical readers dismiss Malyne's words as simply Chaucer's ventriloquized voicing of the "classic male rape fantasy" (Breuer 4): "of feminine struggle metamorphosing into feminine pleasure" (Allman and Hanks 44/45). Thus, claims Barnett, readers must "construct the narrative that Chaucer has neglected" (154). Weisl concurs: "We are forced to read between the lines to see what is really done to these two women" (120). Breuer adds that "this is way bigger than Chaucer" (10). Rose thus places Chaucer in the "western antifeminist tradition" and objects to the "displacement of rape by white men" (25): "Reading rape as not-rape" (33). She points to this "bestial double rape of mother and daughter" (34) and explains the "complexity of reading against the grain of the narrative's interpretational clues" (53n.7). Thus, she stresses the necessity to "voice the silent female voice in the text and subvert literary misogyny" (52).

In the case of the *Myl* and Breton daughters, it is definitely rape. By introducing the additional character of the boyfriend, and his expected visit, these tales set up another use of the bed-trick (in addition to the later one played on the wives, as a result of the cradle trick). In each case, the women are deceived into believing they are sleeping with their regular partners. Just like clerks Aleyn and John in *RvT*, the *Myl* and Breton clerks et al. strike in silence and darkness (whereas the first clerk generally has to verbally woo the daughter to gain her consent in *Le Meunier* and the love-plot versions). As Barnett bemoans of *RvT*, though it could equally apply to the *Myl* and Breton versions, there is "no pre-copulatory behaviour, no textual evidence of [...] receptivity to the sexual advances" (153). Impersonating someone's lover through a "bed-trick" is rape (Cannon 71; Desens 17).⁷

Similarly, post-facto consent/content does not "undo" the original rape (Cannon 74) although such scenes are a feature of the tale type. Malyne murmurs warm, wistful words to Aleyn in the *RvT aube*. Similarly, the *Myl* describes the daughter's "sory songe" (458) as she "wished for the clarke" (459) and "his mery play" (461), hoping he would come back (463), even after she had discovered his true identity. This is like Boccaccio's *Decameron* 9.6, which concludes by describing how fondly the wife remembered Adriano's embraces, and the *Irregang* wife even acts on those feelings by wilfully continuing to cuckold her husband. Even during/after the initial act, it is a feature of the tale type that the wife seems happily surprised by the unwonted virility of her old husband: e.g. the *Een bis* wife exclaims that "your prick is greatly improved" (148), and *RvT* states that, "So myrie a fit ne hadde she nat ful yore" (I.4230). However, as with the *aube*, various scholars doubt the veracity of such comments (e.g. Barnett 149, Rose 40, Allman and Hanks 57, Weisl 120) as they may again just be a hijacking of female subjectivity through the ventriloquized voicing of the male rape fantasy. Such dubious "humour" does not appear in the *Myl* and Breton versions.

Reflecting on the narratives from these women's viewpoints makes the tales altogether less

amusing. The misogynistic claim that the women may 'deserve' these fates because of their earlier complicity in the flour theft does not hold water. Although *The Riverside Chaucer* states, "Symkyn so obviously deserves his punishment, and the two women so clearly enjoy the clerks' means of revenge that we cannot condemn Aleyn and John for what they do" (8), this retribution is so disproportionate to the original 'crime.' Besides, the revenge motive behind the young men's actions seems barely there compared to its prominence in *RvT*; rather, they are attracted to the daughters (especially in *Myl*).

However, the daughters' dislike of the young men is made clear through the rejection of the man's 'footsy' (*Myl* 183) and the throwing of the chamber pot (Breton) and renders the subsequent rapes all the more repugnant (as do the daughters' kindness and devotion to their true beaux [the crêpes and fine shirt etc.], which evoke the warm feelings that flower between the daughters and their lovers in the "love-plot" analogues, especially *Gom*, *Decam* 9.6 and *Irregang*). The Breton miller's savage beating of his wife and daughter at the end is also highly disturbing, both in itself and in its unfairness: neither woman was consciously or consensually unfaithful. This beating seems to have been prefigured by his earlier thwacking of the flour sack, the sounds of which the brothers had mistaken for him beating his wife, indicating that they had recognised his abhorrent propensity for domestic violence. The Breton miller thus seems akin to Symkyn (I.3958-61) in the jealous ferocity of his attempts to control his wife and daughter's sexuality.

Turning next to the Danish folktale, "Mølleturen," printed in Stehmann (108-110) and posited diagrammatically (112) as being at least partly derivative of both some tale similar to the Breton one, plus (more tentatively) *The Mylner* (Stehmann's Danish source has a date of 1888, 108n.1). In the Danish version, though, the clerks are not specified as brothers and are not sent to the mill by their widowed mother. Instead, maybe more like in *RvT* (with the college manciple dispatching the clerks), a Zealand priest sends two clerks (priests-in-training) to the mill (four miles away) with a huge corn consignment, a veritable cornucopia of four tons, on a wagon.

In this version, the miller's reputation for thievery is not mentioned, but he soon dupes them (unassisted by any other family member, unlike the *meun*, *RvT*, *Myl*, and Breton versions). He is the sole locus of evil and villain of the piece. He immediately invites the frozen clerks in for coffee⁸, and they gladly accept, negligently leaving the wagon unattended. The miller seizes the opportunity to steal the corn by releasing the horses. As in *RvT* and Breton versions, the horses hightail it away, whereas in *meun* and *Myl* they are cached on the property; however, like *meun*, but unlike the other three versions (i.e. *RvT*, *Myl*, and Breton), the corn is never milled. This means that there are no scenes of the clerks scrutinising the milling machinery, or of the miller thwacking any sealed bag of flour. When the clerks return, they see their wagon empty, and the miller brazenly lies by telling them

that the thief has already left: explicitly blaming a fictitious third party as the thief seems a novel detail that further shows how nefarious this particular miller is.

Another novel detail is that the clerks then decide to buy a ton of corn from the miller for 17 *rigsdalers* as they are afraid to go home empty-handed. The fact they have such ready cash on them makes them like the *RvT* clerks, with “silver, redy to spende” (I.4135): they seem to have pots of money, whereas the *meun* and *Myl* clerks do not have a (chamber) pot to micturate in. The *meun* clerks were oppressed by hunger (A27) and even considered begging (A14), while the *Myl* clerks have to borrow a horse and go to the mill when their mother says she can no longer feed them (31). Similarly, the *bis* clerks “had lost all their money” (11) and so asked Gobert to lodge them “for pity’s sake” (15).

At the Danish dinner that evening, a tailor named Schneider is present (several of the characters are named). He is the daughter’s lover (cf. Jankyn in *Myl* and the Breton *Natursektmeister*), and his presence at the table indicates he has the miller’s approval. One of the clerks notices the intimacy between Schneider and the daughter and hides near them to eavesdrop on their sweet nothings; he hears the daughter inviting Schneider to her room later that night.

Later, everyone goes to bed, with the miller putting the clerks in his usual bed (he and his wife usually sleep in separate beds, but they seem to bunk down together this time). The clerk who had overheard Schneider’s scheme then gets up and knocks on the daughter’s door (as in the *Myl* and Breton versions, she has her own room: a small storeroom). Mistaking him for Schneider, she welcomes him (no sexual activity is explicitly described, but probably it can be inferred?).

Soon after, the *bona fide* Schneider arrives and knocks on the door. Whereas the Breton daughter immediately assumed the knocker was the clerk and reached for the chamber pot, the Danish daughter seems slower on the uptake. Thus, the clerk takes the initiative (as well as the aforementioned risk of speaking) by suggesting the visitor is probably the clerk who was listening to them talk over supper. Then, again similar to Nicholas’s assault on Absolon in *The Miller’s Tale*, the clerk goes to the window and punches Schneider (it is rough justice, but maybe better than the chamber pot?). He beats a hasty retreat; he is not a particularly brave little tailor.

The clerk also tries to induce a confession from the daughter by claiming her father’s treatment of the clerks was dishonourable. Although his wisdom in speaking may be questionable, it is worth noting that this clerk seems a little bit more perspicacious and proactive than his Breton and *Mylner* counterparts. Although they also display some cleverness (the Breton clerk in circumspectly keeping silent, and the *Myl* clerk in staying in character [i.e. Jankyn] the next morning by saying, “I must to a faire gone” [335] as Jankyn had to do), they do not deploy the same level of strategy to find out about the daughter’s planned tryst with her lover, or to induce a confession about the corn theft

(they are revealed more through pure luck), or to ward off her real lover when he comes. The Danish daughter duly confesses that her father has indeed stolen corn many times, just as he had done that day (although the *Myl* daughter blurts out a boastful confession, the cleverer Breton girl never does).

The clerk displays his keen intellect in their next exchange, too, by taking his impersonation of tailor Schneider even further for his own enrichment. When she asks why her "little Hans" is so quiet and depressed, he replies that he has made clothes for four (a recurring number in this version) clients but has not yet been paid, leaving him a cash-flow problem. He claims to need 50 *rigsdalers*, so she gives it to him (this seems analogous to the 30 shillings the *Myl* daughter gave the clerk, but he never solicited that money; she just gave it to him to buy a dress for her).

Meanwhile, the second clerk gets up to look for his friend (as in the Breton tale, but unlike *meun*, *RvT* and *Myl*, the first young man does not tell his comrade where he is going in the night), and this noise gets the miller up to investigate. Finding nothing amiss, he comes back and climbs into his normal bed (recently vacated by the second clerk) out of force of habit. This scene of having two characters up wandering at the same time of night is similar to *Decam* 9:6, in which Adriano innocently moves the cradle out of his way when he gets up to pee, thus inadvertently causing the wife (who was also up investigating a noise) to come to his bed. Thus, this could represent another crossover in detail between stories on separate strands of the diagrams. However, the Danish folktale features no baby or cradle trick and thus no congress of the second clerk with the miller's wife (as also noted by Stehmann 108 and Raith 131). She just stays alone in her bed all night.

Soon after, the first clerk returns to his original bed, where the miller now is. This is another odd commonality between the Danish folktale and some of the "love-plot" tales on the opposite strand in the diagrams: in this case, *Gombert* (and *bis*). These are the only tales in which it is the host (not his wife) who gets up in the middle of the night and then, in the darkness, mistakenly climbs into the bed recently vacated by the second clerk (Raith notes this and calls it a "congruency, which cannot be by accident" 129). Rychner rues it "une petite erreur" (108) that it is Gombert who gets up in the night, not the wife, as in other versions. When Gombert goes out for a "[s]tark naked" midnight "piss" (83), the clerk with eyes for his sleeping wife moves the cradle to beside his own bed. Gombert returns, gets his bearings by groping for the cradle in the dark, then settles into the wrong bed (assuming his wife has also got up to "piss and do her business," 107), leaving the clerk free to jump into Gombert's vacated bed with his wife (in *Gom*, the clerk prudently waits for Gombert to come back, get diverted by the cradle into the different bed, and fall asleep before he enters the wife's bed; however, in *bis*, the clerk already gets in and starts humping the wife *before* her husband has even finished his "piss" 111).

However, the key plot twist of the cradle trick is that it should be operant *twice*: first diverting

the baby's mother (or maybe father) into a different bed as intended, but then also diverting the returning first clerk into the bed sans cradle beside it (which he assumes must be his original bed, only to find the husband lying there). Strangely, in *Gom* and *bis* the returning first clerk is not redirected away by seeing the cradle (it is not even mentioned at this point), so he gets into the bed with the cradle beside it (where Gombert is lying). Accordingly, Hertog labels this scene a "mess" (79).

A similar "mess" unfolds in the Danish folktale (although there is no cradle). The second clerk and the miller are moving around in the darkness at the same time, before the miller (mistakenly) alights at his usual bed out of force of habit (i.e. the bed he was supposed to be letting the clerks sleep in). Returning from the daughter's room, the first clerk then also gets into that bed (sparking the confrontation scene), but where did the second clerk go? He appears to be up and about for too long, rather confused and in limbo, a bit like a spare thingy at a wedding (because no scene of him being in the wife's bed is described). As noted above, the staging of the cradle trick also appears questionable in the Breton and *RvT* versions, whereas it appears to be best executed in *meun* and *Myl*.

A further curious correlation between *Gombert* and this Danish folktale is when Gombert and the Danish miller are joined in bed by the first clerk returning (from the daughter's bed). The clerk is getting back into his original bed (despite the cradle now set beside it in *Gom*), so he assumes his bedfellow will be his chum, the second clerk. Accordingly, in excited anticipation of the exchange of banter, he unceremoniously elbows his bedfellow awake. These are the only two versions when the elbow is specified as being used to awaken the host (no elbow is used in *bis*, either).

A similar parallel, again between tales supposedly on opposite lines on the diagrams of "love-plot" and "miller-plot" type tales, is that the young men of both *Irregang* (574) and the Breton folktale awaken the hosts by shaking them. After the shaking, the *Irregang* man then "poked him in the ribs" (575), which is a technique also utilised in *Gom-bis* (prior to the elbow in *Gom*). In *RvT*, Aleyn also uses violence by grabbing Symkyn "by the nekke" (I.4261).

As for the first Danish clerk, he tells his bedfellow (the miller) what he has found out that night about the theft of their corn (from the daughter, although, unlike almost all of the other analogues, he reports no sexual shenanigans, so this is a 'clean' version of the tale). The miller still springs up angrily, wanting to punch the clerk, but (as in *meun*, but unlike *Myl*) the clerk is surprisingly stronger than the miller and sends him sprawling on top of his wife. The wife wakes up and grabs a stick and uses it to hit the ruffian who fell on her (i.e. her husband. Cf. the similar scene in *RvT* and *Myl*). Unlike the *meun* and *RvT* clerks, who linger to beat the miller gratuitously, the Danish clerk graciously decides that the miller has had enough punishment and leaves it at that (the second clerk joins him soon after, so he never participates in the fisticuffs—the same as in *Myl*).

However, the Danish miller still has something to say: he threatens to file charges against the

clerks because of their temerity in accusing him of theft. The daughter is summoned as a witness, but her honest testimony forces the miller to admit the theft and let the men go. He also has to buy their silence: 68 *rigsdalers* (the value of the corn he stole). This scene of buying the young men's silence is similar to the Breton folktale (in which the miller gives them a bottle of wine), but the price is steeper here. Indeed, the Danish clerks have made a tidy profit because they also inveigled 50 *rigsdalers* out of the daughter. The clerks returned joyously to their cloister (although, strangely, as in the Breton version, there is no more mention of their horses).

The distinctive features of this Danish folktale, then, seem to be that: the clerks are not brothers; the miller conducts the theft single-handedly (pilfering their wagonload of wheat without milling it, so no beating of any sealed sack is necessary); the first clerk displays superior initiative, strategy, and cunning to his analogue counterparts in finding out about the daughter's assignation, beating up her beau when he arrives, and then eliciting not only a confession from her about her father's thieving but also a tidy sum of cash; no cradle trick occurs, so the second clerk never beds the wife (it is not even clear that the first clerk bedded the daughter); the wife accidentally hits her husband with a stick in the fight scene (an incident only also found in *RvT* and *Myl*); and, the miller threatens legal proceedings but then has to admit his own guilt and buy off the clerks. The fact that the host (not the wife) gets up and is then elbowed awake by the clerk may suggest some kinship of this folktale with *Gom* (Raith 129, Stehmann 111), and the detail of having two characters simultaneously walking around in the dark is particular to only this Danish version and *Decameron* 9.6, which, like *Gom*, is posited on the distant, antithetical "love-plot" strand in the diagrams.

The final folktale is the Irish one adduced by Raith, collected from an oral source in Irish (Gaelic) and translated into English by J. H. Lloyd in a volume dated 1899. The title is "Parrach Mha'1 Bhrighde's a mhac" ("Patrick Mac Bride and his son"). At first glance, this tale seems to have little in common with *RvT* and the other analogues in that it lacks some key defining elements: the cradle trick (ATU 1363) and the miller plot (no miller appears). However, broader similarities exist, and Raith argues that certain features make this folktale of particular interest in considering the matrix of tales.

Instead of being brothers (as in *Myl* and Breton versions), a different family dynamic between the protagonists is shown: father and son. The father is somewhat-stereotypically named "Pat." They are farmers who have two cows stolen. Raith emphasises the fact they are farmers because he is adamant that, originally, in the miller-plot tales, the protagonists robbed by the miller were farmers (131). He contends that the cradle-trick/love-plot stories originally featured clerks, so when the thieving-miller and cradle-trick narratives came to be conflated, clerks displaced farmers. He describes this displacement as an intriguing cultural-historical change. It shows in microcosm the

intermingling and cross-pollination that can take place between narratives. The Breton version even combines both patterns: one brother is a cleric, and the other is a “laboureur” (ploughman/farmer).

In similarly rustic vein, there are hints in some “love-plot” analogues that the character who puts the visitors up for the night was also a farmer. Gombert is introduced as a “peasant” (“un vilain” 5), and he provides his guests with simple country fare, “as usual on a farm” (33). Similarly, the Mac Brides’ adversary is another country fellow. He is not described as a farmer, but neither is he described as having any other job, and the remote location of his house, and his aptitude in rustling and butchering cattle, may suggest he was a fellow farmer (albeit a felonious farmer, as Raith suggests 131). Moreover, Grace supplies detail on “Irish Analogues to the Reeve’s Tale” (including “Patrick Mac Bride and his son”) and states that, “The most obvious difference [from *RvT*] is that of the villain in Irish tradition being a Farmer rather than a Miller” (45).⁹

The Mac Brides’ cows are stolen from their farm, so they spend all day out looking for them without success (the bovine replaces both the equine and the wheat in this version), and then have to be lodged at another house for the night. They are given supper, including a “sufficiency of meat” (the provenance of which will soon become apparent). After eating, the son goes outside and overhears the daughter secretly arranging for her beau to visit her room later that night (as in the Breton tale, but unlike the Danish and *Myl*, her dad seems not to know too much about her lover?).

Pat and his son are given a bed to share in the same room as the daughters’ parents, with the daughter in a separate room (as in *Myl*, Breton and Danish versions). She sleeps in the kitchen. Knowing she is expecting her beau, Pat’s son steals over to the kitchen and hijacks the tryst; he is in like Flynn with the sweet Colleen (although no intimacy is explicitly described, as in the Danish folktale, perhaps it can be inferred?).

Without needing any of the Danish clerk’s finesse to wheedle a confession of the theft out of the daughter, the Irish girl just blurts out the story of how it was her father and brother who rustled the cattle of the men staying with them (having the brother involved in the theft recalls *Myl*, in which the brother stole the students’ horse). Unlike the Breton tale, the daughter was not involved in the theft but seems happy to discuss it: how one cow had been killed and (partly) eaten that night, while the other one is outside in the wood. Now, Pat’s son has serious beef with his host.

Meanwhile, the old woman gets up in the night (this is the only tale that describes the wife as being “old,” possibly with unattractive connotations, especially compared to the “beautiful” wives of the love-plot tales. Symkyn’s wife is also described unattractively). In the dark, she proves unable to navigate her way back to the bed she shares with her husband, but finds a bed with only one person in it and deduces that it must be her bed; however, unbeknownst to her, she gets into bed with Pat (whose son is still away with the daughter). This is how the need for any cradle trick is obviated: the logic of

the headcount in beds is applied instead by characters to decide which bed to enter (also, it may be odd for an "old woman" to have a cradle when her son and daughter seem quite grown up).

Then, Pat's son returns and applies the same logic: he seeks the bed with only one person in it. He does so and, assuming his bedfellow to be his father (when, in fact, it is the "old man of the house"), the son relates how he has discovered who stole their cows as he "was with the daughter of the house all night," thus incensing the girl's father. A donnybrook ensues, but ends in a 'no decision.'

The old woman awakes and chides the two men for fighting, thinking it is the two guests (a common misunderstanding in the analogues). As in the Breton tale, the husband breaks from the fight when he realises his wife is over in the other bed with another man. They quarrel, but the husband need not worry unduly because dozy old Pat has been asleep the whole time (as in the Danish tale, the wife remains unmolested. The *senex* is *sans sex* here; he stood pat). Pat's son tells him to get up then informs him what their host has done with their cows. Pat vows to have the host and his son arrested. As in the Danish tale, legal action is threatened (though this time by the guests not the host), and this prospect alarms the thief, prompting him to reimburse their losses. They receive their cow back from the wood, plus the value of the butchered bovine, and go home.

To recapitulate the main features of this Irish tale, the most striking point is that the protagonists are farmers, and father and son. Their cows (not horses) are stolen; no mill or milling is involved. The son finds out about the theft from the daughter (she mistakes him for her beau). As in the Danish tale, there is no baby or cradle trick and no congress with the wife (and maybe not with the daughter, either?). The beef-thief starts fighting the son, but their altercation is aborted, and the protagonists receive their due compensation. The tale ends with a line characteristic of folktales: "That is my story, and may there be a straw in your mouth, and a long yellow buttercake in mine."

Thus, these three folktales seem to join *The Mylner* in forming a distinct subset of narratives among the "miller-plot" strand of tales. As Stehmann identified (112), the motif is that the daughter already has a beau and arranges an assignation with him, only for the young man robbed by her father to hijack the tryst by going to her room first and impersonating her beau. This additional bed-trick constitutes a rape because the daughter sleeps with him under false pretences, believing him to be her usual swain.

This is a troubling variation. The daughters in all other analogues in the matrix do not (apparently) already have other lovers and thus give their consent to the young men who come to their beds, especially in the 'love-plot' versions. The 'miller-plot' versions are more problematic. In *meun*, the clerk dupes the daughter in the trunk into consenting by giving her a supposedly-magic golden ring that will restore a woman's virginity "no matter [...] how often she has whored about" (A217-218—a kind of a "morning-after-ring" Hertog 79). In *RvT*, Malyne gives no clear consent, so this

scene can definitely be read as rape, and it is unequivocally rape in the versions in which the daughter already has a lover but is then fooled by the clerk's impersonation of that lover through the bed-trick.

Thus, other than in this subgenre of tales, in no other source or analogue of *The Reeve's Tale* is the conjoining of the first clerk and the daughter a rape. If Chaucer did intend that scene of Aleyn and Malyne to be recognised as rape, could it be possible that he took the germ of that new idea from another story that he knew that was similar to those comprising this subgenre? Or was it Chaucer's original idea?

In these versions in the subgenre, the real beau sometimes seems to have the father's approval (*Myl*, Danish) but sometimes apparently not (Breton, Irish). As Stehmann stated, this is the subgenre's defining feature: the daughter already has an inamorato, and they have an assignation planned for that night (sometimes lover-boy never comes [*Myl*, Irish] but sometimes he does, with comedic consequences [Breton, Danish]). These assignations are made easier by the fact that the daughters of these four versions in the subgroup each have their own room.

In addition, there are some other distinct features of this subgenre that may be helpful in trying to piece together what a possible older version of the story (with which Chaucer might have been familiar) might have looked like. The two visitors are usually blood relations (brothers in *Myl* and Breton, and father and son in Irish, but apparently not related in the Danish).

Cooper identified the incident of the clerks' sealing their sacks to prevent the miller stealing their flour when they went out (and then the miller thwacking the sacks to get the flour without breaking the seal) as being characteristic of these "analogues now known in Breton or Danish" (426); however, in addition to *Myl*, this scene plays out only in the Breton version (so not in Danish; at least, not in this version: "Mølleturen"). Even so, this sack-thwacking scene remains a distinctive detail, different from the *Reeve's Tale*, which similarly conveys the clerks' wariness about the miller's reputation for thieving.

There are varying levels of the daughters' complicity in their fathers' thefts (the Breton daughter taking the cake, followed by the *Myl* daughter: the two versions that feature the beating of the sealed sack to extract flour. The Breton daughter devised that plan). Similarly, varying degrees of cleverness and craftiness are displayed by the visitors who sleep with the daughters (the Danish clerk proves especially cunning to deal with a miller who is especially malevolent).

The cradle trick is executed by the second young man in *Myl* and the Breton tale (albeit with the same slightly-strange timing as in *RvT* in the latter) to lure the wife into his bed, but there is no cradle trick in the Danish or Irish tales, and neither do those two tales feature any congress with the wife (it is also not specified that any carnality occurred between the first clerk and the daughter in those two tales). Indeed, any carnality is described in much more restrained and vague terms in all

four versions (especially the Danish and Irish ones), so this seems to be another unifying feature that distinguishes them from *RvT* and *meun* (and *Gom-bis*).

These tales almost all feature a physical altercation at the end, usually between the thief and his daughter's violator. The *Myl* and Danish versions are like *RvT* in that this fight is ended by the wife's inadvertent flooring of her husband with a stick. The Breton version differs in that the host hits not the young man but his wife and daughter (this is apparently the only version, besides *meun*, in which the host realises that his wife has cuckolded him).

These four tales in the subgenre conclude with the protagonists receiving recompense for their stolen goods. Whereas in the Irish analogue the visitors are satisfied just to get their stolen stuff back (i.e. their livestock or equivalent value) and thus break even and call it quits, the *Myl*, Breton, and Danish protagonists profit beyond that. Besides the crêpes they ate made of their stolen flour, the Breton brothers also receive a fine shirt (though it is unclear if they were finally able to take it with them as they had to flee, naked, so suddenly) and a bottle of wine later (plus their carnal pleasures). Meanwhile, the Danish clerks turned a tidy profit, thanks to the miller having to pay them 68 *rigsdalers* (the value of the corn he stole) and the daughter giving him 50 *rigsdalers* when she believed him to be her beau, Schneider. Similarly, in addition to retrieving the cake made of their stolen flour, the *Myl* clerk received 30 shillings from the daughter when she believed him to be her beau, Jankyn.

This notion of getting extra recompense might have appealed to Chaucer in composing *The Reeve's Tale* because the Reeve vows to use the tale to "quite" (I.3916) the pilgrim Miller through the humiliation of miller Symkyn (who is so easily identifiable as the pilgrim Miller's doppelgänger). Thus, the clerks' revenge on Symkyn and his family seems excessively vindictive: in addition to retrieving their stolen horse and the cake of their stolen flour, they destroy the lofty marriage aspirations he has for his daughter and tarry to beat him up for longer than was necessary.

The above points are intended as a summary of some of the distinct features of this subgenre of four analogues (*Myl*, Breton, Danish, and Irish) to *The Reeve's Tale*, both to help piece together what an older version of this tale type might look like and to reflect on how they might relate to *The Reeve's Tale*. Admittedly, it is likely that some of the other details in these tales in the subgenre come from *RvT* (especially the scenes of the clerks scrutinising the milling process from above and below, in *Myl* and Breton, and the wife hitting the miller with a stick in *Myl* and Danish); however, could Chaucer have also known an older version of a tale of this subgenre (probably an oral folktale)?

In his study of "Irish Analogues to the Reeve's Tale" (including "Parrach Mha'l Bhrighde's a mhac"), Grace concludes that they "include many Medieval motifs and ideas which are also present in *The Reeve's Tale*. This evidence taken in conjunction with the occurrence of 4 versions in Irish oral

tradition which are closely analogous to the *Reeve's Tale* but definitely are not derived from it, suggest that it is indeed possible for Chaucer to have heard the tale, then found in English folk tradition, and to have then used it as the basis of the *Reeve's Tale*" (46). "The basis" might be overstating the case, but perhaps such tales were indeed in circulation in Chaucer's time, and he could have been aware of them as he was in the process of composing *The Canterbury Tales*. Thus, contends Hines, "it is probable that the *Mery Jest* [=MyI] gives us a delayed glimpse of what a Middle English source for Chaucer's *Reeve's Tale* may have looked like" (206). Hines also even suggests that, "It is conceivable that Chaucer changed the name [Abington] from his source to the similar Trumpington" (206), near which Symkyn's mill is located, and Skeat claimed that, because Abington is seven miles from Cambridge, "In a way, it suits better; Trumpington is too near Cambridge for the clerks to have been benighted there" (III.397.2).

Even if Hines and Grace go too far in stating the importance/influence of such a putative old folktale of this subgenre, the possibility of the existence of such a version (or versions) seems undeniable. If Chaucer did know such a version, it would not detract at all from the appreciation of his originality in crafting his tales from the more established sources and analogues and from the creative workings of his own imagination. Instead, such versions would only add depth and complexity to the intertextual matrix that inspired Chaucer's novel, transformational composition.

The three folktales are geographically remote from each other (Breton, Danish, and Irish, plus the English *Mylner*), with variation in content, too, indicating that they might well have evolved in these different ways (and places) from underlying, antecedent folktales. Similarly, the more recognised "literary" ATU 1363 tales are geographically spaced out across Europe, so what are the influences and connections between them? This study has exhumed and examined these long-lost continental narratives as intertexts to try to provide some clues.

Through comparative analysis, this study has identified various curious correlations in detail between the three folktales (plus *The Mylner*) and the more renowned ATU 1363 tales, including those "love-plot" analogues that the diagrams posit as polar opposites. However, these intertextual intersections indicate that the tales are not necessarily poles apart at all, or that 'never the twain shall meet.' Rather, such details and motifs from older folktale versions of this subgenre of tales (i.e. Stehmann's "MOTIV II^a") might have connected and cross-pollinated the literary versions as crucial conduits and mediating intertexts. This is why it may be better to reconceptualise and reconsider the relationships between tales more broadly, as an intertextual matrix: The Matrix Reeve-Loaded.

Notes

¹ As noted in Part I, there are two extant versions of *Le meunier et les .ii. clers*, A and B, neither of which can

be *RvT*'s exclusive source.

² Apparently, only the Irish analogue ("Patrick Mac Bride and his Son") has an English translation in print (see Lloyd). The Breton-language analogue was translated into French (see Luzel), and the Danish one ("Mølleturen") was translated into German (see Stehmann 108-110). Thus, I am indebted to the excellent foreign-exchange students at the University of Fukui for translating those Breton-French and Danish-German ones into English (the latter was translated by Jasmin Simoner, and the former by man-of-Nantes Mathieu Martin).

³ All quotations from Chaucer's *Canterbury Tales* are from *The Riverside Chaucer*. All quotations from *The Mylner of Abyngton* are from the text printed in Raith (147-160). The quotations/references from *Le meunier et les .ii. clers*, *Een bispel van .ij. clerken*, and *Decameron* 9.6 are from Correale and Hamel (eds.), and quotations/references from *Gombert et les .ii. clers* and the other analogues mentioned are from Benson and Andersson (eds.).

⁴ Darjes and Rendall refer to the "Jankyns of popular tradition" (426), such as the 15th-century poem (anon.) "Jolly Jankyn," in which the titillated titular playboy cleric impregnates a girl named Alison (shades of *The Wife of Bath's Prologue*?), after wooing her by playing 'footsy' (as the *Myl*, *Le meunier B*, and *Irregang* clerks all also try to do). *The Riverside Chaucer* confirms that "Jankin" was a "derisive name for a priest" (1319). Another example is the 15th-century Chaucerian apocrypha (dated c. 1425, Darjes and Rendall 416), the Prologue of *The Tale of Beryn* (anon., which appears with genuine Chaucerian works in both the Northumberland MS 455, dated 1450-75, and Urry's 1721 *The Works of Geoffrey Chaucer*). In it, the pilgrims are imagined arriving in Canterbury, where the Pardoner wants to tap tapster Kit, especially after she tells him she sleeps with her kit off, lying by "myselff al nyght al naked" (line 28. All quotations from the Prologue are from Bowers [ed.], 60-79) since her lover, "Jenkyn Harpour" (30), died. Wise to him, Kit arranges a nocturnal honey-trap assignation with him while her real lover is in bed with her, leading to the Pardoner's humiliation as, in the battle of paramour vs. pardoner, he gets hit with his own staff (525-27) and has to sleep in the litter of a ferocious Welsh dog (633, 646). Darjes and Rendall note that this "bears some resemblance to the struggle [...] in the conclusion of the *Reeve Tale*" (430); it is also like Stehmann's "MOTIV IInd" subgenre of tales because the midnight approach of a presumed love rival is also violently/scatologically repulsed in some versions (including this Breton one). Kit had earlier called the Pardoner "Jenken" (62, 342) while buttering him up, and noting what playboys some clerics are, rather earmarking him as a somewhat-stereotypical stooge.

⁵ A similar scene unfolds in the next Breton chanson in Luzel's collection, "Le meunier et sa servant." The plot is similar to Enguerrand d'Oisy's 13th-century *Roman du Meunier d'Arleux* as a horny miller (Robert) wants to bed his pretty young maidservant (Margot, and will pay for it), but she tells his wife, and they plan to play the bed-trick on him by putting the wife in bed instead. The wife worries he "will recognise my voice," but Margot assures her she will not have to breathe a word as he will be gabbing away ecstatically the whole time. That is exactly what occurs: he keeps banging on about how much joy Margot's beauty brings him (as his *fille de joie*), and how he would like to bury his wife tomorrow, only for the wife to reveal her true identity and considerably dampen his ardour.

⁶ With his urolagnia fetish, renowned sexologist Havelock Ellis might have enjoyed this golden-brown shower

(376; it might have floated his boat), but water-sports are by no means everyone's cup of tea. The daughter's actions in being a 'pan tipper' emulate those of Xanthippe, who notoriously emptied a chamber pot over her husband Socrates ("How Xantippa cast pisse upon his heed", as the Wife of Bath describes it, III.279).

⁷ Desens notes that some critics have seen the bed-trick as a "plot convention that violates psychological realism" (12) because surely, in reality, the victim would realise that this was not their regular partner: the body shape, the smell, the grunts/moans/moves etc.? Some willing suspension of disbelief seems required that the victim could really not be too cocksure. As Hazlitt put it: "we must not enter too nicely into the question of female discernment, where the two scholars are accepted in lieu of Jenkyn and the miller" (464). However, Desens is also adamant that people should no longer laugh it off like that and instead recognise "rape as lying at the heart of the bed-trick" (142).

⁸ Coffee drinking was not widespread in medieval Europe, so this detail is a giveaway to this folktale's later provenance although it could also be a detail interpolated later to replace another beverage in an older version of the story (e.g. "Boiled milk" in *Gom* 32 or "porridge" in *bis* 31). As the online *Britannica* confirms, "Coffee was introduced into one European country after another throughout the 16th and 17th centuries" (<https://www.britannica.com/topic/coffee>, retrieved 24/09/2022). Likewise, the specified currency, the *rigsdaler*, sometimes anglicised to the rix-dollar, a small silver coin, also dates from a similar period. As de Laine states, the "Daler or 'rigsdaler' is a Danish coin that was minted between 1537 and 1875, when kroner and øre replaced the old coinage." These details represent glaring anachronisms if this Danish folktale purports to be medieval, but, as stated above, it could have been preceded by an earlier folktale with similar content.

⁹ Grace suggests a historical reason why Irish analogues tend to feature farmers rather than millers: "after the Famine, and particularly during the last quarter of the 19th Century, the local mills started to succumb to the decline in tillage farming and the competition from cheaper American flour" (45). Although this reasoning may represent as glaring an anachronism as the coffee and *rigsdaler* details in the Danish version, Grace suggests that, "The adaptability of the story, it could be argued, shows how it is possible for it to have been known in the Medieval period" (45).

Works Cited

- Allman, W. W., and D. Thomas Hanks, Jr. "Rough Love: Notes toward an Erotics of the Canterbury Tales." *Chaucer Review* 38.1 (2003): 36-65.
- Amodio, Mark C. *Writing the Oral Tradition: Oral Poetics and Literate Culture in Medieval England*. Notre Dame, IND: U of Notre Dame P, 1994.
- Barnett, Pamela E. "'And shortly for to seyn they were aton': Chaucer's Deflection of Rape in the Reeve's and Franklin's Tales." *Women's Studies* 22 (1993): 145-162.
- Beidler, Peter G. "Chaucer's *Reeve's Tale*, Boccaccio's *Decameron*, IX, 6, and Two 'Soft' German Analogues." *Chaucer Review* 28 (1994): 237-251.
- . "The Reeve's Tale." *Sources and Analogues of the Canterbury Tales*. [New ed.]. Vol. 1 of 2. Eds. Robert M.

- Correale and Mary Hamel. Cambridge: D. S. Brewer, 2002-2005. 23-74.
- . "The *Reeve's Tale* and its Flemish Analogue." *Chaucer Review* 26 (1992): 283-292.
- Benson, Larry D., and Theodore M. Andersson, eds. *The Literary Content of Chaucer's Fabliaux: Texts and Translations*. New York: Bobbs-Merrill, 1971.
- Bowers, John M., ed. *The Canterbury Tales: Fifteenth-Century Continuations and Additions*. Kalamazoo, Mich.: Published for TEAMS (The Consortium for the Teaching of the Middle Ages) in Association with the University of Rochester by Medieval Institute Publications, Western Michigan University, 1992.
- Breuer, Heidi. "Being Intolerant: Rape is Not Seduction (in 'The Reeve's Tale' or Anywhere Else)." *The Canterbury Tales Revisited: 21st-Century Interpretations*. Ed. Kathleen A. Bishop. Newcastle: Cambridge Scholars, 2008. 1-15.
- Brown, Peter. "The Containment of Symkyn: The Function of Space in the 'Reeve's Tale.'" *Chaucer Review* 14 (1980): 225-236.
- Burbridge, Roger T. "Chaucer's *Reeve's Tale* and the Fabliau 'Le Meunier et les .II. Clercs.'" *Annuaire Mediaevale* 12 (1971): 30-37.
- Cannon, Christopher. "Chaucer and Rape." *SAC* 22 (2000): 67-92.
- Chaucer, Geoffrey. *The Riverside Chaucer*. Ed. Larry D. Benson. Boston: Houghton Mifflin, 1987.
- Cooper, Helen. *Oxford Guides to 'The Canterbury Tales'*. New York: Oxford UP, 1989.
- Craik, T. W. *The Comic Tales of Chaucer*. London: Methuen, 1964.
- Darjes, Bradley, and Thomas Rendall. "A Fabliau in the *Prologue to the Tale of Beryn*." *Medieval Studies* 47 (1985): 416-31.
- de Laine, Michael. *The Copenhagen Post*. Aug. 23, 2016. (Retrieved 24/09/2022 from <https://cphpost.dk/?p=67664>).
- Desens, Marliss C. *The Bed-trick in English Renaissance Drama: Explorations in Gender, Sexuality, and Power*. Newark: U of Delaware P, 1994.
- Ellis, Havelock. *Studies in the Psychology of Sex*. Vol. 3 of 7. New York: Random House, 1936.
- Grace, Robert. "Irish Analogues to the Reeve's Tale." *Sinsear* 7 (1993): 41-48.
- Gray, Douglas. *Later Medieval English Literature*. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Hazlitt, W. Carew, ed. *Tales and Legends of National Origin: or Widely Current in England from Early Times*. London: Swan Sonnenschein, 1892.
- Heist, William W. "Folklore Study and Chaucer's Fabliau-Like Tales." *Publications of the Michigan Academy of Sciences, Arts and Letters* 36 (1952): 251-258.
- Hertog, Erik. *Chaucer's Fabliaux as Analogues*. Leuven, Belgium: Leuven UP, 1991.
- Hines, John. *The Fabliau in English*. London: Longman, 1993.
- Jones, D. "The Matrix Reeve-Loaded I: Dismantling Biases and Evaluating Diagrams of Relationships between Chaucer's *Reeve's Tale*, *The Mylner of Abyngton*, and Other Cradle-Trick Stories." *Memoirs of the Faculty of*

- Education, Humanities and Social Sciences, University of Fukui* 1 (2016): 37-56.
- Lloyd, J. H. "Parrach Mha'l Bhrighde's a mhac" (Patrick Mac Bride and his Son). *Zeitschrift Fur Celtische Philologie* 2 (1899): 156-159. <http://www.ucc.ie/celt/published/T307004/index.html>
- Luzel, Francois-Marie, ed. *Soniou Breiz-Izel: Chansons Populaires de la Basse-Bretagne*. Recueillies et traduites par F-M Luzel avec la collaboration de A. Le Braz. Paris: Emile Bouillon, Editeur, 1890. Section IV—Chansons Humoristiques et Satiriques [Humorous and Satirical Songs]. 203-211. https://fr.wikisource.org/wiki/Chansons_populaires_de_la_Basse-Bretagne/Le_clerc_et_son_fr%C3%A8re_laboureur
- Machan, Tim W. *English in the Middle Ages*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Patterson, Lee. *Chaucer and the Subject of History*. Madison: U of Wisconsin P, 1991.
- Raith, Josef. *Die Historie von den vier Kaufleuten (Frederyke of Jennen) Die Geschichte von der vertauschten Wiege (The Mylner of Abyngton)*. Leipzig: R. Noske, 1936.
- Rose, Christine M. "Reading Chaucer Reading Rape." Eds. Elizabeth Robertson and Christine M. Rose. *Representing Rape in Medieval and Early Modern Literature*. New York: Palgrave, 2001. 21-60.
- Rychner, Jean. *Contribution à l'étude des fabliaux: variantes, remaniements, dégradations*. 2 v. Nuechâtel: Faculté des lettres, 1960.
- Skeat, Walter W., ed. *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*. 7 vols. Oxford: Clarendon, 1884.
- Spurgeon, Caroline F. E. *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion, 1357-1900*. Vol. 3 of 3. New York: Russell & Russell, 1960.
- Stehmann, Wilhelm. *Die mittelhochdeutsche Novelle vom Studentenabenteuer*. Berlin: Mayer & Müller, 1909.
- Varnhagen, Hermann. "Die Erzählung von der Wiege." *Englische Studien* 9 (1886): 240-66.
- Weisl, Angela J. "'Quiting Eve': Violence against women in the *Canterbury Tales*." *Violence against Women in Medieval Texts*. Ed. Anna Roberts. Gainesville, FL: UP of Florida, 1998. 115-36.
- Wetherbee, Winthrop. *Geoffrey Chaucer, The Canterbury Tales*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- Wright, Thomas, ed. *Anecdota Literaria: a collection of short poems in English, Latin and French, illustrative of the literature and history of England in the thirteenth century....* London: J. R. Smith [etc., etc.], 1844.

排除と包摂

ーレベッカ・ウォーカーの自伝における ユダヤ・アイデンティティとカラー・ラインの問題ー

本 田 安都子^{*1}

内容要約：本稿では、アメリカ人作家レベッカ・ウォーカーの自伝 *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self* (2001) において、どのようなユダヤ・アイデンティティが表現されているのか検討する。また、この自伝に対してどのような批評がなされているのかも併せて考察することによって、現代のアメリカ社会におけるユダヤ・アイデンティティの在り方について、人種関係との関連から考察する。

キーワード：ユダヤ人／人種関係／アイデンティティ／自伝

1. はじめに

1960年代、アメリカにおけるユダヤ・アイデンティティについて考察するうえで大変興味深い広告ポスターがニューヨーク市に登場する。それは、ブルックリンのパン屋が出した広告であった。そのパン屋は、1888年に東欧出身のユダヤ移民ヘンリー・S・レーヴィ（Henry S. Levy）によって始められ、ブルックリンでは名の知れた存在であった。その広告ポスターには、次のような文句が載っていた。「ユダヤ人でなくてもレーヴィの本場のジューイッシュ・ライ麦パンが好きになる（“You Don't have to Be Jewish to Love Levy's Real Jewish Rye”）」¹ この宣伝文句と共に、様々な人種やエスニック集団を代表していると思しき人物たち——アイルランド系の男性警察官、ワイシャツにネクタイ姿のアフリカ系アメリカ人の少年、羽飾りのついた帽子をかぶったネイティブ・アメリカンの男性など——が、満面の笑みでレーヴィのライ麦パンを頬張る姿がポスターを飾っている。

この広告が巧みなのは、ユダヤ人の姿を見せることなく、ユダヤ人とはどのような姿をしているのか表そうとしているという点にある。では、この広告の文言で想定されている「ユダヤ人」とは、どのような姿をしているのだろうか。もともと、創業者であるレーヴィが東欧出身のユダヤ人であるゆえ、広告の「ユダヤ人」という文言は、アシュケナジー系ユダヤ人を暗に示していると考えるのが妥当であろう²。さらには、アメリカにおけるユダヤ人人口の大半は、当時も現在

^{*1} 福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域

においてもアシュケナジームであることから³、アメリカという文脈においては、「ユダヤ人」＝「アシュケナジーム」という図式が容易に成り立ちうる。しかし、ここで問題なのは、アシュケナジームは数あるユダヤ人集団の一つにすぎず、ユダヤ民族にはスファラディームやミズラヒームなど、その肌の色や文化習俗などにおいて、アシュケナジームとは異なる集団も存在しているということだ⁴。また、それら伝統的な集団区分には分類できないユダヤ人の集団——アフリカ系やアジア系など——も存在する。皮肉なことに、レーヴィの広告は、「ユダヤ人」というアイデンティティをアメリカ社会に向けて高らかに宣言する一方⁵、そこで表現されるユダヤ・アイデンティティは、排他的なものとなっている。

レーヴィの広告は、アメリカにおけるユダヤ・アイデンティティと人種の関係性を考えるうえでも大変興味深い。先にも述べた通り、ユダヤ民族には様々なエスニック集団が存在しており、その肌の色は様々である。よって、誰がユダヤ人であるかどうかは肌の色によって断定できることではない。レーヴィの広告ポスターのひとつでは、黒人少年の写真が「非ユダヤ人」として登場しているのだが、現実には、この少年のような外見の少年もユダヤ人でありうる。しかしながらこの広告は、そのような可能性を排除することによって成り立っているのだ。

メルヴィン・Ｒ・レーベンタール (Melvyn R. Leventhal) は、レーヴィのパン屋の発祥の地ブルックリンで生まれ育ったアシュケナジー系ユダヤ人である。成人して弁護士となった彼は、レーヴィの広告が登場した1960年代、ミシシッピ州で公民権運動に身をささげ中、黒人作家アリス・ウォーカー (Alice Walker) と出会い、1967年にふたりは結婚する。1969年に生まれた一人娘レベッカ・ウォーカー (Rebecca Walker) は、1990年代に第三波フェミニズムの若き旗手として注目され、2001年に自伝 *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self* を出版している。

ウォーカーの自伝は、レーヴィの広告ポスターが表現するユダヤ・アイデンティティへの挑戦と葛藤の書といえる。題名の「ブラック」「ホワイト」「ジューイッシュ」の間には、意図的にカンマをつけなかったとウォーカーはインタビューの中で語っている。英語の表記法では、これらの形容詞の間にはカンマをつけることが慣例であるため、「カンマを取るために(出版社と)ひと悶着あった」が、「それぞれの単語は、私の中でひとつに混ざり合っている」ゆえの選択であったと述べている (Bolton-Fasman)。このように、成人したウォーカーは、レーヴィの広告で暗示される社会の「常識」から適切な距離を置き、自分が何者なのか冷静に語ることができているが、自伝の中の若き日のウォーカーにはそのような余裕もなく、そこでは「常識」に振り回される姿が生々しく描かれている。イエール大学在学中、酒に酔った「ワスプのような見た目のユダヤ人学生」(25) が、ウォーカーに向かって次のように言い放つ。「あんた本当にブラックでジューイッシュなのか?」「そんなのありえるのかよ」(25)。怒りに震えながらその学生を追い払った後、ウォーカーは自問する。「私ってありえるの?」

ウォーカーの自伝を特徴づけるのは、自己を規定する属性をすべて併存させようとする点にあ

る。それらの属性の中には、「黒人」と「ユダヤ人」のように、共存しえないと社会通念上信じられているものもある。では、ウォーカーはこの自伝の中で、自らの黒人性とユダヤ性をどのように共存しうるものとして描いているのだろうか。これが、本稿で明らかにしたい第一の論点である。それと共に検討したいのは、ユダヤ系の批評家たちがウォーカーの自伝をどのように評価しているのだろうか、という問題である。この二つの問いを明らかにすることを通して、現在のアメリカ社会におけるユダヤ・アイデンティティについて、アメリカの人種関係との関連から考察する。

2. 「私たち」の境界線

ウォーカーの自伝 *Black White Jewish* では、彼女の誕生から高校卒業時までの記憶が綴られ、公民権運動活動家であった両親の離婚や、自身の複数の人種的ルーツによる混乱、そして、そこから生じる身の回りの人々との心理的軋轢などが記録されている。公民権運動期におけるユダヤ系とアフリカ系コミュニティの「蜜月」を象徴するかのような両親の婚姻関係は、1976年に終わりを告げ、ウォーカーは、西海岸と東海岸に分かれて住むそれぞれの親の家を数年ごとに移り住む生活を高校卒業まで続けることとなる。

自伝の終わり近くで、高校3年生の時に父親の苗字であるレーベンタールから母の苗字に変更したときのエピソードが語られる。父は娘の決断に対し、反ユダヤ主義的、つまり、ユダヤ人のルーツを否定する行為だとして怒りをあらわにする。語り手であるウォーカーは、当時の決断の理由について、「ユダヤ人がなったとされるもの、つまりホワイテネスには近さを感じず、白くない肌で生きた経験から、ブラックネスには近さを感じるから」(313)と述べている⁶。

この文言だけを切り取れば、これは、ウォーカーが自身のルーツの複数性を否定し、黒人としてのアイデンティティを選び取ったエピソードと映るかもしれないが、自伝のタイトルに端的に表れているように、ウォーカーは自伝全体を通して、複数のアイデンティティが自身を形作るのだという考え方を提示している。例えば、白人と黒人のミックスド・レイスの娘を育てる若い黒人女性から、人種アイデンティティについて娘にどう説明したらいいのか、という相談をされた際の出来事が語られている。世間は娘のことを黒人としか見なさないのに、わざわざ白人のルーツも持っていることを教える必要があるのかと問うその若い母親に対し、ウォーカーは「ありのままを伝えてください」(292)と答える。また、自伝出版後に行われたインタビューでは、自身のアイデンティティに悩む子供時代について、次のようにウォーカーは語っている。「子供時代に変な感じだったと感じるのは、いつもどちらかを選ばされるということでした。ただ黒人でいなさい、あるいは、ただユダヤ人でいなさい、などというように。大人になって、自分のすべての属性と折り合いをつけ、私はそれらすべてから成り立っているのだと思うようになりました」("Rebecca Walker")。

興味深いことに、ユダヤ系の書評者の間で、この自伝の中で描かれるユダヤ・アイデンティ

ティに対する評価は大きく分かれている。自らもブラック・ジューイッシュであるシャハナ・マッキニー (Shahanna McKinney) は、「黒人」と「ユダヤ人」というアイデンティティを同時に存在しうるものとして描こうとしたウォーカーの試みを肯定的に受け止めている。マッキニーは特に、自伝のタイトルを *Black White Jewish* としたことを「価値転覆的行為」(116) として高く評価する。なぜなら、これら三つを並列的に並べることにより、様々な社会通念——「一滴」でも黒人の血を有する者は黒人だ、ユダヤ人の女性から生まれた者はユダヤ人だ、ミックスド・ルーツの者はどれか一つのルーツを選ばなければならない、などという考え方——に疑義を突き付けているからだと説明している。加えて、自分に似た人物の物語が語られたことによって、自分自身の存在が正当化されたと感じたとも述べている。

マッキニーとは対照的に、シャーロット・ホニグマン＝スミス (Charlotte Honigman-Smith) は、ウォーカーの描くユダヤ人象に対して大きな不満を抱いている。ホニグマン＝スミスは、「ウォーカーが自伝の後半で描くユダヤ人の姿は、吟味されておらず、その描写は無責任であり、ほとんど漫画のような紋切り型である」と痛烈に批判する。彼女が言及する「自伝の後半のユダヤ人」とは、アシュケナジー系ユダヤ人コミュニティのことを指しており、自らもアシュケナジー系であるホニグマン＝スミスは、この自伝が、ユダヤ人は物質主義的で体制順応的、且つ、富裕層に属するという紋切り型を繰り返していることに怒りを覚えるとまで述べている⁷。

マッキニーとホニグマン＝スミスの評価の違いは、ユダヤ・アイデンティティに関わる問題と深く関連している。つまり、この二人の書評者の間で、「ユダヤ人とは誰のことなのか」という問題に対する理解の枠組みが大きく異なっているのだ。マッキニーは、ブラック・ジューイッシュについては、メディア上ではほとんど取り上げられず、黒人でありユダヤ人である当事者たちも「ユダヤ人」として表に出ることは稀であるという状況を鑑み⁸、ウォーカーの自伝の登場を歓迎している。他方、ホニグマン＝スミスは、ユダヤ人としてのウォーカーのアイデンティティの物語には注目せず、自伝の中のアシュケナジー系ユダヤ・コミュニティの描写の是非を論じることに終始している。ウォーカーの自伝が及ぼす「悪」影響を心配して、書評の締めくくりで「ユダヤ人女性」に向かって次のような「警告」を発している。

この本は、女性学やエスニック・スタディーズの教室で広く読まれることだろう。この本は、自身が抱くユダヤ人への偏見が間違っていなかった、なぜならレベッカ・ウォーカー（彼女自身がユダヤ人だ）のお墨付きをもらったからだ、と感じる女性たちによって読まれることだろう。この本は、文化的アイコンによる無責任な反ユダヤ主義的紋切り型に抗して、自分たちの文化や言語、経験を守らなければならないユダヤ人女性たちによって読まれることだろう。もしこの本が、第三波フェミニズムの声であるというのなら、若きユダヤ人女性たちは用心した方がよい。私たちはここでは歓迎されていない。(Honigman-Smith)

この引用の中でホニグマン＝スミスが繰り返す「ユダヤ人女性」が誰を指すのかは、彼女の書評の文脈からも明らかである。アシュケナジー系ユダヤ人の女性たちだ。確かに、ホニグマン＝スミスはウォーカーのことをユダヤ人と呼んではいるが、「私たち」の中に含まれるべきユダヤ人の仲間としては認識されていない。

マッキニーとホニグマン＝スミスの書評を並べて分かることは、彼女たちそれぞれが関心を寄せる「ユダヤ人」の肌の色が異なるということだ。マッキニーは、有色人種のユダヤ人としてのウォーカーに関心を寄せはするが、アシュケナジー系ユダヤ人の描写については等閑視している。他方、ホニグマン＝スミスは、先に述べたように、アシュケナジー系ユダヤ人の描写については敏感に反応するものの、ウォーカーのアイデンティティ形成の物語については全くと言っていいほど書評の中で触れていない。両者は共にユダヤ人であり、ユダヤ人に関する問題への関心も高い。しかしながら、ホニグマン＝スミスの言葉遣いを借りれば、このふたりの書評者にとっての「私たち」の境界線はカラー・ラインに沿って引かれ、それぞれの「私たち」が重なることはない。包摂的なユダヤ・アイデンティティを提示しようとしたウォーカーの自伝が、書評という場を通して人種的分断を呼び起こしてしまっているということは、皮肉なことと言わざるを得ない。

3. ブラックネスとの距離

ホニグマン＝スミスは、ウォーカーが「ユダヤ人がなったとされるもの、つまりホワイトネス」(313)に繋がりを感じないから改名をしたと述べたことに触れ、ウォーカーにはどんな権利があって「ユダヤ人がなったとされるもの」を語れるのか、自伝を読んでも一向にわからないと手厳しく非難している。表面的なアシュケナジー系コミュニティの描写しかできないウォーカーは、このコミュニティの部外者に違いなく、よって、彼女には上段から語る資格はないとホニグマン＝スミスは言いたいのだろう。ホニグマン＝スミスの批判の是非はともかく、その批判の背後には、「私たち」と「そうでない者」を分けて扱おうとする排他的態度が潜んでいる。興味深いことに、ウォーカーのアイデンティティ形成の物語の根底には、「私たち」の一員になれないという疎外感が常に存在している。では、そのような疎外感は、ウォーカーのアイデンティティ形成とどのように関わっているのだろうか。

まず、この節では、ウォーカーとブラックネスの関係性について明らかにしていく。高校時代に父の苗字から母の苗字に変更した際、ウォーカーは、それぞれの苗字が象徴するもの、つまり、ブラックネスとホワイトネスへの「近さ」の違いを決断理由として挙げている。一見すると、黒人としてのアイデンティティ表明とも見える苗字変更のエピソードは、もうひとつ別のエピソードを参照することによって、彼女が感じるブラックネスへの近さとは、留保がついたものであることが分かる。

そのエピソードは、成人したウォーカーと彼女の黒人の恋人の会話から構成されている。人種

アイデンティティについて語り合ううちに、話題は、ウォーカーと黒人コミュニティとの関係に及ぶ。恋人はウォーカーに、黒人を自分の同胞と思うかと尋ねる。それに対しウォーカーは、自分がどう思うかより相手がどう自分を見るか、という話から始める。自身の複数ルーツゆえ、相手が誰であろうとも、彼らが自分のことを同胞と呼ぶには邪魔になる要素が自分にはあるのだと述べる (306)。

ウォーカーがそのような感覚を体験した例として、幼い頃、南部に住む母方のおじが自分に対して、「クラッカー (cracker)」(84) という言葉を使ったエピソードが挙げられる。おじや従兄弟達とふざけて遊んでいる中、狂ったようにいつまでも笑い転げるウォーカーを見ておじは、冗談めかして「クラッカー」みたいになったな、と言う。その言葉が白人への蔑称であることを知らなかったウォーカーは、この言葉を聞いてニヤニヤする従兄弟やおじの姿にただ困惑する。大人になったウォーカーは、この言葉が「黒人が白人に使う言葉で、人種差別主義者の白人の狂気や残酷さ、偏執狂的文化」(84) を意味することを知り、さらに、おじや従兄弟がその後も、彼らから見て「黒人らしくない」彼女の行動を指して、軽口のようにこの言葉を使い続けたという体験を振り返り、「おじたちと一緒にの場所にいても、自分の居場所を探そうと、自分が本当にいるべき場所がどこなのか見つけようと必死になっている。おじや従兄弟を愛する気持ちと、自分が彼らに痛みの記憶を呼び起こす存在であるという事実と、どう折り合いをつければいいのだろうか」(85) というように、当時の葛藤を描写している。

ジーノ・マイケル・ペレグリーニ (Gino Michael Pellegrini) は、複数の人種的ルーツを持つ者たちは、人種アイデンティティは単一であるという周囲の思い込みに同調して、自身のルーツの一部を否定する傾向にあることを指摘している (6-7)。この「クラッカー」のエピソードは、単一人種幻想に基づく周囲の期待に沿えず、自身を常に否定されるべき存在として捉えるウォーカーの思考の傾向を端的に表す事例と言える。

また、そのような思考の傾向ゆえに、本来であれば輝かしいはずの一族の歴史の中にも、否定的な自己像を見出してしまうという事例が、母アリス・ウォーカーとのエピソードの中で語られる。ある日、母アリスは娘を自分の書斎に連れていき、壁に掛けられた年老いた女性の写真を見るよう促す。ウォーカーにはそれが誰だか分からないが、これが誰なのか分かっていなければならないという無言のプレッシャーを母から感じる。この女性が元奴隷の先祖であることを母から伝えられても、自分との繋がりを感ぜられず途方にくれる。後にウォーカーは、幼き日の自分が、その老女と偶然道端で出会う場面を想像してみるものの、この時も、他者のまなざしから否定されるべき自己の一部を肥大化させた自己像を描いてしまう。

どこの誰だか分からない子供として、突然にプールおばあちゃんの所に歩み寄っても、おばあちゃんは私にやさしく接してくれるかもしれない。大丈夫かい、と私を気遣ってくれるかもしれない。でも、私の肌の色に危険の兆候、残虐性の証拠を見出さないだろうか。自己防

衛の本能が働き、心のどこかで私を拒絶しないだろうか。(85)

これらの母方の親戚とのエピソードが示唆するのは、ウォーカーがブラックネスに近さを感じるといった時、それは必ずしも血縁を担保とした繋がりではない、という可能性である。むしろウォーカーが自伝の中で繰り返し語るのは、そのような血の一体感ともいえるものを否定され続けたという子供時代の記憶である。ウォーカーにとって、ブラックネスとは生来の本質的属性ではないのだ⁹。ゆえに、「白くない肌で生きた経験から、ブラックネスには近さを感じる」(313)というように、肌の色そのものではなく、褐色の肌ゆえに社会で受けてきた差別の体験が自身の「ブラック」としてのアイデンティティを形作ったとウォーカーは述べているのだ。次節では、この「経験を通じたアイデンティティ形成」というものが、ウォーカーのユダヤ人としてのアイデンティティ形成とどのように関わっているのか見ていく。

4. ユダヤ性と社会正義

ミックスド・レイスの子供としての体験は、ウォーカーに血の繋がりによる無条件の帰属意識というものが幻想であるという思いを植え付け、彼女の否定的な自己像を増幅させる。その否定的な自己像を生み出した根源的な原因として、ウォーカーは、両親の離婚、特に父親の「変節」について語る。

ウォーカーは、離婚した両親と自身の境遇を比較して、自らの寄る辺のなさについて語っている。離婚により、幼いウォーカーは両親の間を行ったり来たりする生活を強いられる一方、両親はそれぞれの「あるべき人生」(116)に落ち着く。つまり、父はニューヨーク時代の幼馴染のユダヤ人女性と再婚し、母はアトランタの大学時代の黒人の恋人とよりを戻す。「両親は、懐かしく、安全で、慣れ親しんだ場所に戻る一方、私はそれらからお別れしなければならない」(116)というように、ウォーカーは両親の離婚のせいで、自分と親の人生が真逆の方向に進んでいったことを強調する。

それでは、ウォーカーの「懐かしく、安全で、慣れ親しんだ場所」(116)とは何かというと、それは、両親が離婚する前に存在していた、異人種間結婚によって作られた家庭である。自伝の冒頭でウォーカーは、自身の出自をアフリカ系アメリカ文学に登場する「悲劇のムラート」(12)に重ねながら、その意味するところを巧妙にずらしていくことにより、複数のルーツを持って生まれたことの意味を肯定的に描こうと試みる。

まず、父から聞いた話として、出生時のエピソードが語られる。出生証明書の両親の人種のチェックボックスには、それぞれ「黒人」と「白人」の欄に印がつけられ、余白には、おそらくは看護師の手による「間違っていない？」(12)という走り書きが記されている。その問いの意図をウォーカーは次のように解釈する。「このカップルは、この結婚は、そして何よりもこの子供は間違っていないのか？」(12)

しかしながら、ウォーカーは、両親が共に社会正義の実現に情熱を傾けた活動家であること、そして二人が恋に落ち、その結果として自分が生まれた事実をもってして、ミックスド・レイスの子どもに対するそのような世間の否定的なまなざしに抵抗しようとする。ここで注目したいのが、活動家時代の父親についての記述である。ウォーカーは、「父はリベラルなユダヤ人で、正義や平等、自由などといった抽象的なことでも、迅速で瑕疵のない法の執行により実現されると信じている」(23)と述べている。先の、出生証明書のエピソードでは単に「白人」とだけ認識されていた父は、ここでは差別撲滅に燃えるユダヤ人として描写される。そして、奴隷制を描いた文学作品に登場する「悲劇のムラート」の父親と自身の父親の違いに触れることにより、ウォーカーは、自身が「悲劇のムラート」であることを否定する。「私は私生児ではない、レイプの産物でもない、白い悪魔の子供でもない。私は、ムーブメントの子供だ。私は悲劇的ではない」(24)。ウォーカーは、人種間平等の実現に向けて活動をしていた時代の父を語ることにより、(アシュケナジー系)ユダヤ人である父を、人種差別的な社会構造の受益者である白人とは異なる白人として描いているのだ。ウォーカーは、その肌の色から得られる特権的地位に安住することを選ばず、人種間の不平等と闘おうとした父の子どもとして自身を描くことにより、自らの存在を肯定しようとしていることが「悲劇のムラート」をめぐる記述から読み取れる。

以上を踏まえると、ウォーカーが「ユダヤ人がなったとされるもの、つまりホワイトネス」(313)とは距離を感じているから母の苗字を選んだのは、単純に、その肌の色ゆえに父方の家系との断絶を望んで行なった行為ではないと推察される。先に触れた「悲劇のムラート」であることを否定する際のウォーカーの語り口からも明らかなように、アリス・ウォーカーと結婚し、レベッカと三人で家族生活を送っていた頃の父は、「悲劇のムラート」の物語に登場するような白人とは違う存在として描かれている。ここでの父は、いうなれば、「白い」肌に付随する特権の受益者になる前のユダヤ人であると言える。そのように理解すれば、ウォーカーが改名の際に否定したのは、必ずしもユダヤ的ルーツではないことは明らかであろう。

父は、ユダヤ人の女性と再婚したのち、しばらくはワシントン D.C. やニューヨーク市などを転々とするが、後にニューヨーク市郊外に居を構えることとなる。はじめは継母に懐いていたウォーカーは、父の一家が郊外に移り住んだのをきっかけとして、継母を敵対視するようになる。それは、ウォーカーが継母のことを、父を公民権運動の時代の情熱から引き離し、中産階級の白人に仕立て上げた首謀者と見なしているためである。ウォーカーは、父をめぐる自身と継母の綱引きを、まるで人種間の争いであるかのように描写している。「彼女と私は、父の魂をめぐる争っているのだと思う。私は自分の茶色い体を武器に、父のより肉感的で公正な過去の記憶を呼び覚まそうとし、彼女は、私が知らない父の白いユダヤ的ルーツの表面の汚れをこそげ落とそうとするのだ」(206-7)。

ウォーカーが、父を「白い」郊外生活から引き離し、人種間共闘を掲げていた公民権運動の時代に引き戻そうとする背景には、自身のミックスド・レイス・アイデンティティを肯定してほし

いという思いがあったのだと考えられる。ウォーカーは、「変節」する前の父が自分にかけてくれたであろう言葉を次のように夢想する。「継母さえいなければ、父は今でも私のものだったろうし、私の話を聞いてくれ、そのままの自分を誇りに思いなさい、お前が生まれたのは必然だったんだよ、黒人であり白人であることは、たった一つでしかないことよりもいいことなんだよ、文句を言うやつらはほっとけばいい、と言ってくれたことだろう」(218-19)。このような父への期待の背後には、その肌の色にもかかわらず、人種差別に立ち向かおうとするような二重性を持つ父であれば、自分の二重性も理解してくれるはずだ、という思いがウォーカーにはあったのだと推察される。

黒人コミュニティーに同胞意識を抱くかどうか、という話を恋人とした後、ウォーカーは、「それが何を意味するかはさておき、同胞であろうとなかろうと、自分が直ちに近さを感じるの、抑圧されている人々」(306)と述べている。自らの出自が、肌の色の違いを乗り越えて公正な社会の実現に情熱をささげた理想主義者の愛の産物である、つまり、自分は「ムーブメントの子供」(24)なのだという自意識を持つウォーカーにとって、社会正義への情熱こそ、己を最も肯定的にとらえられる自己理解の枠組みであるのかもしれない。また、社会的不平等への関心は、父のように「白く」なってしまったユダヤ人が過去に置き去りにしてきたユダヤ的伝統とも言え、ウォーカーは、それを引き継ぐことで自身のユダヤ的ルーツを主張しようとしているとも考えられるだろう。

さらには、ユダヤ人が「白く」なる前のユダヤ系とアフリカ系の共闘の歴史の産物として自身を「ムーブメントの子供」(24)と呼ぶウォーカーが、現在是对立している二つの集団¹⁰の懸け橋になろうとする意図もここではくみ取れる。「抑圧されている人々」(306)への共感について述べた後、様々に異なる差別体験をしてきた人々——ユダヤ人、日系アメリカ人、アメリカ先住民——について触れ、次のように自身に問いかける。「私に関して私の先祖が愛しているのは、私を含めた迫害されている人々への共感を総動員できる力であると望むか」(307)。それに対し、ウォーカーは「はい」と答える。この「先祖」とは、誰を指しているのだろうか。ウォーカーの改名の理由から、その肌の色を受け継いだ母方の先祖がまず考えられる。しかし、その繋がりには血統ではなく、白くない肌でアメリカ社会を生きた経験によるもの、つまり、肌の色による経験の共有によるものだ。また、「白く」なる前のユダヤ人とのつながりを、社会正義実現への情熱という観点から見出そうとするウォーカーにとって、父方の先祖もここに含まれると考えてもいいだろう。いずれの場合においても、血による繋がりではなく、経験による繋がりを軸にしている点が、ウォーカーのアイデンティティ形成の特徴と言える。

5. むすび

本稿では、レベッカ・ウォーカーの自伝で描かれるユダヤ・アイデンティティの形成について検討した。「黒人」と「ユダヤ人」など、アメリカ社会の「常識」では共存しえないと思われてい

るアイデンティティも含め、すべての属性が自らを形作るとする姿勢が、ウォーカーのアイデンティティの在り方の基調となっている。彼女が自伝でこの問題を取り上げたということは、従来のアメリカ社会では不可視の存在となっていた有色人種のユダヤ人を可視化したという点で、評価すべき挑戦であると言える。

ウォーカーのアイデンティティ形成の鍵となるのは、血縁ではなく経験であることも明らかとなった。彼女がそのように自らのアイデンティティを捉えるようになった背景には、肌の色による差別の経験があったことを自伝の記述から確認した。血統に基づいた本質的アイデンティティではなく、経験を通じたアイデンティティ形成は、例えば、肌の色の異なる者同士の連帯の可能性も示唆するという意味で、排他性よりは包摂性を求める——つまり、自身の中のどれか一つのアイデンティティを優先するのではなく、あらゆるアイデンティティを肯定する——というアイデンティティ形成におけるウォーカーの基本的態度とも整合性を示している。また、被差別者との繋がりをアイデンティティの中心に据えることは、かつて父が実践していた社会正義を通したユダヤ性の表現とも通底している。その意味において、ウォーカーのユダヤ・アイデンティティも、血縁ではなく経験をもとに形成されていることが分かった。

しかしながら、複数のアイデンティティを共存させようというウォーカーの意図とは裏腹に、彼女の自伝への評価がカラー・ラインによって分断されているという現象も見られた。この現象は、アメリカにおけるユダヤ・アイデンティティを考察する際、人種問題を無視することは出来ないということを示唆している。この点に関連して、ロリ・ハリソン＝カハーン (Lori Harrison=Kahan) は、ウォーカーの提示する、被差別の体験を介した連帯という考え方にも、ある種の排他性が潜んでいるのではないかと指摘している。つまり、ウォーカーにとってアンネ・フランクは「望ましい」ユダヤ性を象徴する一方、20世紀後半のアメリカに住む（アシュケナジー系）ユダヤ人を、彼女はその富と社会的地位ゆえに「望ましくない」ユダヤ性の持ち主と見なしているのではないかとハリソン＝カハーンは述べているのだ (239-40)。この指摘は、とても重要である。なぜなら、被差別経験をもとにしたアイデンティティ形成や連帯は、アメリカという文脈においては、容易にカラー・ラインによる分断を招いてしまう危険性も孕んでいるからだ。ウォーカーの自伝に対する対照的な評価が、その一例ではないだろうか。

レーヴィの広告が登場した1960年代に比べ、アメリカのユダヤ・アイデンティティは、より排他的になったのだろうか。それともより包摂的になったのだろうか。少なくとも、レベッカ・ウォーカーの自伝は、アシュケナジー系ユダヤ人とは異なる立場のユダヤ人の声を世間に届けたという意味で、より包摂的なユダヤ・アイデンティティの模索へと大きな舵を切る契機の一つとなったのではないだろうか。しかし、その先に待ち受けるカラー・ラインの問題は、決して避けて通ることのできない難題であると言えるだろう。

注

本稿は、第38回日本アメリカ文学会中部支部大会シンポジウム「文学にみる Mixed Race」での発表原稿「移動する“Movement Child”——Rebecca Walkerの自伝におけるmixed-race identityとBlack-Jewish relations」をもとに大幅な加筆・修正を施したものである。

¹ 本稿における引用の和訳はすべて拙訳である。

² レーヴィのパン屋で売られていたライ麦パンや黒パンは、彼の故郷である東欧でよく食されていた種類のパンである。ゆえに、「アシュケナジー系ユダヤのパン」と呼ぶのがより正確であろう。中東や北アフリカ地域であればビタブレッド、エチオピアであればフラットブレッドというように、ルーツとなる地域によって「ユダヤのパン」の種類は異なる (Brettschneider 41)。

³ ピュー研究所が18歳以上のアメリカ在住のユダヤ人を対象として行った調査 (2019年11月19日から2020年6月3日に実施、回答者数4,718名)によれば、人種に関する質問において、回答者の92%が白人であると答え、残りの8%がそれ以外と回答した (“Jewish Americans in 2020”)。

⁴ 白杵陽は、世界各地からユダヤ人が集まる国であるイスラエルは、その文化的多様性から「文化の博物館」且つ「言語の博物館」と呼ばれていると述べている (ii)。また、そこに居住するユダヤ人の外見の多様性ゆえに、イスラエルが「人種の坩堝」と称されていることも紹介している (2)。

⁵ 広告のライ麦パンは、もともとは「レーヴィの本場のライ麦パン」と呼ばれていたのだが、このポスターを作製した広告会社は、あえて「レーヴィの本場のジュイッシュ・ライ麦パン」と記載した。広告の依頼主であるレーヴィ側は、反ユダヤ主義的反応を恐れて商品名に「ユダヤ」の要素を入れることを嫌がっていたのだが、幸いにもレーヴィの心配は杞憂に終わった (Ferretti)。広告文の「ユダヤ」の文言をめぐるレーヴィ側の葛藤から、この時代はまだ、アメリカのユダヤ人が「ユダヤ」というアイデンティティを表に出すことに躊躇するような時期であったことが窺える。同時に、この宣伝の成功は、ユダヤ人がアメリカ社会に包摂されるために、ユダヤ人であることを隠す必要がなくなった時代となったことも示唆している。

⁶ 「ユダヤ人がなったとされるもの、つまりホワイトネス」(313)という表現は、1990年代から盛んになった (アシュケナジー系)ユダヤ人の「白人化」に関する研究を意識したものと推察される。ウォーカーが自伝を執筆していた1990年代後半には、この研究分野の第一人者のひとりであるカレン・ブロードキン (Karen Brodtkin) の *How Jews Became White Folks and What That Says About Race in America* が出版されている。

⁷ ウォーカーによるアシュケナジー系ユダヤ人の描き方が一面的である点は、ホニグマン＝スミス以外の書評家や研究者によっても指摘されている。例としては、Lester, Meyers 132-137を参照。

⁸ 2000年代に入ってから、少しずつではあるが、自身のユダヤ人としてのルーツを表に出すブラック・ジュイッシュの有名人も登場するようになった。例えば、アシュケナジー系ユダヤ人の母と黒人の父を持つカナダ出身のミュージシャンであるドレイク (Drake) は、2014年に『サタデー・ナイト・ライブ』において、自身のバル・ミツバを題材にした寸劇を披露している (“Monologue: Drake's Bar Mitzvah – SNL”)。

⁹ フージェン・チェン (Fu-Jen Chen) は、ウォーカーは自身の人種アイデンティティを語る際には社会構築的な枠組みを使って語る一方、彼女の母親や親せきなど「純粋」な黒人たちの人種アイデンティティに関しては本質主義的な捉え方をし、彼らの人種アイデンティティの構築性や複雑性に目を向けられていないことを指摘している (384-86)。

¹⁰ アメリカの反差別運動におけるユダヤ人と黒人の共闘の歴史は、第二次世界大戦以前にまで遡るが、1960年代後半以降、両者の関係は人種間対立の様相を呈していく。シェリル・グリーンバーグ (Cheryl Greenberg) は、1970年代のアファーマティブ・アクション裁判をめぐる、アフリカ系の団体はアファーマティブ・アクションに賛成、ユダヤ系の団体は反対と、正反対の立場を表明したことにより、世間に両者の溝の深さを印象付けることになったと述べている (72-75)。

参考文献

- Bolton-Fasman, Judith. "Translating between Two Worlds: An Interview with Rebecca Walker." *18 DOORS*, https://18doors.org/translating_between_two_worlds_an_interview_with_rebecca_walker.
- Brettschneider, Marla. *The Family Flamboyant: Race Politics, Queer Families, Jewish Lives*. SUNY P, 2012.
- Brodtkin, Karen. *How Jews Became White Folks and What That Says about Race in America*. Rutgers UP, 1998.
- Chen, Fu-Jen. "Postmodern Hybridity and Performing Identity in Gish Jen and Rebecca Walker." *Critique: Studies in Contemporary Fiction*, vol. 50, no. 4, 2009, pp. 377-400.
- Ferretti, Fred. "Levy's Jewish Rye Will Soon Be Arnold's." *The New York Times*, 6 June, 1979, <https://www.nytimes.com/1979/06/06/archives/levys-jewish-rye-will-soon-be-arnolds-you-dont-have-to-be-jewish.html/>.
- Greenberg, Cheryl. "Pluralism and Its Discontents: The Case of Blacks and Jews." *Insider/Outsider: American Jews and Multiculturalism*. edited by David Biale, et al., U of California P, 1998, pp. 55-87.
- Harrison-Kahan, Lori. "Passing for Black, White, and Jewish: Mixed-Race Identity in Rebecca Walker and Danzy Senna." Julie Cary Nerad, ed. *Passing Interest: Racial Passing in US Novels, Memoirs, Television, and Film, 1990-2010*. SUNY P, 2014. pp. 229-253.
- Honigman-Smith, Charlotte. "Portrayed, or Betrayed?" Review of *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self*. *Lilith Magazine*, June 14, 2001, <https://lilith.org/articles/portrayed-or-betrayed>.
- "Jewish Americans in 2020." Pew Research Center, 11 May, 2021, <https://www.pewresearch.org/religion/2021/05/11/jewish-americans-in-2020/#fn-34764-1>.
- Lester, Julius. Review of *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self*. *Shofar: An Interdisciplinary Journal of Jewish Studies*, vol. 22, no. 1, 2003, pp. 136-37.
- McKinney, Shahanna. Review of *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self*. *Bridges*, vol. 9, no. 1, 2001, pp. 114-16.
- Meyers, Helene. *Identity Papers: Contemporary Narratives of American Jewishness*. SUNY P, 2011.
- "Monologue: Drake's Bar Mitzvah – SNL." *YouTube*, uploaded by Saturday Night Live, 20 Jan., 2014, https://www.youtube.com/watch?v=BEyRg_T3ae8.
- Pellegrini, Gino Michael. "Creating Multiracial Identities in the Work of Rebecca Walker and Kip Fulbeck: A Collective Critique of American Liberal Multiculturalism." *Multi-Ethnic Literature of the United States*, vol. 38, no.4, 2013, pp. 171-190.
- "Rebecca Walker" *Charlie Rose*, 1 March, 2021, <https://charlierose.com/videos/28992>.
- Walker, Rebecca. *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self*. Riverhead, 2002.
- 白杵陽. 『イスラエル』 岩波書店、2009.

「黒い太陽」と「青い薔薇」

—コクトーの磔刑図に関する一考察—

松 田 和 之^{*1}

「二十の顔を持つ男」と称されたコクトーの多彩な芸術のなかで、晩年に彼が手がけた教会美術作品（壁画、ステンドグラス等）は、従来そこに作家としての創意の枯渇を指摘する向きがあり、概して等閑視されがちであった。特に1959年に制作されたロンドンのノートルダム・ド・フランス教会聖母礼拝堂内の壁画作品は、フランス国外にあることも手伝ってか、長年にわたって忘れ去られてきたのだったが、そうした状況を一変させたのが、2003年に発表され、世界的なベストセラーとなった小説『ダ・ヴィンチ・コード』である。イエスとマグダラのマリアの関係をめぐる異端思想に取材してこの作品を執筆したアメリカの作家ダン・ブラウンは、現在では祭壇から取り外され、礼拝堂横の通路兼倉庫に放置されている通称「Mの祭壇」を重要視しているが、この礼拝堂に納められたコクトーの作品のうちで最も重大な謎を孕んでいるのは、祭壇を取り囲む三面壁画の中央に配された磔刑図である。そこに描かれている数々の謎めいた図案は人物像とそれ以外のものとに分けられるが、本論では、後者の中でも特に観る者の好奇の眼差しを惹きつけてやまない二つの図案、「黒い太陽」と「青い薔薇」に着目し、図像学的な見地から両者に分析を加えながら、それぞれに託された意味とこれらを描いた作者の意図について考察を試みる。

ロンドンのカトリック教会

国教制度（国家教会制度）と見ることもできる広い意味での公認宗教制度を敷いているイギリスは、キリスト教圏のいわゆる主要先進国の中でも特殊な宗教事情を抱えた国である¹⁾。イギリスの国教・公認宗教と言えるのが、国王がその首長を務めるイングランド（イギリス、英国）国教会だが、英国聖公会やアングリカン・チャーチ等の呼称が使われることもある同教会は、ローマ・カトリック教会に反旗を翻して成立したことから、プロテスタントの有力な諸派のひとつに数えられることが多い。だが、教義面におけるプロテスト（異議申し立て）が教派の分裂を引き

^{*1} 福井大学教育・人文社会系部門総合グローバル領域

起こしたと考えるのは短絡に過ぎるだろう。16世紀にイングランド国教会が誕生することになった原因は、国王ヘンリー8世（1491-1547）の離婚問題に端を発する英国王室とバチカンとの政治的な確執にあり、自国の教会の首長たらんとする専制君主の野望がそれを後押ししたのだった²⁾。

イングランド国教会を樹立したヘンリー8世が、カトリックの教義や儀式を概ね踏襲する一方でマルティン・ルター（1483-1546）の宗教改革を公然と否定した事実は、時に宗教ではなく政治が新たな教派を生み出すケースがあることを如実に物語っている。その後、ルター派とともに宗教改革の先鋒を担ったカルヴァン派の流れを汲む清教徒（ピューリタン）が台頭し、イングランド国教会のカトリック的な性格を糾弾するとともに、国内のカトリック勢力を一掃しようと企てた激動の時代があったが、それを経てイングランド国教会の権力基盤が安定したのちも、カトリック教徒は差別の対象とされ、不利益を被る時代が長く続いた。19世紀に入り、カトリック教徒が公職に就くことを認める法律（カトリック教徒解放法）が1829年に施行されるなど、状況は改善されたものの、現在においても、キリスト教最大教派のカトリックがイギリスにおいては少数派の地位に甘んじている事実には変わりはない³⁾。

フランスの詩人ジャン・コクトー（1889-1963）が晩年に装飾を手がけた三つ目の礼拝堂は、イングランド国教会の牙城であるロンドンに所在するカトリックの教会の内部に設けられている。ナポレオンを負かしたネルソン提督の像を頂く大理石柱とブロンズ製の四頭のライオン像で知られるトラファルガー広場からナショナル・ギャラリーを迂回して数分歩けばレスター広場に行き当たるが、そのまま広場を横切り、そこから斜めに伸びる通りを少し行けば、すぐ右手に聖母マリア像を象った意匠が施されたノートルダム・ド・フランス教会のファサード〔図1〕が見えてくる。小さな映画館や劇場等が軒を連ねた一角に位置し、尖塔があるわけでもないため、その存在に気づかずに通り過ぎてしまう人もいるかもしれない⁴⁾。玄関ポーチの階段を上り、薄暗い教会の入り口から中に入ると、外観からは想像がつかない広々とした円形の空間が広がっている。

印象派絵画の殿堂とも言うべきパリのオルセー美術館は用済みになった駅舎を改築したものだが、前身にあたる建物の意外性という点では、ノートルダム・ド・フランス教会も負けてはいない。ロンドン在住のフランス人たちの信仰の拠り所として設立されたこの教会は、正面ファサード側から見た限りでは判らないが、外光を取り入れることのできる巨大な丸天井とその下に広がるドーム状の大空間を有している。こうした特徴的な形状をした教会の前身は、18世紀末より観光客を対象とする娯楽施設として使用されてきたパノラマ劇場だった⁵⁾。それがフランス人建築家ルイ＝オーギュスト・ボワロー（1812-1896）の手で改築され、1868年にロンドン最古の鉄骨造の教会として落成したのである⁶⁾。1940年9月から翌年5月にかけてナチス・ドイツによるロンドン大空襲、いわゆる「ザ・ブリッツ」が猛威を振るった時期には、同教会も被弾して建物が損壊したが、1948年9月にフランス大使館の後援を受けて本格的な修復工事が開始され、シャルトル大聖堂から運ばれた礎石が据えられたのち、1955年10月にパリ大司教を招いて竣工式が執り行われている。

主祭壇のタペストリーとコクトーの磔刑図

教会の中に足を踏み入れた来場者の目にまず飛び込んでくるのは、正面奥の主祭壇の背後に飾られている巨大なタペストリー〔図2〕だろう⁷⁾。コクトーは日記に「祭壇を見下ろす大きなタペストリーは酷い代物だ。リュルサとウォルト・ディズニーの嘆かわしい混淆であり、動物たちに取り囲まれた聖母は白雪姫に似ている」(1960/5/8)との辛口のコメントを残しているが⁸⁾、縦横が約5.4m×4mのタペストリーは、彼も高く評価していたオービュッソンの工房で1954年に製作され⁹⁾、ノートルダム・ド・フランス教会の祭壇画としてソーホー界隈の住民に親しまれてきたのだった。その中央部には一輪の赤い花を手白いヴェールを被った花嫁と思しき可憐な女性の立ち姿が、彼女の背後には画面を縁取るものと同じ独特な形状をした植物とそれに群がる蝶が、さらには、鹿や羊、栗鼠といった哺乳類や鶏、孔雀などの鳥類、それに水溜まりのような池とともに三匹の魚の姿までもが描かれている。タペストリーの作品名は、教会の名称と同じく『ノートルダム・ド・フランス』である。したがって、その主人公とも言える中央の若い女性は「ノートルダム」、つまり聖母マリアであると考えられるが、それにしては若すぎる。さらに言えば、赤と青の衣をこの女性はまとうておらず、彼女を取り囲む多種多様な動植物の中には白百合も薔薇も含まれていない。一般的な聖母マリアのアトリビュートがこのタペストリーには一切描かれていないのである。彼女は本当に聖母マリアなのだろうか。もしかして、処女懐胎を経て聖母となる前の娘時代のマリアの姿がここに描かれているとでもいうのだろうか。

多少の謎は残るものの、『ノートルダム・ド・フランス』の聖母マリア像にはディズニーのキャラクターさながらに観る者の心を一瞬にして和ませる不思議な魅力があるのに対して、同じく謎を孕んだ、いや謎だらけと言っても過言ではないコクトーの壁画作品には、磔刑図に顕著であるように、どこか暗鬱で不穏な雰囲気漂っている。ノートルダム・ド・フランス教会の多様性や受容性を重んじる精神が好対照をなすこれら二作品を通じて具現化されていると言えるかもしれない。コクトーが壁画を描いた聖母礼拝堂は、タペストリーに向かって左側の教会内部の一角に設けられている。ガラスのパーテーションで仕切られているだけなので、教会に入ってそのまま左奥に進めば、すぐに一筆書きを思わせる独特な筆致で描かれたコクトーの壁画が見えてくる。

1957年9月29日の日記に書きとめられたピカソとの会話の内容から、コクトーがこの時期にノートルダム・ド・フランス教会聖母礼拝堂の壁画制作の打診を受けたことが窺い知れるが、その後の紆余曲折を経て、1959年11月3日から8日間、彼はロンドンに滞在し、全幅の信頼を寄せる建築家・室内装飾家のジャン・トリクノとその息子の助けを借りて個性的な三面壁画(triptyque)を制作したのだった。1960年5月5日、再びロンドンに渡ったコクトーは、壁画を一部手直ししたのち、7日に壁面の片隅に署名を施し、8日に執り行われた同礼拝堂の祝別式に出席している。

ノートルダム・ド・フランス教会聖母礼拝堂の三面壁画はコの字型に設置されており、向かって左側の壁面には受胎告知図が、それと対面する右手の壁面には聖母被昇天図が、そして最も面

積が大きい中央の壁面には磔刑図が、それぞれ描かれている。コクトーの日記の記述からは、磔刑図、受胎告知図、聖母被昇天図の順にアイディアが練られたとみられ（1958/5/24, 28, 9/7, 14）、実際に描かれた順番に関しても、やはり日記に「左側の壁面を仕上げ、中央の壁面に改良を加え、右側の壁面の下書きを行った」（1959/11/8）という記述が見受けられる。こうした構想と制作の経緯、それに配置や面積から判断して、三面壁画のうちでコクトーが最も重視していたのが縦横約1.5m×5.5mの磔刑図であることは、まず間違いないだろう。

コクトーの磔刑図に描かれた図案の多くは人物像だが、何といっても驚かされるのは、磔刑図の主人公であるはずの十字架上のイエスの姿が、重ねて釘を打たれた両足から衣をまもっていない両脚の大腿部までしか描かれていない点である。こうした他に類を見ない奇天烈な磔刑像を造形したコクトーの深意を理解するためには、画面に向かって右端に緑色の輪郭線で描かれた男性像、イエス・キリストのアトリビュートである魚の形をした目を持つ謎めいた人物の正体の解明が俟たれる¹⁰⁾。他にも不機嫌な表情を浮かべた自画像や奇妙に様式化されたマリア像など、コクトーの磔刑図には、観る者を挑発する意図で制作されたと思えないほど、奇妙な図像が満載されている。人物像以外にも、観る者の好奇心をかき立てずにはおかぬ謎めいた図案が散見するが、その最たるものは、いずれも特異な配色が目につく「黒い太陽」〔図3〕と「青い薔薇」だろう。

イエスが無辜の身にして磔刑に処せられることで人類の罪を自ら引き受けて贖ったと考える「イエスの贖罪の業」は、キリスト教の教義の要諦である。一方、「キリストの物語の美しさは、まさにそれが挫折の物語であることに起因している。後世におけるその驚くべき成功は、株式相場において物の価値を吊り上げる、あのユダヤ人の能力から来ている。もしキリストの弟子たちがユダヤ人でなかったならば、物語はポンテオ・ピラトのところで終わっていただろうに」（1959/3/13）という日記の一節からは、イエスの磔刑に特別な意味を担わせ、「キリストの物語」に「復活」という驚愕の展開を付け加えたキリスト教の教義をコクトーが批判的に捉えていたことが窺い知れる¹¹⁾。彼は一体どのような意図で以て磔刑図を描いたのだろうか。本論は、彩色に特徴がある二つの図案、「黒い太陽」と「青い薔薇」に図像学的な観点から詳細な分析を加えることで、カトリックの礼拝堂の装飾を繰り返し手がけたコクトーの真意に迫ろうとする試みである。まずは、突起した両目で天を仰いでいる奇妙なマグダラのマリア像の真横に配され、画面全体を引き締めるアクセントの役割を果たしているようにも見える「黒い太陽」に注目してみたい。

「黒い太陽」と錬金術

ルネサンス以前の時代には、磔刑図中に月とともに太陽が描かれる慣習があった。十字架の右側、イエスの左腕の上に月が、そして十字架の左側、イエスの右腕の上に太陽が、しばしば擬人化されて描かれてきたのである。聖母像を得意としたイタリア・ルネサンスの巨匠ラファエロ・サンティの『モンドの磔刑図（ガヴァリの磔刑図）』（1502-1503）〔図4〕にも、そうした特徴が明

確に見て取れる。伝統的な磔刑図に描かれた太陽がひと目でそれとわかる暖色系の色をしているのに対して、コクトーの磔刑図ではそれが黒く塗りつぶされている。ピカソは『ゲルニカ』において、ナチスが行った人類史上初の一般市民に対する無差別爆撃の非道を、あえてモノクロの画面を用いて告発したのだったが、コクトーは淡い色調ながらも輪郭線を中心に多様な色彩を用いて磔刑図を描いているだけに、太陽にあてがわれた黒という意想外の色彩には、当然、何らかの意味がこめられているものと考えられる。

「黒い太陽」に関しては、錬金術と関連づけて捉える向きがあり、例えば、「錬金術師にしてみれば、黒い太陽は第一物質であり、まだ加工されず、進化の道程にまだいたらない物質である。後の精神分析学者にとっても、黒い太陽は同じく最も初歩的段階の無意識になるだろう。さまざまな伝承によると、黒い太陽は宇宙や社会や個人の中で破壊的な力が猛威を振るう前兆である。大災害や苦痛や死の予告なのだ。絶頂にある太陽とは逆のイメージである¹²⁾」との指摘がなされているが、これは『心理学と錬金術』（1944）等の著作を通じて錬金術とキリスト教の関係を意識と夢のそれに譬えたスイスの心理学者カール・グスタフ・ユング（1875-1961）の見解にも沿うものであると理解される。起源は古代エジプトにあるとされ、元々は一攫千金を求める人間の欲望の産物であった錬金術だが、アラビアを経由してヨーロッパに伝わる間に、物質的なものから霊的・精神的なものへとその対象が広がり、ヘルメス思想との融合を果たしつつ、複雑で難解な秘儀体系が築かれるに至ったのである。地中海ジャン・コクトー友の会のウェブサイトにもノートルダム・ド・フランス教会に関する論考を寄稿しているフレッド・Aは、「黒い太陽」が卑金属を金に変換する錬金術の「大いなる業」（Magnum Opus）の第一段階を意味するものであることに短く言及しているが¹³⁾、コクトーの磔刑図に黒色で描かれた太陽と錬金術の直接的な関連については言葉を濁している。それを明晰かつ論理的に説明するのは、フレッド・Aならずとも、至難の業であるに違いない。コクトーが錬金術の考え方に基づいて太陽を黒く塗った可能性を端から否定するものではないが、磔刑図と錬金術との確かな接点が見えてこないだけに、前者の図案を晦渋で秘儀性の強い後者の思想と関連づけて読み解くには、やはり無理があると言わざるを得ない。

コクトーは詩人であり、画家でもあったが、錬金術と結び付けられがちな「黒い太陽」に関心を寄せた詩人や画家は、彼以前にも少なからず存在した。よく知られているのは、ロマン派の詩人たちである。その旗頭であった文豪ヴィクトル・ユゴー（1802-1885）もさることながら、「黒い太陽」を詠った詩人として彼以上に引き合いに出されることが多いのは、のちの象徴主義やシュルレアリスムにも多大な影響を及ぼすことになるジェラルド・ド・ネルヴァル（1808-1855）だろう。スペイン語で「廃嫡者」（El Desdichado）と題された彼の詩に「私の唯一の星は死に、一星ちりばめた私の琵琶は／「憂愁」の「黒い太陽」を宿している」という一節がある¹⁴⁾。「星」は恋人、「琵琶」は詩人の象徴とされ、世界から疎外された「廃嫡者」としての自己を省察した詩であると一般に理解されているが、「憂愁」（la Mélancolie）という言葉に関しては、それが具体的にドイツ・ルネサンスを代表する画家アルブレヒト・デューラー（1471-1528）の銅版画『メランコ

リア I』(1514)〔図5〕を指しているとする見方が定説になっている。その場合、この作品の画面左上方で周囲に照射距離の長い光を放っている天体が「黒い太陽」であると考えられるが、それぞれに意味深長に描き込まれた小道具の数々と同様に、そこにこめられた画家の真意を読み解くのは決して容易なことではない¹⁵⁾。

「私の太陽は黒い太陽だ」(1955/11/27)、「私は多分輝かしい栄光を好んできたのだろう。しかし、それを得られなかった今、私は人目につかないところで燃え上がり輝きを放つ黒い太陽をより好む」(1958/5/3 イタリアック体は原著者)といった言葉が日記に見受けられることから、コクトーがネルヴァルとも一脈通じる「黒い太陽」の捉え方をしていたと考えられなくもないが、たとえそうだとすると、いざ壁面にその姿を描くとなると、ロマン派の鬼才が直面せずには済んだ問題が持ち上がってくることになる。「黒い太陽」は、「太陽」という名詞に本来それとは相容れない色彩を表す「黒い」という形容詞が付加されている点において、撞着語法(オクシモロン)の一種であると見なされるが、それを視覚に訴えかけるように具象化する必要が生じるのである。こうした難題を解決したものが磔刑図の「黒い太陽」である可能性も否定しきれないが、子供の落書きを思わせるシンプルで屈託のない太陽の形状を見るにつけ、それが日記に綴られた所感とは異なる発想で描かれた可能性を疑わずにはいられない。ほかでもない磔刑図に「黒い太陽」が描かれている理由を説明する上でも、別の視座が必要であるように思われる。

共観福音書の記述とイエスの磔刑を描いた絵画と映画

沈着冷静な美術史家マリー＝アントワネット・キューンは、オカルト的な解釈に引きずられることなく、「兵士の背後で黒い太陽が輝いている。福音書によると、キリストが死んだ時、空が暗くなり、太陽は光を失ったという。ジャン・コクトーはこの悲劇の瞬間を表現している¹⁶⁾」と述べ、磔刑図中に「黒い太陽」が描かれた理由を「福音書」の記述を基に推察している。ここで彼女が言う「福音書」とは、具体的に言えば、『マルコによる福音書』、『マタイによる福音書』、そして『ルカによる福音書』を指しているものと考えられる¹⁷⁾。「共観福音書」と総称されるこれらの福音書には、イエスが死に至る間の3時間、具体的に言えば、第6刻(正午)から第9刻(午後3時)までの間、闇が全地を覆った旨が記されているのである。例えば、『ルカによる福音書』(新共同訳)には、「既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた」(第23章44-45節)という記述が見られるが、コクトーの「黒い太陽」に言及した際に、キューンの念頭には、おそらくこうした福音書の一節があったに違いない。

イエスの死に際して起こったとされる天空の異常な現象については、磔刑図を描いた画家たちやイエスの受難を映像で描いた映画人たちも、当然、無関心ではいらなかったことだろう。史上最高の宗教画とも称されるマティアス・グリューネヴァルト(1470?-1528)の『イーゼンハイム祭壇画』(1511-1516)の磔刑図〔図6〕も、「画家の中の画家」と讃えられたディエゴ・ベラスケス(1599-1660)のそれ〔図7〕も、暗闇の中に磔刑像や登場人物たちの姿を浮かび上がらせる

描き方がなされており、そこまで極端ではないにせよ、背景が暗色で描かれた磔刑図は枚挙に暇がない。先に言及したラファエロの『モンドの磔刑図』や初期ルネサンスを代表する画家アンドレア・マンテーニャ（1431-1506）の著名な磔刑図〔図8〕では青空が描かれているが、それらはむしろ例外的なケースであると言える。「太陽は光を失っていた」とする福音書の記述をどの程度まで尊重すべきなのか、その判断は当然ながら画家によって異なるはずであり、それが磔刑図による背景の色調の違いとなって顕われているのである。こうした事情は、イエスの受難を描いた映画においても変わらない。

キリスト教が偶像崇拜を禁止している（少なくとも、それを建前としている）以上、イエス・キリストの姿を映像で表現することには、誰しもが慎重にならざるを得ない。絵画作品でそれを描く場合にも同じことが言えるが、信仰の対象の具象化の度合いにおいて、特定の俳優がイエスに扮することになる映画は、その比ではないだろう。それにもかかわらず、「神の子」、いや、「子なる神」¹⁸⁾を生身の人間が演じる作品、即ち一神教にとっての禁忌を犯したと受け取られても仕方のない作品が、有名無名を問わず、古今を通じて少なからず存在している。古くは、アカデミー賞を11部門で獲得した巨匠ウィリアム・ワイラー（1902-1981）の古典的名画『ベン・ハー』（1959）¹⁹⁾やスキャンダルにまみれた作品と人生で知られるイタリアの鬼才ピエル・パオロ・パゾリーニ（1922-1975）が『マタイによる福音書』に忠実にイエスの生涯を映像化した『奇跡の丘』（1964）²⁰⁾、4時間を優に超える長尺物であり、豪華な俳優陣が惜しみなく投入されるなど、ハリウッドの威信をかけて制作された感があるジョージ・スティーヴンス（1904-1975）の『偉大な生涯の物語』（1965）²¹⁾、そして、キャストिंगの豪華さではこの大作に引けを取らず、テレビ用に制作されたこともあって6時間を超える異例の長篇となったイタリアの名匠フランコ・ゼフィレリ（1923-2019）の『ナザレのイエス』（1977）などが、時代考証を踏まえて制作された代表的な作品として挙げられる²²⁾。

イエスの受難に伴う天変地異

イエスの受難を描いたこれらの作品では、「キリストが死んだ時、空が暗くなり、太陽は光を失った」さまが、程度の差こそあれ、黒雲が立ち込め、太陽がその背景に追いやられる様子を通じて描かれているが、そこに激しい雷雨の描写を加えているのが『ベン・ハー』と『偉大な生涯の物語』である。とりわけ後者においては、刻々と不穏な気配を深めてゆく天空の様子が念入りに表現されており、イエスの絶命に付随する天変地異に関しては「天変」よりも「地異」に注目した映画が多いなかで、ひと際異彩を放っている²³⁾。だが、「天変」の表現にかけては、これまでに言及したもの以外に、大胆な発想で太陽そのものの描写に趣向を凝らした興味深い作品が存在する。過越祭でイエスの代わりに恩赦を受けて釈放された罪人の人生を描くリチャード・フライシャー（1916-2006）の異色作『バラバ』（1961）である。この映画の前半部でイエスの受難が描かれているが、そこでフライシャーは、「空が暗くなり、太陽は光を失った」理由を日蝕に求めた

のだった。1961年2月15日にイタリアのトスカーナの平原で実際に観測された皆既日蝕の映像がそのシーンに用いられ、それがモノクロで撮られていることも手伝って、他に類を見ない厳かで神秘的な雰囲気が醸し出されている。

イエスの受難にまつわる「天変」の記述に関しては、それが「ヘレニズム世界に頻繁に語り継がれた偉大なる人物の死と尋常ならざる自然現象の結び付けという伝統」を下敷きにしたものであり、「自然現象の類を記述したものとは全く想定されず、イエスの死の出来事の意味を象徴的に表現するために編集されたもの、キリスト教の用語を用いれば神学的意味付けによって記されたもの」とする見方が現在では一般的なようだが、その一方で、福音書の記述を「虚構」ではなく「その時特異な自然現象が起こったという事実の報告」と受け止める向きもあるという。イエスの死に伴う「闇」の意味について綿密な考察を行った土居由美は、「マルコ及びマタイ福音書著者は通常、彼らが事実／真理とみなしたものに対して時の表象を付与することが知られている故、ここで両著者が真昼の“闇”を事実即ち自然現象そのものの描写として描いた可能性も完全に排除されはしない」と述べている²⁴⁾。

共観福音書、なかでも太陽そのものの異変に言及した『ルカによる福音書』が伝える「天変」を「虚構」ではなく実際に起こった「自然現象」と考える場合、それが日蝕であった可能性に思い至るのは理の当然である²⁵⁾。とりわけ神の関与の証となる「奇跡」を認めたがらない人々の間で、そうした合理的な解釈が根強く支持されてきたのだった。もっとも、イエスが処刑された逾越祭の頃は日蝕が起こり得ない満月の時期にあたるだけに、この説は分が悪いが、それでも、「イエスの死(A.D.30か33)の前後1、2年の間にこの地方に実際に日食が起こり、ルカがそれについて知っていたものを、日付を混同しなおかつ誇張して記した²⁶⁾」と考えることは可能だろう。イエスの磔刑と日蝕に関連づける見方もあることを頭に入れ、改めてコクトーの磔刑図に描かれた「黒い太陽」に注目してみたい²⁷⁾。

コクトーの「黒い太陽」と1961年2月15日の皆既日食

コクトーの「黒い太陽」は、丸く描かれた太陽から光を表すシンプル極まりない9本の線が放射状に伸びている、ただそれだけの何の変哲もない類型化された、いや、記号化された太陽なのだが、前述したように、円形をしたその本体は黒く塗りつぶされている。光を放つ黒色の太陽。そうした特異な太陽の姿を目にする機会があるとすれば、それは皆既日蝕で太陽の全面が月に隠れてしまう一刻をおいてほかにないだろう。コクトーがリチャード・フライシャーの映画と同じ発想に基づいてイエスの受難の場面を彩った可能性が浮上してくる。『バラバ』の磔刑のシーンにトスカーナ地方で撮影された1961年2月15日の皆既日蝕の映像が用いられたことはすでに述べたとおりだが、それが観測されたエリアは、フランス南西部の大西洋に面したビスケー湾から南フランス一帯、トスカーナ地方、ロシアのウラル山脈を経てタイミル半島にまで至る広範囲なものだった。8時30分頃に約2分間にわたって繰り広げられた1961年の皆既日蝕は、まさに世紀の

天体ショーであり、その本番を迎える以前から、観測が可能な地域の人々の話題を集めたであろうことは想像に難くない²⁸⁾。そして、それは当然、コクトーの耳にも入っていた。当時、彼が活動の拠点を置いていたニース近郊の景勝地サン＝ジャン＝カップ＝フェラは、黒い太陽を観測できるエリアに含まれていたのである。日蝕当日、朝の8時に、コクトーは油煙を塗ったサングラスを手にはフェラ岬の突端に繰り出し、世紀の天体ショーを観察している²⁹⁾。

ノートルダム・ド・フランス教会聖母礼拝堂の装飾が行われたのは、日蝕が観測された年の2年近く前のことであった。さすがに、2年後に起こることになる皆既日蝕をコクトーが意識していたと考えるには少々無理があるように思えるが、それでも、当時の彼が現代物理学に疑義を唱える「超科学」に関心を持ち、フランスにおけるUFO研究の泰斗であったエメ・ミシェル (1919-1992) をはじめとする市井の学者たちと親交を結んでいたという事実、さらには、1961年2月15日の彼の日記に、同日の皆既日蝕を指して、「私たちがそうと知らずにいる途方もないメカニズムが存在する証拠のひとつ」という言葉が記されている事実を勘案すれば、1959年の時点でコクトーがすでに皆既日蝕という劇的な天文現象に特別な関心を寄せていた可能性も、あながち否定できない。同日の日記の中で、「皆既日蝕」«éclipse totale»という言葉が使われず、それを指して「青白い炎の光輪に囲まれた黒い太陽の現象」という形容が用いられている点からも、「黒い太陽」と皆既日蝕が彼の認識の中で無理なく結びついていたことが窺い知れる。

「黒い太陽」という不可解な表象に関して、たとえコクトーがネルヴァルばりの文学的な解釈を温めていたとしても、それを磔刑図の中で描くとなれば、そのコンテキストに沿った意味づけがなされるはずであり、さらに言えば、撞着語法とも受け取れる矛盾を孕んだこの概念を視覚的に表現するために、彼はその足掛かりとなる何らかの具体的なイメージを欲したはずである。皆既日蝕はこうした条件や欲求を叶え得るものであり、文学的な傍証としてキリスト教の教義を補強することになる「奇跡」を否定できる点も、コクトーにとっては好都合であったに違いない。皆既日蝕をイメージしながら、改めて磔刑図に描かれた「黒い太陽」を眺めると、9本の素朴な直線で描かれた太陽光が神秘的に揺めくコロナの光には似つかわしくもないようにも思えるが、通常であれば目にする機会がないコロナの様子は、さすがにコクトーにとっても想像の域を出なかったに違いなく、苦肉の策として、あのような様式化された太陽の描き方がなされたのかもしれない。

十字架の足元に描かれた巨大な薔薇

コクトーの磔刑図において、人物像以外で観る者の視線を惹きつけてやまない図案としては、漆黒の太陽もさることながら、画面中央下部に大きく描かれた薔薇の花〔図9〕を挙げないわけにはゆかない。それは十字架上の人物の釘を打たれた両足のすぐ下に描かれている。あたかも足から滴り落ちる血が薔薇の花に変容したかのように見えるが、薔薇の輪郭線と血の滴が同じ色で描かれている点からも、こうした配置が偶然ではなく意図的になされたものであることが窺える。

十字架の足元に何かが描かれるとすれば、マンテーニャの磔刑図にも見られるように、イエス

の血の雫を浴びる人類の始祖アダムの頭蓋骨であることが多いが³⁰⁾、コクトーはそれを一輪の巨大な薔薇の花に置き換えたのである。彼の磔刑図には下絵が残されており、そこに薔薇の花は描かれていないため、壁面に絵筆を走らせるなかで不意に閃いたアイディアだったのかもしれない。「まさに薔薇こそ世界に冠たるシンボリズムの王者だという気がする」と述べたのは澁澤龍彦だが³¹⁾、コクトーの創意は、薔薇が「キリスト教のイコノグラフィーにおいて、キリストの血を受けた杯、その血の滴の変容、キリストの傷口のシンボルとなる」ことを意識したものであると考えてよいだろう³²⁾。他方、薔薇と十字架の組み合わせには、フリーメイソンと並ぶ西洋史上屈指の秘密結社である薔薇十字団を否応なく連想させるものがある。

「薔薇十字」という名称自体は、この秘密結社の伝説的な（おそらくは架空の）始祖クリスチャン・ローゼンクロイツの名字が「薔薇」（Rosen）と「十字架」（Kreuz）の二語から出来ていることに由来しているが、フリーメイソンとの関係も含めて、数々の陰謀論に彩られてきたその実態には今なお不明な点が多い。薔薇十字の思想や習俗は13世紀後半に興ったドイツ神秘主義運動が耕した土壌で育まれたと考えられるが、それをフランスに根付かせた最大の立役者が、作家、美術評論家、演出家、興行主などのさまざまな顔を持つエキセントリックな神秘思想家ジョゼファン・ペラダン（1858-1918）である。1888年に彼は侯爵の爵位を有する詩人スタニスラフ・ド・ガイタ（1861-1897）とともに薔薇十字カバラ団を創設している。たが程なく、キリスト教（カトリシズム）と神秘主義思想の融合を目指すペラダンとオカルティストのガイタとの間に不協和音が生じ、両者は1890年に袂を分かつことになる。その際にペラダンが新たに組織したのが、カトリック薔薇十字団である³³⁾。その分裂劇が「薔薇戦争」と揶揄されたこれら二つの団体に限らず、「薔薇十字」という言葉を冠した秘密結社は歴史上に少なからず存在したが、その性格は決して一様ではなく、薔薇十字団の実態をより一層捉え難いものになっている。唯一共通しているのが、それらの名称に共通して含まれる薔薇と十字架から成るシンボルであり、この視覚に訴える組み合わせの妙こそが、確固たる実態に欠ける秘密結社の存在が今日まで脈々と語り継がれることになった最大の要因であると言えるかもしれない。

秘密結社の紋章を含めてさまざまな薔薇十字の図が考案されてきたが³⁴⁾、その中でも特によく知られ、多方面に影響を与えてきたのが、医師にして薔薇十字思想に通暁した錬金術師としての顔も併せ持つロバート・フラッド（1574-1637）がヨアヒム・フリジアス（Joachim Frizius）の名義で刊行した『至高善』*Summum Bonum*（1629）の標題紙に描かれている薔薇十字図〔図10〕である。そこには、十字架の形をした茎の上で一輪の薔薇が大輪の花を咲かせている様子が描かれている。花の周りには二匹の蜜蜂が描き添えられているが³⁵⁾、その構図に関して注目したいのは、薔薇の花の上ではなく下に十字架が描かれている点である。それに対して、コクトーの磔刑図の薔薇は十字架の下に配置されている。しかも、蜜蜂は一匹も描かれておらず、一輪の薔薇の図という点以外に両者の共通点は特に認められない。十字架と組み合わせで描かれているからといって、それを薔薇十字団に関連する意匠であると見なすのは、いささか早計に過ぎる判断であ

と言わざるを得ない。

フレッド・A は、観る者に最も強い印象を与える意匠として十字架の足元の薔薇を取り上げ、「単純な語呂合わせになるが、多かれ少なかれフリーメイソンと類縁関係にある秘密結社「薔薇十字」をそこに読み取ることになる」と指摘している。彼はさらに踏み込んで、コクトーがその異才を高く評価した作曲家エリック・サティ（1866-1925）を薔薇十字団の「御用作曲家」と見なした上で、「コクトーなら、そのいくつかの主張、とりわけ性衝動を神秘的で魔術的な実践へと転化することを欲する主張に共鳴し得たであろう」と述べているが³⁶⁾、条件法で書かれていることからわかるように、こうした指摘は臆測の域を出るものではない。

1891年に、ペラダンが創設したカトリック薔薇十字団の公認作曲家兼聖歌隊長となったサティは、『薔薇十字団の最初の思想』（1891）や『薔薇十字団のファンファーレ』（1892）といった小品を作曲しているが、その後まもなく両者は決別することになるため、彼が薔薇十字を標榜する秘密結社に関わった期間は、わずか一年余りに過ぎない。サティと薔薇十字団を結びつけて考える際には、この点に留意する必要がある³⁷⁾。さらに言えば、コクトーがサティと知り合ったのは1915年のことであり、彼が磔刑図を構想した時点で、この音楽界の異端児が没してからすでに30年以上もの年月が経っていた。サティを介してコクトーと薔薇十字団を結びつけるフレッド・Aの発想には、少々度を越した論理の飛躍が認められる。マリー＝アントワネット・キューンも薔薇の意匠に絡めて薔薇十字団に言及しているが、より慎重な物言いに徹している。彼女は、「薔薇と十字架の組み合わせには否応なく薔薇十字団との関連を疑わせるものがある。しかし、この点について我々の問いに答えることができるジャン・コクトーはもういないし、いたとしても答えてはくれなかっただろう」とだけ述べ、しかも、この短い指摘を本文中ではなく脚注に収めている³⁸⁾。

青色で彩色された薔薇の花

フリーメイソンと同様に薔薇十字団に関しても、コクトーとの接点を具体的に裏付ける確かな証言や資料は、現在のところ見つかっていない。彼の磔刑図に薔薇十字の思想が盛り込まれていると考える根拠は薄弱であると言わざるを得ない。だが、たとえそこに明確な意味がこめられてはいなかったとしても、十字架と薔薇の花を隣接する位置に描けば観る者が薔薇十字団との関連性を詮索するであろうことを、コクトーが予想し得なかったとは考えにくい。実態が判然としない秘密結社やオカルト思想と結びつけて解釈されることを予め見越した上で、彼はあえて挑発的に薔薇と十字架を組み合わせさせて描いたのではないだろうか。さらに、これら二つの意匠を切り離して別個に熟視すると、それぞれに観る者の頭を悩ませる謎が仕掛けられていることに気づかされる。まずは薔薇の花の色調に注目したい。薔薇色というよりも赤に近い色で引かれた輪郭線とは裏腹に、花卉の彩色には青が使われている。つまり、「青い薔薇」がそこに描かれているのである。

ドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリス（1772-1802）が「愛を共通根とする神と人と自然の調和

と結合への憧憬」を表象するものとして描いたように³⁹⁾、青い花は「夢想された非現実の意味を持つ」とされるが、なかでも「青い薔薇」は特別視され、「不可能なことのシンボル」と見なされてきた⁴⁰⁾。そうした「青い薔薇」の持つ象徴性を意識しながら、コクトーは十字架の足元で開花した薔薇の花弁に青を配色したのだろうか。薔薇十字を連想させ、なおかつその色でも観る者を惑わせる何とも面妖な意匠だが、青が聖母マリアを象徴する色であることを、十分に考慮する必要があるだろう⁴¹⁾。「青い薔薇」は、自らの磔刑図が聖母マリアを祀る礼拝堂の装飾の要となることを意識した趣向であったのかもしれない。日記に散見する「教会の検閲」や「聖職者の検閲」、「教会の厳しい監視」といった言葉からも察せられるように、コクトーは常々、自作に対して教会側から横槍が入ることを警戒していたのだった。薔薇の意匠について、壁画制作の依頼主である教会関係者からその意味を問い質されるようなことがもしあったとすれば、彼はおそらく、それが青く着色されていることを強調した上で、「東西双方の教会の伝統において、天の青と純潔の白は、衣装ばかりでなく聖母にまつわる花々でも特に聖母を連想させる色彩である⁴²⁾」といった弁明を展開し得たに違いない。

重ねて釘を打たれたイエスの両足

薔薇の色以上に深い謎を秘めているのが、重ねた状態で十字架の軸木に釘で打ち付けられた両足である。フレッド・A はこうした描き方に関して、「しばしばアルビジョワ派の異端者たちによって広められたマニ教的な逸脱と考えられてきた」と述べている。左右それぞれの足に釘を打つのではなく、両足を重ねて一本の釘で十字架に固定する。そうした磔刑の作法が、マニ教やその影響を受けたキリスト教の異端派であるアルビジョワ派（南フランスに広まったカタリ派の一派）の慣習に基づいている可能性が、ここで示唆されている。マニ教とアルビジョワ派を結びつける思想が、ほかでもないグノーシスである⁴³⁾。カトリック教会は正統の名においてこの思想を徹底的に弾圧し、そのために多くの血が流されてきたのだった⁴⁴⁾。グノーシスは異端思想やオカルト思想を語るためのキーワードとなる重要な言葉だが、その意味するところを偏りなく理解するのは容易なことではない⁴⁵⁾。

カトリックの礼拝堂の装飾にグノーシス主義の影響が色濃いマニ教に起源を持つ意匠が用いられているとすれば、それはそれで興味深いことだが、コクトーがそのことを意識しながら両足と釘の意匠を造形したとは考えづらい。なぜなら、重ねられた両足に一本の釘が打たれている描写は、たとえその発想の源が異端的・異教的なものであったとしても、古今の磔刑図におけるイエスの両足の描き方としては至極ありふれたものであり、むしろその主流を占めているとさえ言えるからである。本論ですでに言及した著名な磔刑図でいえば、グリューネヴァルトの『イーゼンハイム祭壇画』に描かれた苦痛に歪むイエスの両足も重ねて釘を打たれており、マンテーニャやラファエロの磔刑図も同様の描き方がなされている。両足それぞれに釘が打たれた様子を描いたのは、漆黒の無地の背景に十字架上のイエスの姿を浮かび上がらせたベラスケスのみである⁴⁶⁾。

近現代美術が産み出した磔刑図においても、こうした傾向に変わりはなく、例えば、民族衣装をまとったブルターニュ地方の農婦と十字架上のイエスを同一画面に描いたポール・ゴーギャン（1848-1903）の独創的な磔刑図『黄色いキリスト』（1889）〔図11〕でも、やはりイエスの両足は重ねた状態で釘を打たれている⁴⁷⁾。異色の磔刑図といえば、制作時期がコクトーの磔刑図のそれにより近いスペイン（カタルーニャ）の鬼才の作品を挙げないわけにはゆかない。独自の手法でシュルレアリスムの可能性を開拓したサルヴァドル・ダリ（1904-1989）は、16世紀スペインのキリスト教神秘主義者「十字架のヨハネ」の作品から想を得たとされる『十字架の聖ヨハネのキリスト』（1951）〔図12〕において、宙に浮かんだ十字架に磔にされたイエスを、大胆にも、その頭上からのアングルで描いたのだった。手足を十字架に打ち付ける釘が描かれていない点は極めて異例だが、イエスの両足は、ここでも重ねて描かれている⁴⁸⁾。

古くはイエスの揃えた左右の足にそれぞれ釘が打たれている磔刑図が一般的であったが、どうやら13世紀の中頃から、重ねた両足が一本の釘で軸木に打ち付けられた描写が好んで行われるようになったらしい。使われる三本の釘（左右の手の一本ずつ、両足に一本）が「三位一体を象徴すると解される」ためであるという⁴⁹⁾。フレッド・Aの指摘には何らかの根拠があるものと思われるが、無理にマニ教と関連づけて考える必要もなさそうである。いずれにせよ、この釘を打たれた両足の意匠に関して、そこに仕掛けられた本当の謎は、釘の打ち方やその数にあるのではない。フレッド・Aは、巨大な薔薇の花の華やかさに目を奪われた来場者がともすれば見過ごしがちなこの意匠に着目しておきながら、重要な点を見落としている。ここで本当に注意しなければならないのは、左右の足の位置関係である。

左足の上に重ねられた右足／右足の上に重ねられた左足

コクトーの磔刑図においては、左足が右足の上に重ねられた状態で十字架の軸木に打ち付けられている。左足が上か、右足が上か。些細なことのように見えて、実はその違いが重大な意味を持つのである。「多くの民族において、からだの右半分は男性的で天を志向し、左半分は女性的で地に属すると見なされ」、キリスト教においても、「神の右手（Dextera Dei）は力と支配の象徴である」と考えられるなど、右手が尊重される一方で、左手は非常に強い禁忌の対象とされてきたのだった。左と右に関する優劣の考え方が認められるのは、何も手に限ったことではない。「日の出の方角である東、ないしは昼に呼応している南は、良い、正しい、右の側と見なされ、西と北とは、禍いをもたらす、没落と夜を志向する、左の側と見なされた」ため、足に関しても、「イエスが三本の釘で十字架に打ち付けられていて、両足がそのうちの一本で打ち付けられている場合、右足はつねに左足の上に重ねられているが、これは、悪に対する善の、感性的・肉的なものに対する精神的・霊的なものの支配を暗示しようとするものである」と考えられてきたのである⁵⁰⁾。

コクトーの磔刑図においては、キリスト教における左右の意味づけを明確に否定する描き方がなされている。キリスト教に関する該博な知識と強い問題意識を持つ彼のことである。それが単

なる誤謬であったとは考え難い。彼は左右をあえて逆に描いたのである。ただ、こうした規範からの逸脱は一見してそれとわかるものではなく、たとえ壁画の注文主である教会に気づかれ、真意を問い質されたとしても、単純な左右の取り違えを釈明して批判をかわすことができたに違いない。コクトーはそれがダリの発言であることを断った上で、「検閲があればこそ、画家たちはそれを乗り越えるための策略をあれこれめぐるものであり、その結果、覆い隠された放蕩が教会の定める徳の規範の凡庸さに謎や影を投げかける」(1956/10/19) という意味深長な言葉を日記に書き留めている。実は、本論で取り上げた磔刑図の中で唯一、コクトーのものと同様に、イエスの足の左右を反転させた破格的な描き方がなされているのが、先に言及したダリの磔刑図『十字架の聖ヨハネのキリスト』なのである⁵¹⁾。両者の制作年を考えれば、コクトーがダリの磔刑図における左右の足の描写に隠された企みを見抜き、自らの磔刑図にそれを応用した可能性も考えられる。

旧知の仲だった両者は、何らかの共通する考え方に基づいて各々の磔刑図に同様な趣向を凝らしたのだろうか。だとすれば、それはどのような考え方なのだろうか。現時点で筆者はこれらの問いに対する明確な答えを持ち合わせていないが、コクトーとダリが異端的な思想を共有していたと考えるには、やはり無理があるように思える。彼らはそれぞれの思惑で以て十字架上のイエスの右足の上に左足を重ねて描いたに違いなく、そこに共通する思想の存在を探ろうとしても、おそらく徒労に終わるだろう。ダリはともかく、コクトーがイエスの左右の足を逆に描いたのは、それが何らかの系統だった思想に基づく趣向であったと考えるよりも、揺るぎない権威と化したキリスト教の思想体系に揺さぶりをかける目的でそうした作為が加えられたと考える方が理に適っているように思える。

本論で焦点をあてた「黒い太陽」と「青い薔薇」についても、同じことが言えるかもしれない。その思想に根ざしているわけではないにせよ、こうした図案を通じて観る者にフリーメイソンや薔薇十字団を否応なく連想させることで、コクトーは大胆にも、カトリックの礼拝堂の中に異端の種を蒔こうとしたのではないか。そして、前者に対しては自然現象である皆既日食を表現したものであることを、後者に対しては青が聖母マリアを象徴する色であることを、それぞれに教会側を納得させるための、いや、煙に巻くための言い分として主張する用意があったに違いない。ひとつの図案に二つの意味を付与し、一方で教会を挑発し、もう一方でそうした思惑を巧みにカムフラージュする。そうした作業に創作者としてのやりがいと手応えが感じられたからこそ、晩年のコクトーは残された貴重な時間と労力を惜しみなく礼拝堂の壁画の制作に費やすことができたのではないだろうか。

注

- 1) イギリスでは政教分離の原則が適用されていないと見ることもできそうだが、政教分離が信教の自由を制度的に保障するものである点を重視すれば、「非宗教（ライシテ、laïcité、宗教からの独立）の原則を遵守し、国教を廃止しそして宗教団体に政治上の権力を行使させないだけでなく、公の場から宗教色を排除することにより、宗教の領域と政治の領域を分離している」フランスが「分離型」の政教分離を徹底しているのに対して、「国教を定める一方において、国教以外の宗教に対しても広範な宗教的寛容を認め、実質的に信教の自由を保障する」イギリスにおいては、緩やかな「融合型」の政教分離が行われていると考えることもできる。Cf. 新田浩司「政教分離と市民宗教についての法学的考察」、『地域政策研究』第14号、高崎経済大学地域政策学会、2012年、27頁。
- 2) 理想的な国家像を諧謔と皮肉を交えながら描いた『ユートピア』（1516）で知られる人文主義者トマス・モア（1478-1535）は、ヘンリー8世の離婚に際して、それを認めないカトリック教会の見解を支持したばかりか、俗人である国王が教会の首長を務めることに明確な異議を唱えたため、反逆罪に問われて斬首刑に処せられた。ハリウッドの名匠フレッド・ジンネマン（1907-1997）の『わが命つきるとも』（1966）は、死をも厭わずに自らの信念を貫き通したモアの人生を描き、アカデミー賞を6部門において獲得した作品だが、その原題である *A Man for All Seasons* は、大法官にまで上り詰めた彼の渾名から採られている。この言葉からも、名文家にして毒舌家でもあったモアが国民の絶大な信頼と人気を勝ち得ていたことが窺い知れる。ちなみに、考案者の医師（ジョゼフ・イニヤス・ギヨタン）の名前に由来するギロチンが開発されたのはフランス革命期のことだったが、それ以前の時代の斬首刑がどのように行われていたのか、この映画を通じてその実態を垣間見ることができる。
- 3) イギリス学士院の Academy Research Project として設けられた British Religion in Numbers のデータによると、1990年代以降、カトリックの信者数は全人口の10%前後で横ばい状態にあるのに対して、イングランド国教会の信者数は約40%から約20%へと半減しており、それと反比例するかのように数を増やしているのが無宗教者である。カトリックは、イギリスに限って見れば、世界的に進む宗教離れの影響をそれほど被っていないことになる。興味深い現象だが、迫害を受けながらもカトリック教徒であることを選択してきた一定数の人たちの揺るがない信仰心の顕れをそこに認めることができるかもしれない。なお、その正式な国家名称からもわかるように、イギリスは連合王国であり、近年、独立の機運が高まっているスコットランドではイングランド国教会とは異なるスコットランド国教会が主流を占め、北アイルランドではカトリックとプロテスタントの対立が隣国アイルランドを巻き込んだ武力闘争にまでエスカレートするなど、四つの連合構成国（カントリー）の宗教事情が決して一様ではない点も考量する必要があるだろう。
- 4) レスター広場周辺のこの境界は、ソーホー地区の南東部に隣接しており、ソーホーの一角と見なされることが多い。コクトーが「売春婦たちの街」（1959/7/22）と形容したとおり、この境界は20世紀中葉まで、性風俗産業が栄えたロンドンきっての歓楽街だった。ソーホーはヨーロッパ有数の中華街を擁することでも知られており、コクトーの日記にも、「「香港」というぱっとしない中華料理店で昼食。私たちに給仕してくれた中国人の男が、私がフレスコ画を描いている様子を見に行ってもよいか、と尋ねてきた」（1959/11/4）という記述が見受けられる。ちなみに、教会に隣接する小劇場は、元々パンク・ロックをプログラムの中心に据えたミュージック・ホールだった。ノートルダム・ホールと呼ばれていた1970年代には、当時、一世を風靡していたセックス・ピストルズやロック界の大御所ローリング・ストーンズが出演したこともあるという。本論の本文及び注釈中の引用等に添えた括弧付きの年月日（年/月/日）は、すべてこの注釈の末尾に挙げるコクトーの日記集『定過去』の日付である。巻号及び頁数は割愛した。なお、本論中の訳者が示されていない引用文は、すべて拙訳によるものである。Jean Cocteau, *Le Passé défini I-VIII*, Gallimard, 1983-2013.
- 5) パノラマとは「円形や多角形の建物の内部の壁面に風景を描き、その前に人形などを置き展覧させる見世物」のことであり、「18世紀末にイギリスで始り、19世紀に各国で人気を博した。」（『ブリタニカ国際大百科事典』）20

世紀に入り、映画が急速に普及するにつれて、多くのパノラマ劇場が映画館に姿を変えてゆくことになった。

- 6) ボワローは建材に鉄骨を用いた先駆的な建築家のひとりとして知られる。歴史に名を刻んだ最初の鉄骨造の建造物といえば、1889年のパリ万博のシンボル・タワーとして建立されたエッフェル塔が思い浮かぶが、その生みの親で「鉄の魔術師」と称されたギュスターヴ・エッフェル（1832-1923）とともにパリの7区にある世界最古の百貨店「ボン・マルシェ」（1852年創業）を設計したルイ＝シャルル・ボワロー（1837-1914）は、ルイ＝オーギュストの息子である。
- 7) 作者は、20世紀のフランスを代表するタペストリー作家のひとりであるドム・ロベール（1907-1997）である。ベネディクト会の修道士でもあった彼の最大の作品である『ノートルダム・ド・フランス』は、教会の祭壇に飾られていなければ、それが宗教画だとは誰も思わないだろう。ロベールはラングドック地方の古都カルカソンヌに程近いアン・カルカの聖ベネディクト修道院に1930年より所属していたが、1958年に同修道院に復帰するまでの10年間をイギリスのバックファスト修道院で過ごしており、その時期にノートルダム・ド・フランス教会のタペストリーを制作する機会に恵まれたものと考えられる。彼の死後、その業績を顕彰する目的でドム・ロベール協会が設立された。その公式ウェブサイト（<http://domrobert.com/index.php>）によると、ロベールは1950年代に人物を描くことをやめ、もっぱら動植物を画題にした作品を制作するようになったという。『ノートルダム・ド・フランス』は、彼が人物を描いた最後のタペストリー作品であると見られる。ロベールはちょうどこの時期から宗教的な題材を取り上げなくなるため、その過渡期に制作されたこの作品が祭壇画らしくないことにも合点がいく。
- 8) 「リユルサ」とは、タペストリー芸術の復興に尽力した画家ジャン・リユルサ（1892-1966）のことである。「二十の顔を持つ男」と呼ばれたコクトーは、自らもタペストリー作品を手がけており、この織物装飾芸術にも通暁していた。
- 9) フランス中部のマッシフ・サントラル（中央群山）北西部に位置するオービュッソンは、15世紀よりタペストリーやカーペットの製造で名を馳せ、2009年には手織りにこだわった伝統的な織物の製法がユネスコ無形文化遺産に登録されている。コクトーの代表的なタペストリー作品である『ユディットとホロフェルネス』（1948）の製造を請け負ったのもオービュッソンの工房だった。
- 10) コクトーの磔刑図が孕む数々の謎の中でも最も重要なものに思える「魚形の目をした緑の男」の正体については、拙論「コクトーの磔刑図―ノートルダム・ド・フランス教会聖母礼拝堂の三面壁画に関する一考察―」（*GALLIA*、大阪大学フランス語フランス文学会、第53号、2014年）を参照されたい。
- 11) コクトーの晩年の日記には、「地上への憎しみ」、「人間に対する嫌悪感」、「天上に寄せる唯一の希望」を「カトリックの精髓」と捉えるなど（1957/12/24）キリスト教の教義を辛辣に批判する言葉や神の死を宣言したフリードリヒ・ニーチェ（1844-1900）の宗教観と軌を一にする記述が散見する一方で、「凡庸なカトリック教徒になることはあっても、ニーチェの例に倣うことはできそうにない。私は常にこの上ないキリスト教徒であり続けたいと願っている」（1958/8/14）という一見相矛盾した言葉が綴られていたりする。「地中海人」コクトーはギリシャ神話やギリシャ悲劇の世界に対する憧憬の念を隠さなかったが、キリスト教に対する彼のスタンスには、何とも捉え難いものがある。
- 12) ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン『世界シンボル大事典』、金光仁三郎、熊沢一衛、小井戸光彦、白井泰隆、山下誠、山辺雅彦訳、大修館書店、1996年、590頁。
- 13) Cf. Fred. A. *Notre-Dame de France à Londres*, Société des Amis de Jean Cocteau / Méditerranée, publié le 8 février 2018. 「大いなる業」による物質あるいは精神の変容のプロセスは、一般に黒化（ニグレド）、白化（アルベド）、赤化（ルベド）の3段階、あるいは白化と赤化の間に黄化（シトリニクス）の段階を加えた4段階から成るとされるが、赤化のあとに黄化が起こるとする見解や（Cf. 種村季弘『黒い錬金術』、白水Uブックス（白水社）、1991年、26頁）、白化と赤化の間の段階を黄化ではなく緑化とする見解も見受けられる（Cf. コリン・ウィ

- ルソン、ジョン・グラント編『「未知」への事典』、中村保男訳、平河出版社、1991年、137頁）。
- 14) 訳文は入沢康夫のものを用いた。Cf. 安藤元雄、入沢康夫、渋谷孝輔編『フランス名詩選』、岩波文庫（岩波書店）、1998年、104-105頁。
- 15) 「後景の夜の空に虹の橋とともに燦然と輝く太陽」が描かれていることから、「太陽自体は黒くないのに、デューラーの太陽は「黒い太陽」と称されて、ジェラルド・ネルヴァルをはじめとする後代の詩人たちに詩想を授けた。」Cf. 種村季弘『黒い錬金術』、192-193頁。ちなみに、「黒い太陽」を描いた画家といえば、フランス象徴主義の一方の旗手であったオディロン・ルドン（1840-1916）の名前も言い落とせない。印象派の画家たちが光を追い求めた時代に光を呑み込むブラックホールのような漆黒の闇に魅せられた孤高の画家は、そのキャリアの初期に眼球を思わせる「黒い太陽」を繰り返し描いている。
- 16) Marie-Antoinette Kuhn, *Notre-Dame de France de Londres ... et Jean Cocteau in Mémoires de l'Académie Nationale de Metz*, Académie Nationale de Metz, 2015, p.199.
- 17) これらの三福音書は、記述に共通点が多いことから「共観福音書」と呼ばれる。それらに『ヨハネによる福音書』を加えた新約聖書の正典である四福音書に関しては、「諸説から最も蓋然性の高い仮説に拠れば、紀元70年初頭から半ばに最古の福音書マルコ、次いで80年代にマタイ、ルカ両福音書、最後に90年代にヨハネ福音書が成立したものと想定される。」Cf. 土居由美「イエスの死を記述する物語―“闇”及び“最後の叫び”の表象を巡って―」、『駒澤大学佛教學部論集』第42號、2011年、263頁（140頁）。
- 18) ユダヤ教、イスラム教とともに世界三大一神教に数えられるキリスト教は、言うまでもなくイエス・キリストを直接的な信仰の対象とする宗教である。したがって、イエスという存在の捉え方が宗教としての存立にも関わる重要な意味を持つことになる。もしイエスを「神の子」と捉えれば、彼の父である神が別に存在することになり、その結果、信仰の対象がイエスと神に二分され、一神教としての存立基盤が崩れてしまう。こうした不都合を解消するための理論武装の決め手として導入されたのが、イエスを「父なる神」、「聖霊としての神」とともに唯一神の三つのペルソナ（位格、人でいえば人格）を構成する「子なる神」として理解する、いわゆる「三位一体」の考え方である。「三つのペルソナは、父は生まれず、子は父によって生まれ、聖霊は父から子を通して発出するという点で、その起源においてだけ相違する」（中沢宣夫「三位一体」、『日本大百科全書（ニッポニカ）』、小学館）とされるが、理解が難しいのは、通常、白い鳩の姿で表現される「聖霊としての神」だろう。定評のあるキリスト教神学の入門書を著したアリストアー・エドガー・マクグラスは、ユニークな比喩を使って「聖霊は長いこと三位一体のシンデレラであった。他の二人の姉妹は神学の舞踏会へと行くのに、聖霊はいつも取り残されてきたのである」と述べ、このペルソナの特異性、つまりは他の二つのペルソナと整合性をとることの難しさを指摘している。Cf. アリストアー・E・マクグラス『キリスト教神学入門』、神代真砂実訳、教文館、2002年、421頁。
- 19) シネマ作品（スクリーンのアスペクト比は2.88対1）として制作された『ベン・ハー』は言わずと知れたスペクタクル映画の金字塔だが、「キリストの物語」という副題が物語るように、ローマ帝国を舞台とするこの大作は、チャールトン・ヘストン演じる主人公のベン・ハーの臥薪嘗胆の日々と劇的な復讐劇を描くと同時に、彼の人生と並行して（時に交錯する形で）イエス・キリストの生涯をも描いた宗教映画としての側面を併せ持っている。注目すべきは、カメラのアングルに工夫を凝らすことで、イエスの顔をあえて映さない周到な演出がなされている点である。キリスト教が偶像崇拜を禁ずる一神教であることを意識させる演出だが、ワイラーはそれに伴う表現上の制約を逆手にとってイエスに確固たる存在感を付与してみせたのだった。
- 20) 観る者の感情移入を拒むかのような不敵な面構えのイエスを演じているのは、スペインで反体制活動をしていた演技経験のない人物であるという。パゾリーニはイエスをユダヤ教の革命児として捉えていたのかもしれない。ちなみに、聖母マリア役を演じているのは、彼の実母である。この映画では、パゾリーニ作品の例にもれず、音楽の使い方にも趣向が凝らされている。要所でバッハの『マタイ受難曲』が奏でられるのは当然だとして

も、映画のクライマックスとも言えるヴィア・ドロローサ（十字架への道行き）からイエスの死にかけての場面でモーツァルトの『フリーメイソンのための葬送音楽』が使われている点には、興味をそえられるものがある。フリーメイソンとカトリック教会との間には、長きにわたる確執の歴史があった。パゾリーニはそれを承知の上で、あえてフリーメイソンのための葬送曲を十字架上で息絶えたイエスのために用いたのだろう。生涯を通じて人と作品の両面においてさまざまな物議を醸した彼らしい演出であると言える。

- 21) キリスト教圏の俳優にとってイエス役を引き受けるのに相当な覚悟が必要であることは想像に難くない。事実、名のある俳優がイエスに扮するケースは稀であると言える。それだけに、『偉大な生涯の物語』は、ペルイマン作品の常連であったスウェーデンの名優マックス・フォン・シドー（1929-2020）がイエス役を演じている点においても注目に値する作品である。
- 22) イエスの受難を描いた映画でありながら時代考証を端から放棄した異色作が、ノーマン・ジュイソン（1926-）が監督を務めた『ジーザス・クライスト・スーパースター』（1973）である。のちに『キャッツ』や『オペラ座の怪人』で名を馳せることになる作曲家アンドリュー・ロイド・ウェバー（1948-）の出世作となったロック・ミュージカル（1971）を、ポップなタイトルはそのままに映画化したものだが、興味深いことに、この作品では十字架上で絶命するイエスの姿が逆光で撮影されている。これは、パゾリーニが『アポロンの地獄』（1967）のオイディプスの父親殺しの場面で執拗に用いた手法である。イエスが強い陽光の下で死を迎えるさまを描くことは、福音書の記述を真っ向から否定するに等しい行為だが、奇想天外な演出が多々施されたこの映画にあっては、そうした細部における演出上の新機軸は容易く看過されてしまうに違いない。また、比較的新しいところでは、アメリカの作家ダン・ブラウン（1964-）のベストセラー小説『ダ・ヴィンチ・コード』（2003）に先駆けてイエスとマグダラのマリアの関係をめぐる異端的な伝承を取り上げたマーティン・スコセッシ（1942-）の問題作『最後の誘惑』（1988）、そして、拷問や磔刑のシーンにおける凄惨な描写が物議を醸したメル・ギブソン（1956-）の『パッション』（2004）に、過去の名作に伍していけるだけの強烈な個性とオリジナリティの追求の跡が認められる。
- 23) 「地異」に関して、共観福音書には、イエスが息を引き取ると同時に「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が避け」た様子が記録されている（『マタイによる福音書』（新共同訳）第27章51節）。
- 24) Cf. 土居由美、前掲論文、248頁（155頁）、260頁（143頁）。
- 25) 『古事記』や『日本書紀』が伝える日本神話の「天の岩屋戸（天岩戸）」のエピソードに関しても、しばしば同様の解釈がなされてきた。日本神話の最高神とされる天照大神は太陽神としての性格も持ち合わせているため、この女神が弟の素戔鳴尊（須佐之男命）の狼藉に耐えかねて天の岩屋戸に閉じこもった際に、国中が暗闇に包まれることになった。たまりかねた神々が一計を案じて天照大神を岩戸から誘い出すことに成功し、ようやく光と秩序が回復されるわけだが、不意に遭遇した皆既日蝕に驚愕させられたであろう太古の人々の記憶が、こうした神話ならではの風変わりなエピソードの根底にあったとしても不思議はない。
- 26) 土居由美、前掲論文、251頁（152頁）。
- 27) 「黒い太陽」に関して、錬金術との関連を指摘したフレッド・Aは、加えて、それが「エルサレムに暗闇をもたらした日蝕」を示唆している可能性にも言及している。
- 28) ヘロドトスの『歴史』を通じて、紀元前に古代ギリシャの哲学者タレスが日蝕を予言し、的中させたエピソードが知られているが、日蝕の予測には、時の為政者に利するものがあるだけに、世の東西を問わず、古より研究が重ねられ、まだ天動説が信じられていた時代に、すでに過去の観測データを基に精度の高い予測が行われていた。天文学の発展とともにその精度は飛躍的に高まり、現在では、綿密な計算式を用いて蝕の始まりから終わりまでを分秒単位で予測することができるようになっている。ちなみに、20世紀にフランスで皆既日蝕が観測されたのは、1912年4月17日、1961年2月15日、そして1999年8月11日の三度であり、次に観測できるのは、2081年9月3日であるという。日本では、2035年9月2日にその機会が訪れる。本州において皆既日食が見られるのは148年ぶりらしい。

- 29) コクトーの日蝕当日（1961年2月15日）の日記によると、日蝕を観察するためにはサングラスだけでは不十分であり、それに油煙（すす）を塗る必要があることを、彼は事前にラジオを通じて知っていたらしい。当時の人々が未知の現象である皆既日食を期待と不安を抱えながら待ち受けていたことが窺えるエピソードである。
- 30) 「キリストは十字架の上で自分自身を犠牲にすることによって、人類の贖罪、すなわち人類が代々背負ってきたアダムの原罪からの救済の可能性をもたらししたのであった。そこで中世の著述家たちは、人間の堕落と磔刑との間に何らかの「歴史的」なつながりを確立しようと努めた。」その結果、「磔刑の場所こそ、アダムの埋葬された場所に他ならない」とする見方がなされるようになった。「十字架の根元に見られる頭蓋骨は、単にゴルゴタ（「されこうべ」の意）の地名を暗示するだけでなく、アダム自身の頭蓋骨をも表わして」おり、そこにイエスの足から流れ落ちる血が注がれることで、アダムが犯した罪、つまり原罪が洗い浄められると考えられてきたのである。Cf. ジェイムズ・ホール『西洋美術解説事典』、高階秀爾監修、高橋達史他訳、河出書房新社、2010年（初版：1988年）、212-216頁。
- 31) Cf. 澁澤龍彦『フローラ逍遥』、《平凡社ライブラリー》、平凡社、1996年128-129頁。
- 32) Cf. ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン、前掲書、798頁。
- 33) 正式名称と思しき「聖堂と聖杯の審美的カトリック薔薇十字団 (l'Ordre de la Rose-Croix catholique et esthétique du Temple et du Graal)」等のより言葉数の多い名称も使われるが、ここでは「カトリック薔薇十字団」という略称を用いた。澁澤龍彦（1928-1987）が遺した数多くの著作のうちでも特に名著の誉れが高いもののひとつに『悪魔のいる文学史―神秘家と狂詩人―』があるが、そのうちの一章がペラダンとガイタに関する記述に充てられている。世紀末のフランスを騒がせた薔薇十字団運動について詳説した数少ない日本語の文献である。その中で彼は、「ペラダンにはローマ・カトリック的傾向がいちじるしく、ガイタにはヘブライ的、カバラ的傾向がいちじるしかった」ことを指摘するとともに、「ペラダンは知性と信仰、精神と肉体、思考と実践、道士と法王、魔術と教会といったような、相対立する二つの概念を持ち出して、隠秘学と宗教とを弁証法的に統一しようとする」と述べ、こうした「二元的に分離したものを、原初の一元性にさかのぼって捉えようとする志向」が「ペラダンの思想の核心を形成している、あの異教的なアンドロギュヌスの観念」に根ざしていることを看破している。Cf. 澁澤龍彦『悪魔のいる文学史―神秘家と狂詩人―』、『中公文庫』、中央公論社、1982年、185-223頁。
- 34) 主著に『オカルト』（1971）があるコリン・ウィルソン（1931-2013）が「類書を凌ぐ最良のもの」と評価したクリストファー・マッキントッシュの『薔薇十字団』（1987）は、この扱いにくいテーマを史実や文献をできる限り踏まえながら編年体で概説した労作だが、その巻末には、「図版」として主要な薔薇十字の図が掲載されている。Cf. クリストファー・マッキントッシュ『薔薇十字団』、吉村正和訳、平凡社、1990年、250-261頁。
- 35) 飛翔している蜜蜂と花卉の縁に止まっている蜜蜂が描かれているが、薔薇に向かって右手には巣箱らしき絵柄も認められ、薔薇の花の上部には「薔薇は蜜を蜂に与える」という意味のラテン語の銘文が刻まれている。蜜蜂はキリスト教において、冬の間は巣から出ないで姿を消したように見えることから、復活の象徴とされる一方で、「蜜はキリストの優しさと慈悲に通じ、針は審判者として正義を行うキリストに通じる」ため、「キリストのエンブレム」とも見なされてきた。ここに描かれた蜜蜂の意味するところは判然としないが、蜜蜂の巣箱が「勤勉で、組織化され、厳しい規律に従った団体」、例えば「秘密結社や宗教団体の組織形態」を象徴することと何か関係があるのかもしれない。ちなみに、薔薇の左側には蜘蛛の巣が描かれているが、蜜蜂に対して仕掛けられた罠を意味する意匠なのだろうか。蜘蛛も蜜蜂と同様に豊かな象徴体系を有し、「インド・ヨーロッパ文化の底を流れ、多くの解釈を生み、無数の文化圏に分散し、孤立し、分離する」ため、その意味を正確に理解するのは至難の業だろう。Cf. ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン、前掲書、352-354頁、946-948頁。
- 36) Cf. Fred. A. *ibid.*
- 37) 音楽学者オルネラ・ヴォルタが集成したサティの書簡集の翻訳者である有田英也は、この作曲家が「ペラダンの思想から影響を受けた形跡はない。[.....] サティの求めていたのは、自分の作品を聴き手に提供するのに必要

な、ある親密な人間関係である」と述べている。Cf. 有田英也「音楽とテキスト—エリック・サティの音楽論をめぐる一考察—」、『ヨーロッパ文化研究』第11巻、成城大学大学院文学研究科、1992年、53頁。音楽史におけるサティの功績として、「家具の音楽」、つまり家具のようにさりげなく日常に寄り添う音楽の必要性を説き、のちの環境音楽やミニマル音楽を先取りした点を挙げることができるが、その実践として作曲された『ヴェクサシオン』は、小節線も拍子記号もない楽譜に並んだ52拍分の音を、変奏を一切加えることなく延々18時間以上をかけて840回反復する途轍もないピアノ曲であり、1963年にこの作品の初演を手がけた現代音楽の旗手ジョン・ケージ(1912-1992)の『四分三十三秒』(ピアニストが4分33秒間ピアノを弾かないことで成立する異形のピアノ曲)と並ぶ世紀の問題作である。「嫌がらせ」と訳されることもある挑発的な題目が付されたこの作品を筆頭に、楽譜に音楽記号の代わりに書きこまれた意味不明の言葉や『<犬のための>ぶよぶよした前奏曲』(1912)、『干からびた胎児』(1913)といった風変わりな曲名など、サティの奇行ぶりはよく知られるところだが、薔薇十字団の名を冠する諸作品もまた、そうした彼一流のミスティフィカシオンの顕れであったのかもしれない。ちなみに、著名な秘密結社の名称をこれ見よがしに掲げた楽曲といえば、モーツァルトの『フリーメイソンのための葬送音楽』(1785)が真っ先に思い起こされるが、木管楽器のユニゾンによる神秘的な響きで開始されるこの小品を、果たしてサティは意識していたのだろうか。

38) Cf. Marie-Antoinette Kuhn, *ibid.*, p.197.

39) Cf. 登張正實「ノヴァーリス」、『世界文学大事典』、集英社、1997年。

40) Cf. ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン『世界シンボル大事典』、792頁、800頁。こうした象徴性は青色の薔薇が自然界には存在しない事実由来しているが、遺伝子操作技術の進歩は目覚ましく、サントリーグローバルイノベーションセンターが、オーストラリアのベンチャー企業カルジーンパシフィック社(現フロリジン社)と提携し、ペチュニアの青色遺伝子を薔薇に注入して青色色素を細胞内に蓄積することに成功した結果、2004年には青い薔薇(実際は薄紫に近い色の薔薇)「アプローズ」が誕生している。

41) Cf. ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン、前掲書、5頁。『西洋美術解説事典』では「聖母は伝統的に青色のマントとヴェールを身につけている。天を象徴する色でもある青は、「天の女王」(Queen of Heaven)としての聖母の役割を思い起こさせる」という指摘や「中世末期からルネサンスにかけては、聖母子が薔薇のからまった東屋、あるいは、薔薇の生垣や垣根に囲まれた空間の中に描かれることがある」という指摘がなされており、青は最も聖母マリアに馴染む色彩であり、絵画の題材として聖母と薔薇が決して奇異な組み合わせではないことが諒解される。Cf. ジェイムズ・ホール、前掲書、188頁、193頁。

42) ジェニファー・スピーク『キリスト教美術シンボル事典』、中山理訳、大修館書店、1997年、252-254頁。

43) マニ教は、3世紀半ばに、イラン人マニがゾロアスター教にキリスト教や仏教の要素を融合させて創始した宗教であり、光(霊的なもの、善)と闇(物質的なもの、悪)の二元論的世界観に立脚している。その点において、グノーシスとの関連は明白であり、中世においては、両者が同義語として使われることもあったという。Cf. チャス・S・クリフトン『異端事典』、田中雅志訳、三文社、1998年、210頁。だが、こうした善悪二元論は、異端とされたグノーシスやマニ教のみならず、正統キリスト教をも特徴づける考え方であると言える。「キリスト教はユダヤ教の一部で誕生したデモノロジーをほぼそのまま継承し、それをさらに形而上学的に繰りあげていった。その際に、ユダヤ教やキリスト教に内在する二元論的傾向は、天使とデーモンを対立させたばかりではなく、天使を善と、デーモンを悪と結びつけるようになった。こうしてデーモンは悪魔となった。[.....] キリスト教では悪魔が存在するということも「普遍的真理」である。悪魔の恐ろしさをキリスト教ほど強調している宗教、悪魔の存在がキリスト教におけるほど大きな役割を演じている宗教は他にない。ところがそのような恐ろしい悪魔は、もともとキリスト教にあったものでも形而上学的真理でもなく、キリスト教の形成史において徐々に創りあげられていったものだった。」「神学と同様、形而上学の一部をなしている」デモノロジー(悪魔学)は、キリスト教という宗教の特質を理解する上で重要な意味を持つ研究領域であると言える。Cf. 高橋義人『悪魔の神話学』、岩

波書店、2018年、4頁、10頁。

- 44) こうした過酷な弾圧の典型例として挙げられるのが、いわゆる「アルビジョワ十字軍」である。十字軍といえ
ば、キリスト教徒がイスラム教徒と戦うために組織された軍隊を連想しがちであるが、時に同じキリスト教徒を
殲滅する目的で組織されることもあった。アルビジョワ十字軍は、1209年にローマ教皇インノケンティウス三世
の号令で主に北フランスの諸侯たちによって組織されたアルビジョワ派討伐軍である。異端派の拠点と目された
ベジエの住民の無差別殺戮や難攻不落の城塞カルカソンの陥落を経て、約二十年をかけてその目的は達成され
たが、南フランスの各地に拭い難い傷跡と怨恨を残すことになった。
- 45) この一筋縄ではいかない言葉を定義する上で役に立つのが、1966年の「グノーシス主義の起源に関する国際学
会」において定められたグノーシスに欠かせない三要素（①反宇宙的二元論、②人間の内部に「神的火花」「本来
的自己」が存在するという確信、③人間に自己の本質を認識させる救済啓示者の存在）である。翻訳を別にすれ
ば日本語で書かれた初のグノーシス入門書となる『グノーシス―古代キリスト教の＜異端思想＞―』を著した筒
井賢治は、それらを踏まえて、グノーシスの考え方を「この宇宙は劣悪な創造神が造ったもので、この創造神は
善なる至高神と対立関係にある（①）。人間は創造神の造ったものであるが、その中に、至高神に由来する要素
がわずかだけ閉じこめられている（②）。人間はそのことに気付かないでいるが、至高神から使いがやってきて、
人間に自分の本質を認識せよと促す（③）。[.....] キリスト教グノーシスの場合、③の「啓示者」がイエス・キ
リストであることは言うまでもない」と要約している。Cf. 筒井賢治『グノーシス―古代キリスト教の＜異端思
想＞―』、講談社、2004年、184頁。
- 46) ベラスケスを「画家の中の画家」と讃えたのはエドゥアール・マネ（1832-1883）だった。西洋絵画の歴史に
おける稀代の変革者だったマネは、サロン（官展）で落選した作品を集めた展覧会を企画することでサロン一辺
倒だった画壇に対立軸を設けたのみならず、裸体画の題材を、神話や聖書などに登場する架空の女性ではなく生
身の女性、それも同時代の娼婦に求め、その裸身を美化せずに描くことで美術史のタブーを打ち破ろうとしたの
だった。この時代のフランスの画家の例にもれず、彼もまた、浮世絵に代表される日本美術から少なからず影響
を受けているが、特徴的な無地の背景描写や黒の使い方などは、スペイン・バロック絵画の巨匠ベラスケスに負
うところが大きい。
- 47) 19世紀後半にフランスで隆盛を見た印象主義と20世紀初頭のドイツを席卷した表現主義は、日本語の訳語の表
記からは判らないが、原語は、フランス語でもドイツ語でも、そして英語でも同様に、接頭語が異なるだけの類
似した単語である。前者の im-（「外から内へ」）、後者の ex-（「内から外へ」）という正反対の方向性を示す接頭
語が二つの芸術運動の特徴を端的に物語っている。外界を、ひいてはそれを可視化する光を描写することに心血
を注いだ印象主義。そして、時と場所をほぼ同じくしてジークムント・フロイト（1856-1939）が心理学のメスを入
れた人間の内なる無意識の領域を描出しようとした表現主義。両者の特徴を兼ね備えているのが、後期印象派
に分類される画家たちであり、その代表格と見なされるのがゴーギャンである。『黄色いキリスト』は、前年に
制作された『説教のあとの幻影（ヤコブと天使の闘い）』（1888）とともに、聖書中のエピソードを彼が生きた時
代のブルターニュ地方を舞台に描く、いわば時空を超越した野心作だが、クロワゾニスムと呼ばれる明確な輪郭
線と奥行きを感じられない平坦な色面を特徴とする表現手法が用いられている点においても、従来の印象派の作
品とは一線を画している。
- 48) ダリの磔刑図には、『超立方体の人体（磔刑）』（1954）という風変わりなタイトルが付された作品もあり、8個
の立方体から成る奇天烈な十字架に磔にされたイエスの姿が、おそらくはその顔を描かなくても済むように、低
いアングルから斜めに仰ぎ見るように描かれている。画面の左下方には、イエスを見上げる聖母マリアと思しき
女性がアンバランスなまでに小さく描かれており、彼女にはダリの変妻ガラの変容が認められるため、イエスに
は画家自身の姿が投影されているものと考えられる。4年前に制作された『十字架の聖ヨハネのキリスト』と同
様に、十字架は宙に浮かんだ状態で描かれ、両手にも、重ねられた両足にも、やはり釘は打たれていない。

49) Cf. 柳宗玄、中森義宗『キリスト教美術図典』、吉川弘文館、1990年、414頁。

50) Cf. マンフレート・ルルカー『聖書象徴事典』、池田紘一訳、人文書院、1988年、346-349頁。

51) 自身の磔刑図に同様な趣向を凝らした画家は、ごく少数ながら、コクトーとダリ以外にも存在する。戦後にフランス国籍を取得し、ランスのノートルダム大聖堂でカトリックの洗礼を受けてレオナル・フジタを名乗ることになった藤田嗣治(1886-1968)の遺作とも言えるのが、同地の郊外に立地するノートルダム・ド・ラ・ベ礼拝堂の一連のフレスコ画だが、そこには当然、磔刑図も含まれている。礼拝堂の入り口の内壁にそれは描かれており、構図にはこれといった特徴がないが、十字架上のイエスの釘を打たれた両足をよく見れば、コクトーやダリの作品と同様に、左右の足の位置が伝統的な磔刑図のものとは逆になっていることがわかる。磔刑図と正対する礼拝堂奥の祭壇画に描かれた聖母子を取り囲む人々の手のポーズには、仏像のそれを思わせるものがあり、フジタが純朴な正統派のカトリック教徒になったわけでは必ずしもなかったことが察せられる。新約聖書を題材にした一連の宗教画で高く評価されたデンマークの画家カール・ハインリッヒ・プロッホ(1834-1890)の『十字架上のキリスト』(1870)も、例外的な足の位置関係が認められる数少ない磔刑図のひとつである。



図1 ノートルダム・ド・フランス教会
正面ファサード（筆者撮影）



図2 ノートルダム・ド・フランス教会
の祭壇画に用いられたタペストリー（筆者撮影）



図3 ジャン・コクトーの磔刑図の「黒い太陽」（筆者撮影）



図4 ラファエロ・サンティ『モ
ンドの磔刑図』



図5 アルブレヒト・デューラー『メラン
コリア I』

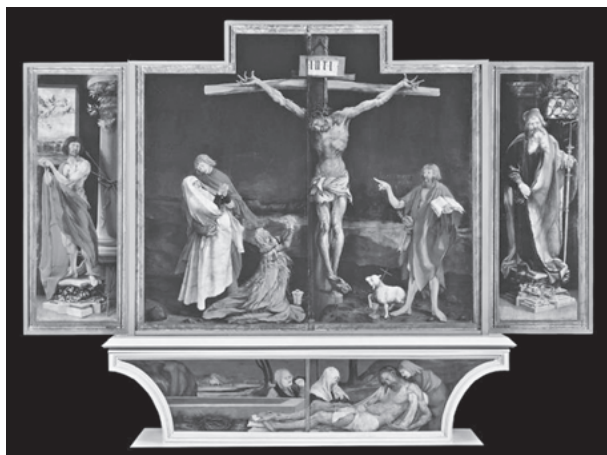


図6 マティアス・グリューネヴァルト『イーゼンハイ
ム祭壇画』

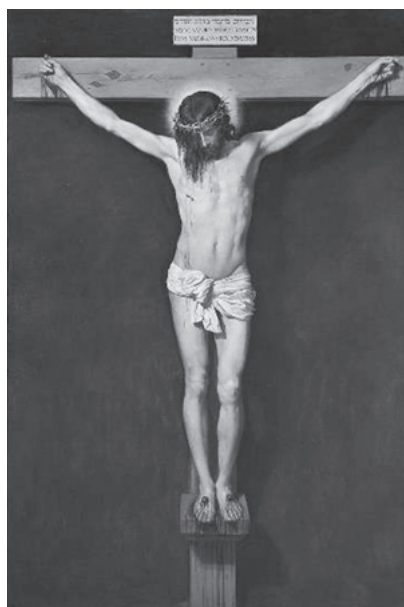


図7 ディエゴ・ベラスケス『キリス
トの磔刑』



図8 アンドレア・マンテーニャ『磔刑』



図9 コクトーの磔刑図の「青い薔薇」(筆者撮影)

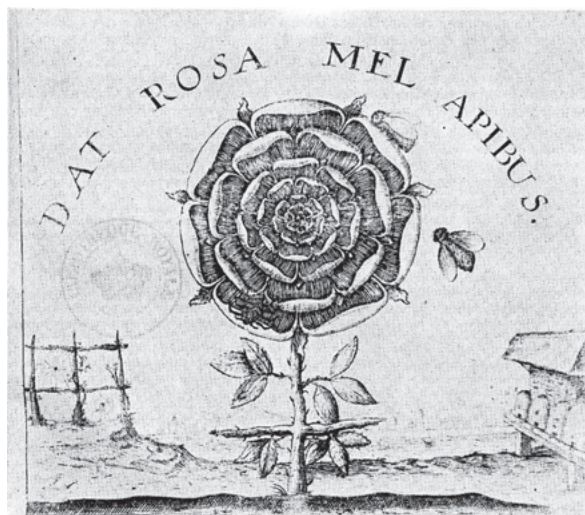


図10 ロバート・フラッドの薔薇十字図



図11 ポール・ゴーギャン『黄色いキリスト』

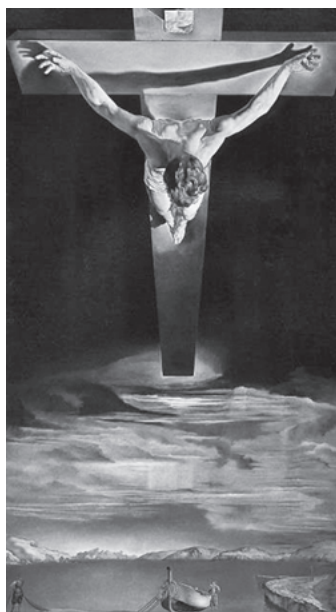


図12 サルヴァドル・ダリ『十字架の聖ヨハネのキリスト』

日英多義語の認知意味論的分析

—「ニガイ（苦い）」と“bitter”—

皆 島 博^{*1}

（2022年9月20日 受付）

内容要約 本論は、認知意味論の理論的枠組みにおいて、日本語の多義語「ニガイ」とそれに対応する英語の多義語“bitter”の多義構造を分析する。また、日英対照言語学の観点から、両語の意味における類似点と相違点についても明らかにする。

キーワード：多義語・多義性・意味拡張・放射状カテゴリー・対照言語学・認知意味論

1. はじめに

本論は、日本語と英語の味覚形容詞「ニガイ（苦い）」と“bitter”を取り上げ、その多義構造および意味拡張のプロセスとその動機付けについて、認知意味論の観点から分析を行う。日本語の「ニガイ」と英語の“bitter”は、それぞれ、次のような、少なくとも3つの異なった語義（＝多義語の個々の意味）で用いられる点で多義的であるといえる。

- (1) a. ニガイ薬（味が苦い薬）
b. ニガイ顔（不愉快そうな顔）
c. ニガイ経験（つらい経験）
- (2) a. bitter coffee（苦いコーヒー）
b. bitter wind（身を切るように冷たい風）
c. bitter memory（つらい思い出）

認知意味論では、上のような日本語の「ニガイ」と英語の“bitter”が提示するさまざまな語義が

^{*1}福井大学教育・人文社会系部門総合グローバル領域

無秩序に派生してきたものではなく、プロトタイプの意味（基本義）を起点として、そこからなんらかの認知的動機付け（メタファー（隠喩）・メトニミー（換喩）・シネクドキ（提喩））によって意味拡張を展開し、相互に関連のある意味と意味とのネットワーク、すなわち、放射状カテゴリーを構成するようになったと考える。本論の目的は、「ニガイ」と“bitter”に関して、次の4点の課題について、認知意味論及び日英対照言語学の立場から分析と記述を行い、それらを明らかにすることである。

- ①「ニガイ」と“bitter”の複数の語義の区別
- ②「ニガイ」と“bitter”のプロトタイプの意味（基本義）の仮定
- ③「ニガイ」と“bitter”の意味拡張の動機付け（メタファー、メトニミー、シネクドキ）の認定
- ④「ニガイ」と“bitter”の多義構造にみられる類似点と相違点の指摘

2. カテゴリーとしての多義語

ある語が相互に関連した複数の意味を持っていることを多義性といい、また、そういう語を多義語という。例えば、英語の“eye”という語には、次のような意味がある（『ライトハウス英和辞典』の記述を一部修正・省略して引用）：

- ① 目，眼
- ② 視力，視覚，視線
- ③ 観察力，見分ける力，鑑賞力，眼力
- ④ 目つき，目もと
- ⑤ 目の形をしたもの；台風の目

認知意味論では、多義語を一種のカテゴリー、すなわち、複数の語義の集合と考える（舩山・深田 2003：141）。カテゴリーとは、現実世界に存在するさまざまなモノをグループ分け（分類）して、ひとまとめにして捉える心の働き（認知）をいう。多義語は、相互に関連した複数の意味をひとまとめにして、その構成員としての語の個々の意味から構成される、という点でカテゴリーを構成しているといえる¹⁾。

認知意味論のカテゴリー観では、カテゴリーのすべての構成員が構成員であるための必要十分条件を満たしている必要はない。むしろ、構成員の間に中心的なものと周辺的なものとの区別が存在するだけであると考ええる。また、他のカテゴリーとの間の境界線も曖昧なものであると考える。これらの点が、カテゴリーのすべての構成員は、プラス（+）かマイナス（-）かの二項対立に基づいて決定される必要十分条件を満たしている必要があり、また、他のカテゴリーとの間

の境界線も明確なものと考えていたアリストテレスの時代の古典的カテゴリー観と異なっている。認知意味論のカテゴリー観では、カテゴリーには次のような特徴があることが提案されている（Wittgenstein 1978；Labov 1973；Rosch 1975；Lakoff 1987）：

- ① カテゴリーの構成員は家族的類似を示す
- ② カテゴリーの構成員には典型的事例が存在する
- ③ カテゴリーの構成員はプロトタイプ効果を示す

まず、「家族的類似」とは、カテゴリーの全構成員は共通の性質を持っているわけではないが、各構成員が部分的にどこかで共通の性質を持つことによって、カテゴリー全体の統一性が保たれていることをいう。次に、「典型的事例」とは、カテゴリーの構成員の中には、最もわかりやすい例、つまり、代表的な構成員であるプロトタイプが存在することをいう。最後に、「プロトタイプ効果」とは、カテゴリーの構成員は均質なものではなく、典型的なものとはそうでないものに分かれ、構成員間でカテゴリーへの帰属度に程度差が存在していることをいう。

上で引用したカテゴリーとしての多義語“eye”に当てはめてみると、①～⑤の各語義がカテゴリーの構成員ということになる。そして、カテゴリーを構成するということは、カテゴリーの3つの特徴を示すということになる。したがって、カテゴリーの構成員（各語義）の間には、典型的な意味（プロトタイプ）とそうでない意味（非・典型的な意味）との違いが存在し（プロトタイプ効果）、全く同一の意味はないが、部分的に類似した意味が混在することによって、カテゴリー全体としての統一を保っている（家族的類似）と考えられる。

ところで、一つの語が多義性を獲得することを認知意味論では意味拡張といい、それはカテゴリー拡張の結果生じたものとする（Lakoff 1987；Sweetser 1990；Taylor 1995）。認知意味論では、多義語というカテゴリーは、古典的カテゴリー観の要件を満たすものではないので、そこには中心的構成員（プロトタイプの意味）とそれ以外の周辺の構成員とが混在する。なお、プロトタイプの意味（基本義）とは、複数の意味の中で最も基本的な意味のことで、意味拡張の起点となる意味であるが、主として、次のような特徴と傾向性をもつ（Dirven and Verspoor 1998；初山 2002；瀬戸 2007a；高橋 2010；瀬戸他 2017）：

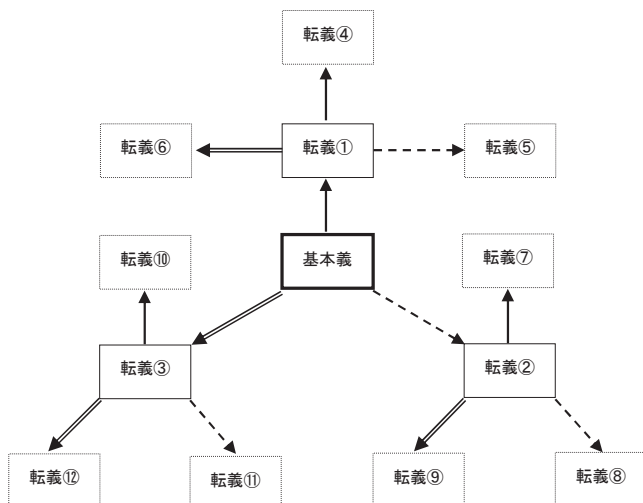
- ① 文脈なしで最も想起されやすく、身体性・具体性が高い、文字通りの意味。
- ② 言語習得の早い段階で獲得される意味。
- ③ 他の転義を理解する前提となる、あるいは、他の転義との関連性が自然に説明できる意味。
- ④ 使用頻度が高いことが多い意味。
- ⑤ 慣用表現や比喻で使用されやすい、すなわち、用法上の制約を受けにくい意味。

カテゴリー拡張では、この基本義を起点として「メタファー」「メトニミー」「シネクドキ」と呼ばれる3種類の比喻（認知的動機付け）が要因となり、複数の方向へ語義の意味拡張が展開する。これらについて、佐藤（1992）、瀬戸（1997）、舩山・深田（2003）、瀬戸（2007a, b）、瀬戸他（2017）にしたがい、次のように定義する。

- ①**メタファー**：二つの事物の間に存在する何らかの類似性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ②**メトニミー**：二つの事物の間に存在する何らかの隣接性・近接性・関連性・連想に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ③**シネクドキ**：一般的な意味（類概念）を持つ形式を用いて特殊な意味（種概念）を表す、逆に、特殊な意味（種概念）を持つ形式を用いて一般的な意味（類概念）を表す。

カテゴリー拡張の最も一般的な形態を放射状カテゴリーと呼ぶ。これは、Lakoff (1987) で提示されたモデルで、中心的構成員（プロトタイプ）を2次的構成員（非プロトタイプ）が取り囲み、その2次的構成員を中心に、それを3次的な周辺的な構成員が取り囲む、というように、文字通り、結果として、中心から外へ向かって放射状に拡張していくカテゴリーのことである（辻 2002: 238；辻 2013: 340）。多義語の放射状カテゴリーのモデル（多義ネットワークモデル）を図示すると下のようになる（辻 2002: 238；瀬戸 2007a: 5；瀬戸 2007b: 41；瀬戸 2019: 311；瀬戸他 2017；辻 2013: 340）を参考に作成）。なお、実線矢印はメタファーに、破線矢印はメトニミーに、二重線矢印はシネクドキに動機付けられた意味拡張を表す：

図1 多義語の放射状カテゴリーのモデル



上の図で、中心に位置する「基本義」が中心的構成員（プロトタイプ）で、そこから、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、「転義①」、「転義②」、「転義③」の第2次構成員へとカテゴリー拡張をしている。さらに、「転義①」から、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、「転義④」、「転義⑤」、「転義⑥」の第3次構成員へとカテゴリー拡張をしている。「転義②」と「転義③」からのカテゴリー拡張についても同様である。ただし、この放射状カテゴリーの図は多義語の意味拡張の理論上のプロセスを図示したモデルにすぎない。したがって、すべての多義語がこのような意味拡張のプロセスをたどるということではないことに注意する必要がある²⁾。

3. 日本語「ニガイ」の多義構造

3.1 「ニガイ」の複数の意味

ここでは、「ニガイ」の複数の意味（語義）の区別を行う。語義の区別に際して、本論が指針とするのは国語辞典における意味の分類と記述である。本論では、『広辞苑』、『大辞林』および『大辞泉』の3種類の国語辞典を参照する。まず、「ニガイ」の見出しの下に挙げてある語義数を比較すると、『広辞苑』（3語義）、『大辞林』（3語義）、『大辞泉』（3語義）となっており、語義数に関しては同じである。

広辞苑	大辞林	大辞泉
①舌に快くない味を感じる。	①舌にいやな味を感ずる。	①舌を刺激し、口がゆがむような嫌な味である。
②面白くない。不愉快である。	②不機嫌である。不愉快に感じる。	②不快である。おもしろくない。にがにがしい。
③つらい。くるしい。	③つらい。苦しい。	③つらくて苦しい。その事を考えたり思い出したりするのも嫌である。

これらについて、意味領域、意味分野が共通しているもの、近いものでまとめて、語義の記述を再整理すること次のように大きく2系列に区別できる。なお、辞典名の右側の番号は各辞典における項目の通し番号である。

I 「味覚」に関する意味：広辞苑①、大辞林①、大辞泉①

II 「感情」に関する意味

(i)：広辞苑②、大辞林②、大辞泉②

(ii) : 広辞苑③, 大辞林③, 大辞泉③

以上, 3つの国語辞典における「ニガイ」の意味の分類と記述を再整理してみると, 次のように3通りに区別できる。上記のように, 国語辞典の記述を再整理した結果をもとに, 「ニガイ」に対して最終的に次のような3つの意味(基本義と転義)を認定する。

語義①〈味覚：苦みがある〉：概念 {舌に不快な味を感じる。舌に嫌な味を感じる。舌を刺激し、口が歪むような嫌な味である}³⁾

(3) ビールやコーヒー, お茶など, 大人の飲む物はなぜニガイ物が多いのでしょうか? それらの苦味や酸味をおいしく感じるのは, 人間が成長する過程で, 学習して慣れたためだと言われ, 人は, それをおいしく思えるようになっただけです。

<http://aurin.jp/jiyouhou/tabemono/nigari.htm>

語義②〈感情：不愉快な〉：概念 {不快である。面白くない。不機嫌である。にがにがしく思う}

(4) 子どもがマンガを夢中で読む姿を見て, ニガイ顔をしていませんか? 「マンガは子どもに害」と思われがちですが, 実はさまざまなメリットもあるとか。

<http://iko-yo.net/articles/404>

語義③〈感情：つらい〉：概念 {苦しい。ある出来事を考えたり思い出したりするのも嫌である}

(5) 5月に行われるはずだったライブを見るために行きました。最後の国立でのライブということで楽しみにしていましたが, まさかの当日に中止発表…まさにニガイ思い出でした。

http://www.jalan.net/kankou/spt_13104ae2190022647/kuchikomi/0000539904/

3.2「ニガイ」の意味拡張とその認知的動機付け

上で「ニガイ」に3個の複数の意味を区別した。ここでは「ニガイ」の意味拡張とその誘因となる認知的動機付けについて考察するが, 最初に意味拡張の起点となるプロトタイプの意味(基本義)を仮定する。多義語の複数の意味のうち, プロトタイプの意味が備えた特徴と傾向性を第2節で示したが, それらを考慮すれば, 「ニガイ」の複数の意味の中でも文字通り「身体性・具体性」の高い「味覚」を表す語義①〈苦みがある〉を基本義として仮定するのが妥当であろう。

次に, 基本義〈苦みがある〉からその他の転義へ意味拡張であるが, その認知的動機付けに関しては, 基本義は「味覚」の意味領域に含まれるものであるものであるので, それ以外の意味領域, つま

り「感情」の意味領域への意味拡張はメタファー（共感覚メタファー）によるものになる。

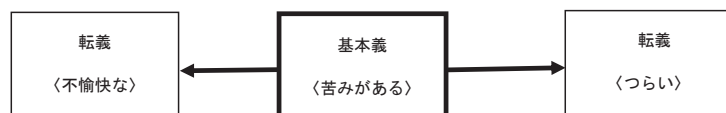
基本義〈苦みがある〉⇒転義〈不愉快な〉：メタファー的拡張

基本義〈苦みがある〉⇒転義〈つらい〉：メタファー的拡張

3.3 「ニガイ」の意味のネットワーク

ここまで見てきた「ニガイ」の意味拡張のプロセスを放射状カテゴリー（意味のネットワーク）の形に図示すると次のようになる。なお、図で実線矢印はメタファーを表している：

図1 「ニガイ」の放射状カテゴリー



4. 英語“bitter”の多義構造

4.1 “bitter”の複数の意味

ここでは，“bitter”の複数の意味（語義）の区別を行う。語義の区別に際して、本論が指針とするのは英英辞典における意味の分類と記述である。本論では、*Merriam-Webster's English Learner's Online Dictionary*（以下、MWE）、*Oxford Learner's Dictionaries* (OLD)、及び*Longman Online Dictionary* (LOD) の3種類の英英辞典を参照する。まず，“bitter”の見出しの下に挙げてある語義数を比較すると、MWE（5語義）、OLD（5語義）、LOD（5語義）となっており、語義数に関しては同じである。なお、各英英辞典の定義には日本語訳も付してある。

MWE	OLD	LOD
① having a strong and often unpleasant flavor that is the opposite of sweet (甘さとは真逆の強烈でしばしば不快な風味がする)	④ (of food, etc.) having a strong, unpleasant taste; not sweet ([飲食物などについて] 強烈で不快な味がする；甘くない)	④ having a strong sharp taste, like black coffee without sugar (砂糖抜きブラックコーヒーのような鋭い強烈な味がする)
② causing painful emotions; felt or experienced in a strong and unpleasant way (苦痛を伴う感情を引き起こす；強烈にそして不快に、感じられる、または経験をする)	③ [usually before noun] making you feel very unhappy; caused by great unhappiness ([通常名詞の前] 非常に不満に感じさせる；大きな不満によって引き起こされる)	② [only before noun] making you feel very unhappy and upset ([名詞の前だけ] 非常に不満に感じさせる、ムカつく)

MWE	OLD	LOD
③ angry and unhappy because of unfair treatment (不当な扱いを受け怒りそして不満に思っている)	② (of people) feeling angry and unhappy because you feel that you have been treated unfairly ([人について] 不当に扱われたと思ったために、怒りと不満を感じる)	① feeling angry, jealous, and upset because you think you have been treated unfairly (不当に扱われたと思ったために、怒り、嫉妬を感じる、憤慨している)
④ feeling or showing a lot of hatred or anger (多くの憎しみや怒りを感じるまたは表す)	① (of arguments, disagreements, etc.) very serious and unpleasant, with a lot of anger and hate involved ([議論や意見の相違などについて] 多くの怒りや憎悪が伴い、非常に深刻で不快である)	③ a bitter argument, battle etc is one in which people oppose or criticize each other with strong feelings of hate and anger (議論、論争などで強烈な憎悪や怒りの感情を伴い、人が対立または批判し合っている)
⑤ very cold (非常に寒い)	⑤ (of weather conditions) extremely cold and unpleasant ([気象条件について] 極端に寒く不快な)	⑤ unpleasantly cold (不快なくらい寒い)

これらについて、意味領域、意味分野が共通しているもの、近いものでまとめて、語義の記述を再整理すること次にように区別できる。なお、辞典名の右側の番号は各辞典における項目の通し番号である。以上、3つの英英辞典における“bitter”の意味の記述を日本語に訳して、再分類・再整理してみると、次のように3系列に区別できる。

I 「味覚」に関する意味：MWE①, OLD④, LOD④

II 「知覚」に関する意味：MWE⑤, OLD⑤, LOD⑤

III 「感情」に関する意味

(i) : MWE②, OLD③, LOD②

(ii) : MWE③, OLD②, LOD①

(iii) : MWE④, OLD①, LOD③

上記のように、英英辞典の記述を再整理した結果をもとに、“bitter”に対して最終的に次のような5つの意味を認定する。

I 語義① 〈味覚：苦味がある〉：概念 {飲食物などについて、砂糖抜きブラックコーヒーのよう、甘さと真逆の鋭く強烈で不快な渋い味・風味がする}

(6) Examples of bitter food include unsweetened cocoa, coffee, marmalade, beer, olives, citrus peel etc. Lemon, spoilt milk, oranges, grape etc. are examples of sour food. (苦い食べ物の例として、甘くないココア、コーヒー、マーマレード、ビール、オリーブ、橘皮などがあります。レモン、腐った牛乳、オレンジ、ブドウなどは酸っぱい食べ物です)

http://www.diffen.com/difference/Bitter_vs_Sour

Ⅱ 語義② 〈知覚：厳寒の〉：概念 {気候・気温などについて、不快なほど極度に寒い}

(7) When outdoors in bitter weather, dress to prevent hypothermia by wearing layers of warm clothing, which traps air between layers forming a protective insulation. (屋外が身を切るような寒さの時は、低体温になるのを防ぐため温かい服を何枚も着て下さい、そうすることで熱を保護する断熱体が作られ服の層の間の熱を逃しません)

<http://www.aahpo.org/MedicalAlert-23.html>

Ⅲ (i) 語義③ 〈感情：ムカつく〉：概念 {人が不当な扱いを受けたと感じ、憤っている、苦しんでいる、不愉快である}

(8) My boyfriend broke up with me 1.5 months ago. I feel bitter about it and wish bad things for him. I hate myself for it. How long should I wait before this phase passes? (彼氏と一か月半前に別れました。そのことにムカついていて、元彼に悪いことが起きよう祈っています。そのことで自己嫌悪にもなります。こういう時期が過ぎてしまうのはいつでしょうか)

<https://www.quora.com/My-boyfriend-broke-up-with-me-1-5-months-ago-I-feel-bitter-about-it-and-wish-bad-things-for-him-I-hate-myself-for-it-How-long-should-I-wait-before-this-phase-passes>

Ⅲ (ii) 語義④ 〈感情：辛辣な〉：概念 {論争や言動などが対立的で、強烈な怒りと憎しみの感情を伴っていて、非常に深刻で嫌な感じがする}

(9) But that isn't the only reason George Obama's statement is remarkable. It's also remarkable because it stands in stark contrast not only to Barack Obama's bitter words on the African colonial experience, but also to the bitter words of Obama's father and even Obama's Hawaii mentor, Frank Marshall Davis. (しかし、それだけがジョージ・オバマの言ったことが特筆すべきだという理由ではありません。それがまた特筆すべきなのは、アフリカの植民地経験に関するバラク・オバマの厳しい言葉だけでなく、オバマの父親、さらにはオバマのハワイ時代の恩師フランク・マーシャル・デイヴィスの厳しい言葉に対しても完全な対照をなしているからです)

http://www.americanthinker.com/articles/2012/07/is_obamas_brother_a_conservative_republican.html

Ⅲ (iii) 語義⑤ 〈感情：つらい〉：概念 {出来事などについて、非常に不幸に苦しく感じられる} {経験などについて、嫌悪や怒りを多く感じる}⁴⁾

(10) Obviously, when you lose you are in a bitter mood until the next game, so I hope the week goes by quickly and we can revert this bad streak of results. (明らかに、負けた時は次の試合まで嫌な気分になりますから、その週が早く過ぎ去り、この一連の悪い結果を元に戻せることを願います)

<http://www.thesportreview.com/tsr/2015/05/juan-mata-im-in-a-bitter-mood-after-man-utd-defeat/>

4.2 “bitter”の意味拡張とその認知的動機付け

上で“bitter”に5個の複数の意味を区別した。ここでは“bitter”の意味拡張とその誘因となる認知的動機付けについて考察するが、最初に意味拡張の起点となるプロトタイプの意味（基本義）を仮定する。多義語の複数の意味のうち、プロトタイプの意味が備えた特徴と傾向性を第2節で示したが、それらを考慮すれば、“bitter”の複数の意味の中でも文字通り「身体性・具体性」の高い「味覚」を表す語義①〈苦みがある〉を基本義として仮定するのが妥当であろう。

次に、基本義〈苦みがある〉からその他の転義への意味拡張であるが、その認知的動機付けに関しては、基本義は「味覚」の意味領域に含まれるものであるので、それ以外の意味領域、つまり「感情」の意味領域へ意味拡張はメタファー（共感覚メタファー）によるものになる。

基本義〈苦みがある〉⇒転義〈極寒の〉：メタファー的拡張

基本義〈苦みがある〉⇒転義〈ムカつく〉：メタファー的拡張

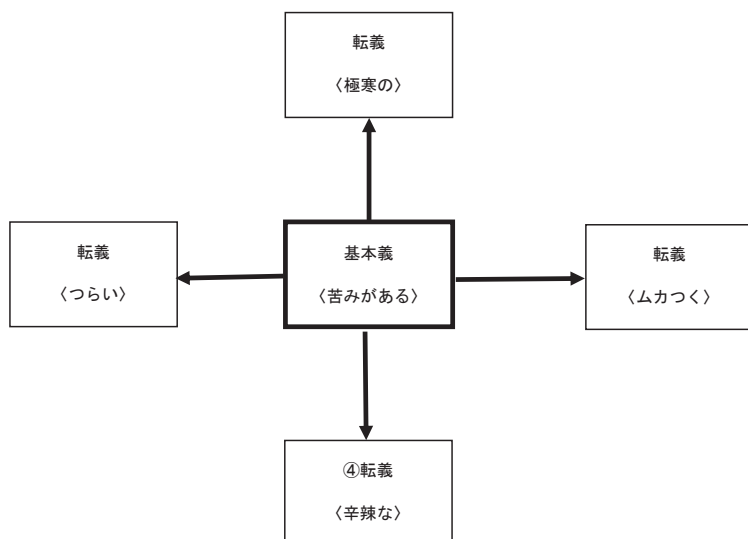
基本義〈苦みがある〉⇒転義〈辛辣な〉：メタファー的拡張

基本義〈苦みがある〉⇒転義〈つらい〉：メタファー的拡張

4.3 “bitter”の意味のネットワーク

ここまで見てきた“bitter”の意味拡張のプロセスを放射状カテゴリー（意味のネットワーク）の形に図示すると次のようになる。なお、図で実線矢印はメタファーを表している：

図2 “bitter”の放射状カテゴリー



5. おわりに

本論は、日本語と英語の味覚形容詞「ニガイ」と“bitter”の多義構造について認知意味論的観点から分析し、「ニガイ」と“bitter”の意味構造における類似点と相違点について認知言語学的観点から考察した。その結果明らかになったのは以下のような点である。

- ①「ニガイ」と“bitter”は多義語であり、放射状カテゴリーを構成する。
- ②「ニガイ」と“bitter”の基本義として、味覚の意味〈苦みがある〉を仮定するのが妥当である。
- ③「ニガイ」と“bitter”の意味拡張の動機付けとしては、メタファー（共感覚）だけである。
- ④「ニガイ」と“bitter”の意味拡張の傾向としては、日英両語ともに、それぞれの基本義が有する「不快な味覚」の概念に関連した方向への拡張が見られる⁵⁾。

注

- 1) 認知意味論では、人間を、意味を読み取り、意味を発信する主体とみなし、「意味」については、人間の身体性（感覚・知覚・認知など）の総合的な営みを通じて概念化されたものと考ええる。そして、概念化することはカテゴリー化することと同じであるという立場を取る。
- 2) 査読者より「ニガイ」と“bitter”について、それぞれ語源的な意味と通時的意味変化の側面の考察の必要性をご指摘いただいた。本論では、「多義語が共時的に（関連のある）複数の意味を持つときにのみ、多義語とみなし」（初山 2021: 3）、また「語源の知識等を持たない現代語の通常の母語話者が知っているのは、現代語の意味に限られる」（初山 2021: 4）ことを踏まえて、両語の語彙史的な側面については考察の対象から除外した。
- 3) 本論では、意味の記述に2つのレベルを設ける。一つは、「語義」で〈…〉で囲んで表す。もう一つは、「概念」

で「…」で囲んで表す。「語義」と「概念」は、それぞれ語の意味の側面を構成する。「語義」は、語の意味をなるべく簡潔に、ワンフレーズで収まるようにまとめた記述である。「概念」は、語の意味をなるべく、具体的に、詳細に、百科事典の意味をも交えて、まとめた記述である。

4) この意味における“bitter”は限定用法のみで名詞の前に置かれる。

5) 日本語「ニガイ」の反対語「アマイ」では、「アマイ考え」「ブレーキがアマイ」のように、本来の心地よい味覚を表すイメージとは逆方向のネガティブな意味への拡張も見られる。この点、「ニガイ」と“bitter”は、両者とも不快な味覚とは逆のイメージ（すなわち、心地よいイメージ）と結びついた方向への意味拡張は見られない。山添（2003：227）にも「日本語の『甘い』はプラス・マイナス両方の価値がある。他方、bitterはマイナスの価値しかない」という指摘がある。

参考文献

- Dirven, René and Marjolijn Verspoor (1998) *Cognitive Exploration of Language and Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Labov, William (1973) The Boundaries of Words and Their Meanings. In: Charles-James N. Bailey and Roger W. Shuy (eds.) *New Ways of Analyzing Variation in English*, 340-373. Washington: Georgetown University Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 初山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』（シリーズ・日本語のしくみを探る⑤）東京：研究社。
- 初山洋介・深田智（2003）「意味の拡張」松本曜（編）『認知意味論』（シリーズ認知言語学入門第3巻）73-134. 東京：大修館書店。
- 初山洋介（2021）『[例解] 日本語の多義語研究 認知言語学の視点から』東京：大修館書店。
- Rosch, Eleanor (1975) Cognitive Representations of Semantic Categories. *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- 佐藤信夫（1992）『レトリック感覚』講談社学術文庫。
- 瀬戸賢一（1997）「第Ⅱ部 意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化発想とレトリック』（日英語比較選書①）94-177. 東京：研究社。
- 瀬戸賢一（編）（2007a）『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館。
- 瀬戸賢一（2007b）「メタファーと多義語の記述」楠見孝（編）『メタファー研究の最前線』31-61. 東京：ひつじ書房。
- 瀬戸賢一（2019）「メタファー・メトニミー・シネクドキ」辻幸夫（編）『認知言語学大辞典』303-314. 東京：朝倉書店。
- 瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望（2017）『[認知言語学演習②] 解いて学ぶ認知意味論』東京：大修館書店。
- Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高橋英光（2010）『言葉のしくみ—認知言語学のはなし』札幌：北海道大学出版会。
- Taylor, John R. (1995) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- 辻幸夫（2002）『認知言語学 キーワード辞典』東京：研究社。
- 辻幸夫（2013）『新編 認知言語学キーワード辞典』東京：研究社。
- Wittgenstein, Ludwig (1978) *Philosophical Investigations* (trans. G.E.M. Anscombe). Oxford: Basil Blackwell.

山添秀剛（2003）「苦くてビター」『ことばは味を超える 美味しい表現の探求』瀬戸賢一編，215-238，東京：海鳴社.

参照国語辞典

『広辞苑』（第五版）

『大辞林』（第三版）

『大辞泉』（オンライン版）

参照英英辞典

Oxford Learner's Dictionaries（オンライン版）

Longman Online Dictionary（オンライン版）

Merriam-Webster's English Learner's Online Dictionary（オンライン版）

参照英和辞典

『ライトハウス英和辞典』（初版）

例文検索ウェブサイト

<https://www.google.com/>

幼児期及び児童期における向社会的行動の理由づけの発達

—仮想場面を用いた友人への分与行動の分析—

大西 将史^{*1} 毎田(久保) 遥香^{*2}

(2022年9月30日 受付)

本研究では、幼児期及び児童期における向社会的行動の理由づけの発達について検討した。年少児から小学6年生計212名を対象に、年少児から小学2年生までは個別のインタビュー調査を、小学3年生以上では集団での質問紙調査を行った。最も仲の良い同性友人を挙げさせた上で、その友人が水筒のお茶を飲み干してしまい困っているという仮想場面を提示し、友人の気持ち、自身の取る行動とその理由について回答を求めた。自身の行動については、212名中178名が分与行動をすると回答し、年代ごとの割合は年少児から年長児にかけて増加し、その後は8割以上の高い水準であった。行動の理由づけを先行研究に基づいて8つのカテゴリーに分類した結果、分与行動を示した者のうち「かわいそうだから」という愛他的理由づけをした者は最も多く約7割程度であった。年代ごとでは、年少児のみが「お茶がないから」という实际的理由づけが多く、年中以降では愛他的理由づけが最も多かった。小学生以上ではこれら以外の理由づけもみられ、理由づけの多様化がみられた。友人の気持ちについて「お茶を欲しがっている」という相手の要求に言及することが分与行動と結びついていることも明らかになった。

キーワード：向社会的行動・分与行動・理由づけ・発達・幼児期及び児童期

1. 問題と目的

人は他者が困っていたら自己の犠牲を顧みず手を差し伸べることがある。このような他者に向けられた援助志向的な行動を向社会的行動 (prosocial behavior) という。向社会的行動の代表的研究者である Eisenberg (1992) は、向社会的行動を“他者に利益となるようなことを意図してな

^{*1}福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域

^{*2}福井市立みやまこども園

される自発的な行動”(p.4)と定義し、その中には援助行動・分与行動・貸与行動などが含まれると指摘している。例えば、援助行動とは困っている人を助けたり手伝ってあげたりする行動を示し、分与行動は自分のものを他者に分けてあげる行動を示し、貸与行動は自分のものを他者に貸してあげる行動を示す。

Eisenberg (1992)によると、向社会的行動は年齢とともにその質が変化するという。例えば、1歳に満たない赤ちゃんでさえ、他の赤ちゃんの泣き声に反応して泣きだしたり、動揺や混乱を示したりするなどの反応をする。しかし、これらは原始的な共感反応とされており、これが他者への気づかいから起こるものか単なる動揺から起こるものなのかは定かではない。1歳ごろの子どもは、他者の苦痛に反応して身体接触をしようとするなどの他者への積極的な関わりをみせるようになる。Hoffman (1982)は、1歳から2歳ごろの子どもは「自己中心的」共感を経験していると指摘している。「自己中心的」共感とは自分と同じことを相手も感じているであろうということであり、この時期の子どもは他者を助けようとするとき自分が最も心地よいと思うことを他者にも与えようとする。例えば、泣いている子に自分のお気に入りのおもちゃを渡すなどである。3歳を過ぎるころから視点取得能力という他者の立場から状況を見たり評価したりする能力が徐々に発達する(Mussen & Eisenberg, 1977)。そのため、この時期から年齢が上がるにつれて他者がどのように感じているのかが分かるようになり、苦痛を表わす他者にとってどのような行為をすることが最も適切であるかを判断し助けられるようになる。そして、さらなる年齢の上昇とともに向社会的行動の質もより高いものになり、他者の情緒的な要求に応答的で敏感に反応しやすくなる。

また、向社会的行動をとる相手も年齢とともに変化する傾向がある。2歳後半ごろの子どもたちは仲良しでない子よりも仲良しの子に対してより向社会的な反応を示し、3～5歳ごろの子どもたちは仲間よりも家族を援助する傾向があり、自分のことを助けてくれる子に対してより援助する傾向がある。さらに、学童期の子どもたちはより広い範囲の人々に共感し、友達でも家族でもない人のことも援助するようになる。

向社会的行動は、表出される行為は同じようにみえても多くの異なる動機の結果としてなされる可能性があることが指摘されている。Eisenberg (1992)は、向社会的行動を行った子ども自身にその理由を尋ねた。得られた回答から、向社会的行動を引き起こす動機(子ども自身による理由づけの説明)として、以下の7つが示されている(Table 1)。

1つ目は、「Aが欲しがったから(分けてあげた)」など他者の要求に焦点を当てる要求指向の理由である。2つ目は、「Aが持ってなかったから(分けてあげた)」、「テーブルが濡れていたから(拭いた)」など手近な課題や状況の実際的な面に注目する実際的な理由である。3つ目は、「Aは友達だから(分けてあげた)」「Aが好きだから(分けてあげた)」など援助の受け手との関係を重視している情緒的關係の理由である。4つ目は、「Aが私を好きになるから(分けてあげた)」「Aが褒めてくれるから(分けてあげた)」など他者の承認を得たいという願望による承認指向の理由

である。5つ目は、「怒られるのは嫌だから（分けてあげた）」など自己指向的理由づけによる快楽主義的理由である。6つ目は、「次はAが助けてくれるから（分けてあげた）」など自己指向的理由づけによる直接互惠の理由である。そして、7つ目は「Aが可哀想だから（分けてあげた）」など他者への共感や同情による愛他的理由である。ここで示される共感とは、他者の感情状態や状況に対する感情的な反応で相手の状態や状況と一致したもので、同情とは他者の感情状態や状況に反応した気づかひや心配の感情である。そして、多くの向社会的行動は、具体的な報酬の期待や社会的承認、自分自身のマイナスな内的状態を少なくしたいという願望などの要因によって動機づけられていると考えられる。しかし、7つ目に示したような他者への同情や内面化された道徳的原则に従おうとする願望によって動機づけられる向社会的行動も存在し、それらは愛他行動(altruistic behavior)と呼ばれる。愛他行動は向社会的行動の中に含まれながらも、その理由(動機)によって、他の向社会的行動とは明確に区別することができる。

Table 1 向社会的行動の理由(動機)

理由の種類	理由の特徴	分与行動の場合の例
要求指向の理由	他者の要求に焦点を当てる	Aが欲しがったから
実際の理由	手近な課題や状況の実際の面への注目	Aが持ってなかったから
情緒的關係の理由	援助の受け手との関係を重視	Aは友達だから
承認指向の理由	他者の承認を得たいという願望による	Aが褒めてくれるから
快楽主義的理由	自己の快楽的願望による	怒られるのは嫌だから
直接互惠の理由	後の互惠的行動への期待による	次はAが助けてくれるから
愛他的理由	他者への共感や同情	Aが可哀そうだから

(Eisenberg, 1992)をもとに著者らが作成

Eisenberg (1992)によると、ここに示した7つの理由(動機)において、年齢の小さな幼児は要求指向や実際の理由のどちらかで行動の動機を述べることが多い。子どもたちは年齢が上がると情緒的關係の理由、承認指向の理由、快楽主義的・直接互惠の理由に関連させて自らの行動を説明するようになる。小学生になり年齢が上がるにつれて、他者指向的な理由や自覚した視点取得にもとづく行動をするようになる。つまり、子どもたちは向社会的行動の質が高くなるのと同時に、その行動の動機の質も高いものへと変化していく。これらの点に関して、子どもたちが年齢とともに愛他になるということはあくまで傾向であり、より年長の子どもたちがより年少の子どもたちよりも常に援助的であるということを必ずしも意味しているわけではない。しかし、より年長の子どもたちはより年少の子どもたちに比べて視点取得能力が発達し、愛他心に関する価値を理解することができ、自分の行動は他者に見られているということを理解できるので、より年長の子どもたちの方がより愛他的に判断して行動をとることができるものと考えられる(Eisenberg, 1992)。

向社会的行動及びその動機の発達を扱った代表的な実証的研究として、Bar-Tal, Raviv, & Liser (1980)による実験研究がある。

Bar-Tal et al. (1980) は、向社会的行動はさまざまな要因によって起こりうるが、愛他的行動と名付けられた向社会的行動は、ほとんどの研究者が示す「他者の利益を目的とした、自発的に行われる、外部からの報酬を期待せずに終わるよう働く道徳的行為」というただひとつのはっきりと明確に定義された状況で行われると示している。そこで、この研究では、向社会的行動の中から分与行動を取りあげて実研が行われた。幼稚園・小学2年生・小学4年生の子どもたちがペアになってゲームを行い、勝者への報酬として飴を貰う。敗者は報酬をもらうことができないので、勝者となった子どもは、飴をもらえなかったペアのもう一人の子どもに飴を分与する機会が与えられる状況に置かれた。それらの状況は、愛他的条件、規範的条件、具体的な報酬を伴う内在的な自発性、服従、具体的なはっきりとした強化を伴う服従の5つの段階に分かれており、高度な段階に相当する状況で分与をしなかった子どもたちは、段階に沿って低い段階に相当する状況で分与する機会が与えられる。また、それぞれの状況における行動と行動の後に表現される動機との間でなし得る一致を調査するために、それぞれの子どもたちは分与行動の後にその行動をとった理由を答えることが求められた。

この研究は以下の3つの結果を示した。1つ目は、子どもたちが年長になればなるほど、より高等な実験状況において分与したということである。2つ目は、子どもたちが年長になればなるほど、分与行動に対するより高等なレベルの動機を表明したということである。この調査において表明された動機は、①報酬の期待と服従、②規範的信条、③愛他的理由の3つに分類された。これらの3つの段階においては①、②、③の順に自己指向から他者指向になり動機のレベルは高くなるといえる。3つ目は、彼らが分与した実験状況が高等であればあるほど、子どもたちは分与行動に対するより高等なレベルの動機を表明したということである。これらの結果は、向社会的行動の動機は年齢に伴って発達するということを示唆している。向社会的行動の表出は様々な年齢にわたって同じかもしれないが、その行動の背景である動機は変化する。したがって、行動の質は年齢に伴って変化する。子どもたちはより進歩的に認識・社会的客観性・道徳的指向が発達することによって高い道徳的質の向社会的行動をとることができる。つまり、愛他的行動を行うために必要な認知能力が発達し、やり方を学んだ年長の子どもたちだけが愛他的にふるまうことができる」と結論づけられている (Bar-Tal et al., 1980)。

同様に向社会的行動の動機の発達という観点から、江口・安里・川島 (2003) は次のような実験を行った。江口他 (2003) は、これまで発達心理学において、向社会的行動と愛他的行動とを曖昧に定義することが多かったという問題点を指摘し、両者の差異を明確にするため、貸与行動を取りあげて向社会的な条件と愛他的な条件設定のもとでそれぞれの行動判断がどのように変化するかを年少児から小学4年生までの幼児及び児童を対象に検討した。この研究の定義によると、向社会的行動とは、“動機にかかわらず他者のためになる行動”であり、愛他的行動とは、“外的な報酬を期待せず他者のためになり自発的・意図的になされ自己犠牲を伴う行動”である。この研究における向社会的条件は返却期待あり条件と表現されており、友だちに貸したクレヨンが

きちんと返ってくることが期待されるというものである。一方、愛他的条件は返却期待なし条件と表現されており、もし友だちにクレヨンを貸したら、そのクレヨンが壊されたりなくなったりして返ってこないかもしれないという自己へのリスクが伴うものである。上記のように設定した2つの条件設定のもとで幼児・児童に例話を読み聞かせた後、「あなたはクレヨンを貸してあげますか？それとも貸してあげませんか？」と尋ねられた。その質問に対する返答の後で「どうしてそういうふうに思ったのかな、お話できたら教えてください。」と行動の判断理由が尋ねられた。その結果、向社会的（返却期待あり）条件下においてはほとんどすべての幼児・児童が「貸してあげる」と返答した。しかし、愛他的（返却期待なし）条件下においては年長児から小学2年生の間で貸与率が低下する傾向がみられた。さらに、判断理由に着目すると、年少児・年中児は「クレヨンを貸してと言っているから。」というような他者の要求に焦点を当てて返答した者が多いが、年長児から小学2年生は「自分のクレヨンが折られるといやだ。」というような自己中心的で快楽主義的な自己利得に基づいて返答した者が多いことが明らかとなった。この結果について江口他（2003）は、年長児から小学2年生にかけて最も利己的な貸与判断を行う傾向が見られると考察している。つまり、「貸したクレヨンがきちんと返ってくる（＝次に自分も必ず使うことができる）」という自身への心理的コストが小さな返却期待あり条件においては、年少児のような年齢の低い時期から「貸してあげる」という行動判断をする可能性があるにもかかわらず、「貸したクレヨンが返ってこないかもしれない（＝自分のクレヨンが壊されたりなくなったりしてしまうかもしれないし、そうってしまった場合次に使うことができなくなる）」という自己犠牲を伴うような自身への心理的コストが大きい返却期待なし条件においては、「貸さない」という行動判断を行うため「貸してあげる」という行動の判断率は低下するというのである。

以上、幼児期から児童期における向社会的行動及びその動機の発達を扱った実証的研究を紹介したが、これらには実験条件の操作という観点から問題を指摘することができる。

Bar-Tal et al. (1980) の研究においては、子どもたちが年長になればなるほど、より高等な実験段階において分与することが明らかとなったことから、より年長の子どもたちはより年少の子どもたちより愛他的な行動をとることができると判断された。しかし、この調査の手続きにおいて、子どもたちは実験の最終段階である5段階目にたどり着くまで、飴をペアの子どもに分けてあげることが望まれた。つまり、最初の愛他的状況の段階以外では、子どもたちは常に実験者から飴を分けてあげることへの期待を受け取っていることになる。実験の中でその期待に気づいた子どもは自分の意思とは異なって飴を分けてあげていたかもしれないという可能性が考えられる。なぜなら、視点取得能力が発達したより年長の子どもたちほど、実験者たちの期待に気づく可能性が高いからである。したがって、Bar-Tal et al. (1980) の研究における問題点として、子どもたちの年齢が上がるにつれて、この調査の手続きが誘導的なものであると子どもたち自身が感じてしまうことが挙げられる。

江口他（2003）の研究においては、年少児・年中児が愛他的行動判断を行うことができるにも

かわらず、年長児・小学2年生の子どもたちの愛他的行動の判断率が低下するという結果が示された。これは、Bar-Tal et al. (1980) の研究が示した「子どもたちが年長になればなるほど、より高等な実験段階において分与する」という結果と異なる見解を示している。この点に関しての考察を江口他 (2003) は行っていない。さらに、この研究では行動の判断理由については言及していないため、分与すると返答した子どもたちがどのような理由を持って判断したのかが曖昧になっている。そのため、江口他 (2003) が自ら定義している愛他的行動に準じているのかが判断できないために愛他的条件下において「貸してあげる」と返答することは愛他的行動であると一義的に判断できないことが問題点として挙げられる。

以上のように上で紹介した2つの実証的研究は実験の手続き上問題を抱えていることが指摘でき、この点を実証データに基づいて明確にすることが本研究の目的である。

それに先立ち、久保・大西 (2016) では、向社会的行動の動機の発達について、上で紹介した先行研究を踏まえて、2つの予備的検討を行った。研究1では、生活文脈に根差した子どもの姿や発達を捉えていると考えられる幼稚園教諭・保育士の視点から先行研究の結果について検討するため、①江口他 (2003) において年長児～小学2年生にかけて貸与率が低下する要因、②子どもたちの成長に関してこれまでできていたのにできなくなったこととその原因として考えられること、③子どもたちが喧嘩をしたときの言い分の変化、④先生からの頼みごとに対する子どもたちの返答の変化、⑤保育現場でしばしば子どもの発達を言い表すために用いられる「まわりがみえるようになる」という言葉の意味、の5項目について幼稚園教諭2名 (年長組担当)、保育園長2名、保育士1名の5名にインタビュー調査を行った。その結果、幼児期の一般的な発達の特徴として、より年齢の低い年少児ほど言葉で語られた場面や実験条件を理解する力が弱い傾向にあり、彼らが能力を十分発揮できるような実験条件の工夫が必要であることが示唆された。研究2では、江口他 (2003) の研究と同じ実験条件の下で、子どもたちはどのような行動の判断とその理由づけを行うのかを検討するために、年長児1名、小学1年生3名、小学2年生3名、小学6年生2名の合計8名を対象として追試を行った。その結果、愛他的 (返却期待なし) 条件で「貸してあげる」と回答しても、その動機は条件に対応していない場合があり、これを一義的に愛他的動機による行動とすることができないこと、実験に使用した物語の登場人物が架空の人物の場合には実験協力者の子どもたちにとってリアリティが低く、回答しづらい可能性があることが考えられ、いずれも江口他 (2003) の実験条件及び手続きに問題があることが示唆された。

以上を踏まえ、久保・大西 (2016) では、幼児及び児童を対象として向社会的行動を取る動機の発達を実験的に検討する際に、以下の点を改善する必要があると結論づけた。1つ目として、行動を取る条件を操作することで向社会的か愛他的かを判断するのではなく、被験者に行動の理由について直接尋ね、それに対する回答から判断する手続きが望ましいのではないかと考えられる。2つ目に、登場人物として出てくる援助の受け手を想定しやすくするために、協力者となる子どもに「仲の良い友だちやよく一緒に遊ぶ友だち」を思い浮かべるように指示することが望ま

しいのではないかと考えられる。その際、調査の最初に「あなたの仲の良い友達やよく一緒に遊ぶ友達を一人教えてください（思い浮かべてください）。」と教示することでより理解しやすいのではないかと考えられる。そして、子どもが例話を理解できているのか確認するための質問項目を用意し、それに対して返答できなかつたり異なる返答をしたりした者に対しては適宜説明を行い、全ての子どもが例話を理解した上で調査が行われるよう配慮する必要があるだろう。3つ目に、調査が誘導的になることを防ぎ、子どもの素直な考えが表現されるようにするため、「分からない」と返答した場合以外では「あなたはどうしますか？」と尋ねることを何度も繰り返さないようにし、子どもがどのような返答をしたとしてもよいものとする必要があるであろう。

Eisenberg (1992) は多数の研究者によって行われた実証的研究をふまえて、より年少の子どもたちも向社会的にふるまうことができること、年齢が上がるにつれて他者指向的な動機や自覚した視点取得にもとづく行動をするようになること、年齢が上がると情緒的関係の説明、承認指向の説明、快楽主義的・直接互惠の説明に関連させて理由づけをするようになること、などを指摘している。しかしながら、それらの研究は実験条件が異なっていたり、異なる状況を観察した結果導き出された研究結果をまとめたものであったりするため、幼児期から児童期における向社会的行動の動機の発達を同一の条件のもとで検討した研究が必要である。これについて特に扱っている Bar-Tal et al. (1980) や江口他 (2003) の研究には、久保・大西 (2016) において論理的及び実証的に検討した結果、手続きにおける問題があることが示唆された。そのため、改善された手続きで再度検討することが必要であり、それを通して、より信頼性・妥当性の高い知見が得られるものと考えられる。

以上に述べた点を踏まえて本研究では、向社会的行動の中で分与行動を取り上げ、幼児期から児童期にかけて分与行動とその理由づけがどのように変化するかを幼児及び児童を対象に横断的に検討することを目的として調査を行った。本研究で取り上げた分与行動は、Staub & Sherk (1970) が定義した、他者に利益を与えかつ自己の所有する物を犠牲にしなければならない行為のことである。そして、これまでに述べた問題点を解消するために、本研究では、まず行動をとる条件を操作することで向社会的か愛他的かを判断するのではなく、協力者に行動の理由について直接尋ね、それに対する回答から判断することとした。本調査の手続きに関して、子どもたちからの言葉が最も重要なデータとなる。向社会的行動の動機に関する先行研究において、最も一般的な研究方法はインタビュー形式で行われている。この方法に関して、小さな子どもたちは自分の思いを十分に言葉にすることができない可能性を、反対に年上の子どもたちは社会的望ましさの影響により本心ではない言葉を口にする可能性を持っている。しかし、それでもなお、子どもたち自身の口から行動の動機を説明してもらうことが最も子どもたちの思いや考えを知ることのできる方法として使用されている (Eisenberg, 1992)。

また、登場人物として出てくる援助の受け手を想定しやすくするために、協力者となる幼児・児童に調査の最初に「あなたの仲の良い友達やよく一緒に遊ぶ友達を一人教えてください（思い

浮かべてください。）」と教示し、幼児・児童の身近な友人を登場人物の一人と設定して調査を行った。そして、幼児・児童が例話を理解できているのか確認するための質問項目を用意し、それに対して返答できなかったり異なる返答をしたりした者に対しては適宜説明を行い、全ての幼児・児童が例話を理解した上で調査が行われるようにした。調査が誘導的になることを防ぎ、幼児・児童の素直な考えが表現されるようにするため、「分からない」と返答した場合以外では「あなたはどうしますか?」と尋ねるのは一度のみとし、幼児・児童がどのような返答をしたとしてもよいものとした。

先行研究の知見から推測された仮説を以下に示した。

- (1) 理由づけに関係なく「分けてあげる」と返答する割合は、年齢が上がるごとに大きくなる。
- (2) 愛他的な理由づけをして「分けてあげる」と返答する割合は、年齢が上がるごとに大きくなる。
- (3) 年齢の小さな幼児は「お茶がないから」といった実際的な理由づけを行うことが多いが、年齢が上がるにつれて情緒的な理由づけや愛他的理由づけなどの理由づけを行うようになる。

2. 方法

(1) 調査協力者

北陸地方のA幼稚園に在籍する年少児13名(男児5名, 女児8名), 年中児15名(男児7名, 女児8名), 年長児13名(男児6名, 女児7名)の計41名と, B児童館に来館する小学1年生13名(男児6名, 女児7名), 小学2年生19名(男児5名, 女児14名)の計32名, C小学校に在籍する小学3年生36名(男児20名, 女児16名), 小学4年生34名(男児15名, 女児19名), 小学5年生35名(男児17名, 女児18名), 小学6年生34名(男児17名, 女児17名)の計139名, 合計212名(男児98名, 女児114名)を調査対象とし, 全員の回答に不備がなかったため全員を分析対象とした。

(2) 調査内容及び調査手続き

幼稚園年少児～小学校低学年の児童には個別にインタビュー調査を, 小学校中学年・高学年の児童には集団調査を行った。集団調査では児童に無記名のワークシートを配布し, それぞれの質問に対する考えを記入してもらった。

1. デモグラフィックデータの収集

性別, 学年, 生年月日の情報を収集した。幼児の場合は, 調査前に担任教諭から対象児のクラス, 性別, 生年月日の情報が記載された名簿を供与してもらった。小学校低学年の児童の場合は, 調査時に口頭で回答を求め, 調査者が記録用紙に記録した。小学校中学年・高学年の児童の場合は, これらの質問を配置したワークシートに直接回答を求めた。

2. 例話をを用いた調査

例話と例話の内容を表した絵を示し具体的な場面が想起されやすいように配慮した。絵は例話の進行に合わせて1場面ずつ4枚作成した(Figure 1)。例話の中で読み上げた内容は以下の通り

である。

①今日はとても暑い日です。天気がいいのでみんなで外に出て遊んでいます。あなたは、お友達と外でいっぱい走ってとても楽しく遊んでいます。

②あなたは、たくさん走って喉が渴いたのでお茶を飲みに行きました。あなたがお茶を飲んでいるときに、あなたと一緒ににお茶を飲みに来た仲良しのお友達が水筒を見て困った顔をしています。

③あなたはその友達に「どうしたの？」と尋ねました。するとその友達は、「お茶が水筒に全然ないんだ。先生にもらいにいったら、『みんなにお茶をあげたから、もう先生のお茶もなくなっちゃったの。ごめんね。』って言われちゃったんだ。暑くて喉もカラカラなのに、飲めないんだよ。」と言ってきました。

④あなたの水筒にはまだお茶は残っています。けれど、お茶を飲んだらまた外でたくさん遊んで喉が渴くので、お茶はたくさん必要です。お友達はお茶が飲めなくて元気がなさそうです。

例話は、主人公の性別によって判断に影響が与えられないように、男児用には男子の主人公が、女児用には女子の主人公が登場するようにした。また、個別のインタビュー調査においては、幼児・児童の発言が正確に記録できるように、許可をもらって子どもたちの目の届かないところに録音機器を設置しやりとりを録音した。

例話が話された後、調査協力者が例話を理解しているか確認をとるために例話②の場面が例示され、「(主人公・友達をそれぞれ指示し)これは誰でしょう?」「友達はどのようにしてこんな顔をしているのでしょうか?」と質問を行った。その後「あなたは、どうすると思いますか?」「どうしてそうしようと思ったのですか?」と行動とその行動の判断理由を質問した。その後、例話④の場面が提示され、「友達はどんな気持ちだと思いますか?」「あなたはどう思いましたか?」と友達と自己について尋ねた。年少児～小学2年生には個別のインタビュー調査を行ったため、質問に対する返答は、調査者が記録用紙に記述した。小学3年生～小学6年生には集団調査を行ったため、それぞれの質問ごとにワークシートに記入する時間を設け、書けていることを確認しながら順次進めていった。

すべての調査は2012年の12月中に行った。



Figure 1 本研究で用いた例話の絵

(3) 倫理的配慮

調査に先立ち、調査協力者の通う幼稚園、児童館及び小学校の管理職に調査の目的、内容、手続き、倫理的配慮について文書及び口頭で説明を行い、調査許可を得た。さらに、調査協力者の保護者にも同様の内容を記述した依頼状を配布し、調査に同意の得られた者のみを調査対象とした。倫理的配慮の内容は、本調査への協力は任意であるため、参加しないことによって不利益を被ることがないこと、生年月日は年齢を把握するためだけに用いることとし、得られた情報は分析段階で個人情報と回答内容を分けて扱い、全体的なデータとして統計的分析を加えるため個人が特定されることがないことであった。

(4) 分析方法

1. 分与行動について

幼児・児童から得られた返答において、「あなたは、どうすると思いますか?」という質問に対する返答について「分けてあげる」というような分与行動を示した者と、それ以外の行動を示した者とを区別した。「分けてあげる」という分与行動のみを取り出した理由は、「分けてあげる」という行動が「お茶がない」と言っている友達に対してできる最も向社会的で手近な解決策であると考えられるためである。得られた返答には分与行動の他にも「水道水を飲むように言う」「もっと大きな水筒を持ってくるように言う」「がまんするしかない」などが挙げられたが、

それらは困っている友達に対してすぐに対処される行動ではなく問題は解決しないため「分与しない」とした。また、「わからない」「しらない」という回答もみられたため、「わからない」に分類した。

2. 行動の理由づけについて

行動の理由づけを検討するために、「どうしてそうしようと思いましたか？」という質問への回答を愛他的・情緒的関係・要求指向・自己利得・直接互惠・实际的・紋切り型・その他の8つに分類した。しかし、この回答だけでは理由づけの分類が判断できなかったものについては、次の「あなたはその友達を見てどう思いましたか？」という自己の感情についての質問への回答も参照した。理由づけの分類において、第1著者と第2著者それぞれが分類したものを照らし合わせて不一致だった理由づけについては協議を行い決定した。

3. 友達の気持ちの推測について

「(例話③の場面で) 友達はどんな気持ちだと思いますか？」という質問に対する回答を友達の感情についての推測・要求についての推測・身体状態についての推測・その他の推測・推測できていないという5つのカテゴリーに分類した。それぞれの具体例として、感情についての推測は「悲しい・嫌な気持ち、お茶を飲んでいる主人公がうらやましい」などがあり、要求についての推測は「お茶が飲みたい、早く欲しい」など、身体状態についての推測は「喉が渴いている、疲れた」などがあり、その他の推測は友達の気持ちを推測しているが先の3つとは異なる視点によるもので「お母さんに入れてと頼もう、もっと大きな水筒を持ってくればよかった」などがあり、推測できていないというカテゴリーには「わからない」という回答を分類した。この分類に関しても、第1著者と第2著者それぞれが分類したものを照らし合わせて不一致だったものについては協議を行い決定した。

3. 結果と考察

(1) 分与行動とその理由づけの年代による差異

「あなたは、どうするといと思いますか？」という質問に対する回答を集計した結果を Table 2に示す。その結果、212名のうち「分けてあげる」という分与行動を示す回答をした者は178名(84.0%)、分与しないという回答は30名(14.2%)、わからないという回答は4名(7.7%)であった。また、Figure 2には年代ごとの分与行動の回答をした者の割合を示した。

これらの結果から、全ての年代において半数以上の者が「分けてあげる」という分与行動を示す回答を行ったことが分かる。年少児・年中児の割合は他の年代と比べて低いが、年長児から小学6年生の間においてその割合は8割を超えて高い水準であった。「わからない」という回答は年少児において2名、年中児から小学1年生まで各年代1人ずつみられた。分与行動の有無について明確にするため、年代ごとに、「分与する」と回答した者と、「分与しない」「わからない」を合わせた者の度数について適合度検定(χ^2 検定)を行った。その結果、年少児と年中児において

は χ^2 (Fisherの直接法) の値は有意とならなかったのに対して、年長児から小学6年生まではすべて5%水準以上で有意となり、「分与する」という回答が多いことが明らかになった。また、年代ごとで性差に着目すると、年少児及び年中児では男子の分与率が女子のそれよりも大幅に高く見えるのに対して、小学2年生では逆に女子の分与率が男子のそれよりも大幅に高く見える。その他の年代ではそのような大きな差異はみられなかった。これについて明確にするため、年代ごとに「分与する」と回答した者と、「分与しない」「わからない」と回答した者を合わせた者の度数における性差について独立性の検定 (χ^2 検定) を行った。なお、各セルの度数が一つでも0となっていた年長児及び小学5年生については検定を行っていない。分析の結果、検定を行っていない年長児及び小学5年生を除く全ての年代において χ^2 (Fisherの直接法) の値は有意とならず、性差はみとめられなかった。

この結果から、理由づけに関係なく「分けてあげる」という分与行動を示す回答の割合は年齢が上がるごとに大きくなるという仮説 (1) は部分的に支持された。すなわち、年少児から年長児にかけては支持されたといえるが、年長児から小学6年生の間ではいずれも8割以上の高い水準を示しており明確な値の上昇はみられなかったために支持されていないといえる。性差についてはサンプルサイズの問題もあるため今後サンプルサイズを増やしてより詳細な検討を行う必要がある。

Table 2 「どうするか?」という質問に対する回答の集計結果

	全体					男子					女子				
	協力者	分与する	分与しない	わからない		協力者	分与する	分与しない	わからない		協力者	分与する	分与しない	わからない	
	N	N (%)	N (%)	N (%)		N	N (%)	N (%)	N (%)		N	N (%)	N (%)	N (%)	
年少児	13	7 (53.8)	4 (30.8)	2 (15.4)		5	4 (80.0)	1 (20.0)	0 (0.0)		8	3 (37.5)	3 (37.5)	2 (25.0)	
年中児	15	9 (60.0)	5 (33.3)	1 (6.7)		7	5 (71.4)	1 (14.3)	1 (14.3)		8	4 (50.0)	4 (50.0)	0 (0.0)	
年長児	13	12 (92.3)	0 (0.0)	1 (7.7)		6	6 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)		7	6 (85.7)	0 (0.0)	1 (14.3)	
小学1年生	13	11 (84.6)	1 (7.7)	1 (7.7)		6	5 (83.3)	1 (16.7)	0 (0.0)		7	6 (85.7)	0 (0.0)	1 (14.3)	
小学2年生	19	16 (84.2)	3 (15.8)	0 (0.0)		5	3 (60.0)	2 (40.0)	0 (0.0)		14	13 (92.9)	1 (7.1)	0 (0.0)	
小学3年生	36	30 (83.3)	6 (16.7)	0 (0.0)		20	16 (80.0)	4 (20.0)	0 (0.0)		16	14 (87.5)	2 (12.5)	0 (0.0)	
小学4年生	34	30 (88.2)	4 (11.8)	0 (0.0)		15	12 (80.0)	3 (20.0)	0 (0.0)		19	18 (94.7)	1 (5.3)	0 (0.0)	
小学5年生	35	34 (97.1)	1 (2.9)	0 (0.0)		17	17 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)		18	17 (94.4)	1 (5.6)	0 (0.0)	
小学6年生	34	29 (85.3)	5 (14.7)	0 (0.0)		17	14 (82.4)	3 (17.6)	0 (0.0)		17	15 (88.2)	2 (11.8)	0 (0.0)	
合計	212	178 (84.0)	29 (13.7)	5 (2.4)		98	82 (83.7)	15 (15.3)	1 (1.0)		114	96 (84.2)	14 (12.3)	4 (3.5)	

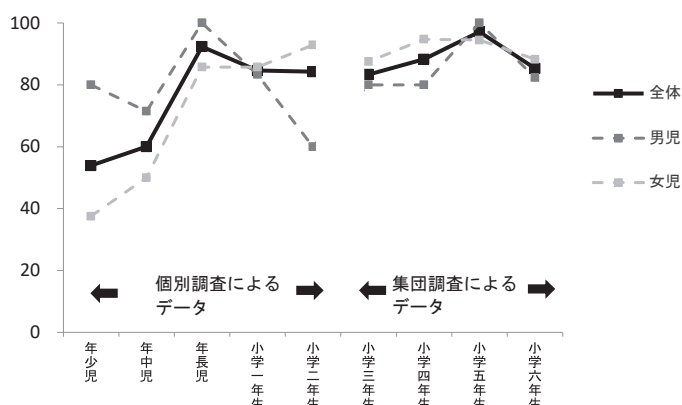


Figure 2 年代ごとの分与行動の生起割合

(2) 分与行動における理由づけの年代による差異

分与すると回答した178名が表明した理由づけを Eisenberg (1992) の示した7つ及びその他の計8カテゴリーに分類した。178名の示した理由は198あり、そのうち、第1著者と第2著者の分類における一致数は全体の198のうち157で、一致率は79.3%であった。不一致の回答については協議して一致させた。

Table 3 には、8カテゴリーに分類された理由づけの具体例を示した。Table 4 には、年代ごとの分与行動を回答した者の度数、理由を2つ回答した者の度数と分与行動を回答した者の度数における割合、理由合計、各理由づけの度数と分与行動を回答した者の度数における割合を示した。理由を3つ以上回答した者はいなかった。さらに、年代ごとの各理由づけの割合を Figure 3 に示した。なお、これ以降の分析ではサンプルサイズが小さいため、性別を分けずに全体で行った。

Table 3 分与行動における理由づけの具体例

理由づけ	具体例
愛他的	かわいそう、喉が渴いている
情緒的關係	友達だから、仲良しだから
要求指向	欲しがっているから、ないと言っているから
自己利得	助けると気持ちよくなる、自分がないときくれると嬉しいから
直接互惠	分けるのはお互いにとっていいから、前に分けてくれたお返し
实际的	お茶がないから、自分のお茶があるから
紋切り型	困っている人は助けないといけない、分けるのは当たり前
その他	わからない、上の7つの理由づけのどれにも当てはまらないもの

Table 4 分与行動における理由づけの割合

	分与 行動		理由を2つ 回答した者		理由 合計		愛他		情緒		要求		自己		互惠		実際		紋切		その他	
	N	N	(%) ¹	N	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹
年少児	7	0	(0.0)	7	2	(28.6)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(14.3)	4	(57.1)	0	(0.0)	0	(0.0)
年中児	9	0	(0.0)	9	5	(55.6)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	3	(33.3)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(11.1)
年長児	12	1	(8.3)	13	10	(83.3)	1	(8.3)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(8.3)	0	(0.0)	1	(8.3)	0	(0.0)	0	(0.0)
小学1年生	11	0	(0.0)	11	8	(72.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	2	(18.2)	0	(0.0)	1	(9.1)
小学2年生	16	0	(0.0)	16	10	(62.5)	1	(6.3)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(6.3)	4	(25.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
小学3年生	30	5	(16.7)	35	24	(80.0)	2	(6.7)	0	(0.0)	3	(10.0)	2	(6.7)	4	(13.3)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
小学4年生	30	3	(10.0)	33	20	(66.7)	4	(13.3)	0	(0.0)	1	(3.3)	1	(3.3)	4	(13.3)	2	(6.7)	1	(3.3)	0	(0.0)
小学5年生	34	5	(14.7)	39	30	(88.2)	1	(2.9)	1	(2.9)	1	(2.9)	4	(11.8)	2	(5.9)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
小学6年生	29	6	(20.7)	35	22	(75.9)	3	(10.3)	1	(3.4)	3	(10.3)	0	(0.0)	4	(13.8)	1	(3.4)	1	(3.4)	0	(0.0)
合計	178	20	(11.2)	198	131	(73.6)	12	(6.7)	2	(1.1)	9	(5.1)	9	(5.1)	28	(15.7)	3	(1.7)	4	(2.2)	0	(0.0)

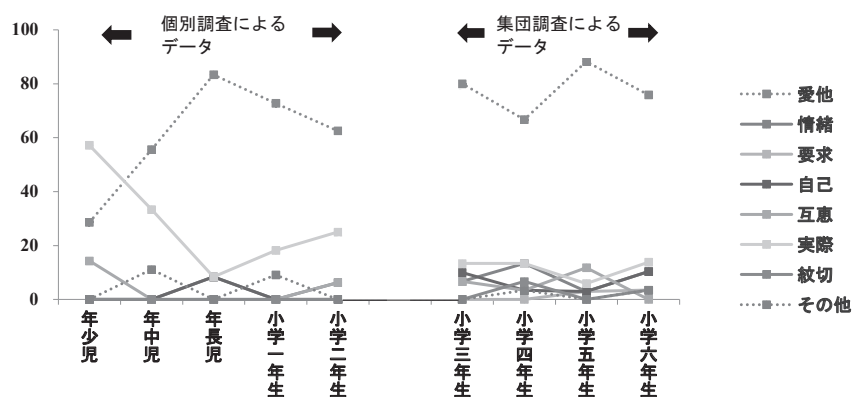
¹分与行動の度数を分母として算出

Figure 3 年代ごとの分与行動の理由づけの割合

これらの結果から、年少児以外の年代において最も多く表明されたのが愛他的理由づけであることが分かる。愛他的理由づけは、年少児から年長児にかけては単調増加し、小学2年生までは単調減少、その後は増減を繰り返すという複雑な値を示した。年中児以降は高い水準を示していることは確かであるが、明確に単調増加とはいえないため、愛他的な理由づけをして「分けてあげる」と返答する割合は、年齢が上がるごとに大きくなるという仮説(2)は部分的に支持されたといえよう。

情緒の関係の理由づけが小学生以上においてみられることは、小学生になり年齢が上がるにつれて他者指向的な動機や自覚した視点取得にもとづく行動をとるようになるという Eisenberg (1992) の指摘とある程度一致する結果であるといえる。さらに、年少児・年中児の幼児の多くが実際的理由づけを表明したことから、年齢の小さな幼児は要求指向の説明や実際的理由づけのどちらかで行動の動機を述べることが多いという Eisenberg (1992) の指摘が支持されたといえる。

また、Eisenberg (1992) が示していた要求指向の説明が少なかったのは、例話に登場する友達は「お茶をちょうだい」と主人公に頼んでいないためであると考えられる。さらに、年代が上がると理由を2つ回答した者の数も増えているとともに、情緒的關係・要求指向・自己利益・紋切型の理由づけを行う子どもが出てきており、子どもたちの表明する動機には多様性が生まれることが分かる。以上から、年齢の小さな幼児は「お茶がないから」といった実際的理由づけを行うことが多いが、年齢が上がるにつれて情緒的理由づけや愛他的理由づけなどの理由づけを行うようになるという仮説 (3) は支持されたといえる。

最後に、Table 5に愛他的理由づけの年代ごとの具体例を示した。この結果から、理由づけの分類として「愛他的」と分類されていても表明された内容は学年が上がるごとに多様なものになっていることが分かる。小学校高学年になると「お茶を飲まないと体調が悪くなってしまう」など、友達がお茶を飲めないことに同情するだけでなく、その後の見通しを立てて自分がどうすべきかを考えていることがうかがえる。つまり、子どもたちは大きくなるにつれ物事の判断に未来の予測を含めており、愛他的理由づけにおいても年齢の上昇とともにその内容はより複雑なものに変化することを示唆している。

Table 5 愛他的理由づけの年代ごとの具体例

年代	具体例
年少児	困っている、飲めないとさみしい
年中児	かわいそう、疲れている
年長児	お茶がなくてかわいそう
小学1年生	かわいそうだから
小学2年生	かわいそうだから
小学3年生	友達がかわいそう、友達の元気がない
小学4年生	かわいそう、困っている、友達が困っている、友達を助けたい
小学5年生	かわいそう困っている、お茶をあげたら元気になって楽しく遊べる、自分だけ飲むわけにはいかない
小学6年生	かわいそう、困っている、お茶を飲まないと体調が悪くなってしまう

(2) 友達の気持ちの推測と分与行動・理由づけによる差異

計212名の幼児・児童から得られた回答は、全部で277であった。第1著者と第2著者の分類における一致数は全体の277のうち252で、一致率は91.0%であった。

Table 6に、友達の気持ちの推測についての年代ごとの割合を示した。Figure 4には、各内容の割合を年代ごとに示した。回答数は小学校2年生までは調査協力者数とほぼ同じであり、一人一つ推測していると考えられたが、小学3年生以上では推測の度数が大幅に増加しており、多くの子どもにおいて一人二つ以上推測していることが示唆された。

各内容についてみると、感情状態についての推測は全般的には全年代において多く回答されており、年少児から小学2年生までの子どもにおいては最も多く回答された内容であった。その一方で、要求についての推測は年少児から小学2年生は多くは回答されていないのに対して、小学

3年生以上においては最も多く回答された内容であった。つまり、小学2年生から3年生の間で友達の気持ちについての推測に大きな変化があるということが示唆された。身体の状態についての推測は年少児では少ないものの、年中児から小学4年生までは増加傾向がみられ、その後減少傾向がみられた。その他及びわからないについては年少児に多く、それ以上ではほとんどみられないか、みられても少なかった。

Table 6 友達の気持ちの推測についての年代ごとの割合

	回答	感情状態		身体の状態		要求		その他		分からない	
	N	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹	N	(%) ¹
年少児	13	5	(38.5)	1	(7.7)	1	(7.7)	3	(23.1)	3	(23.1)
年中児	16	10	(66.7)	3	(20.0)	1	(6.7)	0	(0.0)	2	(13.3)
年長児	15	7	(53.8)	4	(30.8)	2	(15.4)	1	(7.7)	1	(7.7)
小学1年生	13	6	(46.2)	5	(38.5)	2	(15.4)	0	(0.0)	0	(0.0)
小学2年生	19	10	(52.6)	6	(31.6)	1	(5.3)	0	(0.0)	2	(10.5)
小学3年生	46	14	(38.9)	11	(30.6)	20	(55.6)	1	(2.8)	0	(0.0)
小学4年生	52	8	(23.5)	17	(50.0)	24	(70.6)	1	(2.9)	2	(5.9)
小学5年生	49	13	(37.1)	14	(40.0)	21	(60.0)	1	(2.9)	0	(0.0)
小学6年生	54	18	(52.9)	11	(32.4)	24	(70.6)	1	(2.9)	0	(0.0)
合計	277	91	(42.9)	72	(34.0)	96	(45.3)	8	(3.8)	10	(4.7)

¹調査協力者の度数を分母として算出

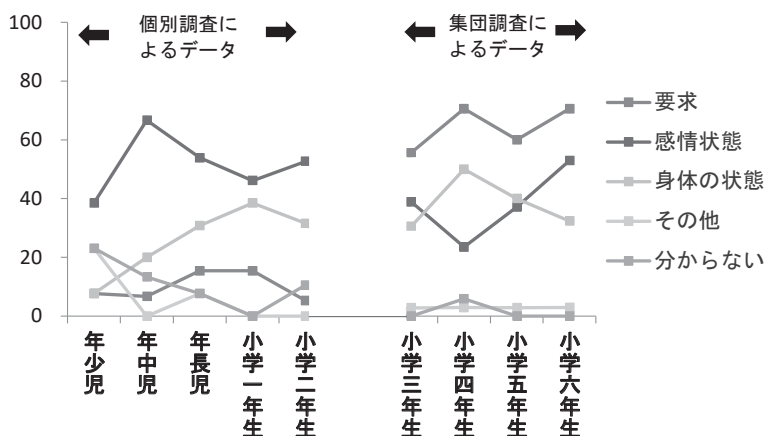


Figure 4 年代ごとの友達の気持ちの推測の内容の割合

分与行動と友達の気持ちの推測の関連性について、クロス集計と独立性の検定 (χ^2 検定) 及び残差分析を行った (Table 7)。その結果、分与行動と要求についての推測では $\chi^2 = 7.73$ ($df = 1$), $p = .005$, $\phi = .191$ と弱い関連があることが示された。分与行動と感情状態についての推測では $\chi^2 = 1.66$ ($df = 1$), $p = .198$, $\phi = -.088$ であり、分与行動と身体の状態についての推測では $\chi^2 = 2.13$ ($df = 1$), $p = .114$, $\phi = .100$ となったことから、分与行動と感情状態及び身体の状態の推測には関連性がないといえる。これらの結果は、友達の気持ちを推測する際、友達の要求に目を

向けることが分与行動につながることを示唆している。

Table 7 分与行動と友達の気持ちの推測の関連性

気持ちの推測		分与行動				合計	χ^2 ($df=1$)	p
		なし		あり				
		クロス集計	残差分析	クロス集計	残差分析			
感情状態	なし	16 (7.5)	1.3	105 (49.5)	1.3	121 (57.1)	1.66	.198
	あり	18 (8.5)	1.3	73 (34.4)	1.3	91 (42.9)	-.09	
	合計	34 (16.0)		178 (84.0)		212 (100)		
身体の状態	なし	26 (12.3)	1.5	113 (53.3)	1.5	139 (65.6)	2.13	.144
	あり	8 (3.8)	1.5	65 (30.7)	1.5	73 (34.4)	.10	
	合計	34 (16.0)		178 (84.0)		212 (100)		
要求	なし	26 (12.3)	2.8 **	90 (42.5)	-2.8 **	116 (54.7)	7.73	.005
	あり	8 (3.8)	-2.8 **	88 (41.5)	2.8 **	96 (45.3)	.19	
	合計	34 (16.0)		178 (84.0)		212 (100)		

度数 (%), 調整済み標準化残差¹

¹残差分析結果は、数値が正の場合は観測度数が期待度数よりも大きいことを意味し、負の値の場合は観測度数が期待度数よりも小さいことを意味する。*の場合は5%水準で有意であること、**の場合は、1%水準で有意であることを意味する。

次に、分与行動において分与すると回答した178名を対象に、愛他的理由づけの有無と気持ちの推測の関連性について、クロス集計と独立性の検定 (χ^2 検定) 及び残差分析を行った (Table 8)。その結果、愛他的理由づけと感情状態についての推測では $\chi^2 = 3.08$ ($df = 1$), $p = .079$, $\phi = .132$ となり、関連性が有意傾向であった。愛他的理由づけと身体の状態についての推測では $\chi^2 = 0.88$ ($df = 1$), $p = .348$, $\phi = .070$, 要求についての推測では $\chi^2 = 0.34$ ($df = 1$), $p = .559$, $\phi = -.044$ となった。つまり、愛他的理由づけについては、気持ちの推測と明確な関連性はみられないことが明らかとなった。

Table 8 分与すると回答した者における愛他的理由づけと気持ちの推測の関連性

気持ちの推測		愛他理由づけ				合計	χ^2 ($df=1$)	p
		なし		あり				
		クロス集計	残差分析	クロス集計	残差分析			
感情状態	なし	39 (21.9)	1.8	66 (37.1)	-1.8	105 (59.0)	3.08	.079
	あり	18 (10.1)	-1.8	55 (30.9)	1.8	73 (41.0)	.13	
	合計	57 (32.0)		121 (68.0)		178 (100)		
身体の状態	なし	39 (21.9)	0.9	74 (41.6)	-.9	113 (63.5)	0.88	.348
	あり	18 (10.1)	-0.9	47 (26.4)	.9	65 (36.5)	.07	
	合計	57 (32.0)		121 (68.0)		178 (100)		
要求	なし	27 (15.2)	-0.6	63 (35.4)	.6	90 (50.6)	0.34	.559
	あり	30 (16.9)	0.6	58 (32.6)	-.6	88 (49.4)	-.04	
	合計	57 (32.0)		121 (68.0)		178 (100)		

度数 (%), 調整済み標準化残差¹

¹残差分析結果は、数値が正の場合は観測度数が期待度数よりも大きいことを意味し、負の値の場合は観測度数が期待度数よりも小さいことを意味する。*の場合は5%水準で有意であること、**の場合は、1%水準で有意であることを意味する。

4. 総合考察

本研究は、向社会的行動の中で分与行動を取り上げ、幼児期から児童期にかけて分与行動とその理由づけがどのように変化するのかを幼児・児童を対象に横断的に検討することを目的として調査を行った。分析の結果、「自分にとって仲の良い友達にお茶を分けてあげる」というような日常的に起こりそうな状況において多くの子どもたちが分けてあげるという向社会的判断を行うということ、子どもたちは様々な理由づけで行動判断を行っていること、子どもたちの年齢が上がるにつれてより愛他的理由づけを行う傾向があることが明らかとなった。また、友達の気持ちの推測と分与行動との関係において、友達の気持ちについて要求の推測を行った子どもたちはより分与の行動判断をとりやすいということ、友達の気持ちの推測と愛他的理由づけとの間には明確な関係がみられないことが示された。

以下、それぞれについて考察を行う。

(1) 分与行動について

いずれの年代においても半数以上の幼児・児童が「分けてあげる」といった分与行動の回答を行っていることが明らかとなった。つまり、自分にとって仲の良い友達が困っている状況において、多くの幼児・児童が分与行動によって友達を助けようとすることが示唆された。このことから、江口他（2002）における“幼児のような年齢の者であっても、向社会的な判断を行うことができる”（p.97）という指摘が本研究においても支持された。また、年少児から年長児にかけて分与行動の割合が増加していたという結果から、幼児期において幼児の年齢が上がるにつれてより分与行動をとるようになることが示唆された。

この結果より、江口他（2002）が示したU字型の貸与率の変化における年少児・年中児の貸与率が高かったことは、久保・大西（2016）の結果でも示されたように、幼児が例話をしっかりと理解できていなかったために、登場人物の「貸してほしい」という言葉にひきずられて貸与判断を下していたためであると考えられる。本研究では、幼児と小学1・2年生を対象とした個別のインタビュー調査において、子どもが例話を理解しているか確認の質問を行い、全ての子どもが例話を理解した上で質問を行ったため、このような結果になったと考えられる。

(2) 分与行動の理由づけについて

年少児や年中児は、「お茶がないから」などの実際的理由づけで回答することが多かった。しかし、実際的理由づけは年代が上がるとともにその割合は低下していた。これは、年少児や年中児においては見聞きした「お茶がない」という状況や言葉をそのまま受け取って回答したためであると考えられる。一方で、年長児以上ではより愛他的理由づけを行う傾向があるという結果が得られた。

また、愛他的理由づけや実際的理由づけは年少児も行っているが、年齢が上がるにつれて情緒的関係の理由づけや自己利得の理由づけなどのさまざまな理由づけをするようになることが明らかとなった。この点は、Eisenberg（1992）の、年齢が上がると情緒的関係の説明、承認指向の説

明、快楽主義的・直接互惠の説明に関連させて理由づけをするようになるという考えに沿うものであるといえる。また、Raviv, Daniel & Fleissing (1988) も愛他行動の動機づけについての研究の中で、年長の児童が多種の理由づけを行っていることを示しており、これらの研究と一致するものであった。さらに、表明された理由づけの内容が複雑なものになったり、一度に複数の理由づけを述べるようになったりすることも明らかとなった。この点に関しては、内藤(2009)が、子どもたちは“学年が上がるにつれて、単に発せられた言葉のみを捉えるのではなく、その背後にある他者の立場や気分などを意識するようになる”(p.88)と述べていることとも符合する。つまり、本研究の調査においても、より年長の子どもたちは友達の「お茶がなくて飲めないんだ。」という言葉から、友達の気分や自分と友達との関係など様々な視点から考えた結果としていろいろな理由づけを挙げていたのだと考えられる。愛他的理由づけは、他者指向の同情ができるようになることで表出される。同情は共感性の一つであり、共感性は幼児期から青年期において発達するため(Hoffman, 1982)、一般的には、年齢が上がるにつれて愛他的理由づけを行うようになると解釈できる。しかし、本研究では、年長児以降では愛他的理由づけが明確に単調増加するわけではなく、上述のようにその他の様々な理由づけも同時に表明されていたため、子どもは年齢の上昇とともに単純に愛他的理由づけのみによって分与行動をとるのではなく、その他の多様な理由づけも加味しながらより複雑な動機によって分与行動を行うようになってくると考えられる。すなわち、子どもたちは年齢が上がるにつれて、様々なことを同時に考えたり多様な視点からものを捉えたりしながら行動するようになってくると解釈できる。

(3) 気持ちの推測と分与行動について

友達の気持ちの推測を求められた際、要求についての推測をした子どもたちは、していない子どもたちよりもより分与行動をとりやすいということが示された。しかし、感情状態についての推測や身体の状態についての推測は分与行動との関連はみられなかった。したがって、「お茶が飲めなくて悲しい気持ち」「喉が渴いたなあと思う」などの感情状態や身体の状態についての推測をすることができても、その気持ちの推測だけでは分与行動に繋がらないが、「お茶が欲しいと思っている」などの要求についての推測は分与行動に繋がるということが示された。Eisenberg & Hand (1979) は、幼児の例話場面での道徳的理由づけと自然観察場面における向社会的行動との関係を検討した研究において、特に自発的な分与行動は要求志向的理由づけと正の相関があることを明らかにしており、本研究においてもこのような関連性が支持されたといえる。さらに、感情状態や身体の状態の推測については、年少児・年中児の多くも推測することができたが、要求についての推測は小学校中学年ごろからその割合が増加していた。本研究の調査では友達は主人公に「お茶が飲みたい、ちょうだい。」といった要求の発言はしていないため、子どもたちは自身と友人の置かれた状況を理解し友人の立場に立ってその要求を推測する能力が必要となる。これは、Selman (1976) が示した社会的視点取得能力の4つの発達段階における“他者の視点に立って自分自身の思考や感情を内省できる(7～12歳)”(p.182)という段階2の能力が求

められていると考えられる。この視点取得能力は年齢とともに発達するため、およそ小学校中学年ごろの子どもたちから他者の要求にも気づきやすくなるのではないかと考えられる。さらに、Eisenberg, Lundy, Shell, & Roth (1985) は、仲間を対象にした向社会的行動において、子どもたちはしばしば他者の要求や欲求を行動の理由として口にする傾向が強いことを示している。これらの結果から、年齢の小さな子どもたちでも他者の感情についての推測は行うことができるが、分与行動は単に相手の感情の推測から引き起こされるものではなく、相手が何を要求しているのかが分かるようになる必要があるということが明らかになった。

(4) 気持ちの推測と愛他的理由づけについて

友達の気持ちで感情状態についての推測は愛他的理由づけとの関連は有意傾向であった。したがって、他者の気持ちの推測において「悲しい気持ち、つらい気持ち」などの感情状態に目を向けている子どもたちは、推測した他者の感情に同情して理由づけを行うことが多い可能性があることが示唆された。この点に関して、浜崎 (1991) は“共感性の発達は、認知的成熟にともなって、単なる代理的情動反応（原始的共感）から個人的苦痛へと発達し、他者志向の同情的心痛が可能になり、愛他的動機を導くことになると考えられる” (p.31) と指摘しており、本研究の結果とおおむね一致している。しかしながら、感情状態についての推測と愛他的理由づけの関連性は弱く、愛他的理由づけとより関連する別の変数について検討する必要があることが示唆された。

(5) 教育への示唆

本研究において、向社会的行動の中の分与行動に関しては、年少児においても実行することができ、年長児では小学1～6年生の児童とほとんど同じ水準で実行することができることが示唆された。さらに、他者の感情状態についての考えや、自身の行動の理由づけは年齢とともに変化し、幼児期に多くみられた実際的な理由づけからより愛他的な理由づけを持って行動したり、状況を見たまま受け取るのではなく他者指向的に状況を捉えて行動したりすることができるようになると考えられる。

保育現場や教育現場においても、本研究のような分与行動や援助行動が求められる場面に子どもたちが遭遇することが少なくない。例えば、おもちゃの貸し借りによる喧嘩などのいざこざ場面においては、教師や保育士は子どもに対して「〇〇ちゃん（相手）はどんな気持ちだったのかな？」など、相手の感情面に目を向けるような声かけをしがちである。相手の感情状態を推測することと分与行動との関連がなかったという本研究の知見をふまえると、年少児や年中児においては、相手の要求に気づくことができるような声かけをすることが効果的かもしれない。それにより、相手の気持ちに加えて子ども自身が具体的にどのように行動すればよいかを考えることにつながるだろう。また、幼児がもう一方の幼児を慰めるといった場面では、慰めようとする子どもは「どうしたの？」と相手が困っている事実に関心を寄せてしまいがちであるが、相手の感情に目を向けられるような声かけを行うことで他者指向的・愛他的に考えることに目を向けることができるかもしれない。それにより、困っている・悲しいなどの感情を抱いている相手に対して、

自分はどんなことをしてあげられるのか、相手はどんなことをしたら喜んでくれるのかを考えるきっかけになるかもしれない。子ども同士のやりとりの中で、教師は援助者となる子どもや被援助者となる子どもの状況、さらに子どものまわりの状況を把握し、子どもたちが他者の視点からの状況や他者の要求に気づくことができるように働きかけることで彼らの向社会性を育てることに寄与できると考えられる。

(6) 今後の課題

本研究における課題として、まず個別のインタビュー調査と集団調査の同質性についての問題が挙げられる。年長の子どもたちならば例話や調査者の指示が理解できるものと想定したため小学3年生以上に対して一斉調査を行ったが、調査者の指示や状況が理解できなかった子どもがいなかったとも言い切れない。また、厳密には異なる調査方法であるため、得られたデータを同等のものとして扱うことに問題があるかもしれない。そのため、全調査協力者に対して個別のインタビュー調査を行うことが必要であろう。また、各年代のサンプルサイズは十分に大きいとはいえず、理由づけや気持ちの推測においては性差を検討することができなかった。さらに、個別でインタビュー調査を行った年少児から小学2年生のデータは、集団調査を行った3年生から6年生のデータと比べてサンプルサイズが小さかった。今後は各年代を均等かつ性別についても分析可能なよりサンプルサイズの大きなデータを収集し詳細な検討を行うことが課題である。最後に、本研究では横断データによる分析を行ったが、本研究の結果が幼児期及び児童期における向社会的行動とその理由づけについての真の発達研究となるためには、縦断データを用いた分析を行うことが必要であり、本研究に残された重要な課題であるといえる。

5. 引用文献

- Bar-Tal, D., Raviv, A., & Liser, T. (1980). The Development of Altruistic Behavior: Empirical Evidence, *Developmental Psychology*, 16, 516-524.
- Eisenberg, N. (1992). *The Caring Child*. Harvard University Press. (アイゼンバーグN. 二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子(共訳)(1995). 思いやりのある子どもたち: 向社会的行動の発達心理, 北大路書房.)
- Eisenberg-Berg, N., & Hand, M. (1979). The Relationship of Preschoolers' Reasoning about Prosocial Moral Conflicts to Prosocial Behavior. *Child Development*, 50, 356-363.
- Eisenberg, N., Lundy, N., Shell, R., & Roth, K. (1985). Children's Justifications for Their Adult and Peer-Directed Compliant (Prosocial and Nonprosocial) Behaviors, *Developmental Psychology*, 21, 325-331.
- 江口知子・安里勝人・川島一夫(2002). 貸与行動における向社会的判断と愛他的判断, 信州大学教育学部紀要, 108, 91-99.
- 浜崎隆司(1991). 幼児・児童における向社会的行動の動機づけ要因としての共感性, 幼年教育研究年報, 13, 25-34.
- Hoffman, M. L. (1982). Development of Prosocial Motivation: Empathy and Guilt. In N. Eisenberg-Berg, (Ed), *Development of Prosocial Behavior*. New York: Academic Press, 287-288.
- 久保遥香・大西将史(2016). 幼児期および児童期における向社会的行動の動機に関する予備的研究—幼稚園教

- 論・保育士へのインタビュー調査および先行研究の追試による検討一, 福井大学教育実践研究, 41, 61-68.
- Mussen, P., & Eisenberg, N. (1977). *Roots of Caring, Sharing, and Helping: The Development of Prosocial Behavior in Children*. San Francisco: Freeman. (マッセンP・アイゼンバーグN. 菊池彰夫(訳)(1980). 思いやりの発達心理学: 向社会的行動の発達, 金子書房.)
- 内藤綾子(2009). コラム5 どうしてお母さんはおこったのか?—ことばに対する意識調査から— 心理科学研究会(編) 小学生の生活とこころの発達, 福村出版, pp. 87-88.
- Raviv, A., B., Daniel, R., A. & Fleissing, P. (1988). Understanding motivations to help: A study of social cognition. *Genetic Social, & General Psychology Monographs*, 113, 323-340.
- Selman, R. (1976). Social-cognitive understanding. In Lickona, T. (Ed.), *Moral development and behavior*. New York: Academic Press. Staub, E., & Sherk, L. (1970). Need for approval, children's sharing behavior and reciprocity in sharing. *Child Development*, 41, 243-252.

サステナブル化粧品に関連する認証と生物多様性の関わり

Relationship between certification and biodiversity related to sustainable cosmetics

高井 愛子^{*1} 長井 美有紀^{*2}

(2022年9月30日 受付)

本研究は研究ノートで、サステナブル化粧品におけるエコ認証マークの認知度や理解度、その重要性について現状を把握し、どの程度生物多様性の理解が消費者において浸透しているのかを調査する。海外で先行しているサステナブル化粧品の事例を通じて、今後の有効な化粧品への認証マーク活用についての研究課題の検討を目的としている。

キーワード：生物多様性、サステナブル化粧品、エコ認証マーク、持続可能な企業活動

第1節 はじめに

2015年の国連によるSDGsの採択以降、政府やNPO団体に加えて、企業の積極的な持続可能な実践が推進されている。環境や社会課題に対して企業は、ボランティア活動ではなく本業内で事業に関する取り組みが求められている。企業の積極的な企業の製品開発や経営戦略の発信によって、持続可能な視点の製品やサービスの展開も豊富になりつつ、消費者にとって一層身近になっている。サステナブルは、日本語では持続可能性と訳される。

化粧品業界においても同様に、持続可能な視点が重要視されている。化粧品とは、薬事法が改定された2014年の薬機法により「人の身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、又は皮膚若しくは毛髪を健やかに保つために、身体に塗擦、散布その他それらに類似する方法で使用されることが目的とされている物で、人体に対する作用が緩和なもの」と定義されている。サステナブル化粧品とは、肌に直接塗布して体内に取り込まれるため、食品と同様のリスクのない安全で持続的な原材料や方法を用いて製造されると定義する。オーガニック化粧品のオーガニックは、日本語で有機栽培または有機と訳されるが有機化粧品とは呼ばない。有機と謳うには、日本

^{*1}福井大学大学院国際地域マネジメント研究科国際地域マネジメント専攻

^{*2}株式会社EcoVia Intal代表取締役、一般社団法人 日本サステナブル化粧品振興機構代表理事

だと有機JASマークに代表されるような有機JAS認証栽培を、第三社機関の認証が義務付けられているためである。

オーガニック化粧品の上市によって、消費者の認知機会が増えて、認知度も向上している。国内化粧品の大手企業では、動物実験の禁止や、認証マークの活用、絶滅生物への影響を含む原料調達の見直し、化学成分よりも自然成分での開発、バイオマスの化粧品容器などに取り組みを始めている。これらに対して、企業は情報開示をし、持続可能性についての取り組みを消費者へ伝えるために広報活動や広告宣伝、製品プロモーションをはじめとしたマーケティング活動を行なっている。化粧品の広告としては、国内ではTVやインターネット、SNSのイメージ広告が代表的である。その一方で、本質的な問題である生物多様性を取り上げている企業の広告宣伝活動は確認できていない。例えば、パーム油は必須の化粧品原料で自然素材のイメージ広告は存在するが、その採取や輸出における多くの社会や環境問題があるに関わらず、それらのリスクを訴える広告は存在しない。消費者も使用でそれらに加担することを、化粧品本体のパッケージに認証マークを表示することによって、消費者も選択が可能になる。化粧品業界におけるサステナブルに関する問題に対して、いくつかの企業は認証を情報提示の1つとして活用し、消費者への認知度に貢献している。しかし、エコ認証マークの役割に関する研究が少ない(井上 2022)。井上(2022)によると、倫理的製品の消費研究は購買に焦点を当てたものが多く、パッケージやそこに印刷された認証レベルが果たす役目はあまり言及されてこなかったと指摘している。信頼できるエコ認証マークの使用により、企業は品質や特定の望ましい属性の存在を示すことができ、そうすることで、このシグナルに基づくプレミアムの可能性を生み出すことができる(McCluskey 2003)。

シグナリングとは、認証によって、外部からは見えないサプライチェーンの特性を有する証明の役割を持っている。シグナリング理論(Spence, 1973)では、CoC認証取得はサプライチェーンにおける情報の非対称性を低減し、それによって認証取得企業の競争優位を生み出すと考えられている(Mobtie 2012)。つまり、認証によって、隠されているプロセスを証明し、信頼へとつながると言える。プレミアムは、アメリカにおいては消費者を対象としたマーケティングにおいて、最も頻繁に採用される販売促進手段の1つである(中山 2010)。マーケティングでは、プレミアムを上等な、上質な、高価である形容詞としてブランディングに用いる。エコプレミアムは、その意味とは異なり、製品の環境負荷の低さ故に価値が高い製品を意味する(安井 2004)。例えば、RSPOのプレミアムとは、持続可能なパーム油の証明のために、生産者を含むサプライチェーン全体で認証取得や維持に要する費用が価格に上乗せされ販売されている。一般的に、非認証パーム油に比べて価格が高く、認証製品として需給が高まっており、市場原理により価格が変動する¹。シグナリングによって、そのプレミアム価値がある一例と言える。

認証範囲の分類として、製品そのものに付与される製品認証と、環境影響評価をサプライ

¹ RSPO認証ホームページより、<https://jaspon.jp/faq/>、最終閲覧日2022年9月20日。

チェーン全体の製品の製造工程や使用、廃棄が含まれる認証がある (Blend and Van Ravenswaay 1999)。サプライチェーン全体の認証は CoC 認証 (Chain of Custody: 生産・加工・流通過程の管理) と呼ばれる。トレーサビリティの担保となり、消費者の安心にもつながるためその申請数は増加傾向である。RSPO 認証登録企業数は、2017 年には 77 社、2018 年には 110 社、2019 年度に 171 件だったのが、2022 年度には 285 件と急増している²。申請数の増加の一方で、CoC 認証の準備段階や、申請してから認証されたパーム油の実際の使用までには時間を要するために、将来的な使用のために RSPO への企業登録のみの実態もある。

加えて、Abigayil (2021) が指摘しているように、認証の普及が世界と比較すると日本は遅れている。消費者については、日本の消費者は認証への要求度が低いとして知られている。消費者への食の安心のアンケートの結果では、食品を安心だと思う理由として圧倒的なのは国産品であった (廣政, 2011)。国産なら安心と捉える背景があるとすると、認証がなくても国産品の表示によって、その生産過程や、サプライチェーンの管理状態は見えなくても信頼の証となりうる。トレーサビリティや生産過程についても表示されていることで安心した購入ができる。その安心を求めるために、信頼の証として消費者がブランド物を志向する動きが強まったとも言える (濱田 2009)。ここで、ブランド品を盲目的に信頼する背景として、適正に製品を評価するための価格プレミアムへの教育機会が少ないことが、消費者の意識の低さにつながっていると考ええる。高井 (2022) は、認証マークのコストやプレミアム価格が日本市場では企業が戦略として採用しにくく、競争力低下の要因となる点を指摘している。認証取得が基本の海外では、認証取得が遅れるほど企業のグローバル競争力も低下してしまうリスクがある。消費者にとっても、製品パッケージの認証マークを通じての教育機会も少なくなり、プレミアム価格などへの理解が得にくい状況に改善が見られにくくなる。認証マークの理解度やそれがもたらす重要性とは、生物多様性や有機栽培などのサステナブルな製法やサプライチェーンを含めた化粧品そのものへの基礎知識があっただけではじめてもたらされる。それらによって、企業活動としての認証マークの取得を含めての活動や企業が発するサステナブル・マーケティングメッセージの正しい理解を促進すると考える。

本研究では、サステナブルな製品におけるエコ認証マークの認知度や理解度、その重要性について現状を把握し、どの程度生物多様性の理解が消費者において浸透しているのかを調査する。そのため、サステナブル化粧品の事例を通じて、今後の有効な化粧品への認証マーク活用についての研究課題の検討を目的としている。

² 認定 NPO 法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン, 2019 パーム油白書, 2020 年 1 月発行より。2022 年度の最新情報は, RSPO ホームページより, <https://rspo.org/members/all>, 最終閲覧日 2022 年 9 月 26 日。

第2節 化粧品におけるサステナビリティ

2-1. 化粧品業界における製品ライフサイクル

日本の化粧品マーケティングの特徴として、先進主要国の中でも春夏秋冬があり、シーズンリティに合わせてマーケティングの展開がされている。季節毎に、異なる肌悩みに焦点を合わせて、春や秋であれば花粉症・敏感肌対策や、夏であればUVケアや皮脂コントロールでの化粧崩れ対策、冬なら乾燥による小皺対策を訴求する製品が毎年販売されている。化粧品の機能に合わせて、マーケティングマネジメントが実践されており、季節性を重視した広告宣伝がとられる。そのような製品は、3ヶ月毎の季節に合わせて販売サイクルが組まれるため、購買を促進のために季節のイメージ戦略を重視した広告宣伝が起用されることがある。このように、シーズンリティを重視するとライフサイクルが自然と短期化し、短いライフサイクルが故に、機会損失しないための過剰在庫や廃棄などの問題が起きている。

気候変動による課題や生物多様性の保全において、企業でも製品だけではなく、生産を通じて原料調達から廃棄までのライフサイクルそのものを捉えることが、環境問題の解決に資するツールとして認識されている。それが、ライフサイクルアセスメントである。本藤（2008）は、ライフサイクルアセスメントは事業者だけではなく、消費者の行動が鍵を握っていると述べている。消費者は、生活活動と環境のつながりを日々の購入から廃棄までの活動を通じて、製品を身近に感じるので直感的に理解しやすい。

2-2. 化粧品業界における製品差別化

日本の化粧品マーケティングの特徴として、2点目になるが、企業は製品の差別化のために、他の企業が採用していない希少な成分や有効性をその優位性として活用する。しかし、他社が使用していない希少な原料は、国外に探し求めることも多く、発展途上で生物多様性の保全に反することにも繋がりがかねない。オーガニック化粧品でも、製品の有効成分の希少性を謳う場合もある。また、需要喚起のため、季節性や製品の機能に焦点を当てたイメージ戦略の広告の結果、社会・環境のサステナビリティやSDGsについてを題材とした広告は後回しとなる。消費者にとっての広告の視点では、その成分がいかに肌悩みを解決をはかり、スキントラブルを起こさない安全さがニーズとしては優先であり、機能性価値を重視する。そのため、環境や社会価値の解決は、直接的な化粧品に求める価値としては機能性価値に次いで感情的価値となる。重要性においては、優先度が下がってしまうと言える。

一方で、環境活動を通して、企業ブランドによる差別的優位性の形成が期待されている（Porter & Kramer, 2006）。サステナビリティを追求する製品の上市に伴い、そのような切り口を広告に採用する企業もみられる。企業戦略におけるサステナビリティに関わる活動は、企業の本部スタッフ部門が企業次元での活動として行うのが一般的であるが、製品事業部においても製品ブランディングとしての活動を展開することがあるとされている（高嶋、 兎内 2021）。企業戦略として、

サステナビリティを訴求する企業と、その製品ブランドが、一緒なコンセプトに沿った統一されたメッセージを伝えることは差別化を推進するためには重要な役割を担っている。しかし、消費者が製品ブランドのコンセプトとは異なるメッセージを広告から受け取り、サステナビリティが連想できないことがある。一例として、大企業が海外のサステナブルブランドを買収し、既存のケミカルブランドの製品ラインナップに加えて経営することがある。一貫したブランドイメージの担保ができなくなる。

2-3. 企業のサステナブル化粧品のマーケティング

国内に流通する化粧品製品の86%は海外輸入品である。シャネルやディオールをはじめとした一流ブランドへの憧れがあり、オーガニック製品ではアベダやヴェレダの老舗ブランドが代表格である。どちらも、伝統企業で、その長い歴史で構築された技術力やその高い品質からブランドの持つ信頼がある。世界と比較すると、日本は100年以上続く伝統企業が突出して多く、そのような企業には絶対的な信頼を抱くことが明らかになっている。顧客の信頼を担保することは、売手側ブランドの最も基本的な働きのひとつである（長沢 2008）。中でも、企業の送り出すコミュニケーションとしての情報の透明性や情報開示などは、企業の信憑性を創造し、企業の信頼性の構築にとって重要である（Keller and Aaker 1992; 岡山 高橋 2013）。

サステナブル化粧品に分類される自然派オーガニック化粧品が、2008年から日本で台頭していった。当初は海外から輸入が一般的で、海外で調達されたハーブやアロマなどの原料やその香り、パッケージやブランドロゴなど海外文化への憧れから、メディアでも多くの特集が組まれた。これにより、表面的なサステナブル化粧品の理解が浸透してしまった。さらに、イメージ先行の広告によって、オーガニック化粧品は肌荒れしない、オーガニック原料が配合されているだけでオーガニック化粧品であるなどの誤解が業界・消費者の双方の間で問題となった。当時は、「敏感肌にも使える」、「低刺激」などのアピールも多かった³。

サステナブル化粧品の環境的価値・社会的価値などの本質的な部分よりも、オーガニック化粧品の言葉が独り歩きし、表面的な理解へと繋がった。市場の成熟と共に、化粧品原料の希少性だけでなく製品の機能性も求められるようになり、オーガニック化粧品は消費者が選べるカテゴリーのひとつになった。海外製の効果が高いオーガニック化粧品は、高価格帯であり、初心者には購入障壁となった。その一例として、海外企業がGDP世界第3位の化粧品市場である日本への進出を期待し、サステナブル化粧品を上市する。

2013年ごろから大手ドラッグチェーンやスーパーマーケットのPB製品としてオーガニック化粧品が登場し、比較的安価で購入できた。オーガニック化粧品の専門店や百貨店での展開なども増え、オーガニック化粧品市場は、年々伸び続けている。

³ 株式会社EcoVia Intal社内聞き取り情報より。

一般的に、認証マークは製品の外箱に表示されることが多い。これは、最も信頼を失う行動のため避けたいことであるが、認証継続が不可になった場合を想定している。製品本体の容器に印字するよりも、外箱に印字したほうがコスト面で効率が良いからだ。化粧品業界では、その製造方法が細分化しており、原料調達から加工・調合・バルク製造・容器充填／外箱および外包・小売店などの出荷の流れとなる。その製造工程の中では、化粧成分の処方変更では、処方製作から厚労省への認可まで、時間や予算を要する。そのため、サステナブル手法への変更を含め、外箱や外包飲みの変更で、時間や予算に対応できる。認証マークは、マーケティングやPRの目的で販促物などにも付与され、製品差別化に活用される。

2-4. 消費者とサステナブル化粧品

西尾(2009)は、消費者のエコな活動を妨げる要因について、有効性評価やコスト、知覚品質などを挙げている。いくら環境負荷が低い製品でも、品質や性能面で知覚品質が劣っていたり、プレミアム価格など入手のコストが高くついたり、その行動を維持するための動機づけがないと、消費者には選好されない。

「ケミカル」か「ノンケミカル」化粧品かの選択について聞き取り調査⁴の結果、従来より肌が弱い場合やケミカルな製品を使用して肌荒れの経験がある。肌荒れなどが落ち着いてから、ノンケミカルまたはオーガニック化粧品に変更した消費者が多かった。

2013年に起きたカネボウ化粧品の美白製品を使用して肝斑症状が出たなどの健康被害により、安心安全要求は高まり、オーガニック志向の消費者も少しずつ増加したと言える。主に女性で、女性の結婚・妊娠・出産・育児などのライフイベントには健康を意識する機会となるため、少しずつオーガニック化粧品に変える消費者も増えてきた。オーガニックからさらに、エシカルの価値観へと派生し、オーガニックとともに環境配慮などの視点が広まった。

オーガニックやエシカル志向の消費者の増加とともに、企業は製品ブランドを開発し、製造販売した。その結果、マーケティングの広告によって認知度を上げるために、意図せず悪用につながるケースも存在し、SDGsウォッシュやグリーンウォッシュが生じている。故意でなくても知識不足からくる誤解から、ウォッシュにつながることもある。一般的には、企業視点よりも消費者の視点から論じられることが多い(D'Souza et al 2006; de Boer 2003)。消費者の認識する企業のグリーンウォッシュが、環境を重視する消費者の企業に対する認識と購買行動に与える影響を調べる研究がなされて、グリーンウォッシュ情報を通じて、消費者は企業に対するネガティブな感情を形成することが、明らかになっている(De Jeong et al., 2017)。しかし、企業のためにも明確なグリーンウォッシュの測定尺度がなく、達成基準もないため、グリーンウォッシュの広告については規制がない現状である。

⁴ 株式会社EcoVia Intal社内聞き取り情報より。

2-5. 化粧品業界における企業と消費者の持続可能性の認識

国内化粧品業界のサステナビリティは、日本国内のサステナビリティやSDGsの認知度の低さとも関係して欧米に比べて遅れている。大手広告代理店電通が行ったSDGs消費者認知度調査⁵によれば、過去5年間の調査で最多の約86%の認知度があると報じられていたが、そのうち「内容まで含めてよく知っている」と答えたのはほんの34.2%ほどで、それ以外は「内容がわからないが名前は聞いたことがある」が51.8%となり、事実上の認知度は約34%に過ぎない。数少ない国内のサステナブル化粧品に関する実態調査⁶によれば、企業のサステナビリティやSDGsの達成度は1%にしかすぎない。企業のサステナビリティやSDGsは、それを求めている消費者に責任転換され、進展していない現実がある。

サステナブル先進国では、製品選択の際にサステナブルであるかを考慮することは主流になってきている。そのため、企業にはわかりやすい情報発信や店舗展開が求められている。米国の調査⁷では、米国消費者の約56%がサステナビリティ志向を持っている。さらに、46%は、エコフレンドリーな選択をするために、環境に対する影響がどう購買に関わっているかを理解している。また、カナダ消費者の66%と米国消費者63%は、それが社会により良いものをもたらすとわかっている。BCGのグローバル消費者への調査⁸で、80%以上の消費者が環境配慮を重視している。そのうち、サステナブル消費に関してプレミアム価格を支払うかと答えた人は1~7%で、サステナブル教育により今後は約40%へ上昇が見込まれるという。以上より、日本と欧米では、サステナブルの消費に関して、消費者理解の差があることがわかった。

生物多様性に関する認知度についても同様に低く、前述の国内の化粧品消費者を中心に行った株式会社EcoVia Intellによる、2022年度調では、生物多様性に関する認知度は13%、「化粧品などの産業が生物多様性に深くかかわっていることを知っている」の回答は22%であった。同調査では、サステナビリティの認知度は全体の22%で、初回2020年度比で1.7倍に増加している。「(環境配慮について)わかっているけどなかなか実行できない」の回答は約54%と年々減少傾向にはあるが、「普段から環境に配慮した生活を送っている」の回答も全体の17%にすぎない。以上より、企業のサステナビリティやSDGs担当者やマーケティング部門担当者もいち消費者であると仮定すると、特に生物多様性に関しては、企業がアピールすることも、消費者がそれを受け取ることも難しいため、広告への訴求力にはならないと判断されるのではないかと考える。

化粧品市場の変化として、Covid-19によって、テレワークの普及やマスク生活で新たな肌悩み

⁵ 日経ESG, 2022年6月8日出版, 日経BP社

⁶ 株式会社EcoVia Intellによる市場動向・消費者調査 2022年度

⁷ Nutraceuticals World, <https://search.yahoo.co.jp/search?p=Nutraceuticals+World&ei=UTF-8&fr=appsfch2>, 最終閲覧日 2022年9月25日

⁸ BCG ホームページより, <https://www.bcg.com/publications/2022/consumers-are-the-key-to-taking-sustainable-products-mainstream>, 最終閲覧日 2022年9月25日

やマスクに合うメイク手法が求められてはいる。しかし、外出やメイク機会の喪失によって、2020年度の国内化粧品市場規模（メーカー出荷金額ベース）は、前年度比84.4%の2兆2,350億円⁹となり、業界全体が大きく低迷している。コロナ初期は緊急事態宣言により、化粧品の主要チャネルである百貨店がクローズし、インバウンド需要が激減したのが要因である。市場全体の復興は、インバウンド需要なども戻れば、徐々に回復するとみられる。しかし、消費者の変化として、コロナ後の日本市場では低価格を重視する傾向が強くなり、手軽に購入できる低価格製品への需要が高まっている。日本では、ドラッグストアの2020年度売上高は8兆円を突破し、そのうち化粧品の売上高は1兆5603億円。百貨店が20%以上の減少だったのにもかかわらず、それでも前年比0.4%マイナスの微減¹⁰だった。それに加え、コロナ禍で消費者思考が安心安全や地球環境に良いものに少しずつ変化してきたことで、オーガニックやエシカル志向の消費者を中心に関心が高まることは自然な流れである。

第3節 化粧品における生物多様性と認証

3-1. 生物多様性と化粧品業界の関連性

本項では、化粧品業界における産業と生物多様性についての関連性を解き、具体的にどういったことが生物多様性への配慮が必要なのかを説明する。

生物多様性は、UNEP（国連環境計画）¹¹によれば、地球上の生命がバラエティーに富むこと、またそれを形成する自然パターンを意味する。地球上の生物多様性は、まだ発見されていない種が多い一方で危機に瀕している。UNEP-WCMC（国連環境計画世界自然保全モニタリングセンター）は、環境問題を語るうえで重要な気候変動の対策においても、生物多様性は深くかかわっていると指摘している¹²。地球温暖化により様々な気候変動が起き、動植物を含む野生生物の生育地が奪われている。また、人間の無作為な過剰開発や産業によって、種が減少していき、生物多様性が失われている。

株式会社 EcoVia InteI の前述の 2022 年市場調査によると、産業と生物多様性の関わりについて、「関係がある」と回答した人は全体の 20 %程度であった。「サステナビリティについてよく知っている（22 %）」と回答した人は、生物多様性についてより知識との関連性が高い傾向にあり、「良く知っている」は 16.2 %、「知っている」は 14.5 %で合わせ 30.7 %であった。また、サス

⁹ 矢野経済研究所、プレスリリース「化粧品市場に関する調査を実施（2021年）」、2021年10月27日、最終閲覧日2022年9月28日

¹⁰ 国際粧業 Online、「有力ドラッグストア6社の化粧品戦略－百貨店に代わる高級ブランド取り扱いに名乗り」、2021年5月6日、最終閲覧日2022年9月28日

¹¹ UNEP, UNEP and Biodiversity, <https://www.unep.org/unep-and-biodiversity>, 最終閲覧日2022年9月28日

¹² UNEP-WCMC ホームページより, <https://www.unep-wcmc.org/en/news/biodiversity-falls-below-safe-levels-globally>, 最終閲覧日2022年9月28日

テナビリティを「知らない」回答者の生物多様性の認知は低く、合わせて10%程度である。

3-2. 生物多様性と化粧品業界のサプライチェーン

3-2-1. 生物多様性と化粧品の原料調達

化粧品産業と生物多様性の関わりについて、サプライチェーンの原料調達・加工製造・使用や廃棄の工程まで、環境のみならず、生物多様性に配慮する必要がある。原料調達の部分では、化粧品の原料に様々な動植物から採取した抽出物すなわちエキスなどが使われている。それらの抽出物には独自の効果効能があり、肌に対して良い影響をもつものが好まれる。業界では、常日頃珍しい原料の発掘が求められてきた。その点が、化粧品業界での生物多様性の問題になっている。先進国の生産ニーズに応えるため、アロエフェロクス（アロエベラ類）などのワシントン条約（以降、CITES）¹³に記載されている絶滅危惧種由来の野生生物の不正な原料素材の取引や製品化の現状がある。

2000年頃より、パーム油の過剰な産業が生物多様性を脅かすという機運が盛り上がり、化粧品業界でもその問題の重要性を認識している。2021年のCOP26で、気候変動対策などで注視してみるべき品目として改めて議論され、注目を浴びた。パーム油は、日本では植物油や植物油脂として表記される。アブラヤシの実から抽出される幅広く使用される食用オイルで、マーガリンやショートニング、化粧品や洗剤などの主な原料になっている。食用オイルとしては植物性由来の中では最多の採用で、化粧品ではクリームの原料になることが多い。インドネシアやマレーシアで栽培されるアブラヤシは、ほとんどが先進国に原料として輸出され、先進国の過剰なニーズに応えるため、無作為な採集や伐採などで深刻な干ばつや森林減少が起き、生物多様性が脅かされている。これらを解決するために、2013年に発足した民間認証RSPOや政府認証のISPOとMSPOがその持続可能な産業を促進している。これらの認証が付与されている化粧品などの加工製品のパッケージに認証マークが付けられている。認証は、サプライチェーンだけでなくトレーサビリティの観点からも活用することができる。認証によって、消費者は自分のエコ行動に見合う企業の製品を選ぶことが可能になった。パーム油が原料に配合されている化粧品の選択の際には、認証製品やパーム油の使用禁止を採用する企業を選択することができる。しかし、化粧品業界全体では、身近な原料であるにもかかわらず関心が低い。2019年に日本で設立された持続可能なパーム油の調達と消費を目的にしたJaSPONの会員企業は大企業の6社¹⁴にとどまる。

¹³ 環境省ホームページより、ワシントン条約は、正式名称「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約（Convention on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora）」の略でCITESと表現される。1973年（昭和48年）に米国のワシントンD.C.で採択されたため、通称ワシントン条約と呼ばれる。
<https://www.env.go.jp/nature/kisho/kisei/cites/>、最終閲覧日2022年9月29日

¹⁴ JaSPONホームページより、<https://jaspon.jp/about/our-members/>、最終閲覧日2022年9月29日

CITES では、指定された絶滅危惧種由来の原料は、商業利用や貿易等も禁止されている。条約に関係する化粧品原料のアロエフェロクスは、CITES の中で9属に分類され、アロエ属全種が対象である。本来、禁止されている輸入であるが、アロエとして輸入するのではなく、エキスとして密輸がされ市場に流通している。アロエベラエキスは、保湿剤の用途で幅広く使用される化粧品原料である。アロエフェロクスの主な生息地の南アフリカのケープで、なおかつ原料の95%は南アフリカから収穫されている。南アフリカゾウなどの大型草食動物の減少により、アロエフェロクスの密集地域が東地域に発生し、一方で西の地域では人間による都市開発により生息地が減少した。人間による過剰な採集は、労働者の貧困と雇用の確保の利点もあるが、自然環境には干ばつによって草食動物の減少から、それを食する肉食動物の減少につながるという悪循環をもたらす。主に、アロエフェロクス葉エキスはフィトケミカルが豊富に含まれているため健康に良いとされ、飲料や化粧品の基材として世界中で使用される。代替品としては、パーム油を採用する企業もあるが、需要の高まりから悪循環になる。

絶滅危惧種の野生生物原料を使用している事例が報告されている。そのレポート¹⁵によると、87のペットフードや24の化粧品製品をDNA分析した結果、ペットフードのDNA増幅に成功した63%中、70%が絶滅危惧IB類に指定されるアオザメであることを特定した。化粧品では12.5%の3製品でDNA増幅に成功し、ヨシキリザメ、アカシュモクザメ、カマストガリザメ由来と特定した。レポート内で、表示規制がさらに必要だと主張している。表示によって、消費者が絶滅危惧種のサメ由来原料を認識することで、サメの個体数の保全に寄与できるとしている。サメのヒレから採取した原料は、一般的にフラーレンと呼ばれ、化粧品ではコラーゲン同様の働きをすることで知られ、ビタミンCの172倍も抗酸化力が高いことから広く重宝される。紫外線起因によるシミもしくはその基盤となる細胞形成、紫外線による肌のくすみなどの解決のため、スキンケア製品のみならず、サプリメントや美容ドリンクなどへ幅広く製品化されている。レッドリスト¹⁶に掲載された絶滅危惧種が化粧品に使用されていることがわかっている。

3-2-2. 生物多様性と化粧品の廃棄

環境保全や生物多様性の保護に関して、主要な薬機法や景品表示法では含まれていない。化粧品製造企業も、製造責任に直接関わらない法的な知識や環境社会問題への関心の低さがあると推察される。その解決には、製造企業が、サプライチェーン全体の持続可能性を重視

¹⁵ NPO団体JWCSのブログ「絶滅危惧種のサメの遺伝子がペットフードと化粧品から発見される」2019年9月4日、Diego Cardenosa.Conservation Genetics掲載論文に要約部分抜粋。

¹⁶ NPO団体JWCSのホームページ、https://www.jwcs.org/data/CITES_CoP18_proposals.pdf, CITES CoP18 附属書改正提案(2019年2月19日時)抜粋・仮訳「55ケープアロエ」p. 12

し、原料調達において生物多様性の保全のための知識を持つことが重要である。日本では、工場での加工製造過程での排水は、環境の保全等に関する法律や条例等により基準が定められており、重金属、有害物質、酸、アルカリ、油類などを基準以上に含む汚水を下水道及び河川・海へ排除することを禁止している。

海洋汚染も、気候変動・生物多様性と同じくキーワードになっている。製品の廃棄の中で、海洋プラスチック問題については、国連が2024年までに具体的な取り組み目標の提言を予定している。この海洋プラスチック問題と生物多様性との関連性としては、マイクロプラスチックの問題がある。化粧品、の容器や包装がその問題の一端を担う。遮光性など特別な機能を持たせる場合や製品の特性によってはリサイクル可能なガラス瓶もあるが、消費者のニーズを受けて、軽量化や携帯性のためにプラスチックに置き変わってきた。化粧品製造企業にとっても、プラスチックにより、輸送や保管コストの問題を解決してきた。プラスチック問題に対して、包装を簡略化することやショッピングバッグを有料にする、プラスチックフリーに取り組む、また従来のプラスチックボトルからバイオマスプラスチックなど生分解性の高い容器に変えることなどが日本の化粧品業界でも見られている。環境省が、プラスチック資源循環法¹⁷を制定した指定の業界として化粧品業界は対象外であるが、バイオマスプラスチックが推奨されている方向性とは合致している。株式会社EcoVia InteIの前述の2022年市場調査でも、サステナブル施策として、容器の素材変更や形状のデザインによるプラスチック使用料削減などのパッケージソリューションが3年連続で1位になっている。

サステナブルマーケティングでは、企業行動として初期に取られやすいコスト削減がある。企業にとって、企業利益を損なわず、環境問題とのトレードオフも解決できるため取り組みやすい方法である。その一つが化粧品における、パッケージや包装の変更である。国内ではリサイクル可能なサトウキビなどの植物由来プラスチックの採用が代表的になっている。しかし、国内では回収システムや堆肥化施設も未整備で、廃棄方法が消費者にとって明確ではない。加えて、100%バイオマスプラスチックでなければ、通常のプラスチックと同様の廃棄方法を取らずをえない。プラスチック資源循環法にバイオマスプラスチックの推奨¹⁸されていることにより、バイオマスプラスチックの使用が進んだことに違いない。しかし、製品の価格高騰を抑えるために含有量が低いと、結果的にプラスチック量削減にはなりにくい。プラスチック生産量は日本は世界で2位¹⁹となっており、リサイクル率は96%と高いが、そのうちの4%がリサイクルできずに流出するか可燃ごみとして燃やされている²⁰。4%は2000

¹⁷ 環境省ホームページより、<https://www.env.go.jp/recycle/plastic/circulation.html>，最終閲覧日2022年9月29日

¹⁸ 環境省資料より、https://dluegilccb95qe.cloudfront.net/sdgs2021/202209_mizutani_tsutomu.pdf，プラスチック資源循環に関する国の取り組み，2022年9月発行

¹⁹ UNEP，<https://www.unep.org/unep-and-biodiversity>，最終閲覧日2022年9月28日

²⁰ 一般社団法人 全国清涼飲料連合会，日経 ESG フォーラム，講演「清涼飲料業界の未来へ向けて サークュラー

万本以上に相当するため、マイクロプラスチックの原因となる。

海外では禁止されているが、日本では未だ日用品や化粧品原料中にマイクロプラスチックが採用されている。UV ケア製品やスクラブ製品に配合されている高分子ポリマーやマイクロビーズである。UV ケアアイテムは、高分子ポリマーによる肌の乾燥を引き起こす。環境保全というよりは、消費者ニーズに対して、企業もそれらの採用をしない技術にて解決ははかられつつある。このような高分子ポリマーに由来する原料が配合されているものは、マイクロプラスチックになりえるため規制が急がれる。

UV ケア製品によって引き起こされる生物多様性の喪失の問題がある。成分の紫外線吸収剤の一部がサンゴ礁に悪影響を及ぼすとされ、ハワイの一部のビーチでは使用が禁じられている。日焼け止めによって、サンゴ礁の白化現象を引き起こし、小魚などの隠れ場所が減少することで、食物連鎖が乱れてしまうため、結果的に海洋汚染のみならず、生物多様性が喪失する。プラスチック原料や一部の紫外線吸収剤などが配合されている製品に関しては、海や河川などに流出を阻止するための焼却しか選択肢がない。その焼却については、気候変動対策のため温室効果ガスの排出にもつながり温室効果ガス排出削減のトレードオフとなる（大橋 2014）。化粧品製造企業として、原料の見直しと過剰在庫を持たないような生産体制で廃棄を少なくする責任が望まれる。

3-3. 化粧品と認証制度

化粧品に関連する認証制度の流れは、1900年代にドイツのデメターがオーガニック認証の始まりである。1920年以降から、デメターの普及によって欧州を中心に海外へ広がった（MA Shi-ming 2006）。日本では、1999年に有機農産物のJASが制定（農水省 2000年）、その後2008年に有機JASが制定された。しかし、農作物にしか付与できない認証制度のため、2011年に有機JASを前身として、日本オーガニック＆ナチュラルフーズ協会（Japan Organic & Natural Foods Association; JONA）が誕生し、農作物以外の加工食品や化粧品認証が唯一の機関として可能になった。環境の専門家が生物多様性の保全のために、認証の重要性について言及している。しかし、他国への輸出を目的にした互換性の限定性があり、具体的に産業にどのように落とし込んでいくのか、ほとんど説明されていない現状がある。

ネット検索にて生物多様性に関する認証を調べた²¹結果は、108の認証制度があるとされた。化粧品原料と関係するものを表1にまとめた。認証には、生物多様性に関連するものとしてオーガニックな農業認証がある。産業と生物多様性の関わりで、消費者の生活に関わりが深いテーマは

& エコロジカルエコノミーの確立 ～ベットボトルの水平リサイクル推進～, 2022年

²¹ EcoLabel INDEX ホームページより, <https://www.ecolabelindex.com/>, 最終閲覧日 2022年9月28日

表1. 化粧品に関係する代表的なエコ認証マーク一覧

	エコ認証 マーク	認証分類	名称（英名）	発行地域/国・概要	生物多様性 への配慮
1		有機農業	有機JAS (Japanese Agricultural Organic Standards)	日本 / 農林水産省に認可された第三者機関による認証を受け、統一的な基準にもとづいて生産された有機食品であり、有機JAS マークが貼付されているもののみが「有機」「オーガニック」認証される	あり
2		有機農業	ACO (Australian Certified Organic)	オーストラリア / オーガニックに関する世界最高水準の規格に準拠し、ACO 認定を受けた有機製品は人工肥料、農薬、成長調節剤、遺伝子組み換えが含まれていないことを意味する。	あり
3		有機農業	USDA (United States Department of Agriculture)	アメリカ / USDA 認証マークはこの NOP の定める食品基準に基づいており、『100% オーガニック』: 原料の 100% が有機食材・『オーガニック』: 原料の 95% が有機食材・『有機食材を使って製造』: 原料の 70% が有機食材と表記が分けられている。	あり
4		有機農業	ICEA (Istituto per la Certificazione Etica ed Ambientale)	イタリア / ICEA が定める基準として、動物実験の禁止、石油由来系活性剤、遺伝子組み換え (GMO) の原料やコラーゲンや牛脂などの動物由来成分や合成染料、シリコンなどの合成誘導体すべての使用の禁止。その他にも厳しい基準が設けられている。	あり
5		有機農業	Demeter (Demeter Biodynamic®)	アメリカ / バイオダイナミック農法が使用されていることを示す。特定の作物だけでなく農場全体の認証が必要。	あり
6		有機農業・生物多様性	EU オーガニック認証 (EU organic product label)	EU/EU の政策執行機関「欧州委員会 (European Commission)」が制定するオーガニックの規則に則って生産・加工されたものであることを証明する。	あり
7		有機農業	Soil Association (Soil Association Organic Standard)	イギリス / イギリスのオーガニック認証で中心的役割を担い、食品・飲料、化粧品、衣料品といった製品に対する認証や、飲食業や林業、農業の事業者に対するオーガニック認証。	あり
8		生物多様性	PSPO (パーム油の持続可能な利用のための円卓会議)	マレーシア / インドネシア パーム油が使われる製品において、サステナブルでかつトレイサビリティに配慮されているかを証明する。トレイサビリティは、主にサプライチェーンに配慮されている。	あり
9		森林保護	AFS (Australian Forest Certification Scheme)	オーストラリア / 木材および木材製品のユーザーと消費者が、木材または木材製品の原産地が、持続可能に管理された森林から独立して第三者認証を受けた供給源に由来することを保証。	あり
10		森林保護・生物多様性	FSC 森林認証度 (Forest Stewardship Council)	本部ドイツ / 森林の生物多様性を守り、地域社会や先住民族、労働者の権利を守りながら適切に生産された製品の認証。 以下の2種類に分類される。 1. 「FM (Forest Management, 森林管理) 認証」: 責任ある森林管理がなされているかを審査・認証 2. 「CoC (Chain of Custody, 加工・流通過程) 認証」: FM 認証森林から得られた認証材が加工から消費者までの流通を認証	あり
11		環境保護・農園管理	レインフォレスト・アライアンス認証 RA (Rainforest Alliance Certified)・SAN (Sustainable Agricultural Network)	アメリカ / 製品が、環境を保護し、労働者、その家族、地域社会の権利と福利を促進する包括的な基準を満たす農場または森林経営からのものであることを保証。レインフォレスト・アライアンスは、世界地域の環境保護団体が個別に展開していた認証制度の統一を図るため、サステイブル・アグリカルチャー・ネットワーク (SAN) 組織を設立し、「レインフォレスト・アライアンス認証」を管理	あり
12		森林保護	持続可能な森林イニシアチブSFI (Sustainable Forestry Initiative)	アメリカ / SFI の CoC ラベルにより、認証された森林からの繊維、認証された調達先、消費者が使用した後のリサイクル素材を使用できる。	あり
9	[出典] 以下、認証マークの引用と情報出典リンク 1. 農林水産省ホームページ 2. ACO ホームページ 3. USDA ホームページ 4. ICEA ホームページ 5. The Biodynamic Federation Demeter ホームページ 6. EU ホームページ 7. Soil Association ホームページ 8. RSPO ホームページ 9. ResponsibleWood ホームページ 10. FSC ホームページ 11. レインフォレストアライアンスホームページ・SAN ホームページ 12. Sustainable Forestry Initiative ホームページ				

食に直結する農業がある。食の偽装などの不祥事で、不正表示問題が噴出し²²、消費者の不信感が高まっている。トレーサビリティや生産過程についても表示されていることで安心した購入ができる。その安心を求めるために、信頼の証として認証がその一つだ。オーガニックな農業に注目が集まり始めた。その農法では、過剰な農薬や化学肥料の使用は土壤破壊につながるため禁止されている。土壤は水質とも関係性がある。大量生産のために効率性を求めた結果、広大な農地で単一栽培することで、固定の昆虫などの生物しか生息できず、気候変動危機や生物多様性の喪失につながる。生物多様性に富む農業を行うには、オーガニック農法は有効である。

日本では化粧品としてオーガニックを訴求するには、定義がなされておらず、オーガニック化粧品の認証は必須ではない。例えば、非有機米から採油したエキ스로化粧水を製造しても、オーガニックを製品名称に付けたり、広告に謳ったりすることが可能になってしまうのが現状である。政府において、オーガニック化粧品の責任管轄は農水省でも、厚労省でも存在しない。海外の一例として、アメリカのUSDA内部にUSDAオーガニックを管轄する部署があり、オーガニック手法で作られた製品と加工品や農作物は責任管轄されている。日本では、民間の提言により、ようやく農水省が2022年7月1日に「みどりの食料システム法」²³を制定し、持続可能な有機農業推進が始まったばかりである。

表1に示したオーガニック認証の監視項目に必ず壤保全も目的となっている。地球環境保全のため、土壤の栄養価が改めて見直されている。FAOのグローバルシンポジウム Soil for manegement²⁴でも、土壤の栄養素もダイバーシティーに富み、そのバランスによって健康的な土壤が育つといわれた。Insight Organic Summit²⁵でも、健康な土壤と生物多様性について2点言及されていた。1点目は、健康な土壤は、安定した食料安全保障、浄化された水質、生物多様性、抗生物質と製品の発見、および気候変動緩和のための土壤中の炭素の増加を生み出すことにより、食料システムの回復力を促進すること。2点目に、有機農業が生物多様性を促進し、土壤の健康を改善し、天然資源を保護することである。以上より、土壤保全を目的とした認証は、生物多様性に配慮していると考えられる。化粧品の有効成分として、アンチエイジング化粧品では、抗酸化力の高いフィトケミカルが希少原料として使用される。アサイーをはじめとするフルーツエキ스가代表的であるが、それらはアマゾンなどの熱帯雨林で栽培されている。レインフォレストアライアンスなどの森林認証によって、土壤と生物多様性が担保され、間接的に化粧品原料とし

²² 読売新聞オンライン、「アサリ偽装 数週間蓄養で「熊本産」…中韓から輸入 書類書き換え出荷」<https://www.yomiuri.co.jp/pluralphoto/20220204-OYTNI50004/>, 2022年2月4日記事。最終閲覧日2022年8月22日

²³ 農水省ホームページより, https://www.maff.go.jp/j/press/kanbo/b_kankyo/220915.html, 最終閲覧日 2022年9月29日

²⁴ Food and Agriculture Organization of the United Nations, <https://www.fao.org/home/en/>, 2022年7月26日から29日開催

²⁵ Inside Organic Summit spotlights the need for more organic certification awareness, 最終閲覧日2022年9月22日

て恩恵を受けられる。化粧品パッケージに関係する認証としては、レインフォレスト・アライアンス認証やFSC認証がある。国内では、化粧品の紙資源の外箱にFSC認証マークがみられるようになった。

認証取得の利点に対して、いくつかの欠点や問題点もある。最たるものとしては、認証取得のコストである。コストは3つに分類される。認証申請コスト、認証管理経費コスト、認証維持コストである。大企業にとっては、負担が少なくても、中小企業・小規模事業者の取得が困難な原因となる（高井 2021）。その他、認証制度以前からサステナビリティに取り組んでいる企業や経営者にとっては、すでに実現できている持続可能性に対して認証を申請する意義やコスト、時間を費やす利点がないため取得へのモチベーションとならないことがある²⁶。

Union for Ethical BioTradeの調査研究²⁷によると、消費者は美容ブランドがビジネスを行う上でよりエシカルであることを求めている。また、83%が、企業には原料調達、透明性、フェアトレードなどの社会的影響にも配慮しながら、生物多様性にポジティブな影響を保証する道徳的義務があるとも考えている。前述のInsight Organic Summitでも、企業がオーガニック市場についての認知度を高める最善の方法を議論する中で、オーガニック認証の認知度を高めることが貢献すると強調している。熱心なオーガニック化粧品使用者には、オーガニック認証で選択する消費者もいる。マスマーケットのほとんどの消費者は、食品に付与される認証においても認知度が低い。また当然ながら、相対的にサステナビリティや生物多様性という言葉をよく知っている人ほど、認証についての知識がある。認証の普及には、企業努力のみならず、消費者の知識向上にも努めなければならない。

第4節 海外と日本のサステナブル化粧品の事例

4-1. Ignaeの製品事例

ポルトガル・アゾレス諸島を原産とするサステナブル化粧品ブランドIgnae²⁸は、アゾレス諸島で自生している植物や花を原料にしている。ツバキの花エキス、スギ、緑の木など、再生可能な天然成分と、肌の表面をより深く浸透するように、植物や藻類由来のリポソームを組み合わせる製品を製造している。また、ブランドが地域の生物多様性や自然の生態系に影響を与えることなく、製品本体やパッケージの製造基準を定めている。例えば、ツバキエキスは、外観維持のために切り取られているツバキの花びらや葉を使用している。生物多様性への貢献の観点から、欧州では2010年後半からのバイオテクノロジーによって、自然界の希少な成分の幹細胞などを培養

²⁶ 株式会社EcoVia Intal社内聞き取り情報より。

²⁷ The Union for Ethical BioTrade ホームページ, <https://uebt.org/>, 最終閲覧日 2022年9月22日

²⁸ Vogue.com, A Guide to 2022's Best New Sustainable, Circular, Refillable Products, <https://www.vogue.com/article/best-new-sustainable-beauty-products>, 最終閲覧日 2022年9月22日

が可能になった。その技術によって、半永久的に成分を生産できるため、過剰採集が予防できる。消費期限の表示義務がない化粧品では、コスト削減のために一度の製造量が多いため、原料確保が可能になる。

次に広告については、生物多様性の理解を深めるための教育的な役割と考え、製品やその機能価値よりも、持続可能な方法で採取された原料注目したり、自然環境豊かなブランド発祥地について、丁寧に発信をしている。これは、より種が多様であることをストー

リーとして魅せるためである。ブランドのストーリー展開において、写真1のようなビジュアルイメージが重要になる。インスタグラムでは、製品本体の写真に加えて、自然派コンセプトのストーリーに沿ったイメージ写真を活用し、消費者への生物多様性を訴求している。生物多様性の理解が、製品の原料への知識となり、透明性が担保される。

包装については、生物多様性に配慮したパッケージが採用されている。ヨーロッパの「パッケージおよびパッケージ廃棄の指令（Packaging and Packaging Waste Directive -94/62EC）」を順守している「Green Dot」²⁹に従い、パッケージリサイクルを推進している。すべてのパッケージ含む紙製品には、FSC認証を取得している。

4-2. ゲランの企業事例

国内で生物多様性について広告で言及している化粧品会社は希少³⁰である中、ゲランの蜂と生物多様性の関係性に注目した製品ブランドを取り上げる。日本で、5月22日が生物多様性の日として定められて、2022年の同日に、はじめて1件の外資系企業の限定商品購入による寄付の呼びかけについてのリリースが発表された。ハチミツを基調としたスキンケアオイルを展開するゲランが、5月20日の世界ミツバチの日にちなんで、ハチミツとロイヤルゼリーを原料とする既存の製品の限定包装であった³¹。ゲランは、Ethical BioTrade (UEBT) のメンバーとして、人類と生物多様性を尊重しながら原料調達に取り組んでいる (Nagasawa & Kizu 2012)。ゲランのホーム

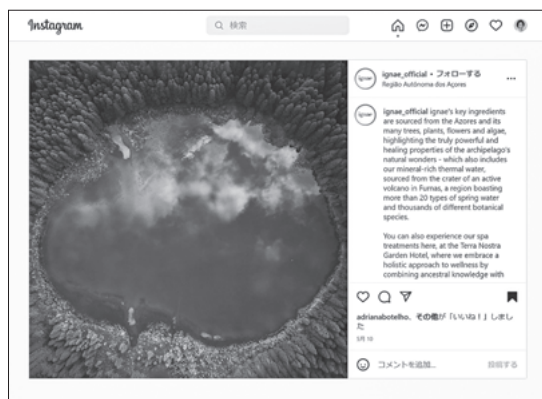


写真1. IgnaeのInstagram記事

²⁹ Sociedade pontoverde, SYMBOLS AND ICONS, https://www.pontoverde.pt/en/simbolos_e_icones.php, Positive Luxury, <https://www.positiveluxury.com/our-members/ignae/>, 最終閲覧日 2022年9月22日

³⁰ 前述の株式会社EcoVia Intelの実態調査

³¹ ゲラン株式会社プレスリリースより、ゲラン、5月20日「世界ミツバチの日」に世界的寄付活動を実施, <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000170.000018096.html>, 最終閲覧日 2022年9月20日

ページ³²より、2026年までに、40のセクターをUEBT基準で認定することを目指している。またCSR活動としてミツバチの保護をメインで行い、フランス養蜂観測所（OFA）の協力のもと、ユネスコと取り組む「Women for Bees（ウーマン・フォー・ビー）」を開始。女性養蜂家を育成し、世界のユネスコ生物圏保護区内に新たな養蜂開発活動を生み出し、ミツバチの受粉効果を測定している。ハチミツの原料採集には持続可能な方法で行いながら、ミツバチ保護にとりくんでいる企業のブランド方針が確認できる。

4-3. 2つの海外事例から認証の先進性について

Ingae およびゲランの2つの事例は、持続可能な開発と生物多様性に配慮した先進事例といえる。しかし、認証の採用による、生物多様性への貢献はどちらのブランドも積極的に訴求されていなかった。その背景には、海外ではサステナブル教育が土壌にあり、認証認知が高いため訴求する必要性がないのではないかと考える。訴求はする必要があるものの、信頼の基盤としてシグナリングは最低限の条件として、パッケージの認証マークが効果を発揮している。

一方で、日本の消費者にとって環境保全やサステナビリティなどはトレンドになっているが、生物多様性に関連している認証の認知度が相対的にとても低いことがインタビュー³³から明らかとなっている。正しい説明があれば、環境配慮認証の製品を選ぶ可能性はあるが、機能価値が同程度の製品では低価格志向で安い製品を選ぶだろう。なぜなら、一般消費者に「紙パッケージ（外箱）はどう廃棄するか」を聞いたところ³⁴、全員が「可燃ごみに捨てている」と回答している。資源として循環可能な紙を可燃ごみに捨てる行為自体、エコ行動と言えず、さらに知識を必要とするFSC認証マークの付与パッケージに対しても同じような行動で循環されないことになる。日本の学校教育では、紙を含む一般的な環境リサイクルマークは学習しているがその効果は得られていないと考える。さらには、エコ認証マークに関しては教育の場が無かった。サステナビリティ・SDGsなどとともに、こういった認証から環境問題や社会問題の解決につながるというのが理想だ。現在は、環境やSDGsなどがグローバルトレンドとなったことで、学校教育でも少しずつ実施されるようになってきたが、それでもまだまだ足りず、また環境教育を受けていない人口比率でも中高年世代へのアプローチが重要になる。

第5節 おわりに

本研究の目的は、サステナブルな製品におけるエコ認証マークの認知度や理解度、その重要性

³² GUERLAIN ホームページ, <https://www.guerlain.com/jp/ja-jp/c/our-commitment-jp.html>, 最終閲覧日 2022 年 9 月 22 日

³³ 株式会社 EcoVia Intal 社内聞き取り情報より。

³⁴ 長井美有紀, 「身近なものから SDGs を学ぼう」, 一般社団法人 日本サステナブル化粧品振興機構, 東京, 2022 年 7 月 10 日

について現状を把握することで、どの程度生物多様性の理解が消費者において浸透しているのかを調査することである。事例を通じて、今後の有効な化粧品への認証マーク活用についての研究課題を検討した結果、2点の課題に注目する。

5-1. 化粧品製造業と認証

最初に、サステナブルな製品におけるエコ認証マークの認知度や理解度については、さまざまな調査からも海外と比較して低いことがわかった。その原因として、オーガニック認証の歴史的にも圧倒的に浅く、国際会議の開催などへの参加は陸続きの欧米などと比較すると地理的に不利である。そのため、グローバルで興味関心の高いサステナビリティについて、情報収集の機会損失や企業の関心の低さを起因とした、情報の絶対的な発信量の少なさがあるであろう。また、情報はネットで簡易に得ることができるが、実践でベストプラクティスのロールモデルが身近に存在しないことで、行動の修正や実行まで遅延することもある。これらが、消費者へ正しいサステナビリティの知識を得るための教育機会に影響を及ぼしていると考ええる。今後、持続可能な環境や社会に向かうためには、サステナブル先進国として成熟するまである程度の年月を費やして、企業がサステナブルな化粧品を通じて情報教育機会を増やすことが有効であると考ええる。

サステナブルな化粧品では、外箱の紙包装にエコ認証採用をする企業も増えていることもわかった。消費者も化粧品のサステナブルなエコ認証マークを目にする機会が増えるほど、消費者行動の観点から消費者への刺激から記憶へとつながり、ブランドの認知へとつながる。圧倒的に消費者が生物多様性にまつわる認証マークの商品購買を通じて刺激を受ける回数が増えれば、認証の認知度は上昇するといえる。しかし、日本ではイメージ広告やシーズナリティにまつわる広告が圧倒的に多く、生物多様性の認知につながる広告は少ない。消費者と生物多様性の関わりを、身近な製品である化粧品を通じて教育機会の余白が多いのも事実である。

エコ認証マークの採用の課題として、企業にとって認証コストの問題解決が前提であることもわかっている。認証発祥の海外では、認証プレミアムの方法で企業にかかるコスト負担を一部消費者に分担する行動も受け入れられている。環境教育が消費者にすでに浸透しているからだ。また、そういった企業投資についても、消費者が評価をする。これにより、企業やブランドの付加価値が上がっていく。これらは化粧品業界に限ったことではないが、サステナビリティや生物多様性をマーケティングやPRに取り入れている。日本ではコロナ禍で、ドラッグストアでの化粧品購入が日常的になり低価格志向が市場を占めており容易ではない。高井（2022）は、認証取得は先行投資的な意味が大きい活動であると述べている。化粧品業界ではないが、他業界の中小企業では、認証コストを購買価格に上乗せをせず、サステナブルな企業であるイメージ向上活動のためのコミュニケーションツールとして活用する動きもある（井上, 2022）。企業が、認証をコミュニケーションツールとして教育コスト投資することで、自社内の従業員且つ、生活者でありいち消費者である教育につながる。環境保護や社会課題解決の知識や根本的な行動の改善への効果も

期待できる。

5-2. 化粧品と生物多様性の関係

生物多様性に関する言及は、いくつもの認証で確認できた。製品や企業ブランドのサステナブル課題にふさわしい認証を選択し、持続可能な製造や環境保全、生物多様性の観点で企業が行っている取り組みを盛り上げ、産業へ還元させていく。日本人は、消費者のニーズとして化粧品に求める優先度として、機能価値が高く、環境価値が二の次になっている。これが、「還元」への理解を乏しくしていると考える。理解を深めるには、サステナブル化粧品が大前提である。加えて、その広告にはブランドストーリーと認証で確実に消費者へ、サステナブルメッセージを伝えることが大切なことがわかった。生物多様性に悪影響を与えるシーズンリティ化粧品の弊害が、消費によって引き起こされる。日本の化粧品市場では、生物多様性に与える希少性を訴求するための新商品マーケティングが存在していることもわかった。経済合理性を追い求めるための製品ライフサイクルの存在自体を見直し、エコ認証プレミアム価格の価値を受容できる教育的企業活動は海外では盛んである。日本でも、経済合理性だけではなく、中長期的なサステナブル戦略や環境保護方針を経営の中心に置き、企業ブランドやサステナブル化粧品の製品展開がその課題といえるであろう。

謝辞

株式会社EcoVia Intalの方には、本調査にご協力いただき深く感謝を申し上げます。

参考文献

1. Blend, J. R and E. O. van Ravenswaay., 1999, Consumer Demand for Eco-labeled Apples: Results from Econometric Estimation." American Journal of Agriculture Economics 81, 1072-1077.
2. De Jong, M. D., Harkink, K. M., & Barth, S. 2017, Making green stuff? Effects of corporate greenwashing on consumers. Journal of business and technical communication, 32(1), 77-112.
3. D'souza, C., Taghian, M., Lamb, P., 2006. An empirical study on the influence of environmental labels on consumers. Corporate Communications: An International Journal 11, 162e173.
4. Keller, K.L. and Aaker, D.A., 1992, "The effects of sequential introductions on brand extensions", Journal of Marketing Research, Vol. 29, 35-50.
5. Larceneux, F., 2001, "Proposition d'une échelle de mesure de la crédibilité d'un signe de qualité. oui," DMSP pp.1 -16 (https://www.researchgate.net/publication/44164729_Proposition_d'une_echelle_de_mesure_de_la_credibilite_d'un_signe_de_qualite)
6. Montiel, I., Husted, B. W., & Christmann, P., 2012, Using private management standard certification to reduce information asymmetries in corrupt environments. Strategic Management Journal, 33(9), 1103-1113.
7. Shinya Nagasawa and Yumiko Kizu, 2012, Green Action as a Luxury Strategy in the Field of Cosmetics, 6
8. Porter, M. E., & Kramer, M. R., 2006, The link between competitive advantage and corporate social

- responsibility. Harvard business review, 84(12), 78-92.
9. Somi Yu and Jieun Lee, 2019, Influence of perceived value on purchasing decisions of green products in Brazil, Sustainability, 11, 1034
 10. Sweeney, J.C.; Soutar, G.N. , 2001, Consumer perceived value: The development of a multiple item scale. J. Retail., 77, 203-220.
 11. 井上 綾野, 2022, パッケージにおける倫理的表記の信頼性と知覚品質—フェアトレードラベルと環境ラベルの比較—, 実践女子大学人間社会学部紀要 第18集3月31日発行
 12. 大橋 憲司, 2014, 化粧品の実環境負荷とその削減の取り組み, 廃棄物資源循環学会誌, Vol.25, No.3, 186-193.
 13. 岡山 武史, 高橋 広行, 2013, 小売企業のブランド構築とコミュニケーション—ネットスーパーへの拡張を求めて—, 広告科学, 58巻1-22.
 14. 高井 愛子, 2021, バナナペーパー開発を通じたサステナブル素材がもたらす製紙業でのイノベーション—越前和紙の事例を通じて—, 福井大学教育・人文社会系部門紀要, 第6号, 119-140.
 15. 高井 愛子, 吉田 祐記, 2022, 中小企業における水産エコラベル認証取得への挑戦と課題—ふくいサーモンのASC認証取得の事例—, 福井大学地域環境研究教育センター研究紀要「日本海地域の自然と環境」No.29, 71-90.
 16. 高嶋 克義, 兎内 祥子, 2021, CSRブランディングの組織的課題に関する考察, 第5巻第1号33-39.
 17. 日本農林水産省, 2000, 有機農産物の日本農林規格JAS, 平成12年1月20日農林水産省告示第59号
 18. 西尾 チヅル, マーケティング・コミュニケーション手段としての環境ラベル, 日本LCA学会, 第5巻第2号186-194.
 19. 本藤 祐樹, 平山 世志衣, 中島 光太, 山田 俊介, 福原 一郎, 2008, 環境教育におけるライフサイクル思考の利用—持続可能な消費にむけたミッシング・リンクの可視化と再生—, 日本LCA学会誌, 4 (3), 279-291.

2021年連邦議会選挙とCDU/CSUの首相候補問題

横 井 正 信^{*1}

(2022年9月20日 受付)

(内容要約)

ドイツにおいては、近年特定の政党を長期的に支持する有権者が減少し、無党派層が増加するなかで、「二大政党」であるキリスト教民主・社会同盟（CDU/CSU）と社会民主党（SPD）が連邦議会選挙の際に選出する首相候補が党の支持層を超えて有権者全体から広い支持を集めるといふ点でより大きな役割を果たすようになっている。しかし、CDU/CSUは2021年連邦議会選挙においてすでに退陣を表明していたメルケル首相に代わる適切な後継首相候補を選出することに失敗し、選挙に大敗した。その結果、CDU/CSUと（すでに党勢衰退傾向にあった）SPDの合計得票率は初めて50%を下回り、ドイツの政党システムは、中心となる二つの政党が存在する状態から勢力差の大きくない複数の政党によって構成される多党制へと移行した。このCDU/CSUの失敗の背景には、大連立政権の長期化と中道左派有権者へと支持を拡大しようとしたメルケルの路線をめぐる党内不一致、その結果としての党首・首相職の分離、選挙戦における現職首相と次期首相候補の並立状態に加えて、社会の変化と連動した従来型の政党組織の弱体化という、より長期的な問題がある。

目次

序 歴史的節目としての2021年連邦議会選挙

第1章 クランプ＝カレンバウアーの辞任とラシェットの党首選出

- (1) クランプ＝カレンバウアーの辞任と3人の党首選立候補者
- (2) CDU党首候補の低迷とゼーダーに対する期待の高まり
- (3) CDU党首選の再延期とラシェットの党首選出

第2章 CDU/CSUの首相候補決定問題

- (1) 2021年春の州議会選挙におけるCDUの敗北
- (2) コロナ危機対策に対する批判の高まりとCDU/CSUの支持率低下

^{*1} 福井大学教育・人文社会系部門総合グローバル領域

(3) CDU/CSUの首相候補決定

第3章 2021年連邦議会選挙戦におけるCDU/CSUの低迷

- (1) メルツに対する協力要請とザクセン・アンハルト州議会選挙
- (2) 連邦議会選挙戦におけるCDU/CSUとラシェットの低迷
- (3) 選挙戦終盤におけるCDU/CSUの失速

第4章 2021年連邦議会選挙における敗北とメルツの党首選出

- (1) 連邦議会選挙におけるCDU/CSUの敗北と選挙後の党内の混乱
- (2) ジャマイカ連立事前協議の早期挫折とラシェットの辞任
- (3) ラシェットの後継党首をめぐる議論と党員投票方式の採用
- (4) CDU党首選とメルツの党首・院内総務就任

第5章 CDU/CSUの首相候補問題の政治的意味

- (1) CDU党首・首相職の分離とメルケルに対する高い評価
- (2) 政党連合としてのCDU/CSU
- (3) メルケル長期政権の下でのCDUのジレンマと政党組織の弱体化

序 歴史的節目としての2021年連邦議会選挙

ドイツ連邦共和国における2021年連邦議会選挙は同国の選挙史上一つの大きな節目となった。第一に、1949年の西ドイツ建国後、常に首相を輩出し、政党政治の中心となってきたキリスト教民主・社会同盟（CDU/CSU）と社会民主党（SPD）という二つの「国民政党」の「衰退」が前回選挙にもまして明確になった。連邦議会選挙における両党の合計得票率はピーク時の1976年には91.2%に達したが、その後緩やかに低下し、ドイツ統一後最初の選挙となった1990年には77.3%と80%台を割り込んだ後、2005年には69.4%、2017年には53.4%にまで低下した。特に2017年選挙ではそれまで大連立を形成してきた両党の合計得票率は前回選挙と比べて13.8ポイントもの低下を示した。一立法期の間に連立与党がこれほど大きな得票率低下に見舞われたのは初めてであった。この選挙の後も再び大連立政権が継続されたが、2021年連邦議会選挙では両党の合計得票率はついに過半数を下回る49.8%にまで低下した。特に、2005年から16年間にわたって首相を務めてきたアンゲラ・メルケルの所属政党であるCDU/CSUの得票率は前回選挙の32.9%から24.1%へと大きく低下し、第一党となったSPDの得票率も25.7%にとどまった。これに対して、野党であった緑の党は14.8%、自由民主党（FDP）は11.5%、「ドイツのための選択肢（AfD）」は10.3%、左翼党は4.9%の得票率を獲得し、ドイツの政党システムは、中心となる二つの政党が存在する状態からそれほど大きな勢力差のない中規模の政党が競合する多党制へと変化した。299の小選挙区のうちCDU/CSUとSPD以外の政党の候補者が議席を獲得した選挙区が過去最高の35となったことも、そのような変化を示すものとなった⁽¹⁾。

もう一つの大きな変化は、首相候補に関することであった。これまでの連邦議会選挙においては、CDU/CSUあるいはSPDに所属する現職首相とそれに挑戦して政権を奪おうとする他方の政党の首相候補が選挙戦において有権者全体からの幅広い支持を集めるのに大きな役割を果たしてきた。その際、首相は高い知名度や人気とそれまでの実績をアピールすることができる「現職ボーナス」を有する点で有利であるとされてきた。しかし、2021年連邦議会選挙の場合には、現職首相であるメルケルがすでに2018年秋にキリスト教民主同盟（CDU）党首を辞任し、立法期の終了とともに退陣することを表明していたことから、西ドイツ建国時を除いて初めて、現職首相の続投か首相の交代かではなく、ともに首相経験のない候補者が有権者からの支持を求めて戦うことになった。さらに、これまでは首班政党になる可能性があったのはCDU/CSUとSPDだけであったため、事実上この二党だけが首相候補を擁立してきたが、2021年連邦議会選挙の場合には、党勢を拡大させ、政権獲得も不可能ではないと考えられるようになった緑の党が首相候補を指名したため、初めて3人の首相候補間での争いとなった。

このような政党システムの変化は、過去数十年におけるドイツ社会自体の変化を反映したものである。ドイツにおいては、社会の多様化や複雑化、脱原発や気候変動といった新しい争点、1990年のドイツ統一という国家の再編と旧東ドイツ地域の再建、ユーロ危機や難民危機といった欧州レベルでの大きな問題等を背景として、比例代表制を基本原則とする選挙制度の下で、特定の問題や利害を重視し一部では極端な主張を展開する「小政党」が過去数十年の間に次第に勢力を拡大させてきた。これに対して、CDU/CSUとSPDの両「国民政党」は緩やかな基本的理念を掲げつつ幅広い多様な支持基盤を有してきたがゆえに、それら「小政党」と必ずしも無原則に連立を形成することができない一方で、「小政党」の台頭をもたらした社会的変化が両党の支持基盤の動揺や溶解をもたらすという状況に追い込まれてきた。こうしてCDU/CSUとSPDのいずれかを中心とする連立の形成が次第に困難となった結果、2005年の第1次メルケル政権以降、2009年～2012年を除く3立法期にわたって、両党による大連立が繰り返されるようになった。

確かに、大連立政権は1966年にも形成されたことがあったが、それは政権の中心がCDU/CSUからSPDへと移行する過渡期の例外的状況を背景とした短命政権であり、それ以降も両党はそれぞれ異なった公約や政策を掲げて政権獲得を競い合う立場にあった。しかし、近年大連立政権という「例外」が常態化し、政権維持のために両党が妥協を繰り返さざるを得なくなったことによって、両党の政策面での違いを明確にすることは次第に困難となり、それが伝統的に両党を支持してきた支持者の一部の離反をさらに招くという悪循環に陥るようになった⁽²⁾。

短期的長期的に多数の課題が山積しているにも拘わらず、政党システムにおいて中心となるべきCDU/CSUとSPDが互いに差別化できず、次第に支持率を低下させていく一方、現職首相が再出馬しないという状況の中で行われた2021年連邦議会選挙においては、両党にとって選挙戦において首相候補が果たす役割が今まで以上に大きくなった。この選挙に際して、政権運営においてSPD以上に大きな役割を果たし、メルケルまで8名の首相のうち5名を輩出してきたCDU/CSU

は、有権者から大きな支持を得られない首相候補を指名し、結果的に選挙に大敗した。本稿においては、そのプロセスを分析することを通じて、ドイツの政党システムにおいて中心的役割を果たしてきた政党が陥っている困難な状況を明らかにすることを目的としている。

第1章 クランプ＝カレンバウアーの辞任とラシェットの党首選出

(1) クランプ＝カレンバウアーの辞任と3人の党首選立候補者

2005年の大連立政権発足後、首相であり CDU 党首でもあったメルケルは、SPD との妥協の必要性に加えて、党の支持基盤を中道左派的有権者へと拡大し、将来的に緑の党との連立を可能にすることを目指して、財政拡張的な社会保障政策、規制強化的な労働市場政策、新しい家族像に基づく家族政策の転換や同性婚の法制化、原子力発電の廃止と再生可能エネルギーの拡充、徴兵制の廃止等の「近代化」路線をとった。しかし、このようなメルケルの路線は党内の経済政策重視派や価値保守派からの反発を招き、2015年の難民危機はそれを増幅させて CDU 内及び CDU とキリスト教社会同盟 (CSU) の間に激しい対立をもたらした。その結果、2017年連邦議会選挙において CDU/CSU は得票率を 41.5 % から 32.9 % へと大幅に低下させ、その後5か月以上にわたる困難な連立交渉を経て2018年3月ようやく3回目となる大連立政権を発足させた。しかし、政権発足後も CDU/CSU 内の対立は終息せず、一連の州議会選挙に敗北した結果、メルケルは2018年10月に CDU 党首を辞任することとなった⁽³⁾。

メルケルの後継党首選出にあたっては、彼女の路線を継承するアンネグレット・クランプ＝カレンバウアーが反メルケル派によって擁立されたフリードリッヒ・メルツ元 CDU/CSU 院内総務に対して際どい差で勝利を取めた。クランプ＝カレンバウアーは党内の結束を取り戻すべく、難民の積極的受け入れを図ったメルケルの路線の修正等を試みたが、そのような試みは必ずしも成功せず、メルケルとの関係も悪化した。それに加えて、メルケルが CDU 党首を辞任する一方で首相職については2021年秋に予定されている連邦議会選挙まで続けるという態度をとったため、CDU 内には二重権力状態が発生し、クランプ＝カレンバウアーは CDU の最高指導者として確固たる地位を確立できなかった。こうして政策面においても人事の面でも安定性を回復できないまま、CDU は2019年10月に行われたチューリンゲン州議会選挙で大敗し、右派政党「ドイツのための選択肢 (AfD)」に第一党の地位を奪われただけでなく、選挙後には同州における AfD との関係をめぐる党本部と州支部の間に対立が発生した。クランプ＝カレンバウアーはこの混乱の收拾に失敗して党首としての権威を失い、党首就任から1年あまりしか経たない2020年2月に辞任表明に追い込まれた⁽⁴⁾。

クランプ＝カレンバウアーは党首辞任の表明にあたって、連邦議会選挙に向けて CDU の首相候補が決定されるまで党首を続けるとし、その決定の時期を同年12月の CDU 連邦党大会とする方針を示した。しかし、彼女は辞任の意向を表明したことによって求心力を失い始め、CDU/CSU

連邦議会議員団院内総務ラルフ・ブリンクハウスが「現時点で3四半期にわたってCDU内で人事についての議論だけが行われるならば、それはよくないことである」と発言する等、次期党首の決定を12月まで待つべきではないという圧力が党内で急速に高まった。

次期党首を迅速に決定するべきであるという声はCDUの姉妹政党であるCSUからもあがった。CSU党首でバイエルン州首相でもあるマルクス・ゼーダーは「党首についての決定に何か月もかける」クランプ＝カレンバウアーの方針に疑問を呈し、CDUに対して「早く合理的な決定を下す」よう要請した。CSUのこのような主張は、ゼーダーが同党だけではなくCDUの一部からも次期首相候補になり得る人物であると見なされていることを背景としたものであった。そのため、ゼーダーは首相候補の選出に関しても、CDU党首が「自動的に」CDU/CSUの首相候補になることに反対し、CDU党首選出後に2020年末ないし2021年はじめにCDUとCSUの協議に基づいて首相候補を決定するべきであると主張した⁽⁵⁾。

このようにCDU/CSU内で早期にCDUの次期党首を決定すべきであるという圧力が高まったことを受けて、具体的な党首候補者の名前もすぐにとりざたされるようになった。この時点で次期党首候補と見なされていたのは、すでに前回党首選に立候補していた元CDU/CSU連邦議会議員団院内総務メルツと連邦保健相イェンス・シュパーンに加えて、連邦内で最大の人口を有するノルトライン・ヴェストファーレン州の州首相アルミン・ラシェットの3人であった。彼らはいずれも同州のCDU支部に所属していた。これに対して、クランプ＝カレンバウアーは党内に対立的な「陣営」形成をもたらす可能性のある複数の候補者たちの立候補を阻止し、党首候補を一本化することによって次期党首選をめぐって党内が混乱することを防ごうとした。そのため、彼女は2月18日からメルツ、シュパーン、ラシェットと順次協議し、三者それぞれに党首をはじめとした指導的地位を与える「チームという形での解決策」を目指した。

しかし、クランプ＝カレンバウアーがまさにそれに向かって働きかけを始めた18日に元ノルトライン・ヴェストファーレン州支部長で連邦議会外交委員長でもあるノルベルト・レットゲンが突然党首選に立候補することを表明したことによって、彼女の計画は頓挫した。レットゲンはこの表明にあたって、クランプ＝カレンバウアーの提案が「個々人の利害の調和を図ることだけに終わるのではないかと疑っている」と述べて、彼女のやり方に疑問を呈した。レットゲンは、誰を党首にするかだけでなく、今後のCDUがどのような戦略的立場をとるかを決定することが重要であるにもかかわらず、クランプ＝カレンバウアーの辞任表明後、そのような議論が行われていないことを立候補の理由としてあげた⁽⁶⁾。

レットゲンは第2次メルケル政権において2009年から連邦環境相を務め、2010年にはノルトライン・ヴェストファーレン州支部長職をめぐってラシェットとの権力闘争に勝利した経験を持っていた。しかし、彼は一貫して州政治よりも連邦政治に強い関心を持っていたため、2012年の州議会選挙の際に連邦閣僚を辞任して選挙戦に集中することを拒否し、結果的にCDUの大敗をもたらした。レットゲンはこの選挙での敗北後に州支部長を辞任する一方、連邦政治に関わり続け

ようとしたが、メルケル首相は彼を連邦環境相から解任した。政治的能力は高いものの、党組織の指導よりも自らの政治的野心を優先する彼の行動は党内からの広い支持を得られず、従って彼がクランプ＝カレンバウアーの後継党首に選出される可能性は実際には低かった。

しかし、レットゲンが立候補を公に表明したことによって、早期の党首選実施への流れは一気に加速した。メルツ、シュパーン、ラシェットの間で党首候補者の一本化を図るというクランプ＝カレンバウアーの試みはその後も結局成功せず、CDU総務会は4月25日に特別党大会を開催して新しい党首を決定するという日程を決議した。

このCDU総務会決議直後にラシェットとメルツは相次いで党首選への立候補を表明した。その際、ラシェットとシュパーンは前者が党首、後者が副党首になるという「チーム的解決策」について合意した。2月25日に党首選への立候補を正式に表明したラシェットは「メルケル時代と一線を画すことは無意味である」と述べて、メルケル首相の路線を継承することを明確にした。同時に、ラシェットはCDUが「中道派国民政党」であることを強調し、「キリスト教社会派、自由主義派、保守派－これらすべてがともにわれわれの共通の価値のために同じ目標を追求している」と述べて、自らがCDU内の様々なグループの結束の保証者であることをアピールした。

他方、39歳の若手政治家であるシュパーンはそれまでも世代交代の象徴と見なされ、CDUの青年組織である「青年同盟」から支持を得る一方、難民政策等においてはラシェットよりも保守的な路線をとってきた。シュパーンは2015年から翌年にかけてシリア難民の大量流入をもたらしたメルケルの難民政策を批判し、その後も「難民政策についての議論は終わっていないし、解決されてもいない」と主張してきた。しかし、ラシェットとともに行った25日の表明では、シュパーンはラシェットと同じく党の結束の重要性を訴え、ラシェットと協力することによって党内の幅広い考え方を代表し、「打破と継続性」を実現することを強調した⁽⁷⁾。

ラシェットとシュパーンの表明を受けて、ノルトライン・ヴェストファーレン州支部総務会は2月27日に圧倒的多数でラシェットを党首候補に指名することを決議した。この決議は党首選に向けて大きな意味を持っていた。党大会においてノルトライン・ヴェストファーレン州から派遣される代議員は全体の約3分の1を占めており、この決議に拘束力はなかったものの、州支部総務会が支部長でもあるラシェットを党首候補とする決議を採択したことは、代議員の投票行動に大きな影響を与えると予測された。

他方、ラシェットとシュパーンの「チーム」での立候補表明とほぼ同時に、メルツも党首選に立候補することを正式に表明した。ラシェットがメルケル時代との継続性を明確にしたのに対して、メルツは自らが「打破と刷新」の候補者であることを強調した。彼は2002年にCDU/CSU院内総務職をめぐるメルケルとの権力闘争に敗れた後、経済界に転身し、アメリカに本拠を置く世界最大の資産運営企業ブラックロックをはじめとした多くの企業で役員を務めていた。彼はCDU経済評議会副会長も兼務する経済政策通の政治家という立場からCDU内の経済政策重視派の立場を代表しており、リーマン・ショックをきっかけとしたユーロ危機の際には、メルケル政権の方針

に反して欧州中央銀行（EZB）の金融緩和政策を批判するとともに、ギリシアが再び債務危機を引き起こす可能性を指摘し、そのようなことが起こった場合には同国をユーロ圏から離脱させるべきであると主張していた。また、彼は過度に高いエネルギー価格をもたらすとして、メルケル政権による原発廃止と再生可能エネルギーへの「一面的」な指向を批判する態度をとった。さらに、彼は政府が難民流入をコントロールできなくなることによって国民からの信頼を失うことにつながるとしてメルケル首相の難民政策を批判し、難民に対する庇護審査の厳格化を要求した。

メルツはすでに2018年の党首選において元CDU党首で連邦議会議長でもあるヴォルフガング・ショイブレ等特にバーデン・ヴュルテンベルク州支部から大きな支持を得ていたが、今回も同州支部長トーマス・シュトロブルをはじめとした州支部幹部はメルツを支持することを表明した。CDU内で2番目に大きい州支部が再びメルツを支持した背景には、彼が保守的有権者からの支持を回復させ、2021年春に予定されているバーデン・ヴュルテンベルク州議会選挙においてCDUが第一党の座を緑の党から奪回できることに対する期待があった。

シュトロブル等に続いて、経済界を代表し、経済自由主義的方向性を支持する党内団体であるCDU中小企業同盟（MIT）幹部会も3月はじめにメルツの党首選立候補を支持する決議を採択した。この決議はメルツを「CDUにおいて緊急に必要な新たな方向性を推進する」ためにふさわしい人物であるとしていた⁽⁸⁾。

(2) CDU党首候補の低迷とゼーダーに対する期待の高まり

以上のように、クランプ＝カレンバウアーの辞任表明後、当初予定とは異なって2週間あまりで次期党首選への立候補者が明確となった。しかし、この直後からドイツにおいても新型コロナ・ウイルスが猛威を振るい始めたことから、4月に特別党大会を開催することは不可能となり、ノルトライン・ヴェストファーレン州首相であるラシェットや連邦保健相であるシュパーンがコロナ対策に忙殺されることになったため、CDU党首選の日程は再び変更され、12月の定期党大会での選出へと延期された。

他方で、新型コロナ・ウイルスの流行とそれに伴う危機感の高まりは、各政党や政治家に対する評価を大きく変化させた。ZDFテレビと「世論調査集団（Forschungsgruppe Wahlen）」が定期的に実施している「ポリトバロメーター」の調査結果によれば、第4次メルケル政権発足後、CDU/CSUの支持率は30～35％程度に回復したが、2018年後半からは再び徐々に低下傾向を示し、2020年2月の時点では27％にまで低下していた。同じく連立与党であるSPDの支持率はさらに低迷しており、13％となっていた。このような連立与党の支持率低迷は、2017年連邦議会選挙後にCDU/CSU、FDP、緑の党による連立交渉が失敗し、他に事実上選択肢がない状況の下で、当初の公約に反してやむを得ず大連立が再び形成されたことが大きな要因となっていた。しかし、緊急時における政府への期待の高まりとともにCDU/CSUの支持率は急速に上昇し、2020年夏にかけて38～40％程度にまで高まった。連邦政府の活動を肯定的に評価するか否定的に評価する

かという調査でも、肯定的評価がそれまでの40～50％程度から80％台にまで上昇した。メルケル首相に対する肯定的評価は元々60～70％と高かったが、これも80％台前半へと上昇した⁽⁹⁾。

このようにCDU/CSUやメルケルに対する支持が大きく上昇する一方で、それとは対照的にCDUの次期党首候補者に対する評価はコロナ危機が始まる前から低く、それが当初から同党内で懸念材料とされていたが、2020年春以降もそのような状況は基本的に変わらないか、むしろ悪化する傾向を示した。ARDテレビと世論調査機関エムニド(TSN Emnid)による2020年2月上旬の調査結果によれば、この時点でCDUの次期党首候補者と目されていたメルツ、ラシエツト、シュパーンが「優れた首相になると思うか」との質問に対して、「そう思う」とした回答は、メルツの場合40％、ラシエツトの場合30％、シュパーンの場合24％であった。しかし、候補者が明確となった2020年5月時点での調査では、メルツの支持率は33％、ラシエツトのそれは27％へと低下し、レットゲンの支持率は21％となった。特に、ラシエツトは連邦内最大の州の首相であり、コロナ危機発生後に支持率が低下したことは、彼を党首に選出し、連邦議会選挙戦においてメルケル首相の後継者になり得る人物としてアピールできるかという点で大きな疑問をもたらした。

他方で、党首候補なることを断念し、ラシエツトとの「チーム」で副党首を目指すことになったシュパーンは、コロナ対策の中心的な担当閣僚としての注目度が上がったこともあり、各党党首と主要閣僚に対する満足度の調査では、彼の活動に満足しているとする回答の比率は2020年2月の44％から2020年5月には56％、8月には60％へと上昇した⁽¹⁰⁾。

さらに、CDUの次期党首候補者に対する世論調査での支持率が低迷する一方で、CSU党首ゼーダーに対する支持は当初から相対的に高く、彼が「優れた首相になると思う」とする回答は2020年2月時点で31％とラシエツトをわずかに上回っており、5月時点では53％とメルツを大きく上回る結果となった。この調査では、メルツ、ラシエツト、レットゲンに関しては「優れた首相になるとは思わない」とする回答がいずれも過半数となっていたのに対して、ゼーダーだけは35％にとどまっていた。さらに、CDU/CSU支持者に限定した調査結果によれば、2月時点で「優れた首相になると思う」とする回答がメルツ69％、ラシエツト43％であったのに対して、ゼーダーは53％とすでにラシエツトより高い支持を得ており、5月時点ではゼーダー67％、メルツ44％、ラシエツト29％、レットゲン18％と、ゼーダーが最も高い支持を得るようになった。7月に行われたポリトバロメーターの調査結果でも、ゼーダーが首相に適しているという回答が64％(CDU/CSU支持者に限定すれば78％)となったのに対して、メルツは31％、ラシエツトは19％、レットゲンは14％にとどまった⁽¹¹⁾。

党首選が延期されるなかでこのような状況が見られたことは、次期党首と首相候補をめぐってCDU内で不安定な状況が続くという結果をもたらした。前述したように、ラシエツトがシュパーンとの「チーム」で党首選に立候補したことは、メルケルの路線を引き継ぐことを強調する一方で、以前からラシエツトを懐疑的に見ている党内保守派や青年同盟からの一定の支持を得ているシュパーンと協力することによって、「打破と継続性」をアピールし、党内で幅広い支持を得られ

るという計算に基づくものであった。シュパーンにとっても、現時点では単独で立候補しても党首に選出される可能性が低いことから、ラシェットが党首になった場合にその後継者としての地位を確保する方が長期的には得策であると考えられた。3月以降のコロナ危機も、行政面で大きな責任を担う州首相や連邦保健相としてラシェットとシュパーンがメルツやレツトゲンよりも注目を集める機会であるとも考えられた。

しかし、ラシェットがメルケルやゼーダーとは異なって行政責任者としての評価を高められず、むしろ党首候補になることを断念したシュパーンの評価が上昇したことは、党首候補としてのラシェットの適性に対する不信感をもたらし、シュパーンが再度党首候補に名乗りを上げるべきではないかという見方さえ生み出した。

このような状況の下で、ゼーダーは表面上自らの活動場所はバイエルンにあると繰り返し表明していたが、他方では2020年7月に行った新聞インタビューにおいて、「将来の首相候補はコロナ危機において実績を証明しなければならず、その点で業績のない者はモラル上の指導要求権を持たない」と述べて、CDUの党首候補がそのままCDU/CSUの首相候補になれるわけではないことをあらためて示唆した。さらに、ゼーダーは別のインタビューにおいて、首相候補に関する優先的提案権がCDUにあることを認めるとした一方で、CDU/CSUの首相候補決定の日程については12月のCDU党大会後にすべきであるとし、「それは必ずしも1月である必要はなく、3月になってからの可能性もある」と発言した。彼はその理由として、CDU/CSUの首相候補が支持の高いメルケル首相と並んで長い選挙戦を戦うことは得策ではないことをあげた。しかし、実際には、この日程案は、新しいCDU党首が首相候補として成功を収めることができるかどうかを見極め、場合によってはゼーダーが首相候補になるための時間的余地を残しておくことを意図したものであった。ただし、CDUから見れば、ゼーダーのこのような要求を受け入れることは、新党首選出の時点で首相候補を確定することができなくなることを意味していた⁽¹²⁾。

2021年3月には連邦議会選挙の前哨戦となる州議会選挙がバーデン・ヴュルテンベルク州とラインラント・プファルツ州で実施される予定になっており、CDU/CSUの首相候補がどの時点で誰になるかは両州での選挙にも一定の影響を与えられと考えられた。このため、CDUラインラント・プファルツ州支部長パトリック・シーダーは、CDUの次期党首は首相候補でもなければならぬと主張し、「ゼーダーが自ら首相候補になるという意図を持っているのであれば、それを明らかにすべきであり、そうでないならばCDUの利益のために控えめな態度をとるべきである」と述べて、苛立ちを示した。CDU副党首でヘッセン州首相でもあるフォルカー・ブーフイエも、首相候補についての議論を延々と行って2021年3月の州議会選挙を迎えることは「市民に対する最悪のメッセージである」として、2020年12月のCDU党大会までにCDU/CSUの首相候補を誰にするかを明確にすべきであると表明した。ただし、彼が誰を望ましい首相候補と考えてこのような発言をしたのかは必ずしも明らかではなかったため、この発言自体がCDU内に混乱をもたらし、他方で、ショイブレはCDU/CSUの首相候補を2021年の復活祭（4月）以降に決定するべき

であるとの立場をとった。彼はその理由としてゼーダーと同様に、メルケル首相がおそらく任期の最後まで国内的国際的に高い信頼を得ると予想されることからして、次期首相候補になる人物がメルケルの傍らで彼女と比較される期間をできる限り短縮した方がよいことをあげた⁽¹³⁾。

CDU/CSU 内でこのように首相候補をめぐる議論が展開されていることは、結束力の低下という印象をもたらしかねなかったことから、ラシェットとシュパーンとは2020年8月末に共同で記者会見を開催し、「(党首選をめぐる) SPDが行ってきたような競争を演じるべきではない」と述べて、「おそらく党内では重要であるが、市民にとっては関心のない問題」に拘泥し続ければ結果的にCDUの支持率低下を招くことになる」と警告した。しかし、当初クランプ＝カレンバウアー等が目指したようには次期CDU党首候補を一本化できず、ラシェット、メルツ、レットゲンの3人の間での対決的な党首選が行われることが不可避となっていること自体が、CDU内の対立と混乱を示唆していた⁽¹⁴⁾。

(3) CDU党首選の再延期とラシェットの党首選出

CDU党首選に名乗りを上げた3人の候補者の世論調査における支持が低迷し、それと連動してCDU/CSUの首相候補をめぐる議論が混乱をもたらすなかで、2020年秋になると、それに拍車をかける事態がさらに生じた。前述したように、次期CDU党首は同年12月4日に開催される党大会において選出されることになっていたが、10月下旬になると、新型コロナ・ウイルス感染者数のさらなる増加から、1,000人あまりの代議員が集まるCDU党大会の開催は不可能であると考えられるようになった。これを受けて、CDU幹部会及び総務会は10月26日に、12月の党大会開催を中止し、2021年春に延期して開催するか、党首選をインターネット上あるいは郵便投票によって行うかを12月にかけて検討したうえで、1月に最終的な決定を下すことを決議した。ただし、政党法によれば、党首を含む党指導部の選出は党大会において行われなければならない、党大会を開催せずに党首選のみをインターネット上や郵便投票で行うことは、現行法上では困難であると考えられた。

これに対して、3人の党首候補者のうちラシェットとレットゲンはこの党大会の延期を了承したが、メルツはこの延期を政治的意図によるものであるとして強く反発した。彼は党大会延期の決定がなされた当日のテレビのインタビューにおいて、パンデミックのために実際に代議員が集まって党大会を開催することが不可能でも、12月に遠隔方式で党大会を開催することは可能であると述べ、それでもできないというのであれば、「それには明らかにコロナとはあまりあるいはまったく関係のない理由によるものであると推測できる」との見方を示した。さらに、彼は「党のエスタブリッシュメントの一部が、私が党首になることを阻止しようとしている」と指摘し、別のインタビューではさらに具体的に「私はラシェットがその(党大会の延期という)スローガンを与えたという明白かつ明確な感触を得ている」とまで発言した。彼はその理由として、各種世論調査において自らがラシェットを上回る支持を得ていることから、ラシェットがこの状況を変化

させるために時間を必要としていることをあげ、「そうでなかったならば、今年中に党首選が行われていたことは確実であろう」と主張した⁽¹⁵⁾。

実際、CDU内ではそれまで党首の選出をできる限り早く行い、新しいCDU党首が自らの立場を確固たるものにしようとして、CSUに対しても首相候補になることを認めさせるという考え方が主流であった。すでにゼーダーやショイブレがCDU/CSUの首相候補決定を2021年春の州議会選挙後まで延期するべきであると主張しているなかで、CDU党首選自体がその時期にまですれ込み、その間に3人の党首候補がいずれも支持率を上昇させることができず、4人目の候補者としてシュパーンが再び登場するようなことになれば、選出されたCDU党首の権威はますます低下し、実際にゼーダーが首相候補になる可能性もあった。

しかし、党大会の延期は自らを不利にするための意図的な策略であるというメルツの主張は明らかに過剰反応であり、新型コロナ・ウイルスの感染状況からして12月に党大会を実施することは不可能と考えられるようになったため、CDU内でメルツの主張に同調する声はほとんどあがらなかった。確かに、以前からメルツ支持者の多いバーデン・ヴュルテンベルク州等のCDU幹部の一部は党大会の早期開催を要求したが、そのような要求が広い支持を集めることはなかった。クランプ＝カレンバウアーは、メルツの「陰謀論」を否定したうえで、「他の政党は、それがどれほど不毛であり、最後には有害な内部対立を引き起こすかについての前例をしばしば十分に示してきた」と述べて、このような議論を長々と続けないよう警告した。

こうして、結果的には10月末にCDU首脳と3人の党首候補者があらためて協議した結果、2021年1月半ばに実際に代議員が集まるか、それが不可能な場合にはインターネットを利用したオンライン方式で党大会を開催することが合意された。さらに、後者の方式となった場合には、政党法上の理由から、オンラインで党首選を行った後に再度郵便投票を実施して、その結果を確定することになった。これによって、CDU党首選が2021年春にまですれ込むことはなく、1月半ばには事実上新しい党首を選出することが可能となった。しかし、この再延期の過程であらためて党内の不安定な状況が明らかになったことに対して、クランプ＝カレンバウアーは3人の党首候補が「破壊的な競争」によって党に損失を与えていると批判し、「この破壊的な競争の報いを受けるのは何よりも候補者自身であるが、CDUでもある」と指摘して、党内の状況に対する憂慮を示した⁽¹⁶⁾。

クランプ＝カレンバウアーのこの発言を裏付けるように、CDU党大会直前のARDとエムニドによる世論調査でも、メルツ27%、レットゲン22%、ラシェット18%とラシェットは3人の候補者のなかで最も低い支持率しか獲得できなかった。CDU支持者に限定した場合でも、メルツの支持率が29%であったのに対して、レットゲンとラシェットのそれはともに25%となっていた。前述したように、ラシェットは連邦内で最も人口の多い州の首相という本来有利な立場にあり、依然として国民全体から評価の高いメルケルの路線を継承する立場を明確にしていた。それにも拘わらず、彼の支持が伸び悩んでいる大きな理由の一つは、彼が同じく人気の高いゼーダーやシュ

パーンと常に比較されていることにあった。2020年12月のARDとエムニドの調査によれば、政治家の活動に「非常に満足」あるいは「満足」しているとする回答の比率は、シュパーンの場合64%、ゼーダーの場合57%であったのに対して、ラシェットの場合は36%にとどまっていた⁽¹⁷⁾。

ただし、このことはメルツに対する支持が高まっていることを意味しているわけではなく、むしろ彼の支持率も低下傾向にあった。メルツはCDU内で経済政策重視派や保守派を中心に一定の支持を得ていたものの、2000年代はじめにメルケルとの権力闘争に敗れた後に経済界に転身して以降、党内で重要な役職には就いていなかった。さらに、彼は党内をまとめるというよりも二極化をもたらす傾向にあり、2020年12月の党大会が延期された際の彼の激しい反発も党内に大きな苛立ちをもたらしていた。世論調査機関のアレンスバッハ研究所が政財官のエリート層517人を対象に行ったアンケートでも、経済界関係者の場合には次期CDU党首としてメルツが最も好ましいとする回答が41%と最も多く、ラシェットは11%と最も少なかったが、政界関係者の場合にはまったく逆にラシェットが35%と最も多く、メルツが18%と最も少なかった。この調査でも全体として広範な支持を得る候補はおらず、他方で、党首をめぐる競争がCDUをどちらかと言えば強化しているか、弱体化しているかに関する質問では、強化しているとする回答は15%しかなく、弱体化しているとする回答が64%と圧倒的に多かった⁽¹⁸⁾。

このように最後まで明確に強力な候補が現れないなかで2021年1月15日にオンラインで開催された党大会においては、1回目の投票ではメルツが385票、ラシェットが380票、レットゲンが224票と過半数を獲得できる候補者がいなかった。このため、メルツとラシェットによる決選投票が行われた結果、ラシェットが521票、メルツが466票を獲得してラシェットが党首に選出されたが、決選投票の結果も両者に対する支持がほぼ拮抗していることを示すものとなった。他方、僅差であるにせよ、1回目の投票で1位であったメルツではなくラシェットが党首に選出されたことは、代議員の多数が相対的に党内を再び安定化させられる候補を最終的に選択し、ラシェットがメルケル以後の時代に安定性と刷新の間のバランスをとることを期待したと解釈することができた。

実際、メルツはこの後も党を結束させるという点で疑問をもたらす行動をとった。党首選後、ラシェットはメルツに対して党幹部会員選挙に出馬して党指導部に加わるよう呼びかけたが、メルツはそれを拒否する一方、ペーター・アルトマイアーの代わりに自らをメルケル政権の経済相に起用することをラシェットに対して提案した。しかし、ラシェットにはそのような権限がないだけではなく、メルツと対立関係にあるメルケルが内閣改造を行ってまで彼を経済相に起用することはあり得なかったことから、この発言はCDU内で大きな反発を招いた。シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン州首相ダニエル・ギュンターは、メルツに対してもっと「チーム精神」を発揮して党の結束を重視するよう要求した。このような批判の声はメルツ支持派であった人々からもあった。CDU/CSU連邦議会議員団院内副総務であり、CDU中小企業同盟会長でもあるカルステン・リンネマンは、メルツが党幹部会員選挙に立候補していれば解決策が見出されたであろうと

述べて、メルツの行動に対する苛立ちを示した。

CDU 党首選の結果を法的に確定するために党大会直後に行われた郵便投票には 980 人の党大会代議員が参加し、そのうち 796 人 (83.3 %) がラシェットに投票した。しかし、この選挙結果にも拘わらず、党大会前後のメルツの行動は秋に迫った連邦議会選挙に向けての CDU の結束力の回復を示すものとはいえず、ラシェットが CDU/CSU の首相候補になれるか否かも依然として明確にならなかった⁽¹⁹⁾。

第2章 CDU/CSUの首相候補決定問題

(1) 2021年春の州議会選挙における CDU の敗北

こうして 1 年近くにわたった事実上の CDU 党首不在という状態が解消された直後の 2021 年 2 月末にアレンスバッハによって行われた世論調査の結果は、CDU/CSU にとっての一定の状況の改善を示唆するものとなった。この調査では、「CDU/CSU に全体として好感を持っていますか」という質問において、「好感を持っている」とした回答は 31 % となり、「あなた自身の意見は別として、多くの人々は CDU/CSU に好感を持っていると思いますか」という質問に対して、「そう思う」と答えた回答は 36 % となった。これらの質問は世論の雰囲気を市民がどのように評価しているのかを明らかにすることを目的としており、過去の調査においては、当該政党の人気の高まりつつあり、メディアにおいて好意的に扱われている場合には、後者の質問に対する肯定的回答の比率が前者のそれを上回る傾向にあった。この点において、連邦議会選挙に向かった CDU/CSU にとって雰囲気はどちらかといえばよくなりつつあると言えた。ただし、2009 年当時はこの 2 つの値の間には 16 ポイントの差があったことからすれば、CDU/CSU が強い追い風を受けていると言えるほどの状況にはなっていなかった。

また、「CDU/CSU は全体として一致していると思いますか、それとも分裂していると思いますか」との質問に対しては、「分裂していると思う」とした回答が 29 % であったのに対して、「一致していると思う」とした回答は 39 % となった。難民危機のピークであった 2016 年当時の調査では、前者の値が 63 %、後者の値が 14 % であったことからすれば、CDU 党首選を経て CDU/CSU の結束に対するイメージも改善されたと言えた。

しかし、他方でこの調査においては「メルケルなしでは CDU はこれほど強くなっていないであろう」という見方に賛成した回答者の比率は 49 % に達しており、16 年近くにわたるメルケル政権の時代を経て、CDU に対する評価がメルケル首相のイメージと非常に強く結びついていることが示された。また、「あなたは全体としてラシェットに対してよい印象を持っていますか、それともよくない印象を持っていますか」との質問に対しては、「よい印象を持っている」とした回答が 21 %、「よくない印象を持っている」とした回答が 26 %、「どちらとも言えない」とした回答が 45 % となっていた。これはラシェットが CDU 党首に就任した直後であり、未だ連邦政治において

指導的な役割を果たしていないことからすれば、異例のことではなかった。しかし、メルケルがすでに退陣表明をしているにも拘わらず、「メルケルが再度首相候補になればよいと思いますか」との質問に対して、CDU/CSU 支持者の場合、それに賛成する回答と反対する回答がともに43%となっていた。これらの結果は、党首選終了後もラシェットに対する支持が未だ強いとは言えず、メルケル以後の時代に対してCDU/CSU 支持者が不安と方向性の喪失感を抱いていることを示すものであった⁽²⁰⁾。

このような雰囲気の中で2021年3月半ばにはCDU/CSUの首相候補決定に向けての大きな節目になると考えられたバーデン・ヴュルテンベルク州及びラインラント・プファルツ州での州議会選挙が実施されたが、前者の州では緑の党、後者の州ではSPDが第一党の地位を維持したのに対して、CDUの得票率は両州において明確に低下し、選挙に敗北した。バーデン・ヴュルテンベルク州はかつてCDUの牙城であり、同党は1953年以降一貫して州首相を擁立してきたが、2011年州議会選挙に敗北し、連立与党の地位は維持したものの、首班は緑の党に奪われた。それ以降、緑の党がプラグマティックな統治スタイルで高い人気を得た州首相ヴィンフート・クレッチュマンの下で支持を拡大したのに対してCDUは低迷を続け、2021年州議会選挙でも、緑の党の得票率が32.6%に達したのに対して、CDUのそれは24.1%に終わった。また、ラインラント・プファルツ州においてもCDUが得票率を前回州議会選挙の31.8%から27.7%へと低下させたのに対して、州首相マル・ドライヤーに率いられたSPDは前回(36.2%)とほぼ同じ35.7%の得票率を獲得して第一党の座を維持し、緑の党及びFDPとの「信号連立」を継続する見通しとなった⁽²¹⁾。

CDU幹事長パウル・ツィーミアクは両州での敗北の原因として、2人の現職州首相の人気の高さに加えて、選挙直前に発覚したCDU/CSU議員による不祥事をあげた。2月末にはCSU連邦議会議員でCDU/CSU連邦議会議員団院内副総務でもあるゲオルク・ニュスラインが政府によるコロナ対策のためのマスク発注の際に製造業者に対して仲介を行い、60万ユーロ以上の顧問料を受けとったにも拘わらず、税務申告を行わなかった疑いが強まり、検察が捜査を開始していた。また、3月上旬にはバーデン・ヴュルテンベルク州選出のCDU連邦議会議員ニコラス・レーベルも民間の購入者に対して製造業者からのマスク調達を仲介し、25万ユーロの仲介料を得ていたことが明らかとなった。さらに、チューリングゲン州選出のCDU議員マルク・ハウプトマンがマスク仲介によって100万ユーロの仲介料を得ただけではなく、アゼルバイジャン政府から彼の関係する新聞への広告料という名目で100万ユーロ近くの利益供与を受けたという疑惑が浮上した⁽²²⁾。

しかし、両州におけるCDUの敗北は、このような短期的な要因だけによるものとは言えなかった。そのことは、AfDの選挙結果にも示されていた。難民危機のピークであった2016年春に行われた前回州議会選挙では、初めて選挙に参加したAfDはバーデン・ヴュルテンベルク州において15.1%、ラインラント・プファルツ州において12.6%の得票率を獲得して両州で第三党となったが、2021年州議会選挙では9.7%及び8.3%へと得票率を低下させた。AfDの敗北に関しては、難民問題のような同党に有利な争点がなかったこと、政府のコロナ対策に関する過激な反対、党内

対立、連邦憲法擁護庁によるAfDに対する監視の強化等、様々な理由が指摘された。AfD支持者の多くは「既成政党」に反対する「抗議有権者」から成っているとされていたが、メルケルによる難民政策やCDUの「近代化」路線に不満を高めた保守的有権者がAfDへと流出したことも同党の党勢拡大の一因になっていると指摘されてきた。しかし、2021年春の両州議会選挙の結果は、AfDへの支持が低下したにも拘わらず、CDUがそのような有権者からの支持を十分に回復できなかったことを示していた。他方で、バーデン・ヴュルテンベルク州においては緑の党の得票率が前回選挙の24.2%から32.6%へと大幅に上昇して、今や同州においてCDUに代わる「国民政党」と言えるまでになった。このことは、CDUが本来メルケル的路線に共感を抱くはずの中道派有権者を緑の党に奪われていることを示していた⁽²³⁾。

このような状況のなかで、ラシェットはメルケルが去った後に難民政策、経済政策、家族政策、社会保障政策、環境保護政策、国内治安・対外安全保障等政策の様々な政策分野だけではなく、党の紐帯としての「キリスト教的人間像」や国家像等に関して、CDUがSPDや緑の党とどのように異なっているのかを明確に示さなければならなかったが、彼にその能力があるのかという疑問は、彼が党首になった後もCDU内で払拭されていなかった。しかし、ラシェットが連邦議会選挙での勝利を優先して彼よりも支持率の高いゼーダーに首相候補の座を委ねたととしても、それはラシェットの指導力の弱さをさらに印象づけることとなり、かえって党の危機を深刻化させる恐れがあった。

(2) コロナ危機対策に対する批判の高まりとCDU/CSUの支持率低下

2021年3月の州議会選挙における敗北は首相候補の決定と秋の連邦議会選挙を前にしてCDUにとって大きな痛手となったが、CDU/CSUの支持率はすでにその直前から低下し始めていた。前述したように、2020年春の新型コロナ・ウイルス感染者数の急激な増加やそれと連動した政府の当初の危機管理能力に対する期待の高まりから、CDU/CSUの支持率も40%前後へと大幅に上昇し、同年を通じてそのような状況が続いた。しかし、2021年に入ると、CDU/CSUの支持率は上昇に転じた時と同様に急速に低下し始め、ラシェットがCDU党首に選出された直後には短期的に若干回復したものの、3月の州議会選挙後には28.5%にまで低下した。アレンスバッハの世論調査によれば、選挙において当該政党を投票先として考慮するかという、政党に対する広い意味での潜在的支持を測定することを目的とした質問項目においても、同年2月時点では連邦議会選挙においてCDU/CSUを投票先として考慮すると答えた回答者がなお42%に達していたのに対して、3月下旬には29%へと大きく低下し、潜在的支持者の範囲が実際の支持者のそれをほとんど超えない状態にまで縮小していた。これに対して、例えば緑の党の潜在的支持率はCDU/CSUとは異なって安定的に30%前後で推移しており、3月の調査でも27%となっていた。この調査において緑の党を明確に支持するとした回答者の比率は21.5%であり、なお支持率を上昇させる余地があることを示していた⁽²⁴⁾。

このような支持率の低下は2021年春のCDU/CSU議員の利益供与をめぐるスキャンダルによって促進された面があったが、すでにその発覚以前から始まっており、その大きな理由は、コロナ・ウイルス感染状況が改善するどころかますます悪化するなかで、政府やCDU/CSUの危機管理能力に対する不信が高まったことにあった。「コロナ危機における連邦政府の活動をどのように評価しますか」という質問に対して、肯定的に評価するとした回答は、2020年4月時点では75%に上っていたが、2021年3月時点では30%へと低下する一方、批判的に評価するとした回答は17%から62%へと大幅に高まった。政府が実施している制限措置に対しても、「状況によく対応している」とする回答は2020年5月時点の49%から2021年3月には32%へと低下した一方、「苛立たしい」とする回答は41%から57%へと上昇し、政府の措置が「恣意的で矛盾している」とした回答は75%に達した⁽²⁵⁾。

このように政府の危機管理能力に対する評価が大きく低下するなかで、メルケル首相は復活祭を超えて厳しいロックダウンを続けるとともに、コロナ対策に関する連邦の権限と各州に対する命令権を強化して統一的な対策をとろうとした。さらに、これと関連して、メルケルは3月末のテレビのインタビューにおいて「現在、非常に真剣に適切な措置をとらねばならない」にも拘わらず、「そうしている州もあるし、そうしていない州もある」と指摘し、ノルトライン・ヴェストファーレン州やザールラント州等一部の州がより緩和的な措置をとろうとしていることを批判した。それに対して、ラシェットは「すべての州首相は感染者数を減少させることを望んでおり、それぞれの州に応じた措置をとっている」と反論し、PCR検査による陰性証明書を前提とした一定の制限緩和といった自らの州の方針を擁護した。さらに、ラシェットはバイエルン州首相であるゼーダーがメルケルと同様に緩和的な措置をとろうとする州を批判したことに対して、「州首相が同僚を批判することは有益ではない」と述べて、暗にゼーダーを批判した。

世論調査におけるCDU/CSUの支持率が低下するなかで、このような形で党首脳が対立することは、党内をますます不安定化させる懸念があった。このことから、CDU内では、ラシェットとゼーダーのどちらを首相候補にするかをこれ以上遅らせるべきではないという圧力が次第に高まった。前述したように、CDU/CSUの首相候補は2021年春に決定されることになっていたが、このような圧力を受けたラシェットは、復活祭直後（4月上旬）にCDU/CSUの首相候補を決定する方針を示した⁽²⁶⁾。

(3) CDU/CSUの首相候補決定

こうして、復活祭が終わるとCDU/CSUの首相候補決定はこれ以上延期できない状況となった。その際、同党連邦議会議員団の一部は連邦議会選挙での自らの再選の可能性を少しでも高めたいという動機から、世論調査での支持率の高いゼーダーを首相候補にすることを要求した。4月6日にはバーデン・ヴュルテンベルク州選出の7名のCDU連邦議会議員が共同声明を発表し、ラシェットに対してゼーダーに首相候補の地位を譲るよう要求した。また、CSU連邦議会議員団院

内総務アレクサンダー・ドブリントは「合意に基づく解決策が望ましい」としたうえで、それが不可能な場合には、CDU/CSU連邦議会議員団が首相候補の決定に関与すべきであると主張した。さらに、4月9日にはCDU連邦議会議員50名が首相候補の決定に連邦議会議員団を参加させることを要求する共同声明を発表した。

CDU/CSUの支持率が低下するなかで自らの再選に対する懸念を次第に強める議員たちからの圧力を受けて、ラシェットとゼーダーは4月11日に長時間にわたる協議を行ったが、結論に達しなかった。この協議後、ゼーダーはCDUが彼を支持するならば首相候補に立候補すると表明した。ラシェットがCDU党首に選出された時からその立場上首相候補を目指すことを明らかにしていたのに対して、ゼーダーはそれまで首相候補に立候補することを明確にはしていなかったが、もはやそのような曖昧な態度を続けることはできない状況となっていた。他方、ゼーダーの発言は、CDUが彼を選ばないという決定をすれば、それを受け入れると解釈できるものであったことから、ラシェットは4月12日に開催されるCDU幹部会及び総務会において自らが首相候補になることについての支持を得る方針であると表明した。

これを受けて4月12日に開催されたCDU幹部会及び総務会では、CDU党首選まではメルツを支持していたショイブレやリンネマン等を含めて、ラシェットを首相候補とすることに対して幅広い支持が見られた。この時点では、ショイブレ等も、ラシェットがCDU党首に選出されたにも拘わらず首相候補になれなければ、CDUにとっても打撃になると考えるようになっていた。ただし、ラシェットに対する支持は圧倒的で一致したものとは言えず、レットゲンは、CDU/CSUが連邦議会選挙に敗北した場合には単に首相を擁立することができなくなるだけではなく、「ドイツの政治地図が書き直されることになる」と警告し、「決定的な基準となるのは選挙での勝利である」と述べる一方、誰を首相候補とすべきかについては明言しなかった。また、CDUベルリン市支部長カイ・ヴァグナーは「人々はゼーダーを信頼していると確信している」と述べて、ゼーダーを首相候補とすることを明確に支持した⁽²⁷⁾。

このように、12日の会議では明確な決定がなされなかったことに加えて、ラシェットは「CDUによる決定」を幹部会や総務会による決定と解釈していたのに対して、ゼーダーはむしろCDU党員や支持者全体を念頭においていた。このため、4月13日に開催されたCDU/CSU連邦議会議員団会議においても、依然として首相候補をめぐる議論が続けられた。この議員団会議では、ラシェットとゼーダーはお互いに攻撃的な態度をとることを躊躇しなかった。ラシェットは青年同盟、中小企業同盟、労働者派等、CDU内のすべてのグループと首相候補選出について協議していることを強調する一方、世論調査を基準として自らが首相候補になることを断念することはないとし、「ワンマンショーは必要ではない」と述べて、間接的にゼーダーを批判した。

これに対して、ゼーダーはCDU/CSU連邦議会議員団の役割の重要性を強調し、自らに有利であると思われる議員団からの支持を獲得しようとした。彼は連邦議会議員団がCDUとCSUにとって「共同の機関であると見なされるただ一つ組織」であることから、「議員たちの声を聞くこ

とは当然のことである」と主張した。さらに、彼は「CDU/CSU にとって非常に危機的なこの段階において選挙で勝利を取めるためには、最上の布陣が必要である」と述べて、世論調査での支持率が高い自らを首相候補にすることが連邦議会選挙における CDU/CSU の勝利を実現するための最上の方法であることを示唆した。

このような2人のアピールの後、議員団会議は3時間にわたって議論を行い、60名の議員が発言したが、全体としてはゼーダーに対する支持がラシェットに対するそれを上回った。CSU 議員が一致してゼーダーを支持したのは当然のことであったが、CDU 議員からも彼を支持する意見が出された。しかし、この会議でも誰を首相候補にするかについて明確な結論が出されたわけではなく、CDU/CSU が分裂しているという印象を生み出すことを懸念して、院内総務であるプリンクハウスもドブリントも議員団会議で採決を行うことを回避した⁽²⁸⁾。

CDU 幹部会・総務会や CDU/CSU 連邦議会議員団においても首相候補問題に決着がつかないまま、状況はどちらかと言えばゼーダーに有利に展開しつつあるように見えた。この間公表されたポリトバロメーターの調査結果によれば、ゼーダーが首相に適しているとした回答が全体で 63 %、CDU/CSU 支持者に限定した場合には 84 %に上ったのに対して、ラシェットが適しているという回答は全体で 29 %、CDU/CSU 支持者の場合でも 43 %にとどまった。こうした雰囲気を受けて、4月12日の時点ではラシェットを除く5名のCDU所属の州首相は全員彼が首相候補になることを支持していたが、その後1週間以内にザクセン・アンハルト州首相ライナー・ハゼロフ、ザールラント州首相トビアス・ハンス、ザクセン州首相ミヒャエル・クレッチュマーの3人がゼーダーを首相候補とすることを必ずしも否定しない態度を見せ始めた⁽²⁹⁾。

これに対して、ラシェットは4月19日に再度 CDU 総務会を開催して自らが首相候補になることについての決議を採択させようとした。この会議は深夜に至るまで続けられたが、結局全会一致の結論を得られず、最終的には採決が行われた。その結果、ラシェット支持が31票、ゼーダー支持が9票、棄権が6票で、ラシェットを首相候補とすることが決議された。ラシェットの得票率は棄権を除けば 77.5 %、棄権を含めば 67.4 %であった。この結果を受けて、ゼーダーも「今やサイコロは振られた」とし、「私はCDU党首を全力で支持するであろう」と表明した。

CDU 総務会における採決結果は、CSU やゼーダーあるいはCDU内のゼーダー支持派の様々な攻勢の直後であることを考えれば、ラシェットにとって必ずしも悪いものとは言えず、CDU 指導部の中核がゼーダー待望論の圧力に対して持ちこたえたと見ることもできた。しかし、CDU/CSU が一致結束して首相候補を選出できず、CDU 総務会でも4分の1ないし3分の1がラシェットに反対あるいは彼を明確に支持せず、かなりの党員や支持者が彼を「二番手の首相候補」としか見ていないという状況の下で連邦議会選挙に向かっていかねばならないことは、ラシェットにとって必ずしも順調なスタートとは言えなかった。

事実、ゼーダーの表明にも拘わらず、ドブリントはCDU 総務会后、「確かに政党においては党機関が決定を下すであろうが、それは党機関の決定が（党員から）受け入れられる限りにおいて

機能する」と述べて、CDU総務会の決定が党员全体の意思に必ずしも沿っていないと考えていることを示唆した。また、ゼーダーもCDU/CSUにとって芳しくない世論調査の結果を再度指摘し、「前に向かっての正しいスタートは未だ切れていない」と発言した⁽³⁰⁾。

第3章 2021年連邦議会選挙戦におけるCDU/CSUの低迷

(1) メルツに対する協力要請とザクセン・アンハルト州議会選挙

CDU/CSUの首相候補問題は紆余曲折の末に2021年春ようやく決着したが、連邦議会選挙に向けての展望はラシェットとCDU/CSUにとって必ずしも明るいものではなかった。その理由は、ラシェットやCDU/CSUの支持率が低迷していることに加えて、メルケルが依然として首相の座にあることであった。ラシェットにとって、このことは、一方において、政府のコロナ対策への批判はあるものの国民の間で依然として人気の高いメルケル首相と可能な限り協調していかねばならず、元々メルケルに近い立場をとっているとはいえ、彼女と異なる独自の政策路線を打ち出す余地があまりないことを意味していた。他方で、ラシェットは州首相ではあるものの連邦政治におけるキャリアがなかったことから、現職の首相が再選を目指す場合の連邦議会選挙戦での有利な立場＝「現職ボーナス」を得ることも期待できなかった。

こうした状況を打開するため、ラシェットはかつてのライバルや彼に懐疑的な人々をあえて自分の周りに集め、幅広い支持を得ようとした。ラシェットがCDU党首選にあたって早くからシュパーンとのコンビで立候補し、彼が競争相手となることを阻止したことも、そのような戦略に基づくものであった。その延長線上で、彼は党首選後に党内で保守派や経済政策重視派を中心として依然として根強い支持を得ているメルツの協力を得ようとした。メルツがCDU内で二番目に大きいバーデン・ヴュルテンベルク州支部を中心に一般党员から多くの支持を得ていたこともその理由の一つとなっていた。同州支部の多数派は首相候補問題においてもゼーダーを支持しており、6月に州議会選挙が行われるザクセン・アンハルト州等、他の州においてもラシェットを首相候補にすることに対しては懐疑的な見方をする党员が多かった。

このため、彼は2021年4月末にバーデン・ヴュルテンベルク州のすべての党役職者と同州選出のCDUのすべての州・連邦・欧州議会議員を集めて開催した会議において、「経済・財政政策に関する能力によって、ドイツがコロナ・パンデミック後に直面する巨大な課題を持続的に克服する際に決定的な助けになる」としてメルツを高く評価したうえで、連邦議会選挙戦を指導するための「チーム」に彼を加える方針を表明し、「われわれはチームによってのみ勝利を収めることができる」と強調した。これに対して、メルツもCDU党首選直後の行動による失点を挽回するため、「連邦議会選挙に勝利するチームに喜んで加わりたい」と述べて、選挙戦に積極的に協力する姿勢を見せた。さらに、彼はCDU/CSUが選挙で勝利した場合に、新政権において「指導的役割」を引き受ける意欲を示した⁽³¹⁾。

他方で、バーデン・ヴュルテンベルク州とラインラント・プファルツ州議会選挙に続いて、2021年6月6日には首相候補決定後のラシェットにとっての最初の関門であり、連邦議会選挙の前哨戦と考えられたザクセン・アンハルト州議会選挙が実施された。この州議会選挙でCDUが再び敗北することになれば、党首に選出されたばかりのラシェットの首相候補としての適性に対する批判が再び高まることが予想されていた。しかし、CDUはこの州議会選挙において得票率を前回の29.8%から37.1%へと大幅に上昇させて第一党の地位を維持することに成功した。投票前の世論調査ではAfDが一時的にCDUを上回る支持を得ており、第一党になることが懸念されていたが、実際にはAfDの得票率は前回の24.3%から20.8%へと低下した。ただし、AfDは州議会選挙に初めて参加した前回に続いて再び第二党となり、ザクセン・アンハルト州において依然として大きな支持を得ていることには変わりなかった。これに対して、同州において元々弱体であったSPDの得票率は前回の10.8%からさらに一桁となる8.4%にまで低下し、緑の党の得票率も前回の5.2%に続いて5.9%と議席を獲得できる最低限の水準にとどまった。さらに、左翼党も得票率を前回の16.3%から11.0%へと大きく低下させ、左派政党は全体として勢力を縮小させた。他方、FDPは前回選挙では4.9%の得票率にとどまって議席獲得に失敗したが、2021年選挙では得票率を6.4%へと上昇させ、議席を獲得することに成功した。

ブリンクハウスはこの選挙の直後に「この州議会選挙は、CDUがラシェットの下でも統治能力があることを示した」と述べたが、実際にはザクセン・アンハルト州におけるCDUの勝利の大きな要因は、州首相ライナー・ハゼロフのイニシアティブによるところが大きかった。ザクセン・アンハルト州のCDU内では、州内相ホルガー・シュタールクネヒトを中心としてAfDとの協力を支持するグループが存在していたが、ハゼロフはシュタールクネヒトを解任してAfDとのあらゆる協力を否定し、この点ではラシェットをはじめとしたCDU指導部と一致した態度を一貫してとっていた。しかし、その一方で、彼はメルケル首相の難民政策やコロナ対策に対して批判的な立場をとり、ジェンダー問題等に関しても保守的な立場をとることによって、メルケルの路線に批判的な党员やAfDに共感を抱く有権者からの支持を得ようとした。さらに、彼はCDU/CSUの首相候補決定の問題においても、州内での世論調査の結果に基づいて、ラシェットよりもはるかに高い支持を得ていたゼーダーを支持していた⁽³²⁾。

(2) 連邦議会選挙戦におけるCDU/CSUとラシェットの低迷

このように、ザクセン・アンハルト州議会選挙におけるCDUの勝利は必ずしもラシェットの指導力によるものではなかったが、彼の首相候補としての適性をめぐる議論を沈静化させるという点ではプラスの効果を発揮することが期待された。しかし、実際にはCDU/CSUの支持率はこの州議会選挙後にも回復せず、むしろさらに低下していった。前述したように、CDU/CSUの支持率は3月の州議会選挙後には30%を下回るようになり、5月には24～25%にまで低下し、一時的ではあったが緑の党の支持率が25～26%と初めてCDU/CSUを上回る事態となった。その

後、6月のザクセン・アンハルト州議会選挙の前後にはCDU/CSUの支持率は30%程度に回復したが、夏に向かって再び急速に低下し、連邦議会選挙の1か月前にあたる8月末には22%にまで低下するに至った⁽³³⁾。

主要な世論調査機関の一つであるフォルザ (Forsa) 研究所は、ラシェットがこの支持率低下の大きな原因の一つとなっていると指摘した。その典型的な例とされたのは、7月半ばにノルトライン・ヴェストファーレン州とラインラント・プファルツ州を中心とした洪水が発生した際のラシェットの対応であった。この洪水では特に被害の大きかったラインラント・プファルツ州アールヴァイラー郡だけでも112人が死亡し、ドイツ全体での死者は159人となって、被害額は3億ユーロ以上になると言われた。その直後に被災地を視察したメルケル首相は「このような状況を表現するドイツ語はほとんどない」と述べた。

これに敏感に反応したゼーダーは7月下旬に、バイエルン州政府が気候変動対策のための予算を倍増して2022年だけでも10億ユーロ、2040年までに総額220億ユーロを支出することを表明した。さらに、彼は石炭の使用を2038年までに完全に止めるという連邦レベルでの計画に関して、目標年を2030年に前倒しできないかどうかを検討することを要求した。緑の党党首であり首相候補でもあるアンナレーナ・ベアボックも7月末に10項目計画を公表し、その中で連邦住民保護自然災害支援庁 (BBK) に各州間の調整のための中央本部を設ける等、自然災害の際の連邦の権限を強化することを提案した。

しかし、ノルトライン・ヴェストファーレン州首相でもあるラシェットは、メルケル首相が被災地域を訪問した際に彼女に同行していたにも拘わらず、目立った動きをせず、メルケルしか写っていない写真が新聞に掲載された。また、フランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー大統領が被災地を訪問した際には、真剣な表情でスピーチをしている大統領の近くで笑っているラシェットの写真が報道され、物議をかもした。さらに、ラシェットは「石炭からの撤退」を2030年に前倒しするというゼーダーの提案に対しても、2038年という目標年が専門家委員会によって提案されたものであることを理由に反対した。この発言は炭坑地帯を抱える州の首相としては理解できるものであったが、他方でラシェットは「ノルトライン・ヴェストファーレン州は2030年までに石炭から完全に撤退することができるであろう」と矛盾する発言した。さらに、彼はまず原子力から撤退した後で石炭から撤退するという順序が気候変動対策としては誤っていると述べて、連邦政府の方針を批判した。この洪水被害の際のラシェットの対応は、状況に対してメディアで目立つ形で迅速に行動するという点でゼーダーに比べてはるかに劣っているという印象を強め、CSUだけではなくCDU内でも彼に対する不安が広がった⁽³⁴⁾。

このような不安は世論調査でも裏付けられていた。フォルザとホーエンハイム大学が7月半ばから8月はじめにかけて約2万人を対象に、各首相候補の肯定的な特徴に関して行ったアンケートの結果によれば、ラシェットを「行動力がある」と評価した回答者はわずか13%にとどまったのに対して、SPDの首相候補であるショルツの場合には26%、緑の党の首相候補であるベアボッ

クの場合には23%であった。また、「差し迫った問題を認識している」という評価に関しては、ショルツの場合には21%、ベアボックの場合には19%であったのに対して、ラシェットの場合にはわずか9%であった。さらに、各候補者に「人として好感が持てる」と答えた回答者は、ショルツの場合には31%、ベアボックの場合には29%であったのに対して、ラシェットの場合には16%にとどまった。ラシェットに対する評価が他の2人を上回ったのは「庶民的である」という項目においてのみであった⁽³⁵⁾。

この世論調査の結果は、見方を変えればショルツやベアボックも含めて、連邦議会選挙を前にして有権者の間で圧倒的な支持を得ている首相候補がいないことを示しているとも言えた。この調査のどの質問項目においても35%以上の評価を得た候補者はいなかった。このことは、3人の首相候補者がともに攻撃的で二極化的な論争を行うタイプではなく、むしろ争点を明確化せず、差別化が困難な人物であることによるものでもあった。それは首相候補だけではなく、選挙綱領における三党の政策自体がアクセントの違いはあるにせよ大きく異なるものではないことにも現れていた。確かに、CDU/CSUは増税を否定し、予算の均衡回復を重視していたのに対して、SPDと緑の党は必要な財源を確保するための増税の必要性を否定していなかった。また、難民政策においては、CDU/CSUはSPDや緑の党に比べて規制を強化する方向での主張を展開していた。さらに、気候保護政策においてもCDU/CSUが排出権取引等市場メカニズムを利用した政策を重視していたのに対して、SPDや緑の党は二酸化炭素の価格設定等の規制的な政策を主張していた。しかし、それらは政策の根幹に関わるというよりも、似たような政策目標をどのような方法とペースで実現するかというレベルにとどまっていた。

このため、選挙戦は全般に低調であり、ポリトバロメーターの8月末時点の調査では、各党の支持率はCDU/CSUとSPDがともに22%、緑の党のそれが20%となっており、選挙の結果とその後どのような連立が形成されるのかが予測不能な状況となっていた⁽³⁶⁾。

このような状況の下で、CDU/CSU幹部の間からは党の選挙戦に対する批判の声が公然とあがり始めた。それは首相候補であるラシェットに対する間接的な批判でもあった。ギュンターは8月上旬に新聞のインタビューにおいて「はっきりと言うならば、われわれは自らの目標に沿った状態にない」と発言し、CDU/CSUは連邦議会選挙が非常に大きな意味を持っているという意識を未だ有権者に伝えることに成功していないと指摘した。彼は首相候補決定の際にラシェットを支持しており、それだけに彼の発言は特に重要な意味を持っていた。メルツは8月半ばにもっと激しい選挙戦を行うよう要求し、「選挙戦はまず戦うことであるが、われわれはおそらく近年それを過小評価してきた」と主張した。さらに、ゼーダーはメルツの発言と同時期にテレビのインタビューにおいて、世論調査におけるラシェットとCDU/CSUの支持率が低いことを理由に首相候補を交代することがなお可能かとの質問に対して、「数か月前であれば、私が首相候補になる可能性があった」とする一方、「今や決定は下されたのであり、今さら何を言っても役に立たない」と答えた。彼の発言は、ラシェットに対する不満と、この時点でも自らが首相候補としてふ

さわしいと考えていることを示唆するものであった⁽³⁷⁾。

これらの発言を受けて、ラシェットも「先鋭な選挙戦」を行うことを強調したが、この時点になっても選挙キャンペーンの先頭に立つ力強い人物であるというイメージを確立できていなかった。ポリトバロメーターの「首相として最も望ましい人物は誰か」に関する調査では、6月時点ではラシェットをあげた回答者が34%、ショルツをあげた回答者が26%、ベアボックをあげた回答者が24%であったのに対して、8月末の調査では、ショルツ49%、ラシェット17%、ベアボック16%となり、ショルツがラシェットを完全に逆転した。さらに、この時点で3人の首相候補が「首相として適しているか」という質問に対して「はい」と答えた回答者の比率は、ショルツ65%、ラシェット25%、ベアボック22%となり、ショルツが明らかに優位に立つようになった⁽³⁸⁾。

(3) 選挙戦終盤におけるCDU/CSUの失速

このような状況を打開するため、連邦議会選挙まで1か月となった8月末以降、CDU/CSUはSPDが連邦議会選挙後の左翼党との連立の可能性について曖昧な態度をとっていることを理由に、SPDが左翼党と連立を形成して左派政権を樹立する恐れがあることを強調する選挙キャンペーンを展開し始めた。8月末、ゼーダーはテレビのインタビューにおいて、連邦議会選挙後にSPD、左翼党、緑の党による左派連立政権が樹立されれば、大規模な増税、社会の不安定化、NATOからの脱退等、非常に広範な結果がもたらされ、ドイツに損失を与えるであろうと主張した。

8月29日に開催された3人の首相候補による1回目のテレビ討論会でも、ラシェットはショルツに対して左翼党との連立の可能性を明確に否定するよう要求した。これに対して、ショルツは外交政策に関するSPDと左翼党の立場の違いにコメントすることによって、そのような連立の可能性がないことを示唆したが、明確に否定することは避けた。彼はその理由として、「一つの連立を否定すれば、次の連立に対する質問がそれに続けて行われ、そして、いつの間にかもはや国益についてではなく、各党の策略について議論することになる」ことをあげた。ショルツが明確な態度を示さなかった実際の理由は、SPD左派に対する配慮や選挙後の連立に関する行動の余地をできる限り広げておくことにあったが、ラシェットはその後この点に関してショルツを繰り返し批判し、態度を明確にするよう要求した⁽³⁹⁾。

CDU/CSUが「左派政権によってドイツが没落する」とする1990年代の「赤いソックス・キャンペーン」を思い出させるような選挙戦を行った背景には、8月末以降世論調査におけるCDU/CSUの支持率がSPDのそれを明確に下回るようになったことに対する強い焦りがあった。前述したように、ポリトバロメーターの調査結果によれば、CDU/CSUの支持率は8月末に22%にまで低下し、その後連邦議会選挙に至るまでこの水準で推移した。これに対して、SPDの支持率は2021年4月には14%にまで低下していたが、その後上昇に転じ、8月末にCDU/CSUと並んだ後、

さらに25%前後へと上昇してCDU/CSUを上回るようになった。アレンスバッハ、フォルザ等、他の主要調査機関のアンケート結果もこれと同様の傾向を示した。しかし、左派政権樹立の可能性を強調することによっても、CDU/CSUがこのような状況を逆転させることはできなかった。

このようなCDU/CSUの支持率低迷には、前述したように、首相候補であるラシェットの支持率が低いことも大きく影響していた。8月末の首相候補による1回目のテレビ討論会直後にRTL/n-tv テレビとフォルザが行った「どの候補者が最もよかったか」に関するアンケートでも、ショルツをあげた回答者が36%、バアボックをあげた回答者が30%であったのに対して、ラシェットが最もよかったとした回答者は25%にとどまった⁽⁴⁰⁾。

首相候補に対する支持が低いという状況に対応するべきであるというCDU/CSU内からの要求の高まりに対して、ラシェットは長い躊躇の末に8月末から9月はじめにかけて選挙戦のための「未来チーム」を編成することを発表した。この「チーム」には、すでにラシェットが首相候補となった直後に協力を要請していたメルツを筆頭に、シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン州教育相カリン・プリーン、連邦政府デジタル化問題担当国務相ドロテー・ベール(CSU)、CDU/CSU院内副総務アンドレアス・ユング等8名が加わっており、選挙戦において各政策分野のキャンペーンを担当することになっていた。ただし、それはラシェット政権が樹立された場合の閣僚候補とは別であるとされた。このような「チーム」の編成はCDU/CSU内で早くから要求されており、前述したように、ラシェットはすでに首相候補決定後にメルツに対して協力を要請していた。しかし、他方で彼は「チーム」の中に自分よりも優れた人物が含まれ、首相候補だけでは十分な指導力がないという印象を与えてしまうことを懸念して、このようなやり方を拒否するという矛盾した態度も示していた。しかし、世論調査の結果がますます悪くなるなかで、ラシェットは最終的に党内からの圧力に耐えられなくなった。ただし、このような消極的で矛盾した理由に基づくものであったことから、メンバーの選出は戦略的に綿密に調整された計画に沿ったものとは言えず、メンバーの発表も2度に分けられた。また、知名度の高い人物はメルツとベールだけであり、発表前日に任命を伝えられた者もいる等、選挙戦に大きなインパクトを与えるとは言い難いものとなった⁽⁴¹⁾。

政策論争の面では、CDU/CSUは連邦議会選挙まで2週間を切った9月13日に、政権を獲得した場合に実施する「即時計画」を発表した。この計画は何よりも家族と低所得者の負担緩和を中心としたものであり、労働者一括経費控除額の引き上げ、社会保険料免除の対象となるいわゆるミニジョブの所得上限額の引き上げ、児童手当額の引き上げ、住宅手当の引き上げ、自己利用不動産取得の際の税負担の緩和、介護ホーム入所の場合の自己負担上限額の引き下げ、遠距離通勤費控除額の引き上げ、増税に対する反対等が含まれていた。しかし、これらの計画の多くはすでにCDU/CSUの選挙綱領でも詳細に規定されているものである一方、個々の計画の財源をどのようにして調達するかについては明らかにされないままになっていた。さらに、ラシェットはCDU/CSUが政権を獲得した場合には、その後をドイツにとっての「近代化の10年」にすると主張し、

カーボン・ニュートラルの実現、デジタル化の推進、連邦軍改革や NATO との関係強化等を訴えた。しかし、それらの主張も具体性に欠けていた。前述したように、ラシェットはメルケルに近く、彼女の路線を継承する姿勢をとってきたことから、メルケル時代と対照的で刷新の雰囲気をもたらすような政策を掲げることができなかった。さらに、そもそも 2021 年連邦議会選挙に際しては、AfD や左翼党を除いた諸政党の間に政策面での大きな対立をもたらす中心的な争点がなく、その点でも選挙戦は低調であった。そのため、各党の首相候補や筆頭候補の果たす役割はますます大きくなっていったが、ラシェットに対する評価はさらに低下し、フォルザとホーエンハイム大学が9月上旬に行った2回目の調査では、ラシェットが「問題を認識している」とした回答者は6%、「行動力がある」とした回答者は8%にまで落ち込んだ⁽⁴²⁾。

連邦議会選挙直前になると、CDU/CSU が敗北する可能性が高いと見られるようになったことから、党内では敗北した場合の責任に関する発言や、選挙後を見越した発言が相次ぐようになった。選挙の1週間前には、ショイブレはこのような状況になっている原因が「CDU 党首を辞任するが首相は続けるとしたメルケルの決断」にあるとの見方を示し、CDU 党首職と首相職が一人の手に握られていないという状態が3年近く続いていることによって、選挙での「現職ボーナス」が得られなくなっていると発言した。また、ブーフイエは選挙において第一党となった政党が首相を擁立する「道徳的権利」を持っているわけではないと述べて、CDU/CSU が SPD を下回って第二党となった場合でも、政権樹立を試みることはできると主張した。

これに対して、ドブリントはブーフイエの見方を否定し、「私には第二党となった CDU/CSU の下での政権樹立を考える想像力はない」と述べて、CDU/CSU が第一党になることが政権樹立の前提条件であることを強調した。ゼーダーも「CDU/CSU が SPD を上回った場合にのみ、最終的に政権を獲得するチャンスがある」と発言して、CDU/CSU が SPD に対して勝利することが首相を擁立するための前提条件であるとする考え方を示した。さらに、ゼーダーはショイブレの発言も暗に批判し、「メルケルはどの地位においても圧倒的に人気の高い政治家であり、従って、彼女の名声は CDU/CSU とラシェットにとって常に損失ではなく利益をもたらしている」と指摘した。ゼーダーがこのような発言をしたことは、CSU 内では、CDU の重鎮であり強い影響力を持つショイブレがラシェットを強く支持していなければ、ゼーダーが首相候補になることが可能であったと考えられていたことが背景となっていた⁽⁴³⁾。

第4章 2021年連邦議会選挙における敗北とメルツの党首選出

(1) 連邦議会選挙における CDU/CSU の敗北と選挙後の党内の混乱

以上のように、CDU/CSU が最後まで結束を取り戻せず、支持率が低迷したままのなかで 2021 年 9 月 26 日に実施された連邦議会選挙において、同党は予想通り大敗し、SPD に第一党の座を奪われた。SPD の得票率も 25.7 %にとどまり、必ずしも大きな勝利といえるものではなかったが、

同党にとって戦後最低となった2017年選挙の20.5%という得票率と比較すれば5.2ポイントの上昇であり、党勢の衰退に歯止めをかけることに成功した。これに対して、CDU/CSUの得票率は党の歴史上2番目に低かった前回選挙の32.9%をさらに大きく下回る24.1%へと低下した。CDU/CSUの得票率が20%台にまで低下したのは結党後初めてのことであった。

野党側では、2021年5月時点では一時CDU/CSUを上回って最も高い支持率を獲得していた緑の党は、連邦議会選挙が近づくに従って支持率を低下させ、連邦議会選挙における得票率は14.8%となって第三党にとどまった。2017年選挙と比べた緑の党の得票率上昇は5.9ポイントであり、SPDの5.2ポイントを上回って主要政党中最も勝利を収めたという見方もできた。しかし、選挙前には一時第一党になる可能性もとりざたされていたことから、緑の党はこの結果を敗北と受けとった。FDPは2013年連邦議会選挙で議席を失ったが、2017年選挙では10.7%を獲得して議席を回復し、2021年選挙では得票率をさらにわずかに上昇させて11.5%を獲得した。これに対して、前回選挙では12.6%の得票率で第三党の地位を獲得したAfDは、難民問題のような争点が多かったことからFDPをわずかに下回る10.3%の得票率に終わり、左翼党も得票率を前回の9.8%から4.9%へと大幅に低下させた。左翼党の得票率は議席獲得の条件である5%阻止条項を下回るものであり、2013年のFDPと同じく議席を失う可能性があったが、小選挙区候補が3人当選したことから、選挙法に従って39議席を獲得することが可能となった⁽⁴⁴⁾。

このような選挙結果から、CDU/CSUが警告していたSPDと緑の党あるいは両党に左翼党を加えた左派連立は連邦議会で過半数議席を得られず、実現不可能となった。他方、CDU/CSUとFDPによる中道右派連立も不可能となったため、実現可能な連立形態は、選挙前と同様のCDU/CSUとSPDによる大連立、CDU/CSU、FDP、緑の党による「ジャマイカ連立」、SPD、緑の党、FDPによる「信号連立」の3つのパターンとなった。しかし、SPDは選挙前から大連立の継続を否定しており、2017年当時のように選挙前の表明を覆して選挙後に再び大連立を形成することは有権者や党员からもはや支持が得られず、不可能であった。そのため、実際にはジャマイカ連立あるいは信号連立のいずれかが形成される見込みとなった。その場合、いずれにせよ緑の党とFDPが連立に加わることになるため、首相を擁立すると予想されるSPDあるいはCDU/CSUではなく、二つの小政党がキャスティング・ボートを握るという状況になった。小政党が連立形成において大きな役割を果たすという状況は、1970年代までのCDU/CSU、SPD、FDPの三党制時代にも見られたが、2021年の場合には、政策的距離が大きい緑の党とFDPの二党が合意した場合にのみ連立を形成することができるという意味で、今までにない状態となった。確かに、このような状況はすでに2017年連邦議会選挙後にも見られたが、当時は緑の党とFDPが合意できない場合でも大連立という選択肢が残っていた点が異なっていた。事実、FDP党首クリスティアン・リントナーは選挙直後に「まずFDPと緑の党が互いに合意すべきである」と発言していた。

他方で、SPDとCDU/CSUは選挙直後にともに自らを首班とする連立を形成する権利を主張した。SPDの首相候補であるオラフ・ショルツは選挙直後のインタビューでSPD、緑の党、FDPが

得票率を上昇させたのに対して CDU/CSU はそれを低下させたことを指摘し、「有権者はわれわれに緑の党及び FDP との連立を形成することを明確に負託している」と発言して、信号連立の形成を目指すことを明確にした。また、SPD 党首ヴァルター＝ボーヤンスも選挙で第一党となった SPD が首相を擁立することが当然であるとし、第二党となった CDU/CSU が政権を要求する「道徳的権利」は存在しないと強調した⁽⁴⁵⁾。

これに対して、ラシェットは選挙結果が CDU/CSU にとって望ましいものにはならなかったことを認める一方で、「過去においても常に第一党が首相を擁立してきたわけではない」と指摘し、統治の負託を受けるためには第一党になることが不可欠ではなく、連邦議会の首相指名選挙で多数派からの支持を得た者が首相になるという考えを強調した。そのうえで、彼は「様々な対立を架橋し、社会的な広がりを反映する」ジャマイカ連立を目指すとして、CDU/CSU 首班の連立形成をあきらめない姿勢を見せた。

ラシェットのこのような態度に対して、CSU 党首ゼーダーも投票日の夜にはジャマイカ連立の形成を目指す発言をしていたが、翌日には CSU 総務会において「残念な選挙結果」について語り、「この結果を美化せず、何事もなかったように通常業務に戻ってはならず」「どんな代償を払ってもジャマイカ連立を目指すつもりはない」と述べて、消極的な態度へと転換し始めた。さらに、28 日になると、ゼーダーは「現在、首相になる最上のチャンスを与えられているのがオラフ・ショルツであることは明確である」と発言し、「CDU/CSU は重大な敗北を被り、第二党になったことから、モラルの面で統治の負託を正当化することはできない」と述べて、野党路線へと完全に転換した。

ゼーダーが SPD の主張を取り込んだとも言える発言をした背景には、彼や CSU が CDU/CSU の首相候補決定以降もその結果に不満を持っており、事あるごとにそれを示唆してきたこと、万一信号連立の形成が失敗に終わった場合には、ラシェットに代わってゼーダーがジャマイカ連立形成の中心となり、首相になるという野心を持っていること等があると指摘されたが、いずれにせよ、ゼーダーのこのような態度は、ラシェットの権威をさらに掘り崩すとともに、CDU と CSU の間の不協和音を再度露呈するものであった。

しかし、CSU だけではなく、CDU 内でもラシェットの主張は全面的に支持されたわけではなかった。投票日翌日の 27 日には CDU 幹部会及び総務会が開催されたが、ニーダーザクセン州支部長ベルント・アルトゥスマンは「CDU/CSU は勝利できなかっただけではなく、明確に敗北した」と指摘し、「CDU は藁にしがみついているという印象を与えてはならない」と述べて、選挙で大敗したにも拘わらず、政権獲得を目指すべきではないという考え方を明確にした。クレッチュマーも CDU/CSU に政権を担当する権利があるという考え方を明確に否定した。さらに、ラシェットはこの日の総務会において、「信号連立がうまくいかなければ、われわれは他の連立を形成する用意がある」と発言したが、この発言は SPD による連立形成が失敗した場合にのみ CDU/CSU が積極的になるかのような印象を与えるものであった。このため、彼はその直後の記者会見でそのよ

うな印象を否定し、緑の党及びFDPと協議することについて、CDU執行部の支持を得ていると強調した。しかし、確固たる姿勢に欠けると受けとられる彼のこのような発言は、党内からますます不信を招いた⁽⁴⁶⁾。

選挙後のCDU内でのラシェットの立場をさらに弱体化させたのは、CDU/CSU連邦議会議員団の院内総務選挙であった。通常、院内総務は選挙直後にCDU側から1年の任期で選出され、その後立法期の残り3年間を任期として再選される慣例となっていた。しかし、2021年の場合には選挙後にどのような連立が形成されるかが明確ではなく、CDU/CSUが野党になった場合には、院内総務は事実上野党指導者として最も重要な役割を果たすことになるため、ライシェットがこの地位に就くか否かが問題となった。連邦議会選挙翌日の時点では、現院内総務であるラフル・ブリンクハウスは通常の選出方法を主張し、自らが院内総務を続ける態度を見せたが、ラシェットは院内総務の最初の任期をどのようにするかについて明確にしなかった。他方で、ラシェットは当初首相になることをあきらめないとしていたことから、自らが院内総務に就任するつもりはないとも発言した。

CDU/CSU院内総務選挙は9月28日に実施されたが、CDU/CSUが野党になり、閣僚ポストを得ることができなくなる可能性が高まったことから、ラシェットに加えてメルツ、シュパーン、レットゲン等も院内総務選挙に立候補し、複数の候補による対決的な選挙となる恐れがあった。ラシェットの指導力に対する不信をさらに高めることになるそのような混乱を回避するために、CDU/CSU指導部は結局問題を先送りし、さしあたって任期を2022年4月までに限定して院内総務を選出することで妥協が成立した。こうして、院内総務選挙にはブリンクハウスのみが立候補することとなり、196名の議員中164名の票（得票率83.7%）を獲得して院内総務に再選された。

しかし、院内総務選挙をめぐるこのような経緯は、ラシェットが院内総務になるチャンスを逃したことを意味しており、さらに、かりにラシェットが院内総務選挙に立候補していたとしても、彼が議員団から支持されない可能性があることを示唆するものであった。この点で、彼はもはやCDUのリーダーとしての権威を事実上失いつつあった。院内総務選挙後、ラシェットはこの妥協を「候補者となり得る他の人々が妥協を受け入れたことは、われわれが今必要としている協力の強い証である」と釈明したが、CDUハンブルク市支部長クリストフ・プロスは党の人事面での刷新と若返りを要求し、「有権者は最終的に首相に適した人物を選ぼうとしており、ラシェットはそのような人物ではなかった」と述べて、公然と彼を批判した⁽⁴⁷⁾。

(2) ジャマイカ連立事前協議の早期挫折とラシェットの辞任

連邦議会選挙直後のCDU/CSU内のこのような混乱は、もともと高くなかったジャマイカ連立、特に緑の党との連立の可能性をさらに低下させた。緑の党副党首リカルダ・ラングはCDU/CSUのこのような状況を見て、現状のCDU/CSUには一体となって連立交渉をする能力がなく、緑の党としてはまずSPD及びFDPと連立を組むことを検討しなければならないとの見方を示し

た。この点で、2021年連邦議会選挙後の状況は、同じくジャマイカ連立が形成される可能性のあった2017年とは大きく異なっていた。CDU/CSUは2015～2016年にかけても難民問題をめぐって内部で激しく対立したが、2017年に入ると連邦議会選挙を前にして結束を回復し、選挙においてSPDに明確な差をつけ、第一党の立場からジャマイカ連立を形成するための事前交渉に臨むことができた。当時、ジャマイカ連立の形成が失敗に終わったのは、むしろ議席を回復したFDPが強硬な立場を崩さなかったことによるものであった⁽⁴⁸⁾。

これに対して、2021年連邦議会選挙後には、緑の党とFDPはまず両党間で政策面に関して合意を図るための交渉を開始する一方、10月3日には相次いでSPDと連立に関する最初の事前協議を行った。CDU/CSUも10月3日にFDPと、5日に緑の党と協議を行ったが、この協議が行われる前から、CDU/CSU内ではジャマイカ連立とラシェットに対する支持はますます低下していった。

シュパーンは9月30日のテレビのインタビューにおいて、緑の党及びFDPとの協議を支持する一方で、「最も可能性の高い連立オプションは信号連立である」と発言して、この協議に大きな期待をかけていないことを示唆した。また、シュパーンは、ラシェットがCDU/CSUの選挙結果に対してどのような責任を負っていると思うかと質問されたのに対して、ラシェットを積極的には擁護しなかった。さらに、緑の党及びFDPとの事前協議が成功しない場合でもラシェットはCDU党首の座にとどまれるかという質問に対しても、シュパーンは肯定も否定もせず、「現時点では」その問題は提起されていないと答えた。

これに続いて、メルツは通信社のインタビューにおいて、CDU/CSUがそもそも連立交渉に近づいているかどうか、あるいは緑の党及びFDPとの事前協議を続けることができるかに対して懐疑的な態度をとり、SPD、緑の党、FDPの間ではすでに非常に緊密な協議が行われている兆候があることを理由に、「現在、どちらかと言えば信号連立の方向に向かっている」との見方を示した。さらに、メルツは「選挙戦の準備があまりにも遅きに失し、スローガン、争点、メディア戦略に欠けていた」と述べてCDU/CSUの連邦議会選挙戦を批判したのに加えて、「われわれは支持率が非常に低い首相候補を有していた」と発言し、ラシェットに選挙での敗北の責任の一端があると示唆した⁽⁴⁹⁾。

CDU内で経済政策重視派に属し、以前からラシェットに対して批判的であったリンネマンも信号連立が形成される可能性が非常に高いとする見方を示す一方、ジャマイカ連立が形成されない場合には党員投票によって新しいCDU党首を選出するよう要求した。リンネマンの発言は明らかにメルツを念頭においたものであった。他方、かねてから世代交代の必要性を訴えてきたシュパーンも、遅くとも2022年1月には党の刷新のための特別党大会を開催することを要求するようになった。

こうして、ジャマイカ連立の形成を目指して緑の党やFDPとの協議を行うべきか否かをめぐる議論は、次第にCDU内の権力闘争へと変化していった。CDUのこのような状況を見て、FDP党首リントナーもCDU/CSUとの協議後に「CDU/CSUは実際に政府を率いるつもりがあるのかを

明確にしなければならない」と発言した⁽⁵⁰⁾。

CDU内外からのこのような批判に応える形で、ラシェットは10月5日の緑の党との事前協議後に行った記者会見において、ジャマイカ連立が社会を幅広く代表できると繰り返す一方で、それが実現するかどうかの判断は「選挙に勝ったわけではない」CDU/CSUには委ねられていないとし、「そのようになるかどうかはFDPと緑の党次第である」と述べて、ジャマイカ連立形成に向けてCDU/CSUがイニシアティブをとることを事実上放棄する発言をした。この直後にはSPD、緑の党、FDPが信号連立形成に向けてさらに事前協議を行うことに合意した一方、CDU/CSUとの協議日程はもはや組まれなかった。こうして、信号連立へ向けての最終的な舵が切られたが、リントナーはそのような方向に向かう理由として、政策内容に関する一致というよりもCDU/CSUの統治意思の欠如をあげた。

その後、ラシェットは10月7日のCDU/CSU議員団会議において、党の体制立て直しのために特別党大会を招集し、そこで「人事面の立て直し」についても決定する意向を表明し、その際には対決的な投票を行わずに合意を基礎として新しい党指導部を選出する方針を示した。

ラシェットのこの発言は、事実上CDU党首を辞任することを表明したものと解釈された。アルトスマンはラシェットの発言を「新しい党首への移行プロセスをリードし、その後辞任することを示唆した」重要なシグナルであるとの見方を示した。ザールラント州首相トビアス・ハンスもラシェットの発言を党首辞任の表明であるとし、それは「われわれがさらに苦痛に満ちた党内議論を行わずに済むようにするために、正しく重要な行動であった」と評価した⁽⁵¹⁾。

(3) ラシェットの後継党首をめぐる議論と党員投票方式の採用

こうして連邦議会選挙から2週間足らずでラシェットのCDU党首辞任は事実上決定事項となったが、このことはCDU内を沈静化させ、CSUとの関係を改善させるというよりも、党内をあらたに分裂させる危険をもたらした。ラシェットが辞任した場合、彼の後継党首を選出する必要があったが、党大会におけるそれまでの2回の党首選では3人の候補者が立候補した末に決選投票の結果は僅差となり、党首選出が党の結束を回復することにつながらなかった。従って、ラシェットの後継党首を選出する際にも、複数の候補者が争い、最終的にそのうち一人が僅差で勝利を収めるというのが最悪のシナリオと考えられた。しかし、この時点では、すでに党首選立候補の経験があるメルツ（65歳）、シュパーン（41歳）、レットゲン（56歳）の3人に加えて、プリנקハウス（53歳）とリンネマン（44歳）が党首選に立候補する可能性があると見られていた。

このうち、メルツは過去2回の党首選において際どい差で敗れていたが、依然としてメルケルの路線に対して批判的な立場をとる党内保守派や経済政策重視派から支持される有力候補と見なされていた。ただし、彼は次期連邦議会選挙後には70歳代となるため、党の若返りという点からすれば問題があると考えられた。シュパーンは若手有力政治家の代表であると見なされており、連邦保健相としてコロナ対策等でも一定の評価を得ていたが、同じく若手の代表であるリンネマン

とは互いに評価し合っており、党首選となれば、対決的に立候補するというよりも、むしろどちらかが党首候補となって「チーム」として立候補することが考えられた。レットゲンはメルツほど高齢ではなく、連邦閣僚やノルトライン・ヴェストファーレン州支部長の経験もあったが、前述したように2012年の同州議会選挙の際の選挙戦指導に失敗して以降、支部内で大きな支持を得られなくなっていた。ブリンクハウスは2018年にメルケルの側近であったフォルカー・カウダーを追い落として院内総務になって以降、メルケル支持派からはあまり評価されていなかった一方で、議員団が期待していた強いリーダーシップを発揮しているとも見られていなかった。

このように次期CDU党首選においては複数の候補者が立候補する可能性があったが、彼らは前回党首選と同様に全員ノルトライン・ヴェストファーレン州支部に所属しているという点で地域的な偏りがあり、さらにすべてカトリック教徒の男性であった。前者の点に関しては、メルケル首相が退陣したことによって、党指導部に特に旧東ドイツ地域を代表する著名な政治家がいなくなることが懸念された。また、後者の点に関しては、党首選によってCDUは保守的な男性の政党であるというイメージをもたすことが懸念された。このため、党内の一部からは、SPDや緑の党と同様に党首を男女2人制にすべきであるという声もあがった。しかし、メルケルに加えてウルズラ・フォン・デア・ライエン元国防相とクランプ＝カレンパウアー元党首がすでに連邦政治から離れており、ユリア・クレックナー副党首も政界から引退する予定であったため、党首選に立候補できるような有望な女性政治家が欠けているという問題があった。

さらに、クランプ＝カレンパウアーが党首に選出された2018年の党首選以降、メルツが自らを「党内エスタブリッシュメント」に対して一般党員の声を代表する候補者であるとアピールしたこともあり、青年同盟等を中心として、党員投票等の形で一般党員の党首選への参加を拡大すべきであるという要求が党内で次第に高まっていた。CDUはSPDのような綱領的理念を掲げる党員組織を中心とした政党ではなかったことから、従来一般党員は党指導部による実質的決定に大きな影響を及ぼさず、党大会で党指導部の方針を承認するという形での「代表制民主主義」的な党運営が行われてきた。実際、党員投票が党指導部内での決定よりもよい結果をもたらし、党の結束を回復できるという保証もなかった。2004年にはバーデン・ヴュルテンベルク州で当時州首相であったエルビン・トイフェルの後継者選出にあたってアネッテ・シャバンとギュンター・エッティンガーを候補者とした党員投票が行われた結果、州支部内に深刻な亀裂が発生し、その後それを修復することができないまま、2011年州議会選挙においてCDUが緑の党に州首相の座を奪われることにつながったという前例もあった⁽⁵²⁾。

しかし、3年間に3人の党首が続けて辞任するという事態を受けて、CDU内では次期党首選出にあたって一般党員をもっと参加させるべきであるという声が無視できないほどに高まっていた。ラシェットの表明を受けて、10月11日にはCDU幹部会及び総務会が開催され、党の立て直しをどのように行うかが議論された結果、公式の手续としては2022年はじめを目途に特別党大会を開催し、そこで本来は2023年1月までの任期となっていた党首を含む総務会全体を選出し直す

ことが決議された。しかし、そこに至るプロセスにおいて党員投票等によって党首選出に一般党員を参加させるか否かについては、10月30日に326人のメンバーから成る地域支部長会議を開催し、そこで再度議論されることになった。ただし、CDUの地域組織の代表によって構成されるこの会議を開催すれば、少なくとも党員投票の実施に反対する意見が多数を占めることは予想されなかった。11日にはCDU連邦議会議員団と各州議会議員団の院内総務たちが会議を開催したが、そこでも党首選出にあたって一般党員をもっと参加させることが合意された。

次期党首選出手続に関するこのような流れは、ラシェットをはじめとした党首脳が指導力を大きく低下させていることを示していた。前述したように、党首選が行われる場合にはメルツをはじめとした数名の党幹部が立候補すると予想されていたが、彼らは少なくともこの時点では明確な立候補の意思を表明しておらず、さらに、本来であれば有力な党首候補であるはずの6名の州首相（ブーフィエ、ギュンター、ハンス、ハゼロフ、クレッチュマー、ヴェスト）たちも立候補の意欲を示していなかった。

このような状況の下で10月30日に開催された地域支部長会議では、2022年1月下旬にハノーファーで特別党大会を開催して新しい党首を選出する前に党員投票を行うことが決定され、その直後に開催されたCDU幹部会及び総務会でも党員投票を行うことが全会一致で決議された。具体的には、11月のはじめの立候補開始に続いて12月のはじめまで立候補者の選挙活動を行った後、オンライン投票あるいは郵便投票による党員投票が行われることになった。また、立候補者が3人以上となり、誰も過半数票を得られなかった場合には、上位2人による決選投票が行われることになった。

ただし、党首脳はCDUの伝統に反してSPDや緑の党のような党首選出方式を採用することにも必ずしも積極的ではなかった。ラシェットはこの決定直後に「CDUは基本的には代表制民主主義が政治的決定を下すための最上の手段であると考えている」と発言し、党首選出のための党員投票を常設的な制度にするべきではなく、「1回限りの措置として、党の立て直しをどのように行うべきかについて党員投票を行う」のであると強調した。また、彼はこの党員投票には法的拘束力がなく、立候補者が自発的にその結果を受け入れることによって、党大会では1名の候補者だけが投票対象になるべきであるとする考え方を示した⁽⁵³⁾。

(4) CDU党首選とメルツの党首・院内総務就任

このように党員投票の位置づけが必ずしも明確ではないなかで、党首選への立候補期間は11月6日から開始されたが、シュバーンが立候補しないことを明らかにした後、11日になって最初に立候補を表明したのは意外にもヘルゲ・ブラウン首相府長官であった。前述したように、過去2回の党首選ではいずれもメルケルの路線を基本的に継承する立場をとるクランプ＝カレンバウアーとラシェットに対して路線の転換を要求する党内グループがメルツを対抗候補として擁立し、結果的に彼が僅差で敗れていた。メルツは2021年の党首選にも立候補する可能性が高いと考えら

れており、メルケル支持派は今回もそれを阻止することを望んでいた。しかし、過去2回とは異なっており、そのための有力候補を見出すことは必ずしも容易ではなく、最終的にはメルケルの側近であったブラウンが立候補することになった。彼はヘッセン州支部に所属し、同州においてメルケル路線を基本的に支持する州首相ブーフイエの後継者としても期待されており、ブーフイエもブラウンの立候補を支持していると推測された。

しかし、ブラウンは2004年から地域支部長を務めてきたギーセン選挙区において2021年連邦議会選挙で落選しており、ヘッセン州支部も必ずしもメルケル路線の継承支持で結束しているわけではなかった。ギーセン地域支部はブラウンを党首候補として推薦したが、11月12日に開催されたヘッセン州支部総務会ではブラウンの立候補に対して賛否両論の意見が出された。ブーフイエはブラウンを支持する総務会決議の採択を望んでいたが、結局総務会はそのような決議を採択しなかった。

ブラウンとほぼ同時にレットゲンも2回目となる党首選への立候補を表明した。彼はメルケル路線を変更することを目指すと考えられていたメルツとの対照性を強調するために、自らが「中道国民政党」の中で最も中道に位置することを強調し、党の「右傾化」に対して警告した。しかし、他方でレットゲンはメルケル路線を継承するという立場をとったわけでもなく、CDUは保守的な人々の拠り所でもあり続けねばならないとし、一定の方向性を固定化しようとする人物を党首に選出するべきではないと主張した。

彼のこのような態度は政策内容というよりも人事に関する表明に現れていた。彼は党首選への立候補と同時に、自らが党首になった場合の幹事長候補としてハンブルク出身の若手連邦議会議員フランシスカ・ホッパーマン（39歳）の名を挙げた。彼女はハンブルクで司法機関に勤務し、地方政治家として活動した後、2021年連邦議会選挙で初当選したばかりであった。レットゲンは若手の女性で「公共精神と愛国心」を重視する人物としてホッパーマンを幹事長候補にすることによって、年齢、性別、政策内容面での「幅広さと多様性」を強調しようとした。さらに、レットゲンは党首となった場合にはその職に専念することを表明し、プリンハウスを院内総務に留任させて、野党となったCDUにとって最も重要な党首、院内総務、幹事長の3つの役職をそれぞれ別の人物が分担するとした⁽⁵⁴⁾。

ブラウンとレットゲンに続いて11月15日にはメルツも党首選への3回目の立候補を表明した。メルツは他の2人の候補者に対抗して党内から幅広い支持を得るために、自らが党首に選出された場合に「CDUにおいて右傾化や軸の移動が起こることはない」ことを強調するとともに、候補者の中で相対的に高齢であることを念頭において、党首選出は次期連邦議会選挙の首相候補の事前の決定ではないという立場をとった。ただし、彼は党首になった場合に首相候補や院内総務を兼務することを否定したわけでもなかった。

メルツもレットゲン同様に、自らに対する批判的な見方をかわすために人事の面で幅広さを示そうとした。彼は自らが党首になった場合には東ベルリン生まれで元同市保健社会参事マリオ・

チャヤ（46歳）を幹事長に指名するとともに、党規約を改正して副幹事長を設け、バーデン・ヴュルテンベルク州選出の（2021年連邦議会選挙で初当選した）若手連邦議会議員クリスティーナ・シュトゥンプ（34歳）をその職に任命する予定であることを明らかにした。ノルトライン・ヴェストファーレン州出身のメルツに加えてチャヤとシュトゥンプがCDUの新しいリーダーになれば、地域的には東部も含めて広い地域を代表することになり、若手や女性の起用という点でもアピールすることができた。さらに、メルツはクレッチュマー、リンネマン、プリーンに加えてニーダーザクセン州選出連邦議会議員シルビア・ブレアーが副党首に選出あるいは再選されることを期待すると表明し、地域、性別、年齢に加えて党内経済政策重視派と労働者派のバランスをとることも示唆した⁽⁵⁵⁾。

レットゲンとメルツが党内を幅広く代表する党指導部を編成する方針を強調したのと同様に、ブラウンも11月下旬にケルン選出の連邦議会議員でCDU総務会員でもあるゼラプ・ギュラーを幹事長候補として提案し、ザールラント州選出の連邦議会議員団院内副総務ナディア・シェーンに党活動の改革を委ねる方針を示した。ブラウンはこの2人に代表されるように「CDUにおいて女性が強力な役割を引き受けることを望んでいる」とする一方、CDUが指導部、政策内容、組織の点で根本的な刷新を必要としていることを強調した。ブラウンは、CDUが再び広範な支持を得て選挙に勝利するためには、党が社会の広範な層にとって魅力的にならねばならず、「地に足をつけ、市民に近い存在にならねばならない」と主張した⁽⁵⁶⁾。

3人の党首候補者を含む多くの党幹部は党首を選出するための党員投票を恒常的な制度にすることには消極的態度をとり、あくまでも例外的な措置にとどめるべきであると表明していた。ただし、レットゲンは、CDU/CSUの首相候補を決定するためには場合によっては党員投票を行うことも考えられるとし、特に2021年連邦議会選挙の際のようにCDUとCSUが首相候補について意見を異にした場合には、首相候補が幅広い正統性を得られるように、必要な場合には両党の党員投票によって首相候補を決定すべきであるとの考えを示した。

CDU党首を決定するためのオンラインと郵便投票による党員投票は12月4日から開始されたが、クランプ＝カレンバウアーやラシェットの場合とは異なって、レットゲンとブラウンはCDU内でメルツに対抗できるほどの地位や権威あるいは支持を有しておらず、メルツが党員投票において勝利する可能性は最初から非常に高いと考えられた。事実、12月17日にはツィーミアク幹事長が党員投票の結果を発表したが、それによれば、CDUの歴史上初めてとなったこの党員投票には党員約40万人のうち25万人（66%）が参加し、メルツが62.1%の絶対多数を獲得して第1位となった。それに対して、レットゲンの得票率は25.8%、ブラウンのそれは12.1%にとどまった。この結果を受けて、これまで党内で保守的な方向性を取り、経済政策重視派の代表と見なされてきたメルツは、「党の幅広い全体を代表する」ことを強調するとともに、CDUが21世紀においても国民政党としての地位を維持するために全力で取り組むと表明した。

党員投票の結果を受けて、2022年1月にはCDU党大会が開催されたが、コロナ・ウイルスの感

染が再拡大したことから、当初対面で行われる予定であった党大会は遠隔での実施に切り替えられた。この党大会では1,001名の代議員による公式の党首選挙が実施されたが、党員投票においてメルツが明確な多数票を得たことから、彼が党大会でも圧倒的多数で党首に選出されることは明らかであった。実際、メルツは党大会での投票において94.6%の得票率で党首に選出された。また、党首選に続いて、メルツによってすでに幹事長候補として提案されていたチャヤも92.9%の得票率で幹事長に選出された⁽⁵⁷⁾。

この時点までには、メルツが党首に選出されるか否かよりも、彼が野党となったCDUにとって党首と並んで重要なCDU/CSU院内総務を兼任するかどうかが目されるようになっていた。前述したように、ブリンクハウスは2022年4月までの任期で院内総務に再選されており、メルツは党首選前には院内総務も兼務するつもりかどうかについて明言してなかった。しかし、実際には、メルツが党首に就任した後は院内総務も兼務する場合にのみ党首としても強い影響力を発揮できることは明らかであった。事実、メルケルが2000年にCDU党首に選出された際もCDUは野党の立場にあったことから、彼女は野党のリーダーとして将来首相の座を手に入れるためには院内総務を兼務することを必要不可欠と考え、当時院内総務であったメルツと激しい権力闘争を展開した末に彼を追い落とした。

ブリンクハウスは党首選直後に「議員団が望むのであれば、院内総務を続けるつもりである」と発言していたが、かつてのメルケルと同じ立場になったメルツが院内総務も兼務しようとすることは明らかであった。メルツが党首に就任すると同時に1ダース以上のCDU地域支部はメルツ宛に院内総務の兼務を支持する書簡を送っており、元々議員団内に強力な支持基盤を持たないブリンクハウスに対する圧力は急速に高まっていった。

こうして、CDU党首選から数日後にはブリンクハウスは自ら2月半ばに院内総務選挙を行うことを提案し、その際には再び立候補することを断念することを表明した。これを受けて、メルツは2月15日にCDU/CSU連邦議会議員団によって89.5%の得票率で院内総務に選出され、CDUとCDU/CSU連邦議会議員団の活動を一体的に指導することができる野党指導者としての地位を確立した⁽⁵⁸⁾。

第5章 CDU/CSUの首相候補問題の政治的意味

(1) CDU党首・首相職の分離とメルケルに対する高い評価

本稿において詳述したように、CDUにおいては、メルケルが18年近くにわたってCDU党首を務め、全般的に安定した支持を得たのと対照的に、彼女の後を継いだクランプ＝カレンバウアーは1年あまりで権力を失った。また、その後1年近くにわたる空白期間を経て新しい党首となったラシェットもやはり高い支持を得ることができないまま連邦議会選挙に敗北し、就任後1年で辞任に追い込まれた。

このようにメルケルの後継党首が短命となった原因の一つは、皮肉にも彼女の存在にあった。メルケル首相が2018年秋に党首辞任を表明したこと自体は、CDU/CSUにとって新しい党首となったクランプ＝カレンバウアーを早期に連邦議会で後継首相に選出し、彼女を現職首相として2021年連邦議会選挙に臨むことを可能にするものであった。しかし、メルケルがCDU党首を辞任する一方で首相職を連邦議会選挙まで続ける意向を示したことによって、クランプ＝カレンバウアーが早期に首相職も受け継いで選挙に向けて「現職ボーナス」を得ることは不可能となった。ただし、たとえメルケルがCDU党首に続いて首相を辞任していたとしても、SPDはクランプ＝カレンバウアーにそのような「現職ボーナス」を与えないために連邦議会での首相指名選挙において彼女を支持しない可能性があり、CDU/CSUも大連立の崩壊につながるそのようなリスクを冒そうとはしなかった。

このようにメルケルが首相の座にとどまったことは、クランプ＝カレンバウアーにとってはマイナスとなったが、CDU/CSUにとっては必ずしもそうではなかった。マルクス・クライン等が2021年連邦議会選挙に関する論文において指摘しているように、回答者が主要な政治家の活動実績を+5～-5で評価するポリトバロメーターのアンケート結果によれば、首相としてのメルケルの活動に対する評価の平均値はクランプ＝カレンバウアーがCDU党首に選出された後も+1.5前後で推移し、コロナ危機とともに2020年以降は+2.5前後へと上昇した後、2021年春にはコロナ対策への批判から一時低下する時期があったものの、概ね+2～+2.5のレベルで連邦議会選挙まで推移した。このメルケルに対する評価の推移は、2021年春まではCDU/CSUの支持率のそれとほぼ一致していた。CDU/CSUの支持率は2019年春から30%を下回るようになった後、コロナ危機が本格化した2020年春以降メルケルに対する評価と連動して35～40%へと大きく上昇した。これに対して、クランプ＝カレンバウアーに対する評価の値は党首就任直後には+1.5程度へと上昇したが、2019年春以降急速に低下していった。しかし、CDU/CSUの支持率はその影響をほとんど受けなかった。この点で、CDU/CSUに対する支持はメルケルの人気によって支えられていたと言える。

このような状況はラシェットに関しても同様であり、2020年2月末にラシェットがCDU党首選への立候補を表明した後、コロナ危機が本格化してもメルケルの場合とは異なって州首相である彼に対する評価は好転せず、逆に徐々に低下し、2021年1月に彼がCDU党首に選出された後も春にかけてむしろ低下していった。この点で、彼に対する評価の推移は2021年春まではCDU/CSUのそれと連動しておらず、同年3月頃からのCDU/CSUの支持率低下も政府のコロナ対策に対する批判の高まりによるところが大きかった。ただし、クランプ＝カレンバウアーの場合と異なっており、ラシェットが2021年4月にCDU/CSUの首相候補に指名された前後から、CDU/CSUの支持率はメルケルに対する評価と乖離し始め、むしろラシェットに対する評価との連動性が強まるようになった。ラシェットが2021年7月に洪水被害地域での対応に失敗した後、彼の評価とCDU/CSUの支持率がともに劇的に低下したことは、このような連動性を決定的に示すものであった。

このことは、有権者が連邦議会選挙において投票する政党を決定する際に、誰が首相になるかを重視しており、ラシェットがCDU/CSUの首相候補となって以降、有権者は退陣予定のメルケルではなくラシェットを念頭においてCDU/CSUを評価するようになったことを意味していた⁽⁵⁹⁾。

事実、2021年4月にフォルザが実施したアンケートの結果によれば、2017年連邦議会選挙においてCDU/CSUに投票した有権者の約半数が、誰を首相候補としているかによって投票する政党を決定したと回答していた。また、「首相を直接選挙することができるとすれば、誰に投票しますか」という質問に対する回答では、ラシェットに投票すると答えた回答者の比率が17%となってCDU/CSUの支持率27%を下回っており、ラシェットはCDU/CSU支持者さえ完全には動員できていなかった。さらに、2021年連邦議会選挙前に行われたライプニッツ社会科学研究所の長期選挙調査（GLES）において、CDU/CSU支持者のうちラシェットが首相に適しているとした回答者の比率が41%にとどまる（2013年と2017年の選挙の場合、この調査でのメルケルの支持率は97%と94%であった）一方、3人の首相候補のうち誰も適していないとした回答者の比率が50%に上っていたことも、ラシェットがCDU/CSU支持者の動員に失敗していたことを示していた⁽⁶⁰⁾。

これらのことは、緑の党への接近を強めたエネルギー政策、SPDとの妥協を強めた労働・社会保障政策、伝統的家族・婚姻像の転換等にくわえて、ユーロ危機や難民危機に対する対処をめぐってCDU内に深刻な対立が発生し、経済政策重視派や保守派からの圧力を受けてメルケルがCDU党首辞任に追い込まれた後も、依然として首相としてのメルケルの手腕に対しては有権者全体から一定の評価が得られており、CDU/CSUに対する支持はメルケルに対するそれによって支えられていたことを示している。

(2) 政党連合としてのCDU/CSU

このような状況は、CDU/CSUが一つの政党ではなく、バイエルン州のみで活動しているCSUとそれ以外の地域において活動しているCDUという二つの政党の連合体であることによって、さらに困難なものとなった。両党は連邦議会においては統一会派を形成しており、院内総務職は慣例的にCDUに委ねられているが、CDUがCSUに対して一方的に優位に立っているわけではなく、政策立案や人事に関しては合意に基づく運営が行われてきた。CSUはバイエルン州の利益を代表することを基本とし、その名称が示す通り労働・社会保障政策等に関しては積極的な方向性をとる一方、全体的にはCDUよりも保守的である。このため、2015年以降難民政策をめぐってCSUはメルケル政権と対立を繰り返してきた。他方で、CDUの現職首相が存在し、選挙での勝利が望める限りにおいて、CSUはその続投に反対しなかった。しかし、メルケルの退陣表明後の2021年連邦議会選挙の場合には、この原則はあてはまらなかった。このような場合の首相候補の選出に関して、CSUは基本的にCDU側が「最初の提案権」を有していることを認めているが、常にCDU側の提案を無条件に受け入れてきたわけではない。CSU側が異議を唱えた場合には、両

党の首脳間の協議やCDU/CSU 連邦議会議員団による投票によってCDU/CSUとしての首相候補が指名されてきた。コールとシュトラウス、メルケルとシュトイバーの例に見られるように、両党の党首がライバル関係にある場合にCSU党首が首相候補となった例もある。

しかし、2002年のメルケルとシュトイバーの場合とは異なって、ラシェットとゼーダーは繰り返し協議を行ったものの、首相候補問題を解決することができなかった。CDU/CSU 連邦議会議員団による投票を実施した場合にはゼーダーが多数を得る可能性があったことから、敗北することを恐れたCDU指導部はこの方法もとらなかった。このような決定の遅れは世論の間でCDU/CSU内の不一致という印象をさらに強めただけでなく、ラシェットが最終的にCDU総務会で首相候補を決定させ、それをCSUに対して押し通すという方法をとったため、CSU側の反発を招いた。ゼーダー等CSU首脳は連邦議会選挙戦において表面上はラシェットを支持する姿勢を見せたが、ゼーダーが有権者全体だけではなくCDU/CSU支持者の間でもラシェットより人気があったことから、最後までラシェットを揶揄する発言を繰り返し、CDU/CSUの支持率が回復しないという結果をもたらした⁽⁶¹⁾。

2021年3月、4月、8月、9月にCDU/CSUの首相候補を仮想的にゼーダーとして、有権者が首相を直接選挙できれば誰に投票するかについて行われたフォルザのアンケートによれば、彼をあげた回答者の比率は常に37～40%となっており、SPDの首相候補ショルツと緑の党の首相候補ベアボックに対する支持率を常に上回り、しかもラシェットを比較対象とした場合よりもショルツとベアボックの支持率は低くなった。さらに、CDU/CSUの首相候補をラシェットとした場合には、「直接選挙」において3人の首相候補のうち誰にも投票しないであろうとした回答は一貫して40%を超えていたが、ゼーダーを首相候補とした場合には、この比率は25%程度に低下していた。これらの結果からは、CDU/CSUがゼーダーを首相候補としていた場合には、同党の得票率も実際より上昇し、選挙に勝利していた可能性があることが推定できる⁽⁶²⁾。

CDU/CSUだけではなくSPDにおいても首相候補の選出は党や連邦議会議員団の指導部によって行われ、その際一般党員を関与させることは好まれてこなかった。その理由は、党内多数派の路線や理念が有権者全体で見た場合の多数派のそれとは必ずしも一致しないという点にある。首相候補が選挙において党を勝利に導くためには、党内多数派だけではなくメディアや有権者一般から広い支持を得る必要がある。社会集団への帰属やイデオロギーに基づいて特定の政党と結びつく有権者が次第に減少し、政党組織が弱体化しつつある状況の下では、このことはさらに重要となっている。SPDが党内では左派優位であり、ショルツが2019年の党首選において敗れたにも拘わらず、ハンブルク市長やメルケル政権の財務相を歴任し、実務派として高い知名度を持つ彼を党指導部の判断によって2021年連邦議会選挙の首相候補に指名したことも、そのような理由によるものであった。この点に関して、カールハインツ・ニクラウスは「選挙戦での党の勝利が首相候補にとって首相になるための前提条件であるという想定は今は逆転し、首相候補の選挙や世論の間での成功が、その候補の所属する政党の成功の基盤となる」と指摘している⁽⁶³⁾。

それに対して、2021年連邦議会選挙の場合には、結束力を欠くCDUが自ら首相候補を擁立することに固執したことによって、結果的に首相候補の選定に失敗しただけではなく、それによってCDU/CSU全体も分裂しているという印象を有権者の間でさらに強めたと言える。

(3) メルケル長期政権の下でのCDUのジレンマと政党組織の弱体化

CDU/CSUが適切な首相候補の選出に失敗したさらに根本的な背景は、メルケルがCDU党首として18年間、首相として16年間という長期にわたって党と政府に盤石な地位を築き、その間にCDUを都市部の若い有権者、女性、移民の背景を持つ人々等にも受け入れられる政党へと「近代化」し、支持層を中道左派へと広げるとともに、将来的に緑の党とも連立可能な政党へと再編しようとしてきたことにある。

トルステン・オッペルランドが指摘しているように、このような路線は、ユーロ危機や難民危機を背景とした右派政党AfD結成の要因ともなったが、メルケルはもちろんのこと、クランプ＝カレンバウアーもAfDを憲法敵対的な政党とみなし、同党との連立をはじめとした一切の協力を否定するという戦略をとり、CSUも基本的にはそれに異を唱えなかった。しかし、この戦略は、AfDが連邦議会選挙や各州議会選挙において議席を拡大するにつれて、CDUにとってはますます左派政党との連立が必要になるという結果をもたらし、そのことが保守的あるいは右派的有権者をますますAfDへと追いやるというスパイラルを生み出した。2019年のザクセン州議会選挙後にCDUがSPD及び緑の党との「ケニア連立」の形成を強いられたケースはそれを象徴するものであり、一部の地域では左翼党との協力さえ議論されるようになった。

このような状況は、保守的あるいは右派的な党員や有権者からも支持を得つつ、左派政党とも協力可能であるというCDUの従来の強みを失わせるものとなった。それゆえ、CDU内では、AfDと連立すれば計算上多数を獲得できる州を中心に、メルケルの路線を変更し、AfDの主張を一部受け入れて同党を連立に取り込み、それによって中期的にAfDを消滅あるいは縮小させるという議論も行われるようになった。しかし、そのような戦略の転嫁はメルケル政権下で新たにCDUを支持するようになった有権者の離反を招き、それによって緑の党が恩恵を受けるというリスクをはらんでいた⁽⁶⁴⁾。

メルケル政権時代にCDUが陥るようになったこのジレンマには簡単な解決策がない。メルケル辞任後2回の党首選出過程を見れば明らかなように、CDU内ではメルケルの路線に対する支持と反発がほぼ拮抗しており、クランプ＝カレンバウアーやラッシュトは基本的にメルケルの路線を継承する立場をとっていたものの、党内の亀裂をさらに深めないために、メルケルに批判的なグループに対する配慮を示さねばならず、結果的に党内の統一を回復できるような強力なリーダーシップと新たな方向性を打ち出すことができなかった。

メルケルの後継党首たちの指導力が疑問視された背景には、彼女が長期政権を率いてきた間に彼女と競い合える有力な指導者が現れなくなったという事実もある。1998年連邦議会選挙におい

てCDU/CSUが敗北した後に、コールの後継党首となったショイブレは、その直後にCDU首脳を巻き込んだ不正献金疑惑が発覚したことによって2000年には辞任に追い込まれ、党の刷新を期待されたメルケルが新しい党首に選出された。その後、メルケルは2002年連邦議会選挙後に激しい権力闘争の末にCDU/CSU連邦議会議員団院内総務であったメルツを追い落とし、野党指導者の地位を確固たるものにした。当時、CDU内にはメルツ以外にもヘッセン州首相ローランド・コッホ、ニーダーザクセン州首相クリスティアン・ヴルフ、バーデン・ヴュルテンベルク州首相エッティンガー、ノルトライン・ヴェストファーレン州首相ユルゲン・リュトガース等、旧西ドイツ地域出身の有力政治家たちがいたが、彼らはその後、経済界への転出、スキャンダル、EU委員会への転出、州議会選挙での敗北等によって次々に政界から引退した。若手政治家として期待されていたレットゲンも前述したように2012年の州議会選挙における選挙戦指導をめぐってメルケルに連邦閣僚を解任された。彼らは必ずしもメルツのようにメルケルとの権力闘争の結果失脚に追い込まれたわけではなかったが、メルケルの立場が確固たるものになるにつれて、党内の経済政策重視派や保守派は勢力を後退させ、彼女に匹敵する有力政治家はいなくなっていった。2005年にCDU/CSU院内総務に就任したフォルカー・カウダーのように、当初はメルケルに対して独自の立場をとろうとした政治家も、次第に彼女の「側近」として行動するようになっていった。

このような指導力のある政治家の減少は、メルケル政権が長期化して彼女が党内で不動の政治家になったことのみが原因ではない。1972年から1998年までCDU党首を務め、メルケルと同じく16年にわたって首相の座にあったコールの場合も、政権末期に現在と類似した状況が見られた。しかし、当時と異なっているのは党組織の弱体化である。ドイツ統一時の1990年当時、CDUは790,000人、CSUと合計すれば976,000人の党員を有していたのに対して、2019年時点のCDU党員数は406,000人、CDU/CSUのそれは545,000人と半分近くになっている。特に旧東ドイツ時代の経験から政党をはじめとした組織全般に対する不信感の強い東部諸州では、1990年と2019年を比較した場合の党員数減少率は72.7%となっている⁽⁶⁵⁾。

1930年生まれのコール以降のCDU党首は、旧東ドイツ出身であるメルケルを除いてすべて16～19歳でCDUや青年同盟に加入し、党組織の中で政治・行政面のキャリアを積んできた。この点はレットゲンやシュパーンも同様である。このようなパターンはSPDにおいても見られるが、両大政党の党組織の弱体化とともに、このような従来型の政治家育成機能は先細りしつつあり、無党派層の増加とともに、選挙の際に広い支持を集められる候補者をどのようにして確保していくかが大きな課題となりつつある。

2018年にメルケルの後継者を選出するための党首選が行われた際に、バーデン・ヴュルテンベルク州を中心とする反メルケル派が20年近くにわたって政界から離れていたメルツを候補者として再び担ぎ出したことは、このような状況を背景としており、言い換えれば、CDU内でメルケルに対する批判が高まっても、彼女とは異なった方向性を代表できる指導力のある有力な候補者が他にいなかったことを示していると言える。ラシェット辞任後の党首選においても、本来で

あれば有力な候補となるべき6名の州首相はいずれも立候補の意欲を示さず、メルケル派の候補とされたブラウンも第4次メルケル政権の首相府長官以外に主要な地位には就いた経験がなかったことから、当初から当選の可能性は低かった。その結果、メルツが3度目の挑戦でCDU党首に選出されたが、前述したように、彼は次期連邦議会選挙の際には70歳となることから、必ずしも首相候補として適任とは言えない。事実、ポリトバロメーターの調査結果によれば、メルツに対する評価はクランプ＝カレンパウアーやラッシュェットがCDU党首であった時期には全般的に両者よりも低く推移し、メルツがCDU党首となった後も次第に低下して、2022年8月時点では-0.4となっている。これに対して、メルケルは首相退陣後の最後の調査となった2022年2月時点でも+2.5の評価を得ていた。

このような状況から見た場合、メルツがCDUの歴史上初めて一般党员による投票によって党首に選出されたことは示唆的である。有権者全般において特定の政党との結びつきが希薄化し、それに代わって高い支持を得られる特定の候補者と有権者との直接的な結びつきが選挙において重要となる時代においては、政党内でも党首選出にあたって「草の根民主主義」が重視される流れは当然のことであるように思われる。しかし、前述したように、個々の政党内部の多数派と有権者全体で見た場合の多数派は必ずしも一致しないことに加えて、党幹部や議員団による実質的な党首決定よりも一般党员による投票の方が正しい結果が得られる保証はない。元々特定の理念やイデオロギーを基礎とする集権的な組織政党というよりも、むしろ政権を獲得・維持することを目指した連合体的な政党であるCDU/CSUにとっては、「草の根民主主義」はSPDや緑の党のような政党よりも不安定な結果をもたらす可能性が高い。その意味で、2021年の党员投票によるCDU党首の選出は、党の民主主義化というよりも、党指導部が党の結束を回復できる新しい党首を選出することができず、指導力を低下させていることを示していると言える。前述したように、党首就任後のメルツに対する評価の低迷に加えて、CDU/CSU自体の支持率も2022年8月時点で緑の党と同じ26%と低迷していることは、同党が陥っている困難さが短期的なものにとどまらないことを示唆している⁽⁶⁶⁾。

- (1) 西ドイツ建国以降の連邦議会選挙の結果については、Der Bundeswahlleiter(Hrsg.), Ergebnisse früher Bundestagswahlen, Wiesbaden 2017 参照。2017年と2021年の連邦議会選挙については、Karl Rudolf Korte/Jan Schoofs(Hrsg.), Die Bundestagswahl 2017, Analysen der Wahl-, Parteien, Kommunikations- und Regierungsforschung, Wiesbaden 2019; Richard Hilmer und Rita Müller-Hilmer, Bundestagswahl 2021 – Aufbruch mit begrenztem Risiko, in: Zeitschrift für Parlamentsfragen (ZParl), Heft 1/2022, S.135ff. 参照。
- (2) Vgl., Sebastian Bukow/ Wenke Seemann (Hrsg.), Die Große Koalition: Regierung - Politik - Parteien 2005-2009, Wiesbaden 2010; Christoph Egle/ Reimut Zohnhörer (Hrsg.), Die zweite Große Koalition: Eine Bilanz der Regierung Merkel 2005-2009, Wiesbaden 2010; Reimut Zohnhörer/ Thomas Saalfeld (Hrsg.), Zwischen Stillstand, Politikwandel und Krisenmanagement: Eine Bilanz der Regierung Merkel 2013-2017, Wiesbaden 2019.
- (3) 難民危機が2017年連邦議会選挙に及ぼした影響については、Wilfried Rabe, Die Flüchtlingskrise, die AfD und

- ihre Auswirkungen auf die Bundestagswahl 2017, Norderstedt 2018参照。メルケルのCDU党首辞任に至る過程については、横井正信「難民問題とドイツキリスト教民主・社会同盟（CDU/CSU）における党首交代」福井大学教育・人文社会系部門紀要、第4号、2020年、p.113以下参照。
- (4) クランプ=カレンバウアーの辞任に至る過程については、横井正信「2019年州議会選挙とクランプ=カレンバウアーの辞任」福井大学教育・人文社会系部門紀要、第5号、2021年、p.127以下参照。
- (5) Frankfurter Allgemeine Zeitung für Deutschland（以下FAZと略称）vom 12. und 18. Februar 2020.
- (6) FAZ vom 19. Februar 2020.
- (7) FAZ vom 26. und 28. Februar 2020.
- (8) FAZ vom 3. März 2020.
- (9) Forschungsgruppe Wahlen, Politbarometer, Langzeitentwicklung - Themen im Überblick, https://www.forschungsgruppe.de/Umfragen/Politbarometer/Langzeitentwicklung_-_Themen_im_Ueberblick/（2022年8月23日現在）
- (10) Die Ergebnisse des DeutschlandTrends Extra vom 13. Februar 2020, <https://www.tagesschau.de/multimedia/bilder/crbilderstrecke-651.html>; ARD-DeutschlandTREND Februar 2020, <https://www.tagesschau.de/inland/deutschlandtrend-2097.pdf>; ARD-DeutschlandTREND Mai 2020, <https://www.tagesschau.de/inland/deutschlandtrend-2217.pdf>; ARD-DeutschlandTREND August 2020, <https://www.tagesschau.de/inland/deutschlandtrend-2291.pdf>.（2022年8月23日現在）
- (11) Ebd.; Politbarometer, Archiv, https://www.forschungsgruppe.de/Umfragen/Politbarometer/Archiv/Politbarometer_2020/Juli_I_2020/（2020年8月23日現在）
- (12) Der Tagesspiegel vom 5. Juli 2020; Bild am Sonntag vom 2. August 2020.
- (13) Frankfurter Allgemeine Sonntagszeitung（以下FASと略称）vom 16. August 2020; FAZ vom 28. September 2020.
- (14) FAZ vom 28. August 2020.
- (15) FAZ vom 27. Oktober 2020.
- (16) FAS vom 1. November 2020; Augusburger Allgemeine vom 21. November 2020.
- (17) ARD-DeutschlandTREND Dezember 2020, <https://www.tagesschau.de/inland/deutschlandtrend-2433.pdf>; ARD-DeutschlandTREND Januar 2021, <https://www.tagesschau.de/inland/deutschlandtrend-2471.pdf>.（2022年8月23日現在）
- (18) FAZ vom 14. Januar 2021.
- (19) FAZ vom 16.,18.,19. und 25. Januar 2021; Ergebnisse der Briefwahlen zum Bundesvorstand der CDU Deutschlands beim 33. Digitalen Parteitag am 15./16. Januar 2021 in Berlin, Auszählung am 22.02.2021, https://www.cdu-parteitag.de/sites/www.pt21.cdu.de/files/downloads/ergebnisse_der_briefwahlen_1.pdf.（2022年8月23日現在）
- (20) Kanzlerpartei im Ungewissen. Eine Dokumentation des Beitrags von Dr. Thomas Petersen in der Frankfurter Allgemeinen Zeitung Nr. 47 vom 25. Februar 2021, https://www.ifd-allensbach.de/fileadmin/kurzberichte_dokumentationen/FAZ_Februar2021_Kanzlerpartei.pdf.（2022年8月23日現在）
- (21) Roberto Heinrich, Stefan Merz und Anja Miriam Simon, Die rheinland-pfälzische Landtagswahl vom 14. März 2021: Populäre Ministerpräsidentin sichert erneut SPD-Erfolg, in: ZParl, Heft 3/2021, S.481ff.; Ulrich Eith, unter Mitarbeit von Thomas Waldvogel, Die baden-württembergische Landtagswahl vom 14. März 2021: Grüne festigen Position vor CDU, in: ZParl, Heft 3/2021, S.500ff.
- (22) CDU/CSU 議員の不当利得をめぐるスキャンダルはその後さらに広がりを見せ、3月下旬にはCSU バイエル

- ン州議会議員で元州法相でもあるアルフレート・ザウターがマスク仲介によって120万ユーロの仲介料を得ていたという疑惑が浮上した。また、CSU 連邦議会議員トビアス・ツェッヒがアゼルバイジャン政府から利益供与を受けていたとの疑いが強まった。さらに、バーデン・ヴュルテンベルク州選出 CDU 連邦議会議員ヨアヒム・プファイファーの名前で設立された3つの企業と彼の議員活動との間に利益相反があるとの疑いが明らかになった。FAZ vom 12., 26. und 27. März 2021.
- (23) 2016年のバーデン・ヴュルテンベルク州とラインラント・プファルツ州における州議会選挙については、Oscar W. Gabriel und Bernhard Kornelius, Die baden-württembergische Landtagswahl vom 13. März 2016: Es grünt so grün, in: ZParl, Heft 3/2016, S.497ff.; Heiko Gothe, Die rheinland-pfälzische Landtagswahl vom 13. März 2016: Populäre SPD-Ministerpräsidentin führt Rheinland-Pfalz in Ampel-Koalition, in: ZParl, Heft 3/2016, S.519ff.
- (24) Politbarometer, Langzeitentwicklung; Vertrauenskrise. Eine Dokumentation des Beitrags von Prof. Dr. Renate Köcher in der Frankfurter Allgemeinen Zeitung, Nr. 70 vom 24. März 2021, https://www.ifd-allensbach.de/fileadmin/kurzberichte_dokumentationen/FAZ_Maerz2021_Vertrauenskrise.pdf. (2022年8月23日現在)
- (25) Ebd.
- (26) FAZ vom 29., 30. und 31. März 2021.
- (27) FAZ vom 7., 10., 12. und 13. April 2021.
- (28) FAZ vom 14. April 2021.
- (29) Politbarometer, Langzeitentwicklung; FAZ vom 17. und 19. April 2021.
- (30) FAZ vom 21. und 24. April 2021.
- (31) FAZ vom 29. April 2021; FAZ vom 23. Juni 2021.
- (32) Kerstin Völkl, Die sachsen-anhaltische Landtagswahl vom 6. Juni 2021: Die Mitte ist stabil, in: ZParl, Heft 3/2021, S.520ff.; FAZ vom 7. Juni 2021.
- (33) Politbarometer, Langzeitentwicklung.
- (34) FAZ vom 16., 22., 26., 27. und 30. Juli 2021.
- (35) Frank Brettschneider, Manfred Güllner, Peter Matuschek, Bundestagswahl 2021: Wahlkampf, Stimmungen, Meinungen. Eine gemeinsame Panel-Studie von forsa und der Universität Hohenheim, Panel-Welle 1 August 2021, https://www.uni-hohenheim.de/fileadmin/user_upload/Bundestagswahl_2021_Welle_1.pdf. (2022年8月23日現在)
- (36) Politbarometer, Langzeitentwicklung.
- (37) FAZ vom 13., 16. und 17. August 2021.
- (38) Politbarometer, Langzeitentwicklung.
- (39) FAZ vom 30. August 2021.
- (40) Politbarometer, Langzeitentwicklung; FAZ vom 31. August 2021.
- (41) Ebd.; FAZ vom 4. September 2021.
- (42) CDU/CSU, Sofortprogramm zur Bundestagswahl 2021, https://assets.ctfassets.net/nwwnl7ifahow/4vMQUA nb4HGpgnIPobanyN/6638e5d0550b8e01b97b4b6c7095486a/Sofortprogramm_zur_Bundestagswahl.pdf. (2022年8月23日現在); Eine gemeinsame Panel-Studie von forsa und der Universität Hohenheim, Panel-Welle 2, https://komm.uni-hohenheim.de/uploads/media/Bundestagswahl_2021_Welle2_Parteien-und-Kandidierende.pdf. (2022年8月23日現在)
- (43) FAZ vom 20. und 21. September 2021.
- (44) Richard Hilmer und Rita Müller-Hilmer, op.cit. 2021年連邦議会選挙に関する詳細なデータについては, Der Bundeswahlleiter, Wahl zum 20. Deutschen Bundestag am 26. September 2021, Heft 3, Endgültige Ergebnisse

- nach Wahlkreisen, Wiesbaden 2021 参照。
- (45) FAZ vom 27. und 28. September 2021.
- (46) Ebd.; FAZ vom 29. September 2021.
- (47) Ebd.
- (48) Eric Linhart und nio Swiek, Am Ende doch wieder Schwarz-Rot – Die Koalitionsfindung nach der Bundestagswahl 2017 aus koalitions-theoretischer Perspektive, in: Korte/Schoofs, op.cit., S.485ff.
- (49) FAZ vom 1. und 2. Oktober 2021.
- (50) FAZ vom 4. Oktober 2021.
- (51) FAZ vom 7., 8. und 9. Oktober 2021.
- (52) ただし、2011 年のバーデン・ヴュルテンベルク州議会選挙戦の結果自体は、むしろ原発廃止問題のような争点や州首相であったシュテファン・マッブスに対する低い評価等によって大きな影響を受けたものであった。Oscar W. Gabriel und Bernhard Kornelius, Die baden-württembergische Landtagswahl vom 27. März 2011: Zäsur und Zeitenwende? in: ZParl, Heft 4/2011, S.784ff.
- (53) FAZ vom 12. Oktober 2021; FAZ vom 3. November 2021.
- (54) FAZ vom 13. November 2021.
- (55) FAZ vom 17. November 2021.
- (56) FAZ vom 23. November 2021.
- (57) FAZ vom 18. Dezember 2021; FAZ vom 24. Januar 2022. この後、郵便投票によって最終的に確定された結果では、メルツの得票率は95.3%、チャヤのそれは94.2%となった。Ergebnisse der Wahlen zum Bundesvorstand der CDU Deutschlands beim 34. Parteitag Briefwahl am 31. Januar 2022, <https://www.cdu-parteitag.de/sites/www.pt22.cdu.de/files/downloads/dokumentation.pdf>. (2022年8月23日現在)
- (58) Ebd.; FAZ vom 16. Februar 2022.
- (59) Politbarometer, Langzeitentwicklung; Markus Klein, Frederik Springer und Christoph Kühling, „Last Man Standing“: Zur Bedeutung der Kanzlerkandidaten für das Ergebnis der Bundestagswahl 2021, in: ZParl, Heft 1/2022, S.24ff.
- (60) RTL/ntv-Trendbarometer, Forsa-Aktuell: Kanzlerfrage: Söder in allen Wählergruppen vor Laschet - Auch Baerbock und Habeck stärker als der CDU-Chef, <https://www.presseportal.de/pm/154530/4882629>. (2022年8月23日現在) ; Klein, op.cit., S.35.
- (61) Karlheinz Niclaß, Die Bundestagswahl als Kanzlerwahl? Personen und Parteien im Wahlkampf 2021, in: ZParl, Heft 1/2022, S.5.
- (62) フォルザ等の継続的に行われている政党・選挙関係の各種世論調査のデータに関しては、Deutschland Wählt, Umfragen-Verlauf. bit.ly/KanzlerfrageDeutschland からダウンロードすることができる (2022年8月23日現在)。
- (63) Niclaß, op.cit., S.12. 2021年10月にアレンスバッハが公表したアンケート結果によれば、「次期連邦議会選挙において基本的にCDU/CSUに投票することが考えられる」と答えた回答者の比率は過去20年間で40～47%となっており、2021年の場合も42%であった。それに対して、過去の選挙において常に同じ政党に投票してきたと答えた回答者の比率はこの間に57%から35%へと低下した。また、選挙の直前になって投票する政党を決めたと答えた回答者の比率は2000年代はじめまでは約4分の1であったが、2021年の場合には46%に上った。さらに、このアンケートでは、「CDU/CSU が一致していると思う」と答えた回答者の比率は18%、「分裂していると思う」と答えた回答者の比率は57%であった。Ratlose Wähler. Eine Dokumentation des Beitrags von Dr. Thomas Petersen in der Frankfurter Allgemeinen Zeitung Nr. 244 vom 20. Oktober 2021, https://www.ifd-allensbach.de/fileadmin/kurzberichte_dokumentationen/FAZ_Oktober_2021_RatloseWaehler.pdf. (2022年8月23日現在)

- (64) Torsten Oppeland, Die CDU: Volkspartei am Ende der Ära Merkel, in: Uwe Jun/ Oskar Niedermayer (Hrsg.), Die Parteien nach der Bundestagswahl 2017, Wiesbaden 2020, S.43ff.
- (65) Oskar Niedermayer, Parteimitglieder in Deutschland: Version 2020, Arbeitshefte aus dem Otto-Stammer-Zentrum, Nr. 31, Freie Universität Berlin 2020.
- (66) Politbarometer, Langzeitentwicklung.

算数・数学学習における具体例同定課題の読みを阻害する要因

口分田 政史^{*1} 堀田 祐里^{*2} 中嶋 勇貴^{*3} 松浦 妃南^{*4}

(2022年9月30日 受付)

概要：近年，読解力を測るリーディングスキルテストの結果注目され，教科書の文章を正確に読めるレベルにない学習者の存在が不安視されている。対象者の読解力を測定することを目的とした調査は行われているものの，算数・数学学習において読解を阻害する要因を明らかにし，効果的な教授方略への示唆を得ることまでを射程に入れた調査研究は十分に行われていない。そこで本研究では，小学校高学年を対象に，算数・数学学習における具体例同定に焦点を当てて，学級集団を対象に，読解を阻害する要因を探る認識調査を行った。その結果，阻害要因として，学習者が持ち合わせている曖昧な知識の影響が明らかとなり，教授方略への示唆が得られた。

キーワード：具体例同定，数学的読解力，偶数，台形，阻害要因

1. 問題と目的

1.1 算数・数学学習と読解力について

一般的に「読解力」と言ってもその定義や解釈は様々存在する。例えば，OECDによるPISA2015調査において読解力は「自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，社会に参加するために，書かれたテキストを理解し，利用し，熟考し，これに取り組むこと」と定義される。また算数・数学学習と関わってPISA2015調査では，数学的リテラシーなる概念も存在する。これは「ある文脈に置かれた問題を数学と結びつけ，問題を解決するために行う数学的なプロセスと，こうしたプロセスの基盤となる能力」と定義される。これらの能力は，基本的な文章の読み取りだけでなく数学的な概念・手順・事実・ツールを使って事象を記述し，説明や予測することまでを含んだ複合的な認知能力である（OECD, 2016）。複合的な認知能力である読解力に

^{*1}福井大学教育学部

^{*2}勝山市立村岡小学校

^{*3}鯖江市立鯖江東小学校

^{*4}福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

対して、基礎的・汎用的読解力の重要性も指摘されている(新井, 2018)。基礎的・汎用的読解力とは、「事実について書かれている短文を正確に読むスキル」と定義されており、係り受け解析、照応解決、同義分判定、推論、イメージ同定、具体例同定の6分野で構成される。6分野の内、具体例同定は、具体例同定(辞書)と具体例同定(理数)の2項目に分けられている。この具体例同定(理数)は、「理数的な定義を理解し、その用法を獲得できる読解力」と定義され、算数・数学学習に直接的に関連する。この具体例同定(理数)は、PISA2015で求められているような複合的な認知能力としての読解力を支える基礎的な能力の一つであると考えられる。そこで本研究では、算数・数学学習に関わる読解力の一つとして、具体例同定に焦点を当て検討を進めることとする。

1.2 算数・数学学習における具体例同定について

具体例同定は「問題で、定義や解答に必要な原理・法則・着眼点が与えられ、それらを読み取る場面」また「教科書において、新たな定義が与えられる場面」等で必要とされる。また数学は言葉によってその大系を形にし、それをもとに新たな体系を作り上げていくことを繰り返す学問であり、簡潔・明瞭・的確であることが重視される。数学の体系を築き、新たな価値を生み出すためには、具体例同定の能力は欠かせない。一方で学習者の多くが具体例同定に困難を抱えていることが報告されている。例えば、リーディングスキルテスト(以下、RST)では、偶数の問題が出題されており、問題文は「2で割り切れる数を偶数という。そうでない数を奇数という。偶数を全て選びなさい。」であり、選択肢は「65, 8, 0, 110」である。この問題に対して、小学校第6学年の学習者の半数以上が誤答に至っている事実が示されている。このように小学校の算数学習で具体例同定が十分に身に付いていない状態が、中学校以降の数学学習のつまずきの要因となっている可能性がある(新井, 2018)。

1.3 数学教育の立場からみた具体例同定に関する検討課題

以上、述べてきたようにRSTの分析を通して得られた知見は、数学教育への一定程度の示唆を与えるものであると考えられる。一方で数学教育学研究の立場からみればいくつかの検討課題が存在する。新井(2018)は、RSTの仕組みを次のように説明している。まず受験者は、難易度中程度の問題を解く。それに対する受験者の反応に基づいてより難しい問題を出題するか、より簡単な問題を出題するかが決定される。これが繰り返されることによって受験者が正確に読むことができる限界を診断することができる仕組みとなっている。こうした仕組みは、視力検査の仕組みに似ており、調査の目的は、あくまでも受験者の具体例同定の能力レベルを判定することにある。したがって「具体例同定課題の読みを阻害する要因」や「具体例同定の能力を高める教授方略」を明らかにすることまでは、射程に入れられていない。視力検査で言えば、受験者の視力がどの程度良いかあるいは悪いかを判定することはできるが、なぜ悪いのか、どうすれば視力が良くなるのかまでは分からない。数学教育学研究の立場から検討する上で重要なことは、具体例同定の能力が低い実態を示すことだけでなく、その要因や効果的な教授方略への示唆を得ることで

あり、これらの点は検討課題として残されている。

1.4 具体例同定の読みを阻害する要因について

西林（2005）は、学習者の読みを阻害する要因として「分かったつもり」という状態を指摘している。「分かったつもり」の状態とは、「後から考えて不十分だというわかり方であり、一つの間違った状態である」とされる。この状態の特徴として「分からない部分が見つからない」という状態で安定しているものの、読みが不足していたり、間違っていたりすることが挙げられる（西林，2005）。安定という停滞状態であるため、「よりよく読もう」と思うための障害となっているという。西林（2005）は、国語学習における読解力を具体例に挙げながら説明しているが、算数・数学学習における具体例同定にも関係する諸点があると考えられる。例えば、RSTで出題されている偶数の具体例同定課題では、学習者は偶数を「分かったつもり」の状態であることが、偶数の定義文をよりよく読もうとすることを阻害している可能性がある。この点について補足を加えながら説明したい。「文章をわかる」ということは構成要素の単語の意味をつなぎ合わせていくことではない（西林，1997）。文の中の単語の意味は、その前後の単語の意味の影響を受けたり、持ち合わせている知識の影響を受けたりする可能性がある。西林（1997）は、3つの文章（①木で箱を作った、②誕生記念に木を植えた、③木に雨宿りした）を例に挙げながら次のように説明している。3つの文章では「木」という同じ単語が用いられているものの①の木は、材木のイメージで読まれることが多い。これに対し②の木は、苗木のイメージで読まれ、③は大きな木のイメージで読まれる傾向にある（西林，2019）。このように文の中にある「木」の単語の意味は、その前後の文や学習者が持ち合わせている知識の影響を受けることがある。こうした影響は算数・数学学習においてもみられる現象である可能性がある。つまり偶数などの数学概念に対する学習者が持ち合わせている曖昧な知識が、その前後の文章に影響を与え、具体例同定課題の読みを阻害している可能性は大いに考えられる。学習者の知識状態が読みに与える影響について新井（2018）は、大規模データに基づいて検証し、RSTを知識で解いてしまっている可能性が低いことを主張している。ここで「問題が解けた要因」として「持ち合わせている知識が影響している可能性」が低いことは検証されているが、「問題が解けなかった要因」として「持ち合わせている知識が影響している可能性」については十分に検証されていない。本研究では、具体例同定課題の読みを阻害する要因として、学習者が持ち合わせている知識状態の影響に焦点を当てる。

1.5 算数・数学学習における「分かったつもり」の検討

では算数・数学学習における「分かったつもり」とはどのような状態なのであろうか。数学概念は、外延的定義と内包的定義の2つの側面から捉えることができる。外延的定義は「積み木、三角の色板、トライアングル、屋根、おむすび、・・・などの形を三角形という」のように、定義する集合の要素を列記して述べるものである（守屋，2019）。これに対して内包的定義は、「三本の直線で囲まれた図形を三角形という」のようにある概念に属する要素に共通する性質を述べるもので、教科書にある定義に近いものである（守屋，2019）。算数・数学学習における図形指導で

は、生活経験から外延的定義で大まかな図形のイメージを作り、その後内包的定義を明確にしていくことが重要である(守屋, 2019)。これらの点を考慮すれば、数学概念における「分かったつもり」という状態として、外延的定義で理解している状態や、内包的定義によって定義しようと試みているものの網羅的に定義できておらず誤りや不十分さがある状態(以下、不十分な内包的定義)で理解している状態などが考えられる。こうした学習者の知識状態が、具体例同定の読みを阻害している可能性がある。

1.6 本研究の目的について

以上の議論を踏まえ、本研究では算数・数学学習における読解力として基礎的・汎用的読解力の一分野である具体例同定に焦点を当て、具体例同定課題の読みを阻害する要因を明らかにし、正確な読みを促す効果的な教授方略への示唆を得ることを目的とする。なお小学校段階で具体例同定が困難である状態が中学校における数学学習の支障になっていることが指摘されていることを踏まえ、まずは小学校高学年の学習者を対象とすることから検討する。この目的を踏まえ、以下の3つの分析の視点を設定した。

分析の視点1は、既習の数学概念に対して、学習者が持ち合わせている知識状態はどのようなものであるのかである。正しい内包的定義の知識を持ち合わせているのか、あるいは外延的定義や不十分な内包的定義の知識であるのかについて、定義を問うことから分析する。加えて内包的定義の理解が不十分であった場合、定義文を構成するどの要素の理解が不十分であるのかにさらに調査を行うことから検証する。

分析の視点2は、具体例同定課題における条件として、提示文や選択肢の条件が読みにどのような影響を与えるのかである。提示文や選択肢の条件変更に伴う正答率や選択率の差異を分析し、具体例同定課題の読みを阻害する要因について分析する。

分析の視点3は、「分かったつもり」の安定状態が阻害要因となっているのかについてである。具体例同定課題に取り組んだ後に、解答に対する自信の割合についてアンケート調査で問う。各条件の具体例同定課題に対して、自信がある状態(安定状態)で解いているのか、自信がない状態(不安定な状態)で解いているのかについて検証する。

2. 方法

2.1 対象者

A県内B小学校、6年生26名であった。

2.2 実施時期

2021年12月9日、10日に調査を行った。所要時間は各30分であった。

2.3 調査課題

問題は偶数課題と台形課題の2種類作成した。偶数は数と計算領域で取り扱われる数学概念であり、先行調査で実施されている主要な具体例同定課題であるため採用した。これに対して領域によって阻害要因が異なっている可能性を検証するために、図形領域から台形を採用した。台形課題を採用した理由は次の通りである。小学校までの算数学習で台形は「向かい合う1組の辺が平行な四角形」と定義される（以下、算数定義）。一方で中学校以降の数学学習では「少なくとも1組の向かい合う辺が互いに平行な四角形」と定義される（以下、数学定義）。算数定義で学習済である学習者に対して数学定義文を提示することで、持ち合わせている算数定義文の知識が、具体例同定課題の読みにどの程度影響しているのかについて検証できると考えた。

偶数課題は次の2種類に分類した。まず分析の視点1を検証するために、定義記述課題を作成した。次に分析の視点2を検証するために、具体例同定課題（偶数）を作成した。具体例同定課題は、読みを阻害する要因について探るため、選択肢と提示文の条件を変更して下記のような複数の問題パターンを作成した。さらに分析の視点3を検証するために、具体例同定課題の一部に対して、手応えアンケート調査を実施した。作成した偶数課題を整理すると次のようになる。

- ・ 定義記述課題（偶数）
- ・ 具体例同定課題（偶数）1：選択肢A・偶数＋定義文，手応えアンケート実施
- ・ 具体例同定課題（偶数）2：選択肢A・偶数のみ（定義文無），手応えアンケート実施
- ・ 具体例同定課題（偶数）3：選択肢B・偶数＋定義文，手応えアンケート実施
- ・ 具体例同定課題（偶数）4：選択肢B・偶数のみ（定義文無），手応えアンケート実施
- ・ 具体例同定課題（偶数）5：選択肢B・定義文のみ（偶数用語無）
- ・ 具体例同定課題（偶数）6：選択肢B・整数選択問題

「偶数」とは何ですか。説明しましょう。

Figure 1 偶数定義記述課題

1. 2で割り切れる整数を偶数という。偶数にすべて○をつけましょう。（選択肢A群）
2. 偶数にすべて○をつけましょう。（選択肢A群）
3. 2で割り切れる整数を偶数という。偶数にすべて○をつけましょう。（選択肢B群）
4. 偶数にすべて○をつけましょう。（選択肢B群）
5. 2で割り切れる整数にすべて○をつけましょう。（選択肢B群）
6. 整数にすべて○をつけましょう。（選択肢B群）

Figure 2 具体例同定課題（偶数）における6種類の提示文

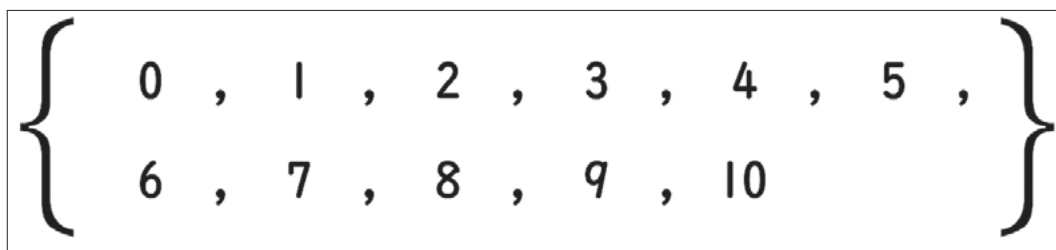


Figure 3 具体例同定課題（偶数）の選択肢A群

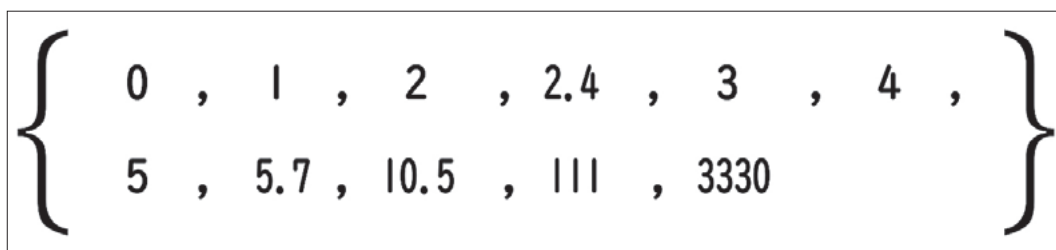


Figure 4 具体例同定課題（偶数）の選択肢B群

- | |
|---|
| <input type="checkbox"/> 自信がある
<input type="checkbox"/> 少し自信がある
<input type="checkbox"/> あまり自信がない
<input type="checkbox"/> 自信がない |
|---|

Figure 5 手応えアンケート

台形課題は次の3種類に分類した。まず分析の視点1を検証するために、定義記述課題を作成した。次に分析の視点2を検証するために具体例同定課題を作成した具体例同定課題は、読みを阻害する要因について探るため、選択肢と提示文の条件を変更して下記のような複数の問題パターンを作成した。また台形の定義は偶数に比べて定義文の構成要素が多くあり、具体例同定課題だけでは、どの構成要素の理解が不十分であるのかの判断が困難であった。そこで構成要素判断課題として、「平行」、「向かう合う辺の組の数」、「向かい合う辺」、「少なくとも」の理解をみる問題を作成した。さらに分析の視点3を検証するために、偶数課題と同様に、具体例同定課題の一部に対して、手応えアンケート調査を実施した。作成した台形課題を整理すると次のようになる。

- ・定義記述課題（台形）
- ・具体例同定課題（台形）1：台形＋算数定義文，手応えアンケート実施
- ・具体例同定課題（台形）2：台形＋数学定義文，手応えアンケート実施

- ・具体例同定課題（台形）3：台形（定義文無），手応えアンケート実施
- ・具体例同定課題（台形）4：算数定義文（台形用語無）
- ・具体例同定課題（台形）5：数学定義文（台形用語無）
- ・具体例同定課題（台形）6：四角形選択問題
- ・構成要素判断課題（平行）
- ・構成要素判断課題（向かい合う辺の組の数）
- ・構成要素判断課題（向かい合う辺）
- ・構成要素判断課題（少なくとも）

「台形」とは何ですか。説明しましょう。

Figure 6 台形定義記述課題

1. 向かいあう1組の辺が平行な四角形を台形という。
次の図形のうち、台形にすべて○をつけましょう。
2. 少なくとも1組の向かいあう辺が互いに平行な四角形を台形という。
次の図形のうち、台形にすべて○をつけましょう。
3. 台形にすべて○をつけましょう。
4. 向かいあう1組の辺が平行な四角形にすべて○をつけましょう。
5. 少なくとも1組の向かいあう辺が互いに平行な四角形にすべて○をつけましょう。
6. 四角形にすべて○をつけましょう。

Figure 7 具体例同定課題（台形）における6種類の提示文

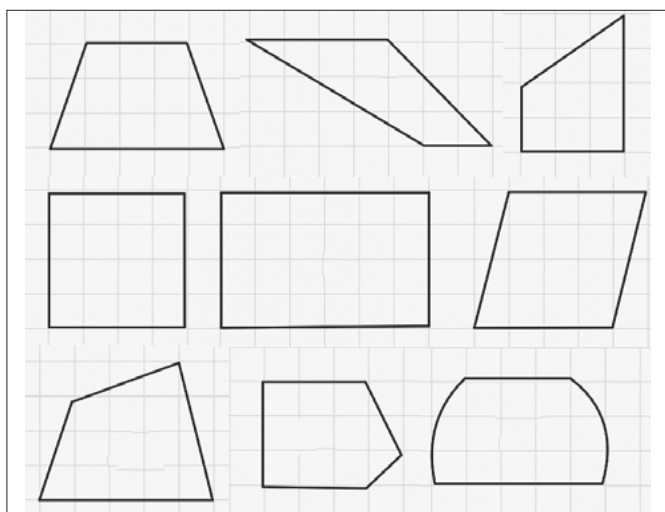


Figure 8 具体例同定課題（台形）における選択肢

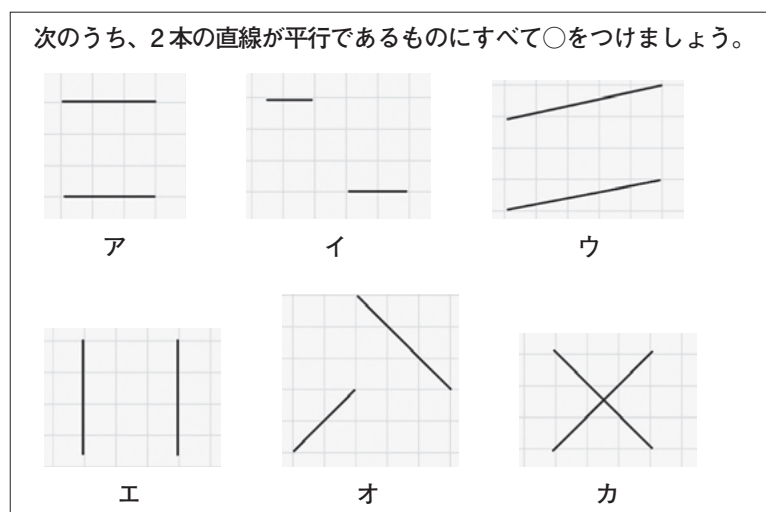


Figure 9 具体例同定課題（台形）における選択肢

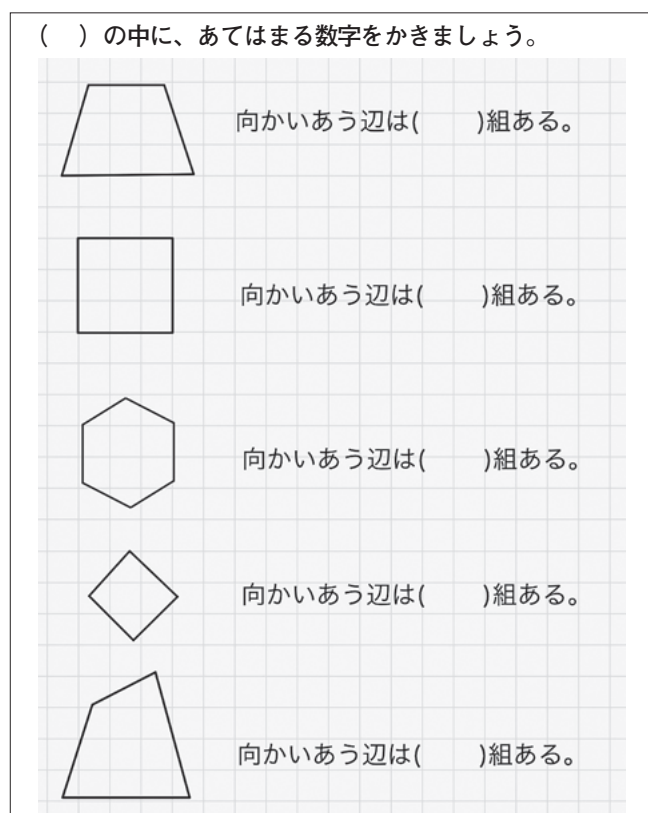


Figure 10 構成要素判断課題（向かい合う辺の組の数）

次の赤線と向かい合う辺に○を、それ以外の辺に×をつけましょう。

○と×のつけ方例

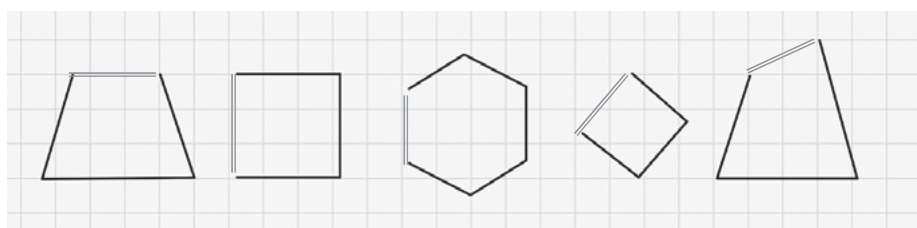


Figure 11 構成要素判断課題（向かい合う辺）（注．調査では二重線が赤線）

ア～エの中で、次の文章と合っているものすべてに○をつけましょう。

四角形が少なくとも3つある。

ア △ □ ○ △ ▽ ☆ □ ○

イ △ □ ○ △ □ ☆ □ ○

ウ △ □ ○ △ □ ☆ □ □

エ □ □ ○ △ □ ☆ □ □

Figure 12 構成要素判断課題（少なくとも）

3. 結果と考察

3.1 偶数課題の結果と考察

分析の視点1：学習者が持ち合わせている知識状態

Table 1 は、定義記述課題（偶数）の結果である。既習の内容であるにもかかわらず正しい内包的定義を記述できたのは1人であり、偶数の定義の理解がいかに不十分であるのかが分かる。Table 2 は、誤答類型の結果である。誤答類型により、3パターンの誤答が抽出された。まず不十分な内包的定義を記述した誤答である。例えば「偶数とは2で割り切れる数」といった記述である。次に不十分な内包的定義と外延的定義を併記した誤答である。例えば「偶数とは2で割り切れる数であり、2, 4, 6などの数」といった記述である。最後に外延的定義を記述した誤答である。例えば「偶数とは、2, 4, 5などの数」といった記述である。Table 2 は、最も多かった誤答が不十分な内包的定義であった。とりわけ「整数」を「数」と記述した誤答が多かった。次に多かったのが不十分な内包的定義と外延的定義を併記した誤答であった。これは内包的定義の不十分さを、外延的定義を併記することによって補おうとしたことによるものと考えられる。外延的定義のみを記述した誤答は2人と前者2つの誤答に比べ少なかった。これらの結果から、学習者は偶数の定義の理解が不十分ではあるが全く理解しないわけではなく、不十分な内包的定義や外延的定義によって曖昧に理解している知識状態であることが分かる。

Table 1 定義記述課題（偶数）の結果

定義記述課題	正答	誤答
人数 (割合)	1 (3.9)	25 (96.1)

Table 2 定義記述課題（偶数）における誤答類型の結果（割合の分母は学級全体の26人）

誤答類型	不十分な内包的定義	不十分な内包的定義と 外延的定義	外延的定義
人数 (割合)	15 (57.7)	8 (30.8)	2 (7.7)

分析の視点2：具体例同定課題の読みに影響を与える条件

分析の視点1より明らかとなった曖昧な知識状態である学習者に対して、具体例同定課題の読みに影響を与える条件について検討する。Table 3 は、具体例同定課題（偶数）において異なる2つの選択肢を提示した際の完答率を比較したものである。2つの選択肢とは、整数範囲に限定されたA群と、実数範囲まで拡張されたB群であった。また提示文は、定義文「2で割り切れる整数」の有無の2種類であった。全般的な傾向として、A群に対してB群の完答率が低いことが分かる。

つまり選択肢B群は、学習者が持ち合わせている曖昧な知識では解決できない条件であったと考えられる。

また特徴的な点として、選択肢A群では、定義文無の方が定義文有よりも完答率が高かったのに対し、選択肢B群では、定義文無の方が定義文有よりも完答率が低かった。この要因について完答率だけでなく、各選択肢の選択率も踏まえて考察したい。Table 4, 5 は、選択肢A群と選択肢B群における選択率の結果を示したものである。まず選択肢A群では、定義文無の条件で完答率が92.3%であるのに対して、定義文有では完答率69.2%であった。Table 4より、とりわけ0の選択率に差異が見られ、定義文無では92.3%であるのに対し、定義文有では76.9%と減少していた。つまり定義文無条件下で0を偶数だと認めていたものの、定義文が提示されたことによって0を偶数ではないと誤って判断した学習者が増加していた。定義文の提示によって学習者が持ち合わせている曖昧な知識との間で葛藤が生まれ、却って誤った判断を下すことにつながったと考えられる。これに対して選択肢B群では、定義文無の条件で完答率が11.5%であるのに対して、定義文有では完答率が30.7%と増加していた。Table 5より、とりわけ2.4の選択率の差異がみられ、定義文無では80.8%が偶数であると誤って判断していたのに対して、定義文有では46.2%とが偶数と誤って判断しており、誤答率が減少していた。この結果は選択肢B群が、定義文の正しい読みを促した可能性を示唆している。

Table 3 具体例同定課題における選択肢A群とB群の完答率（括弧内は割合）

具体例同定課題	定義文有	定義文無
選択肢A群	18 (69.2)	24 (92.3)
選択肢B群	8 (30.7)	3 (11.5)

Table 4 具体例同定課題における選択肢A群の選択率（網掛けのセルは正答、括弧内は割合）

選択肢A群	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
定義文無	24 (92.3)	0 (0.0)	26 (100.0)	0 (0.0)	26 (100.0)	0 (0.0)	26 (100.0)	0 (0.0)	26 (100.0)	0 (0.0)	26 (100.0)
定義文有	20 (76.9)	2 (8.0)	26 (100.0)	2 (8.0)	26 (100.0)	1 (3.9)	26 (100.0)	1 (3.9)	26 (100.0)	2 (0.0)	26 (100.0)

Table 5 具体例同定課題における選択肢B群の選択率（網掛のセルは正答，括弧内は割合）

選択肢 B群	0	1	2	2.4	3	4	5	5.7	10.5	111	3330
定義文無	22 (84.6)	2 (7.7)	26 (100.0)	21 (80.8)	2 (7.7)	26 (100.0)	2 (7.7)	2 (7.7)	4 (15.4)	1 (3.8)	24 (92.3)
定義文有	21 (80.8)	3 (11.5)	26 (100.0)	12 (46.2)	2 (7.7)	26 (100.0)	1 (3.8)	1 (3.8)	2 (7.7)	1 (3.8)	25 (96.2)

Table 6 は、具体例同定課題の選択肢を B 群に固定した上で、提示文の条件を変更した場合の完答率と選択率をまとめたものである。完答率が高い順に検討する。まず完答率 80.8 % と最も高かったのは整数選択課題であった。つまり偶数の内包的定義の理解は不十分ではあるものの、整数については 8 割の学習者が正しく具体例同定可能であった。2 番目に完答率が高かったのは定義文のみ条件の 42.3 % であった。整数選択課題から「2 で割り切れる」の文章が加わるだけで、完答率が 80.8 % から 42.3 % に減少している。この要因として 2 点考えられる。1 点目は、0 の選択率が 88.5 % から 69.2 % に減少していることから、0 を整数だと認めているものの 2 で割り切れないと判断した可能性である。2 点目は、2.4 の選択率が 11.5 % から 23.1 % に増加していることから、定義文の中の「整数」が読み飛ばされた可能性が考えられる。3 番目に完答率が高かったのは偶数 + 定義文条件の 30.7 % であった。定義文に「偶数」の用語が加わるだけで正答率がさらに減少している。偶数の用語が加わったことで、定義文が読み飛ばされた可能性が考えられる。最も完答率が低かったのは、偶数のみ条件の 11.5 % であった。学習者が持ち合わせている知識は曖昧であり、誤りが含まれるため、完答率が低い結果につながったと考えられる。

以上の結果から、学習者は、提示文の文字列を正しく読み進めているのではなく、持ち合わせている知識を使って読んでいることが分かる。また分かっているつもりである用語を判断の拠りにし、その他の用語を読み飛ばす傾向がみられる。例えば、提示文に「偶数」の用語があればこれを拠り所にし、その他の用語や文章を読み飛ばしてしまう。この結果、持ち合わせている曖昧な知識で解くことになり、誤答に至ると考えられる。また拠り所とする用語にも優劣がある可能性がある。偶数同定課題であれば、「偶数」はより優位であり、次に「2 で割り切れる」、そして「整数」の用語は最も下位で、読み飛ばされやすい。したがって「整数」だけを問われれば、正しく弁別できるものの、より優位な用語が併記されることによって読み飛ばされてしまう。さらに優位な用語に対して学習者が持ち合わせている誤った知識が影響し、整数を正しく弁別できるものの、偶数として整数でない数が選択されてしまう。ただし選択肢 A 群のような形式的に妥当な判断が下せる条件と比べれば、選択肢 B 群のような葛藤条件の方が、読み飛ばしが減少する傾向がみられる。

Table 6 提示文の条件が異なる具体例同定課題の選択率（網掛のセルは正答，括弧内は割合）

提示文の条件	0	1	2	24	3	4	5	5.7	10.5	111	3330
偶数+定義文 (完答率30.7%)	21 (80.8)	3 (11.5)	26 (100.0)	12 (46.2)	2 (7.7)	26 (100.0)	1 (3.8)	1 (3.8)	2 (7.7)	1 (3.8)	25 (96.2)
偶数のみ (完答率11.5%)	22 (84.6)	2 (7.7)	26 (100.0)	21 (80.8)	2 (7.7)	26 (100.0)	2 (7.7)	2 (7.7)	4 (15.4)	1 (3.8)	24 (92.3)
定義文のみ (完答率42.3%)	18 (69.2)	1 (3.8)	26 (100.0)	6 (23.1)	1 (3.8)	26 (100.0)	2 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	23 (88.5)
整数 (完答率80.8%)	23 (88.5)	22 (84.6)	25 (96.2)	3 (11.5)	22 (84.6)	25 (84.6)	22 (84.6)	1 (3.9)	1 (3.9)	21 (80.1)	24 (92.3)

分析の視点3：「分かったつもり」の安定状態の影響

Table 7 は、様々な条件下における具体例同定課題解決時の自信度合の選択率を示したものである。全般的傾向として、まず「自信がある」の割合に着目すると、選択肢 A 群と比べて選択肢 B 群では、割合が減少している。これは選択肢 B 群が学習者の持ち合わせている曖昧な知識では解決困難な条件であり葛藤が促されたことを示していると考えられる。また「概ね自信がある（自信があると少し自信があるの合計）」の割合に着目すると、4つの条件下では96.2, 80.7, 76.9, 76.9%であった。一方でそれぞれの完答率は順に、92.3, 69.2, 11.5, 30.7%であり、「概ね自信がある」と比べて、割合の変動範囲が大きい。つまり選択肢 B 群の課題解決時の傾向として、学習者はある程度の自信がありながら誤っていると考えられる。この要因として、提示文をしっかり読まず、持ち合わせている曖昧な知識に基づいて課題を解決しており、誤っている可能性を認識していない可能性がある。このように偶数に対する曖昧な知識での安定状態は、具体例同定課題の読みを阻害する一要因となっている可能性がある。

Table 7 様々な条件下における具体例同定課題解決に対する自信度合の選択率（括弧内は割合）

手応え	自信がある	少し自信がある	あまり自信がない	自信がない	無回答
定義文無 選択肢 A 群	17 (65.4)	8 (30.8)	1 (3.8)	0 (0.0)	0 (0.0)
定義文有 選択肢 A 群	14 (53.8)	7 (26.9)	5 (19.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
定義文無 選択肢 B 群	7 (26.9)	13 (50.0)	4 (15.4)	2 (7.7)	0 (0.0)
定義文有 選択肢 B 群	7 (26.9)	13 (50.0)	3 (11.5)	1 (3.8)	2 (7.7)

3.2 台形課題について

分析の視点1：学習者が持ち合わせている知識状態

Table 8は、定義記述課題（台形）の結果である。既習であるにも関わらず内包的定義を正しく記述できたのは3人であり、台形の定義の理解がいかに不十分であるのかが分かる。Table 9は、誤答類型の結果である。誤答類型により、3パターンの誤答が抽出された。まず不十分な内包的定義を記述した誤答である。例えば「台形とは向かい合う辺が平行な形」といった記述である。次に不十分な内包的定義と外延的定義を併記した誤答である。例えば「台形とは向かうあう辺が平行は形で、下のような形」と記述し、図で等脚台形を描いた場合などである。最後に外延的定義を記述した誤答である。例えば、図で等脚台形などを描いた場合である。最も多かった誤答が不十分な内包的定義と外延的定義を併記した回答であった。偶数課題に比べ、台形では内包的定義の不十分さを、外延的定義を併記することによって補おうとする傾向がみられた。また外延的定義のみを記述した誤答は4人と少なかった。これらの結果から、学習者は台形の定義の理解が不十分ではあるが全く理解しないわけではなく、不十分な内包的定義や外延的定義によって曖昧に理解している知識状態であることが分かる。

Table 8 台形定義記述課題の結果

定義記述課題	正答	誤答
人数 (割合)	3 (11.5)	23 (88.5)

Table 9 台形定義記述課題の誤答類型（割合の分母は学級全体の26人）

誤答類型	不十分な内包的定義	不十分な内包的定義と 外延的定義	外延的定義
人数 (割合)	0 (0.0)	19 (73.1)	4 (15.4)

分析の視点2：具体例同定課題の読みに影響を与える条件

分析の視点1より明らかとなった曖昧な知識状態である学習者に対して、具体例同定課題の読みに影響を与える条件について検討する。Table 10は、異なる問題文を提示した場合における選択率をまとめたのである。なお小学生は、台形を算数定義で学習しており、数学定義は未習であるため、完答率ではなく選択率のみを分析対象とする。それぞれの課題に対する特徴的な結果を整理すると次のようになる。

まず算数定義課題では、8割の学習者が「平行な辺の組が1組だけの場合」を台形と判断していた。残りの2割が四角形でない図形を選択するなど誤った判断を下していた。特徴的な点として

等脚台形は全ての学習者が台形であると判断したのに対して、等脚でない台形の選択率は60%台と減少していた。次に数学定義文課題において、算数定義文課題と比べて選択率に変化があったのは、正方形、長方形、平行四辺形、五角形、四角形でない図形を台形であった。これら全ての選択肢において、台形であると判断した学習者の割合が増加していた。つまり数学定義文として「少なくとも1組」の記述が加わることで、そこにより着目して提示文を読んだと考えられる。一方で、四角形でない図形の選択率も増加していることから、新たに加わった記述の部分を読み飛ばした可能性がある。また台形B、Cについては、選択率にはあまり変化はなかった。これらは持ち合わせている曖昧な知識にそぐわないため、排除されたと考えられる。これらのことから、学習者は持ち合わせている曖昧な知識を使って提示文を読んでいるものの、見慣れない真新しい用語には注意深く読む傾向がある。同時に見慣れた真新しくない用語については読み飛ばす傾向がみられる。さらに定義文無課題では、算数定義文課題の結果と似た傾向が示された。つまり算数定義文の有無は、選択率に大きな影響を与えていないと考えられる。算数定義文のように見慣れた文章は、葛藤を促さず、読み飛ばされる傾向にあると言える。

一方で算数定義文のみ課題では、算数定義文課題と比べて選択率に変化があったのは、等脚台形、正方形、長方形、平行四辺形、五角形、四角形でない図形であった。これらの選択肢において等脚台形のみ選択率が減少し、その他の選択率は増加していた。この要因として、台形の用語が提示文から削除されたことで、提示文をより注意深く読もうとした学習者が増加した可能性がある。しかし四角形でない図形の選択率が増加しているため、算数定義文の構成要素である四角形は読み飛ばされたと考えられる。こうした傾向は、数学定義文のみ課題でも同様にみられた。数学定義文課題の提示文から台形の用語が削除されるだけで、正方形、長方形、平行四辺形、五角形、四角形でない図形の選択率が増加した。台形の用語が提示文から削除されたことで、提示文をより注意深く読もうとした学習者が増加した可能性がある。ただし四角形が読み飛ばされる傾向や定義文を構成する要素の理解が十分でないことから誤答率も高まっていると考えられる。最後に四角形選択課題では、正方形や長方形は100%であるのに対して、それ以外の選択肢は50%前後の選択率であった。この結果は、そもそも台形を四角形と認識していない学習者が一定数存在することを意味している。つまり台形課題は、偶数課題とは異なり、定義文を構成する要素の理解の不十分さが具体例同定課題の読みを阻害する一要因となっている可能性がある。そこで構成要素の理解について検討する。

Table 10 提示文の条件が異なる具体例同定課題の選択率 (括弧内は割合)

選択肢	台形 A	台形 B	台形 C	正方形	長方形	平行 四辺形	一般 四角形	五角形	四角形 でない
台形 + 算数定義文	26 (100.0)	18 (69.2)	16 (61.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (15.4)	3 (11.5)	5 (19.2)
台形 + 数学定義文	26 (100.0)	18 (69.2)	15 (57.7)	8 (30.8)	8 (30.8)	9 (34.6)	3 (11.5)	8 (30.8)	9 (34.6)
台形 (定義文無)	26 (100.0)	17 (65.4)	13 (50.0)	1 (3.8)	1 (3.8)	1 (3.8)	6 (23.1)	2 (7.7)	2 (7.7)
算数定義文 (台形用語無)	20 (76.9)	17 (65.4)	17 (65.4)	11 42.3	10 (38.5)	12 (46.2)	3 (11.5)	13 (50.0)	15 (57.7)
数学定義文 (台形用語無)	22 (84.6)	17 (65.4)	17 (65.4)	17 (65.4)	17 (65.4)	20 (76.9)	2 (7.7)	12 (46.2)	12 (46.2)
四角形 (定義文無)	15 (57.7)	13 (50.0)	14 (53.8)	26 (100.0)	25 (96.2)	15 (57.7)	12 (46.2)	2 (7.7)	4 (15.4)

まず Table 11 は、構成要素判断課題（平行）の結果を示したものである。選択肢ウは正答であるにも関わらず、選択率が低い。つまり平行の理解において、選択肢ウのような 2 本の線分が描かれる位置のズレが大きければ、平行ではないと誤って判断する傾向がみられる。次に Table 12 は、構成要素判断課題（向かい合う辺の組）の結果を示したものである。つまり平行関係である場合に限定して、向かう合う辺の組として誤ってカウントする傾向がみられる。さらに Table 13 は、構成要素判断課題（向かい合う辺）の結果を示したものである。特徴として選択肢オのその他の選択肢と比較して正答率が低い。これは構成要素判断課題（向かい合う辺の組）の結果と同様に、平行関係である場合に限定して向かい合う辺であると誤って捉えている傾向がみられる。一方で一定程度の理解がみられた構成要素もある。Table 14 は、構成要素判断課題（少なくとも）の結果を示したものである。算数科の学習では取り扱われていない用語であるにも関わらず、7 割以上の学習者が正しく理解できていることが分かる。

以上の結果から、偶数課題と同様に、学習者は、提示文の文字列を正しく読み進めているのではなく、持ち合わせている曖昧な知識を使って読んでいることが分かる。また分かっているつもりである用語を判断の拠りにし、その他の用語を読み飛ばす傾向がみられる。例えば、提示文に「台形」の用語があればこれを拠り所にし、他の用語や文章を読み飛ばしてしまう。この結果、持ち合わせている曖昧な知識で判断することになり、誤答に至ると考えられる。また偶数課題と異なる点として、構成要素の理解の不十分さ読みを阻害する要因にもなっている。例えば、「四角形」だけを問われても、正しく弁別できなかった。また各構成要素を混同している実態も指摘された。とりわけ「向かい合う」、「向かい合う辺の組」の用語と、「平行」を混同していた。加え

て「平行」の理解も不十分であり、台形の定義文が正しく読めない要因となっていた。したがって数学定義文のような見慣れない真新しい用語については注意深く読もうとしているものの、台形定義文を構成する要素が多く、それら一つ一つの理解が不十分であることが、正しい読みを阻害する要因となっていると考えられる。

Table 11 平行判断課題の選択数と割合（網掛のセルは正答）

平行	ア	ウ	エ	カ	オ	サ	ク
選択数	26	17	24	26	7	0	5
選択率	100.0	65.4	92.3	100.0	26.9	0.0	19.2

Table 12 「向かい合う辺の組」判断課題の正答数と割合

向かい合う辺の組の数	ア	イ	ウ	エ	オ
正答数	10	24	22	23	6
正答率	38.5	92.3	84.6	88.5	23.1

Table 13 「向かい合う辺」判断課題の正答数と割合

向かい合う辺	ア	イ	ウ	エ	オ
正答数	22	24	23	23	10
正答率	84.6	92.3	88.5	88.5	38.5

Table 14 「少なくとも」の意味理解課題の選択数と割合（網掛のセルは正答）

少なくとも	ア	イ	ウ	エ
選択数	1	23	20	19
選択率	3.8	88.5	76.9	73.1

分析の視点3：「分かったつもり」の安定状態の影響

Table 15は、様々な条件下における具体例同定課題解決時の自信度合の選択率を示したものである。全般的傾向として、まず「自信がある」に着目すると、偶数課題に比べて割合は低く、変動範囲も大きくはない。次に概ね自信がある（「自信がある」と「少し自信がある」の合計）に着目すると、3つの条件下で順に38.4、26.9、57.7%となっており、これも同様に偶数課題と比べて割合は低い傾向にある。つまり台形課題の解決時の傾向として、学習者はあまり自信がないと感じている中で、誤った判断を下していると考えられる。この要因として、台形の定義文を構成する要素の理解が不十分であったため、誤っている可能性を認識していながら判断を下していたと考えられる。このように台形に対する曖昧な知識は決して安定状態とは言えず、この点は偶数課

題とは異なる特徴である。したがって、同じ具体例同定課題であっても取り扱う数学概念や領域によって読みを阻害する要因は異なる可能性がある。

Table 15 様々な条件下における具体例同定課題解決時の手応えの選択率（括弧内は割合）

手応え	自信がある	少し自信がある	あまり自信がない	自信がない	無回答
台形	5	5	9	7	0
+ 算数定義	(19.2)	(19.2)	(34.6)	(26.9)	(0.0)
台形	4	3	9	9	1
+ 数学定義	(15.4)	(11.5)	(34.6)	(34.6)	(3.8)
台形 (定義文無)	6	9	6	5	0
	(23.1)	(34.6)	(23.1)	(19.2)	(0.0)

4. 総合考察

以上を踏まえて総合考察を行う。本研究では算数・数学学習における読解力として基礎的・汎用的読解力の一分野である具体例同定に焦点を当て、具体例同定課題の読みを阻害する要因を明らかにし、正確な読みを促す効果的な教授方略への示唆を得ることが目的であった。

4.1 具体例同定課題の正しい読みを阻害する要因

具体例同定課題の正しい読みを阻害する要因として次の4つが挙げられる。

学習者が持ち合わせている曖昧な知識の影響

RSTでは、対象者が持ち合わせている知識を使って問題を解いている可能性については検証した上で排除している。しかし問題を読めていない要因として、持ち合わせている知識が影響している可能性については検証されていない。本研究の結果、偶数と台形の具体例同定課題で正しく読めていない要因として、学習者が持ち合わせている曖昧な知識が影響していることが明らかとなった。また算数・数学学習における曖昧な知識状態とは、偶数や台形の定義の理解が不十分ではあるが全く理解していない状態ではなく、不十分な内包的定義や外延的定義に基づいた理解であることが明らかとなった。

学習者が持ち合わせている知識と結びつきやすい用語とそうでない用語の影響

学習者は持ち合わせている知識を使って具体例同定課題を読み進めていると考えられるが、曖昧な知識と結びつきやすい用語とそうでない用語が存在することが明らかとなった。例えば偶数課題では、「偶数」の用語が持ち合わせている曖昧な知識と結びつきやすい。したがって「偶数」の用語があれば、それが曖昧な知識と結びつくことで、その他の用語が読み飛ばされてしまうと考えられる。一方で曖昧な知識と結びつきにくい用語もみられた。例えば、「整数」は、それだけを問われれば正しい判断が下せるものの、曖昧な知識と最も結びつきにくいと考えられ、その他の用語と同時に扱われることで、読み飛ばされることが多かった。このように学習者が持ち合わ

せている曖昧知識と結びつきやすい用語とそうでない用語の存在が、正確な読みを阻害する一要因となっていると考えられる。

学習者が持ち合わせている曖昧な知識の安定状態（分かったつもり）の影響

偶数課題のみであるが、学習者は自信が持ち合わせている曖昧な知識を曖昧であると捉えていない傾向が示された。この結果は、偶数に対する曖昧な知識が安定状態にある可能性を意味している。このように不安定ではなく安定している状態が、偶数との持ち合わせている曖昧な知識とを安易に結びつけることにつながり、他の部分の読み飛ばしにつながっている可能性がある。一方で台形に対する曖昧な知識は安定状態にあるとは言えず、全ての概念に対して曖昧な知識の安定状態が、正確な読みを阻害しているわけではないと考えられる。

定義文を構成する要素の混同や理解の不十分さの影響

学習者が持ち合わせている曖昧な知識が安定状態にない場合について、正確な読みを阻害する要因として定義文を構成する要素の理解の不十分さが考えられる。例えば、台形課題では、「四角形」や「平行」だけを問われても、正しい判断が下せなかった。また「向かい合う」、「向かい合う辺の組」の意味を「平行」と混同している実態も示された。偶数に比べ、台形は、定義文を構成する要素が多く、それら一つ一つの理解が不十分であったり混同していたりすることが、正確な読みを阻害する要因となっていると考えられる。

4.2 具体例同定課題の正確な読みを促進する効果的な教授方略への示唆

本研究で明らかとなった具体例同定課題の読みを阻害する要因を踏まえ、具体例同定課題の正確な読みを促す教授方略への示唆として次の3点を挙げる。

外延的定義と内包的定義とを双方向的に取り扱うこと

守屋（2019）が指摘するように算数・数学学習における概念指導では、生活経験から外延的定義で大まかな概念のイメージを作り、その後内包的定義を明確にしていくことが重要である。こうした外延的定義から内包的定義への移行を目指す教授活動において、不十分な内包的定義の理解の状態で良しとせず、常に概念を規定する正確な内包的定義に立ち戻りながら具体例を弁別させることが重要となるであろう。また外延的定義から始まり内包的定義をまとめとするような教授学習過程のみでは、学習の対象となる内包的定義の理解は深まるであろうが、未知の数学概念に対して定義文を正確に読み進めようとする態度までは十分に育成されない懸念がある。そこで内包的定義から始まり、それに基づいて具体例を弁別することを主とした教授学習過程も重要となると考えられる。こうした学習を通して、内包的定義が書かれた文章を正確に読み、それに基づいて具体例を弁別していく態度が育成されることが期待される。このように外延的定義と内包的定義を双方向的に取り扱うことが重要であると考えられる。

形式的に妥当な判断が下せない条件で葛藤させること

内包的定義に基づいて具体例を弁別させる学習課題は、検定教科書でも取り扱われているが、

授業後半のまとめに適応題として取り扱われることが多い。そのため理解の確認といった位置付けの学習課題となり、学習者が持ち合わせている曖昧な知識状態でも形式的に妥当な判断が下せてしまう条件下であることが多い。しかし、この条件下の学習課題によって、多くの学習者が曖昧な知識のままで分かったつもりとなってしまう、その状態で概念学習を終えている可能性がある。したがって不十分な内包的定義や外延的定義に基づいた理解では形式的に妥当な判断が下せない条件を意図的に取り扱うことが重要となるであろう。とりわけ本研究では、条件として選択肢を工夫することが学習者の葛藤を促し、曖昧な知識の安定状態を崩すことにつながる可能性が示された。

定義に立ち戻って具体例を同定する理由を説明させること

曖昧な知識では妥当な判断の下せない葛藤条件を設定することに加えて、課題解決時に、具体例同定の理由を常に定義に基づいて説明させることも重要となると考えられる。例えば、偶数を曖昧に理解している学習者は、選択肢に0や24を加えることで葛藤が促されることが予想される。しかし正誤判定だけを指導しても正確な読みは促されない可能性がある。そこで「0は偶数です」と教えるのではなく「なぜ0が偶数であるのか」の理由を、定義に基づいて説明させることが重要であり、「24は偶数ではない」と教えるのではなく「なぜ24は偶数でないのか」の理由を定義に基づいて説明させることが重要となる。このように具体例同定課題に取り組む際には、常に定義に立ち戻って理由を説明させることを徹底することを通して、持ち合わせている曖昧な知識を使って解くことから脱却させる必要がある。加えて、定義に立ち戻って具体例を同定することを算数・数学の学び方の一つとして意識させることが、学習者が今後、未知の概念を学習する上でも大切になる。

4.3 今後の課題

今後の課題として、次の点が挙げられる。まず本研究は、偶数と台形の具体例同定に焦点を当てたものであった。そこで、その他の概念についても対象を広げ、さらに検討をする必要がある。また本調査の知見を踏まえ、対象とする学年や人数など、より規模を広げた調査を行うことから、得られた知見の一般性について検証を進める必要がある。

付記

本稿は、第26回数学教育学会大学院生等発表会予稿集の内容に、新たな分析結果を加え、大幅に加筆・修正したものです。また本研究はJSPS科研費22K13780の助成を受けたものです。調査にご協力頂きました児童の皆様と先生方に、ここに改めてお礼申し上げます。

引用文献

新井紀子（2018）. AI vs.教科書が読めない子どもたち. 東洋経済新報社

新井紀子 (2019). AIに負けない子どもを育てる, 東洋経済新報社

国立教育研究所編著 (2016). 生きるための知識と技能6 OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2015年調査国際報告書, 明石書店

西林克彦 (2005). 分かったつもり一読解力が見つからない本当の原因, 光文社新書

西林克彦 (1997). 「わかる」のしくみ 「わかったつもり」からの脱出, 新曜社

守屋誠司 (2019). 第2章 図形, 守屋誠司編, 小学校指導法算数, 玉川大学出版部, pp105-150.

中学校段階の証明の生成過程における学習困難性

松浦 妃南^{*1} 藤川 洋平^{*2} 口分田 政史^{*3}

(2022年9月30日 受付)

証明学習の困難性の要因には、認知的要因と情緒的要因がある。証明学習の問題点の1つに論理的な誤りや飛躍のある「未完成な証明」の生成があり、この要因は認知的側面の影響が大きい。そこで本研究では、中学校第2学年を対象に「未完成な証明」に焦点を当てて、証明の生成過程に関わる認識調査を行った。その結果、学習者が生成する「未完成な証明」の特徴は、証明問題の種類によって異なることが明らかとなり、それぞれの誤りの特徴に応じた指導を行う必要性が示された。

キーワード：証明、生成過程、未完成な証明、証明の構成、証明の構想

1. 問題と目的

1.1 証明学習の現状と課題

証明は、確かな根拠から論理的に考察する力を育成するための重要な学習内容の1つであり、学校数学で明示的な焦点が当てられるのは中学校第2学年からである。一方で証明学習の困難性は以前から今日に至るまで指摘されている。H30年度全国学力・学習状況調査問題数学Aの間[8]では、演繹的推論と帰納的推論を比較する問題が出題されているが、正答率は46.1%であった。主な誤答には、帰納的推論を証明できていると判断した解答があり、その割合は39.0%であった。一方で証明の生成過程^{註1}における全ての段階で学習困難性がみられるというわけでもない。例えば、H26年度全国学力・学習状況調査問題数学Aの間[8]では、証明の方針に関する問題が出題されており、正答率は76.4%であった。こうした現状に対して、牧野(2005)は「証明ができない、証明を記述できない生徒の状態を詳細に捉え、生徒の状態に応じて指導する必要がある」と述べているように、証明学習の困難性の実態を解明することは重要な研究課題である。

^{*1}福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

^{*2}福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

^{*3}福井大学教育学部

1.2 証明の生成過程における学習困難性について

証明の生成過程には、証明の構想、証明の構成に加え、証明を吟味する段階がある（太田，2017）。辻山（2011）によると、証明の構想は「どのような要素を用いてどのように事柄の仮定と結論を結び付けられるのかを探る営み」と定義される。また証明の構成は「各要素や要素間の関係を検討し、演繹的な推論の形に表現し、仮定と結論を結び付ける営み」と定義される。また証明は構想から構成へと一方向的に取り組まれるわけではないため、証明の構想と構成は、相互に関連した営みであると考えられる。さらに証明の吟味は「証明を読み、論理的に誤りや飛躍がないかを判断し、正しく修正すること」である（太田，2017）。ここで証明の生成過程における学習困難性について、「証明が生成できない」と判断されている学習者の中にも証明の構想はある程度できている可能性がある。また「一見証明を正しく生成できているように見える学習者」であっても、証明の形式に要素を当てはめて構成しただけで、構想を踏まえた構成ができていない可能性もある（牧野，2005）。この点について学習者が生成する証明には、いくつかの段階が存在することが報告されている。例えば、Senk（1985）は、学習者が生成する証明には、次の5つの段階があることを指摘している（Figure 1）。

0. 生徒は何も記述していないか、「条件」だけを記述しているか、あるいは、妥当でない役に立たない演繹だけを記述している。
1. 生徒は少なくとも一つの妥当な演繹を書き、根拠を与えている。
2. 生徒は推論を用いている証拠を示している。ただし、その証明は途中で演繹が止まっているか、証明のステップの最初で誤った推論に基づいているため妥当でない一連の諸言明を記述している。
3. 生徒は証明を記述している。その証明において、全てのステップは論理的になっているが、表記、語彙、あるいは定理の名称に誤りがある。
4. 生徒は多くても表記の間違いが一つあるぐらいで、妥当な証明を記述している。

Figure 1 Senk（1985）による証明の5つの生成段階

またLin（2005）、Heinzeら（2008）は、幾何の証明に関する学習者のパフォーマンスについて、以下の4つのパターンを報告している（Figure 2）。

- ①受容可能な証明（acceptable proof）
- ②未完成な証明（incomplete proof）
- ③不作法な証明（improper proof）
- ④直観的な証明（intuitive proof）

Figure 2 Lin（2005）による証明の4つのパターン

受容可能な証明とは「ナラティブ表現や記号表現を伴った、前提から結論までの妥当な演繹的過程」とされるのに対し、未完成な証明とは「生徒が演繹的な推論を試みているが論理的な誤りや飛躍があるもの」である。牧野（2014）は未完成な証明について、Heinzeら（2008）の定義に

「証明を中断しているもの」を加えて定義している。また不作法な証明とは「幾何について間違った知識や不適切な性質を使ったりしている、全く演繹的でないアプローチをしているもの」であり、直観的な証明とは「視覚的判断に基づいたもの」である。

これらを踏まえ、証明学習の困難性の実態について、証明の生成過程を観点に検討したい。まず証明の構想に困難を抱える学習者と証明の構成に困難を抱える学習者に分けて議論する。前者は、Senk (1985) の段階 0 や、Lin (2005) の③、④のような証明を生成することが予想される。これに対し後者は、証明の構想ができているのであれば、Senk (1985) の段階 1, 2, 3 や Lin (2005) の②のような証明を生成することが予想される。このように証明の生成過程において学習者がどこに困難を抱えているかによって生成する証明に差異がみられると考えられる。

本研究では「証明の構想はある程度できているものの証明の構成が困難な学習者」に焦点を当てる。この理由として、まず学校数学の証明指導では、学習者が生成する未完成な証明は十分に改善されない可能性があるからである。現行の検定教科書では、指導の重点は、証明の構想に置かれる傾向があり、証明の構成については穴埋め形式で指導されることが多く問題点が指摘されている(岡本ら, 2020)。また未完成な証明を生成する学習者は、証明に全く手がつけられないわけでないため、教授方略の改善が与える影響が大きいと考えられるためである。

1.3 未完成な証明に関する検討課題

本研究で着目する「未完成な証明」は、ある程度まで証明を構成したが完成に至っていないことから情緒的側面よりも認知的側面の影響が大きいと考えられる(牧野, 2014)。Lin (2005) は、Figure 3 の問題を分析対象とし、未完成な証明の生成要因について検討している。

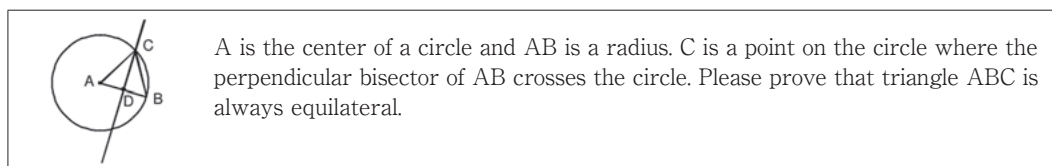


Figure 3 Lin (2005) が対象とした証明問題

上記の証明問題は、 $\triangle ABC$ が正三角形であることを導く多段階の演繹的推論を要する証明問題である。分析の結果、学習者が未完成な証明を生成する要因として3段階法に関わる推論形式の理解が不十分である可能性や、自明である命題は記述しなくて良いとする誤った判断を持ち合わせている可能性が指摘されている。これらは、学習者が未完成な証明を生成する要因の1つであると考えられ、証明学習への示唆を与えるものである。しかし、Lin (2005) が分析対象としているのは1種類の証明問題のみであり、他の証明問題においても、学習者が未完成な証明を生成する要因は同じなのかについては検討する必要がある。例えば、証明学習の初期で取り扱われる三角形の合同の証明のような基礎的な問題では、証明の構成を形式的に理解して要素を当てはめているだけの学習者が多いことが予想される。また多段階の演繹的推論を要する証明の応用問

題であっても、例えば補助線を用いる必要があれば、証明の構想の難易度が高くなると考えられる。一方で推論過程が長くなり記述量が増えれば、証明の構成の難易度が増すと考えられる。こうした証明問題の差異による未完成な証明の特徴やその要因の違いについては、先行研究において十分に解明されていない。また未完成な証明の改善までを見通せば、現行の証明の構想に重点を置いた指導が、異なる種類の証明問題で生成される未完成な証明の改善にどの程度影響を与えているのかについては検討する必要がある。

1.4 証明の吟味に関する検討課題

証明の構想と構成に着目してきたが、証明を吟味する段階においても学習者が未完成な証明を生成する要因があると考えられる。H29 年告示の学習指導要領では「三角形や平行四辺形の性質の証明の学習においては、証明を書くこととともに証明を読むことも大切である」と示されており、「証明を読むことは、証明を評価・改善したり、証明をもとに発展的に考えたりする際に必要である」とある。学習者が、自ら生成した未完成な証明を未完成であると適切に評価し修正することができれば、未完成な証明の改善が期待できる。逆に言えば、未完成な証明を生成する学習者は、自ら生成した証明を未完成であると評価していない可能性があることや、未完成であることを認めつつも適切に修正できていない可能性がある。こうした未完成な証明の吟味については、先行研究で十分に議論されていない検討課題であると考えられる。

1.5 本研究の目的について

以上の議論を踏まえ、本研究では未完成な証明に焦点を当て、証明学習の困難性の実態を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために、以下の3点を分析の視点として設定した。分析の視点1は「証明問題の種類によって、学習者が生成する未完成な証明にどのような差異がみられるのか」である。基礎的な問題から応用問題まで、いくつかの証明問題を提示し、学習者が生成した証明を分析することから検証する。分析の視点2は、「証明の構想を提示することが、証明の生成にどのような影響を与えるのか」である。分析の視点1で用いた複数の証明問題を対象に、証明の構想を提示することがヒントとして機能する場合とそうでない場合について分析する。分析の視点3は、「学習者は、未完成な証明をどの程度吟味できるのか」である。まず受容可能な証明と未完成な証明を提示し、それらを正しく区別できるのかについて分析する。その上で未完成な証明を、どの程度正しく修正することが可能かについて分析する。

2. 方法

2.1 実施時期

2021年12月21日（火）、23日（木）に調査を行った。所要時間は、両日とも約45分であった。

2.2 対象者

A県内B中学校第2学年の同一クラスで両日実施し、21日は36名、23日は34名（2名欠席）であった。第2学年の証明に関する内容は既習であった。しかし証明を学習した直後であり、証明

問題の形式に不慣れな学習者もみられた。

2.3 課題冊子

課題は3種類であり、証明生成課題（構想ヒント無）、証明生成課題（構想ヒント有）、証明吟味課題であった。以下、それぞれの課題について述べる。なお、証明を学習した直後であったため、証明課題は三角形の合同に関わる内容に限定した。

証明生成課題（構想ヒント無）

証明生成課題（構想ヒント無）は、次の3種類を作成した。

- (1) 証明生成課題（基礎）
- (2) 証明生成課題（応用：構想難易度高）
- (3) 証明生成課題（応用：構成難易度高）

(1) は、学習初期に取り扱われる基礎的な三角形の合同の証明問題である（Figure 4）。これに対して三角形の合同を中間命題とする応用問題を2種類作成した。(2) は、補助線を引くことが必要であり構想の難易度が高いと考えられる応用問題である（Figure 5）。(3) は、構想は比較的単純であるものの記述量が多くなり構成の難易度が高いと考えられる応用問題である（Figure 6）。

- (1) 右の図で、 $AB=DC$ ， $\angle ABC=\angle DCB$ ならば $\triangle ABC \equiv \triangle DCB$ となることを証明しなさい。

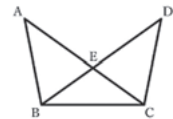


Figure 4 証明生成課題（基礎）

- (2) 右の図のように、点A, B, Cを頂点とする正三角形の辺AB, AC上にそれぞれ $BD=AE$ となる点D, Eをとる。
このとき、 $DC=EB$ になることを証明しなさい。

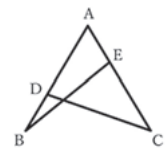


Figure 5 証明生成課題（応用：構想難易度高）

- (3) 右の図で、 $AC=CE=DF=FH$ ， $BC=CD=EF=FG$ である。
このとき、 $\triangle ABC \equiv \triangle HGF$ であることを証明せよ。

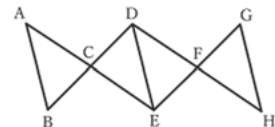


Figure 6 証明生成課題（応用：構成難易度高）

証明生成課題（構想ヒント有）

証明生成課題（構想ヒント有）は、次の3種類を作成した。

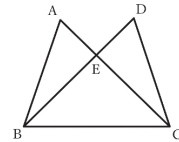
- (1) 証明生成課題（基礎）
- (2) 証明生成課題（応用：構想難易度高）
- (3) 証明生成課題（応用：構成難易度高）

問題は、証明生成課題（構想ヒント無）で用いた3種類と同じ構成の問題を用いた。なお調査日程の制約から、同日に同じ対象者に対して、証明生成課題（構想ヒント無）と証明生成課題（構想ヒント有）についての調査を行う必要があった。そのため全く同一の問題形式での出題を防ぐために、証明問題の構成は同じであるが扱う図を少し変更した。加えて出題順を、構想ヒント無を3種類出題したのちに、構想ヒント有を出題し、相互の影響を少なくした。提示した構想ヒントは、それぞれの問題に対して、証明の構想を会話形式で提示した。調査では、学級全体で足並みをそろえて進行し、問題を解き終えたら前の問題には戻らないように指導した。

(1)

【問題】

右の図で， $AB=DC$ ， $\angle ABC=\angle DCB$ ならば $\triangle ABC \equiv \triangle DCB$ となることを証明しなさい。

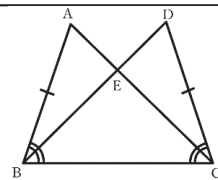


4人はこの問題について，どのように証明すればよいのかを話し合いました。

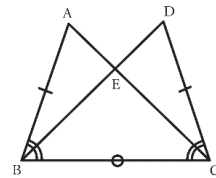
三角形の合同を証明するには，合同条件のどれかがいえたらいいよね。



ABとDCは一緒に，
 $\angle ABC$ と $\angle DCB$ も一緒なんだよね。



BCとCBも一緒じゃない？



たしかに！これなら，三角形の合同条件を使って合同が証明できそうだね。

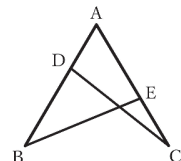


Figure 7 証明の構想ヒント（基礎）

(2)

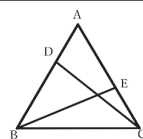
【問題】

右の図のように、点 A, B, C を頂点とする正三角形の辺 AB, AC 上にそれぞれ $BD=AE$ となる点 D, E をとる。このとき、 $DC=EB$ になることを証明しなさい。



4 人はこの問題について、どのように証明すればよいのかを話し合いました。

$\triangle ABC$ が正三角形だから、点 B と C を結んでみたら…。

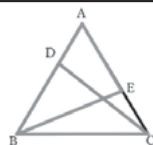


C さん

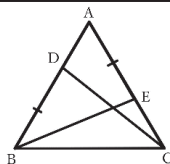
あ！ $\triangle BCD$ と $\triangle ABE$ って合同っぽくない？



D さん

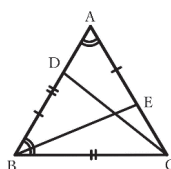


ほんとだ！そこなら、BD と AE は一緒だよな。



A さん

$\triangle ABC$ は正三角形ってことは、BC と AB、 $\angle DBC$ と $\angle EAB$ も一緒になるね。



B さん

たしかに！これなら、三角形の合同条件を使って $\triangle BCD$ と $\triangle ABE$ が合同ってことがいえそうだね。



C さん

合同ってことは、対応する辺は等しくなる！！



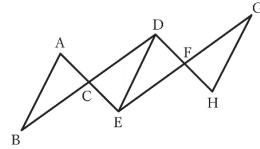
D さん

Figure 8 証明の構想ヒント（応用：構想難易度高）

(3)

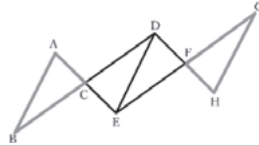
【問題】

右の図で、 $AC=CE=DF=EH$ 、 $BC=CD=EF=FG$ である。
このとき、 $\triangle ABC \equiv \triangle HGF$ であることを証明せよ。

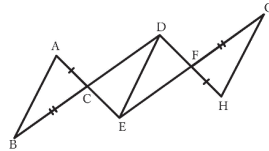


4人はこの問題について、どのように証明すればよいのかを話し合いました。

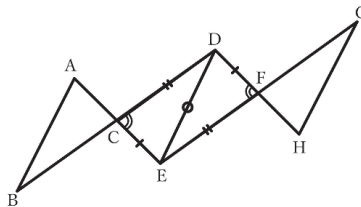
三角形の合同を証明するには、
合同条件のどれかがいえたらいいね。



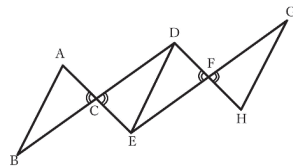
AC と HF は一緒に、
BC と GF も一緒なんだよね。



$\triangle DCE$ と $\triangle EFD$ をみると、
CE と FD が一緒に、
CD と FE も一緒だね。
あと、DE と ED は同じ。
ってことは、合同で $\angle DCE$ と $\angle EFD$
が等しいってことがいえるね。



そうだね。それに、 $\angle ACB$ と $\angle DCE$ 、
 $\angle HFG$ と $\angle EFD$ はそれぞれ対頂角だから
等しくなるよね。



なるほど。BさんとDさんの考えをつなげると、 $\angle ACB$ と $\angle HFG$ は等しい
っていえるな！

そうだね。みんなの意見をまとめれば証明できそうだ！



Figure 9 証明の構想ヒント (応用：構成難易度高)

証明吟味課題

証明吟味課題は、評価課題と修正課題の2種類を作成した。

(1) 評価課題

(2) 修正課題

評価課題は、証明ができていない・できていないを評価する問題であり、Figure 10は、問題の一部である。証明の種類は、図形領域における受容可能な証明、論理に誤りのある未完成な証明、測定による帰納的推論を用いた不作法な証明、具体操作による帰納的推論を用いた不作法な証明の4種類であった。

- (1) 次のうち、下線の文章を証明できているといえるものには○、証明できているとはいえないものには×、どちらともいえないものには△をつけなさい。

AE=DE, BE=CE ならば△AEBと△DECは合同である。

△AEBと△DECで

仮定より AE=DE ……①

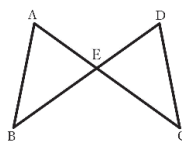
BE=CE ……②

対頂角は等しいので

∠AEB=∠DEC ……③

①②③より、2組の辺とその間の角がそれぞれ等しいので

△AEB≡△DEC



AE=DE, BE=CE ならば△AEBと△DECは合同である。

△AEBと△DECで

仮定より AE=DE ……①

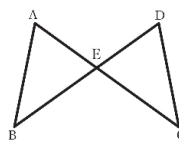
BE=CE ……②

対頂角は等しいので

∠AEB=∠DEC ……③

①②③より1組の辺とその両端の角がそれぞれ等しいので

△AEB≡△DEC



AE=DE, BE=CE ならば△AEB と△DEC は合同である。

△AEB と△DEC で

辺の長さを測ると、

AE=3cm, DE=3cm であるから

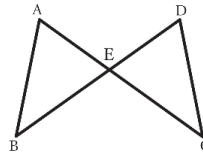
AE=DE ……①

EB=4cm, EC=4cm であるから

EB=EC ……②

分度器で角度を測ると、 $\angle AEB=70^\circ$, $\angle DEC=70^\circ$ であるから $\angle AEB=\angle DEC$ ……③

①②③より、2組の辺とその間の角がそれぞれ等しいので

 $\triangle AEB \equiv \triangle DEC$ **AE=DE, BE=CE ならば△AEB と△DEC は合同である。**

AE と DE, BE と CE が重なるように

△ABE を右へ折り返すと、

ぴったり重なった。

よって、△AEB と△DEC は合同である。

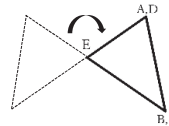


Figure 10 証明吟味課題（評価課題）

修正課題は、構成された未完成な証明の誤りを指摘し、正しく修正することができるかどうかをみる問題であり、Figure 12は、その一部である。扱った証明問題は、証明生成課題で扱った証明問題と同じ構成の問題である（Figure 4, 5, 6）。証明生成課題と同じ構成であることの調査への影響を考慮し、修正課題は調査2日目に実施した。未完成な証明は、論理に飛躍があるものと誤りがあるものの2種類である。Figure 12は、構想が難しい問題を扱った修正課題であり、①論理に飛躍のある未完成な証明、②論理に誤りがある未完成な証明の2種類を提示した。この証明問題における受容可能な証明とは以下のようなものである（Figure 11）。

(証明) △BCD と△ABE で

仮定より $BD=AE$ ……①△ABC は正三角形より $BC=AB$ ……② $\angle DBC = \angle EAB = 60^\circ$ ……③

①②③より、2組の辺とその間の角がそれぞれ等しいので

 $\triangle BCD \equiv \triangle ABE$

合同な図形の対応する辺はそれぞれ等しいので

 $DC=EB$

Figure 11 修正課題（2）の受容可能な証明

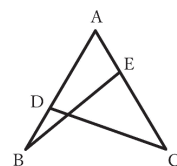
この証明における命題それぞれについて、「 $BD = AE$ 」を前提P1, 「 $BC=AB$ 」を前提P2, 「 $\angle DBC = \angle EAB = 60^\circ$ 」を前提P3, 「 $\triangle BCD \equiv \triangle ABE$ 」を中間命題R, 「 $DC=EB$ 」を結論Qと呼ぶこととする。この証明を元に作成した未完成な証明 (Figure 12) の詳細は次の通りである。まず①論理に飛躍のある未完成な証明では、前提P3, 中間命題Rの根拠「2組の辺とその間の角がそれぞれ等しい」、結論Qの根拠「合同な図形の対応する辺はそれぞれ等しい」を省略したものを取り扱う。ここでは、省略されている命題と根拠を書き足すことができるかどうか分析の観点となる。次に②論理に誤りのある未完成な証明は、前提P3に結論Qを誤って用いており、中間命題Rの根拠を「3組の辺がそれぞれ等しい」としたものである。ここでは、誤っている命題や根拠を指摘し、正しく修正できるかどうか分析の観点となる。

- (2) あるクラスで次の問題を出題したところ、いくつかの解答が挙げられた。それぞれの解答をみて、正しく証明できているか、誤っているかを答えなさい。また、誤っていると答えたものは、誤っている部分を正しく修正しなさい。

【問題】

右の図のように、点A, B, Cを頂点とする正三角形の辺AB, AC上にそれぞれ $BD=AE$ となる点D, Eをとる。

このとき、 $DC=EB$ になることを証明しなさい。



- ① (正しい ・ 誤っている)

(証明) $\triangle BCD$ と $\triangle ABE$ で

仮定より $BD=AE$ ①

$\triangle ABC$ は正三角形より

$BC=AB$ ②

①②より $\triangle BCD \equiv \triangle ABE$

よって $DC=EB$

② (正しい ・ 誤っている)

(証明) $\triangle BCD$ と $\triangle ABE$ で

仮定より $BD=AE$ ……①

$DC=EB$ ……②

$\triangle ABC$ は正三角形より

$BC=AB$ ……③

①②③より, 3組の辺がそれぞれ等しいので

$\triangle BCD \equiv \triangle ABE$

合同な図形の対応する辺はそれぞれ等しいので

$DC=EB$

Figure 12 証明吟味課題 (修正課題)

3. 結果と考察

3.1 分析の視点1：証明問題の種類による未完成な証明の差異について

Table 1-1 は, 証明生成課題 (構想ヒント無) の結果である。基礎的な問題では, 受容可能な証明を生成できた学習者は 69.4% であり, 未完成な証明は 22.2% に過ぎなかった。Table 1-2 より, 未完成な証明のうち, 論理に飛躍のあるものが一番多く, 証明に必要な一つの命題を省略したり, 根拠を明記しなかったりする解答がみられた。構想が難しい問題では, 受容可能な証明を生成できた学習者は 25.0% と低く, 未完成な証明は 61.1% にも達した。また, Table 1-2 より, 未完成な証明の中でも証明を中断しているものが 36.4% と最多であった。つまり証明の生成過程において構想に困難さがある場合, 証明を中断する傾向があると考えられる。構成が難しい問題では, 受容可能な証明を生成できた学習者は 33.3% と低く, 未完成な証明は 52.8% にも達した。また, Table 1-2 より, 未完成な証明の中でも論理に飛躍のあるものを生成した学習者が 36.8% と最多であった。つまり証明の生成過程において構成に困難さがある場合, 論理が飛躍した証明を記述する傾向があると考えられる。

Table 1-1 証明生成課題（構想ヒント無）の反応（カッコ内は%）

構想ヒント無	受容可能な証明	未完成な証明	それ以外	無解答
基礎的な問題	25 (69.4)	8 (22.2)	0 (0.0)	3 (8.3)
構想が難しい問題	9 (25.0)	22 (61.1)	1 (2.8)	4 (11.1)
構成が難しい問題	12 (33.3)	19 (52.8)	1 (2.8)	4 (11.1)

Table 1-2 証明生成課題（構想ヒント無）の未完成な証明の誤答類型（カッコ内は%）

構想ヒント無	飛躍	誤り	中断	その他	計
基礎的な問題	4 (50.0)	2 (25.0)	2 (25.0)	0 (0.0)	8 (100.0)
構想が難しい問題	5 (22.7)	5 (22.7)	8 (36.4)	4 (18.2)	22 (100.0)
構成が難しい問題	7 (36.8)	5 (26.3)	2 (10.5)	5 (26.3)	19 (100.0)

3.2 分析の視点2：証明の構想を提示することによる証明の構成への影響について

Table 2-1 は、証明生成課題（構想ヒント有）問題の結果である。構想ヒント無の問題の結果と比較して、基礎的な問題に関しては、正答率は69.4%と変化はなかった。構想が難しい問題に関しては、正答率は33.3%であり、一部の学習者に構想を提示することがヒントとして機能していた。構成が難しい問題に関しては、正答率は26.5%と低くなり、Table 2-2 より、未完成な証明のうち論理に飛躍のあるものを生成する学習者が増えた。この結果から、構成が難しい問題では、証明の構想を提示することは証明を正しく生成するヒントとして機能しないばかりか、論理の飛躍を促す恐れがあることが示唆された。

Table 2-1 証明生成課題（構想ヒント有）の反応（カッコ内は%）

構想ヒント有	受容可能な証明	未完成な証明	それ以外	無解答
基礎的な問題	25 (69.4)	8 (22.2)	0 (0.0)	3 (8.3)
構想が難しい問題	12 (33.3)	19 (52.8)	1 (2.8)	4 (11.1)
構成が難しい問題	9 (26.5)	21 (61.8)	2 (5.9)	2 (5.9)

Table 2-2 証明生成課題（構想ヒント有）の未完成な証明の誤答類型（カッコ内は%）

構想ヒント有	飛躍	誤り	中断	その他	計
基礎的な問題	3 (37.5)	1 (12.5)	2 (25.0)	2 (25.0)	8 (100.0)
構想が難しい問題	6 (31.6)	7 (36.8)	5 (26.3)	1 (5.3)	19 (100.0)
構成が難しい問題	13 (61.9)	2 (9.5)	1 (4.8)	5 (23.8)	21 (100.0)

3.3 分析の視点3：未完成な証明の吟味について

Table 3 は、証明吟味課題における評価課題の結果（一部）である。

Table 3 証明吟味課題（評価課題）の反応（カッコ内は%）

評価課題	○	×	△
受容可能な証明	33 (91.7)	0 (0.0)	2 (5.6)
未完成な証明	9 (25.0)	22 (61.1)	4 (11.1)
不作法な証明(測定)	9 (25.0)	14 (38.9)	12 (33.3)
不作法な証明(具体操作)	9 (13.9)	11 (30.6)	19 (52.8)

調査の結果、受容可能な証明を証明できていると正しく選択できているのは91.7%であるが、論理に誤りのある未完成な証明を証明できていると選択した学習者が25.0%と一定数いることがわかる。また、測定による帰納的推論を用いた不作法な証明を証明できていると選択した学習者が25.0%、具体操作による帰納的推論を用いた不作法な証明が証明できていると選択した学習者が13.9%であった。この結果から、未完成な証明や帰納的推論を用いた不作法な証明を証明できていると誤って認識している学習者の存在が明らかとなった。また、不作法な証明（測定・具体操作）について、どちらともいえないを選択した学習者がそれぞれ33.3%、52.8%と多くみられた。この結果から、不作法な証明（測定・具体操作）では、学習者は証明が正しいか否かを判断することに困難を抱えていることが分かった。

Table 4、5-1、5-2は、証明吟味課題における修正課題の結果である。調査の結果、未完成な証明を読み、正誤判断をすることは比較的容易であるが、誤っている箇所を正しく修正することに困難を抱えている学習者の存在が明らかとなった。特に、未完成な証明のうち論理に飛躍のあるものについて、構想が難しい問題に関しては、82.4%が正しく正誤判断できたものの、飛躍している3か所を全て正しく修正できたのは14.7%と少なかった。修正箇所の中でも、2つの三角形を合同と示すための根拠である三角形の合同条件や、結論を示す根拠である合同な図形の性質を明記することができていないことが分かる。この結果を踏まえ修正箇所ごとの割合から見ると、命題そのものが省略されているものは比較的修正しやすいが、その根拠が省略されているものは論理に飛躍があるとはみなさず、修正できない学習者が多いことがわかった。これは、命題の根拠が記述されていなくても未完成な証明を受容可能な証明であると捉えていることが要因として考えられる。それに対し、論理に誤りのある未完成な証明については、飛躍のあるものよりも正しく修正できる学習者の割合は増えた。2か所の誤りを指摘し、どちらも正しく修正できた学習者は52.9%であり、各反応率と比較して、大きな差は見られなかった。このことから、論理に誤りがあると気付くことができた学習者はほとんど全員が誤りを正しく修正できることが明らかとなった。

Table 4 証明吟味課題（修正課題）における正誤判断問題の反応（カッコ内は%）

正誤問題	正しい	誤っている	無回答
①	4 (11.8)	28 (82.4)	2 (5.9)
②	8 (23.5)	23 (67.6)	3 (8.8)

Table 5-1 証明吟味課題（修正課題①）における修正箇所の反応（カッコ内は%）

修正箇所（修正課題①）	正答
前提P3	23 (67.6)
中間命題Rの根拠（2辺挟角）	14 (41.2)
結論Qの根拠（合同な図形の性質）	6 (17.6)
完答	5 (14.7)

Table 5-2 証明吟味課題（修正課題②）における修正箇所の反応（カッコ内は%）

修正箇所（修正課題②）	正答
$\times DC=EB$	20 (58.8)
前提P3	19 (55.9)
$\times 3$ 組の辺	21 (61.8)
中間命題Rの根拠（2辺挟角）	20 (58.8)
完答	18 (52.9)

4. 総合考察

以上を踏まえて総合考察を行う。本研究では、証明学習の困難性の要因を明らかにし、教育への示唆を得ることが目的であった。

4.1 本研究の成果

分析の視点1より、学習者が生成する未完成な証明の特徴が証明問題の種類によって異なることが明らかとなった。まず基礎的な問題と構成が難しい問題では、学習者は、論理に飛躍のある未完成な証明を学習者が生成する傾向がみられた。これは証明の構想はある程度できているものの、証明の構成と吟味に課題があるためと考えられる。これに対して構想が難しい問題では、学習者は中断した未完成な証明を生成する傾向がみられた。この要因として、証明の構想に困難性があるため、証明を生成できずに中断していることが考えられる。このように証明問題の特徴によって未完成な証明を生成する要因は異なっていると考えられるため、未完成な証明を改善するためには、それぞれの誤りに応じた指導が必要であると考えられる。加えて、基礎的な問題だけでなく、証明の生成過程において構想が難しい問題と、構成が難しい問題を意図的に取り扱うことで、証明を生成する力の育成につながることが期待される。

分析の視点2より、証明の構想を提示することは、証明を生成するヒントとして機能する場合も

あるが、構成が難しい問題においてはヒントとして機能しにくい場合もあることが明らかとなった。さらに証明の構想をヒントとして提示することでかえって、論理に飛躍のある未完成な証明の生成を促進してしまう懸念も指摘された。この要因として証明の構想を理解した時点で、証明が完了したと捉える学習者が多いことが予想される。つまり演繹的に正しく記述する必要性を認識していないことが問題として指摘できる。したがって証明の構想だけでなく証明の構成に明示的な焦点をあてた学習内容が重要であると考えられる。証明の構成に焦点を当てた学習内容として、例えば、今回の調査で扱ったような構想は比較的単純ではあるが推論過程が長くなるような証明問題を取り扱うことが有効であると考えられる。

分析の視点3では、未完成な証明や不作法な証明を受容可能な証明と誤判断している学習者の存在が明らかとなった。また未完成な証明を正しく修正することが困難である学習者が多い実態が示された。特に論理に飛躍のある未完成な証明について、命題の根拠が省略されているものを受容可能な証明であると誤って評価し、正しく修正できない傾向が明らかになった。つまり自らが生成した証明の未完成さを正しく評価できないことが、未完成な証明を生成する一要因となっていると考えられる。したがって、指導では、受容可能な証明と未完成な証明とを比較させながら、その区別を明確にさせることが重要であると考えられる。この点について、未完成な証明を読み正誤判断をすることは、学習者にとって比較的容易であることが示された。つまり証明を書くことより、証明を読むことの方が容易であった。したがって、証明指導では、まずは証明を読む指導から始め、それを足掛かりに証明を書く指導へとつなげていくことが効果的である可能性がある。とりわけ受容可能な証明だけでなく未完成な証明を読み、誤っている箇所を正しく修正する力を培う学習が重要であると考えられる。ここで提示する未完成な証明は、論理に誤りのあるもの、論理に飛躍のあるもの、中断しているものの3種類を取り上げることが重要であり、「証明が正しい」とは何かについて理解させることが重要となる。

4.2 今後の課題

本研究は図形領域における証明学習に焦点を当てたものであり、その中でも中学校第2学年で取り扱われる三角形の合同の証明学習に限定して議論を進めてきた。したがって今後の課題として、その他の単元や他領域でも同様の知見が得られるのかどうかについて検証してみる必要がある。また本調査は、全ての問題を同一の対象者に対して実施したものであった。調査時の行動観察や問題の提示順など、ある程度の配慮は行ったが、調査問題が相互に影響している可能性がないとは言えない。調査方法についてさらに改善を進め検証する必要がある。さらに調査結果を踏まえ、具体的な教材を開発し、教育実践を行うことを通して、得られた知見の妥当性について検証する必要がある。

註.

- 1) 証明の生成とは、証明の構想を立て、その構想に基づいて証明を構成することを意味する（太田，2017）。

付記

本稿は、第26回数学教育学会大学院生等発表会予稿集の内容に、新たな調査課題を分析対象として加え、加筆・修正したものです。また本研究はJSPS科研費22K13780の助成を受けたものです。調査にご協力頂きました生徒の皆様と先生方に、ここに改めてお礼申し上げます。

引用文献

国立教育政策研究所 (2007-2019). 平成30年度 全国学力・学習状況調査 報告書.

<https://www.nier.go.jp/18chousakekkahoukoku/report/data/18mmath.pdf> (2022年9月10日閲覧)

国立教育政策研究所 (2007-2019). 平成26年度 全国学力・学習状況調査 報告書.

<https://www.nier.go.jp/14chousakekkahoukoku/report/data/mmath.pdf> (2022年9月10日閲覧)

牧野智彦, 中学2年生による証明の記述に関する研究:記述された証明の分析を通して, 科教研報, Vol. 19, No. 6, pp. 29-34, 2005

太田一成, 学校数学図形領域における, 証明による命題の全称性の確立に関する研究—論理的に考える力の育成を目指して—, 信州大学教育学部研究論集, 第11号, pp. 1-20, 2017

辻山洋介, 学校数学における証明の構想の意義に関する研究, 数学教育学論究, 95, pp. 29-44, 2011

Senk, S, How Well Do Students Write Geometry Proofs?, Mathematics Teacher, 78, (6), pp. 448-456, 1985

Lin, MODELING STUDENTS' LEARNING ON MATHEMATICAL PROOF AND REFUTATION, 2005

牧野智彦, 生徒による証明に関する困難性の認知的特徴について, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 2014

岡本和夫・森杉馨・根本博・永田潤一郎他, 未来へ広がる数学2. 啓林館, pp. 94-157, 2020

文部科学省, 学習指導要領 (平成29年告示) 解説 数学編, p. 115, 2017

教育のICT化と学校のDX化に関する実践と考察

Practice and Consideration of ICT in Education and DX of School

塚 本 充^{*1}

(2022年9月29日 受付)

本論文では、最近の学校教育のICT化、および学校のDX化に関して、著者らがおこなってきた教員免許状更新講習での取組みや実践を通して、その期待される効果や課題などについて考察する。

キーワード：教育のICT化・学校のDX化

1. まえがき

ここ数年、特にコロナ禍での人同士の接触機会を減らすために種々の手続などのデジタル化が進みつつあり、政府諸省庁も「〇〇のICT化」や「デジタル化」という表現に加えて、もしくは、それらに代えて「DX化」という言葉を使い始めている。なお、DXとは、「デジタル・トランスフォーメーション (Digital Transformation)」を指しているという。

本論文では、まず、政府諸省庁での、ICTやDXに関わる定義や取組みを概観し、次いで、DXの提唱者といわれている研究者の論文中の原語の記述、表現について触れる。そして、参考までに関連するWebサイト上で公開されている和訳を示す。

また、これらを受けて学校教育におけるデジタル関連用語に関する基本的な考え方を示す。

さらに、教育のICT化や学校のDX化の取組みの一例として、著者らが昨年度までに10年以上にわたっておこなってきた教員免許状更新講習で取り扱った講習内容などについて記述する。

最後に今後の教育と学校のICT化、DX化について検討し、考察する。

なお、本論文では、英語表記の“digital”の和文表記を「デジタル」としているが、政府関係省庁のWebサイトや白書を含む種々の報告書、プラン、計画、ガイドラインなどでの説明においては、その中での記述である「デジタル」のまま表記する。

^{*1} 福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域（教育学部技術科）

従って、「デジタル」と「デジタル」の表記のゆらぎ、およびそれに加えて、「・」の有無による「デジタル・トランスフォーメーション」「デジタル・トランスフォーメーション」「デジタルトランスフォーメーション」のゆらぎが生じる。

2. 日本の各省庁におけるデジタル化・ICT化、およびDXについて

本章では、日本政府の各省庁でのデジタル化、ICT化の取組みや基本的な考え方などについて、報告書や白書などをもとに概観し、令和2年7月17日閣議決定された「世界最先端デジタル国家創造宣言・官民データ活用推進基本計画」のDXの定義と教育関連部分を紹介する。

2. 1 経済産業省

経済産業省は、あらゆる要素がデジタル化されていく Society5.0に向けて、経営者に求められる対応を「デジタルガバナンス・コード」として、令和2年11月9日に公表している。また、「コロナ禍を踏まえたデジタル・ガバナンス検討会」を開催し、同検討会の議論を踏まえ、必要な改訂を施した「デジタルガバナンス・コード2.0」を取りまとめ、令和4年9月13日に公表した。この中で「デジタルトランスフォーメーション（DX）」については、以下のように定義されている[1]。

企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること。

経済と産業を主な対象とする政府機関なので、企業やビジネスといった表現を用いて定義されるのは致し方ない。

2. 2 総務省

(1) 自治体DX

かつての自治省の機能・職務を引き継いだ総務省では、対象が都道府県、政令指定都市、市区町村などの自治体となるため「自治体DXの推進」を掲げて、以下のように述べている[2]。

令和2年12月、政府において「デジタル社会の実現に向けた改革の基本方針」が決定され、目指すべきデジタル社会のビジョンとして「デジタルの活用により、一人ひとりのニーズに合ったサービスを選ぶことができ、多様な幸せが実現できる社会～誰一人取り残さない、人に優しいデジタル化～」が示されました。

また、令和4年6月、「デジタル社会の実現に向けた重点計画」が閣議決定され、このビジョンが目指すべきデジタル社会のビジョンとして改めて位置づけられました。

このビジョンの実現のためには、住民に身近な行政を担う自治体、とりわけ市区町村の役割は極めて重要です。

さらにこれを踏まえて、「自治体デジタル・トランスフォーメーション（DX）推進計画」および「自治体デジタル・トランスフォーメーション（DX）推進計画【第2.0版】」[3] が策定されている。

また、ここで、DXの説明として、「ICTの浸透が人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させること」としている。さらに、重点取組事項の1点目の「自治体の情報システムの標準化・共通化」に続いて、「マイナンバーカードの普及促進」があることは何かと興味深い。

(2) 情報通信白書におけるDX

令和3年度版の情報通信白書の「第1部 デジタルで支える暮らしと経済」の「第2部 企業活動におけるデジタル・トランスフォーメーションの現状と課題」に「2 あらためて注目されるデジタル・トランスフォーメーション」があり、その「(1) デジタル・トランスフォーメーションの定義」の箇所には、以下のように記述されている [4]。

後述の3. の提唱者の定義に触れたのちに以下のように定義が記されている。

現在、世の中で使われている「デジタル・トランスフォーメーション」の定義は厳密には一致しておらず、使い方も人や場面によってまちまちであるが、本白書における「デジタル・トランスフォーメーション」の定義は、「世界最先端デジタル国家創造宣言・官民データ活用推進基本計画」（令和2年7月17日閣議決定）におけるものを踏襲することとする。

Digital Transformation（デジタルトランスフォーメーション）

企業が外部エコシステム（顧客、市場）の劇的な変化に対応しつつ、内部エコシステム（組織、文化、従業員）の変革を牽引しながら、第3のプラットフォーム（クラウド、モビリティ、ビッグデータ／アナリティクス、ソーシャル技術）を利用して、新しい製品やサービス、新しいビジネスモデルを通して、ネットとリアルの両面での顧客エクスペリエンスの変革を図ることで価値を創出し、競争上の優位性を確立すること

なお、デジタル・トランスフォーメーションと同様に、広い意味での「デジタル化」の範疇に含まれる概念として、「デジタイゼーション」と「デジタライゼーション」がある。国連開発計画

(UNDP) ではこの両者を次のように定義していると同白書のなかに記述がある。

Digitization (デジタイゼーション)

既存の紙のプロセスを自動化するなど、物質的な情報をデジタル形式に変換すること

Digitalization (デジタライゼーション)

組織のビジネスモデル全体を一新し、クライアントやパートナーに対してサービスを提供するより良い方法を構築すること

上記の3つのデジタルに関する用語の概念をイメージ図で表すと図1のように相違点を説明できると同白書には書かれている。

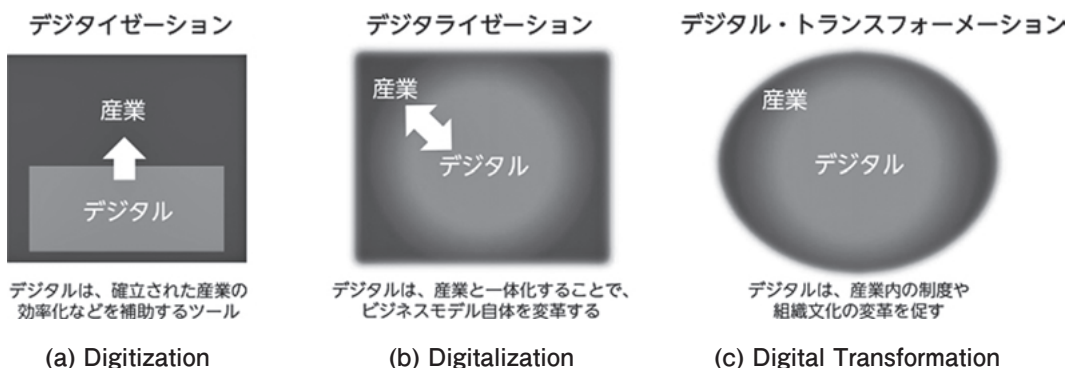


図1 デジタルに関する用語の概念図 [4]

“Digitization”, “Digitalization”, “Digital Transformation”ともに「産業」との関わりにおける説明であれば、図1のようになるということであろう。また、対象を教育や学校とするのであれば、図1の中の「産業」を「教育・学校」と置き換えればイメージは説明ができるものと思われるが、実際の取組みとなれば、一筋縄にはいかないことは、明白である。

2. 3 デジタル庁

この国に「デジタル庁」という政府機関が設立されてこの9月でちょうど1年となる。政府省庁や自治体等の業務などのデジタル化を推進することを主目的とする機関であるという。

今年9月1日には「デジタル庁活動報告書」が公表され、その1週間ほどあとにいずれかの記述が修正されたらしく、第2版として公開されている。この報告書の中の子どもや教育に関する記述は「3章 成果と進捗」「2節 デジタル基盤の整備による成長戦略の推進」「11項 教育分野のデジ

タル化」と「12項 こどものデータ基盤整備」に確認できる [5]。

ただ、どの記述も最終的には、国民に「マイナンバーカード」なるものを取得させて、「国民総背番号制」を強く推進することを目指していると思えない。

そもそも「digital (デジタル)」を「デジタル」と記述するような組織（や国、その政府）を信用・信頼できるわけがない。この手の批判は、際限なく続くので、この程度にとどめておく。

2. 4 文部科学省

(1) デジタル推進本部

令和2年12月23日に文部科学省デジタル推進本部が「文部科学省におけるデジタル化推進プラン」を公表した [6]。本プランでは、「Ⅱ 教育におけるデジタル化の推進」の中に「Ⅱ -1 GIGA スクール構想による一人一台端末の活用をはじめとした学校教育の充実」「Ⅱ -2 大学におけるデジタル活用の推進」「Ⅱ -4 教育データの利活用による、個人の学び、教師の指導・支援の充実、EBPM等の推進」あたりに学校教育に関する記述があるが、教育に関する「デジタル化」「ICT活用」などが中心であり、DXという表現は見当たらない。

ところが、別紙に「『GIGA StuDX推進チーム』の体制について」があり、最初のアルファベット部分は「ギガ スタディーエックス」と読むようではあるが、その後に現れる「学校DX」という表現を暗示しているように思われてならない。

(2) 総合教育政策局 令和5年度予算概算要求

令和4年8月29日に公表された「令和5年度予算概算要求 主要事項」には、教師の研修体制（教員研修プラットフォームなど）の構築に続いて、「2. GIGA スクール構想の着実な推進と学校DXの加速」という項目があがっている。ここでは、「(1) 教育DXを支える基盤的ツールの整備・活用」「(2) 教育データを活用した分析・研究の推進等（教育データサイエンス推進事業）」があげられ、「学校DX」「教育DX」という表現が出現した [7]。

(3) 学校DX推進本部

文部科学省は、令和4年3月4日に学校DX推進本部の初会合を開催した。デジタル技術を活用した教員研修の高度化、および教師のICT活用指導力の向上を目指し、校務の情報化と学校における働き方改革を具体化することを主な検討事項としているという [8]。

ここでも、DXなる語句の定義が明確にされていないが、上述の「デジタル推進本部」は、授業や校務などを含む学校教育全般のICT化を検討するものであるのに対して、「学校DX推進本部」は、特に教員側の研修や校務等のデジタル化を検討するという違いがあるようである。

なお、8月29日には、松野大臣から交代した永岡文部科学大臣のもとで第2回の学校DX推進本部が開催されたが [9]、会議の開催ごとに本部長が替わってしまうと、この夏を目途に結論を出すという目標は達成できないことになる。

2. 5 IT総合戦略室

情報通信技術総合戦略室（IT 総合戦略室）とは、平成12年8月7日に内閣官房に設置された組織で、高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部（IT 総合戦略本部）の事務局の役割を果たすとともに、ITの活用による国民の利便性の向上及び行政運営の改善に係る総合調整等を担ってきた組織であるという。その基本政策のひとつに「世界最先端デジタル国家創造宣言・官民データ活用推進基本計画」があり、令和2年7月17日に閣議決定されている [10]。

この冊子（PDF ファイル）の1ページ目の欄外に「デジタルトランスフォーメーション」の注釈がある。そこには、2. 2 (2) の令和3年度版の情報通信白書のデジタルトランスフォーメーションの説明の前に以下の部分に加えられており、双方を合わせた表現がDXに関する日本政府の公式の見解・定義であるといえよう。

Digital Transformation（デジタルトランスフォーメーション，DX）は、将来の成長，競争力強化のために、新たなデジタル技術を活用して新たなビジネスモデルを創出・柔軟に改変すること。

また、13ページ目からの「4 学び改革」には、カッコ書きで「オンライン教育」と書かれており、本来は学校の教室内でおこなわれる授業などのICT化を目指すはずの「GIGA スクール構想」が、いつの間にかコロナ禍における遠隔授業や家庭でのオンライン学習のためのデジタルコンテンツの充実にまでも拡大している。状況に合わせての柔軟な対応という見方もあるが、根本的に基本計画の軸足が定まっていないとの懸念を払拭できない。

3. DX提唱者の論文中の記述に関して

“Digital Transformation” は、提唱当時にはスウェーデンのウメオ大学（Umeå University）教授であったエリック・ストルターマン氏（Erik Stolterman）によって2004年に発表された“Information Technology and the Good Life”という論文の中で“The digital transformation can be understood as the changes that digital technology caused or influences in all aspects of human life.”と説明されている。

初出論文の紙媒体は著者の手元にはないので、ここでは、インターネット上に所蔵・公開されているサイトを参考までにあげておく。研究者向けの商用ソーシャルネットワーキングWebサイトであるといわれている「ACADEMIA」[11]，古くから論文の出版を支援してきた「Springer」のWebサイト [12]，さらには、何かと話題にあがることのある「ResearchGate」のWebサイト [13] でも、本論文は所蔵・公開されている。

なお、日本語訳を提供してくれている「株式会社デジタルトランスフォーメーション研究所」によれば「デジタルトランスフォーメーションとは人々の生活のあらゆる側面に、デジタル技術

が引き起こしたり、影響を与える変化のことである。」と訳されている [14]。ここでは、「～たり、～たり」の繰り返しの日本語文法には沿っていないが、和訳の表現はサイト上のものをそのまま示すこととした。

4. 本研究における学校教育のデジタル化関連の用語の考え方について

4. 1 学校教育のデジタル化とICT化

令和元年12月19日に文部科学大臣を本部長とする「GIGAスクール実現推進本部」が設置された [15]。そして、子どもたち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育ICT環境の実現に向けて検討がなされた。この「GIGAスクール構想」のもととなった総務省の「フューチャースクール構想」(平成22年度～25年度) [16] と文部科学省の「学びのイノベーション事業」(平成23年度～25年度) [17] の頃から、学校教育、特に授業の中でタブレット端末などを児童・生徒が一人一台を占有して活用することが検討され、実現されてきた。

令和元年までのいわゆるコロナ禍前の頃までは、学校の授業において、児童・生徒用のタブレット端末と教師が操作する授業支援システムとの連携により、子どもたちの理解が進んだり、情報共有が容易になされたりして、効率的でわかりやすい授業の実現にICTが活用されるという考え方であり、その際に活用される機器類をICT機器と呼んでいた。

また、コロナ禍前にも学校の校務にICTを活用することが求められていたため、学校教育においては「デジタル化」と「ICT化」とは、ほぼ同義で使われていたように感じており、本研究でもほぼ同義として捉えている。

4. 2 学校教育のDX化

2. 2 (2) でも書いたように令和3年度版「情報通信白書」の中で、産業との関係におけるDX化という表現が現れた。経済産業省の表現を教育に対して当てはめると教育におけるデジタル・トランスフォーメーションとは、以下のように説明できそうである。

学校が児童生徒や保護者、地域社会の劇的な変化に対応しつつ、教職員の変革を牽引しながら、コンピュータシステムのクラウド化やデータに基づく解析をおこない、新しい教育方法、授業方法、学習方法を通して、サイバー空間と実社会の両面での児童生徒を中心に据えた変革を図ることで、価値を創出し、競争上の優位性を確立すること。

最後の方の「競争上の優位性」という表現は、教育にはそぐわないが、よい置き換え表現が思い浮かばない。ここでは、教育を通じた「他国との競争上の優位性」を持つこととしておく。

また、学校教育のDX化とは、ICTやデジタル技術を活用して、授業、学習、校務などに対して、劇的に変革を図ることであると定義できるような気がしている。

いずれにせよ、昨今のコロナ禍の中で普及した「オンライン授業」「オンライン学習」と「対面型（面接）授業」を積極的に取り入れた授業構成は必須であるということであろう。

なお、「教育DX」に関しては、インターネット上の多数のサイトにおいて、定義や解説を試みているので、参考までにそれらのURLをあげておく [18] - [21]。

5. 教育のICT化と学校のDX化の試みについて

本章では、著者らが昨年度までに10年以上にわたって開催、実施してきた情報処理関係の教員免許状更新講習における実践を中心に授業のICT化や校務のデジタル化の方策について報告する。

5. 1 教員免許状更新講習における校務軽減対応の試み

情報処理関係の教員免許状更新講習は、福井大学の夏期休暇中に初級編を同一内容で2回、中級編を1回開催してきた。本講習では、福井大学総合情報基盤センターの専任教員と兼任教員である著者との2名とで講師を担当し、教育学部（教育地域科学部）での中学技術の教員免許状取得希望者を中心とした学生らが支援者を担当して、講習を運営してきた。

講習では受講されている先生方の校務の効率化や自動化に寄与できないかと思い、マイクロソフト社製 Excel 2016 を利用したマクロの取り扱いや同社製 Word 2016 における差込印刷なども扱ってきた。本節では、マクロの取り扱いを中心に講習での取組みについて紹介する。

(1) 表計算ソフトにおけるマクロの取り扱い

情報処理系講習の初級編では、マクロの取り扱いの入門程度を詳細に説明し、受講の先生方にも体験していただいた。また、作成したマクロに対応したマクロ記述言語である「Microsoft Visual Basic for Applications」のソースコードを表示して、初級者でも理解してもらえるように説明した。ソースコードとは、プログラミング言語を用いて記述したプログラムのことであり、現在学年進行中の小学校の学習指導要領に記述のある「プログラミング的思考」の取り扱いにマクロの記録で生成されるソースコードを提示してもよいかもしれないと講習内では述べている。本件については、文献 [22] にも簡単に触れられている。

① マクロの操作で使うワークシートの例

具体的な校務に利用できる可能性の高いマクロの取り扱いの例として、図2に示すようなある学級の児童の成績表を用いて、「合計点」「平均点」「教科合計」「教科平均」についてマクロを活用して自動計算させるためのものを用意した。

	A	B	C	D	E	F	G
1	4年1組の成績						
2							
3	名前	国語	算数	理科	社会	合計	平均
4	Aさん	91	100	88	93		
5	Bさん	92	95	90	100		
6	Cさん	77	90	93	81		
7	Dさん	78	65	70	74		
8	Eさん	84	100	84	90		
9	Fさん	95	80	86	84		
10	Gさん	72	71	81	84		
11	Hさん	78	70	89	86		
12	Iさん	75	91	81	92		
13	Jさん	85	68	93	77		
14	Kさん	90	72	87	85		
15	Lさん	86	75	89	80		
16	教科合計						
17	教科平均						
18							

(a) 4年1組の成績表

	A	B	C	D	E	F	G
1	4年3組の成績						
2							
3	名前	国語	算数	理科	社会	合計	平均
4	1さん	90	96	72	79		
5	2さん	87	85	78	88		
6	3さん	89	80	80	90		
7	4さん	90	88	88	93		
8	5さん	89	86	93	81		
9	6さん	77	90	81	84		
10	7さん	78	100	90	100		
11	8さん	90	100	84	75		
12	9さん	84	80	89	85		
13	10さん	79	84	91	81		
14	11さん	95	100	68	93		
15	教科合計						
16	教科平均						
17							
18							

(b) 4年3組の成績表

図2 成績表を記したワークシートの例

② マクロ操作の前準備

図2 (a) のワークシートを用いて、マクロを扱うが、最初に「ファイル」タブから、「オプション」を選択して、左側の「リボンのユーザ設定」を選んで、画面の右側のリボンのユーザ設定の「メインタブ」選択時に「開発」にチェックが入っていないことを確認し、次にそのサブメニューを順次展開すると、入門者にとっては難解な語句が並ぶことを確認する。比較的難解な開発者向けのメニューが並ぶために、初期状態では「開発」タブは選択されていないことを告げている。

そこで、一般のExcel利用者は、「表示」タブの「マクロ」を使えばよいことを述べて、「マクロの記録」と「記録終了」との間におこなわれた操作が記録されることを伝えている。

③ マクロの記録と確認、実行（図形表示）

ここで、「マクロの記録」ボタンを押すのであるが、いきな合計や平均を求めるのではなく、「新規ワークシート」を開き、まず、「挿入」タブ→「図」グループ→「図形」コマンドから、適当な図形を選択するように指示している。適当な図形を描いたのちに、「マクロの記録」ボタンを押してから、図形を選択したまま、場所を移動させたり、[Ctrl] + [C] と [Ctrl] + [V] とで、コピー&ペーストをおこなったり、[Ctrl] + [D] で図形を複製したり、[Ctrl] キーを押したまま、図形を移動させることによるコピーをしてみたりするように指示している。なお、図形の色や大きさを変えることも推奨している。

たくさん図形が描いたら「記録終了」ボタンを押すことを告げて、マクロ操作から脱出する。そこで、「マクロの表示」ボタンを押して、マクロ名を選択し「編集」ボタンを押すと「Microsoft Visual Basic for Applications」が起動して、操作に沿ったソースコードが記述されていることを確認する。入門者には、「プログラムの英語のような記述を読むとなんとなく意味がわかってくる

ような気がする」と感じてもらうことが大切であると考えている。

確認したら、「閉じる」ボタンで終了し、さらに新規にワークシートを開いて、「マクロの表示」から「実行」ボタンを押すと、瞬時にして多数の図形が表示されることが確認できる。

④ マクロの記録と確認、実行（関数利用）

ここまでの前準備を経て、図2(a)の表の「合計点」「平均点」「教科合計」「教科平均」を求める手順をマクロとして記録する。講習では、詳細は述べないで指示するだけであるが、関数を用いた操作手順をマクロとして正しく記録できている先生方は相当数おられた。なお、③④の手順では、マクロの保存先を「作業中のブック」もしくは、名前がついているファイルであれば、そのファイル名を選択する。

図2(a)の「4年1組の成績」で記録したマクロを右隣のシート見出し「4の2」である「4年2組の成績」の表で実行すれば、こちらも瞬時に表の「合計点」「平均点」「教科合計」「教科平均」が埋まって、ほとんどの受講の先生方は、驚嘆し、感動してくれる。

そこで、同様にして、さらに右隣のシート見出し「4の3」である「4年3組の成績」の表に対してマクロを実行すると、一瞬、「えっ??なんで??」との声が聞こえ、会場がざわつくこともあった。なお、図2(b)をよく見るとクラスの人数がほかの2クラスに比べて一人少ないことがわかる。

⑤ うまくいかない場合の対応例

講習では、④で示したようなマクロを用意しても想定した結果が得られない場合の対処例を示している。

ひとつは、「Microsoft Visual Basic for Applications」の画面上でマクロを編集することである。中級編の講習では、具体的にどの箇所をどのように書き換えると想定される結果が得られるかについてソースコードを元に解説した。その際には、セルの場所を相対的に指定していることも説明している。こちらは、中級以上の方にオススメするとしている。

もう一つの対処方法は、至って簡単であり、想定されるクラスの人数分や教科数のマクロを作成しておくことである。Basic系のプログラミング言語に関わりたくない先生方にはこちらを推奨した。

(2) ワードプロセッサと表計算ソフトとの連携による差込印刷

講習の初級編、中級編とも児童・生徒に渡す成績表の印刷を想定した差込印刷を扱っている。Word 2016の場合には、[差し込み文書]タブを選択後に表示されるリボンの「差し込み印刷の開始」ボタンを押したのちにリボンの左側から右側に向けてアクティブになっているボタンを押して操作していけば、最後に「結果のプレビュー」と「完了と差し込み」まで操作を進めることができることを説明している。

なお、この一連の操作に関しては、福井大学総合情報基盤センターが発行している本講習用にも利用しているテキストに詳細が記されている[23]。差し込み印刷用のデータを表計算ソフトで

作成したのちにそのデータを受ける枠の部分をワードプロセッサで作成するという操作の流れを説明している。

(3) 総合情報基盤センターや学校におけるDX化の試みの紹介

本講習の中では、講師の補助として、総合情報基盤センターの技術職員もセンターとしてのDX化の取り組みを紹介している。

たとえば、従来は、目視でおこなって報告していた日常点検業務の一部の自動化を図ったり、紙書類での申請であった学生の無線LAN登録申請についても、それを受け付けるWebサイトを構築して運用したりしていることなどを紹介した。

また、講師補助の技術職員は、学校教育のICT化、DX化に寄与するWebベースの「個人情報管理システム」を開発しており、従来の表計算ソフトを用いた個人情報の管理に比べると情報漏洩の危険性が小さくなると文献[24]では述べている。こちらの研究の概要と成果も講習を通して、現役の先生方に聞いてもらっていた。

5. 2 講習を通しての考察

今年7月以降の教員免許状更新講習の廃止が決まってしまう、ある程度の成果が出ていたと自負している講習の担当者としては、寂しく、残念な限りである。

この10年あまりの講習を通して、感じられるのは、現職の先生方のICT環境は大きく変わり、それに適応できる方々は、努力もあって、うまくこなしているように見える。そして、ベテランの先生方の中には、めまぐるしく変わるICT環境について行けない方々も散見された。数年前の講習では、Wordを用いてワードプロセッサの活用事例を紹介した際に、いつもは一太郎を使っているので、Wordに触れるのは初めてだという方もおられた。

本講習で扱ったExcelのマクロについても、どなたが作成したかはわからない学校独自の「学校マクロ」が存在しており、仕組みもわからずに、ただ、データに対してマニュアル通りにマクロを実行していたと報告してくれた方もおられた。これは、マクロがブラックボックスになっているので、自動実行するという機能のために危険を伴うと思われるが、多忙な先生方にマクロの中身であるコードの意味を理解することを求めるのは酷である。

学校のDX化を目指すには、まずは、自動化できることは情報システムに任せることになるが、やはりブラックボックス化は困るように思える。

6. むすび

本論文では、最近の学校教育のICT化、および学校のDX化に関して考えるに際して、まず、デジタル化やICT化、DX化に関する政府諸省庁での対応や定義について述べ、本研究での立場を示した。

次いで、著者らがおこなってきた教員免許状更新講習での取り組みや実践について、事例を通し

で紹介した。たとえば、Excelのマクロを利用すれば、処理の自動化が図られるので、校務での成績処理や書類作成の効率化が実現できるものと思われる。また、表計算ソフトとワードプロセッサとの連携による、差込印刷もワードプロセッサのみの利用でデータを手入力していく従来の手法に比べれば、事務処理の効率が上がる。従来、利用されてきたオフィスソフトの「やや高度な機能」を活用することで、種々の事務処理が自動化されたり、簡単になったりするので、学校のDX化の一助になると思われる。

また、文献 [24] の「個人情報管理システム」のようにWebシステムに代替できる処理があれば、積極的に導入できるとよいが、経費が伴うので、難しいかもしれない。

今後も、教育のICT化や学校のDX化に貢献できるような手法やシステムの開発が進められるとよいと考えている。

参考文献

- [1] 経済産業省：「デジタルガバナンス・コード2.0」；
https://www.meti.go.jp/policy/it_policy/investment/dgc/dgc2.pdf (2020年11月9日策定, 2022年9月13日改訂)
- [2] 総務省：「自治体DXの推進」；https://www.soumu.go.jp/denshijiti/index_00001.html (令和4年9月)
- [3] 総務省：「自治体デジタル・トランスフォーメーション (DX) 推進計画【第2.0版】」；
https://www.soumu.go.jp/main_content/000835167.pdf (令和4年9月2日)
- [4] 総務省：「令和3年版 情報通信白書」；
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/r03.html> (令和3年7月)
- [5] デジタル庁：「デジタル庁活動報告書」；<https://www.digital.go.jp/policies/report-202109-202208/> (2020年9月1日, 2022年9月8日 (第2版))
- [6] 文部科学省：「文部科学省におけるデジタル化推進プラン」；
<https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/000089227.pdf> (令和2年12月23日)
- [7] 文部科学省総合教育政策局：「令和5年度予算概算要求 主要事項」；
https://www.mext.go.jp/content/20220829-mxt_kouhou02-000024712_4.pdf (令和4年8月29日)
- [8] 文部科学省：「第1回学校DX推進本部を開催」；
https://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2022/20220304.html (令和4年3月4日)
- [9] 文部科学省：「学校DX推進本部 (第2回) 開催」；
https://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2022/20220829.html (令和4年8月29日)
- [10] IT 総合戦略室：政府 CIO ポータル「世界最先端デジタル国家創造宣言・官民データ活用推進基本計画」；
<https://cio.go.jp/node/2413> (令和2年7月17日閣議決定)
- [11] ACADEMIA：https://www.academia.edu/2052060/Information_Technology_and_the_Good_Life
- [12] Springer：https://link.springer.com/chapter/10.1007/1-4020-8095-6_45
- [13] ResearchGate：https://www.researchgate.net/publication/46298817_Information_Technology_and_the_Good_Life
- [14] 株式会社デジタルトランスフォーメーション研究所：デジタルトランスフォーメーション (DX) とは？～提唱者の定義を振り返る～；<https://www.dxlabs.jp/press/2021/10/08/2021-10-8-dx> (2021年10月8日, 2022年1月25日改訂)

- [15] 文部科学省：GIGA スクール実現推進本部について；
https://www.mext.go.jp/a_menu/other/1413144_00001.htm（令和元年12月19日）
- [16] 総務省：フューチャースクール推進事業；
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/kyouiku_joho-ka/future_school.html（平成25年）
- [17] 文部科学省：学びのイノベーション事業；
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1408183.htm（平成25年）
- [18] みんなの教育技術：「『教育DX』とは？【知っておきたい教育用語】」；<https://kyoiku.sho.jp/157256/>
- [19] Schoo for Business：「教育現場でのDXとは何か？活用事例や推進する際の注意点について解説する」；
<https://schoo.jp/biz/column/684>
- [20] AINOW：「教育DXの真の目的と課題-これからの時代を切り拓く教育DXを徹底解説」；
<https://ainow.ai/2021/08/27/257307/>
- [21] コアネット教育総合研究所：3分でわかる！今話題の教育キーワード特集「教育DXとは」；
<https://core-net.net/keywords/kw005/>
- [22] 塚本：教員養成大学学生へのプログラミングの指導に関する実践と考察；福井大学教育・人文社会系部門紀要，第4号，pp.253-266（令和2年1月）
- [23] 塚本，大垣内 共著，塚本編：「コンピュータ・情報処理・ネットワーク・モラル・セキュリティ」（2020）
- [24] 吉川，塚本：児童生徒の個人情報管理システムの開発；福井大学教育・人文社会系部門紀要，第5号，pp.223-235（令和3年1月）

※ 参考文献中のURLは2022年9月29日に存在していることを確認している。

大学生を対象にした 「旬の食材を取り入れた献立作成」の授業実践の評価

村上 亜由美^{*1} 岸本 三香子^{*2}

(2022年9月30日 受付)

大学生を対象に、旬の野菜及び季節感を取り入れた献立作成の授業を実践し、その教育効果を評価した。事前アンケート、季節別の献立作成課題、献立の基本と旬の食材やその調理方法、及び行事食に関する資料提示と献立作成課題へのコメントの返却、事後アンケートの順に実施した。その結果、評価項目「献立を決めるときに季節感を意識する」、「外食で季節感のあるメニューを選ぶ」、「季節の食材を取り入れた献立を立てることがある」では、授業後に有意に高くなり授業の効果が認められ、季節感への意識を高めることがわかった。今後の課題としては、調理技能の向上につなげ、旬の野菜の調理頻度及び摂取量を上げることである。

キーワード：旬の食材、献立作成、授業実践、大学生

1. 緒 言

日本人の野菜の摂取量は、この10年有意な増減はみられておらず、健康日本21（第二次）¹⁾の目標に、野菜の摂取量の増加が挙げられており、その目標値は平均値350gである。令和元年国民健康・栄養調査結果²⁾では、野菜摂取量の平均値は、大学生の世代である20～29歳の男性233.0g、女性212.1gであり、他の年代と比較して最も低かった。

食卓に上るじゃがいもやキャベツなど多くの野菜は周年化しており、旬がわかりにくくなっている。旬の野菜は、栄養価が高く安価であるため、旬を取り入れた献立を立てることは、不足しがちな野菜の摂取量を増やすことに効果的であると考えられる。また、行事食は、季節感のある暮らしに重要な役割を果たすとともに、旬の食材を用いた和食であることが多い特徴がある。

そこで本調査では、大学生の季節感、季節の食材に関する意識や知識、調理行動や食行動を調

^{*1}福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域

^{*2}武庫川女子大学食物栄養科学部

査するとともに、行事食の認知度及び喫食状況について調査した。さらに、季節感を取り入れた献立作成の授業を実践することで、その教育効果をみた。

2. 調査方法

(1) 調査時期、調査対象及びその属性

調査時期は、2020年10～11月及び、2021年11～12月に実施した。

調査対象者は、F大学2020年度及び2021年度後期の対象科目履修生135人のうち、研究に協力することを承諾した121人（男性95人、女性26人）を分析の対象とした。

属性として、出身地は、愛知県22人（18.2%）、福井県19人（15.7%）、石川県8人（6.6%）、岐阜県、三重県、長野県、他5府県であった。入学前の居住形態は、親を含む家族と同居が87人（71.9%）、祖父母を含む家族と同居が34人（28.1%）であった。現在の居住形態は、一人暮らしが85人（70.2%）、親を含む家族と同居21人（17.4%）、祖父母を含む家族と同居12人（9.9%）、その他3人（2.5%）であった。

(2) 調査方法 及び 調査項目

e-LearningシステムWebClassを用い、献立作成に関する授業の一部として実施した。事前アンケート、季節別の献立作成課題、資料提示「季節の食べもの」（表1）、「行事と行事食」³⁾、「献立の工夫」^{4),5)}（表2）、と献立作成課題へのコメントの返却、事後アンケートの順に行った。

調査項目は、属性、季節感、季節の食材について、調理と献立について、行事食の認知度及び喫食状況とした。行事には、伝統的な行事と、現在、商業的に行われる行事を加え、質問文にはその例となる料理名を明記した。

(3) 倫理的配慮

アンケート及び献立作成課題は授業として履修生全員に課したが、個人が特定されないよう統計処理をしたデータを研究論文として発表することを文書にて説明し、承諾の得られたものについて分析を行った。

(4) 統計処理

データの解析には統計ソフトIBM SPSS Statistics 26を使用した。事前事後の比較には、対応のあるt検定を用いた。

表1 提示資料「季節の食べもの（春、夏、秋、冬）」

タイトル	内 容
春の食べもの	青梅 アスパラガス 苺 ウド キウイ キャベツ きゅうり キンカン グリーンピース ゴーヤ サクラランボ さやえんどう 紫蘇 じゃがいも ズッキーニ ソラマメ たけのこ たまねぎ チンゲン菜 トマト ナス ニラ ニンニク ニンジン パセリ パプリカ 日向夏 ビワ ピーマン ふきのとう ブロッコリー マンゴー 水菜 レモン
料理の作り方（春）	若竹煮（たけのこの下準備）、若竹煮、アスパラガスの胡麻和え
夏の食べもの	冬瓜 イチジク 枝豆 やまいも オクラ かぼす きゅうり ゴーヤ とうもろこし ピーマン ズッキーニ かぼちゃ なす レタス そら豆 さやえんどう スナッPEndウ トマト セロリ じゃがいも 玉ねぎ ニンジン 桃 ぶどう 洋なし モロヘイヤ
料理の作り方（夏）	トマトと塩昆布のサラダ、きゅうりとたこの酢の物
秋の食べもの	りんご とうがん イチジク オクラ 柿 かぼす キクイモ 銀杏 栗 小松菜 ごぼう さつまいも 里芋 レタス すだち セロリ ダイコン 黒ごま チンゲン菜 ネギ 白菜 ほうれん草 モロヘイヤ ゆり根 落花生 レンコン
料理の作り方（秋）	さつまいものバターしょうゆ煮、里芋の煮っころがし
冬の食べもの	りんご レンコン ちぢみ小松菜 ほうれん草 レモン 柿 カブ キウイ キャベツ キンカン 銀杏 ごぼう グリーンピース さつまいも 里芋 春菊 大根 デコボン ニンジン ネギ 白菜 ハッサク パセリ ブロッコリー みかん 水菜 ゆず ゆり根 三つ葉
料理の作り方（冬）	ふろふき大根、白菜の簡単づけ

表2 提示資料「献立の工夫」

タイトル	内 容
日本人の食事摂取基準	日本人の食事摂取基準 2020年版 たんぱく質 こんな表をみてもわからない！献立はどうたてればいいの…？
食事バランスガイド	食事バランスガイド どうすればこんな献立がたてられるんだ…？
基本の献立	献立の立て方 基本は「主食・主菜・副菜」 主食は炭水化物、主菜はたんぱく質・脂質、副菜はビタミン・無機質 えっ、量ってどうすれば…？
1食分の目安	目分量で必要量（1食分）
調理の工夫	和風・洋風・中華の味付けで回そう 加熱方法を変えて食感を変えよう 冷凍保存を上手に活用しよう
味つけ	和風・洋風・中華風の味付けで回そう
加熱方法	加熱方法を変えて食感を変えよう 揚げる・煮る・炒める・茹でる・焼く・蒸す 茹でる・蒸すは「レンチン」で、揚げるは「揚げ焼き」で
冷凍保存	冷凍保存を上手に活用しよう 冷凍保存の敵は乾燥です

3. 結果

(1) 授業前の季節感

図表には示していないが、季節の変わり目を感じるのは、「洋服」78.5%、「食べ物」39.7%、「日差し」28.9%、「植物」19.8%、「エアコンの設定温度」17.4%、「気温」12.4%であった（複数回答可、n=121）。

食材の旬については、旬が冬である「春菊」を春、旬が夏である「冬瓜」を冬と名称から旬を誤っている回答があった。春から夏に収穫される「じゃがいも」は、旬を夏、秋、冬とする回答がそれぞれみられた。

授業前に食材を選ぶ基準（複数回答可）は、「値段」91.7%、「献立」47.9%、「新鮮かどうか」39.7%、「産地」13.2%、「旬である」10.7%の順で、旬は最も低い割合であった（図1）。

季節の食材の調理での困る頻度は、「いつも困る」9.9%、「時々困る」36.4%で46.3%が困っていた（図2）。

(2) 行事食の認知度及び喫食状況

表3に、行事食の認知度及び喫食状況を示した。

質問した行事食について、40%以上が「食べる」と回答したのは、割合の高い順に「お正月」91.8%、「クリスマス」88.4%、「大晦日」87.6%、「節分」81.0%、「土用の丑」63.7%、「鏡開き」51.2%、「ハロウィン」45.5%、「冬至」41.4%であった。その中で家族が作る割合の高い行事食は、「お正月」82.6%、「大晦日」69.4%、「鏡開き」50.4%、「冬至」36.4%であった。自分で作る行事食は5件のみで、「ハロウィン」7.4%、「大晦日」4.1%、「節分」2.5%、「月見」2.5%、「七夕」0.8%であった。家族が買う割合の高い行事食は、「クリスマス」62.8%、「節分」41.3%、「土用の丑の日」34.7%で、その3件は、自分で買う割合も高く、それぞれ14.9%、8.3%、5.8%であった。外食の割合が高かったのは、「土用の丑の日」15.7%であった。

70%以上が「知らない」と回答したのは「天神講」76.9%、「半夏生」75.2%、「重陽」73.6%であった。

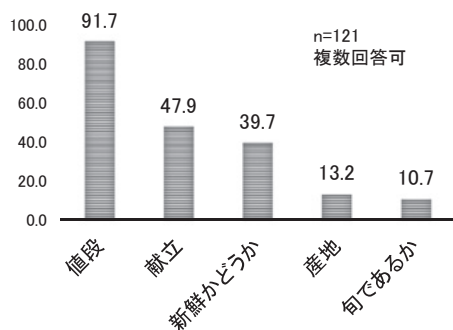


図1 食材を選ぶ基準（事前）

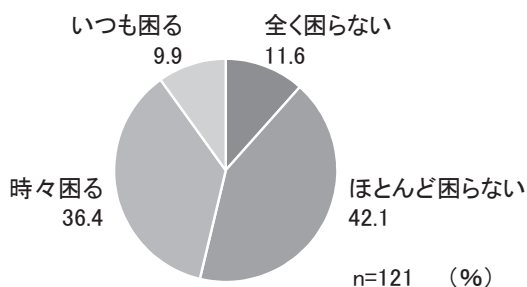


図2 季節の食材の調理に困ることがありますか（事前）

表3 行事食の認知度及び喫食状況

n=121 (%)

行 事	質問文に 提示した料理*	時 期	知らない	食べない	内食		中食		外食
			食 べ る こ と を 知 ら な い	知 っ て い る が 食 べ な い	家 族 が 作 る	自 分 で 作 る	家 族 が 買 う	自 分 で 買 う	外 食 す る
お正月	雑煮、おせち	1月1日	0.8	7.4	82.6	0.0	9.1	0.0	0.0
鏡開き	雑煮、しるこ	1月11日	15.7	33.1	50.4	0.0	0.8	0.0	0.0
天神講	カレー	1月25日	76.9	7.4	5.0	0.0	9.9	0.0	0.8
節分	煎り豆、鰯、 恵方巻	2月2日と 3日	0.8	18.2	27.3	2.5	41.3	8.3	1.7
ひな祭り	草餅、菱餅、 ハマグリのお汁	3月3日	24.8	52.1	11.6	0.0	10.7	0.8	0.0
彼岸	おはぎ	3月18日または 9月20日頃より 1週間	38.8	33.9	5.8	0.0	19.8	1.7	0.0
子どもの日	ちまき、 かしわ餅	5月5日	19.8	48.8	2.5	0.0	27.3	1.7	0.0
半夏生	たこ、鯖	7月2日	75.2	14.9	2.5	0.0	7.4	0.0	0.0
七夕	そうめん	7月7日	49.6	32.2	6.6	0.8	10.7	0.0	0.0
土用の 丑の日	うなぎ	7月21日	4.1	32.2	7.4	0.0	34.7	5.8	15.7
月見	だんご、里芋	8月15日と 9月13日	8.3	71.1	4.1	2.5	7.4	5.8	0.8
重陽	菊酒、くり飯	9月9日	73.6	18.2	8.3	0.0	0.0	0.0	0.0
ハロウィン	お菓子、 かぼちゃ料理	10月31日	4.1	50.4	14.0	7.4	5.0	16.5	2.5
冬至	かぼちゃ	12月22日 または23日	23.1	35.5	36.4	2.5	2.5	0.0	0.0
クリスマス	ケーキ	12月25日	0.0	11.6	6.6	2.5	62.8	14.9	1.7
大晦日	そば	12月31日	0.8	11.6	69.4	4.1	10.7	2.5	0.8

* 提示した料理が複数ある場合は、「どれか1つでも可」と質問文に明記した
最も割合の高かった回答を太字網掛けで示した

(3) 授業による食の季節感及び食行動の変容

図3に、授業による季節感及び食行動の変容の結果を示した。

「季節感を感じる暮らしをしたいですか」の質問には、「とてもそう思う」(事前→事後の割合、以下同様に示す) 39.5%→42.5%、「そう思う」50.0%→39.5%となり、事前でも季節感を感じる暮らしがしたいと思う割合は高かったが、事後にはより強く思うようになっていた(図3-a)。

「献立を決めるときに季節感を意識しますか」の質問には、「とてもそう思う」6.1%→8.8%、「そう思う」28.9%→46.0%となり、意識する割合は約20%有意に高くなった(図3-b)。

「外食で季節感のあるメニューを選びますか」の質問には、「いつもする」3.5%→7.1%、「時々する」55.3%→61.9%となり、選ぶ割合が約10%有意に高くなった(図3-c)。

「季節の食材を取り入れた献立をたてることがありますか」の質問には、「いつもする」1.8%

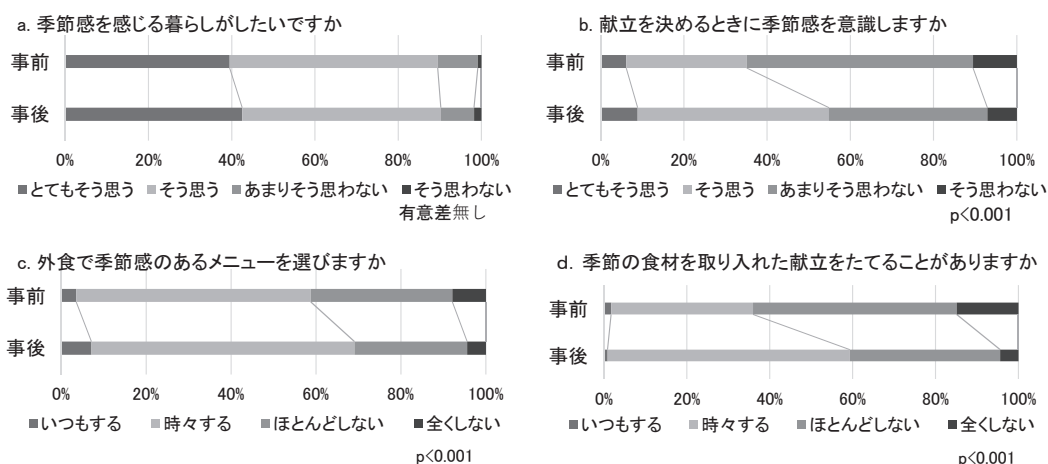


図3 授業による季節感及び食行動の変容

→0.8%、「時々する」34.2%→58.4%となり、取り入れた献立を立てる割合が約23%有意に高くなった(図3-d)。

4. 考察

令和元年国民健康・栄養調査結果²⁾において、野菜摂取量の平均値は、20～29歳の男性233.0g、女性212.1g、野菜摂取量の平均が350g以上の者の割合は、男性19.7%、女性14.8%と、他世代と比較して最も低値であった。

また、平成30年国民健康・栄養調査報告⁶⁾において、「主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を摂ることが1日に2回以上あるのは週に5回以下である」と回答した割合は、大学生世代である20～29歳の男性38.6%、女性38.9%と、他の世代より低かった。しかし同時に、「主食・主菜・副菜を組み合わせることでバランスの良い食事になることを知っている」割合は、20～29歳の男性89.5%、女性95.7%であり、知識と行動が伴っておらず、改善すべき課題となっている。

米田・栗山ら⁷⁾の大学生と親を対象にした旬の野菜に関する意識の調査では、全く野菜を摂取しない大学生は約12%であった。そして、「普段の献立を考える際に旬・季節感を考慮するか」の質問に「いつも気にする」、「時々気にする」と回答した割合は大学生49%、親93%であり、大学生の世代では野菜摂取への意識が低かったことを報告している。本研究の調査対象の大学生においては、献立への季節感の意識を「とてもそう思う」6.1%、「そう思う」28.9%、計35.0%とさらに意識は低かった。しかし、授業後の献立への季節感への意識は「とてもそう思う」8.8%、「そう思う」46.6%の計55.4%と、授業前より約20%有意に高くなった。

授業前には、食材を選ぶ基準に「旬である」とした割合は約11%と低値であり、また、季節の野菜をあげさせたところ、旬を誤っていた者も多かった。特に、じゃがいもなど貯蔵、出荷され

周年出回っている野菜は、旬がわかりにくい食材であることが推察された。

授業前において、季節の食材を取り入れた献立をたてることを「全くしない」、「ほとんどしない」は約65%、季節の食材の調理に「いつも困る」「時々困る」は約36.4%であったことから、季節の献立をたてない理由は、意識が低いことと合わせて、季節の食材の知識が少なく、調理技能も低いことによると考えられる。

従って、旬の食材や調理方法の提示により、これまで献立の季節感を意識していなかった者に対して意識させることができ、外食や献立作成において季節の食材を取り入れるような食行動の変容が可能であると示唆された。

5. 結 言

大学生の世代において野菜の摂取量を増加させることは、ここ最近継続している栄養的な課題である。本研究では、旬の食材とその調理方法の資料を提示することで季節感への意識を高めることが明らかになり、食行動の変容に繋がることが示唆された。今後の課題としては、調理技能の向上につなげ、旬の野菜の調理頻度及び摂取量を上げることである。

謝辞

本研究を進めるにあたり、調査にご協力いただきました学生の皆さんに感謝申し上げます。授業実践で履修生に提示した資料は、令和2年度食物学研究室卒業生 石丸穂波さんと考案・作成しました。感謝申し上げます。

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

引用文献

- (1) 厚生労働省 健康日本21（第二次）平成24年7月（2012）
- (2) 厚生労働省 令和元年国民健康・栄養調査報告 令和2年12月（2020）
- (3) 吉川誠次編著、生活科学双書食文化論 建帛社、東京（1995）
- (4) 厚生労働省 日本人の食事摂取基準（2020年版）、令和2年1月（2019）
- (5) 農林水産省 食事バランスガイド 平成17年7月（2005）
- (6) 厚生労働省 平成30年国民健康・栄養調査報告 令和2年3月（2020）
- (7) 米田千恵、栗山真央、野菜の栄養上の特徴と旬に関する意識、千葉大学教育学部研究紀要、65、383-388（2017）

「季節のたべもの」参考文献

- (1) 「ふくい旬」福井市農林水産部農政企画課https://www.city.fukui.lg.jp/sigoto/nourin/syokuiku/recipe_d/fil/fukuinoshun.pdf（2020.10.18 アクセス）

- (2) 「旬の里ふくい 野菜図鑑」 福井県流通販売課 <https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/021033/syun/con-58.html> (2020.10.18 アクセス)
- (3) 「野菜の旬」 キューピー <https://www.kewpie.com/education/information/vegetable/season/> (2020.10.18 アクセス)
- (4) 「野菜の旬ナビゲーション」 農畜産業振興機構 野菜振興部 https://www.alic.go.jp/y-suishin/yajukyu01_000076.html (2020.10.18 アクセス)
- (5) 「福井県 主な野菜の旬のカレンダー」 畜産産業振興機構 野菜振興部 https://vegetan.alic.go.jp/wp-content/uploads/P18_03.pdf (2020.10.18 アクセス)
- (6) 「旬の食べもの」 北陸農政局 <https://www.maff.go.jp/tohoku/monosiritai/syokutaku/tabemono.html> (2020.10.18 アクセス)
- (7) 「みんな大好き日本のくだもの」 全国柑橘消費拡大協議会・全国落葉果樹消費拡大協議会 令和2年7月 <https://www.maff.go.jp/j/seisan/ryutu/engei/attach/pdf/iylv-47.pdf> (2020.10.18 アクセス)

小学校、中学校音楽科における箏の指導の問題点と その打開を目指して

～洋楽と邦楽の融合による新しい日本歌曲の表現の視点と共に～

梅村 憲子^{*1} 麻植 美弥子^{*2} 星谷 丈生^{*3}

小中学校の音楽科においては、近年日本の伝統音楽についての教科書の記述が増え、その導入も低年齢化されている。しかし、教育現場では音楽科や音楽担当教諭の和楽器に対する知識や技能が追いついていないという根本的な問題がある。本論文では小中学校における和楽器（箏）指導の諸問題を明らかにし、その解決のための具体的提言を行う。また、日本歌曲の演奏においては日本語の発音の問題、日本情緒の発露と西欧式発声との関連などの多くの問題は解決しておらず、日本歌曲そのものがクラシックの他ジャンルに比して国際的評価の俎上に上る事すら稀である。本論文後半では日本歌曲演奏の表現の突破口としての箏に注目し、声楽家、箏奏者、作曲（編曲）者、それぞれの立場からの考察を行う。

キーワード：和楽器指導・ゲストティーチャー・日本歌曲演奏・箏・編曲

I、初めに（梅村）

1、和楽器指導の問題と箏伴奏の日本歌曲について

教育芸術社の教授用資料にも「平成29年告示の新学習指導要領では、表現領域の楽器の取扱いにおいて、これまで第5学年及び第6学年において取り上げる旋律楽器として例示されていた和楽器が、第3学年及び第4学年の例示にも新たに加えられた」（教育芸術社 2019 p.4）とあるように音楽科における和楽器や日本の伝統的音楽の比重は増え、記載される学年も低年齢化している。

しかし、教員の養成機関である教員養成学部の音楽の授業カリキュラムにおいて、和楽器の授業が教科書の比率と同等に順調に増えているとは言い難い現状である。

^{*1}福井大学教育学部准教授。声楽家

^{*2}福井大学教育学部非常勤講師。箏奏者

^{*3}福井大学教育学部准教授。作曲家

本学においても音楽科教員養成のカリキュラムでは和楽器に8時間が充てられているだけで4年間を通じて学ぶことができるピアノや声楽などの他の実技に比べて時間数は著しく少ない。和楽器指導を重要視したカリキュラムを謳っている教員養成学部も皆無であり、音楽大学などでも同様である。和楽器については文科省の降る旗と教員養成の現場の現状との落差は明らかであると言わざるを得ない。

文科省主催の教員向け和楽器研修会なども開かれているとは言うものの、教員が自信を持って授業を展開するには単発の研修会だけで十分であるとは言い難く、また、その多忙さがしばしば社会問題となっている教員が和楽器の研修会に多くの時間を割けるかどうかの問題もあろう。

一方、梅村は麻植の箏奏者としての活動に以前より注目していた。声楽や様々な洋楽器とのコラボレーションを盛んに行い、現代作曲家による特殊奏法もこなす麻植は、箏の持つ楽器としての制約を乗り越え新しい世界を広げることのできる演奏家であり、麻植の姿勢は長きに亘り日本歌曲演奏に携わってきた梅村にとって、箏を用いた新しい日本歌曲演奏の可能性を示すものであった。

麻植の着任の初年度より、梅村と麻植は学校での和楽器指導に対するアプローチとして教育現場への出張授業を開始した。同時に既存の日本歌曲の箏伴奏への編曲を試み、授業内の講師演奏に両者の共演を置き、出張授業が単なる箏体験に留まらず、声楽と箏のコラボレーションにより音楽に和洋の垣根などないこと、クラシックと邦楽の融合によって他にはない魅力のある音楽が生まれることを生徒たちに示すことを出張授業の目的の一つとした。

箏伴奏によって楽曲の日本情緒はより色濃く表出され、歌い手は箏の音色に助けられて歌に集中できる状況が生み出された。声楽発声を犠牲にしても日本情緒の世界観を優先すべきかという、二律背反ともいえる選択の恐れは遠のいたように思え、それはこれまで梅村が模索していた、日本歌曲演奏においても声楽発声を正しく守り、なおかつ十分な日本情緒を表現することへの一つの答えであった。

梅村と麻植は教育者として出張授業を積極的に行い、演奏家としては箏伴奏の日本歌曲という日本歌曲演奏の新しい姿の発信も推し進めている。本論文ではその双方の取り組みについて論じる。

2、福井大学拠点の梅村と麻植の活動の軌跡

(1) 両者による出張授業の内容の変遷

梅村と麻植による出張授業は高志中学校及び高志高校音楽科教諭の北島恵美子の協力を得て、3年間に亘り高志中学校1年生3クラスに対して実施した。授業の後半のさくらリレーによる箏体験は、どの年度の生徒たちも大いに楽しんで取り組んでいたが、さくらリレーと同様の比重を前半の声と箏による講師演奏に置き授業を組み立てた。前半部分の取り組みと授業の目当ては以下の通りである。(さくらリレーについては第V項で述べる)

①2020年1月28日《“箏”体験講座&ソプラノと箏曲の歌聞き比べ》

歌を伴う箏曲における所謂地声を用いた麻植の歌声と、声楽家梅村のソプラノの声との違いの感受を授業のめあてとし、生徒たちも《さくらさくら》と《ソーラン節》を異なった声のイメージで歌う活動を行った。しかし合唱などで推奨される所謂頭声発声と、箏曲で用いる地声との明確な違いやそれぞれの特徴や良さの発見には至らず、単なる聴き比べ体験に終わった印象があり、次年度への反省点とした。(1年目の詳細は『福井大学教育実践研究』第45号2020 pp.1-9に掲載)

②2021年2月10日《声と箏のアンサンブルを楽しもう！》

“声と箏のアンサンブル”を生徒、講師、アシスタント学生の3者で行い、アンサンブルの面白さを味わうことをめあてとした。昨年度出番のなかった大学生も箏演奏と歌で授業に参加することにより、中学生だけではできないアンサンブルが実現し、子どもたちにとって得難い時間となった。梅村と麻植による箏伴奏の日本歌曲の演奏も行ったが、子ども達にとって大学生とのアンサンブルが大きな音楽の学びに繋がることが期待されたため、来年度は講師2名による演奏ではなく、講師、学生、生徒の3者による声と箏の共演をさらに充実させ、聴く耳も養いたいという発展的な展望が出された。

③2022年2月10日《箏を知ろう、弾いてみよう、アンサンブルしよう》

3年目は講師演奏に團伊玖磨《花の街》(伊藤慶佑編曲)を置き、梅村、麻植、大学生の3者の共演を行うこととした。さらにクラスを半分に分けてお互いの演奏を聴きあう時間を設け、アンサンブルを聴く耳を育てることをめあてとした。コロナ禍により対面での実施は中止となったが大学でビデオレターを作成し、北島はビデオレターを使用して授業を行った。(3年目の取り組みについては『福井大学教育実践研究』第47号に掲載予定)

(2) 箏伴奏の日本歌曲について

梅村と麻植がこれまでに取り組んできた箏伴奏による主な日本歌曲は以下の通りである。

- ・《平城山》平井康三郎(詩/北見志保子。中島雅楽之都編曲)：1935年作曲。平井について畑中は「彼の音楽の中には、その端緒からして〈日本的なるもの〉の模索があった」(畑中1991 p.52)と述べており、黒沢は歌詞について「奈良時代から平安初期風の、古風な格調を詩人が求めた」(黒沢2003 p.65)としている。ピアノパートも明らかに箏を模した音型であり、原曲と箏編曲との距離感が非常に近い。格調高い歌詞による日本情緒溢れた芸術性の高い楽曲であり、箏との共演には最も相応しい楽曲と言える。
- ・《浜千鳥》弘田龍太郎(詩/鹿島鳴秋。長沢勝俊編曲)：1920年(大正9年)に童謡として作曲されたが、長いフレーズ感を必要とするメロディは芸術歌曲のものに近い。小学校6年生の音楽教科書に「歌いつごう 日本の歌」として掲載されている(教育芸術社2018 p.49)。長沢による尺八と箏との編曲を歌に転用した。旋律にペントニック以外の音は一切用いられてい

ないため、《平城山》と共に箏の平調子との親和性が高く声楽と箏との共演に相応しい楽曲である。

- ・《お六娘》橋本国彦（詩／林柳波。河副功編曲）：1929年作曲。出張授業において中学生に本格的な声楽曲を聞いてもらいたいとの梅村の意向により取り上げた。日本情緒溢れる歌詞、民謡風の旋律ではあるが、橋本の筆致は縦横無尽で演奏の難易度の高い楽曲である。ピアノから箏への編曲によって伴奏パートは賑やかな祭囃子のような表情を持ち、声との掛け合いがピアノにはない親密性を生んだ。その結果村の若者と彼らのアイドルであるお六娘のドメスティックな歌詞の世界観に合致した楽曲となり、楽曲の世界観を濃厚に表出できたのではないかと考える。
- ・《舞》橋本国彦（詩／深尾須磨子。星谷丈生編曲）：舞については第Ⅵ項で詳しく述べる。
- ・《花の街》團伊玖磨（詩／江間章子。伊藤慶佑編曲）：1947年作曲。出張授業において学生との共演を念頭に選曲した。和風とは言えない楽曲であるが、ピアノにはない箏の“軽み”が軽快な楽曲に思いのほか合致した。中学校の歌唱共通教材であるため、今後の出張授業では事前練習の上、生徒たちも一緒に歌うなどの方法も考えられ、今後応用できる楽曲である。
- ・グレゴリオ聖歌《クレド》と《六段の調》の同時演奏：既存の日本歌曲ではないが、両者の演奏の中心的レパートリとなるものである。麻植のイタリアでの演奏経験と梅村のグレゴリオ聖歌の知見を元に“祈りの言葉”を重視し、皆川達夫の仮説から一步踏み込んだ解釈を進めた。

(3) 福井大学を拠点とした出張授業及びコンサート（予定を含む）

ここでは梅村と麻植のこれまでの取り組みを一覧にして示す。麻植の本学非常勤講師1年目である2019年から出張授業、コンサート共に継続して行っており、コロナ禍に翻弄された2年間はリモート配信、ビデオレターなどによって発信を続けた。これらの活動は梅村と麻植のこれまでの教育者として、演奏家としての経験があって可能となったことを付記したい。

年度	月日		タイトル等	対象	演奏曲など
2019年度	10/20	コンサート	お箏とソプラノによる小さなコンサート	音楽科学生 音楽科教諭	六段の調、平城山、千鳥の曲 他
	1/28	出張授業	音楽科出張授業 箏体験講座 in 高志中学校	高志中学校1年生3クラス	お六娘、千鳥変化 他
2020年度	8/9	コンサート（リモート）	福井大学公開講座 《お箏の世界～和と洋のコラボ&お箏を弾いてみよう～》	一般	平城山、お六娘 他
	10/31	コンサート	福大ミニレクチャーコンサート～箏を知ろう～	音楽専攻学生	六段の調、お六娘 他
	12/25	コンサート（リモート）	福井大学公開講座《和と洋の饗宴 日本歌曲百花繚乱》	一般	平城山、お六娘 他

年度	月日		タイトル等	対象	演奏曲など
2020年度	2/28	出張授業	声と箏のアンサンブルを楽しもう！	高志中学校1年生3クラス	お六娘、風にきけ part II 他
2021年度	9/26	コンサート	福大ミニレクチャーコンサート	音楽専攻学生	六段の調、千鳥の曲 他
	12/25	コンサート(リモート)	福井大学公開講座《箏の世界～箏とソプラノのコラボコンサート&箏の秘密を探ろう～》	一般	舞、沈黙の月 他
	2/10	出張授業(ビデオレター)	箏体験講座 in 高志中学校 ～箏を知ろう、弾いてみよう、アンサンブルしよう～	高志中学校1年生3クラス	花の街、さくらさくら 他
	2/19	レクチャー&コンサート(リモート)	福井大学音楽講座 《レクチャー&コンサート 声と箏の可能性の追求》	音楽科教諭	舞、クレド+六段 他
2022年度	10/2	コンサート	福大ミニレクチャーコンサート	音楽専攻学生	六段の調、風にきけ part II 他
	10/9	コンサート	地域貢献推進事業《民話とわらべ歌による音楽広場》	一般	かごめかごめ、シジミの恩返し 他
	10/28	出張授業	附属箏体験授業 聴いてみよう、知ろう、弾こう、アンサンブルしよう	附属前期課程5年生2クラス	浜千鳥 みだれ 哀歌 他
以下予定	2/9	出張授業	箏体験講座 in 高志中学校～箏と声で音楽しよう！聴きあおう！響き合おう！～(仮称)	高志中学校1年生3クラス	
	2/10	出張授業	箏体験講座 in 附属後期課程～箏体験&声と箏のアンサンブル体験～(仮称)	附属後期課程1年生3クラス	

Ⅱ、福井県下音楽科教諭及び音楽担当教諭に対するアンケート（麻植）

梅村と麻植は2021年8月、県下小中学校の音楽科教諭及び音楽担当教諭に対し、発声と箏の指導についてアンケートを実施した。小学校は小学校音楽部会水野会長（文殊小校長（'21年度当時））の協力を得て各地区ブロック経由でメーリングリストによるメール配信。中学校は紙媒体を各学校宛に送付した。中学校81校中、発声について39校、箏指導について40校、小学校195校中、発声について92校、箏について89校の回答があった。

発声指導についても中学校、小学校共に様々な問題が浮き彫りになったが、発声指導についての論考は別の機会に譲り、本論文では音楽科教諭1人の努力では解決が難しい問題が散見される和楽器（箏）の指導について考察する。

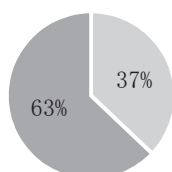
1、アンケート集計結果

アンケートを実施するにあたり小学校も対象としたのは、我が国の音楽教育において和楽器授業の更なる充実が進められ、平成29年に小学校および中学校の学習指導要領が改訂され、それまで鑑賞のみであった小学校の学習指導要領が、令和2年度から小学4年生で「ことをひいてみよう」との内容が新たに加わった（文部科学省小学校学習指導要領平成29年告示、令和2年施行）ためである。西洋音楽を中心に学んできた教員にとっては和楽器指導は大きな課題の一つである。

設問1 音楽科の箏の指導についてお聞きます。→2に○をつけた方は設問6へ

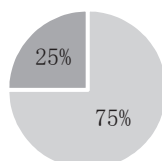
小学校

- 1. 授業を行っている 33
■ 2. 授業を行っていない 56
(鑑賞のみの場合も)



中学校

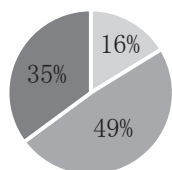
- 1. 授業を行っている 30
■ 2. 授業を行っていない 10
(鑑賞のみの場合も)



設問2 箏の授業(指導)についてお聞きます。→2又は3に○をつけた方は3～7までの設問へ

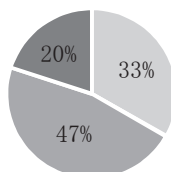
小学校

- 1. 困っていることはない 6
■ 2. 困っている点がある 18
■ 3. どちらともいえない 13

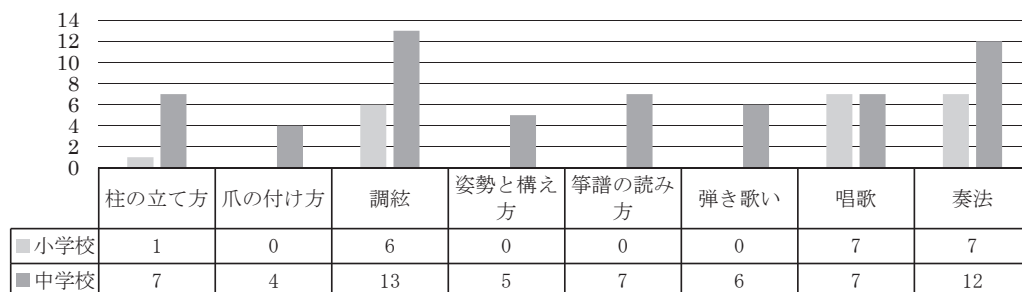


中学校

- 1. 困っていることはない 10
■ 2. 困っている点がある 14
■ 3. どちらともいえない 6

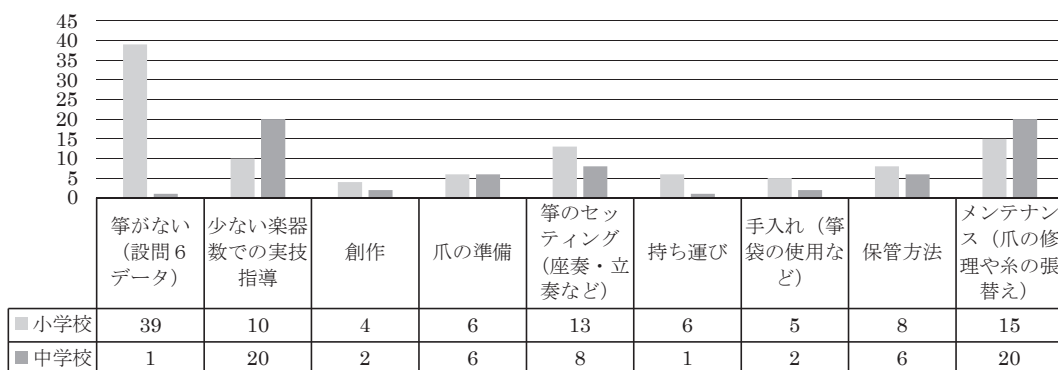


設問3 箏の演奏について困っている(わからない、よく知らない)と感じている



その他 (小学校)	・外部講師をお願いしているが、自分が指導するとなると困る。
その他 (中学校)	・調弦（子供たちは合っているのかわからないようで（チューナーも数がない）結局時間がかかる）・台数が少ないので指導が難しい・全て実際に指導を受けたわけではなく、今年度・昨年度も行っていないのでよくわかっていない。・楽器数・準備や管理・奏法（やり方・種類）について、まだしっかり理解できていない部分がある。

設問4 実技指導を行う上で、困っていること（複数回答）



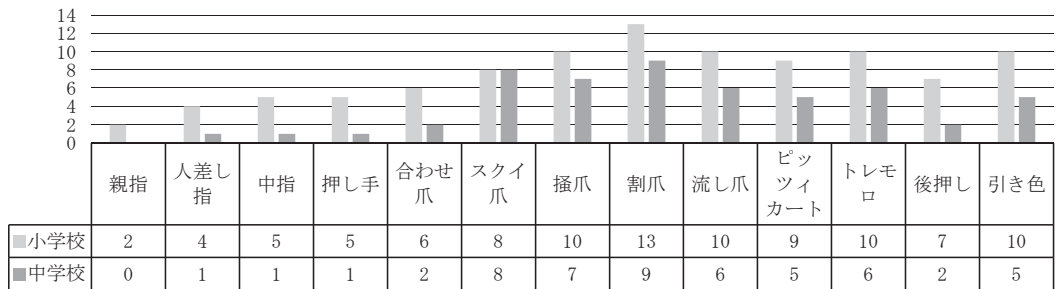
その他 (小学校)	・外部講師をお願いしているが、自分が指導するとなると困る。講師を招いて行うので単発的・時間がかかる・持ち運び：車
その他 (中学校)	・自分で糸の張り替えができない・店舗まで持参しなければならない(糸)・大野市だと福井市までの運搬が大変・高級な爪は用意できないが、爪の修理方法がわからない。

設問5 実技指導の内容についてお聞きます（複数回答）

弾き方を指導した指	小学校	中学校
親指	30	28
人差し指	11	9
中指	6	9

箏は本来右手の親指、人差し指、中指にそれぞれ爪を付けて演奏する。回答から、多くの学校が親指のみで弾く指導をしている現状が読み取れる。

奏法について指導に困る（わからない・よくしらない）と感じている点



その他 (小学校)	・短期間で良い音色を出せるようにすることが難しい。・全体的に困っている・奏法とよめるような指導ができていない。
その他 (中学校)	・スクイ爪（教えるのが難しいです。音が小さくて…。子供たちもこれでいいの？という感じ）・トレモロ（上手にできないので、コツを知りたい）・輪れん・ここまで生徒に指導していない。

設問6 箏の授業を行わない（又は鑑賞のみ）理由を差し支えない範囲で記入

小学校	・楽器がない・技術がない・箏の指導は専門外の教員にとってはハードルが大変高く、備品で置いても使いこなせないというのが現状なので、備品申請をしておりません。・文化フォーラムの事業を利用し、5～6年で和楽器体験を行っている→1人1面使えてありがたい。・講師の先生を知らない。・箏を借りる手間・コロナ（講師を招けない、感染対策、特に爪について）・小学校で実技指導はとりあげられていないため。・親しみがなくハードルが高い。・文化フォーラムの事業を利用しているため。・講師と予算が合わない。・扱いに自信がない。・越前市は中学校で扱うため。・低学年の担任しか経験がないため。・時間が十分にとれない。・購入費がない。・初任で授業がそこまで到達していない。
中学校	・箏が足りない。・調弦が大変・今後実践予定（検討中）・楽器はギターに重点を置いているため、箏は鑑賞のみ。・時間数・コロナ感染症への対策で、昨年度・今年度はできない。・箏や爪などはある程度数があり付属の中学校では講師の先生を呼んで、集中講座のような形で授業をおこなっている。・和楽器の授業では、雅楽を行っているため。・和楽器の実技指導は地域の伝統芸能である太鼓を扱っているため。

設問7 その他、講師への質問、要望など（箏を用いたアクティブ・ラーニングについても含む）

小学校	・小学校段階で必要な奏法について知りたい。・数が少なくとも子供たちが楽器に触れ合える授業づくりの方法を知りたい。（2～3面で30人以上等）・「ことをひいてみよう」は4年生の単元だが、5～6年生でも良いか？・楽器の扱い、奏法など・「さくらさくら」を弾く以外、体験を知りたい。・良い爪の入手が困難。楽に楽器屋さんで購入やメンテナンスを頼めるよう県のしくみを整えてほしい。・質問3、4の内容について・講師を紹介してほしい。・iPad等アプリの箏でも差し支えないでしょうか？・坂井市でも和楽器体験を。・セッティングやピッチが合わない。・鑑賞の授業でのポイントやワークシートの工夫について。
-----	--

中学校	・ICTを活用した授業等を教えて下さい。・「さくらさくら」の演奏を指導しています。弦の番号を覚えて弾くこと、姿勢などの他に指導のポイントがあれば教えてください。・箏を使った授業展開の工夫の例などを学びたい。・生徒が興味をもって活動に取り組むための課題設定や授業の活動内容について。・奏法について、こうやる！といったような指導方法・コツを教えてください。また少ない楽器数での実技指導も実践例を知りたい。・「中と高でオススメの時間」といった授業づくりもお聞きしたい。・調弦してしまえば、どのように弾いてもある程度仕上がってしまう創作をより深める学習の手だて、支援
-----	---

2、アンケート結果から見えるもの

現在、箏がない、楽器数が足りない等、学習環境が整っていない中、音楽教諭は箏の実技指導も含めた和楽器授業を要求されている。アンケートからは、現場の教員の切実な悩みがひしひしと伝わってきた。熱い思いで何とかしようと努力されている教員の方々の姿が目に見え、浮かぶ。

学習環境を整える意味でも是非行政のさらなるサポートを期待したいところである。

Ⅲ、声と箏の可能性の追求（梅村）

1、コンサートの概要

リモートによる実施となりました。お申し込みいただいた方には動画を配信いたします。2/18(土)10:00の2日間(4時間)に開催いたします。申込期間も延長致します。

福井大学音楽講座

レクチャー&コンサート

「声と箏の可能性の追求」

第1部 コンサート
『クレド』（グレゴリオ聖歌）＋ 八幡校校「六段」
古崎克彦 永澤二穂（箏・笛奏）
横本国彦/澤尾須磨子（星谷太生編曲）『舞』
各ワークショップメソッド「さくらリレー」（聴衆参加）

第2部 声のレクチャー
解剖学的見地に基づいた発声理論の基礎

第3部 箏のレクチャー
箏の指導の悩みを共に考える

2022年2月13日（日）14:30～16:00（14:00開場）
福井大学アカデミーホール
入場無料（要事前申し込み、先着50名）
申し込み方法：メールにてお申し込みください
fukudai_ongekukouza@gmail.com QRコードからもお申し込みいただけます
申し込み期間：2022年1月10日（月）～2月4日（木）～17日（木）

講師 福井大学教育学部准教授 梅村 恵子（声楽）
福井大学教育学部非常勤講師 麻植 美穂子（箏）
琴奏者 麻植 理恵子
アシスタント 福井大学教育学部音楽専攻学生

レクチャーでは福井大学の小中学校の音楽（担任）の先生方へのアンケートを基に、声と箏の組み合わせについて解説します

お申し込み時以下の項目をお書きください
お名前（氏名と姓）としてください
お名前（フリガナ）
お参加人数
おメールアドレス
お電話番号（緊急連絡用）
お住所
お書きいただいた個人情報は講座以外の目的では使用しません

fukudai_ongekukouza@gmail.com からのメールを受け取れるように設定をお願いします。主催者からのメール返信ができません。お申し込みいただいても受付できません

楽器や専攻の発表、スタッフのマスク着用など感染対策を万全に実施します。コロナ禍の状況によっては中止または内容の変更をすることがあります。ご入場の際はマスク着用など感染対策にご協力ください

主催 福井大学教育学部附属研究（声楽）
TEL/FAX 0776-27-67966
(電話FAXでのお申し込みはできません)

資料1 リモート用ちらし

アンケート結果を受けて《福井大学音楽講座レクチャー&コンサート 声と箏の可能性の追求》と題し、教育現場の音楽担当教諭を対象に梅村と麻植による実演と指導への提言のレクチャー&コンサートを行った。（資料1）

レクチャーに先立つコンサートは、両者の目指すものを実際の演奏で感じ取っていただくことを目的とした。

梅村と麻植は共に演奏家であり、伝えたいメッセージはその演奏にすべてが現われることを信念としている。また、言葉を超えて音楽が伝えられることの大きさを先生方に示したいとの願いも強く持っており、両者にとってコンサートは必須であった。

レクチャー&コンサートは2022年2月13日（日）福井大学文京キャンパスアカデミーホールにおいて実施予定であったが、コロナ禍によりリモート（動画配信）によ

る実施とした。2月13日に音楽棟実習室Aにて録画、2月19日、20日の2日間配信した。受講者34名。

2、楽曲の概要



資料2 《舞》演奏の様子 (Sop、箏2面、十七絃)

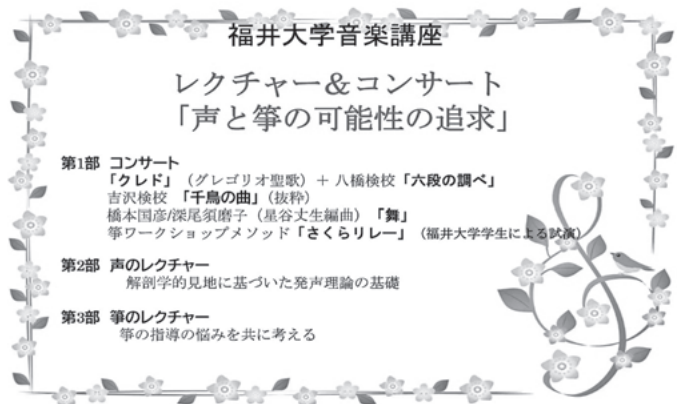
コンサートでは、①声楽と箏との共演曲《舞》(資料2) ②箏2面による古典曲《千鳥の曲》③クレド+六段の調 ④さくらリレーの実演を演奏した。①では先入観のない子ども達にとっては音楽の垣根などないのと同様に、ソプラノ(西洋音楽)と箏(邦楽)も異質なものであるのではなく、両者は融合可能であり、共演によってより興味深い音楽を作り上げられると示すことを目的とする。《舞》については第Ⅵ項で述べる)

②では聴く機会の少ない2面の箏による古典曲により、和楽器のアンサンブルの妙を伝えることを主眼とした。本手を麻植、替手を麻植理恵子が担当し、息のあったアンサンブルを見せたが、音楽の捉え方、リズムやフレーズ感などが年の若い麻植理恵子の方がより西洋音楽的印象を受け、梅村にとっても興味深いものであった。

③クレドと六段の調の同時演奏は、皆川⁴の仮説によるものであるが、今後一層の研究を必要とする試みであり、別の機会に考察を深めたい。

④ワークショップメソッドさくらリレー麻植方式。《さくらリレー》については第Ⅴ項で述べる。

コンサートに続き発声指導についてのレクチャーと箏の指導についてのレクチャーを行った。(資料3) 声についての提言は別の機会に譲り、次項では箏の指導についてのレクチャーについて述べる。



資料3 音楽講座プログラム

⁴ 皆川達夫(1927-2020) 音楽学者。著作多数。立教大学、東京大学、慶応義塾大学、東京藝術大学で教鞭を執った

Ⅳ、箏のレクチャーの内容と提言（麻植）

箏のレクチャーでは《声と箏の可能性の追求～事前調査票の結果を受けて～箏の指導の悩みを共に考える》と題して、現在の教育現場の現状及び問題点の洗い出しと、その解決に向けた提言を行った。時間的制限上、当日の講座では詳細に述べるのが難しい部分も多々あったことから、本稿ではレクチャーで述べきれなかった部分についても補足し、今後の箏を用いた音楽教育への提言を行う。

麻植は2001年から幼小中学校等での和楽器による学校公演、箏ワークショップなどを数多く行い、幼少中学校教育に深く関わってきた。文科省の教育指導要領のキーワードとも言える“主体的な学び・対話的な深い学び”の実現に強い思いを持ち、アンケートに示されている現場の教員が抱えている問題点を解消することは、子どもたちの学習の質を高めることに直接つながると考えるものである。

1、現在の教育現場における箏指導の現状

奏法から様々な音色が生まれ、ペンタトニックスケールによって創作活動が容易である箏は、学習に効果的な楽器である。しかしながら、第Ⅱ項に見る通り、福井県下の小中学校では、小学校で63%、中学校では25%が箏を用いた実技指導なしとの結果であり、特に小学校での実技指導が低調であることが分かった。

学習指導要領が変更された直後であったことを考えると、37%の小学校で箏の実技指導を行っているというのは高い数値であるとも言えるだろうが、そもそも指導するための箏がないまたは少ないと答えた中学校が40校中21校（箏がない1校）、小学校が89校中49校（箏がない39校）、という結果であった。

アンケートの結果を受けて、福井県教育委員会に箏の指導や楽器数の問題についての対応を問い合わせたところ、すべて市町村単位で対応しているとの回答であった。これを受けて、福井県下の複数の市教育委員会へも同様の問い合わせを実施したところ、市の教育委員会で予算化してレンタル用の箏を準備している、音楽部会で箏を所有し持ち回りで使用している、各学校に任せており、現状で問題があるとの報告は受けていないので特別な対策はしていない等、各地域、各自治体によって大きな差があった。

小学校においても箏の体験が学習指導要領に記載された現在の状況を考えると、少ない面数（箏は一面、二面と数える）であっても、各学校に配備されることが望ましいと考えるが、この点についても今後の課題として挙げられるだろう。糸メや爪の修理など、メンテナンスの手間はかかるが、必要な時に使えるよう各学校に配備すべきか、或いは授業で必要な時にメンテナンスされた箏をレンタルする方法のどちらがいいのか、担当教員の負担軽減に繋がる方法を模索していく必要がある。

2、教育現場における箏指導上の問題点

アンケートの回答では、以下の様な内容があった。

1. 箏がない（全くない、又は少ない楽器数で困っている）
2. 箏を扱う楽器屋さんを知らない（糸が切れた場合等のメンテナンスが出来ない）
3. 調絃などの準備が大変
4. 箏の知識がなく指導できない（知識、奏法など）
5. 箏のゲストティーチャーを見つけられない
6. 授業時間が足りない（箏の実技指導だけに時間を割けない）

教員の悩みの中でも、“箏がない”“箏の知識がない”“授業時間が足りない”の3点が最も大きな問題であると思われるが、現役の教員として実際に第6次と第7次改訂（和楽器指導の必修化）という2度の学習指導要領の改訂に遭遇し、試行錯誤のなか過ごした宮本憲二の先行研究でも、「教員自身が和楽器に関する知識を積んでいなかったり、その指導方法を学んでこなかった」「使用する楽器の調達方法や楽器のメンテナンスについて、自分でできない部分の指導をどのように補えばよいのか」「外部講師を依頼した場合、授業の計画はもちろんのこと、いつだれがどのような形で外部講師へ依頼し、年間指導計画のどの時期に講師招聘を行うのが適切か」「学校行事との兼ね合いはどうか」「時間割の変更や管理職、教務主任とどこまで詰めるのか」（原文ママ）（宮本 2010 p.84）との記述があり、今回のアンケートの回答にある現在の教員の悩みとほぼ一致する。

和楽器の必修が学習指導要領に定められた20年前と現在とで、箏の実技指導を行うにあたり教員を悩ませる内容が同じであり、なぜこれらの問題が現在に至るまで解消されていないのか、原因の検証が求められる。

3、教育現場における上記問題点の改善提言とその考え方

(1) “箏がない（全くない、又は少ない楽器数で困っている）”

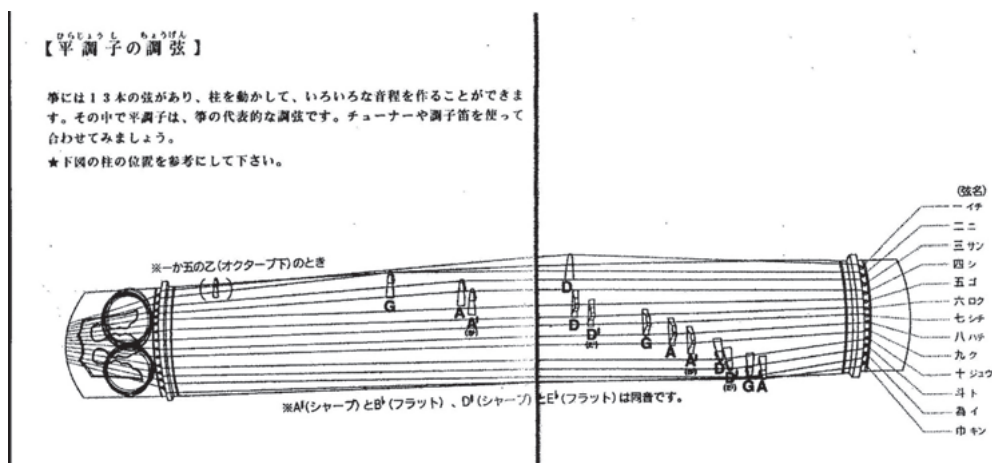
上述したように地域ごとで対応に差異が見受けられる。教育委員会や音楽部会で購入した箏をレンタルしている地域については、そのままレンタル事業を継続していただくとして、全て学校に一任されている地域で、予算の都合上、箏の購入が難しいという学校については、地域住民に広く協力を仰ぎ、楽器や備品の寄付を募るのも一つの方法であると考えます。滋賀県では地域住民から不要になった箏の寄付の申し出を受け、約30面の箏を学校に備えることが出来た事例（大津市立唐崎中学校）もある。状態が良くないものが含まれる可能性もあって、メンテナンス費用がかかったり、各学校に保管場所が必要になる等の問題点はあるが、地域全体で子供たちの学びを支援するという意味でも、有意義な取り組みではないだろうか。仮に準備できた箏が少ない面数であっても、《箏ワークショップメソッドさくらリレー麻植方式》を活用すれば実技指導は可能と考えられる。

(2) “箏を扱う楽器屋さんを知らない” (糸が切れた場合等のメンテナンスが出来ない)

箏についての知識がほとんどない教員が箏を扱う楽器店まで把握することは当然ながら困難なことである。小学校では教科担任制ではないためさらにハードルが上がるが、協力してもらえる楽器店の情報などを音楽部会で共有することで解決するケースもあるだろう。また音楽専門の教員以外でも簡単にメンテナンスの手配や外部講師手配が出来るように、相談窓口があってもいいのではないか。いきなりすべての地域、学校での実施は難しいだろうが、モデルケースとなる地域や学校を選定して試験導入するなど、子どもたちの学習環境を整えるという意味からも、すべて各学校に任せるのではなく、もう少し行政のフォローが望まれるところである。

(3) “調絃などの準備が大変”

水野の画像のような平調子（さくらさくらの調絃）の箏柱の並び方の画像（水野 1998 pp.5-6）などがあれば、どのように箏柱を立てればよいかをイメージすることができ、チューナーを用いて最終調整すればよく、調絃にかかる労力は軽減されるだろう。（資料4）



資料4 水野⁵利彦『おことはじめ〔平調子編〕～押し手がない～』大日本家庭音楽会（1994）

(4) “箏の知識がなく指導できない”

箏を学ぶことができる研修会、勉強会の実施状況を福井県教育総合研究所教科別研修会に確認したところ、予定していた研修会がコロナ禍で中止、箏の知識や奏法を学ぶ場というより、どのように授業を作るのか“主体的・対話的深い学び”に研修内容が移行してしまっている事実があり、現在福井県下では実施されていないことが分かった。しかしアンケート結果を踏まえれば、箏の

⁵ 水野利彦 作曲家、箏演奏家。東京大学在学中より古屋富蔵氏に箏曲を師事。卒業後、作曲と長唄を杵屋正邦氏に師事

知識・奏法を学ぶ機会は必ず設けなければならないと考える。

箏の実技指導で教員が困っている点についてのアンケートで回答があった“箏の知識や奏法”などは、小学校・中学校で用いられている教科書のうち、令和2年度版小学校生の音楽4、小学生の音楽5、令和3年度版中学生の音楽1、中学生の音楽2・3上、中学生の音楽2・3下、中学生の音楽器楽（いずれも教育芸術社）、の指導書を確認したところ、少ない楽器数での指導に困っているとの回答以外の内容については、ほぼ掲載されていることが確認できた。

そこで、なぜ教材に掲載されている内容が、実技指導上の困った点として挙げられているのかを分析すると、資料が豊富にあり過ぎるが故に教員が十分にそれらを使いこなせていない（資料の内容を把握しきれていない）との結論に至った。

現在、学校で使用されている指導書には、実践編、研究編、伴奏編、音楽授業支援DVD、指導用CD、鑑賞用CD、デジタル教科書など、楽曲の説明、楽器の歴史や奏法などが詳細に記述されている資料が数多くあり、知識を得るに十分な内容を備えている。

しかし、例えば、箏の合わせ爪などの奏法や用語など一つの項目について調べてようとしても、複数の資料に渡って記載されているため、授業に必要な情報を得るためには、それらの資料を精読、鑑賞することが必須となる。教員は年間の学習計画を立て、それに沿って教員各自がオリジナルな指導案を作成しているが、箏の授業の場合、この指導案を作成するため特別多くの準備時間が必要ということになってしまう。これは、教育現場の多忙な実情を鑑みると、現実的には極めて困難なことであり、そのためゲストティーチャーに依頼するケースが多くなる。

2002年実施の中学校学習指導要領に「和楽器については、3学年間を通じて1種類以上の楽器を用いること」と記されたことにより、大きな変化を迎えた。さらに、2012年実施の小学校学習指導要領にも和楽器の扱いが記された。小林らも「西洋音楽を専門的に勉強してきた音楽専科教員らが、和楽器の実技指導を行うことは大きな壁であったが、その中で重要な役割を果たしてきた存在がゲストティーチャーとして招かれる伝統音楽のプロフェッショナル、実演家である」（小林、武藤 2017 p.95）と述べている。

(5)“箏講師の先生を知らない”

地元のゲストティーチャーとのマッチングにコーディネーターの活用を検討されてはどうか。また、文化庁の文化芸術による子供育成総合事業の中で芸術家の派遣事業があり、専門家に来てもらうこともできる。この事業は学校公募型で、2021年度は福井県下でも20校が実施しており、講師料に加え、箏のレンタル代なども含まれるため、少なくとも予算面での問題はクリアできる。筆者も小中学校からの要望によって文化庁から講師として派遣されている。他にもNPO法人福井芸術・文化フォーラムでも和楽器体験事業があり、2021年10月～12月の間に福井市内の19校が利用している。これらを活用するという方法もある。

しかし、ここで気を付けねばならないことは、ゲストティーチャーを招聘して鑑賞及び簡単な

体験を実施するというだけの単発授業になってしまいがちであるという点である。(アンケートに同回答が複数ある)

ゲストティーチャーに依頼する際のポイントについては、麻植はこれまでの数多くの学校で体験学習や箏の実技指導を行ってきた経験から、ゲストティーチャーと教員の丁寧な事前打合せが極めて重要と考えている。詳細な事前打合せを行うことで、児童生徒の感想を聞くにとどまったり、1回の体験だけに終わってしまう単発の授業ではなく、生徒自身(主体)が気付くきっかけになるような“声掛け”や前後の学習と関連付いた内容“深い学び”のプログラムの提示ができる。

事前打ち合わせは、担当教員とゲストティーチャーが連携しながら授業を作っていくための重要な準備作業である。麻植は授業のプログラムを作るにあたり、箏の実技指導を担当する教員に対して、必ず最初に以下の質問を行っている。

○箏の授業の年間計画内での位置づけ

○授業のめあてについて

- ・ゲストティーチャーが担当する授業のめあて
- ・和楽器の単元のめあて
- ・その学年の音楽全体のめあて

○担当教員が和楽器の授業を通して生徒にどのような学びや気付きをさせたいか(授業の狙い)

○これまでの箏の授業経験について(箏の授業は初めてか、鑑賞のみ経験ありか等)

これらの質問に対する教員の答えに沿って、毎回新たに実現可能な授業プログラムを作成していくことになる。ここで大切なポイントは、授業計画の主導権は教員にあり、教員側の“どのような授業を行いたいか”“生徒に何を気付かせたいか”という希望に沿ってゲストティーチャーが鑑賞内容や実技指導プログラムを提案していくことで、年間の授業計画の中の一つのピースとして、箏の実技指導が組み込まれていくという点だ。

教員側にある程度の箏の知識がなければ、ゲストティーチャーとの調整や講義内容への要望は出しにくいという意見もあるだろうが、その点は麻植の長年の経験上、ゲストティーチャー側が柔軟に丁寧な聞き取りを行い、いくつかの案を提案することでカバーできると考えている。

ゲストティーチャーは“子どもの学びを支援する”という意識を持って教育現場に関わる必要があり、伝統音楽(箏)のプロフェッショナルとして、生演奏を直接肌で感じてもらうだけでなく“学習指導要領にのっとり和楽器授業では何が求められているのか”を知っていなければならない。

学校側(教員)とゲストティーチャー側の間で求めていることが食い違わないように、連携や協働も今後の課題である。

平成2年度出版《小学校の音楽4 指導書実践編》(教育芸術社)にも「地域の箏の演奏家や先生をゲストティーチャーとして授業に招き、演奏を聴かせていただいたりお話をさせていただいたりすることは、子供が本物と出会う貴重な機会となる。ゲストティーチャーを招く場合は、事前に

授業の目的を伝え、演奏やお話の内容と時間配分について、十分に打ち合わせをしておくようにしたい」(p. 63) との記述があり、小林らも次の様に述べている。

「学校側が和楽器学習に求めていることと、実演家が教えたいことが食い違っている」「教育現場と実演家の意思疎通を密にして、両者の求めていることを実現できるような授業を協働して共創することが必要である」(小林、武藤 2017 p.103)。

(6) “授業時間が足りない”

箏の鑑賞や実技だけに授業時間を割くのではなく、歌唱、創作、リコーダー等との合奏など器楽との合奏等、他の単元との合同授業を展開することで授業時間の不足を補う。また、音楽授業だけでなく、総合的な学習の時間や国語科との合同授業（万葉集や枕草子など古典を題材にした曲演奏や民話、絵本の読み聞かせとの共演など）も考えられ、合同授業の視点を柔軟に持つことによって深い学びや授業の効率化が期待できると考える。小学4年生の音楽指導書（平成2年度版小学生の音楽4指導書実践編（教育芸術社 p.13）でも、《さくらさくら》の歌唱指導のポイントとして、“箏の演奏や鑑賞との関連”が挙げられている。

宮本は「例えば、題材の設定等に当たって、「歌唱」と「創作」、「器楽」と「鑑賞」といったような音楽科における分野どうしの関連を図った取組みはもとより、「音楽と絵画」「音楽と詩」「音楽と戦国時代」等、他教科とのコラボレーションを考えて見ることはできないだろうか」（宮本 2017 p.67）と述べている。箏を中心としたさまざまな合同授業が可能であることの一例として、麻植のこれまでの福井県外（滋賀県）での主だった合同授業の実践を示す。

年	合同授業内容	共演楽器等	実施校
2011	《かしの木のうた》（学校委嘱）児童とアンサンブル。 《かごめ》和洋アンサンブル	児童合唱、児童篠笛、声楽、篠笛、十七絃、フルート	長浜市立下草野小学校
	《青花の紙》草津市の花アオバナの再話。箏体験	語り、十七絃、箏	草津市立老上小学校
	《青花の紙》草津市の花アオバナの再話。《春の海》和洋聴き比べ。《琉球民謡による組曲》和洋アンサンブル。箏体験	語り、十七絃、箏、和太鼓、尺八、篠笛、フルート	草津市立草津小学校
2012 ～ 2013	《青花の紙》草津市の花アオバナの再話。《春の海》和洋聴き比べ。《琉球民謡による組曲》和洋アンサンブル。箏体験	語り、十七絃、箏、三味線、尺八、篠笛、フルート、和太鼓	草津市立矢倉小学校
2014	《春の海》和洋聴き比べ。《かごめ》和洋アンサンブル	箏、篠笛、フルート、十七絃	大津市立瀬田北中学校
2016	《あざいのまなご》（校歌発表）児童合唱とアンサンブル 《かごめ》和洋アンサンブル	児童合唱、声楽、箏、篠笛、フルート、ピアノ	長浜市立浅井小学校

年	合同授業内容	共演楽器等	実施校
2016 ～ 2019	《さくらさくら》リコーダー（生徒）とアンサンブル。 《春の海》和洋聴き比べ。《かごめ》和洋アンサンブル。 《さくらリレー》児童とアンサンブル	生徒リコーダー、箏、十七絃、三味線、尺八、篠笛、フルート、和太鼓	大津市立青山中学校
2017	絵本《まんまる月夜の竹生鳥》	語り（作者）、箏、三味線	草津市立南笠東小学校
2019 ～ 2021	《枕草子》和洋アンサンブル。《ある晴れた日に》（オペラアリア）。《かごめ》和洋アンサンブル。《春の海》和洋聴き比べ。《さくらさくら》前奏創作、伴奏練習、アンサンブル	ソプラノ、ピアノ、箏、十七絃、篠笛、フルート、	大津市立唐崎中学校
2021 ～ 2022	《さくらリレー》（小学4年生）。児童とアンサンブル。《春の海》和楽器鑑賞	箏、十七絃、尺八	草津市立山田小学校
	《さくらリレー》（小学4年生）、児童とアンサンブル。 《春の海》和楽器鑑賞	箏、十七絃、尺八	草津市立南笠東小学校

V、《さくらリレー》について（麻植）

1、講座後のアンケートを受けて

講座参加者にはアンケートを実施し、受講者 34 名中 16 名より回答を得た。アンケートのうちさくらリレーについての設問において、1,すぐに授業に役立てたい。2,将来授業に役立つと思う。の回答は 100% であり、さくらリレーが和楽器指導に悩む教育現場の先生方にとって即効性のある手立てであることが明らかとなった。この項ではさくらリレーについて解説する。

2、さくらリレーとは

箏ワークショップメソッドさくらリレー麻植方式（以下、さくらリレー）は、ワークショップ参加者全員で《さくらさくら》を演奏するリレー奏の形式によるワークショップメソッドである。2012年に麻植理恵子との共同研究としてホームページ上において発表した。クラスの生徒全員が箏の演奏体験ができることや、チームで演奏することによりクラス全員がコミュニケーションを取りながら練習や演奏に取り組めることが大きなメリットである。

筆者自身の実践論文でもすでに「一面の箏で最大7名の演奏が可能」「一つの楽器を複数人が共有することで、ゲーム感覚やチーム戦の要素もあり、一体感の醸成、コミュニケーションの活性化といった効果も得られる」（梅村、麻植、北島 2020 p.3）と述べたが、ほとんどの学校では生徒数に対して箏の面数が絶対的に不足しており、大多数の生徒が演奏できないまま授業が終わってしまう場合も多いが、さくらリレーを活用すれば少ない面数でもクラス全員が箏の演奏体験が可能となる。また、楽しさの要素がないと子どもたちは無関心になりがちだが、面白いと感じたこ

とには驚異的な集中力を発揮して主体的に学んでくれる。

3年間の福井県立高志中学校の出張授業では、大学で麻植の講義を受けた教育学部の音楽専攻学生がさくらリレーの補助や実演を行った。講義受講後の学生提出レポートの中で、“教員となったら”という問いに対して「創作活動に活用することで、楽しさや自信を付けたりすることになげたい」「自分が感じた箏の魅力を生徒に伝えることができるよう、今回の体験を活かしていきたい」(梅村、麻植、北島 2020 p.4)との記述もあり、将来教員となるべき学生が実際の授業を体験したことは極めて大きな意義があったのではないかと考える。

福井大学公開講座(2020年度～2021年度)では、麻植の箏の講義を受講した音楽専攻学生によってさくらリレーのデモンストレーションを行った。講義を受講した上で箏体験授業モデルを体験、体現することは、学生の授業力向上に与し音楽科教員育成に大きく寄与すると考える。

高志中学校1年生3クラスへのお出張授業(2019年度～2021年度)においてもさくらリレーを用いて全員参加の箏ワークショップを実施した。

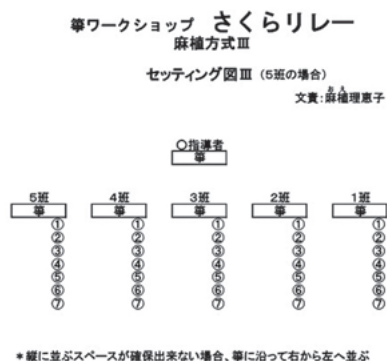
さくらリレーについては『福井大学教育実践研究第45号』(2020 p.3)でその成立の過程と実践方法について触れているが、ここではさくらリレーⅢ及びⅣについてさらに詳しく述べる。

3、さくらリレー実施上のポイントと具体例

今回のコンサートではアンケート調査で明らかになった“楽器の数が足りない”場合の対策として、福井大学学生によるさくらリレーⅢ、さくらリレーⅣを実演した。

《さくらリレー》を考案するにあたっては“全員の集中を切らさない”“ゲーム感覚で楽しむ”“チームで取り組む”“達成感を持つ”という点を大切にしたい。

(1)《さくらリレーⅢ》(資料5、資料6)は一面の箏さえ準備できれば最大7人(1人1フレーズで1曲7フレーズ)まで演奏体験ができる究極の方法である。箏を一面しか用意できない場合、生徒数が多いと回数を重ねる必要があり、それなりの時間を費やすことにはなるが、箏の面数が増え



資料5 さくらリレーⅢセッティング



資料6 さくらリレーⅢ (一面の箏を4人で弾く)

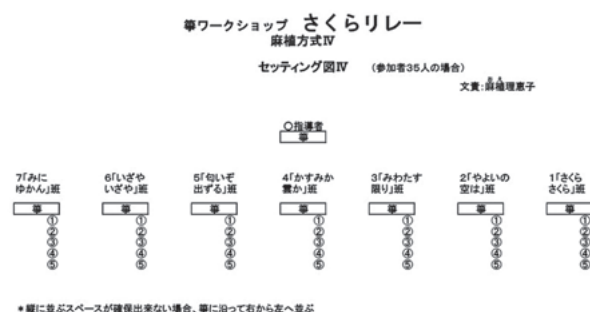
れば、一度に体験できる人数も増え時間短縮になる。35人のクラスで箏が五面準備できた場合、クラス全員が一度に体験できる。時間的に余裕ができると面白さが増すようにあえて少し複雑さを持たせ、1人1フレーズとせず、1人2フレーズ（同フレーズ）を担当（生徒を7人ではなく4人にし、1番目の生徒に1+6フレーズ、2番目の生徒に2+4フレーズ、3番目の生徒に3+5フレーズ、4番目の生徒に7フレーズと曲最後にグリッサンド）とすることもでき、それによってゲーム感覚が増す。チーム戦なので、コミュニケーションを取りながら集中して演奏、達成感を分かち合うことにつながる。

“テンポが速いと次の人に上手くバトンタッチできないよ。次に弾く人のことを考えて、美しい音色でゆっくり弾いて” “次に自分が移動する場所を間違えないようにね” “次に弾く人は自分が最初に弾く弦をよく確認しなさい” などの声掛けをすることが実施上のポイントである。

(2)《さくらリレーⅣ》（資料7、資料8）は、一面の箏がワンフレーズを担当する（箏は七面必要）。班分けは歌詞別（フレーズ別）に、さくらさくら班、野山も里も班、見渡す限り班、霞か曇か班、朝日ににおう班、さくらさくら班、花ざかり班となり、班から班へフレーズをバトンタッチしていく。

箏が四面の場合は、一面に同じフレーズを担当させることとし、さくらさくら班、野山も里も・霞か曇か班、見渡す限り・朝日ににおう班、花ざかり班という班分けにする。

さくらリレーⅣは、人から人へのバトンタッチではなく、班から班へのバトンタッチであり、Ⅲとはリレーの趣旨が異なる。班の中の結束を強めると同時に、班同士が連携して音楽を創るという意識を持たせるねらいがある。



資料8 さくらリレーⅣ（4面の箏でそれぞれのフレーズを弾く）

資料7 さくらリレーⅣセッティング

(3)さくらリレーⅠ、Ⅱ

高志中学では、2人に一面の箏を用いるさくらリレーⅡを3年間実施した。比較的多くの箏を準備できる場合のさくらリレーⅠ、Ⅱ（2人で一面）については、『福井大学教育実践研究』第47号2022（掲載予定）《箏と声による3年間の音楽家出張授業の考察～リモート授業での成果を踏まえ

て》で述べる。

(4)演奏としてのさくらリレー

コロナ禍のなかでの授業では、生徒の移動が無い（密にならない）さくらリレーⅣを体育館などの広い場所で使用した。さくらリレーはチーム戦という緊張感が子どもたちに良い刺激になっていると考える。そして、やはり最後は皆で“音楽”を作り上げていくという意識が大切で、間違えずに弾くということにだけとらわれず、音楽を奏でているのだから、“楽しく、美しく音色を響かせて欲しい”と常に願い声をかけている。参加者全員の力で1曲を演奏するわけで、自分のチームのメンバーはもちろん、他のチームのメンバーとも心を合わせて演奏することが必要である。最後の発表前には、必ずそのことを伝える。すると演奏が全然違ってくる。

また、麻植は箏の唱歌（しょうが）を、フレーズを感じたり、リズムが正確に取れないケース、奏法を説明する際に用いている。唱歌については平成3年度出版中学生の器楽実践編（教育芸術社 pp.46-48）に「箏の唱歌・箏の音楽の特徴を知るための手掛かりとなる言葉 ・古くからこれを歌って旋律を覚えたり伝えたりしてきました。また唱歌には、旋律のまとまり（フレーズ）を知らせる役割もあります」「さくらさくら演奏のポイント・6小節目などに出てくる「コロリン」をひくときは、爪を糸から離さずに、3つの音の強弱に気を付けて弾く・唱歌を歌う時には、裏拍にあたる「ン」を意識する」との記載もある。

教員が独自で継続できるワークショップについては、その方法論を明確に提示できるか否かがポイントになる。その点でもこのさくらリレー麻植方式の公開が役立つことを願っている。

資料5、資料7のさくらリレーの歌詞は《文部省音楽取調掛撰『箏曲集』文部省編輯局「第2曲 櫻」》（1888）掲載のものである。

Ⅵ、声楽と箏による新しい日本歌曲の創出。《舞》について（梅村、麻植、星谷）

1、《舞》へ至る道（梅村）

梅村と麻植は教員養成学部の教員として和楽器指導の問題解決の一助として出張授業を行うにあたり、授業を受ける生徒たちに両者でなければ体験できない内容を提供するため、講師演奏に既存の日本歌曲の声楽と箏による演奏を置いた。選曲にあたっては曲としての完成度の高さや、ソプラノらしい声を聞かせることのできる難易度を持ち、かつ和楽器とのコラボレーションである以上、日本情緒がたっぷりと含まれた楽曲として橋本国彦作曲《お六娘》を選択した。

橋本国彦は昭和24年に45歳の若さで早世した。戦後は音楽戦犯論の勃興により芸術家としての戦争責任を問われ東京藝大の職も辞すなど、晩年は失意のうちに過ごしたが、戦前は時代に先駆けて微分音の楽曲も創作するなど天才の異名をほしいままにし、ほとぼしるように作品を生み出していた。

歌曲の分野においても《斑猫》《徴》など、当時の人々には理解できない様な斬新な作品を綺羅

星のごとく残している。その中でも《舞》はそのスケールの大きさ、精神性の深さ、演奏の難易度においても群を抜いた力作である。

《お六娘》を皮切りに麻植との共演を重ねるうちに、究極ともいえる日本情緒の表出なしには演奏することのできない《舞》こそ、演奏家としての両者が取り組むべき楽曲であるという思いは確信となった。

和楽器指導の問題点の打開を目指した出張授業の実施、出張授業における和洋の融合による講師演奏、そして和洋の融合の最高峰となる《舞》へと両者の思いが到達したのは、教育者であると同時に演奏家である梅村と麻植にとって、当然の流れであったと感じる。

以下では梅村と麻植が演奏家として取り組む《舞》について考察する。

2、《舞》を演奏するにあたって（梅村）

ここでは橋本や深尾と深い交流があり、日本歌曲演奏の源流とも言うべき四家⁶の言葉を拾い上げながら声楽家にとっての《舞》の演奏について考察する。

(1) 《舞》への挑戦

《舞》は日本歌曲の金字塔と言える名曲である。畑中は「橋本歌曲山脈の最高峰を形成するものといえよう。六代目尾上菊五郎の歌舞伎の舞台《京鹿子娘道成寺》に接し、あまりの見事さに打たれた深尾須磨子が、憑かれたようにして書き上げた一遍である。橋本はこの詩の中から、日本語の持つあらゆる表現力を引き出し、語りとうたとを組み合わせながら、豪華極まりない、新しい形式の歌曲を生み出した」（畑中 1991 p.51）と評している。また橋本と深い親交のあった四家は「歌の部分はほとんどがレシタティーブ（語り）の形式でかなり困難ですし、ピアノ部は華やかな舞台を彷彿させる複雑華麗な感じに作られています。誰もが簡単に取り組める歌曲ではなく、所謂「奥許し」というべきもの」（四家 1995 p.188）と述べている。

橋本の目論んだ和の世界観は1ページ目に既に色濃く表れている。

前奏の1小節目、2小節目は箏のあわせ爪を模したオクターブの動きである。和音を持たないため、ペントニックが非常に印象的で冒頭から和の音楽が前面に現れている。

しかし3小節目4小節目は厳しい不協和音が連続し、ペントニックは不協和音と共に怪しく響きこの曲の持つ力の伏線となっている。

5小節目、7小節目は箏を模したと思われるペントニックを基本とするアルペジオ。6小節目も箏のかき手を彷彿とさせる音型である。

Tempo I のピアノパートもすべてペントニック。歌の冒頭はお能の謡の様でもあり、歌舞伎の口上の様でもあり、そのまま以降の和の世界へと突入していく。

⁶ 四家文子（1906-1981）アルト。1966年に金田一春彦らと波の会を結成。日本歌曲演奏の礎を築き、多くの弟子を育てた

声楽家としていつかは歌ってみたい曲であったが、自分の技量で歌える日が来るのだろうかという思いを長年抱いてきた。

しかし、麻植の箏との共演をかさねるうち、箏伴奏であれば箏の持つ世界観に助けられて、究極ともいえるこの曲の日本情緒を自分にも表現できるかもしれないと思いついた。洋と和の融合によってより高い次元の音楽が生まれるということについても、《舞》に取り組むうちに益々その思いを強くするようになった。(資料9)

(2) ベルカント唱法と日本歌曲

クラシックの芸術歌曲は言うまでもなく西欧言語を歌うために西欧で生まれ発展してきたものであり、そこに言語体系の全く違う日本語を乗せて歌うためには、様々な高いハードルがある。多くの先人たちが重ねてきた日本歌曲演奏のための試行錯誤は尊敬に値すべき優れたものであり、演奏のレベルは日進月歩で進歩しているが、波の会⁷を立ち上げ、日本の音楽界に日本歌曲演奏の礎を築いた四家の残した言葉に解決の手立てはほとんど記されている。

四家はベルカントを推奨する理由としてイタリア語が日本語に似ていると記している。「イタリア語は母音が多く、日本語によく似ている(中略)世界一、よい発声と認められているベルカントこそ、日本語を歌う声を、最も自然に楽に出す方法の基礎としてふさわしいと信じる」。「日本語を美しく歌い現わし、旋律を完璧に再現するばかりか、詩の心の奥深くに徹するためには最も適合した発声法があるべきであり、外国に発達した方法の中からイタリアのベルカントを最適なものとする」(四家 1962 pp.36-38より)。

一方藍川⁸は次のように述べる。

「われわれは、(中略)日本語はイタリア語に似ており、それゆえ歌に適していると聞かされてきた。が、(中略)二重母音が多いイタリア語とは決定的に異なる。しかも、イタリア語の歌においては、音符の長さいっばいに、母音の響きと密度が保たれることが多い。(中略)それに対して、日本語の母音は、音を伸ばしている間に、あたかも墨絵のような響きの濃淡をつけながら、



資料9 ピアノ伴奏《舞》1ページ目

⁷ 現在は日本歌曲振興波の会。声楽家、作曲家、詩人、学者などを擁し、全国に支部がある

⁸ 藍川由美 ソプラノ。リサイタル、CD など多数。現在は古代歌謡の研究と演奏を主軸に活動している。

言葉の微妙なニュアンスを醸し出す」（藍川 1998 pp.123-124）。

しかし、四家は次の様な解決法を示している。「『この道はいつか来た道』を『このみちはいつかきたみち』と全部の仮名を一本調子で歌うと、聞き取り難いばかりでなく、語感が全然出てきません。『**コ**の**ミ**ちは**イ**つか**キ**た**ミ**ち』と片仮名の部分にアクセントをつけると（中略）言葉の陰影が出て、一つの言葉とし耳に入りやすくなる」（四家 1974 p.51）。

ただし、次の様にも書く。「日本歌曲だけを勉強しても、なんとなく薄っぺらな表現になりやすく、巧みにうたえない。（中略）日本歌曲を完全に近く演唱するためには、いろいろな種類の歌をかなり深く勉強して、どんな技術でも必要に応じて OK という人だけが資格があるという結論になる」（四家 1974 pp.54-55）。

また、四家と同時代に活躍した声楽家のうち四家によると、柳兼子⁹は「長唄の素養があり日本歌曲に純日本的な節回しが巧みに歌いこまれ」、藤原義江¹⁰も「邦楽の素養があった為、民謡風な節回しに独特の魅力があった」、佐藤美子¹¹は「義太夫を少女時代に修得した」（四家 1962 pp.106-110 より）など、少なからぬ声楽家が日本の伝統音楽との接点を持っていることは、今の時代の青山¹²や藍川の姿勢と通じるものであり非常に興味深い。

青山は「西洋の言葉から生まれた技法に日本語をあてはめていくことは非常に難しいし、また様々なマイナス面が出てくると考えている。（中略）日本歌曲においても日本語に則した表現方法をみつけていくべきである。それには伝統音楽の技法を何らかの形で取り入れたり、また伝統音楽の技法そのままではなく、新しい形へと転換させていくことも必要と考える」（青山 1987 p.33）とする。

しかし、四家自身は次の様に書く。「伝統音楽や民謡の歌い回しを研究するべきか、その接点はどこに置けばよいかという問題については、理想的には必要と考えられるが、あくまでも伝統音楽や純民謡の発声と、西洋発声を基盤とした日本語発声とは根本的に大きな差がある。参考程度に聞いてみるのはよいが、節回しを真似しても喉の使い方が違うので成功しない」（四家 1974 pp.105-106）。この四家の言葉こそが真実であると筆者は確信し日本歌曲演奏を進めてきた。

(3) 日本語を明瞭に歌う

今なお声楽家にとっての日本語歌唱の最大の悩みは“クラシックの声楽家の歌は言葉が聞き取り難いという事実”である。

⁹ 柳兼子 (1892-1984) アルト。夫君は柳宗悦。国立音楽大学教授、紫綬褒章、日本芸術院恩賜賞受賞。日本芸術院会員。

¹⁰ 藤原義江 (1989-1976) 日本のオペラ黎明期の名テノール。藤原歌劇団創始者（現在は財団法人日本オペラ振興会）

¹¹ 佐藤美子 (1903-1982) 日本で初めてカルメンを演じた。紫綬褒章、神奈川文化賞受賞、横浜文化賞、勲四等宝冠章受章

¹² 青山恵子 メゾソプラノ。リサイタル、CD など多数。声楽と日本の伝統音楽の研究の第一人者

中山¹³は日本語の特性として次のような点を挙げている。「強弱アクセントを伴わない（日本語は高低アクセント）。（筆者注：ヨーロッパ言語は強弱アクセント）母音においては子音による縛りが比較的強い。即ち母音としての連続性が弱い。どの音節（シラブル）もほぼ等拍であること。即ち一音（ほぼカナの一字）が一音節を形成する」（中山 2008 p.129）。

そのことについて、米山¹⁴はこう述べる。「日本語の子音のほとんどすべては、母音が付加されて使われる。母音の音源は声帯にあるので、子音に付加される母音を含めると、日本語の母音だけでなくほとんどすべてに喉頭原音が使われることになる。つまり日本語を話すときは常に声帯を使わなければならない。外国語を話す時には、k、s、t、その他ほとんどの子音が声帯を使わずにすむことが多いので、日本人が声帯を使う、即ち声帯にかける負担は、外国語を話すよりも何倍も或いは何十倍か過重になっているはずである」（米山 2007 p.56）。

さらに「ベルカントフォルマントと母音の音韻性は、特に高音域において両立しない」（スンドベリ 2010 p.125 より）という宿命的な物理問題が存在する。

米山は「日本語の宿命としてほとんど全部の子音に母音が付加される。しかもその母音は五種類に限定される。したがってその五母音の発音処理がうまくゆかないと語音明瞭度が落ち、歌詞の意味が不明になる率が高くなる。つまり何を言っているのかわからなくなる。（中略）各母音性維持のためにはそれぞれの母音の持つ音響性、つまり第一、第二フォルマントの確立が最小限度必要になる。（中略）日本語母音の第一フォルマントの位置が最も高いのが女性の発声する「ア」母音で、820ヘルツであるから、 g^2 (784Hz)、 gis^2 (831Hz) 以下に収まっていれば歌詞の中での母音性は成立し、歌詞の内容はほぼ明確に聞き取れることになる」（米山 2003 pp.165-166）とするが、ソプラノの感覚としては、 g^2 や gis^2 の音高の場合、[ア]はまだしも、[イ]はかなり日本語としての母音性を犠牲にせざるを得ない。そうでないと発声が犠牲になり声の正しい響きが失われ、喉に負担がかかるのである。それは筆者個人的な感覚ではなく、クラシック歌手であればほとんどすべての者が実感している事実である。

藍川によると、日本歌曲の作曲家としていまだにその右に出るものはいない山田¹⁵は日本語の発音について次の様に記しているとする。「総じて、邦語のウ列に属する多くの音は、その母音を否定して発音する方が、その音を美化することになるやうに考へられる」（藍川 1998 p.120）。

この山田の言葉は日本語を西欧式発声で、しかも言葉が明瞭に聞き取れるように演奏することがいかに困難であるかを如実に示している。

しかし、四家は「共鳴、いいかえれば声を美しく拡声することは、日本歌曲を歌う際も外国歌

¹³ 中山一郎 大阪芸術大学教授。専門は音楽音響学。声に関するテーマで著作多数。

¹⁴ 米山文明 (1925-2015) 医師。多くの歌手などの診察を行う。米山文明呼吸と発声研究会主催。日本語発声の是正に努めた

¹⁵ 山田耕柊 (1886-1965) 日本を代表する作曲家、指揮者。数々の偉業を成し遂げ、日本のクラシック音楽の礎を築いた

曲の時と同じに必要であり、絶対にひびきを伴った母音で歌われなければならない。ただ、その響きに、いささか西洋発声と違う点がある。(中略)話し言葉と同じように聞き取れる母音で歌わねばならないし、母音の性格を変化させないように響かせる技術が非常に難しい」(四家 1974 p.85)と述べる。

米山もこのように述べる。「日本語の発音の美しさは、子音を明確に生かし、附属する母音部分の共鳴操作、母音を響かせるべきポジションに、きちんと呼気流に乗せて共鳴効果を作る事である」(米山 2007 p.70)。

日本語は本来美しい言葉である。四家の言うように「話し言葉と同じように聞き取れる母音」で歌うためには日本語の明瞭さと美しく響く声との両立という歌手手のテクニックがなんとしても必要である。

(4) 箏への編曲で《舞》の世界観を伝える

米山の外国語歌唱と日本語歌唱の際について述べたこの言葉は日本歌曲演奏の難しさの本質を突いている。「宗教、文化、生活の居住空間、社会生活環境、建築様式、その他欧米との長い伝統的な差。一方はベルカント発声に代表される音響効果を誇示するような「動」の発声を生み、他方で「侘び」「寂び」に代表される静寂の間や言葉のあやを尊重し、音韻性が重視される「静」の声を嗜好する傾向があった」(米山 2003 p.168)。

《舞》はそれに加えて、瀟洒で絢爛豪華な歌舞伎の世界観を表さなければならない。そこにパタ臭い要素が見えれば聴衆は幻滅するであろう。

筆者らのアプローチは声楽発声を犠牲にせず、伴奏部分をピアノから箏に置き換えることによって言葉の表す情景を際立たせ、《舞》の究極ともいえる日本情緒をオリジナルを超えて表出しようという試みである。言葉の聞き取りやすさは声楽家の技量、即ち言葉に与えられた音楽をどのように表現するのかによって大きく違ってくるものであり、声楽家の一生の課題であるが、ピアノとは全く違った純粋な和そのものである箏伴奏の場合、箏が奏でる音楽観が言葉がわかることの大きな助けとなる。我々の、編曲者の力を借りて新しい日本歌曲を創出するという試みは従来の日本歌曲演奏にはなかった、新たな視点を持つ画期的な日本歌曲演奏の方向を示すものである。

3. 箏奏者の立場から見た箏伴奏の《舞》(麻植)

日本音楽の特徴として、吉川英史¹⁶はその著書の中で、「単音、余韻、噪音、声楽の愛好性と、音色の尊重性」をあげている。(吉川 1975 pp.189-213)

¹⁶ 吉川英史(1892-1962) 東京芸術大学教授。東洋音楽学会、義太夫協会、琵琶楽協会会長。紫綬褒章受章。文化功労者

星谷編曲の舞の楽譜には、全編にわたり、まさしく吉川が挙げた日本音楽の特徴を備えた、箏本来の奏法が多用されている。特に余韻を操作する左手の奏法が実に効果的に用いられており、それが心地良い日本的な趣を生み出している。

声楽家の梅村が、十七絃を用いた音楽表現の担当者としても参加し、音に厚みを持たせる為のグリッサンドや、マレットを用いた打楽器的な音楽表現が加わることにより、更に効果をあげていることも見逃せない点である。

又、演奏技術の観点では、星谷の“原曲が箏であったと想定”というコンセプトのもと、多数の調絃替えが必要とされた。箏の絃13本の内、1本の絃に調絃替えの印が4つ付く絃が3本、3つ付く絃が3本、2つ付く絃が5本。印の無い絃は僅か2本という状態で、調絃替えの間違いを避ける為にどうしても演奏が慎重になり、音楽表現に納得ができず苦戦した。

そこで、編曲者の星谷と何度もやり取りをし、調絃替えの複雑さを軽減するため箏を二面使うことや、日本的な色を出す為、様々な表現方法（奏法）を提案した。その結果、ピアノ伴奏の《舞》とは別世界の《舞》が出来上がったのではないかと思われる。

4、《舞》の編曲について（星谷）（資料10）

今回の編曲において留意した点について述べたい。編曲にとりかかる上で技術的な課題として以下のものがあつた。

- (1) 原曲のピアノパートと箏のパートでは音域が著しく異なること。
- (2) ピアノの技巧的なパッセージをそのまま箏パートに移し替えることは難しいこと。
- (3) ピアノと箏では同じ和音であっても全く異なる響きとなること。和音の質感（ピッチ感覚）も大きく変化すること。

(1) については、当然のことながらピアノの広い音域を一面（ないしは二面）の箏にそのまま移し替えることはそもそも難しい。そのため作業の最初の段階として、ピアノパートに書かれた和音がどのような効果を意図して書かれているか読み解き、いくつかの仮説を用意した。

次の段階として前述の仮説に基づいて定義した重要なポイントを維持しつつ、箏で演奏可能なように音を置き換えた。例えば、ピアノパートに出現する低音の強靱な和音は、音域的には箏にそのまま移し替えることは困難であるが、ピアノと箏のピッチ感の相違により同一オクターブ内に配置されていなくとも、箏の魅力を生かした別の意味での有益な効果を得られる可能性がある。今回は一面の箏では演奏不可能な対位法的箇所においては、声楽家に十七絃の低音のトレモロを分担するなど、様々な方法で原曲パートの音響を補うように努めた。

(2) については、箏ではピアノのような高速のパッセージは演奏することが難しいが、箏独自の奏法によって音色的に変化をあたえることによって技巧的に聴こえるように工夫することができる。例えばトレモロはピアノより動きや音色が不均一になるがかえってそれが緊張感を生みだし魅力的な体験となる。

Score

舞

萩野綾子氏に捧ぐ

作詞：深尾須磨子

作曲：橋本国彦

編曲：星谷丈生

♩ - 60

十七

Soprano

Koto

p dolce e semplice

4

S

Koto

注意

as quickly as possible *ad lib.* *rit.*

7

A

S

Koto

accel.

12

12

Tempo I ♩ - 60

9

S

Koto

12

12

12

12

f

(3) ピアノのような厚い和音は箏でそのまま演奏することは難しいが、逆に箏の音色を生かして音数が少なくとも魅力的な音色を形成することができる。ピアノのオクターヴは箏の打撃音を含んだ強烈な一音で代替可能だと考えて音を置き換えた。また一つの和音の中でもアルペジオの順番など工夫しつづることで和音内の各音の強弱、バランスを調整することが可能であると考えた。

上記の作業は原曲に対する忠実さという意味では、一般的な編曲の枠を少し踏み越えてしまったように思う。しかし、編曲を進める過程で、作曲者も本作品においては、ピアノに対して邦楽器のようなニュアンスや表現を求めていたのではないか、という考えがより強くなった。

V、終わりに（梅村）

教育現場の先生方の和楽器指導へのアンケートであぶり出されたのは、文科省の旗振りに喘いでいる教育現場の先生方の悲痛な叫びであったように感じる。和楽器指導の問題はもとより一朝一夕に解決するものではないが、アンケートによりそれぞれの教員の抱える問題が一堂に会したことは、今後も引き続いて問題解決の方向を見定める手立てとなるであろう。

同時にアンケートから垣間見えたものは様々な悪条件の中、何とか子どもたちによりよい授業を提供しようと奮闘している先生方の姿であった。

また、箏奏者である麻植にとっては、誰もが均等に受けることのできる学校教育の場に和楽器指導が求められている現在の状況は、必ずしも奏者の人口も愛好家の人口も右肩上がりとは言えない箏の振興の好機であるともいえよう。時間数をじりじりと減らされている音楽科の学びに箏の持つ優れた面を役立てていくことは、教育現場だけでなく奏者側にとっても非常に有益なのである。

多くの子どもたちが和楽器だけでなく、クラシック音楽にも触れる機会は学校の音楽の授業だけであるという現実を考えると、声楽と箏の振興を何より願う梅村と麻植にとって教育現場での音楽科の授業の重要性は大きい。日々努力している先生方に少しでも役立てるように、今後も発信を続けていくつもりである。

箏伴奏の日本歌曲については、子ども達だけでなく広く市民への音楽の啓蒙の手段として用いていくことになろう。和洋の音楽の融合というキーワードは人々の関心を引くであろうし、星谷の編曲による《舞》のインパクトの強さは他に類を見ない。

自らの演奏の高みを目指すことは演奏家としての一生の課題であり、箏指導に端を発した両者の取り組みが《舞》という最高峰の楽曲に行き着いたことは僥倖であると感じている。

最後に、多忙な業務の中、アンケートに真摯に回答してくれた多くの先生方に心よりの感謝を申し上げます。

注：文中の括弧などは次の通りである

引用箇所「 』

書名『 』

曲名等《 》

強調箇所“ ”

ただし、アンケートの回答、引用文中の括弧などは原文のママとした

引用文献

藍川由美（1998）『これでいいのか、にっぽんのうた』文春新書

青山恵子（1987）「日本歌曲における歌唱法の実践的研究：伝統音楽との接点、その考察と実践論」『東京芸術大学音楽学部紀要13』pp.1-38

梅村憲子、麻植美弥子、北島恵美子（2020）「箏を中心とした音楽科出張授業の実践と考察」『福井大学教育実践研究 第45号』pp.1-9

吉川英史（1979）『日本音楽の性格』音楽之友社

小林恭子、武藤宏司（2017）「学校教育における和楽器専門ゲストティーチャーの現状と課題」『目白大学総合科学研究13号』pp.95-105

黒沢弘光（畑中良輔監修）（2003）『日本歌曲百選 詩の分析と解釈Ⅰ』音楽之友社

スンドベリ、ヨハン（2010）『歌声の科学』榊原健一他訳 東京電機大学出版局

中山一郎編（2008）『日本語を歌・唄・謡う』アド・ポポロ

畑中良輔（1991）『日本歌曲について』ビクター音楽産業

水野利彦（1994）『おことはじめ〔平調子編〕～押し手がない～』大日本家庭音楽会

宮本憲二（2010）「中学校における器楽指導のこれから―箏を扱った授業実践からの提言」『日本音楽教育学会音楽教育実践ジャーナル vol.7』pp.84-87

宮本憲二（2017）「音楽家授業におけるアクティブ・ラーニング研究―学習者がより主体的・協働的に取り組める授業を目指して―」『尚美学園大学芸術情報研究第26号』pp.51-69

四家文子（1962）『日本歌曲のすべて』創彩社

四家文子（1974）『日本歌曲の歌い方』音楽之友社

四家文子編（1995）『橋本国彦歌曲集1』音楽之友社

米山文明（2003）『声と日本人』平凡社

米山文明（2007）『美しい声で日本語を話す』平凡社新書

教授用資料『小学生の音楽1～6（平成30～31年度）移行期における音楽科の指導～我が国や郷土の音楽の取扱いのポイント～』（2019）教育芸術社

引用楽譜

橋本国彦歌曲集（四家文子編）（1995）全音楽譜出版社

星谷丈生 箏編曲《舞》（2021）未出版

文部省音楽取調掛撰『箏曲集』（1888）文部省編輯局 第2曲「櫻」

引用教科書

令和2年度版『教育芸術社小学生の音楽4指導書実践編』教育芸術社 13頁、63頁

令和3年度版『中学生の器楽実践編』教育芸術社 52頁、54頁

参考文献

小川真季、長尾智絵 (2015) 「未経験者による箏指導の授業実践」『日本音楽教育学会学校教育学会誌第24号』pp.35-42

川口明子 (2015) 「(教員養成・採用・研修における日本伝統音楽実技の現状と課題)『日本音楽教育学会音楽教育学45巻2号』pp.59-63

嶋田由美 (2012) 「唱歌「さくらさくらの研究」—その成立過程と学校唱歌教材としての変遷をめぐって—」『日本音楽教育学会音楽教育学32巻2号』pp.1-14

瀧明千恵子 (2018) 「小学校音楽科の伝統文化尊重における一考察—和楽器伝承における視点から—」『奈良学園大学紀要9巻』pp.99-109

土肥みゆき (2006) 『20世紀の作曲家たち』ソーケン

中村典子 (2014) 「カトリック典礼文ミサ通常文《クレド第4番》(告白信仰)と八橋検校《六段の調》重複演奏検証試論—ボローニャ・イモラとヴェローナでの教会合唱団と箏の協働演奏を通して—」『京都市立芸術大学音楽学部・大学院研究紀要ハルモニア45』pp.49-66

長谷川慎 (2012) 「「箏」を用いた授業の評価を考える—中学校2校の実践比較を通して—」『音楽教育実践ジャーナル vol.10』pp.49-55

畑中良輔 (2003) 『日本歌曲百選 詩の分析と解釈1』音楽之友社

畑中良輔 (2013) 『日本歌曲を巡る人々』音楽之友社

尾藤弥生 (2005) 「教員養成における箏の様々な奏法の味わい状況に関する一考察」『日本学校音楽教育実践学会 学校音楽教育研究 Vol.9』pp.170-181

宮本憲二 (2009) 「中等科音楽における生徒の理解に着目した和楽器指導—「箏」を扱った授業における効果的な指導とは—」『尚美学園大学芸術情報研究 第16号』pp.1-19

宮本憲二 (2011) 「「箏」を扱った和楽器指導に関する一考察 —学習者にとつての「譜面」の有用性と「箏」の技法に着目して—」『日本教材学会・研究紀要編集委員会編 教材学研究22巻』pp.103-112

山田耕筰 (1930) 『山田耕筰全集第2巻』春秋社

山田耕筰 (1931) 『山田耕筰全集第3巻』春秋社

参考教科書

令和2年度版『小学生の音楽4』教育芸術社

令和3年度版『中学生の音楽1、中学生の音楽2・3上、中学生の音楽2・3下、中学生の音楽器楽』教育芸術社

参照HP

・麻植理恵子・麻植美弥子 《箏ワークショップメソッドさくらリレー麻植方式》

https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf

・文部科学省小学校学習指導要領（平成29年告示、令和2年4月施行）2020年4月5日閲覧

https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf

- ・文部科学省中学校学習指導要領（平成29年告示、令和3年4月施行）2021年4月10日閲覧

<http://oekoto.web.fc2.com/sakuraoe.html>

- ・文化庁HP《令和3年度文化芸術による子供育成総合事業芸術家の派遣事業実施校一覧2022年3月31日時点》2022年5月6日閲覧

https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/shinshin/kodomo/pdf/93732201_02.pdf

- ・NPO法人福井芸術・文化フォーラムHP 2021年度事業 2022年9月15日閲覧

https://geibun.info/geibun/?page_id=9432

本稿は令和3年度福井大学学長裁量経費の支援によって実施した取り組みを元に考察したものである。

タイトル英訳

The problems of playing the Koto in elementary and middle school music programs and the attempts to solve them

－ Looking at the issue through modern Japanese songs, fusing classical music and Japanese traditional music －

アルペンスキー競技技術系種目における女子選手の滑走特性

－急斜面を対象としたレース分析－

近 藤 雄一郎^{*1}

(2022年9月27日 受付)

本研究は女子選手を対象とした大回転競技及び回転競技のレース分析の結果から、技術系種目としての競技成績に応じた滑走特性と課題について明らかにすることを目的とした。研究の結果、上位群と中位群の間にはタイム分析による有意差は認められなかったが、中位群の旗門間の移動軌跡が上位群よりも次旗門に近く、旗門下部でオーバーランする滑走ラインとなっていることや旗門通過時の両スキー先端の方向は斜面下方向を向いており、シェーレンの発生数も多い傾向から、ターン及び切り換えを始動する位置を現状よりも次旗門に対して上部に改善することを中位群の課題として位置づけた。また、中位群と下位群の間には両競技において「急斜面区間タイム」で有意な差が生じており、大回転競技では「ターン後半平均所要タイム」と「雪煙の上がっている平均タイム」でも有意な差が認められた。下位群の滑走ラインは旗門通過後の山回りが深く旗門から離れた滑走ラインとなっており、旗門通過時の両スキー先端の方向は斜面下方向を向いており、シェーレンの発生数も多い傾向があったことから、旗門通過後の過度なエッジングを抑制することを下位群の課題として位置づけた。

キーワード：アルペンスキー・女子選手・レース分析

1. 緒 言

アルペンスキー競技とは、旗門で規制されたコースをより速く滑走し、滑走タイムを競い合うスキー競技である。競技種目は、回転及び大回転による技術系種目と、スーパー大回転及び滑降による高速系種目に大別される。競技で計測される滑走タイムは、競技パフォーマンスの指標となることから、レースに関するタイム分析により、選手の諸特徴を明らかにするための有益な情

^{*1}福井大学学術研究院教育・人文社会系部門教員養成領域

報を得ることができる。そのため、タイム分析を含めたレース分析に関する研究成果は国内外で蓄積されつつある。

世界トップレベルの選手が競い合うワールドカップを対象とした先行研究として、Bilić and Mijanović (2008) は1本目及び2本目の競技における3か所のラップタイム（スタートから中間計時1・中間計時1から中間計時2・中間計2からゴール）とトータルタイムの相関について検討し、特に中間計時2からゴールまでのラップタイムとトータルタイムとの間に強い相関が認められたことを報告している。中里ら (2017) は、2015-2016シーズンに開催されたワールドカップ苗場大会における上位30名のタイム分析を行い、ウェーブなどの大きな斜面変化部分及びスルーゲート部分がタイム差の生じやすい区間として挙げられ、滑走タイム全体の向上のためにはウェーブを処理する技術と合わせて、スキーを雪面から離さないなどのターン技術の向上を指摘している。

コンチネンタルカテゴリー（アジア大陸圏）のレース分析を行った堀田と井口 (2013) は、急斜面における2ターンを対象として、滑走する選手のスキーの軌跡に基づくターン後半のカービング区間（両スキーの軌跡にズレが少なく直線的にスキーが滑走している部分）の割合とターン1・2における区間タイムの相関関係を検討した結果、2つのターンで両者の間に有意な負の相関関係が認められたことを報告している（ターン1： $r=-.73$ 、ターン2： $r=-.66$ ）。このことから、競技レベルの高い選手ほどターン後半におけるカービングの割合が高く、ターン後半の所要時間が短いことで、区間タイムが速くなっていると考察している。同じく、コンチネンタルカテゴリーのレース分析を行った三浦ら (2015) は、緩斜面、中斜面、急斜面の順で構成されるレースコースの区間タイムについて分析を行った。その結果、レース全体タイムとの相関ではコース中間部の中斜面区間タイムの間に強い相関 ($r=.89$) が認められ、斜面間タイムとの相関ではコース上部の緩斜面区間タイムとそれに続く中斜面区間タイムの間に中程度の相関 ($r=.69$) が認められたことから、より速いタイムで滑走するための要因としてスタートからの緩斜面区間での速度と中斜面そのもののターンによるタイム差を示した。

国内最高峰のレースである全日本選手権を対象としたレース分析を行った竹田と近藤 (2013) は、成績上位・中位・下位ごとにタイム分析を試み、スタートからゴールまでのトータルタイム、コース上部の緩斜面、コース中盤の急斜面、コース下部の中斜面の全ての区間タイムで分析対象群間に有意差が認められたことから、上位選手ほどスタート直後の緩斜面の滑走スピードを、続く急・中斜面につなげることができたことが影響していたと考察し、緩斜面区間の重要性を示している。

以上のように、アルペンスキー競技のタイム分析に関する研究は蓄積されつつあるが、これらの先行研究は男子選手を対象とした研究であり、女子選手を対象としたタイム分析に関する研究は非常に少ない状況にある。スポーツ基本計画では「国内外の女性スポーツに関する情報の収集、データベース化を行うとともに、女性特有の課題解決に向けた調査研究を行うなどの取組を推進し、支援の充実に努める」ことが謳われている（文部科学省，2017）。そこで、日本スポーツ振興

センターや中央競技団体、各大学等が女性アスリート強化のための支援体制を構築している。全日本スキー連盟では日本スポーツ振興センター委託事業として「女性アスリートの強化支援」に取り組んでいるが、アルペンスキー競技の女子選手に関しては十分な支援が得られていない現状があり、国際的競技力の向上のためにも多角的な強化支援が必要な状況である。このような状況を受けて、筆者はこれまで、女子選手を対象とした回転種目及び大回転種目に関するレース分析を実施してきた（近藤〔2021, 2022〕）。

そこで、本研究は女子選手を対象とした大回転競技及び回転競技のレース分析の結果から、技術系種目としての競技成績に応じた滑走特性と課題について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2-1. 分析対象レース及び分析対象者

本研究の分析対象レースは、2021年3月にサッポロテイネ（北海道）で開催された第92回宮様スキー大会国際競技大会における女子大回転競技1本目及び女子回転競技1本目とした。両種目とも、コースコンディションは降雪によるミディアムの雪質であったが、排雪されたコース上は水が撒かれたハードパックされた雪面状況であり、全競技者の滑走を通じて大きなコースの掘れはなかった。

分析対象者は大回転競技で29名（全出場者36名）であり、女子回転競技で20名（全出場者24名）であった。なお、分析対象者は、1本目競技を完走し、大きな減速を伴う失敗のなかった者としている。この分析対象者を1本目競技の成績に準じて、1-7位までの者を上位群、8-15位までを中位群、16位以下を下位群としてカテゴリー区分し、分析を進めた。

2-2. 分析内容

両競技共通して、「タイム」「滑走ライン」「スキー操作」の3つの観点から、競技成績に準ずるカテゴリー毎に分析を実施した。各観点の分析内容について、以下に論述する。なお、本研究では分析対象区間を急斜面^{注1)}に限定していることを断っておく。

2-2-1. タイム分析

タイム分析の方法は、分析対象レースをデジタルビデオカメラ（W870M；Panasonic 社製：60fps）を用いて、コース正面からズーム・パンニングにより選手の滑走を撮影した。そして、撮影した動画をAVCHD形式ファイルとしてPCに取り込み、動作分析ソフト「ダートフィッシュ」（ダートフィッシュ社）の「タギング機能」を使用し、タイムの算出を行った。本研究で用いたダートフィッシュのタギング機能とは、分析映像を任意の場面で一時停止し、「1旗門目」「2旗門目」…のように予め項目作成した情報タグを映像停止位置につけることで映像再生時間を記録し、前後の情報タグをつけた間の時間を自動計算する機能である。

タイム分析では、「トータルタイム」「急斜面区間タイム」「ターン前半及び後半の平均所要タ

イム」「雪煙の上がっている平均タイム」について分析を行った。「トータルタイム」については、公式結果に基づきスタートからゴールまでのタイム（大回転競技：29 旗門，回転競技：53 旗門）の比較を行った。

「急斜面区間タイム」については，大回転競技では4旗門目に接触してから12旗門目に接触するまで，回転競技では12旗門目に接触してから29旗門目に接触するまでのタイムについて比較を行った。

「ターン前半及び後半の平均所要タイム」については，大回転競技では急斜面区間内の7ターン，回転競技では急斜面区間内の15ターンにおけるターン前後半の平均所要タイムの比較を行った。なお，雪面に対し滑走面がフラットの状態から（回転競技では切り換えでストックを突いてから）旗門に接触するまでをターン前半とした。また，旗門接触から雪面に対して滑走面がフラットになる（回転競技では切り換えでストックを突く）までをターン後半とした。

「雪煙の上がっている平均タイム」については，エッジングによる雪煙の昇り始めから昇り終わりまでの平均タイムについて比較を行った。

各タイム分析項目における3群間の差については，一元配置分散分析を行い，F値に有意な差が認められた項目について多重比較検定（Schffe's F test）を行った（ $p<0.05$ ）。統計処理については，statcel3（柳井〔2004〕）を使用して分析を行った。ただし，本研究は実践的に検討を進める研究であることから，各分析対象群のサンプル数が少数であることを前提とした統計処理となることを断っておく。

2-2-2. 滑走ライン分析

滑走ライン分析では，デジタルビデオカメラ（W870M，W570M；Panasonic社製：60fps）を用いて，コース正面から「急斜面上部」「急斜面下部」の2カ所を対象として，三脚を使用してズーム・パンニングせずに選手の滑走を撮影した映像を用いて分析を行った。撮影範囲は，大回転競技では急斜面上部が4旗門，急斜面下部が3旗門であり，回転競技では急斜面上部が8旗門，急斜面下部を7旗門（スルゲート1旗門含む）であった。撮影した動画をPCに取り込み，動作分析ソフト「ダートフィッシュ」の「ストロモーション機能」を使用して，各区間の撮影範囲における滑走者の連続静止画を作成した。滑走ラインは，ストロモーション機能による連続静止画を用いて滑走者のターン外側のブーツの軌跡を線で繋ぐことで作図した。

2-2-3. スキー操作分析

スキー操作分析では，タイム分析で用いた映像における，大回転競技では急斜面上部及び下部共に2ターン，回転競技では急斜面上部が8ターン，急斜面下部が6ターンについて，旗門通過時及び旗門通過後に一時停止し，映像を拡大表示しながらスキーの先端の方向とシェーレン^{注2)}発生の有無を評価した。旗門通過時の両スキーの先端の方向については，大回転競技では通過する旗門の2本のポールを結んだ線に対して直角に交わる線を基準とし，回転競技ではシングルポールでのレースであったため通過する旗門と次旗門の位置関係を基準として，両スキーの先端の方

向を評価した。

3. 結果

3-1. タイム分析結果

タイム分析の結果として、表1に大回転競技、表2に回転競技におけるタイム分析結果を示す。

「トータルタイム」及び「急斜面区間タイム」については、両競技共に上位群と中位群の間には有意差は認められず、上位群と下位群、中位群と下位群の間に有意差が認められた ($p<0.01$)。

「ターン前半及び後半の平均所要タイム」における「ターン前半平均所要タイム」について、大回転競技では上位群と下位群の間に有意差 ($p<0.05$) が認められたが、回転競技では各群間に有意差は認められなかった。「ターン後半平均所要タイム」について、大回転競技では上位群と下位群 ($p<0.01$)、中位群と下位群 ($p<0.05$) の間に有意差が認められた。一方、回転競技では上位群と下位群の間にのみ有意差 ($p<0.05$) が認められた。

「雪煙の上がっている平均タイム」について、大回転競技では上位群と下位群、中位群と下位群

表1 大回転競技タイム分析結果

トータルタイム			
分析対象群	トータルタイム (sec.)		
上位群 (n=7)	43.24 ± 0.70	<div><div>n.s.</div><div>* *</div></div>	* *
中位群 (n=8)	44.88 ± 0.34		
下位群 (n=14)	47.19 ± 1.80		
p<0.01**			
急斜面区間タイム			
分析対象群	急斜面区間タイム (sec.)		
上位群 (n=7)	13.70 ± 0.30	<div><div>n.s.</div><div>* *</div></div>	* *
中位群 (n=8)	14.25 ± 0.20		
下位群 (n=14)	15.37 ± 0.82		
p<0.01**			
ターン前半平均所要タイム			
分析対象群	ターン前半平均所要タイム (sec.)		
上位群 (n=7)	0.81 ± 0.06	<div><div>n.s.</div><div>n.s.</div></div>	*
中位群 (n=8)	0.83 ± 0.04		
下位群 (n=14)	0.90 ± 0.08		
p<0.05*			
ターン後半平均所要タイム			
分析対象群	ターン後半平均所要タイム (sec.)		
上位群 (n=7)	0.90 ± 0.05	<div><div>n.s.</div><div>*</div></div>	* *
中位群 (n=8)	0.95 ± 0.05		
下位群 (n=14)	1.02 ± 0.05		
p<0.01**, p<0.05*			
雪煙の上がっている平均タイム			
分析対象群	雪煙の上がっている平均タイム (sec.)		
上位群 (n=7)	1.20 ± 0.03	<div><div>n.s.</div><div>* *</div></div>	* *
中位群 (n=8)	1.28 ± 0.04		
下位群 (n=14)	1.41 ± 0.11		
p<0.01**			

表2 回転競技タイム分析結果

トータルタイム			
分析対象群	トータルタイム (sec.)		
上位群 (n=7)	46.03 ± 0.33	<div><div>n.s.</div><div>* *</div></div>	* *
中位群 (n=8)	47.81 ± 0.76		
下位群 (n=5)	52.43 ± 3.55		
p<0.01**			
急斜面区間タイム			
分析対象群	急斜面区間タイム (sec.)		
上位群 (n=7)	14.94 ± 0.23	<div><div>n.s.</div><div>* *</div></div>	* *
中位群 (n=8)	15.45 ± 0.32		
下位群 (n=5)	17.12 ± 1.13		
p<0.01**			
ターン前半平均所要タイム			
分析対象群	ターン前半平均所要タイム (sec.)		
上位群 (n=7)	0.75 ± 0.03	<div><div>n.s.</div><div>n.s.</div></div>	n.s.
中位群 (n=8)	0.74 ± 0.06		
下位群 (n=5)	0.80 ± 0.06		
ターン後半平均所要タイム			
分析対象群	ターン後半平均所要タイム (sec.)		
上位群 (n=7)	0.37 ± 0.02	<div><div>n.s.</div><div>n.s.</div></div>	*
中位群 (n=8)	0.43 ± 0.07		
下位群 (n=5)	0.47 ± 0.04		
p<0.05*			
雪煙の上がっている平均タイム			
分析対象群	雪煙の上がっている平均タイム (sec.)		
上位群 (n=7)	0.51 ± 0.04	<div><div>n.s.</div><div>n.s.</div></div>	* *
中位群 (n=8)	0.58 ± 0.03		
下位群 (n=5)	0.65 ± 0.11		
p<0.01**			

の間に有意差 ($p<0.01$) が認められたが、回転競技では上位群と下位群の間にのみ有意差 ($p<0.01$) が認められた。

3-2. 滑走ライン分析結果

滑走ライン分析の結果として、図1に大回転競技における急斜面上部及び下部、図2に回転競技における急斜面上部及び下部の各群の急斜面区間タイムの平均値に最も近い選手の滑走ラインを例示する。

両競技共通して上位群の滑走ラインと比較すると、中位群の滑走ラインは旗門間の移動軌跡が上位群よりも次旗門に近く、旗門下部でオーバーランする滑走ラインとなっていた。また、下位群の滑走ラインは旗門通過後の山回りが深く旗門から離れた滑走ラインとなっていた。

3-3. スキー操作分析結果

スキー操作分析の結果として、表3に大回転競技、表4に回転競技のスキー操作分析結果を示す。上位群の選手は多くのターンで旗門通過時に両スキーの先端が次の旗門方向に向けられており、旗門通過後のシェーレンの発生が少ないのに対して、中位群及び下位群の選手の旗門通過時の両スキー先端の方向は斜面下方向を向いており、シェーレンの発生数も多い傾向があった。

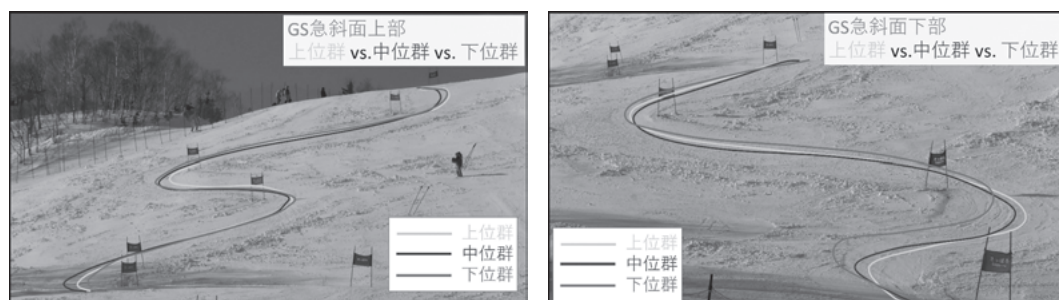


図1 大回転競技滑走ライン分析結果

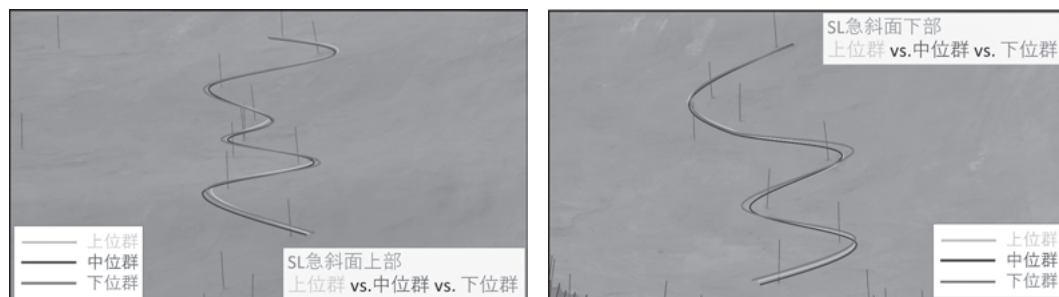


図2 回転競技滑走ライン分析結果

表3 大回転競技スキー操作分析結果

カテゴリー 及びBIB No.	急斜面上部					急斜面下部				
上位群	Gate1	Gate2	次旗門	下	シェーレン	Gate1	Gate2	次旗門	下	シェーレン
BIB1	次旗門：シ	下	1	1	1	下	下	0	2	0
BIB2	次旗門	次旗門	2	0	0	次旗門	次旗門	2	0	0
BIB3	次旗門	次旗門	2	0	0	下	次旗門	1	1	0
BIB4	次旗門：シ	次旗門	2	0	1	次旗門	次旗門	2	0	0
BIB5	次旗門	次旗門	2	0	0	下	次旗門	1	1	0
BIB6	次旗門	下	1	1	0	次旗門	次旗門	2	0	0
BIB10	次旗門：シ	次旗門	2	0	1	下	次旗門	1	1	0
	平均値		1.7	0.3	0.4	平均値		1.3	0.7	0.0
中位群	急斜面上部					急斜面下部				
BIB8	次旗門：シ	下	1	1	1	次旗門：シ	次旗門	2	0	1
BIB9	下	下	0	2	0	次旗門：シ	次旗門：シ	2	0	2
BIB11	次旗門	次旗門	2	0	0	次旗門：シ	次旗門	2	0	1
BIB13	下	下	0	2	0	下	下：シ	0	2	1
BIB15	次旗門	下	1	1	0	次旗門	次旗門	2	0	0
BIB16	次旗門：シ	下	1	1	1	下：シ	次旗門：シ	1	1	2
BIB19	次旗門：シ	下	1	1	1	下：シ	下：シ	0	2	2
BIB23	次旗門	次旗門	2	0	0	次旗門	次旗門：シ	2	0	1
	平均値		1.0	1.0	0.4	平均値		1.4	0.6	1.3
下位群	急斜面上部					急斜面下部				
BIB7	次旗門：シ	下	1	1	1	下	下	0	2	0
BIB14	次旗門：シ	下	1	1	1	下	下	0	2	0
BIB18	次旗門	下	1	1	0	次旗門：シ	次旗門：シ	2	0	2
BIB21	次旗門：シ	下	1	1	1	次旗門：シ	次旗門	2	0	1
BIB22	次旗門	下	1	1	0	下	下	0	2	0
BIB25	次旗門	下：シ	1	1	1	下	次旗門	1	1	0
BIB26	次旗門：シ	次旗門：シ	2	0	2	下	次旗門：シ	1	1	1
BIB28	下	次旗門	1	1	0	下	次旗門	1	1	0
BIB29	下	次旗門	1	1	0	下	下	0	2	0
BIB30	下	下	0	2	0	下	次旗門	1	1	0
BIB31	次旗門：シ	下	1	1	1	下	下	0	2	0
BIB32	次旗門	次旗門	2	0	0	次旗門：シ	次旗門：シ	2	0	2
BIB33	下	次旗門	1	1	0	次旗門	次旗門	2	0	0
BIB34	次旗門	次旗門	2	0	0	次旗門	次旗門	2	0	0
BIB35	次旗門：シ	次旗門	2	0	1	下	次旗門	1	1	0
BIB36	次旗門	次旗門	2	0	0	次旗門	次旗門	2	0	0
	平均値		1.3	0.8	0.5	平均値		1.1	0.9	0.4

次旗門：旗門通過時に両スキーの先端が次の旗門方向を向いた状態、下：旗門通過時に両スキーの先端が斜面下方向を向いた状態、シ：シェーレン

4. 考察

4-1. 上位群と中位群の差異について

本研究におけるタイム分析の結果としては、両競技において「急斜面区間タイム」については上位群と中位群の間に有意な差は認められなかった。多くのレース会場（競技コース）では、急斜面後にゴールに向かって中斜面・緩斜面が続くため、急斜面後の斜面における滑走タイムがトータルタイムに影響する可能性が示唆される。また、両競技において上位群と中位群との間には「ターン前半及び後半の平均所要タイム」「雪煙の上がっている平均タイム」でも有意差が認められなかったが、滑走ライン及びスキー操作の面で差異が生じていた。したがって、中位群の選手が技術系種目において上位群にランクアップするためには、ターン始動及び切り換えのタイミングとエッジング時間については大きく改善することを要さないが、ターン及び切り換えを始動する位置が課題となろう。

Ellen (1996), Lisa (1999), ウィズレルら (1999) は、より速く滑走するためのターン始動の位置に関して、「Rise Line」を提起している（図3）。Rise Line とは、「次にアプローチする旗門

表4 回転競技スキー操作分析結果

カテゴリ 及びBIB No.	急斜面上部											急斜面下部										
	Gate1	Gate2	Gate3	Gate4	Gate5	Gate6	Gate7	Gate8	次旗門	下	シェーレン	Gate1	Gate2	Gate3	Gate4	Gate5	Gate6	次旗門	下	シェーレン		
BIB1	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	0	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	0		
BIB4	次旗門・シ	次旗門	下	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	7	1	1	下	次旗門	下	次旗門	下	次旗門	3	3	0		
BIB5	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	0	下	次旗門	下	次旗門	下	次旗門	3	3	0		
BIB7	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	0	次旗門	次旗門	下	次旗門	下	次旗門	4	2	0		
BIB8	次旗門	次旗門・シ	下	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	7	1	1	次旗門	次旗門	下	次旗門	下	次旗門	4	2	0		
BIB9	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	0	次旗門	下	下	次旗門	下	下	2	4	0		
BIB14	次旗門	次旗門・シ	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	1	次旗門	次旗門	下・シ	次旗門	次旗門	次旗門	5	1	1		
	平均値											平均値										
	7.7											4.1										
	0.3											2.1										
	0.4											0.1										
中位群	急斜面上部											急斜面下部										
BIB3	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	0	下	次旗門	下	次旗門	下	次旗門	2	2	0		
BIB10	次旗門	次旗門	下・シ	次旗門	次旗門・シ	次旗門	次旗門・シ	次旗門	7	1	3	次旗門	下・シ	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門・シ	5	1	1		
BIB11	次旗門	次旗門	下・シ	下・シ	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	6	2	2	次旗門	下	下	下	下	次旗門	2	4	0		
BIB12	次旗門	次旗門	下・シ	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	7	1	1	次旗門	次旗門	下	次旗門	次旗門	次旗門	5	1	0		
BIB13	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	0	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	6	0	0		
BIB17	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	7	1	0	下	次旗門	下	次旗門	下	下・シ	2	4	1		
BIB18	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	0	次旗門	下	下・シ	下	下	下	1	5	1		
BIB19	次旗門	次旗門	下	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	下	6	2	0	下	次旗門	下	下	下	1	5	0		
	平均値											平均値										
	7.1											3.1										
	0.9											2.9										
	0.8											0.4										
下位群	急斜面上部											急斜面下部										
BIB15	次旗門	次旗門・シ	次旗門・シ	下	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	7	1	2	次旗門	下・シ	次旗門	次旗門	下	次旗門	4	2	1		
BIB16	下	次旗門	下	下	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	5	3	0	下	下	下	下	下	次旗門	1	5	0		
BIB21	下・シ	次旗門	下・シ	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	6	2	2	次旗門	次旗門	次旗門・シ	次旗門	下・シ	次旗門・シ	5	1	1		
BIB22	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門・シ	次旗門	次旗門	次旗門・シ	次旗門	8	0	2	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	6	0	0		
BIB23	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	8	0	0	次旗門	下	次旗門	次旗門	次旗門	次旗門	5	1	0		
	平均値											平均値										
	6.6											4.2										
	1.2											1.8										
	1.2											0.4										

次旗門：旗門通過時に向スキーの先端が次の旗門方向を向いた状態。 下：旗門通過時に向スキーの先端が斜面下方向を向いた状態。 シ：シェーレン

の上に伸びているフォールライン」のことを指しており、このRise Line上でターンを始動することが理想とされている。図3に示すように、Rise Line上でターンを始動した場合でも、旗門との位置関係によってターンの質は異なる。Ellen (1996) はターン始動の位置が旗門よりも遠過ぎる場合（図3〔c〕）や近過ぎる場合（図3〔b〕）には、スキーが横ズレを起こしたり、必要以上に丸く大きなターン弧になるなどの弊害を指摘している。中位群の選手にみられる、旗門通過時の両スキー先端の方向が斜面下方向を向いている場合には、図3〔b〕のような滑走ラインとなりやすくなる。その結果、旗門通過点を基準としたターン弧の落差が大きくなることで、次の旗門にターン弧を合わせるために、急激な方向転換によりシェーレンが生じたり、過剰なエッジング（加重）により減速要素を生じることとなる。したがって、現状よりも次旗門に対して上部からターン及び切り換えを始動することで、旗門通過時に両スキーの先端を次旗門方向に向ける余裕が生まれ、旗門通過後のシェーレンを抑制しながらオーバーランすることなく、タイムロスの少ない滑走ラインによって滑走することが可能となると考えられる。

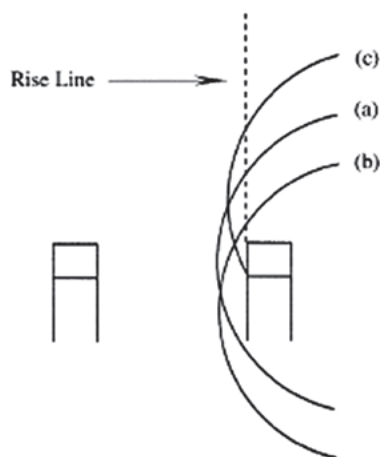


図3 Rise Line (Ellen, 1996)

このことにより、より高い急斜面での滑走スピードを得ることにつながり、急斜面後の斜面での滑走にスピードを活かすことにつながろう。

4-2. 中位群と下位群の差異について

本研究におけるタイム分析の結果としては、両競技において「急斜面区間タイム」について中位群と下位群の間に有意な差が認められた。つまり、このことは下位群の選手は中位群の選手と比べて急斜面という1つの斜面パートでもタイムを大きくロスしていることを意味する。旗門通過時の両スキー先端の方向が斜面下方向に向いている傾向にありながら、旗門通過後の滑走ラインが深く山回りしていることは、旗門通過後のエッジング時間が長いこととスキーを斜面横方向にずらしながらターンコントロールしていることによるものと推測される。特に大回転競技においては、「ターン後半平均所要タイム」と「雪煙の上がっている平均タイム」で有意な差が認められたことから、旗門通過後の過度なエッジングを抑制することが下位群の課題として位置づけられる。堀田ら（2013）が、区間タイムとターン後半のカービングの割合に負の相関が認められたことを報告していることから、旗門通過後のターン後半ではスキーのズレに伴う減速は最小限に留める必要があろう。回転競技については上記タイム分析項目について有意な差は認められなかったが、旗門通過後の過度なエッジングを改善することで中位群とのタイム差を縮めることに貢献するものと考えられる。

旗門通過後に過度なエッジングが生じたり、ターン後半にスキーをずらしてターンしなければならない要因として、内脚の荷重過多によるシェーレンが多く生じていることが挙げられる。つまり、旗門通過時に斜面下方向を向いていたスキーの先端が次のターン方向を向くまでには時間を要することになり、その間もスキーは滑走を続けることから、ターン後半のターン弧が大きく膨らみオーバーランすることとなる。このオーバーランをしたままでは次の旗門を通過できなくなってしまうため、旗門通過可能な滑走ラインに戻すために行う内脚荷重過多の過度なエッジング操作による減速がタイムロスに繋がっていたと推察される。中川ら（2015）や Thomas et al. (2017) は、大回転種目における圧力インソールを活用してターン時の足圧荷重について分析を行った結果、方向転換を伴うターン中は内脚と比較して外脚の荷重配分が大きいことを報告している。したがって、外脚を主体とした荷重動作により旗門通過後のエッジング時間を短縮することで、下位群にみられた旗門から離れた滑走ラインも改善されよう。

5. 結 言

本研究は女子選手を対象とした大回転競技及び回転競技のレース分析の結果から、技術系種目における競技成績に応じた滑走特性を明らかにすることを目的とした。

研究の結果、上位群と中位群の間にはタイム分析による有意差は認められなかったが、中位群の旗門間の移動軌跡が上位群よりも次旗門に近く、旗門下部でオーバーランする滑走ラインや旗門通過時の両スキー先端の方向は斜面下方向を向いており、シェーレンの発生数も多い傾向から、ターン及び切り換えを始動する位置を現状よりも次旗門に対して上部に改善することを中位群の課題として位置づけた。

また、中位群と下位群の間には両競技において「急斜面区間タイム」で有意な差が生じており、大回転競技では「ターン後半平均所要タイム」と「雪煙の上がっている平均タイム」でも有意な差が認められた。下位群の滑走ラインは旗門通過後の山回りが深く旗門から離れた滑走ラインとなっており、旗門通過時の両スキー先端の方向は斜面下方向を向いており、シェーレンの発生数も多い傾向があったことから、旗門通過後の過度なエッジングを抑制することを下位群の課題として位置づけた。

本研究では各群の分析対象者の技術動作については検討していないことによる限界はあるが、中位群及び下位群に対して提起した課題を改善することで、各群選手の競技力向上に寄与するものとする。本研究で明らかとなった結果が生じている技術的背景や、提起した課題改善のために必要な技術動作について検討を進めることを今後の課題とする。

謝 辞

本研究は日本学術振興会の科研費若手研究B：課題番号19K19972の助成を受けて実施された。

脚 注

- 1) 本研究では、平均斜度20%未満の区間を「緩斜面」、20%以上40%未満の区間を「中斜面」、40%以上の区間を「急斜面」と定義し分析を行った。
- 2) シェーレンとは、内脚主導のスキー操作により、ターン中盤から後半にかけて、ターン内側のスキーはターン内側へ切れ込むが、外側のスキーは直進性を帯びたままのスキーのトップが開き出した逆ハの字のシザース状態のことを指す。

文 献

- Bilić, Ž. and Mijanović, M. (2008) CAUSALITY OF LAP TIMES WITH TOTAL TIME IN SLALOM. *Acta Kinesiologica*, 2(1), p.52-56.
- Ellen Post Foster. (1996) RACE SKILLS for Alpine Skiing, Turning Point Ski Foundation, p.19,46.
- 堀田朋基, 井口文雄 (2013) FIS・GSレースにおけるターン軌道に関する研究. 日本スキー学会2013年度研究会講演論文集, p.10-12.
- 近藤雄一郎 (2021) アルペンスキー大回転種目におけるレース分析：大学生選手男女の比較. 北陸スポーツ・体育学研究, 2, p.1-7.
- 近藤雄一郎 (2022) アルペンスキー競技回転種目のレース分析に関する研究：女子選手を対象とした急斜面区間における特徴について. 日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会予稿集, p.389-390.
- Lisa Feinberg Densmore. (1999) *Ski Faster*, Ragged Mountain Press, p.74-81.
- 三浦哲, 山根真紀, 吉田陽平, 堀田朋基, 結城匡啓 (2015) アルペンスキーFar East Cup大回転競技におけるタイム分析. 日本スキー学会第25回大会講演論文集, p.22-23.
- 文部科学省 (2017) スポーツ基本計画, p.21.
- 中川喜直, 山本敬三, 竹田唯史, 相原博之 (2015) スキーターン中の加重イメージと足圧荷重：GSゲートとフリー滑走のケース. 日本スキー学会2015年度研究会講演論文集, pp.46-49.

中里浩介, 石毛勇介, 袴田智子, 田中仁ほか (2017) アルペンスキーワールドカップ苗場大会におけるスラローム競技のタイム分析：1本目Top30を対象として. 日本スキー学会第27回大会講演論文集, p.66-69.

竹田唯史, 近藤雄一郎 (2013) アルペンスキーにおけるタイム分析について：第90回全日本スキー選手権大会大回転競技を対象として. 日本スキー学会2013年度研究会講演論文集, p.8-9.

Thomas Falda-Buscaiot, Frédérique Hintzy, Patrice Rougier, Patrick Lacouture, Nicolas Coulmy. (2017) Influence of slope steepness, foot position and turn phase on plantar pressure distribution during giant slalom alpine ski racing. PLOS ONE 12(5), pp.1-17.

ウォレン・ウィズレル, デヴィッド・エヴラード [著], グリフ・フォーク, フォーク阿部まり子 [訳] (1999) アスレチックスキーヤー, 株式会社星雲社, p.221-231.

柳井久江 (2004) 4stepsエクセル統計, 第2版, 星雲社.

運動部活動の地域移行についての議論に関する一考察

近藤 雄一郎^{*1} 佐藤 亮平^{*2} 山次 俊介^{*1} 山田 孝禎^{*1} 沼倉 学^{*2}

(2022年9月28日 受付)

本研究は、運動部活動の地域移行に関わる諸問題について概観し、議論における成果と課題について考察することを目的とした。運動部活動の地域移行に関する議論は、教員の労働時間が長時間に及んでいることを起点として議論が構成されるが、部活動に対する生徒のニーズが一定程度あることにより、部活動は廃止ではなく存続の可能性が探られていった。こうした議論の構成をとることで「地域スポーツクラブ」の活用の可能性の道が拓かれ、経済的価値を部活動を起点に創出することで、経済的成長戦略となる可能性が提起された。しかし、これまでの取り組みにおける運動部活動の教育的機能については評価・検討する必要があると考えられた。また、運動部活動に携わる教員の専門性に関わること及び運動部活動が教育の論理と競技力の論理の二重構造を持ち存在していることに関しては、十分に議論が進められていないと考えられた。したがって、活動の実態からだけでは見えない部分あるいは教員が形成する教育文化に関する検討が必要だといえた。そして、運動部活動の地域移行を進めるに当たっては、自主性・継続性・公認性の3条件を担保する必要があると考えられた。

キーワード：運動部活動・地域移行・議論構造

1. 緒言

2022年6月に運動部活動の地域移行に関する検討会議（座長：友添秀則氏）において審議されてきた「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」が取りまとめられ、室伏スポーツ庁長官に手交された。これを受けて、運動部活動の地域移行に関するニュースがメディア各社で大々的に取り上げられるとともに、各自治体の教育委員会を中心に運動部活動の地域移行に向けた動きが加速することとなる。

^{*1}福井大学学術研究院教育・人文社会系部門教員養成領域

^{*2}宮城教育大学教育学部

運動部活動の地域移行に関する議論は、1960年代から進められてきている。神谷（2015）によると、当時は体力づくりや社会体育における競技力向上の養成、部活動指導に関わる教職員への手当の問題を背景に運動部活動の地域移行が進められてきたという。また、友添（2016）によると、生涯スポーツ社会の到来という社会的変化、運動部活動が教科外活動であるという運動部活動自体の位置づけ方の問題、教員の多忙化により運動部の実質的な指導を地域の外部指導者に委ねることが多かった現実などにより、運動部活動の外部化の議論は1990年代に再燃することとなる。中澤（2011）は、1980年代後半から2000年代にかけては「合同部活動の実施、地域社会との連携、地域社会への移行という、運動部活動の多様化＝外部化を模索していった」（p.46）時期として位置づけている。この頃に文部科学省（2001年の中央省庁再編までは文部省、以下、文科省）は、運動部活動の指導や運営の多様化＝外部化を推進する事業として、「スポーツエキスパート活用事業」（1997年）、「運動部活動地域連携実践事業」（2002年）、「地域スポーツ人材の活用実践支援事業」（2008年）を実施している。また、2000年の保健体育審議会の答申では、全学校週5日制時代における地域の子どものスポーツ活動（運動部活動）の受け皿として想定される総合型地域スポーツクラブの政策構想が示された。

以上のように、これまでも社会・教育・スポーツ等の状況に応じて、部活動の地域移行について議論、政策実行されてきたが、中澤（2011）が述べるように各学校で運動部活動の外部化を、あくまでも模索するに留まり、運動部活動それ自体が完全に外部に委託されるようになったわけではない。しかし、近年の政策や提言は、これまでのものと性質が大きく異なり、全国的に運動部活動の地域移行をより現実的に推進するような内容となっていると捉えられる。2018年にスポーツ庁が「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を策定し、生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備のために地域との連携が強調されている。また、2020年には文科省より「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革」が示され、休日の部活動の段階的な地域移行が具体的な方策として取組を進めることが明記されている。この部活動改革については具体的なスケジュールも示されており、2023年までは国や地方自治体で各事業の推進を図り、2023年からは部活動改革（休日の部活動の段階的な地域移行）を全国展開することとしている。2022年に出された「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」でも、「中学生等のスポーツ環境について、今後は学校単位から地域単位での活動に積極的に変えていく」と明記され、2023年度からの3年間を休日の運動部活動の段階的な地域移行を実行する改革集中期間として位置づけている^{注1)}。他方、経済産業省に属する地域×スポーツクラブ産業研究会（座長：間野義之氏）の第1次提言（2021年）においても学校部活動の持続可能性が問題意識の1つとして設定され、文科省に対し、学校の部活動は「社会体育」であることを明確にし、運動部活動を地域移行する必要性を指摘している。また、2021年より経済産業省は「未来のブカツ」として、部活動改革のためにスポーツ産業・教育産業と学校現場が協力するフィージビリティ・スタディ事業に取り組んでいる。

つまり、半世紀前から議論されてきた部活動の地域移行について、ここ数年で急速に全国的に

推進することが図られようとしている。今回提出された「運動部活動の地域移行に関する検討会 議提言」の内容についても、専門家やメディアから問題点や課題が指摘されている状況にあるが、今後3年間の段階的な部活動の地域移行の実現は既定路線となっている。運動部活動を地域移行するにあたって、運動部活動に関する議論の内容や課題を捉えておくことは必要であろう。そこで、本研究は運動部活動の地域移行に関わる諸問題について概観し、議論における成果と課題について考察することを目的とする。なお、本研究は運動部活動の地域移行を進めていくための基礎的研究として位置づける。

2. 方 法

本研究では、運動部活動の在り方や運動部活動の実態調査に関する文献及び論文を参照し、運動部活動の地域移行に関する論点について考察する。その際、運動部活動の地域移行推進に影響を与えたと考えられる「教員の多忙化」「生徒の部活動参加の志向性」「部活動指導に関わる専門性」「運動部活動における教育と競技の関係性」の4項目に関する先行研究を参照し、現在の部活動が抱える問題点について整理する。その上で、これまでに進められてきた部活動の地域移行に関する省庁から出された通知や提言の内容を整理し、どのような形で議論が進められているかを検討し、その議論が従来の議論とどのように折衷していくかについて考察する。

なお、本稿では運動部活動の地域移行によって生じるであろう改訂学習指導要領における部活動の位置づけや「国立及び公立学校の義務教育諸学校の教育職員の給与等に関する特別措置法」等の制度的問題、地域指導者に関する人材の問題、部活動を実施する施設の問題、大会の在り方に関する問題等については、紙面の関係上、対象外とすることを断っておく。

3. 部活動に関する議論の整理

以下では、運動部活動の地域移行に関する議論の中で特に焦点化された、「教員の多忙化に関する議論」「生徒の部活動参加保証に関する議論」「部活動指導に関わる専門性に関する議論」「運動部活動における教育と競技の関係性に関する議論」の4つの議論に関する先行研究の内容について整理する。そして、文科省及びスポーツ庁から出された通知・提言及び経済産業省地域×スポーツクラブ研究会から出された提言をもとに、運動部活動の地域移行に関わる議論の変遷について整理する。

3-1. 教員の多忙化に関する議論

太田(2018)は、3182名の中学校教員を対象に実施した、長期休業期間を除いた通常期の平均労働時間に近い10月の労働時間の調査について報告している。その結果、教員の労働時間の平均値は平日1日当たり12.03±1.31時間であり、1日の半分以上の時間を学校内での仕事に費やしていることが明らかとなった。平日1日当たり12時間以上働いている教員について、「1週間当たり

20時間の時間外労働×4週＝月80時間の時間外労働」とみなすならば、健康や生命を害する危険のある「過労死ライン」を超えていると想定される。また、休日出勤の有無について調査すると、9割以上の教員が1か月の間に少なくとも1度は休日も出勤していると回答し、休日も出勤することがあると答えた2920名の教員のうち、およそ77%が週1回以上、休日に出勤していると回答した。この結果は、平日の労働時間の合計だけでも過労死ラインを超えるほど働いている教員の多くは、休日を返上してまで学校に来て働いていることを表している。勤務に対する実感としての「仕事が忙しい」という質問に対して、55.4%という半数以上の教員が「とても思う」と強い肯定を示し、「どちらかといえば思う」と答えた教員（30.7%）と合わせると9割以上の教員が自身の働き方を忙しいと認識していた。

長時間勤務の要因の一つとして「部活動・クラブ活動」が挙げられるが、1週間当たりの部活動立会時間について調査すると、教員全体では1週間当たり平均10時間弱は部活動に立ち会っていることが明らかとなり、1週間当たり5日以上部活動を実施している教員は87.1%にも上っていた。運動部活動顧問の時間的負担については青柳ら（2017）も調査を実施しており、公立中高教員約350名を対象としたアンケート調査では、実際に練習に参加している時間が最も長く、年間平均で755.8時間であった。また、引率に関連する業務は練習試合143.9時間、合宿36.9時間、大会93.6時間で合計274.4時間となり、その他にも366.3時間ほどが部活動の間接的なマネジメント業務^{注2)}の時間に充てられていることを報告している。

また、文科省（2018）が実施した教員勤務実態調査（平成28年度）の分析結果によると中学校教員の1日当たりの平均学内勤務時間は11時間32分であり、業務内容別の学内勤務時間についてみると、授業準備に充てられている平均時間は1時間26分であった。

3-2. 生徒の部活動参加の志向性に関する議論

西島（2006a）は、部活動に加入している中学生に対する調査結果より、部活動のなかで一番楽しみにしていることとして、「練習や活動」が40.0%、「部員とのおしゃべり」が32.5%、「試合やコンクール」が22.0%であったことを報告している。

また、西島（2006b）は部活動非加入者も含めた中学生及び高校生を対象にした調査で、部活動を通して得られる効用として、「仲のよい友達ができる」「好きなことがうまくなる」「精神的につよくなる」「礼儀正しくなる」「進学や就職に役立つ」「健康なからだをつくれる」の6項目を挙げて、そう思うかどうか尋ねている。その結果、部活動加入者が一番期待している効用は「仲のよい友達ができる」であったことを報告している。そして、西島（2006c）は中学校生徒に対して部活動改革に関する調査を行い、「自分の中学校に入りたい部活動がない場合にどうしたいか？」という問いに対して、46.6%が自分の中学校の他の部活動への加入（自校志向）を希望し、34.3%が他の中学校の入りたい部活動への加入（他校志向）を希望する結果となった。また、「大会やコンクールに参加するのに必要な人数が足りない場合にどうしたいか？」という問いに対

しては、26.7 %が他の中学校と合同チームをつくることを希望（合同チーム）し、47.3 %が合同チームをつくるのではなく、自分の中学校の他の部活動をやっている人に加わってもらって参加することを希望（自校の他の部員）する結果となった。そして、「入っている部がなくなってしまう場合にどうしたいか？」という問いに対しては、61.5 %が学校の他の部活動を志向（学校志向）し、36.8 %がその活動のできる学校外のスクールや教室を志向（地域志向）する結果となった。

なお、部活動に高コミットメントと非加入の生徒だと半数強が地域志向であり、中・小コミットメントの生徒は4分の3が学校志向であった。また、活動の得意な生徒は地域志向が強く、ふつうや苦手な生徒は学校志向の傾向であった。そして、中学入学以前や現在において、学校以外でその活動を行っている生徒は、地域志向が強い傾向があった。

また、笹川スポーツ財団（2018）は12～21歳のスポーツライフに関する調査を実施し、所属している運動部と生徒自身の志向性に関する調査結果を示している。その結果、「所属している運動部と生徒本人がともに勝つことを目指す勝利志向のグループ」が62.8 %と最も多く、「部は勝利志向だが生徒本人は楽しみ志向のグループ」が16.3 %、「部と生徒本人ともに勝ち負けよりも楽しく活動することを目指す楽しみ志向グループ」が15.3 %、「部は楽しみ志向だが生徒本人は勝利志向のグループ」が5.6 %という結果であった。つまり、半数以上が部及び生徒共に勝利志向であり、本人は楽しみ志向だが勝利志向の割合も合わせると、8割の運動部が勝つことを目指している状況にある。

3-3. 部活動指導に関わる専門性に関する議論

文科省（2018）が実施した教員勤務実態調査（平成28年度）の分析結果によると、調査に回答した84.5 %の教員が部活動の顧問を担当しており、「担当の部活動について、あなたは指導可能な知識や技術を備えていると思いますか」との設問に対し、「あまり備えていない」が18.9 %、「全く備えていない」が15.1 %で約3割の部活動顧問が部活動指導に必要な知識や技術を十分に持ち合わせていないで指導にあたっている実態が浮き彫りとなった。

また、太田（2018）が報告する調査結果では、9割以上の教員が部活動顧問に就いており、どの担当教科でも、ほぼ全員が何らかの部活動顧問に就いていることが明らかとなった。また、加藤（2018）によると、運動部の顧問担当状況に関しては、保健体育科教員にいたっては95.4 %が運動部の顧問に就いており、外国語・社会・理科・数学・国語の担当教員でも7割以上が運動部の顧問に就いている実態が明らかになった。そこで、運動部顧問教員に対し、科学的知識に基づいて部活動指導を行うことができるかどうかを尋ねてみると、保健体育科教員は7割以上が科学的知識に基づいて指導できると答えているのに対し、その他の教員では4割ほどであった。運動部に限らず文化部も含めた結果であるが、顧問を務める部の活動を中高時代に経験していた教員は42.5 %であり、残りの57.5 %の教員は中高時代に経験が無い部の顧問をしており、かつて経験したことのない部の顧問を任されている教員が多数派であることが明らかとなった。顧問をする

部の経験の有無と、部活動に感じるストレスの関係についてみると、経験がある教員よりも経験がなかった教員の方が、部活動にストレスを感じる割合が高く、中高時代の経験がない教員は、部活動顧問にストレスを感じやすい傾向にあることが明らかとなった。

西島（2006）は部活動における指導者の専門性について中学生を対象に調査を実施しており、「専門に指導できる教師が学校にいない場合に誰に指導してもらいたいか？」という問いに対して、25.1 %が専門ではなくても学校の教師を希望し、73.3 %が専門の外部指導員を希望する結果となった。その内訳として、部活動にコミットメントが高い生徒やその運動が得意な生徒、中学入学以前や現在において学校以外でその活動を行っている生徒、保護者にその活動を行った経験がある生徒ほど外部指導員を希望する傾向にあることが明らかになった。

3-4. 運動部活動における教育と競技の関係性に関する議論

運動部活動に関する教育の論理と競技の論理の二項対立原理をもとにした議論のはじまりは、1940年代まで遡る。戦後の運動部活動は、1948年の文部省（現：文部科学省）通達「学徒の対外試合について」が出されて以降、運動部活動を徹底して教育活動として位置づけるために、対外試合の基準を厳格に定め、勝利至上主義や商業主義を抑制する方針がとられた。しかし、東京オリンピックが開催された1960年代以降は、対外試合基準の一連の規制緩和により、運動部活動を選手養成の場ととらえる各競技団体と、あくまで教科の活動では得られない生徒の自治能力や主体性を涵養する場と考える文部省・教育委員会・学校との、「競技」と「教育」という対立する論理の葛藤の歴史といえる。しかし、現実的には競技の論理が教育の論理を押し切ってきた過程と捉えられ、友添（2016）は競技の論理の優越が、勝利がすべてに優先されるという悪しき勝利至上主義を生み出し、運動部における暴力を引き起こす温床となっていると指摘する。

久保（2005）は、運動部活動における教育と競技の二重空間構造について次のように述べる。「運動部活動は、教育の論理が支配する『教育的空間』に存在するのみならず、同時に競技の論理が支配する『競技的空間』にも存在している。つまり運動部活動は『教育的／競技的二重空間』にあるといえる。それゆえに、『教育的空間』とは異なる空間、すなわち『競技的空間』におけるサブカルチャーの影響を受けることになる。その二重空間において『教師／コーチ』は、『教育的空間』の価値『子どもたちの成長は善い』ではなく、『競技的空間』の価値『勝利は善い』に支配される蓋然性がある。そこでは『教育プログラム』の中に組み込まれたはずの『コーチング回路』が、『競技的空間』からの勝利への強い『ノイズ』によって、あたかも『競技力向上プログラム』の中に組み込まれたかのように変質してしまうのである。」

競技の論理に関して岡部（2019）は、スポーツを考えるうえで、結果としての勝敗はスポーツの本質的な特徴とし、近代社会における経済的、政治的側面の変化は、スポーツのあり方や勝敗の重要性、実践主体の立場や内面も変化させることになり、勝利／敗北の二次元的なコード（規範）によって実践主体は各々の動機や状態が異なるものであっても勝利を追求することを強いら

れるようになると述べる。そして、競技スポーツの論理・構造によって導き出される実践や価値観は、教育としてのスポーツの実践と対立することになり、二重構造の問題を解決することはできないことを指摘する。

一方、教育の論理としては、現行学習指導要領における部活動は教育課程外の活動であるが学校教育の一環であるという位置づけを前提とする。学習指導要領の総則には「教育課程外の学校教育活動と教育課程の関連が図られるように留意するものとする」と明記されており、部活動を教育的視点から捉える必要性が出てくる。神谷（2015）は、子どもの人格形成に向けた、教科指導と生活指導にかかわる教育計画が教育課程であるとし、そこでは子どもを文化・科学、あるいは生活・集団に働きかけさせたり、その結果として陶冶と訓育に導いたりする教師の専門性が想定されてきたと述べる。そして、学校が運動部活動を課外に位置づける積極的な理由として、教育課程における陶冶と訓育が強化される点にあり、教育課程から離れた日常生活に近い場面で、発展的な陶冶と訓育に向けた指導が展開でき、子どもの人格形成という目標により接近できることを挙げている。また、課外の運動部活動の指導が、教育課程において発揮される教師の専門性と密接に関わるからこそ、学校で実施する根拠となることを指摘する。

森田（1993）は、学校教育において部活動で競技力を向上させることの問題性を、「競技力向上」の立場と「学校教育」の立場の両側面から検討している。そこでは、スポーツ文化の発展という立場から競技力向上を積極的に捉えた場合、このような政策の妥当性・合理性が問われなければならないと述べる。つまり、戦後以来、オリンピックに向けた選手強化への圧力を背景に、対外競技（対外試合）基準が緩和され、児童・生徒の競技の場は広げられてきたが、その成果が確実に実を結んでいるのかということを問う必要がある。現実としては、対外試合の枠を拡大してきたことによって、指導者だけでなく子どもたちも目の前の大会での勝利や記録をおさめることに主眼を置いて、猛練習を行っている。さらに、この状況はマスコミ報道によって過熱化され、学校さらには地域を巻き込み、結果的に、子どもたちはその時期に好成績や勝利をおさめることができたとしても、身体的にも精神的にも擦り切れてしまい、本来最高のパフォーマンスが期待される時期には既に燃え尽きた（バーン・アウト）状態になってしまっていることも少なくない状況を生み出している。一方、学校教育の立場から見ると、部活動の最も大きな意義は「1つのことに取り組む中で得られる価値」（「運動の内在的価値」としての主観的意味〔達成感や自己実現など〕）であり、自らの卓越に向けて「うまくなろうとする」「勝とうと試みる」経験自体が重要であるとする。そのため、学校教育の場で「競技力の向上」を主眼に置くということは、競技力（記録や勝敗など）という「一元的な」序列の中に子どもたちが組み入れられることであり、子どもたちがスポーツ経験によって得られる多様で豊かな可能性を制約・損失しかねないことになる。

3-5. 運動部活動の地域移行に関わる議論の変遷

3-5-1. 文科省「学校における働き方改革に関する緊急対策の策定及び学校における業務改善及び勤務時間管理等に係る取組の徹底について」

2016年に実施された公立の小・中学校の教員を対象とした教員勤務実態調査の結果によって、教員の長時間労働の実態が深刻な状況であることが改めて明らかになった^{注3)}。その結果を受けて、2017年6月22日に文部科学大臣から中央教育審議会（以下、中教審）に「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」が諮問され、教員の長時間労働をめぐる問題が教育政策上の重要課題として取り組まれることになる（北神，2018）。そして、中教審が同年12月22日に「中間まとめ」を取りまとめると、同月26日には文科省が「学校における働き方改革に関する緊急対策」を取りまとめ、2018年2月9日に「学校における働き方改革に関する緊急対策の策定及び学校における業務改善及び勤務時間管理等に係る取組の徹底について」（以下、緊急対策）が通知された^{注4)}。この緊急対策の「1. 学校における業務改善について（2）中間まとめにおいて示された業務の在り方に関する考え方を踏まえて教育委員会が特に留意して取り組むべき個別業務の役割分担及び適正化について」において、学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務として「部活動」が明示された。そこでは、以下のように部活動について記されている。

各学校において、教師の負担の度合いや専門性の有無を踏まえ、学校の教育方針を共有した上で、学校職員として部活動の実技指導等を行う部活動指導員をはじめとした外部人材の積極的な参画を進めること。

少子化等により規模が縮小している学校においては、学校に設置する部活動の数について、生徒や教師の数、部活動指導員の参画状況を考慮して適正化するとともに、生徒がスポーツ・文化活動等を行う機会が失われないよう複数の学校による合同部活動や民間団体も含めた地域のクラブ等との連携等を積極的に進めること。

教師の勤務負担軽減や教科指導等とのバランスという観点だけでなく、部活動により生徒が学校以外の様々な活動について参加しづらいなどの課題や生徒のバランスの取れた健全な成長の確保の観点からも、部活動の適切な活動時間や休養日について明確に基準を設定すること。

一部の保護者による部活動への過度の期待が見られることも踏まえ、入試における部活動に対する評価の在り方の見直し等に取り組むこと。

部活動に過度に注力してしまう教師も存在するところであり、教師の側の意識改革を行うために、採用や人事配置等の段階において、教師に部活動の指導力を過度に評価しないよう留意すること。

以上の通知においては、教員の長時間労働を解消するための働き方改革における一つの方策として、部活動業務の位置づけが示され、部活動指導員などの外部人材の積極的参画の推進が提起された。また、少子化の影響を鑑みた部活動数の見直しと合同部活動・地域クラブ等との連携推進、部活動の活動時間の適正化、入試制度の在り方、教員の採用・人事配置についても取組の徹底を求めている。

3-5-2. スポーツ庁「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」

緊急対策が通知された同時期の2018年3月には、スポーツ庁より「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」（以下、総合ガイドライン）が示された。総合ガイドラインでは今後の運動部活動の在り方に関する方針が示されており、緊急対策のような教員の働き方改革を意識した内容ではなく、以下に示すように運動部活動に参加する生徒にとって望ましいスポーツ環境構築の観点に立った内容となっている。

4 生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備

(1) 生徒のニーズを踏まえた運動部の設置

ア 校長は、生徒の1週間の総運動時間が男女ともに二極化の状況にあり、特に、中学生女子の約2割が60分未満であること、また、生徒の運動・スポーツに関するニーズは、競技力の向上以外にも、友達と楽しめる、適度な頻度で行える等多様である中で、現在の運動部活動が、女子や障害のある生徒等も含めて生徒の潜在的なスポーツニーズに必ずしも応えられていないことを踏まえ、生徒の多様なニーズに応じた活動を行うことができる運動部を設置する。

…（中略）…

イ 地方公共団体は、少子化に伴い、単一の学校では特定の競技の運動部を設けることができない場合には、生徒のスポーツ活動の機会が損なわれることがないように、複数校の生徒が拠点校の運動部活動に参加する等、合同部活動等の取り組みを推進する。

(2) 地域との連携等

ア 都道府県、学校の設置者及び校長は、生徒のスポーツ環境の充実の観点から、学校や地域の実態に応じて、地域のスポーツ団体との連携、保護者の理解と協力、民間事業者の活用等による、学校と地域が共に子供を育てるという視点に立った、学校と地域が協働・融合した形での地域におけるスポーツ環境整備を進める。

…（後略）…

しかし、総合ガイドラインの中では「都道府県、学校の設置者及び校長は、教師の運動部への

関与について、『学校における働き方改革に関する緊急対策（平成29年12月26日 文部科学大臣決定）』及び『学校における働き方改革に関する緊急対策の策定並びに学校における業務改善及び勤務時間管理等に係る取組の徹底について（平成30年2月9日付け29文科初第1437号）』を踏まえ、業務改善及び勤務時間管理等を行う」と記載されているように、先述した緊急対策の内容が少なからず反映されている。そのため、緊急対策では具体的に示されていなかった内容について基準^{注5)}を明示しつつ、緊急対策と同様に部活動数の適正化、部活動指導員の積極的配置、合同部活動・地域クラブ等との連携推進について提起する。

3-5-3. 文科省「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」

総合ガイドラインに基づく運動部活動改革が進められる渦中の2020年9月に文科省より「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」（以下、働き方改革を踏まえた部活動改革）が示される。先述した緊急対策では、教員の働き方改革の一方策として部活動に対して言及していたが、2019年中教審答申「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」では、部活動の設置・運営は法令上の義務ではなく、将来的には、部活動を学校単位から地域単位の取組にし、学校以外が担うことも積極的に進めるべきとされたことから、これまで以上に重点的に部活動改革に取り組むこととなる。そこでは、「部活動は、教科学習とは異なる集団での活動を通じた人間形成の機会や、多様な生徒が活躍できる場である」との部活動の意義を示しながらも、「一方で、これまで部活動は教師による献身的な勤務の下で成り立ってきたが、休日を含め、長時間勤務の要因であることや、指導経験のない教師にとって多大な負担であるとともに、生徒にとっては望ましい指導を受けられない場面が生じる」との課題を指摘している。そこで、以下の3つの改革の方向性を示す。第一に、部活動は必ずしも教師が担う必要のない業務であるであることを踏まえ、部活動改革の第一歩として、休日に教科指導を行わないことと同様に、休日に教師が部活動の指導に携わる必要がない環境を構築する。第二に、部活動の指導を希望する教師は、引き続き休日に指導を行うことができる仕組みを構築する。第三に、生徒の活動機会を確保するため、休日における地域のスポーツ・文化活動を実現できる環境を整備する。そして、具体的な方策として、休日の部活動の地域移行を令和5年度以降に段階的に進めていくことを掲げた。働き方改革を踏まえた部活動改革が示されたことにより、部活動改革における具体的方策を改革スケジュールに準じて実施する必要性が出てきたことで、運動部活動の地域移行に議論が加速することとなる。

3-5-4. 経済産業省地域×スポーツクラブ産業研究会「第1次提言」

学校教育及び運動部活動を管轄する文科省（スポーツ庁）に先立って、2020年10月に経済産業省内に地域×スポーツクラブ産業研究会が設置され、運動部活動問題についても議論されることとなる。研究会立ち上げ後、計10回の議論を経て、2021年6月に「第1次提言」が公表された。

第1次提言では、以下の2つの問題意識と4つの関連論点が表示されている。

2つの問題意識

1. 「サービス業としての地域スポーツクラブ」を核とした産業クラスターの可能性
 - ・欧州では地域社会・経済のエンジンと呼びうる「地域スポーツクラブ」が存在。日本においても「無償ボランティア」頼みではなく、地域に根付き、裾野の広い「新しいサービス業」を生み出し、成長軌道に乗せるための手立てを考える必要。
2. ジュニア世代のスポーツ基盤である「学校部活動」の、持続可能性問題
 - ・ジュニア世代の主なスポーツ機会である学校部活動は、教員の過重労働問題等により、持続可能性に黄色信号。
 - ・休日部活動の段階的な地域移行方針は文科省から通知されるも、その後の全体像と道筋は未だ不透明。

4つの関連論点

- i. 資金循環—トップスポーツの成長産業化による、スポーツ資金循環の創出—
 - ・世界のDX潮流に乗れていない日本のトップスポーツは成長に課題。トップスポーツが稼ぎ、その収益や人材が地元でスポーツの裾野を広げ、さらに地元のプロスポーツの成長に繋がるという「資金・人材の太い循環」の構築の可能性。
- ii. 活動場所—自治体とスポーツ産業それぞれの、施設運営・改修負担の緩和—
 - ・施設老朽化・少子化が進む中、学校施設や社会体育施設は更新・再編が必要。一方、自治体財政は逼迫し、スポーツクラブ産業の側も施設運営・改修負担に課題を抱える。民間資金を活用したwin-winの合理的な再整備に課題。
- iii. 指導者—プロフェッショナルとしての（専業・兼業）スポーツ指導者の確保—
 - ・指導者を質的にも量的にも確保する必要。学校教員や元アスリートの、スポーツ指導者としての学習機会確保や資格の活用、学校教員の兼職
 - ・兼業に課題。
- iv. 派生需要—リアルとデジタルが融合した「総合放課後サービス業」への発展—
 - ・学校ICT環境とEdTechの普及により、従来サービスの「コモディティ化」に対する不安や、施設維持負担を抱える学習塾等と、スポーツクラブ産業とが融合した総合放課後サービスが生まれる可能性。

上記の問題意識及び関連論点の踏まえ、「第1次提言」では以下の4つの提言を示している。

提言1：「学校部活動の地域移行」についての方針の明確化

- ・学校部活動はそもそも「社会教育」（学校でも企業やNPOでも担いうる機能）である

この確認が必要。学校部活動は、①社会教育法上の「社会教育」の定義「学校教育課程外の組織的な教育活動」に該当するはずだが、②文科省の事務連絡には学校部活動は「学校教育の一環として、学習指導要領に位置付けられた活動」と記載されている。この「曖昧さ」は、地域移行を考える学校現場や、受け皿を担いうるスポーツクラブ産業の判断を迷わせないだろうか。

- ・文科省は昨年「休日部活動の段階的地域移行」「長期的には地域に移行すべき」との見通しを出したが、そもそも、①学校部活動は「社会教育」である旨を明確にし、②学習指導要領からは部活動の位置づけを外し（曖昧さを解消）、③平日も含めて地域移行する具体的方針も明確にすることが必要ではないだろうか。

提言2：全ての競技で、「学校部活動単位」に限らない「世代別（U15/U18等）」の大会参加資格に転換を

- ・中高生の参加する既存のスポーツ競技大会の多くでは、「学校部活動」単位でなければ参加できず、「地域スポーツクラブ」単位での参加が認められていない。
- ・しかし、（提言1で整理したとおり）学校部活動が「社会教育」と整理されるのであれば、学校部活動も地域スポーツクラブの一類型に過ぎないといえよう。その場合、大会参加資格を運営主体の別によって「学校単位」に限る合理的な理由はないのではないか。
- ・学校部活動の地域移行に伴い、全ての中央競技団体（NF）や中体連・高体連の連携により、①既存の学校部活動単位縛りの大会の「世代別大会への変更」や、②「新しい世代別大会の設立」が進められるべきではないか。

提言3：「スポーツは、有資格者が有償で指導する」という常識の確立

- ・スポーツ指導を体系的に学んでいない者による指導の常態化、ハラスメント問題など、一定のクオリティの指導者の確保をめぐる課題が山積。また、学校教員等の「事実上の無償ボランティア」で犠牲と無理を重ねてきたスポーツ現場は限界。「スポーツは、有資格者が、有償で指導する」システムに抜本的に設計しなおすべき段階（スポーツ指導で生計を立てられない構造の解消）。
- ・また、優れたスポーツ指導者の資質をもつ学校教員が、地域スポーツクラブにおいてスポーツ指導を有償で兼職・兼業しようにも、「理屈上は兼業可能だが、事実上許可されない」現状を改める工夫が必要。

提言4：学校の「複合施設」への転換と開放、「総合型放課後サービス」の提供

- ・学校体育施設は、自治体毎の条例や規則等により「営利目的」の団体の使用を禁止している例も多く、スポーツクラブ産業がスクール事業などを行う際に安定的な活動場所として確保することが難しい。旧スポーツ振興法の残滓（「営利のためのスポーツを振興するものではない」）をひきずり、スポーツ基本法の理念が反映されないままの自

治体条例の改正を促すことが必要ではないか。

- ・少子化が止まらない中での学校施設の建替え・再編に際し、稼働率向上・収益力向上がカギではないか（たとえば全ての学校に「低稼働率な屋外プール」は不要、メリハリのある施設整備が必要）。
- ・①学校体育施設の「社会体育施設化」、さらに、②学校施設管理の（教育委員会から）首長部局への移管と、商業施設（カフェ等）・オフィスの入居も前提にした「複合施設化」、③手段としてPPP（Public Private Partnership）による民間投資活用を促すことが有効ではないか。このとき、国から地方自治体への補助スキームにおいてインセンティブ付けが有効ではないか。

上述した「第1次提言」を基に、経済産業省では「未来のブカツ」として、提言で掲げた目指す姿実現に向けたフィージビリティ・スタディ事業を既に開始しており、現在は2021年度の事業結果を検証しつつ、2年目の実証事業を展開している状況にある。

3-5-5. スポーツ庁「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」

経済産業省地域×スポーツクラブ産業研究会による「第1次提言」が公表された4か月後の2021年10月に、スポーツ庁の運動部活動の地域移行に関する検討会議が開催された。そこでは計8回の議論を経て、2022年6月に「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」が示されることとなる。提言では、「近年、特に持続可能性という面で厳しさを増しており、中学校生徒数の減少が加速化するなど深刻な少子化が進行」「競技経験のない教師が指導せざるを得なかったり、休日も含めた運動部活動の指導が求められたりするなど、教師にとって大きな業務負担」「地域では、スポーツ団体や指導者等と学校との連携・協働が十分ではない」という3つの課題が位置づけられた。この課題を踏まえ、目指す姿として「少子化の中でも、将来にわたり我が国の子供たちがスポーツに継続して親しむことができる機会を確保。このことは、学校の働き方改革を推進し、学校教育の質も向上。」「スポーツは、自発的な参画を通して『楽しさ』『喜び』を感じることに本質。自己実現、活力ある社会と絆の強い社会創り。部活動の意義の継承・発展、新しい価値の創出。」「地域の持続可能で多様なスポーツ環境を一体的に整備し、子供たちの多様な体験機会を確保。」の3つを挙げている。そして、改革の方向性として、「まずは、休日の運動部活動から段階的に地域移行していくことを基本とする（目標時期：令和5年度の開始から3年後の令和7年度末を目標）」「平日の運動部活動の地域移行は、できるところから取り組むことが考えられ、地域の実情に応じた休日の地域移行の進捗状況等を検証し、更なる改革を推進」「地域におけるスポーツ機会の確保、生徒の多様なニーズに合った活動機会の充実等にも着実に取り組む」「地域のスポーツ団体等と学校との連携・協働の推進」を掲げる。「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」で示された課題対応の指針は以下の通りである。

1. 新たなスポーツ環境について

- ・地域の実情に応じ、多様なスポーツ団体等が実施主体
- ・特定種目だけでなく、生徒の状況に適した機会を確保

2. スポーツ団体等について

- ・先進的に取り組んでいる事例をまとめ提供
- ・必要な予算の確保やtoto助成を含む多様な財源確保の検討

3. スポーツ指導者について

- ・指導者資格の取得や研修の実施の促進
- ・部活動指導員の活用、教師等の兼職兼業、人材バンク
- ・指導者の確保のための支援方策の検討

4. スポーツ施設について

- ・学校体育施設活用に係る協議会の設置、ルールの策定
- ・スポーツ団体等に管理を委託

5. 大会について

- ・大会主催者に対し、地域のスポーツ団体等の参加も認めるよう要請
- ・地域のスポーツ団体等も参加できる大会に対して支援

6. 会費や保険について

- ・困窮する家庭へのスポーツに係る費用の支援方策の検討
- ・スポーツ安全保険が、災害共済給付と同程度の補償となるよう要請

7. 学習指導要領等について

- ・部活動の課題や留意事項等について通知、学習指導要領解説の見直し、次期改定時の見直しに向けた検討
- ・部活動等から伺える個性や意欲・能力を入試全体を通じて多面的に評価
- ・教師の採用で部活動指導の能力等を過度に評価していれば、見直す

スポーツ庁としては、以上の提言を示し、2023年度からの3年間を休日の運動部活動の地域移行に向けた改革集中期間と位置づけた。それに伴い、各地方公共団体は改革集中期間に休日の運動部活動の地域移行を実現するため、具体的な取組やスケジュール等を定めた推進計画の策定が進められることとなる。

4. 考察

部活動の地域移行に関する議論を運動部活動の在り方や運動部活動の実態調査に関する文献及び論文を参照しながら、整理してきた。以下では、部活動の地域移行に関する議論の構造について検討する。

まず、文科省およびスポーツ庁によって提出された資料を整理すると、部活動の問題点には教員の労働時間が長時間に及んでいることが挙げられている。この問題点を起点として議論が構成され、次に重要となるのが部活動に対する生徒のニーズが一定程度あるという調査結果である。ここから見えるのは、部活動を教育活動として考えた時に教員に対しては過重な負担となり、この点からみれば廃止論へと向かっていく流れも考えられる中、生徒のニーズがあることによって廃止ではなく存続の可能性が探られているということである。そして、こうした議論の構成をとるからこそ、経産省の提案する「地域スポーツクラブ」の活用の可能性の道を拓く。経産省地域×スポーツクラブ産業研究会の「第1次提言」には、新たなサービス業として「地域スポーツクラブ」の存在が位置づけられている。つまり、経済的価値を部活動を起点に創出することで、経済的成長戦略となる可能性を提起する。こうした教育活動に経産省の考えが反映されるのは、「未来の教室」といった教育関連の事業、GIGAスクール構想というデジタルデバイスを用いた教育活動の改編という形で、近年活発になりつつある。こうした変化は、一見すれば教育を現代的な機器や方法の導入といった形で刷新しているように見えるが、注視しなければならないのは既存の教育に対する反省が十分に行われていないことであり、このような教育界へ経済界の論理が流入することは、教育が持っていた力を見失わせる可能性がある。佐藤（2021）は、経済産業省が主導する「未来の教室」事業について、「経済産業省は『未来の教室』を国内のIT産業と教育産業の支援と振興を目的として推進しています。…（中略）…これまで、日本の教育市場が世界の巨大なIT産業と教育産業から守られてきたのは、日本の教育市場の規模が意外なほど小さいこともありますが、何より文部科学省が公教育を擁護し、IT企業や教育企業の侵入を阻んできたからです。しかし、経済産業省の『未来の教室』は、『学校教育』と『教育産業』と『産業界』の壁を壊すことによって、これまで公教育を擁護してきた防壁を取り除いてしまいました。」(p.48)と述べる。教育課程に直接関わるICT教育と、教育課程外活動の部活動とでは議論する土俵が異なるかもしれないが、文科省は部活動を「学校単位」から「地域単位」へと舵を切り始めており、同時に経済産業省が進める「未来のブカツ」における実証事業において、部活動に関わる「学校教育」が「教育産業」「スポーツ産業」とボーダレスに一体化しつつある。運動部活動がどのような形で地域移行されるかについては未知数な状況ではあるが、これまでの取り組みにおける運動部活動の教育的機能については評価・検討する必要がある。

次に、運動部活動に関する研究において議論されてきたことを整理する。まず、文科省およびスポーツ庁によって提出された資料のように教員の労働時間に関わること、生徒のニーズという議論が共通点として存在している。ただし、運動部活動に携わる教員の専門性に関わること及び運動部活動が教育の論理と競技力の論理の二重構造を持ち存在していることに関しては、文科省とスポーツ庁が提出した資料では十分に議論が進められていないと考えられる。とりわけ、教育的な機能を部活動が有していることを鑑みると、この点の欠如、すなわち指導者養成としての部分のみで考えていることに問題がある。休日の運動部活動の地域移行の方針が示されたことによ

り、現場の教員からは歓迎の声も上がっている（朝日新聞デジタル）が、一方で「子どもたちが目の届かないところに行ってしまう心配」（南日本新聞）する教員もいる。生徒の立場からの観点についても、外部指導者からの専門的な指導を歓迎する声も上がっている（NHK NEWS WEB）が、矢野（2006）は「指導者が、顧問の先生であるか、外部指導員であるかは、中学生・高校生、いずれに対しても、好き嫌いや活動内容の得意さ、活動重視であることなどについては、顕著なちがいはみられませんでした。少なくとも、中学校では、顧問が先生であることで、生徒は部活動への力の入り方が高まる」（p.80）と述べている。つまり、運動部を外部指導者に委託することについては、教員の立場からも生徒の立場からも両極端の意見が存在することになる。ここで、これまで部活動が担ってきた教育的側面について再度確認しておきたい。神谷（2015）は、学校が運動部活動を課外に位置づける積極的な理由として、教育課程における陶冶と訓育が強化される点にあり、教育課程から離れた日常生活に近い場面で、発展的な陶冶と訓育に向けた指導が展開でき、子どもの人格形成という目標に、より接近できることを挙げている。つまり、学校の教員が部活動を担当することにより、生徒の日頃からの生活経験を含めた指導が可能となる。しかし、部活動の時間のみにスポット的に指導にあたる「外部指導者」と生徒と学校生活をともに過ごしている「教師」とでは、基本的な子どもの理解に、あるいはその子の理解がそもそも異なっている恐れがある。実際に日本体育協会（現：日本スポーツ協会）が全国の中学校及び高校の運動部活動顧問を対象に実施した調査（学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書〔2014〕）では、運動部指導における問題・課題項目に関する自由回答で「外部指導者が実権を握っているため口出しできない」「外部指導者については学校の教育活動を十分に理解されずに、保護者や職員とのトラブルなどに発展」といった意見も挙げられている。こうした教育の論理は、技術指導や戦術指導といった方法論としての充実とは別の問題として扱う必要があるだろう。こうした見えない部分あるいは教員が形成する教育文化に関する検討が必要だと考えられる。

そして、あらためて「部活動」の定義に基づいて、その存在意義について考えてみると、関（2022）は、自主、自治といった概念から「部活動」を捉え、その源流にはイギリスの「クラブ（club）」が該当するという。そこで、イギリスの「クラブ」の影響を受けたアメリカのクラブ、イギリスおよびアメリカの影響を受けた日本の倶楽部について概観し、日本における学校と部活動の関係性として「必修クラブ」「クラブ活動」「サークル活動」「部活動」について検討した。そして、「部活動」の概念を形成しうる事項を抽出し、「部活動」の定義を試みている。その結果、「部活動」は「『教育課程外においてスポーツ等を行う組織』であり、『①自主性』『②継続性』『③公認性』の条件を満たすものである」（p.11）と定義される。今後、部活動が地域に移行されたり、部活動の機能を地域スポーツクラブが担うことになるにせよ、関の「部活動」定義に従って「自主性」「継続性」「公認性」の3条件は担保する必要があると考える。

こうした点を議論する素地は、今回の提言では十分に触れられておらず、議論の構造にズレが生じている。つまり、教育機関として長年かけて積み重ねてきた文化的な背景を蔑ろにした地域

への移行を行う前に、改めて議論のズレを修正していく試みが今後の部活動をより良いものへとしていくために必要となるだろう。

5. 結 言

本研究は、運動部活動の地域移行に関わる諸問題について概観し、議論における成果と課題について考察することを目的とした。

研究の結果、文科省およびスポーツ庁によって提出された資料を整理すると、部活動の問題点には教員の労働時間が長時間に及んでいることが挙げられていた。この問題点を起点として議論が構成され、次に重要となるのが部活動に対する生徒のニーズが一定程度あることにより、部活動は廃止ではなく存続の可能性が探られていった。そして、こうした議論の構成をとるからこそ、経産省の提案する「地域スポーツクラブ」の活用の可能性の道が拓かれ、経済的価値を部活動を起点に創出することで、経済的成長戦略となる可能性が提起される。しかし、文科省は部活動を「学校単位」から「地域単位」へと舵を切り始めており、同時に経済産業省が進める「未来のブカツ」における実証事業において、部活動に関わる「学校教育」が「教育産業」「スポーツ産業」とボーダレスに一体化しつつあることから、これまでの取り組みにおける運動部活動の教育的機能については評価・検討する必要があると考えられた。

また、文科省およびスポーツ庁によって提出された資料においては、運動部活動に携わる教員の専門性に関わること及び運動部活動が教育の論理と競技力の論理の二重構造を持ち存在していることに関しては、十分に議論が進められていないと考えられた。とりわけ、教育的な機能を部活動が有していることを鑑みると、この点の欠如、すなわち指導者養成としての部分のみで考えていることに問題があると考えられた。したがって、運動部活動における教育の論理は、技術指導や戦術指導といった方法論としての充実とは別の問題として扱う必要があり、こうした見えない部分あるいは教員が形成する教育文化に関する検討が必要だと考えられた。

そして、運動部活動の地域移行を進めるに当たっては、「自主性」「継続性」「公認性」の3条件を担保する必要があると考えられた。

今後、各自治体において運動部活動の地域移行に関する具体的なプランが策定され、2023年度からの改革集中期間に様々な取り組みが実施されることになる。そこでは、上述した各提言では十分に触れられずにいた議論の素地、つまり教育機関として長年かけて積み重ねきた文化的背景について十分に議論し、今後の部活動をより良いものへと変革していく取り組みが求められよう。そこで、生徒、保護者、教員、地域指導者等のニーズや実態に関する調査を実施し、各自治体における取り組みについて客観的な視点から評価していくことを今後の課題とする。

最後に、2022年6月にスポーツ庁より運動部活動の地域移行に関する検討会議提言が示されて以降、多くのメディアで運動部活動の地域移行に関する記事が取り上げられた。そこでは、運動部活動の地域移行に対して多くの期待が寄せられる一方、現状を鑑みた懸念事項も示されている。

その中で、教員の長時間労働及び働き方改革を主とした論調が多く見受けられ、運動部活動の主体であるべき子どもたちの視点に立った論が少ないことに筆者としては違和感を覚える。運動部活動は様々な機能を有しているが、スポーツ文化の将来を担う主体者形成の観点からも、子どもたちにとってより良い政策が実行されることを期待したい。

脚 注

- 1) 提言では、「休日の運動部活動の地域移行が概ね達成された後、平日の運動部活動についても地域移行を進めていくことが想定される」と記載されており、将来的には平日の部活動も地域移行する可能性がある。
- 2) 部活動の間接的なマネジメント業務としては、「日々の練習や合宿、大会等の計画・準備など、部活動に関わるイベントを運営する役割」「部活動環境の整備や部費の管理、選手登録、広報（部報）作成などは部活動の内部を組織化するために行われる業務」「生活指導や学習指導など技術指導以外の指導」「会議等への参加や関係者との連絡調整の業務」などが挙げられる。
- 3) 日本の教員の長時間労働が深刻化している実態は、2006年実施の教員の勤務実態調査や2014年公表のOECD（経済協力開発機構）による第2回国際教員指導環境調査（TARIS調査）においても明らかにされており、2016年以前にも状況認識されている。
- 4) 「学校における働き方改革に関する緊急対策の策定並びに学校における業務改善及び勤務時間管理等の取り組みの徹底について（通知）」は、2019年3月18日に出された「学校における働き方改革に関する取り組みの徹底について（通知）」をもって廃止。
- 5) 緊急対策では部活動の活動時間の適正化について指摘していたが、総合ガイドラインでは具体的な基準として、学期中は週当たり2日以上以上の休養日（平日1日、土日1日以上）を設けること、1日の活動時間は長くとも平日は2時間程度・学校の休業日は3時間程度と示している。

文 献

- 青柳健隆，石井香織，柴田愛，荒井弘和，岡浩一郎（2017）運動部活顧問の時間的・精神的・経済的負担の定量化。スポーツ産業学研究，27（3），299-309。
- 朝日新聞デジタル。休日の部活指導，先生に聞いてみたら…民間委託に「賛成」が6割越え。 <https://www.asahi.com/articles/ASQ626X3DQ5ZUNHB007.html>（2022年6月5日閲覧）
- 神谷拓（2015）運動部活動の教育学入門－歴史とのダイアログ。大修館書店。56-60。
- 加藤一晃（2018）第3章 専門的知識や過去の経験から見た部活動の負担。内田良，上地香杜，加藤一晃，野村駿，太田知彩，調査報告 学校の部活動と働き方改革：教師の意識と実態から考える。岩波書店。46-65。
- 経済産業省（2021）地域×スポーツクラブ産業研究会 第1次提言。 https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/chiiki_sports_club/pdf/20210625_1.pdf（2022年9月15日閲覧）
- 北神正行（2018）教員の労働環境と働き方改革をめぐる教育政策論的検討。学校経営研究，43。1-10。
- 久保正秋（2005）第2部9 体育と指導者。友添秀則・岡出美則編，教養としての体育原理—現代の体育・スポーツを考えるために一。大修館書店。78-83。
- 南日本新聞。休日の部活動「地域移行，実現すれば肩の荷下りる」生徒指導への影響に不安視も 教育現場に波紋広がる。 <https://kagoshima.jimono-news.com/kagoshima-news/80199>（2022年6月8日閲覧）
- 文部科学省（2018）学校における働き方改革に関する緊急対策の策定及び学校における業務改善及び勤務時間

- 管理等に係る取組の徹底について. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/hatarakikata/_icsFiles/afieldfile/2019/04/15/1414498_3_1.pdf (2022年9月20日閲覧)
- 文部科学省 (2018) 教員勤務実態調査 (平成28年度) (確定値) について. https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/09/_icsFiles/afieldfile/2018/09/27/1409224_004_2.pdf (2022年9月21日閲覧)
- 文部科学省 (2020) 学校の働き方改革を踏まえた部活動改革. https://www.mext.go.jp/sports/content/20200902-spt_sseisaku01-000009706_3.pdf (2022年9月20日閲覧)
- 森田啓之 (1993) 運動部活動における「競技力向上」の問題性—「対外運動競技基準」の緩和をめぐる一. 体育・スポーツ哲学研究, 15 (1), 3-16.
- 中澤篤史 (2011) 学校運動部活動の戦後史 (上): 実態と政策の変遷. 一橋社会科学, 3, 25-46.
- NHK NEWS WEB. 中学校の部活動が変わる? 地域移行ってなに?. <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220531/k10013651941000.html> (2022年6月3日閲覧)
- 日本体育協会 (2014) 学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書. <https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/houkokusho.pdf> (2022年9月28日閲覧)
- 西島央 (2006a) 第2章 生徒の部活動への関わり方 第2節 どのくらいの生徒が部活動に熱心に参加しているのでしょうか?. 西島央編, 部活動—その現状とこれからのあり方—. 学事出版株式会社, 23-28.
- 西島央 (2006b) 第3章 生徒が部活動に期待していること 第1節 生徒は部活動にどんなことを期待しているのでしょうか?. 西島央編, 部活動—その現状とこれからのあり方—. 学事出版株式会社, 41-44.
- 西島央 (2006c) 第10章 部活動改革の実例と課題 第4節 生徒は部活動改革に賛成でしょうか, 反対でしょうか?. 西島央編, 部活動—その現状とこれからのあり方—. 学事出版株式会社, 163-172.
- 笹川スポーツ財団 (2018) 青少年のスポーツニーズと運動部活動—運動部活動の志向性からみる青少年の運動・スポーツ活動状況—https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/column/20180718.html (2022年9月26日閲覧)
- 佐藤学 (2021) 第四次産業革命と教育の未来—ポストコロナ時代のICT教育—. 岩波書店.
- 関朋昭 (2022) 学校における「部活動」の定義に関する研究. 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 8 (2), 1-16.
- スポーツ庁 (2018) 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf (2022年9月20日閲覧)
- スポーツ庁 (2022) 運動部活動の地域移行に関する検討会議提言. https://www.mext.go.jp/sports/content/20220722-spt_oripara-000023182_2.pdf (2022年9月12日閲覧)
- 友添秀則 (2016) 第1章 1-3 運動部活動の外部化をめぐる一. 友添秀則編, 運動部活動の理論と実践. 大修館書店, 5-8.
- 太田知彩 (2018) 第1章 教員の働き方・部活動の実態. 内田良, 上地香杜, 加藤一見, 野村駿, 太田知彩, 調査報告 学校の部活動と働き方改革: 教師の意識と実態から考える. 岩波書店, 6-23.
- 矢野博之 (2006) 第5章 部活動の指導者と生徒 第3節 顧問と外部指導員で生徒の意欲はちがうのでしょうか?. 西島央編, 部活動—その現状とこれからのあり方—. 学事出版株式会社, 78-83.

福井大学教育・人文社会系部門 紀要編集委員会

門 井 直 哉	教員養成領域（編集委員長）
本 田 安都子	教員養成領域
今 井 祐 子	総合グローバル領域
西 沢 徹	教員養成領域
松 本 智恵子	教員養成領域
生 駒 俊 英	総合グローバル領域
大 和 真希子	教員養成領域
遠 藤 貴 広	教員養成領域
小 林 溪 太	教員養成領域
坂 本 太 郎	教員養成領域
星 谷 丈 生	教員養成領域

2023(令和5)年1月20日発行

編集兼
発行者 福井大学教育・人文社会系部門
福井市文京3丁目9番1号

印刷所 能登印刷株式会社
石川県金沢市武蔵町7番10号

